

みんなのデジタルリポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

一括ダウンロード

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005960

國立民族學博物館

研究年報

National Museum of Ethnology

2014

目次

あいさつ	3	[2-6 データの利用]	337
1 組織		標本資料および映像音響資料に関するデータ	337
組織構成図	4	文献図書資料の収集・整理・利用状況	338
運営組織	5	民族学資料共同利用窓口	340
館内運営組織	5	民族学研究アーカイブズの構築	340
現員	6	データベースの作成・利用状況	341
歴代館長・名誉教授	6	[2-7 みんなく施設の利用]	345
研究部教員の紹介	7	博物館施設の利用状況	345
・館長	8	施設の整備状況	346
・副館長	10	[2-8 特許]	346
・民族社会研究部	16	知的財産形成・特許出願など	346
・民族文化研究部	44	3 展示	
・先端人類科学研究部	74	入館者数	348
・研究戦略センター	94	本館展示	348
・文化資源研究センター	118	特別展示・企画展示など	352
・国際学術交流室	147	展示関連出版物およびプログラム	353
・梅棹資料室	148	4 国際連携と国際協力	
・機関研究員	148	海外研究機関との研究協力協定	358
・プロジェクト研究員	162	MINPAKU Anthropology Newsletter	362
・拠点研究員（人間文化研究機構地域研究推進センター・		みんなくフェローズ	363
「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点）	164	博物館学コース	364
・客員教員（先端人類科学研究部・文化動態研究部門）	168	5 広報・社会連携	
・客員教員（先端人類科学研究部・応用民族学研究部門）	169	概観	366
・客員教員（文化資源研究センター・民族学応用教育研究部門）	171	国立民族学博物館要覧	367
・特別客員教員（先端人類科学研究部・社会環境研究部門）	175	ホームページ	367
・特別客員教員（先端人類科学研究部・文化動態研究部門）	178	報道	368
・特別客員教員（先端人類科学研究部・応用民族学研究部門）	182	月刊みんなく	369
・特別客員教員（文化資源研究センター・民族学応用教育研究部門）	194	みんなくゼミナール	369
・外国人研究員客員（研究戦略センター・超領域研究部門）	196	みんなくウィークエンド・サロン	371
2 研究および共同利用		研究公演	377
概観	208	みんなく映画会	378
[2-1 みんなくの研究]	209	博学連携	380
機関研究	209	その他の事業	381
人類の文化資源に関するフォーラム型情報		ボランティア活動	382
ミュージアムの構築	215	千里文化財団の事業	382
共同研究	222	6 研究戦略センター	
人間文化研究機構連携研究	258	研究戦略センターの設立の趣旨と経緯	388
人間文化研究総合推進事業	261	2014年度の活動概要	388
人間文化研究機構地域研究推進事業		7 文化資源研究センター	
「現代インド地域研究」	264	文化資源研究センターの設置目的	390
日本関連在外資料調査研究	268	文化資源研究センターの研究事業	390
研究成果公開プログラムによる館のシンポジウム、		文化資源関連事業	390
研究フォーラム、国際研究集会への派遣	269	8 国際学術交流室	
館長リーダーシップ経費による事業・調査	281	設置目的	400
民博研究懇談会	284	機能	400
[2-2 外部資金による研究]	285	2014年度活動内容	400
科学研究費補助金による研究プロジェクト	285	9 人間文化研究機構	
受託事業	318	組織構成図	402
[2-3 研究成果の公開]	323	運営組織	403
刊行物	323	10 総合研究大学院大学	404
国立民族学博物館学術情報リポジトリ	326	彙報	408
学術講演会	326	研究部の人事異動	408
[2-4 学会開催]	328	来館者抄	408
学会開催	328	索引	412
[2-5 研究員制度]	328	利用案内	414
外来研究員	328		
特別共同利用研究員	336		

国立民族学博物館（みんぱく）は創設41年をむかえ、調査研究、博物館事業、大学院教育、そして広報・社会連携など、さまざまな活動を展開しております。2004年4月からは大学共同利用機関法人・人間文化研究機構の一員となり、機構内の5機関と連携して人間と文化についての総合的研究を推進しています。

みんぱくは、世界の民族、社会や文化とこれらの変化などを研究対象とし、フィールドワークにもとづいて、文化人類学と民族学およびその関連研究分野の基礎的かつ理論的研究をおこなってきました。グローバル化によって、人類は生活や社会のしくみだけでなく価値観にいたるあらゆる面で未曾有の変化に直面しています。この動きの実際とプロセス、そして将来の方向性を現地での参与観察にもとづいて明らかにすることが文化人類学の今日的課題といえましょう。

文化人類学と民族学の国内外の研究拠点であるみんぱくは、調査研究の成果を研究者コミュニティだけでなく現地の人びとや社会と共有し、ともに議論し、考える「フォーラム型」研究をめざしています。また、異文化をより深く理解するために、物質文化、生活様式、芸能・音楽などの資料や種々の情報収集も積極的に進めてきました。現在、34万点の標本資料、7万点の映像・音響資料、そして66万点の文献図書資料を所蔵し、学界や一般の人びとにも公開しています。

2014年度からは、所蔵文化資源のデータベースをもとに、多様な情報を多言語化して世界に発信する情報ミュージアムをオンライン上に構築する「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」プロジェクトを文部科学省の特別経費でスタートさせました。また、2008年度からの本館展示の新構築は、オセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、西アジア、南アジア、東南アジア、朝鮮半島、中国地域、日本の文化、音楽、言語、そしてインフォメーション・ゾーンを終え、本年度の中央・北アジアとアイヌの展示替えで完成します。

『研究年報』は、みんぱくの研究者の多方面にわたる研究調査から、国際共同研究や国際研究集会、国際学術交流、大学院教育、社会貢献にいたる種々の活動とその成果について知っていただくために編集されました。本誌は大学共同利用機関としての活動の集大成といえます。一方、みんぱくのウェブサイトには、本誌の情報にくわえ、教員の研究活動、研究集会や展示を含め、種々の行事予定についての最新の情報を掲載し、『研究年報』の内容を補足しています。

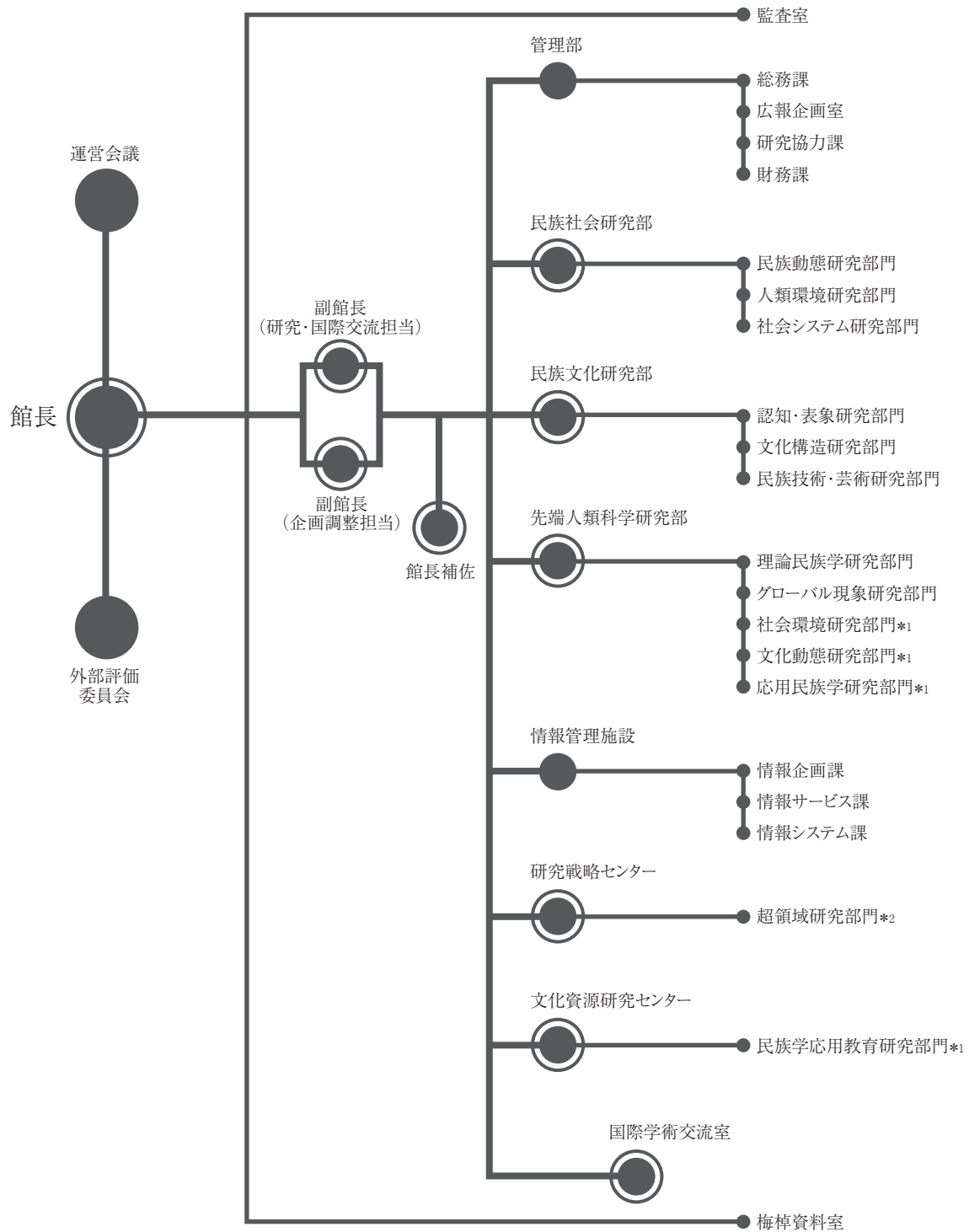
本誌によって、博物館機能をもった文化人類学と民族学の研究所および大学共同利用機関としての研究センターであるみんぱくの役割をご理解いただき、今後も本館にたいしてみなさまからのご助言とご支援をお願いする次第です。

2015年12月
国立民族学博物館長
須 藤 健 一



1 組織

組織構成図 (2015年3月31日現在)



注) *1 客員研究部門
*2 外国人客員研究部門

運営組織 (2015年3月31日現在)

●運営会議

植野弘子	東洋大学社会学部教授*1
栗田博之	東京外国語大学総合情報 コラボレーションセンター長*2
栗本英世	大阪大学大学院人間科学研究科教授*1
建畠 哲	京都市立芸術大学長
富沢寿勇	静岡県立大学国際関係学部教授*3
松田 凡	京都文教大学総合社会学部教授*3
松田素二	京都大学大学院文学研究科教授*2
吉岡政徳	神戸大学大学院国際文化学研究科教授*1
渡邊欣雄	國學院大學文学部教授*2

(館内)

池谷和信	民族文化研究部長*1*2*3
韓 敏	民族社会研究部長*1*2*3
岸上伸啓	副館長(研究・国際交流担当)*1*2
久保正敏	副館長(企画調整担当)*1*2
佐々木史郎	総合研究大学院大学文化科学研究科 地域文化学専攻長 先端人類科学研究部教授*1
塚田誠之	研究戦略センター長*1*2*3
寺田吉孝	先端人類科学研究部長*1*2*3
野林厚志	文化資源研究センター長*1*2*3

注) *1 人事委員会委員
*2 共同利用委員会委員
*3 研究倫理委員会委員

●外部評価委員会

安達 淳	国立情報学研究所副所長
黒柳俊之	独立行政法人国際協力機構理事
小泉潤二	大阪大学未来戦略機構第一部門特任教授、国際高等研究所副所長
八村廣三郎	立命館大学情報理工学部教授
廣富靖以	公益財団法人りそなアジア・オセアニア 財団理事長
堀井良殷	公益財団法人大阪21世紀協会理事長
宮田亮平	東京藝術大学長
三輪嘉六	国立文化財機構九州国立博物館長
山本真鳥	法政大学経済学部教授

館内運営組織 (2015年3月31日現在)

●部長会議

●館内各種委員会

自己点検・評価委員会	大学院委員会
福利厚生委員会	図書委員会
安全衛生委員会	学術情報リポジトリ委員会
ハラスメント防止委員会	情報システム委員会(休止)
広報企画会議	情報システム整備委員会
機関研究運営会議	文化資源運営会議
刊行物審査委員会	国際研修博物館学コース運営委員会
研究出版委員会	施設マネジメント委員会
知的財産委員会	危機管理委員会
科学研究費補助金管理体制検討委員会	創設40周年記念事業推進委員会
「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点運営 委員会	大規模災害復興支援委員会
	フォーラム型情報ミュージアム委員会

現員 (2015年3月31日現在)

区 分	館長	教授	准教授	助教	事務職員・技術職員	計
館長	1					1
管理部					26	26
情報管理施設					21	21
研究部		17	12	3		32
研究戦略センター		5	3	3		11
文化資源研究センター		5	6	1		12
客員（国内）		14	6			20
客員（国外）*		3	7			10
計	1	44	34	7	47	133

注）客員（国外）*は、のべ人数

歴代館長・名誉教授 (2015年3月31日現在)

●歴代館長

初 代／梅棹忠夫（故人） 1974年6月～1993年3月
 第2代／佐々木高明（故人） 1993年4月～1997年3月
 第3代／石毛直道 1997年4月～2003年3月
 第4代／松園萬亀雄 2003年4月～2009年3月
 第5代／須藤健一 2009年4月～

●名誉教授

祖父江孝男(故人)	1984年4月1日	小山修三	2002年4月1日
岩田慶治（故人）	1985年4月1日	森田恒之	2002年4月1日
加藤九祚	1986年4月1日	石毛直道	2003年4月1日
伊藤幹治	1988年4月1日	栗田靖之	2003年4月1日
中村俊亀智(故人)	1988年4月1日	杉田繁治	2003年4月1日
君島久子	1989年4月1日	熊倉功夫	2004年4月1日
和田祐一（故人）	1990年4月1日	立川武藏	2004年4月1日
垂水 稔（故人）	1991年4月1日	田邊繁治	2004年4月1日
杉本尚次	1992年4月1日	藤井龍彦	2004年4月1日
梅棹忠夫（故人）	1993年4月1日	山田睦男（故人）	2004年4月1日
大給近達（故人）	1993年4月1日	江口一久（故人）	2005年4月1日
片倉素子（故人）	1993年4月1日	大塚和義	2005年4月1日
竹村卓二（故人）	1994年4月1日	松原正毅	2005年4月1日
周 達生（故人）	1995年4月1日	石森秀三	2006年4月1日
松澤員子	1995年4月1日	野村雅一	2006年4月1日
大丸 弘	1996年4月1日	大森康宏	2007年4月1日
友枝啓泰（故人）	1996年4月1日	山本紀夫	2007年4月1日
藤井知昭	1996年4月1日	松園萬亀雄	2009年4月1日
佐々木高明(故人)	1997年4月1日	松山利夫	2010年4月1日
杉村 棟	1997年4月1日	長野泰彦	2011年4月1日
和田正平	1998年4月1日	秋道智彌	2012年4月1日
清水昭俊	2000年4月1日	中牧弘允	2012年4月1日
黒田悦子	2001年4月1日	小林繁樹	2014年4月1日
崎山 理	2001年4月1日	田村克己	2014年4月1日
端 信行	2001年4月1日	吉本 忍	2014年4月1日

研究部教員の紹介 (2015年3月31日現在)

組織図に基づく現員一覧

館 長		須藤健一		
副館長 (企画調整担当)		久保正敏		
副館長 (研究・国際交流担当)		岸上伸啓		
研究部	職名・研究部門	教 授	准教授	助 教
民族社会研究部	研究部長	韓 敏		
	民族動態	朝倉敏夫 小長谷有紀 (併) 庄司博史 横山廣子	三島禎子	
	人類環境	印東道子 MATTHEWS, Peter J.		
	社会システム	西尾哲夫	宇田川妙子 太田心平 佐藤浩司	吉岡 乾
民族文化研究部	研究部長	池谷和信		
	認知・表象	八杉佳穂 森 明子	山中由里子	齋藤玲子
	文化構造	笹原亮二 杉本良男	新免光比呂 廣瀬浩二郎	藤本透子
	民族技術・芸術	竹沢尚一郎 出口正之	鈴木 紀	
先端人類科学研究部	研究部長	寺田吉孝		
	理論民族学	佐々木史郎 齋藤 晃	飯田 卓 菊澤律子	
	グローバル現象		丸川雄三 松尾瑞穂	
研究戦略センター		塚田誠之 (センター長) 岸上伸啓 (副館長) 關 雄二 鈴木七美 平井京之介	樫永真佐夫 丹羽典生 三尾 稔	伊藤敦規 河合洋尚 菅瀬晶子
文化資源研究センター		野林厚志 (センター長) 久保正敏 (副館長) 園田直子 吉田憲司 信田敏宏	上羽陽子 林 勲男 日高真吾 福岡正太 南 真木人 山本泰則	川瀬 慈
国際学術交流室		岸上伸啓 (室長) (併) 印東道子 (兼) 齋藤 晃 (兼) MATTHEWS, Peter J. (兼) 横山廣子 (兼)	菊澤律子 (兼) 山中由里子 (兼)	

1946年生。【学歴】埼玉大学教養学部卒（1969）、東京都立大学大学院社会科学研究科（社会人類学専攻）修士課程修了（1972）、東京都立大学大学院社会科学研究科（社会人類学専攻）博士課程単位取得満期退学（1975）【職歴】国立民族学博物館第3研究部助手（1975）、国立民族学博物館第1研究部助教授（1986）、神戸大学国際文化学部教授（1993）、神戸大学国際文化学部長（2000）、神戸大学大学院総合人間科学研究科長（2002）、神戸大学附属図書館長（2005）、神戸大学大学院国際文化学研究科教授（2007）、国立民族学博物館館長（2009）【学位】文学博士（東京都立大学 1986）、文学修士（東京都立大学 1972）【専攻・専門】社会人類学、オセアニアの社会と文化、海外移住、伝統政治と民主主義【所属学会】日本文化人類学会、日本オセアニア学会、南島史学会、生態人類学会、ニュージーランド学会

【主要業績】

〔単著〕

須藤健一

2008 『オセアニアの人類学——海外移住、民主化、伝統の政治』東京：風響社。

1989 『母系社会の構造——サンゴ礁の島々の民族誌』東京：紀伊国屋書店。

〔編著〕

須藤健一編

2012 『グローカリゼーションとオセアニアの人類学』東京：風響社。

【受賞歴】

2010 第2回石川榮吉賞

1985 第16回澁澤賞

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

オセアニアの海面利用と資源保護の慣行に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

オセアニアの島をとりまく海の環境は、陸島、火山島、環礁島、隆起サンゴ礁などの島の形成史や地形などにより多様である。それらの島々の住人は、土地や海洋資源の利用と保護に関する独自の慣習をつくりだしている。この慣習に関しては、植民地時代の宗主国の統治政策により土地所有などは改革を余儀なくされたが、海面所有や海洋資源の利用と保護に関するしきたりは比較的固有の方式が保持されてきている。本年度は、ミクロネシア地域を中心に島社会における海面利用慣行の比較研究を行い、その差異と共通性を明らかにすると同時に今日的問題についても考察する。

・成果

海洋資源に依存するミクロネシア社会の海面利用の方法、権利様式と所有単位、資源保護の方法と管理責任などについての比較研究の成果を、論文「ミクロネシアにおける海面保有と資源保護の様式」としてまとめ、『国立民族学博物館研究報告』39巻2号にて公開した。

◎出版物による業績

〔編著〕

土方久功著、須藤健一・清水久夫編

2014 『土方久功日記Ⅴ』（国立民族学博物館調査報告124）大阪：国立民族学博物館〔査読有〕。

〔論文〕

須藤健一

2014 「ミクロネシアにおける海面保有と資源保護の様式」『国立民族学博物館研究報告』39(2)：175-235〔査読有〕。

2014 「南洋研究の開拓者——土方日記と先史学・民族学」土方久功著、須藤健一・清水久夫編『土方久功日記Ⅴ』（国立民族学博物館調査報告124）pp.593-611, 大阪：国立民族学博物館〔査読有〕。

2015 「第10章 スペインからドイツ統治時代へ——ヨーロッパ諸国による統治の歴史」印東道子編『ミク

ロネシアを知るための60章』(第2版) pp.59-62, 東京: 明石書店。

2015 「第11章 日本統治時代——日本の手に渡った植民地」印東道子編著『ミクロネシアを知るための60章』(第2版) pp.63-66, 東京: 明石書店。

2015 「第16章 母系社会と父系社会——集団編成の基礎となるもの」印東道子編著『ミクロネシアを知るための60章』(第2版) pp.86-90, 東京: 明石書店。

2015 「第38章 沖縄にやって来たチェチェメニ号——失われた伝統航海術の復興」印東道子編著『ミクロネシアを知るための60章』(第2版) pp.188-191, 東京: 明石書店。

[事典]

国立民族学博物館編(編集顧問: 須藤健一)

2014 『世界民族百科事典』東京: 丸善出版。

[事典項目]

須藤健一

2014 「先住民権と移民」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.346-347, 東京: 丸善出版。

2014 「国立民族学博物館(みんぱく)」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.522-523, 東京: 丸善出版。

[その他]

須藤健一

2014 「東京講演会実施報告 国立新美術館での『イメージの力』展開催にあたって」『国立民族学博物館友の会ニュース』220: 3。

2014 「みんぱく創設40周年にあたって」『みんぱく e-news』156 (<http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/156>)。

2014 「悼む 湯浅叡子さん」『毎日新聞』7月21日朝刊。

2014 「渋沢敬三を敬慕した近藤雅樹さん」『魅せる! 超フォークロア——近藤雅樹ワールドの探検』pp.29-31, 近藤雅樹追悼企画実行委員会, 神戸新聞総合出版センター。

2015 「コラム⑤ 展示と研究公演のお礼の旅」高倉浩樹編『展示する人類学——日本と異文化をつなぐ対話』pp.142-144, 京都: 昭和堂。

2015 「10年にわたるMMPのみんぱく支援」『MMP10周年記念誌 あゆみ』p.3, 大阪: みんぱくミュージアムパートナーズ(MMP)。

Sudo, K.

2014 Preface: Congratulations to the Shung Ye Museum of Formosa Aborigines on its 20th Anniversary. *Shung Ye Museum of Formosan Aborigines Special Publication: Formosan Shung Ye, Indigenous Impression* (「序: 順益台湾原住民博物館開館二十週年誌慶」『順益台湾・印記原民: 順益台湾原住民博物館専刊』) pp.10-11, 台北: 順益台湾原住民博物館。

2015 Director-General's Reception: Welcome Speech. In N. Sonoda, K. Tamura and Nu Mra Zan (eds.) *Asian Museums and Museology 2013: International Research Meeting on Museology in Myanmar* (Senri Ethnological Reports 125) p.87. Osaka: National Museum of Ethnology [査読有]。

2015 Preface. In N. Sonoda, K. Hirai and Jarunee Incherdchai (eds.) *Asian Museums and Museology 2014: International Workshop on Asian Museums and Museology in Thailand* (Senri Ethnological Reports 129), pp.i-ii. Osaka: National Museum of Ethnology [査読有]。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・研究講演

2014年11月21日 「家族とジェンダー——日本とオセアニア」天理大学文学部主催、天理大学文学部人権啓発講演会、天理大学

・広報・社会連携活動

2014年4月12日 「国立新美術館での『イメージの力』展開催にあたって」佐渡高校関西地区同窓会、国立民族学博物館

2014年4月20日 「チェチェメニ号と航海術——サンゴ礁島の暮らし」MMP教養講座、国立民族学博物館

2014年9月24日 「みんぱく40周年と『イメージの力』」第2回みんぱく×ナレッジキャピタル「イメージをさぐる」、グランフロント大阪・ナレッジキャピタル

2014年9月30日 「博物館を知る——特別展『イメージの力』のねらい」神戸シルバーカレッジ、国立民族学博

博物館

2014年11月23日 「民族資料と美術作品のあいだ」第362回みんぱくウィークエンド・サロン

◎調査活動

・海外調査

2014年6月25日～7月6日—アメリカ合衆国（北アリゾナ博物館との学術協定調印式出席及び博物館視察）

2014年8月24日～8月28日—タイ（タイの博物館・博物館学に関する共同研究及び研究会）

2014年10月15日～10月25日—イギリス（エディンバラ大学との学術交流協定に関する審議及び博物館視察）

2015年1月29日～2月7日—カナダ、アメリカ合衆国（博物館視察及びブリティッシュコロンビア大学附属博物館長と連携展示、フォーラム型ミュージアム等に係る協議）

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

2014年4月17日 「フィールドワークと成果公開——カヌーと伝統的航海術」文化科学研究科講演

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

公益財団法人大阪府文化財センター評議員、公益財団法人大阪ユニセフ協会理事、金沢大学大学院人間社会環境研究科文化資源マネージャー養成プログラムアドバイザー、関西サイエンス・フォーラム理事、京都大学人文科学研究所共同利用・共同研究拠点運営委員、彩都（国際文化公園都市）建設推進協議会特別委員、公益財団法人坂田記念ジャーナリズム振興財団理事、公益財団法人太平洋人材交流センター最高顧問、日本ニュージーランドセンター理事、公益財団法人日本博物館協会参与、公益財団法人りそなアジア・オセアニア財団助成事業選考委員長、太平洋諸島学会理事、独立行政法人国際協力機構エジプト国大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト国内支援委員、独立行政法人国立美術館 国際美術館評議員、NPO 法人 パシフィカ・ルネサンス顧問、文化遺産国際協力コンソーシアム運営委員

岸上伸啓 [きしがみ のぶひろ]——副館長（研究・国際交流担当）、研究戦略センター教授

1958年生。【学歴】早稲田大学第一文学部社会学科卒（1981）、早稲田大学大学院文学研究科社会学専修修士課程修了（1983）、マッギル大学人類学部博士課程中退（1989）【職歴】早稲田大学文学部助手（1989）、北海道教育大学教育学部函館校専任講師（1990）、北海道教育大学助教授（1992）、国立民族学博物館第1研究部助教授（1996）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1997）、国立民族学博物館先端民族学研究部助教授（1998）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授（2004）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2005）、総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻長（2006）、国立民族学博物館館長補佐（2008）、国立民族学博物館先端人類科学研究部長（2009）、国立民族学博物館研究戦略センター長（2012）、国立民族学博物館副館長（2013）【学位】博士（文学）（総合研究大学院大学文化科学研究科 2006）、文学修士（早稲田大学大学院文学研究科 1983）【専攻・専門】文化人類学 1) カナダ・イヌイットの社会変化、2) 都市在住のイヌイットの民族誌的研究、3) 先住民による海洋資源の利用と管理、4) アラスカ先住民イヌピアットの捕鯨【所属学会】日本文化人類学会、日本カナダ学会、国際極北社会科学学会、民族藝術学会

【主要業績】

[単著]

岸上伸啓

2007 『カナダ・イヌイットの食文化と社会変化』京都：世界思想社。

[編著]

Kishigami, N., H. Hamaguchi, and J. M. Savelle (eds.)

2013 *Anthropological Studies of Whaling* (Senri Ethnological Studies 84). Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

Kishigami, N.

2004 A New Typology of Food-Sharing Practices among Hunter-Gatherers, with a Special Focus on Inuit Examples. *Journal of Anthropological Research* 60: 341-358.

【受賞歴】

- 2007 第18回カナダ首相出版賞
1998 第9回カナダ首相出版賞（審査員特別賞）

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

北アメリカ地域における先住民による捕鯨に関する文化人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、2009年度から2013年度まで実施した科学研究費補助金（基盤研究(B)）「北アメリカ地域における先住民生存捕鯨と先住権」（研究代表者：岸上伸啓）によって収集した米国アラスカ北西地域とカナダ極北地域における先住民による捕鯨と先住権に関するデータを整理、分析し、その成果を発信することである。具体的には、アラスカのイヌピアットの捕鯨文化の現状および「使者祭」の歴史の変遷についてのデータを整理・分析の上、出版する。また、カナダ極北地域のイヌイットの捕鯨の現状について先住権との関連で整理・分析の上、学会において口頭発表を行う。

・成果

アラスカのイヌピアットの捕鯨活動、獲物の分配、捕鯨祭、そして捕鯨文化の存続条件に関する民族誌『クジラとともに生きる アラスカ先住民の現在』（2014年、臨川書店）と民族誌的解説付きの写真集『イヌピアット写真帳』（2014年、風土デザイン研究所）を出版した。また、同民族の使者祭りは15世紀以前に始まった新旧大陸間の先住民交易に由来するとする起源、同祭りの19世紀以降の変化と現状について検討した論文「アラスカ・イヌピアット社会における使者祭り」を『人文論究』（2015年、第84号）から出版した。

カナダ・イヌイットのホッキョククジラ猟と先住権については、米国政府によって捕鯨が先住権として承認されていないアラスカ先住民の場合とは異なり、カナダ政府はイヌイットの捕鯨を先住権として承認し、保護している点を、2014年5月15日に千葉市幕張メッセで開催された International Union of Anthropological and Ethnological Sciences (IUAES) において口頭発表した。

なお、これらは2009年度から2013年度まで実施した科学研究費補助金（基盤研究(B)）「北アメリカ地域における先住民生存捕鯨と先住権」（研究代表者：岸上伸啓）の成果の一部である。

◎出版物による業績

〔単著〕

岸上伸啓

- 2014 『クジラとともに生きる——アラスカ先住民社会の現在』 京都：臨川書店。
2014 『イヌピアット写真帳——バロー村の暮らし』 札幌：風土デザイン研究所。
2014 『グリーンランド写真帳——ヌーク篇』 札幌：風土デザイン研究所。

〔論文〕

岸上伸啓

- 2014 「アラスカの捕鯨民イヌピアットの真夏の祭典ナルカタック」 高倉浩樹・山口未花子編『食と儀礼をめぐる地球の旅——先住民文化からみたシベリアとアメリカ』 pp.91-120, 仙台：東北大学出版会。
2015 「アラスカ・イヌピアット社会における使者祭りについて」『人文論究』 84：51-62 [査読有]。

Kishigami, N.

- 2015 Low-income and Homeless Inuit in Montreal, Canada: Report of a 2012 Research. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 39(4): 575-624 [査読有]。

〔事典項目〕

岸上伸啓

- 2014 「文化相対主義」 国立民族学博物館編『世界民族百科事典』 pp.40-41, 東京：丸善出版。
2014 「先住民と紛争」 国立民族学博物館編『世界民族百科事典』 pp.112-113, 東京：丸善出版。
2014 「グローバル経済」 国立民族学博物館編『世界民族百科事典』 p.581, 東京：丸善出版。
2014 「格差の拡大」 国立民族学博物館編『世界民族百科事典』 pp.582-583, 東京：丸善出版。
2014 「リスク社会」 国立民族学博物館編『世界民族百科事典』 pp.592-593, 東京：丸善出版。
2014 「市場経済」 国立民族学博物館編『世界民族百科事典』 pp.594-595, 東京：丸善出版。
2014 「カナダのイヌイットの暦」 岡田芳郎ほか編集『暦の大事典』 pp.31-34, 東京：朝倉書店。

[その他]

岸上伸啓

- 2014 「イヌイットのナビゲーションを在来知のひとつとして記述し、分析した労作——現代のイヌイット文化に関する新しい視点からの独創性ある研究（書評：大村敬一著『カナダ・イヌイットの民族誌』）」『図書新聞』314：3。
- 2014 「コメント1 海産哺乳類の保護を目指した文理融合型研究の試み」市川光太郎・縄田浩志編『アラブのなりわい生態系7 ジュゴン』pp.296-308, 京都：臨川書店。
- 2014 「イヌイットと醤油」『毎日新聞』8月28日夕刊。
- 2014 「フォーラム型情報ミュージアムの構築——国立民族学博物館における新たな展開」『民博通信』146：2-7。
- 2014 「世界最大の島の自然と文化」『月刊みんぱく』38(10)：2-3。
- 2014 「グリーンランドに見る温暖化 知恵と技術で環境に適応」『産経新聞』10月14日夕刊。
- 2014 「北アメリカ北西海岸地域での丸木舟収集の思い出——2001年度特別展『ラッコとガラス玉』との関連で」『季刊民族学』150：29-31。
- 2014 「コラム4 イヌピアットはどのように捕鯨をするのか？」高倉浩樹・山口未花子編『食と儀礼をめぐる地球の旅——先住民文化からみたシベリアとアメリカ』p.121, 仙台：東北大学出版会。
- 2014 「極北の孤島グリーンランドにおける気候変動と文化の変遷」『国立民族学博物館友の会ニュース』223：6。
- 2014 「アラスカ先住民のクジラ料理 ミキガック」『月刊みんぱく』38(11)：18-19。
- 2014 「ユーラシアの事例からモースの『贈与論』を再考する」『民博通信』147：14-15。
- 2015 「グリーンランド——人と自然のかかわり」『季刊民族学』151：3-23。

Kishigami, N.

- 2014 The Inuit Bowhead Hunt and Indigenous Rights in Canada. In the Organizing Committee of the IUES 2014 (ed.) *Conference Programme Abstract of IUAES 2014 with JASCA*, p.32. Tokyo: Tokyo Metropolitan University.
- 2014 Comparative Studies of Indigenous Cultures around the North Pacific Rim: Focusing on Indigenous Rights and Marine Resource Utilization. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 38: 10-11.
- 2014 Comment on 'The Rotten Renaissance in the Bering Strait.' *Current Anthropology* 55(5): 638-639.
- 2014 Unknown Land, Greenland: Its Nature and Culture: Thematic Exhibition September 4-November 18, 2014. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 39: 14.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2014年5月15日 「The Inuit Bowhead Hunt and Indigenous Rights in Canada」Paper read at IUAES 2014, Makuhari Messe, Chiba, Japan

・みんぱくゼミナール

- 2014年10月18日 「はるかなる北の大地 グリーンランドの自然と人びとの暮らし」第437回みんぱくゼミナール

・研究講演

- 2014年9月6日 「極北の孤島グリーンランドにおける気候変動と文化の変遷」第435回国立民族学博物館友の会講演会
- 2014年9月12日 「グリーンランドの歴史と現状」吹田市浜屋敷民博夜話、浜屋敷
- 2014年10月8日 「気候変動は何をもたらしたか——世界最大の島グリーンランド」産経新聞社主催、みんぱく創設40周年記念 カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館9階 SPACE 9
- 2014年11月12日 「アラスカ先住民イヌピアットと日本人の鯨食文化」平成26年度民族学講座「グローバル化時代の食文化」（和食のユネスコ無形文化遺産登録に寄せて）川西市清和台公民館

・展示

- 企画展「未知なる大地 グリーンランドの自然と文化」実行委員長

◎調査活動

・海外調査

2015年2月1日～2月17日—アメリカ合衆国、カナダ（米国・カナダの北西海岸地域の博物館における文化資源デジタル・アーカイブズに関する調査）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（2人）

・総研大の開講科目

比較社会研究特論Ⅱ（前期）、比較社会演習Ⅱ（後期）

・論文審査

博士論文審査委員（2件）、予備審査委員（2件）

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

第23期日本学術会議連携会員（地域研究）、第23期日本学術会議地域研究多文化共生部会幹事、第25期日本文化人類学会理事、日本カナダ学会理事、民族藝術学会理事、北海道立北方民族博物館研究協力員、京都大学地域研究統合情報センター課題選考委員。第41回澁澤賞選考委員、*Japanese Review of Cultural Anthropology*編集委員

久保正敏 [くぼ まさとし]——副館長（企画調整担当）、文化資源研究センター教授

1949年生。【学歴】京都大学工学部電気工学科卒（1972）、京都大学大学院工学研究科修士課程電気工学第二専攻修了（1974）【職歴】京都大学工学部情報工学科助手（1974）、国立民族学博物館第5研究部助手（1983）、京都大学大型計算機センター助教授（1990）、京都大学学術情報ネットワーク機構兼務学術資料情報担当（1990）、国立民族学博物館第5研究部助教授（1993）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1994）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（1998）、国立民族学博物館博物館民族学研究部教授（1998）、国立民族学博物館情報管理施設長（2000～2004）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2004）【学位】工学博士（京都大学 1986）、工学修士（京都大学大学院工学研究科 1974）【専攻・専門】コンピュータ民族学（情報組織化論、博物館情報論）、民族情報学（先住民とメディア文化論）【所属学会】情報処理学会、日本文化人類学会、民族藝術学会、日本産業技術史学会、アートドキュメンテーション学会

【主要業績】

[単著]

久保正敏

1996 『マルチメディア時代の起点——イメージからみるメディア』（NHK ブックス779）東京：日本放送出版協会。

[論文]

久保正敏

2003 「模倣と創造——エスニック・アートとファイン・アート」山田奨治編『模倣と創造のダイナミズム』pp.215-239, 東京：勉誠出版。

久保正敏・堀江保範

2006 「オーストラリア交通事情——アウトバックの距離を克服する」『季刊民族学』118：3-41。

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

映像アーカイブ構築のための諸課題の検討と指針策定——倫理・知的財産権・保存と利用の両立を目指して

・研究の目的、内容

国立民族学博物館所蔵の映像資料は、国内外での共有を推進すべき文化資源として極めて貴重である。しかし、その長期保存と利用の両立を図るためには、媒体変換など技術的な問題だけでなく、時には相反する、知的財産権の保護と共同利用性の推進を如何に調整するかが課題となる。本研究では、素材の世代管理を含む映像

アーカイブズの構造設計とともに、知的財産権保護と利用の両立を図る媒体管理手法を検討する。映像アーカイブズを運用する諸機関の実態調査を行いながら、本館にとって現実的・具体的な指針を設計する。本計画は、2014年度より開始される「フォーラム型情報ミュージアムの構築」プロジェクトに、密接に関わるものであり、研究の成果をこのプロジェクトに反映させることも目的の一つである。

・成果

久保正敏 「映像アーカイブズから映像の共有を考える——国立民族学博物館での経験から」 村尾静二・箭内 匡・久保正敏編『映像人類学（シネ・アンソロポロジー）——人類学の新たな実践へ』 pp.195-217, 2014年5月23日発行, 東京：せりか書房（館外での出版を奨励する国立民族学博物館の制度を利用した成果）。

久保正敏 「文化資源の公開・共有と権利・倫理」 園田直子・小長谷有紀・I. Lkhagvasuren 共編『アジアにおける新しい博物館・博物館学の「いま」——モンゴル、ミュージアム・クリルタイ』 pp.51-58, 2014年11月21日発行, ウランバートル：モンゴル国立文化遺産センター。

久保正敏・五島敏芳・関野 樹 「鼎談 アーカイブズの現状と可能性（特集 研究資料のアーカイブと活用 6）」『SEEDer』 11: 43-53, 2014年12月15日発行, 京都：昭和堂。

Kubo, Masatoshi “Problems in Managing Cultural Resources; Resource Sharing, Protecting Intellectual Properties and Ethical Consideration.” In Naoko Sonoda, Katsumi Tamura and Nu Mra Zan (eds.) *Asian Museums and Museology 2013: International Research Meeting on Museology in Myanmar* (Senri Ethnological Reports 125), pp.133-140, 2015年2月26日発行, Osaka: National Museum of Ethnology.

久保正敏 「友の会講演会要旨 第438回 グローバル時代の『知的生産の技術』——フォーラム型博情館の可能性」『国立民族学博物館友の会ニュース』 225: 4, 2015年3月1日発行, 大阪：財団法人千里文化財団。

◎出版物による業績

[共編著]

村尾静二・箭内 匡・久保正敏編

2014 『映像人類学（シネ・アンソロポロジー）——人類学の新たな実践へ』 東京：せりか書房 [査読有]。

久保正敏・堀江保範編

2015 『バウイナング・アボリジナル組合の議事録（1978～1994）から見る対アボリジニ政策とインフラ整備の歴史——マニングリダと周辺アウトステーションの活動史』（国立民族学博物館調査報告126） 大阪：国立民族学博物館 [査読有]。

[論文]

久保正敏

2014 「映像アーカイブズから映像の共有を考える——国立民族学博物館での経験から」 村尾静二・箭内 匡・久保正敏編『映像人類学（シネ・アンソロポロジー）——人類学の新たな実践へ』 pp.195-217, 東京：せりか書房 [査読有]。

2014 「文化資源の公開・共有と権利・倫理」 園田直子・小長谷有紀・I. Lkhagvasuren 編『アジアにおける新しい博物館・博物館学の「いま」——モンゴル、ミュージアム・クリルタイ』 pp.51-58, ウランバートル：モンゴル国立文化遺産センター。

Kubo, M.

2015 Problems in Managing Cultural Resources: Resource Sharing, Protecting Intellectual Properties and Ethical Consideration. In N. Sonoda, K. Tamura and Nu Mra Zan (eds.) *Asian Museums and Museology 2013: International Research Meeting on Museology in Myanmar* (Senri Ethnological Reports 125) pp.133-140, Osaka: National Museum of Ethnology [査読有]。

[事典項目]

久保正敏

2014 「7 場所・空間 サイバースペース」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』 pp.272-273, 東京：丸善出版。

2014 「20 他者・表象 バーチャル空間」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』 pp.730-731, 東京：丸善出版。

[その他]

久保正敏

- 2014 コメント「人文系に功績 言葉残し勇退」『読売新聞』2014年5月13日夕刊。
- 2014 「おもてなし考」『ふるさと関西を考えるキャンペーン39年 関西からおもてなし』pp.34-35, pp.59-60, 大阪：明治安田生命保険相互会社大阪総務部 関西を考える会。
- 2014 「集めてみました世界の〇〇 水筒編」『月刊みんぱく』38(8)：10-11。
- 2014 コメント「民博 来春も特別展断念」『読売新聞』2014年8月19日夕刊。
- 2014 「みんぱく世界の旅 オーストラリア① 『大航海時代』のオーストラリア」『毎日小学生新聞』9月20日。
- 2014 「みんぱく世界の旅 オーストラリア② 連絡鉄道阻んだ各州の自治意識」『毎日小学生新聞』9月27日。
- 2014 「みんぱく世界の旅 オーストラリア③ 盗まれた子どもたち」『毎日小学生新聞』10月4日。
- 2014 「みんぱく世界の旅 オーストラリア④ 足あとを読み取る 独自の文化」『毎日小学生新聞』10月11日。
- 2014 「小山修三氏との対談 チーム・オーストラリアものがたり」『季刊民族学』150：20-24。
- 2014 「私のパソコン整理術」『婦人之友』2014(11)：29-31。
- 2014 「五島敏芳・関野 樹との鼎談 アーカイブズの現状と可能性（特集：研究資料のアーカイブと活用6）」『SEEDer』11：43-53。
- 2015 「喜びも悲しみも歌に込めて 昭和とともに、歌謡曲あり（特集：昭和歌謡ラブソディ）」『望星』2015(1)：16-24。
- 2015 「制服の世界・世界の征服 異性をまとう」『月刊みんぱく』39(3)：22-23。
- 2015 「友の会講演会要旨 第438回 グローバル時代の「知的生産の技術」——フォーラム型博物館の可能性」『国立民族学博物館友の会ニュース』225：4。
- 2015 「キーワードはミクロ・マクロ往還」『みんぱく e-news』165 (<http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/165>)。
- 2015 「11 フクロムササビ」『図画工作 教師用指導書 アート・カード解説 1・2上／1・2下』p.12, 大阪／東京：日本文芸出版株式会社。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・研究講演

- 2015年1月10日 「グローバル時代の『知的生産の技術』——フォーラム型博物館の可能性」第438回国立民族学博物館友の会講演会

・広報・社会連携活動

- 2014年6月13日 「オーストラリアの交通文化史——アウトバックの距離はいかに克服されてきたか」NPO 法人大阪府高齢者大学校 世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館
- 2014年6月20日 「あるオーストラリア先住民コミュニティの形成史」NPO 法人大阪府高齢者大学校 世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館
- 2014年8月3日 「心的イメージとは何か——イメージ・メディア論」第353回みんぱくウィークエンド・サロン
- 2014年8月17日 「Guide to National Museum of Ethnology」ユネスコ・アジア文化センター・バヌアツ研修、国立民族学博物館
- 2014年11月14日 特別講義「科学から見るオーストラリア——時空の広さを知ろう 気候・進化・天体・先住民文化」『SPP 事業 洛北サイエンス3年 オーストラリアの自然現象を探究する』国立民族学博物館
- 2015年1月10日 「グローバル時代の『知的生産の技術』——フォーラム型博物館の可能性」第438回国立民族学博物館友の会講演会
- 2015年1月14日 「オーストラリアへの旅——カンガルーからブーメランまで」産経新聞社主催、みんぱく創設40周年記念カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館9階 SPACE 9

◎調査活動

- 2014年8月24日～8月27日ータイ（タイの博物館・博物館学に関する共同研究および現地調査）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究）「動的共創型デジタルアーカイブス構築——梅棹忠夫資料に基づいて」代表者、科学研究費補助金（研究成果公開促進費（データベース））「梅棹忠夫資料のデジタルアーカイブス」代表者、総合研究大学院大学文化科学研究科併任教授、京都大学地域研究統合情報センター共同研究員

◎社会活動・館外活動

- ・非常勤講師

大阪教育大学「博物館情報・メディア論」（集中講義）

民族社会研究部

韓 敏 [ハン ミン]————— 部長（併）教授

【学歴】中国吉林大学外国語学部日本語科卒（1983）、中国吉林大学大学院外国文学・言語研究科日本文学専攻修士課程修了（1986）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻修士課程修了（1989）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程修了（1993）【職歴】武蔵大学人文学部非常勤講師（1992）、東京大学教養学部客員研究員（1994）、東洋英和女学院大学社会科学部専任講師（1995）、東洋英和女学院大学社会科学部助教授（1998）、国立民族学博物館民族学研究部助教授（2000）、総合研究大学院大学文化科学研究科助教授併任（2001）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2011）【学位】学術博士（文化人類学）（東京大学大学院総合文化研究科 1993）、学術修士（文化人類学）（東京大学大学院総合文化研究科1989）、文学修士（中国吉林大学大学院外国文学・言語研究科 1986）【専攻・専門】文化人類学、現代中国の漢族研究【所属学会】日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

Han, M.

2001 *Social Change and Continuity in a Village in Northern Anhui, China: A Response to Revolution and Reform* (Senri Ethnological Studies 58). Osaka: National Museum of Ethnology (『回応革命与改革——皖北李村の社会変遷与延続』南京：江蘇人民出版社，2007)。

[編著]

韓 敏編

2015 『中国社会における文化変容の諸相——グローバル化の視点から』（国立民族学博物館論集3）東京：風響社。

2009 『革命の実践と表象——現代中国への人類学的アプローチ』東京：風響社。

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

革命、改革とグローバル化のものと中国に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究は近代中国の革命、改革とグローバル化の過程における社会と文化の連続性と非連続性を、究明することにある。本研究は2007年度から開始し、2014年度に終了予定の長期プロジェクトであり、下記の科研プロジェクトや共同研究会、機関研究プロジェクトと連携して実施する。

1) 社会主義革命理念の制度化、近代的シンボルの形成と人びとの生活実践に関する研究を、科学研究費補助金（基盤研究(C)）「現代中国の人々の生活実践に関する人類学的ライフヒストリー・アプローチ」（2011年4月～2015年3月）の研究代表者として、引き続き行う。

2) グローバル化の過程における中国文化の再構築について、共同研究会「中国における社会と文化の再構築——グローカリゼーションの視点から」（2008年10月～2011年3月）の代表者として全体の研究成果をまと

め、刊行することにより、成果公開を行う。

- 3) 近代中国の社会と文化の連続性と非連続性について、機関研究「中国における家族・民族・国家のディスコース（2012年4月～2015年3月）」の代表者として、最終年度の総括を行うと同時に、研究成果の編集と執筆を行う。

・成果

- 1) 近代中国の社会と文化の連続性と非連続性に関する国際シンポジウム（機関研究のプロジェクト）を11月に本館で実施した。
- 2) 機関研究の論文集、『中国社会的家族・民族・国家的話語及其動態——東亜人類学的理論探索』（Senri Ethnological Studies 90、中国語）を編集し、出版した。
- 3) 共同研究の論文集『中国社会における文化変容の諸相——グローバル化の視点から』（国立民族学博物館論集3）を風響社から出版した。
- 4) 研究フォーラムの成果を『近代社会における指導者崇拝の諸相』（国立民族学博物館調査報告127）として出版した。

◎出版物による業績

[編著]

韓 敏編

- 2015 『近代社会における指導者崇拝の諸相』（国立民族学博物館調査報告127）大阪：国立民族学博物館 [査読有]。
- 2015 『中国社会における文化変容の諸相——グローバル化の視点から』（国立民族学博物館論集3）東京：風響社 [査読有、共同研究成果]。

[共編]

韓 敏・末成道男編著

- 2014 『中国社会的家族・民族・国家的話語及其動態——東亜人類学的理論探索』（Senri Ethnological Studies 90）大阪：国立民族学博物館 [査読有、機関研究成果]。

[論文]

韓 敏

- 2014 「序章 中国社会的家族・民族・国家的話語及其動態——東亜人類学的理論探索」韓 敏・末成道男編著『中国社会的家族・民族・国家的話語及其動態——東亜人類学的理論探索』（Senri Ethnological Studies 90）pp.1-16, 大阪：国立民族学博物館 [査読有、機関研究成果]。
- 2015 「序論 近代社会の指導者崇拝に関する人類学的アプローチ」韓 敏編『近代社会における指導者崇拝の諸相』（国立民族学博物館調査報告127）pp.5-13, 大阪：国立民族学博物館 [査読有]。
- 2015 「近代中国における毛沢東崇拝の成り立ち」韓 敏編『近代社会における指導者崇拝の諸相』（国立民族学博物館調査報告127）pp.35-60, 大阪：国立民族学博物館 [査読有]。
- 2015 「序論 中国社会における文化の再構築とグローバル化——人類学のアプローチ」韓 敏編『中国社会における文化変容の諸相——グローバル化の視点から』（国立民族学博物館論集3）pp.9-21, 東京：風響社 [査読有、共同研究成果]。
- 2015 「項羽祭祀の伝承とその文化遺産化——安徽省和県烏江鎮の3月3覇王祭」韓 敏編『中国社会における文化変容の諸相——グローバル化の視点から』（国立民族学博物館論集3）pp.153-175, 大阪：国立民族学博物館 [査読有]。

[事典項目]

韓 敏

- 2014 「英雄崇拝」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.216-217, 東京：丸善出版。

[その他]

韓 敏

- 2014 「みんなく世界の旅 中国⑦ 生きている伝統——花嫁の輿」『毎日小学生新聞』4月5日。
- 2014 「みんなく世界の旅 中国⑧ 鮮やかな中国の農民画」『毎日小学生新聞』4月12日。
- 2014 「土の香りのモダンアート」『月刊みんなく』38(5)：6-7。
- 2014 「花嫁の輿、花轎」『月刊みんなく』38(5)：8-9。
- 2014 「漢族はなぜ家族を大切にするのか」『国立民族学博物館友の会ニュース』221：4。
- 2014 「観光で結ぶ中国と日本」『和華』4(4)：7-9。

2014 「日中の人類学の交流と今後の展開」『民博通信』146：8-9。

2014 「中国社会的家族・民族・国家的話語及其動態——東亜人類学的理論探索」(Senri Ethnological Studies no.90)『民博通信』147：25。

2015 「集めてみました世界のはきもの」『月刊みんぱく』39(3)：10-11。

2015 「旅・いろいろ地球人 信じる⑧ 故人への思いから生まれた明器」『毎日新聞』3月12日夕刊。

・電子ガイドの制作・監修

[中国地域の文化]

韓 敏監修

2014 『花嫁の輿』日本語、英語、韓国語、中国語。

2014 『漢族の位牌』日本語、英語、韓国語、中国語。

2014 『紙銭』日本語、英語、韓国語、中国語。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2014年11月22日～23日 機関研究・国際シンポジウム『中国の文化の持続と変化——グローバル化の下での家族・民族・国家 (Continuity and Change of Chinese Culture: Family, Ethnicity and State under Globalization)』国立民族学博物館

・共同研究会

2015年1月31日 「近代中国の聖地作り——指導者ゆかりの場所を事例に」『聖地の政治経済学——ユーラシア地域大国における比較研究』北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター

・研究講演

2014年5月3日 「漢族はなぜ家族を大切にするのか？」第431回国立民族学博物館友の会講演会

2014年12月17日 「第27回 現代中国の農村の暮らし——ある家族の幸せのかたち」産経新聞社主催、みんぱく創設40周年記念カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館9階 SPACE 9

◎調査活動

・海外調査

2014年7月23日～8月2日—中華人民共和国（現代中国の人々の生活実践に関する人類学的調査）

2014年9月6日～9月15日—中華人民共和国（現代中国の人々の生活実践に関する人類学的調査）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（1人）

朝倉敏夫 [あさくら としお]——教授

1950年生。【学歴】武蔵大学人文学部社会学科卒（1974）、明治大学大学院政治経済学研究科修士課程修了（1977）、明治大学大学院政治経済学研究科博士後期課程満期退学（1985）【職歴】国立民族学博物館第4研究部助手（1988）、国立民族学博物館第1研究部助教授（1994）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1994）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2001）、国立民族学博物館民族文化研究部長（2006）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2008）国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2010）【学位】政治学修士（明治大学大学院政治経済学研究科 1977）【専攻・専門】社会人類学、韓国社会論【所属学会】日本文化人類学会、日本民俗学会、比較家族史学会、韓国文化人類学会

【主要業績】

[単著]

朝倉敏夫

2005 『世界の食文化1 韓国』東京：社団法人農山漁村文化協会。

[編著]

朝倉敏夫編

2003 『「もの」から見た朝鮮民俗文化』東京：新幹社。

[共編]

朝倉敏夫・嶋 陸奥彦編

1998 『変貌する韓国社会——1970～80年代の人類学調査の現場から』 東京：第一書房。

【受賞歴】

2013 大韓民国玉冠文化勲章

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

「食」の文化人類学

・研究の目的、内容

日本における「食文化研究」は、石毛直道先生の研究に始まったといつてよい。世界における食文化研究は、どのようにして始まり、現在ではどのような状況にあるのか、食文化研究の俯瞰図を描くことを目的とする。

2014年度に始まる立命館大学との学術交流協定に基づき、国際シンポジウムを開催し、イタリア、中国、韓国、日本における食文化研究の概要を明らかにし、あわせて博物館が食文化研究に果たす役割について考察する。

・成果

2014年度に始まった立命館大学との学術交流協定に基づき、12月6日～7日に本館において国際シンポジウム「世界の食文化研究と博物館」を開催し、イタリア、中国、韓国、日本における食文化研究の概要を明らかにし、あわせて博物館が食文化研究に果たす役割について考察した。

国際シンポジウム「世界の食文化研究と博物館」の報告書は、2015年度に刊行される立命館大学社会システム研究所の紀要『社会システム研究』に掲載される予定であるが、本館『民博通信』No.148の評論・展望に、その概要を記載した。

また、このシンポジウムで発表された日本と韓国における食に関する博物館についての成果を、2015年度に開催する特別展「韓日食博」において展示する計画である。

◎出版物による業績

[論文]

朝倉敏夫

2014 「四天王寺ワッソと平城京天平祭の事例報告と歴史再現方祝祭の正体性についての一考察」『百済文化歳々の現在と未来戦略』pp.21-38（日本語）、pp.39-58（韓国語）財団法人百済文化祭推進委員会。

2014 「解題」村山智順『朝鮮의 場市研究』pp.205-220, ソウル：民俗苑。

2014 「전통의 보존, 맛과 기후의 변화 - 한국에 “아지노모토”가 왔다 (伝統の保存、味と嗜好の変化——韓国に味の素がやってきた)」*Traditional Foods: Culture Meets Science* pp.59-106, 2014 韓国食生活文化学会30周年記念学術大会。

2014 토론 「“음식문화 구조와 김장”에 관하여 (討論「食文化の構造とキムジャン」に関して) 2014第2回キムチ学シンポジウム『キムチの人文的理解』pp.159-162, 世界キムチ研究所。

2014 Korean Kimchi and Japanese Tsukemono. In S. Kim (trans.) *Humanistic Understanding of Kimchi and Kimjang Culture* (Kimchiology Series 1) pp.112-137. Gwangju: World Institute of Kimchi.

[事典項目]

朝倉敏夫

2014 「12. 生活文化」(セクション概説) 国立民族学博物館編『世界民族百科事典』p.434, 東京：丸善書店。

2014 「食のグローバリゼーション」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.450-451, 東京：丸善書店。

[その他]

朝倉敏夫

2014 「食から見る植民地期」『月刊みんぱく』38(6)：4-5。

2014 「チャンスン・ソッテと小正月の行事」『季刊民族学』150：64-66。

2014 「『学芸者』として」『魅せる！超フォークロア——近藤雅樹ワールドの探検』pp.344-346, 兵庫：神戸新聞総合出版センター。

2015 「なぜ日本人はラーメンとキムチが好きなのか？」福田アジオ責任編集『知って役立つ民俗学』pp.248-253, 京都：ミネルヴァ書房。

2015 「評論・展望 世界の食文化研究と博物館」『民博通信』148：4-9。

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

[ビデオテーク]

朝倉敏夫監修、梨花大学校チーム制作

2014 『現代韓国の結婚準備過程——スドメを知っていますか？』（韓国国立民俗博物館との交流事業）日本語，韓国語，16分。

朝倉敏夫監修、韓国学中央研究院・ソウル芸術大学校チーム制作

2014 『旧正月の風景——ユン・スジュンさんのソル茶礼』日本語，韓国語，11分。

朝倉敏夫監修、安東大学校チーム制作

2014 『韓国の大学入試文化——大学入試を準備する特別な方法』日本語，韓国語，16分。

・電子ガイドの制作・監修

[朝鮮半島の文化]

朝倉敏夫監修

2015 『味の素の新聞広告 1 販売戦略編』日本語，英語，韓国語，中国語。

2015 『味の素の新聞広告 2 女性編』日本語，英語，韓国語，中国語。

2015 『味の素の新聞広告 3 料理編』日本語，英語，韓国語，中国語。

2015 『オデンとウドン』日本語，英語，韓国語，中国語。

2015 『中国料理店のオムライス』日本語，英語，韓国語，中国語。

2015 『石臼と甕——植民地期におけるある夫婦の暮らし』日本語，英語，韓国語，中国語。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2014年12月6日～7日 「趣旨説明」「挨拶」国立民族学博物館・立命館大学学術交流協定締結記念国際シンポジウム『世界の食文化研究と博物館』国立民族学博物館講堂

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年8月26日 「四天王寺ワッソと平城京天平祭の事例報告と歴史再現方祝祭の正体性についての一考察」『百済文化歳々の現在と未来戦略』財団法人百済文化祭推進委員会、公州大学校

2014年9月28日 基調講演「『和食』の無形文化遺産登録を受けて——食文化研究と和食」『日本食文化の魅力シンポジウム in 京都』農林水産省、京都府立大学

2014年9月28日 パネルディスカッション「学問として伝える和食」『日本食文化の魅力シンポジウム in 京都』農林水産省、京都府立大学

2014年11月14日 「전통의 보존, 맛과 기후의 변화 - 한국에 “아지노모토”가 왔다 (伝統の保存、味と嗜好の変化——韓国に味の素がやってきた)」2014韓国食生活文化学会30周年記念学術大会 “Traditional Foods: Culture Meets Science” 韓国食文化生活会、漢陽大学校

2014年11月26日 토론 “음식문화 구조와 김장”에 관하여 (討論「食文化の構造とキムチ」に関して) 2014 第2回キムチ学シンポジウム『キムチの人文的理解』世界キムチ研究所、国立中央図書館

2014年12月19日 「韓国の近代化——味の素の『東亜日報』掲載広告を通して」アジア・日本研究センター学術支援プログラム 公開研究会、国士館大学

・研究講演

2014年6月12日 「食からみる韓国文化」早稲田大学韓国学研究所2014年度春学期連続講座『文化でみる現代韓国』早稲田大学26号館

・研究公演

2014年9月15日 司会・解説『伝統芸能パンソリによる韓国文化の理解』国立民族学博物館講堂

・広報・社会連携活動

2014年4月18日 「韓国の食文化」NPO 法人大阪府高齢者大学校 世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館

2014年4月25日 「キムチが語る」NPO 法人大阪府高齢者大学校 世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館

- 2014年7月27日 「ウドン・オムライス・味の素——朝鮮半島における『食』の近代化」第352回みんぱくウィークエンド・サロン
- 2014年7月28日 「ようこそ、みんぱくへ！」東大阪市立太平寺小学校教職員研修会、国立民族学博物館
- 2014年8月2日 「植民地期に海を渡った日本の食」第434回国立民族学博物館友の会講演会
- 2014年8月5日 「みんぱくの教員によるミュージアムツアー」ワークショップ『「すごろく教材」で異文化理解』博学連携教員研修ワークショップ2014 in みんぱく、国立民族学博物館
- 2014年8月6日 「韓国食文化——韓国ドラマの事例から」第7回教職員韓国文化研修会、大阪韓国文化院
- 2014年10月6日 「チャンスン・ソッテと仮面」特別展「イメージの力」ギャラリートーク、国立民族学博物館
- 2014年10月18日 「食から知る韓国」教育・男女共同参画学習会、守口市立中央公民館
- 2015年2月14日 「朝鮮王朝の食文化——現代に根付く“薬食同源”」高麗美術館新春企画展『チャングムが生きた時代』研究講座、高麗美術館
- 2015年3月11日 「韓国の食の世界——ご飯」産経新聞社主催、みんぱく創設40周年記念 カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館9階SPACE9

◎調査活動

・海外調査

- 2014年5月24日～5月29日一大韓民国（日韓共同開催の2015年度特別展のための事前調査及び韓国国立民俗博物館との協議）
- 2014年7月15日～7月19日一大韓民国（朝鮮半島の文化に関する映像資料の開発と作成及び平成27年特別展準備協議）
- 2014年8月10日～8月12日一大韓民国（フォーラム型情報ミュージアムに関する韓国国立民俗博物館との協議）
- 2014年8月25日～8月30日一大韓民国（百済文化祭シンポジウムに参加・情報収集及びインフォ・フォーラムミュージアムの協議）
- 2014年11月13日～11月18日一大韓民国（韓国食生活文化学会へ参加及び特別展準備）
- 2014年11月25日～11月27日一大韓民国（キムチ学シンポジウムへ参加及び情報収集）
- 2015年1月24日～1月26日一大韓民国（フォーラム型情報ミュージアムに関する韓国国立民俗博物館との協議）
- 2015年2月22日～2月25日一大韓民国（フォーラム型情報ミュージアムに関する韓国国立民俗博物館との協議）
- 2015年3月15日～3月19日一中華人民共和国（広州を中心とする客家料理の調査）

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

- 2014年10月2日 「食文化研究・入門」テーマ・シリーズ

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

高麗美術館理事

・非常勤講師

神戸女子大学「衣・食・住Ⅰ」、「世界の食文化」

印東道子 [いんとう みちこ] ————— 教授

【学歴】東京女子大学文理学部史学科卒（1976）、ニュージーランド・オタゴ大学人類学部修士課程修了（1982）、ニュージーランド・オタゴ大学人類学部大学院博士課程修了（1988）【職歴】東京女子大学文理学部史学科研究助手（1976）、北海道東海大学国際文化学部助教授（1988）、北海道東海大学国際文化学部教授（1996）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2000）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任教授（2001）、放送大学客員教授（2006）【学位】Ph.D.（オタゴ大学人類学部大学院博士課程 1989）、M.A.（オタゴ大学人類学部大学院修士課程 1982）【専攻・専門】オセアニア先史学・民族学 1) オセアニアの土器文化、2) 島嶼環境における人間居住【所属学会】日本オセアニア学会、日本人類学会、日本考古学協会、New Zealand Archaeological Society、Indo-Pacific Prehistory Association

【主要業績】

〔単著〕

印東道子

2014 『南太平洋のサンゴ島を掘る——女性考古学者の謎解き』（フィールドワーク選書4）京都：臨川書店。

2002 『オセアニア 暮らしの考古学』（朝日選書715）東京：朝日新聞社。

〔編著〕

印東道子編著

2013 『人類の移動誌』京都：臨川書店。

【受賞歴】

2006 大同生命地域研究奨励賞

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

島嶼環境への人類の移動と適応

・研究の目的、内容

- 1) オセアニアの島嶼環境への人類の移動の様子や移動後の居住に関する研究を、科学研究費補助金（基盤研究（A））「東南アジア・オセアニアにおける現生人類の拡散移住史」（研究代表者：松村博文）の研究分担者として、引き続き行う。
- 2) 本年度、新規採択された科学研究費補助金（基盤研究（B））「ウォーラシア海域と環太平洋域における人類移住・海洋適応・物質文化の比較研究」（研究代表者：小野林太郎）の研究分担者として、主としてインドネシア多島海地域とオセアニアの物質文化の比較研究を行う。
- 3) 共同研究会「アジア・オセアニアにおける海域ネットワーク社会の人類史的研究：資源利用と物質文化の時空間比較」（研究代表：小野林太郎）において、海域世界を特徴とするオセアニアへ拡散した初期の人々の物質文化がどのように変化したかを海洋適応との関連で明らかにする。

・成果

- 1) 科学研究費補助金（基盤研究（A））「東南アジア・オセアニアにおける現生人類の拡散移住史」の成果報告として出版される英語論文集の分担執筆を行った（2015年10月にオーストラリア国立大学出版局から出版予定）。
- 2) 東南アジア考古学会で「ミクロネシアの海域ネットワーク：その起源に関する一考察」と題する発表を行った。
- 3) 昨年終了した科学研究費補助金（新学術領域研究（研究領域提案型））の成果刊行物『文明の盛衰と環境変動——マヤ・アステカ・ナスカ・琉球の新しい歴史像』（青山和夫他編、岩波書店）にコラムを執筆し、成果の一端を発表した。
- 4) 編著『ミクロネシアを知るための60章 [第2版]』を刊行した。

◎出版物による業績

〔単著〕

印東道子

2014 『南太平洋のサンゴ島を掘る——女性考古学者の謎解き』（フィールドワーク選書4）京都：臨川書店。

〔編著〕

印東道子編

2015 『ミクロネシアを知るための60章 [第2版]』東京：明石書店。

〔論文〕

印東道子

2014 「ブタをつれて海を渡った人たち——ミクロネシア・ファイス島の発掘から」『季刊民族学』149：69-86。

2014 「イースター島民は最後の木を切り倒さなかった」青山和夫・米延仁志・坂井正人・高宮広土編『文明の盛衰と環境変動——マヤ・アステカ・ナスカ・琉球の新しい歴史像』pp.248-249, 東京：岩波書店。

[事典項目]

印東道子

2014 「環境史」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.612-613, 東京：丸善出版。

[その他]

印東道子

2014 「海を渡った人類」『産経新聞』7月28日夕刊。

2015 「ミクロネシアの島じま」印東道子編『ミクロネシアを知るための60章 [第2版]』pp.18-21, 東京：明石書店。

2015 「火山島とサンゴ島」印東道子編『ミクロネシアを知るための60章 [第2版]』pp.22-25, 東京：明石書店。

2015 「雨期と乾期・自然災害」印東道子編『ミクロネシアを知るための60章 [第2版]』pp.31-34, 明石書店。

2015 「ミクロネシアの植物」印東道子編『ミクロネシアを知るための60章 [第2版]』pp.39-43, 東京：明石書店。

2015 「ミクロネシアの人びと」印東道子編『ミクロネシアを知るための60章 [第2版]』pp.46-49, 東京：明石書店。

2015 「ヨーロッパ人との遭遇」印東道子編『ミクロネシアを知るための60章 [第2版]』pp.55-58, 東京：明石書店。

2015 「調理法のいろいろ」印東道子編『ミクロネシアを知るための60章 [第2版]』pp.109-112, 東京：明石書店。

2015 「日本統治時代の生活」印東道子編『ミクロネシアを知るための60章 [第2版]』pp.166-169, 東京：明石書店。

2015 「チャモロ文化の源流」印東道子編『ミクロネシアを知るための60章 [第2版]』pp.199-203, 東京：明石書店。

2015 「巨石遺跡ラッテの謎」印東道子編『ミクロネシアを知るための60章 [第2版]』pp.204-208, 東京：明石書店。

2015 「色濃く残るスペインの影響」印東道子編『ミクロネシアを知るための60章 [第2版]』pp.209-213, 東京：明石書店。

山口洋児・印東道子

2015 「ミクロネシアの日系人」印東道子編『ミクロネシアを知るための60章 [第2版]』pp.192-196, 東京：明石書店。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会

2014年11月16日 「ミクロネシアの海域ネットワーク——その起源に関する一考察」『アジア・オセアニアにおける海域ネットワーク社会の人類学的研究』東南アジア考古学会大会と共同開催、上智大学

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年7月18日 「南太平洋の考古学——人類の海洋進出の歴史」d-labo セミナー、東京ミッドタウン

2014年9月26日 「大規模レトロトランスポズン多型情報を利用した南米およびオセアニア在来サツマイモ遺伝資源の系統ネットワーク解析」（門田有希、田原谷薫、印東道子、斎藤成也、田原 誠）日本育種学秋季大会第126回講演会、南九州大学

2014年11月2日 「オセアニアへの新石器文化集団の拡散——ラピタ集団以前にマリアナ諸島へ」第68回日本人類学会大会、アクトシティ浜松

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（4人）

・大学院ゼミでの活動

リサーチプロポーザル指導（井上、荘司）

1年生ゼミ 「考古資料を批判的に読むために——J. ダイアモンドのイースター島文明崩壊説の崩壊」

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（A））「東南アジア・オセアニアにおける現生人類の拡散移住史」（研究代表：松村博文）研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究（B）（海外））「ウォーラシア海域と環太平洋域における人類移住・海洋適応・物質文化の比較研究」（研究代表：小野林太郎）研究分担者

◎社会活動・館外活動

- ・他機関から委嘱された委員など

日本学術会議連携会員、日本オセアニア学会会長、日本人類学会評議員

小長谷有紀 [こながや ゆき] ————— 教授（併）

1957年生。【学歴】京都大学文学部史学科卒（1981）、京都大学大学院文学研究科修士課程修了（1983）、京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学（1986）【職歴】京都大学文学部助手（1986）、国立民族学博物館第1研究部助手（1987）、国立民族学博物館第1研究部助教授（1993）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1993）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助教授（2000）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2003）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2004）、総合研究大学院大学地域文化学専攻長（2005）、国立民族学博物館研究戦略センター長（2007）、国立民族学博物館民族社会研究部長（2009–2011）、人間文化研究機構理事（2014）【学位】文学修士（京都大学大学院文学研究科 1983）【専攻・専門】人文学【所属学会】日本文化人類学会、日本モンゴル学会、人文地理学会、生き物文化誌学会

【主要業績】

[単著]

小長谷有紀

2005 『世界の食文化③ モンゴル』東京：社団法人農山漁村文化協会。

[編著]

小長谷有紀・シンジルト・中尾正義編

2005 『中国の環境政策「生態移民」——緑の大地、内モンゴルの砂漠化を防げるか？』京都：昭和堂。

小長谷有紀編

2004 『モンゴルの二十世紀——社会主義を生きた人びとの証言』（中公叢書）東京：中央公論新社。

【受賞歴】

2013 紫綬褒章

2013 教育研究に関する感謝状ならびに優秀学術研究者徽章（モンゴル国教育文化科学省）

2009 大同生命地域研究奨励賞

2007 モンゴル国ナイルムダルメダル（友好勲章）

1993 第29回翻訳出版文化賞

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

モンゴルにおける社会主義的近代化

・研究の目的、内容

これまで、「モンゴルにとって20世紀とはなんであったか？」という問いを立てて行ってきた研究を継承しつつ、「社会主義的近代化とはなんであったか？」という問いへと問題を鋭角に転換して、各個研究ではモンゴルおよび中国内モンゴル自治区についての事例研究を目的とする。社会主義的近代化を体現した当事者たちによるナラティブ（語り）を収集し、それらを多声的に構成して近代化という時空間に関するモノグラフ（民族誌的歴史）を描くことによって、正統な歴史記述とは異なるテキストをナラティブから構成する。

・成果

モンゴルについては、すでに刊行したもののうち、現役の政治家たちについて、モンゴル語から英語に翻訳し

て、Senri Ethnological Reports 121号を刊行した。また、2012年2月に本館で実施した、鉱業開発に関するシンポジウムの際に来日したホルツ氏の口述史を、モンゴル語と英語で作成して加えた。なお、邦訳はNPO法人モンゴルパートナーシップ研究所のHPで公開した。内モンゴル自治区については、ブリヤートの移動について焦点をあてて、外国人客員教員のサランゲレル氏と共同で実施し、モンゴル語と日本語で作成し、国立民族学博物館調査報告119号として刊行した。

◎出版物による業績

[単著]

小長谷有紀

2014 『人類学者は草原に育つ——変貌するモンゴルとともに』（フィールドワーク選書9）京都：臨川書店。

[編著]

小長谷有紀編

2014 『梅棹忠夫のモンゴル調査——ローマ字カード集』（国立民族学博物館調査報告122）大阪：国立民族学博物館 [査読有]。

[共編著]

小長谷有紀・前川愛編著

2014 『現代モンゴルを知るための50章』東京：明石書店。

Konagaya, Y. and I. Lkhagvasuren (interviews conducted), Mary Rossabi (trans.) and Morris Rossabi (ed. and intro.)

2014 *Mongolia's Transition from Socialism to Capitalism: Four Views* (Senri Ethnological Reports 121). Osaka: National Museum of Ethnology [査読有]。

Юки Конагая (Ред.), Ю. И. Елихина (Konagaya, Y. (ed.), J. I. Elikhina)

2014 *Некоторые археологические находки Монголо-советской экспедиции под руководством С.В. Киселева: Городище Каракорум, коллекция Государственного Эрмитажа* (Some Archeological Findings of the Mongolian-Soviet Expedition Led by S.V. Kiselev: Karakorum Settlement Relicts Stored in Hermitage Museum) (Senri Ethnological Reports 123). Osaka: National Museum of Ethnology (ロシア語・英語) [査読有]。

[共著]

小長谷有紀・サランゲレル・ソヨルマ編

2014 『20世紀におけるブリヤート人たち——中国内モンゴル自治区フルンボイルにおける口述史』（国立民族学博物館調査報告119）大阪：国立民族学博物館 [査読有]。

[事典項目]

小長谷有紀

2014 「環境破壊」『世界民族百科事典』pp.624-625, 東京：丸善出版。

[その他]

小長谷有紀

2014 「モンゴルにおけるウマの習性と個性に対する認知」『BIOSTORY』21：72-79。

2014 「梅棹忠夫探訪記①梅棹のコーパス」『ミネルヴァ通信「究」』37：20-23。

2014 「みんぱく、こばれ話⑤『日本を愛してくれて、ありがとう！』」『TOYRO BUSINESS』164：30。

2014 「梅棹忠夫探訪記②近くて遠い今西錦司との仲」『ミネルヴァ通信「究」』38：20-23。

2014 「梅棹忠夫探訪記③水平思考の生まれる秘密」『ミネルヴァ通信「究」』39：20-23。

2014 「梅棹忠夫探訪記④『知的生産』の原理」『ミネルヴァ通信「究」』40：20-23。

2014 「梅棹忠夫探訪記⑤ロングセラーの源泉」『ミネルヴァ通信「究」』41：20-23。

2014 「みんぱく、こばれ話⑥『クリミア危機の余波がブリヤートの歌姫に』」『TOYRO BUSINESS』165：30。

2014 「世界の現在 サンドイッチの具であるモンゴルからのラブコール」『坂の上の雲ミュージアム通信「小日本」』18：3-5。

2014 「モンゴル研究の歩みたどる」『信濃毎日新聞』7月16日。

2014 「梅棹忠夫探訪記⑥ローマ字運動への傾倒」『ミネルヴァ通信「究」』42：20-23。

2014 「歴代大統領たち——リーダーたちの横顔（プロフィール）」『現代モンゴルを知るための50章』pp.24-28, 東京：明石書店。

- 2014 「農業開発『アタル』——食糧安全保障と環境保全のはざま」『現代モンゴルを知るための50章』pp.49-52, 東京:明石書店。
- 2014 「研究と本とわたし——未知の世界へのあくなき探究心で人類の歴史と文化を読み解く」『WEDGE Infinity』10月1日 (<http://wedge.ismedia.jp/articles/-/4242?page=1>)。
- 2014 「みんなく、こぼれなし⑦『消費者が若き研究者たちを支援する』」『TOYRO BUSINESS』166:30。
- 2014 「梅棹忠夫探訪記⑦『カメラと写真』」『ミネルヴァ通信「究」』43:20-23。
- 2014 「モンゴルの遊牧文化を通して自分自身を見直すきっかけに!」『club keibun』(しがぎん経済文化センター) 386:2。
- 2014 「本で知る人生いろいろ第35回 そうはなれなかった我が脇道の話——梅棹忠夫」『SUMISEI Best Book』347:29。
- 2014 「梅棹忠夫探訪記⑧『引紹批言』の記録」『ミネルヴァ通信「究」』44:20-23。
- 2014 「梅棹忠夫探訪記⑨文章表現をめぐる飽くなき努力」『ミネルヴァ通信「究」』45:20-23。
- 2015 「梅棹忠夫探訪記⑩ヒツジをめぐる物語」『ミネルヴァ通信「究」』46:20-23。
- 2015 「みんなく、こぼれ話⑧『出前サービスをつくるも…』」『TOYRO BUSINESS』164:30。
- 2015 「梅棹忠夫探訪記⑪ベンゼン核の好敵手」『ミネルヴァ通信「究」』47:20-23。
- 2015 「知的生産学『梅棹キット』」『読売新聞』2月10日夕刊。
- ・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修
[ビデオテーク]
小長谷有紀監修
2014 『トゥバ人たちの住むところ』日本語, 83分。
- ◎口頭発表・展示・その他の業績
- ・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告
2014年5月6日 「梅棹忠夫と21世紀の『知的生産の技術』情報デザインの未来・過去・現代」一般財団法人ナレッジキャピタル、グランフロント大阪ナレッジキャピタル北館タワーC8階
- ・研究講演
2014年9月6日 「知的生産の技術——民族学者、梅棹忠夫の眼」ナレッジキャピタル「超」学校シリーズ『21世紀の「知的生産の技術」vol.5 梅棹忠夫の眼——写真にみるその視点とは』一般社団法人ナレッジキャピタル、グランフロント大阪北館ナレッジキャピタル1F CAFE Lab.
- ・広報・社会連携活動
「梅棹忠夫のモンゴル調査をたどる旅——中国内モンゴルの草原と史跡をゆく」第84回国立民族学博物館友の会民族学研修の旅(2014年9月8日～9月14日)、みんなく制作「歩くウメサオタダオ展」
- ◎調査活動
- ・海外調査
2014年8月4日～8月12日—モンゴル(中央・北アジア展示新構築のための資料収集)
- ◎大学院教育
- ・論文審査
博士論文審査委員(1件)
- ◎上記以外の研究活動
- ・他機関から委嘱された委員など
大同生命地域研究賞選考委員、中央環境審議会臨時委員(自然環境部所属臨時委員)、科学技術・学術審議会臨時委員(学術分科会)、東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター運営委員会委員、日本学術振興会専門委員、京都大学経営協議会委員、総合研究大学院大学博士論文審査委員

庄司博史 [しょうじ ひろし]——教授

【学歴】ヘルシンキ大学人文学部卒(1977)、関西外国語大学大学院外国語研究科修士課程修了(1980)【職歴】国立民族学博物館第3研究部助手(1980)、国立民族学博物館第3研究部助教授(1990)、総合研究大学院大学文化科学研究科併任(1991)、国立民族学博物館民族社会研究部助教授(1998)、国立民族学博物館民族社会研究部教授(1999)、国立民族学博物館民族社会研究部部长(2000-2002)、総合研究大学院大学文化科学科比較文化専攻長(2003-2004)【学位】文学修士(関西外国語大学 1980)【専攻・専門】言語学、ウラル語学、言語政策論【所属学会】日本

ウラル学会、日本言語学会、日本社会言語科学会、日本移民学会、多言語化現象研究会、International Sociological Association

【主要業績】

〔編著〕

庄司博史編

1999 『ことばの二〇世紀』（二〇世紀における諸民族文化の伝統と変容6）東京：ドメス出版。

〔共編〕

庄司博史・P. バックハウス・F. クルマス編

2009 『日本の言語景観』東京：三元社。

真田信治・庄司博史編

2005 『事典——日本の多言語社会』東京：岩波書店。

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本の多民族化・多言語化の実態についての研究

・研究の目的、内容

本研究では近年の外国人増加にともなう地域の多民族化の実態をふまえ、多民族化がいかに社会の多言語化に影響するか、また多言語化はいかに日本社会の言語間の関係、日本人の言語意識にかかわるかに焦点をあて研究を進めてきた。昨年度に引き続き、特に多言語化の実態を移民言語とのかかわりに注目しながら、検討を進めていく予定である。また今日移民の中でもあまり注目されることの少なかった非識字者の社会参加に関する調査も国際比較の観点から進める予定である。

・成果

今年度は、以下の出版、および学会での口頭による発表、講演をおこなった。

◎出版物による業績

〔編著〕

庄司博史編

2015 『世界の文字事典』東京：丸善出版。

〔事典項目〕

庄司博史

2014 「民族と言語」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.24-25, 東京：丸善出版。

2014 「5. 言語・文字」（セクション概説）国立民族学博物館編『世界民族百科事典』p.165, 東京：丸善出版。

2014 「移民言語」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.174-175, 東京：丸善出版。

2014 「多言語化・多言語主義」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.192-193, 東京：丸善出版。

2014 「言語景観」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.196-197, 東京：丸善出版。

2014 「母語教育」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.288-289, 東京：丸善出版。

2014 「多言語社会」『日本語大事典 下巻』pp.1293-1294, 東京：朝倉書店。

2015 「エストニア語」庄司博史編『世界の文字事典』pp.28-31, 東京：丸善出版。

2015 「フィンランド語」庄司博史編『世界の文字事典』pp.76-79, 東京：丸善出版。

〔その他〕

庄司博史

2014 「旅・いろいろ地球人 共に生きる③ 多数派はどっち？」『毎日新聞』4月24日夕刊。

2014 「みんなく世界の旅 日本に住む外国人① さまざまな国の言葉と文化」『毎日小学生新聞』5月3日。

2014 「みんなく世界の旅 日本に住む外国人② 日本にある外国人学校」『毎日小学生新聞』5月10日。

2014 「特別展『多みんぞくニホン』から10年」『月刊みんなく』38(8)：2-3。

2015 「もう一つの『東海』」『月刊みんなく』39(1)：21。

2015 「文字をめぐる雑感」『みんなく e-news』164 (<http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/164>)

2015 「フィンランドのソウルフード？ カレリア・パイ」『月刊みんなく』39(3)：18-19。

Shoji, H.

2014 Examining the Linguistic Mind of Japanese. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 39: 9-11.

◎映像音響メディアによる業績

・電子ガイドの制作・監修

庄司博史制作・監修

2015 『移民と日本』 日本語, 英語, 中国語, 韓国語。

2015 『多文化をになう子どもたち』 日本語, 英語, 中国語, 韓国語。

・DVD・CD などの制作・監修

[DVD]

庄司博史監修

2014 『エストニアの伝統文化』 みんぱく映像民族誌第16集, 国立民族学博物館撮影・製作, 日本語77分。

・TV・ラジオ番組などの制作・監修

[TV 番組]

庄司博史監修

2014 「サーミ人地域」『THE 世界遺産』 TBS (11月9日放送)。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年7月5日 「フィンランド語のカタカナ表記に関する考察——フィンランド語前舌母音の聴覚テストにもとづき」第41回日本ウラル学会研究発表大会、中部大学

2014年7月18日 ‘Is a Multilingual Mind Possible for the Japanese?’ XVIII International Sociological Association World Congress of Sociology, Pacifico Yokohama, Japan

・みんぱくゼミナール

2014年5月17日「多みんぞくニホンのいま——特別展から10年」第432回みんぱくゼミナール

・研究講演

2014年9月8日 ‘Monikulttuuristuva ja Monikielistyvä Japani, onko totta?’ University of Helsinki, Department of World Cultures and Japanin Kulttuurin Ystävät RY., University of Helsinki, Republic of Finland

2014年10月25日 「大自然と物語の国々 北欧が*おもしろい② 伝統と革新——フィンランド再発見」NHK 文化センター・梅田

◎調査活動

・海外調査

2014年8月25日～9月10日—フィンランド、エストニア（エストニア南部セト地方の民族関係及びフィンランド移民政策に関する調査）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（1人）

・審査委員

予備審査委員（1件）

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

NPO 法人多言語センターFacil 理事、貝塚市人権擁護審議会委員・副委員長

・非常勤講師

関西外国語大学「フィンランド語」、京都外国語大学「言語と文化」

西尾哲夫 [にしお てつお] 教授

1958年生。【学歴】大阪外国語大学外国語学部アラビア語科卒（1981）、京都大学大学院文学研究科修士課程言語学専攻修了（1984）、京都大学大学院文学研究科博士後期課程言語学専攻満期退学（1987）【職歴】東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手（1989）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授（1994）、国立民族学博物館第2研究部助教授（1996）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1998）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2006）、国立民族学博物館民族文化研究部長（2008）、国立民族学博物館研究戦略センター長（2011）、国立民族学博物館副館長（2012）【学位】文学博士（京都大学大学院文学研究科 2005）、言語学修士（京都大学大学院文学研究科 1984）【専攻・専門】言語学・アラブ研究 1) アラブ遊牧民の言語人類学的研究、2) アラビアン・ナイトをめぐる比較文明学的研究【所属学会】日本言語学会、日本中東学会、日本オリエント学会

【主要業績】

[単著]

西尾哲夫

2013 『ヴェニス商人の異人論——人肉ポンドと他者認識の民族学』東京：みすず書房。

2011 『世界史の中のアラビアンナイト』（NHK ブックス）東京：NHK 出版。

2007 『アラビアンナイト——文明のはざまに生まれた物語』東京：岩波書店。

【受賞歴】

2011 第28回田邊尚雄賞（東洋音楽学会）

1992 オリエント学会奨励賞

1992 新村出記念財団研究助成賞

1992 流沙海西奨学会賞

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アラブ世界の言語社会的位相と文学伝統の変容

・研究の目的、内容

2010年、エジプト検察当局は、イスラーム系弁護士団体による「アラビアンナイト発禁処分申し立て」を「古くから読まれており芸術家にも影響を与えてきた」という理由で却下した。近世エジプトでは、都市部中流層の台頭などによる中間アラビア語の誕生にともない、中世シリアの伝承物語集に民間説話が付加されて現在のアラビアンナイトが成立した。この過程ではキリスト教徒も関与しており、挿絵入りエジプト系写本が新たに発見された。近世エジプト系写本の物語および言語分析を通し、相反する価値観が併存してきた理由ならびに異文化交流による成立過程を解明する。また、中間アラビア語の発生と伝播を通じて顕著にみられるアラブ世界に特徴的な言語社会的位相を分析し、フェイスブック革命に代表される社会変動メカニズムを解明する。

・成果

- 1) 編著書として、『断と続の中東——非境界の世界を遊ぶ』（堀内正樹と共編、悠書館）を刊行した。同書中に論文として、「梓物語異聞——もうひとつのアラビアンナイト、ヴェッツシュタイン写本試論」pp.379-412を発表した。
- 2) 研究発表として、「シンドバード航海記の写本の分類と系統——筆写年入り写本として最古のペティス・ド・ラ・クロワ『アラブの物語 海のシンドバード』をめぐる」日本オリエント学会第56回大会（於：上智大学、2014年10月26日）をおこなった。
- 3) 一般向けの研究広報として、「アラビアンナイトの変容——語り継がれる物語」『季刊民族学』148号、pp.85-94を発表した。また「イスラームの世界観——アラビアンナイトから考える」（カレッジシアター地球探検紀行第22回、於：あべのハルカス近鉄本店ウイング館9F「SPACE 9」、2014年11月12日）の講演をおこなった。
- 4) 事典等の項目として、「グローバル化する舞踊」（米山知子と共著）国立民族学博物館編『世界民族百科事典』（丸善出版）、「セム諸語」佐藤武義・前田富祺他編『日本語大事典』（朝倉書店）、「アラビア語」庄司博史編

『世界の文字事典』（丸善出版）を執筆・刊行した。

- 5) 科学研究費補助金（基盤研究（A））「アラブ世界の都市部中流層文化とアラビアンナイト——エジプト系伝承形成の謎を解く」（代表：西尾哲夫）による国内調査ならびに文献調査をおこなった。

◎出版物による業績

[共編著]

堀内正樹・西尾哲夫編

- 2014 『〈断〉と〈続〉の中東——非境界の世界を遊ぶ』東京：悠書館〔査読有、国立民族学博物館共同研究成果〕。

[論文]

西尾哲夫

- 2014 「杵物語異聞——もうひとつのアラビアンナイト、ヴェッツシュタイン写本試論」堀内正樹・西尾哲夫編『〈断〉と〈続〉の中東——非境界の世界を遊ぶ』pp.379-412, 東京：悠書館〔査読有、国立民族学博物館共同研究成果〕。

[その他]

西尾哲夫

- 2014 「アラビアンナイトの変容——語り継がれる物語」『季刊民族学』148：85-94。

[事典項目]

西尾哲夫・米山知子

- 2014 「グローバル化する舞踊」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.488-489, 東京：丸善出版。

西尾哲夫

- 2014 「セム諸語」佐藤武義・前田富祺他編『日本語大事典 上巻』pp.1218-1220, 東京：朝倉書店。

- 2015 「アラビア語」庄司博史編『世界の文字事典』pp.316-321, 東京：丸善出版。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2014年10月26日 「シンドバード航海記の写本の分類と系統——筆写年入り写本として最古のペティス・ド・ラ・クロワ『アラブの物語 海のシンドバード』をめぐる」日本オリエント学会第56回大会、上智大学

・研究講演

- 2014年11月12日 「イスラームの世界観——アラビアンナイトから考える」産経新聞社主催、みんなく創設40周年記念カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館9階SPACE9

・展示

- 年末年始展示イベント「ひつじ」

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

- 論文ゼミ担当、「研究マネジメントと競争的外部資金」1年生ゼミ、テーマシリーズ（2014年9月25日）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

- 科学研究費補助金（基盤研究（A））「アラブ世界の都市部中流層文化とアラビアンナイト——エジプト系伝承形成の謎を解く」研究代表者、科学研究費補助金（基盤研究（B））「中東・北アフリカ地域における音文化の越境と変容に関する民族音楽学的研究」（研究代表者：水野信男）研究分担者

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

- 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所運営委員

・非常勤講師

- 京都大学文学部「アラブ語」

MATTHEWS, Peter Joseph [マシウス、ピーター・ジョセフ]——教授

1959年生。【学歴】オークランド大学卒（1981）、オークランド大学大学院修士課程修了（1984）、オーストラリア国立大学大学院博士課程修了（1990）【職歴】科学技術庁特別研究員（農水省野菜茶業試験場）（1990）、日本学術振興会特別研究員（京都大学理学部）（1993）、国立民族学博物館第4研究部助手（1995）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手（1998）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助教授（1999）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2002）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2008）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2015）【学位】Ph.D.（オーストラリア国立大学 1990）、M. Sc.（オークランド大学 1984）【専攻・専門】先史学、民族植物学【所属学会】Society for Economic Botany, Indo-Pacific Prehistory Association, Society of Writers, Editors and Translators, International Aroids Society, European Association of Science Editors, World Archaeology Congress, Royal Society of New Zealand

【主要業績】

[単著]

Matthews, P. J.

2014 *On the Trail of Taro: An Exploration of Natural and Cultural History* (Senri Ethnological Studies 88). Osaka: National Museum of Ethnology.

[編著]

Spriggs, M., D. Addison and P. J. Matthews (eds.)

2012 *Irrigated Taro (Colocasia esculenta) in the Indo-Pacific: Biological, Social and Historical Perspectives* (Senri Ethnological Studies 78). Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

Matthews, P. J.

2010 An Introduction to The History of Taro as a Food. In V. R. Rao, P. J. Matthews, P. B. Eyzaguirre, and D. Hunter (eds.) *The Global Diversity of Taro: Ethnobotany and Conservation*, pp.6-29. Rome: Bioversity International.

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

辺境少数民族地帯での植物利用及び伝統知の遺存と地域発展活動や国際経済の影響評価

・研究の目的、内容

- 1) アジア・太平洋地域のサトイモと他の食べられるサトイモ科植物の自然史・文化史の探究。食用サトイモ科植物の野生近縁種の民族植物学・生態学・遺伝子学に重点を置く。(a) その一環として、台湾で現地調査を行う。(b) 2013年に得られた *Colocasia esculenta* と *Alocasia macrorrhizos* (フィリピン中部一南部) の葉緑体DNAの遺伝子座の分析を継続して行う。
- 2) 植物利用及び伝統知の遺存：インド北部・ミャンマーにおける食用サトイモ科植物とその野生近縁種の民族植物学的野外調査。このため、インドのグワハチ大学、ミャンマーのイエツイン農業大学との協力体制を継続する。

・成果

University of Bern の Linguistics Institute (スイス) の Dr. Maxwell P. Phillips が主催する国際シンポジウム “Migrations and Transfers in Prehistory: Asian and Oceanic Ethnolinguistic Phylogeography” (2014年7月27日～31日) と Universidad Academia Humanismo Cristiano の Escuela de Antropología (チリ) の Dr. Andrea Seelenfreund が主催する国際シンポジウム “Barkcloth and Paper Mulberry in the Asia Pacific Region” (2014年10月6日～19日) へ発表者として招待された。

また、執筆中の論文は、1) ニュージーランドと日本のワラビの利用と歴史の検討、2) フィリピンでの *Colocasia formosana* 発見の報告、3) 野生種・栽培種サトイモの系統を区分するために葉緑体DNAのテストを利用したアジア・太平洋地域の *Colocasia* 200標本の研究結果報告、である。ウェブサイト『Wild Taro Research Project』の維持・更新を続ける。

◎出版物による業績

[論文]

Matthews, P. J.

2014 Memories of New Zealand. In Tokyo Bunkamura Museum of Art (ed.) *Captain Cook's Voyage and Banks' Florilegium*, pp.72-73. Tokyo: Bunkamura (Exhibition Catalogue).

Matthews, P. J. and D. Medhi

2014 Feasibility Study for Field Research: Ethnobotany and Ecology of Wild and Cultivated Aroids in Assam State, Northeast India. *Annual Report on Exploration and Introduction of Plant Genetic Resources (AREIPGR)* 30: 159-183 [査読有].

Matthews, P. J. and D. V. Nguyen

2014 Origins and Development of Taro. In C. Smith (ed.) *Encyclopedia of Global Archaeology* vol.9, pp.7237-7240. Berlin: Springer.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年 7月27～31日 ‘Phylogeography, Ethnobotany, and Linguistics: Issues Arising from Research on the Natural and Cultural History of Taro *Colocasia esculenta* (L) Schott’ (see Matthews et al. 2015, in press), presented at International Symposium: “Migrations and Transfers in Prehistory: Asian and Oceanic Ethnolinguistic Phylogeography, Bern” (Organiser: Maxwell P. Phillips), Linguistics Institute, University of Bern, Switzerland

2014年10月 8日 ‘Historical Ethnobotany of Paper Mulberry in Asia and the Pacific,’ “Keys to Understand the Colonization of Easter Island: Migration patterns of Polynesians to Remote Oceania through Genetic Analysis of Paper Mulberry (*Broussonetia papyrifera*)” (Organiser: Andrea Seelenfreund, Escuela de Antropología), Universidad Academia Humanismo Cristiano, Santiago City, Chile

2014年10月 9日 ‘Ethnobotany and Genetics: Approaches to the Study of Human History in the Pacific,’ “Keys to Understand the Colonization of Easter Island: Migration patterns of Polynesians to Remote Oceania through Genetic Analysis of Paper Mulberry (*Broussonetia papyrifera*)” (Organiser: A. Seelenfreund), Universidad Academia Humanismo Cristian, Santiago City, Chile

2014年10月14日 (public lecture) ‘Ethnobotany and Plant Dispersals: From Southeast Asia to Rapanui,’ “Keys to Understand the Colonization of Easter Island: Migration patterns of Polynesians to Remote Oceania through Genetic Analysis of Paper Mulberry (*Broussonetia papyrifera*)” (Organiser: A. Seelenfreund), William Mulloy Library, Museo Antropológico P. Sebastián Englert, Hangarora, Rapanui, Chile

2014年10月25日 ‘Research on the Natural and Cultural History of Taro *Colocasia esculenta* (L) Schott,’ World Vegetable Center, Tainan City, Taiwan (AVRDC)

2014年12月11日 ‘Origins of Taro: The Phylogeographic Approach,’ “Origin of Japoneseans” (Organiser: Naruya Saito), Sokendai project meeting, Hayama

2015年 1月20日 ‘Taro (*Colocasia esculenta*) as a Useful Wild Vegetable in Asia and the Pacific: Distribution in Natural Habitats and Modified Environments,’ the National Seminar on Environmental Issues, Bhawanipur Anchalik College, Barpeta City, Assam, India

2015年 2月 5日 ‘On the Trail of Taro: *Kochu* in Assam,’ 3rd D. N. Majumdar Memorial Talk, Kanaklal Barua Auditorium, Assam State Museum, Guwahati City, Assam, India

2015年 2月 6日 ‘Research and Research Communication,’ (invited lecture) Karmashree Hiteswar College, Guwahati City

・広報・社会連携活動

2014年12月22日 Gallery talk for Exhibition Opening: “Captain Cook's Voyage and Bank's Florilegium,” 23rd Dec. 2014 – 1st March 2015, Bunkamura Museum of Art Museum, Tokyo

2015年 3月29日 「パプア・ニューギニアのタイムカプセル——ジョージ・ブラウン・コレクション」第377回 みんなくウィークエンド・サロン

◎調査活動

・海外調査

2014年7月24日～8月7日—スイス、イタリア（国際会議「先史期の移住と転移：アジア・オセアニアの民族言語学的系統地理学」に参加、研究セミナーに参加、イタリア考古学コレクションに係る情報・資料収集）

2014年8月21日～9月6日—台湾（中央研究院・世界野菜センターにおいて研究討論に参加及びサトイモ属・コウゾ属植物野外調査）

2014年10月5日～10月20日—チリ（カジノキと太平洋の民族植物学に関する国際ワークショップに参加）

2015年1月15日～2月7日—インド（アッサム地方におけるサトイモ科植物に関する野外調査）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（1人）

・大学院ゼミでの活動

論文ゼミ「比較技術研究演習Ⅰ」

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（A））「辺境少数民族地帯での植物利用および伝統知の遺存と地域発展活動や国際経済の影響評価」（研究代表者：渡邊和男）研究分担者

横山廣子 [よこやま ひろこ] ————— 教授

【学歴】 東京大学教養学部教養学科文化人類学専攻卒（1977）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1981）

【職歴】 東京大学教養学部助手（1981）、東洋英和女学院短期大学国際教養科専任講師（1986）、東洋英和女学院大学人文学部社会科学科助教授（1989）、国立民族学博物館第2研究部助教授（1994）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1994）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2015）、総合研究大学院大学地域文化学専攻長（2015）【学位】 社会学修士（東京大学大学院社会学研究科 1981）【専攻・専門】 文化人類学 1) 雲南省大理ペー族社会の研究、2) 中国における国家とエスニシティに関する研究、3) 中国西南部から東南アジア大陸部における民族集団の移動と包摂に関する研究【所属学会】 日本文化人類学会、東南アジア学会、American Anthropological Association

【主要業績】

[編著]

横山廣子編

2004 『少数民族の文化と社会の動態——東アジアからの視点』（国立民族学博物館調査報告50）大阪：国立民族学博物館。

2001 『中国における民族文化の動態と国家をめぐる人類学的研究』（国立民族学博物館調査報告20）大阪：国立民族学博物館。

[共編]

塚田誠之・瀬川昌久・横山廣子編

2001 『流動する民族——中国南部の移住とエスニシティ』東京：平凡社。

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

中国雲南省とその隣接地域における文化・社会とアイデンティティ

・研究の目的、内容

政治や経済の情勢、あるいは人々をとりまく社会状況の変化とともに、地域の人々の生活や文化・社会がどのように変化し、それとともに自身やその属する集団、社会的カテゴリー、あるいは文化に対する人々の認識や意識がどのように変化するかを現地調査データならびに民族誌などの調査資料、地方志などの歴史的資料に基

づいて実証的に明らかにする。

・成果

近年、中国では世界的な文化遺産指定の進展のなかで、政府による文化政策が急速に推進されている。それが引き金になって各地で文化を活用した観光開発など、文化をめぐる新たな変化と問題が生じている。その問題を考察するための比較事例として、2014年9月に山西大学（中国山西省太原市）にて開催された「人類学と黄土文明」をテーマとする「第13回人類学高級フォーラム」に出席し、「文化遺産保護とコミュニティ住民の参加——富田林寺内町建造物群の事例から」という報告をおこない、日本における町並み保存の事例に関して、比較的的成功をおさめている要因の分析を提示した。また、2012年9月に山西省介休市で開催された国際円卓会議での報告をもとに同様の趣旨で執筆した論文が収録された『黄土文明一亮点』（喬 健・王 懷民主編）が台湾の華芸学術出版社より刊行された（2014年9月）。

雲南省の少数民族の社会と文化の近年の状況に関する民族誌的研究の一端として、民博ビデオテーク番組「回族の婚礼——中国雲南省大理」、「リス語の讃美歌——中国雲南省怒江リス族自治州の教会」、「ミャオ族の聖歌隊——中国雲南省富民県西山教会献堂式」の3本の番組を編集し、完成させた。

◎出版物による業績

[論文]

横山廣子

2014 「博物館以及城市文化遺産的保護与發展」喬 健・王 懷民主編『黄土文明一亮点——介休市保護文化遺産与發展城市文化論述』pp.45-75, 台湾新北市：華芸学術出版社。

[その他]

横山廣子

2014 「おしゃれ心がいっぱい」『月刊みんぱく』38(5)：6-7。

2014 「宗教と文字をめぐる文明・文化の展開」『月刊みんぱく』38(5)：8-9。

2014 「人民服——二〇世紀中葉に中国で隆盛した制服系ファッション」『月刊みんぱく』38(7)：22-23。

2014 「旅いろいろ地球人 共に生きる② 大理のペー族と回族」『毎日新聞』4月17日夕刊。

2014 「旅いろいろ地球人 組織③ 雲南で広がる教会の輪」『毎日新聞』10月9日夕刊。

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

[ビデオテーク]

横山廣子監修

2015 「回族の婚礼——中国雲南省大理」(33分, 2012年撮影, 2015年製作)。

2015 「リス語の讃美歌——中国雲南省怒江リス族自治州の教会」(19分, 1997年, 2010年撮影, 2015年製作)。

2015 「ミャオ族の聖歌隊——中国雲南省富民県西山教会献堂式」(20分, 2010年撮影, 2015年製作)。

・電子ガイドの制作・監修

[中国地域の文化展示]

横山廣子監修

2014 「チベット族男性の衣装」日本語, 英語, 韓国語, 中国語。

2014 「ペー族老年女性の衣装」日本語, 英語, 韓国語, 中国語。

2014 「刺繍図案の切り紙」日本語, 英語, 韓国語, 中国語。

2014 「ペー族の位牌と家型厨子」日本語, 英語, 韓国語, 中国語。

2014 「回族の礼拝」日本語, 英語, 韓国語, 中国語。

2014 「トンパ經典」日本語, 英語, 韓国語, 中国語。

2014 「讃美歌が響く村の教会」日本語, 英語, 韓国語, 中国語。

2014 「酒入れ（改訂）」日本語, 英語, 韓国語, 中国語。

2014 「持仏入れ（改訂）」日本語, 英語, 韓国語, 中国語。

2014 「マニ車（改訂）」日本語, 英語, 韓国語, 中国語。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウム

2014年11月22日 「コメント／第2セッション 国家と社会のディスコース」機関研究成果公開 国際シンポジウム『中国文化の持続と変化——グローバル化の中の家族・民族・国家』国立民族学博物館

- 2015年1月24日 「コメント／第Ⅰ部 中国の有形文化遺産① 住民の眼から見た世界遺産」機関研究成果公開 国際フォーラム『中国地域の文化遺産——人類学の視点から』国立民族学博物館
- ・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年9月27日 「文化遺産保護とコミュニティ住民の参加——富田林寺内町建造物群の事例から」第13回人類学高級フォーラム（第13回人類学高級論壇）、山西大学（中国山西省太原市）
 - ・研究講演

2014年5月9日 「特別講座・中国ムスリム回族の信仰と暮らし——雲南省大理から」産経新聞社主催、みんなく創設40周年記念 カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館9階SPACE9

2014年6月18日 「南詔大理国の末裔、ペー族の結婚式」産経新聞社主催、みんなく創設40周年記念 カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館9階SPACE9

2014年8月20日 「トンパ村——雲南シャングリラに芽生えた文化復興」産経新聞社主催、みんなく創設40周年記念 カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館9階SPACE9
 - ・広報・社会連携活動

2014年5月11日 「雲南省におけるキリスト教の展開」第344回みんなくウィークエンド・サロン

2014年10月27日 「ギャラリートーク ミャオ族の衣装」特別展「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」国立民族学博物館特別展示館
- ◎調査活動
- ・海外調査

2014年9月26日～10月1日—中華人民共和国（中国山西省山西大学で開催される「第13回人類学高級フォーラム（第十三回人類学高級論壇）」に参加）
- ◎大学院教育
- ・指導教員

主任指導教員（2人）
- ◎社会活動・館外活動等
- ・他の機関から委嘱された委員など

日本文化人類学会「学会賞検討委員会」委員

宇田川妙子 [うだがわ たえこ]——准教授

1960年生。【学歴】東京大学教養学部教養学科第一卒（1982）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1984）、東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得退（1990）【職歴】東京大学教養学部助手（1990）、中部大学国際関係学部講師（1992）、中部大学国際関係学部助教授（1995）、国立民族学博物館第3研究部併任助教（1997）、金沢大学文学部助教授（1998）、国立民族学博物館先端民族学研究部併任助教授（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（2002）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2002）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2010）【学位】社会学修士（東京大学大学院社会学研究科1984）【専攻・専門】文化人類学 イタリアおよびヨーロッパ地域の人類学的研究・ジェンダーとセクシャリティ研究・ヨーロッパ近代をめぐる問題群【所属学会】日本文化人類学会、日本女性学会

【主要業績】

[共編]

宇田川妙子・中谷文美編

2007 『ジェンダー人類学を読む——地域別・テーマ別基本文献レビュー』京都：世界思想社。

[論文]

宇田川妙子

2004 「広場は政治に代われるか——イタリアの戸外生活再考」『国立民族学博物館研究報告』28(3)：329-375。

1999 「イタリアの家族論と家族概念」『日伊文化研究』37：11-22。

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

公共性と親密性の再検討と再編

・研究の目的、内容

本研究は、近年さらなる注目を浴びている公共性と親密性（私性）という概念を、理論的に再検討していくことによって、生産的な意味での再編・陶冶につなげていくことを目的とする。具体的には、まずは、これまでの社会科学理論等における両概念の変遷や背景、多様性などを探っていく一方で、個別事例としてはイタリア社会を取り上げて、公共性と親密性という概念・構図が孕む限界や可能性を考察しながら、この概念図式のさらなる再編を試みていくつもりである。

・成果

地域性の問題について、科学研究費補助金（基盤研究（C））「現代イタリア社会におけるローカリティに関する文化人類学的研究」（2014-2017）を取得し、本年はその1年目として、9月半ばから約4週間ローマ近郊での現地調査とローマ大学等での文献調査を行い、イタリアにおける地域性の変容にかんして具体的な資料収集を開始するとともに、理論的考察の基礎となる議論を把握することができた。

『世界民族百科事典』（国立民族学博物館編 丸善出版 2014年6月）の編集委員を務めるとともに、「民族アイデンティティ」（pp.34-35）、「スローフードとローカル」（pp.452-453）、「社会化——養育、世代関係」（pp.660-661）を執筆した。

◎出版物による業績

〔事典項目〕

宇田川妙子

2014 「民族アイデンティティ」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.34-35, 東京：丸善出版。

2014 「スローフードとローカル」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.452-453, 東京：丸善出版。

2014 「社会化——養育、世代関係」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.660-661, 東京：丸善出版。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・広報・社会連携活動

2014年7月11日 「イタリアの家族」NPO 法人大阪府高齢者大学校 世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館

2014年7月18日 「イタリアの地域社会1」NPO 法人大阪府高齢者大学校 世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館

2014年7月25日 「イタリアの地域社会2」NPO 法人大阪府高齢者大学校 世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館

2014年9月9日 「こどもの朝ごはん」ふらっと市民セミナー、ふらっとねやがわ

2014年11月9日 「みんぱくワールドシネマ『海と大陸 TERRAFERMA』」みんぱく映画会

2014年11月14日 「イタリアと食」兵庫県阪神シニアカレッジ尼崎市中小企業センター

2014年11月19日 「地域社会にねづくイタリアの食」産経新聞社主催、みんぱく創設40周年記念 カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館9階SPACE9

2014年12月2日 「イタリアの家族」兵庫県阪神シニアカレッジ尼崎市中小企業センター

◎調査活動

・海外調査

2014年9月20日～10月20日—イタリア（科研「現代イタリア社会におけるローカリティに関する文化人類学的研究」に関わる調査）

2015年3月15日～3月19日—中華人民共和国（中国・広州の食文化調査）

◎大学院教育

・論文審査

予備審査委員（1件）

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

Journal of Ethnic Foods (Korea Food Research Institute) 編集委員

太田心平 [おた しんぺい] 准教授

1975年生。【学歴】大阪大学人間科学部人間科学科社会学専修卒（1998）、大阪大学大学院人間科学研究科人間学専攻博士前期課程修了（2000）、ソウル大学大学院人類学科博士課程単位取得（2003）、大阪大学大学院人間科学研究科人間学専攻博士後期課程修了（2007）【職歴】日本学術振興会特別研究員（PD）（2004）、大阪大学大学院人間科学研究科特任助手（2005）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教（2007）、国立民族学博物館研究戦略センター助教（2010）、アメリカ自然史博物館上級研究員（2011）、国立民族学博物館民族社会研究部助教（2012）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2013）、総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻併任准教授（2014）【学位】博士（人間科学）（大阪大学 2007）、修士（人間科学）（大阪大学 2000）【専攻・専門】社会文化人類学、北東アジア研究【所属学会】日本文化人類学会、韓国文化人類学会（韓国）、朝鮮学会、韓国・朝鮮文化研究会

【主要業績】

[論文]

太田心平

2012 「国家と民族に背いて——アイデンティティの生き苦しさ、韓国を去りゆく人びと」太田好信編『政治的アイデンティティの人類学——21世紀の権力変容と民主化にむけて』pp.304-336, 京都：昭和堂。

2008 「センセーションナリズムへの冷笑——移行の言説としての韓国『民主化』と元労働運動家たちの懐古」石塚道子・田沼幸子・富山一郎編『ポスト・ユートピアの人類学』pp.161-186, 京都：人文書院。

Ota, S.

2006 Ryohan: Anthropology of Knowledge and the Japanese Representation of Korean Yangban under Colonialization. *Korean Cultural Anthropology* 39(2): 85-128 (韓国語)。

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

韓国・朝鮮における文化の統合性と多様性

・研究の目的、内容

韓国・朝鮮の社会は民族的な均質性が高く、その文化も統合的に捉えられている傾向が強い。しかし、社会の表面に色々な対立項が看守できるように、韓国・朝鮮の社会には多様性が秘められている。この研究の目的は、韓国・朝鮮の事例をもとに、社会文化の統合性と多様性の両立状況がいかにより可能であり、それによりもたらされる緊張状態がいかにより文化変容の原動力となっているのかを明らかにすることにある。

この期間には、この研究に2つの柱を立て、それらを中心として研究を推進する。

第1の柱は、1980年代以降の政治文化を対象としたもので、韓国の社会文化が、「民主化」とその前後の過程において、どのようなマクロ・ミクロ双対性をもっていたのかを明らかにするものである。こうした分野の研究は、大きな物語としてのイデオロギーと、小さな物語としての民衆世界という二項対立で論じられてきたが、この研究はそういった先行研究の蓄積を脱構築しようとする。援用するのは、イデオロギーへの着目の反面で軽視されてきたユートピアという概念であり、対象化するのは、民衆に寄り添うあまり蔑ろにされてきた知識人社会である。

第2の柱は、現在進行形の事象を研究対象とするものであり、韓国・朝鮮の社会文化が、世界の博物館展示としていかに編成されるか、そのメカニズムを明らかにするものである。この分野を遂行するため、科学研究費補助金（若手研究(B)）（課題番号：25871066、2013～2016年度）を研究代表者として受諾している。また、アメリカ自然史博物館人類学部門の上級研究員を兼業しているが、この兼業の研究課題はこの分野とする。日米韓の3か国においてフィールドワークをはじめ、並行して文献研究を進め、欧州諸国における比較調査も進めることで、研究の効率化をはかる。

・成果

第1の柱、韓国・朝鮮の社会文化の「民主化」前後のマクロ・ミクロ双対性の研究に関しては、米国で招待講演をおこない、現地の研究者に研究結果を開示するとともに、深い意見交換をおこなった（S. C. Ota “If I Could Get Out of This Place: Utopistics of Newcomer Koreans in the Greater New York Area,” a brownbag lunchtime lecture, New York: American Museum of Natural History, 15, May, 2014.）。ここでは、「絶望移

民」と呼ばれる近年の韓国人移民に対して過去15年以上おこなってきたインタビュー調査および参与観察の結果を総括した。「絶望移民」は、マクロな韓国の国家政治と民族主義思想の観点から、社会問題として非難されがちである。しかし、ミクロな政治心性やユートピア思想の分析をつうじて、彼／彼女らが韓国の国家政治や民族主義思想にむしろ強く貢献してきた過去をもち、かつその延長線上で「絶望移民」となっていくことを立証できた。これは、従来のイデオロギー研究において「転向」と言いあらわされていた運動家たちの一見不可解な行為を、ユートピア研究の立場から必然的段階として解釈しなおすことに成功したという点で、学術的意義をもつ。

また、英文学術誌『Senri Ethnology Studies (SES)』に論文“Collection or Plunder: Vanishing Sweet Memories of South Korea’s Democracy Movement”として成果を寄稿し、本年度中に査読を通過した。ここでは、人文社会科学において1990年代を中心に広く展開された記憶研究をとらえなおし、そうした記憶研究ブームが当事者の記憶の操作につながってきたという過程を明らかにした。これには、記憶研究を脱構築したという学術的意義がある。

第2の柱、韓国・朝鮮の社会文化の現在進行形の編成メカニズムに関しては、科学研究費補助金（若手研究（B））（課題番号：25871066、2013～2016年度）により、韓国および米国で現地調査を進めるとともに、本館の機関研究「民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究——ロシア民族学博物館との国際共同研究」によって、ロシアの事例との比較検討を進めた。その成果は、国際ワークショップで学術発表をおこない、ブローディングスとして公刊した（S. C. Ota “Failure Teaches Success: A Miscommunication between Source Community and Researchers,” International Workshop “Collaboration with Source Communities in the Exhibition of Collections and Media in Ethnological Museums,” Suita, Osaka: National Museum of Ethnology, 10 March, 2015）。ここでは、現代韓国において国史学者、民俗学者、人類学者が、韓国の表象するべき「真正な文化」をいかにして決定し、そこにどのような試行錯誤や、当事者との葛藤がみられるのかを事例報告した。これは、英文ではほとんどない韓国・朝鮮の旧在地土族層に関する事例報告である。より影響力あるメディアにて今後に公刊しなおすことにより、世界の韓国・朝鮮研究はもちろん、韓国における旧土族層の当事者たちにも貢献できるものと期待できる。この国際ワークショップでは、そのために必要な内容のピアレビューとブラッシュアップを受けることも出来た。

◎出版物による業績

[論文]

Ota, S.

2014 Failure Teaches Success: A Miscommunication between Source Community and Researchers. In *Proceedings of International Workshop “Collaboration with Source Communities in the Exhibition of Collections and Media in Ethnological Museums,”* pp.41-44, Osaka: National Museum of Ethnology.

[事典項目]

太田心平

2014 「『人種』のるつぼ——アメリカ」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.68-69, 東京：丸善出版。

2014 「ユートピア」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.558-559, 東京：丸善出版。

2014 「グローバル・シティ」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.586-587, 東京：丸善出版。

[その他]

太田心平

2014 「朝鮮半島から世界へ① ニューヨークには韓国語がいっぱい」『毎日小学生新聞』4月19日。

2014 「朝鮮半島から世界へ② キムチとわかちあい」『毎日小学生新聞』4月26日。

2014 「旅・いろいろ地球人 共に生きる④ 多様化する婚礼衣装」『毎日新聞』5月1日夕刊。

2014 「マトリックス展示！——新しい『朝鮮半島の文化』展示」『月刊みんぱく』38(6)：2-4。

2015 「旅・いろいろ地球人 信じる⑦ アカ狩りにあった教会」『毎日新聞』3月5日夕刊。

◎映像音響メディアによる業績

・電子ガイドの制作・監修

[朝鮮半島の文化展示]

太田心平監修

2014 『旧制服』日本語, 英語, 韓国語, 中国語。

- 2014 『新制服』 日本語, 英語, 韓国語, 中国語。
- 2014 『折衷婚礼服』 日本語, 英語, 韓国語, 中国語。
- 2014 『セマウル運動』 日本語, 英語, 韓国語, 中国語。
- 2014 『大型書店』 日本語, 英語, 韓国語, 中国語。
- 2014 『移民・留学』 日本語, 英語, 韓国語, 中国語。
- 2014 『国家試験準備 (考試)』 日本語, 英語, 韓国語, 中国語。
- その他、電子ガイド韓国語校閲合計34件。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2015年3月10日 ‘Failure Teaches Success: A Miscommunication between Source Community and Researchers,’ International Workshop “Collaboration with Source Communities in the Exhibition of Collections and Media in Ethnological Museums,” National Museum of Ethnology (機関研究「民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究——ロシア民族学博物館との国際共同研究」(代表: 佐々木史郎))

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年11月1日 「社会的なもの (the social) 依存症の症例とその予後の事例報告」 東アジア人類学再考研究会、高知県立大学

・みんぱくゼミナール

2014年6月21日 「現在進行形の海外移民——韓国を去りゆく人びとの胸のうち」 第433回みんぱくゼミナール

・研究講演

2014年5月15日 ‘If I Could Get Out of This Place: Utopistics of Newcomer Koreans in the Greater New York Area,’ A Brownbag Lunchtime Lecture, New York: American Museum of Natural History

・研究公演

2014年10月13日 「モンゴル秋祭り——ナマリーンバヤル」 在大阪モンゴル総領事館主催、国立民族学博物館

・広報・社会連携活動

2014年5月24日 私立大阪桐蔭中学校課外学習

2014年6月15日 「韓国文化の変わった点と変わらない点」 第348回みんぱくウィークエンド・サロン

2014年6月18日 MMP ステップアップ講座

2014年6月29日 MMP 新規募集にかかる養成研修

2014年7月13日 愛知県立旭丘高等学校課外学習

◎調査活動

・海外調査

2014年4月17日～5月18日—アメリカ合衆国 (標本管理者のエージェンシーに関する調査研究)

2014年7月15日～10月11日—韓国、アメリカ合衆国 (標本管理者のエージェンシーに関する調査研究)

2014年12月4日～2015年1月24日—アメリカ合衆国 (標本管理者のエージェンシーに関する調査研究)

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

1年生ゼミ テーマシリーズ: 知識人類学概論

・審査委員

予備審査委員 (1件)

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金 (若手研究 (B)) 「博物館展示の再編過程の国際比較による『真正な文化』の生成メカニズムの解明」 研究代表者、機関研究「文化遺産の人類学——グローバル・システムにおけるコミュニティとマテリアリティ」 (研究代表者: 飯田 卓) 研究分担者、機関研究「民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究——ロシア民族学博物館との国際共同研究」 (研究代表者: 佐々木史郎) 研究分担者、人間文化研究機構地域研究ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア」ワーキングメンバー

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

アメリカ自然史博物館人類学部門（アメリカ合衆国）上級研究員

・非常勤講師

大阪大学大学院人間文化研究科「政治経済の人類学特定演習／特別演習」、宮崎公立大学「韓国文化論」（集中講義）

佐藤浩司 [さとう こうじ] ————— 准教授

【学歴】 東京大学工学部卒（1977）、東京大学大学院修士課程修了（1983）、東京大学大学院博士課程単位取得（1989）

【職歴】 国立民族学博物館助手（1989）、国立民族学博物館助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2000）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2008）

【学位】 工学修士（東京大学工学部 1989）【専攻・専門】 建築史学、民族建築学【所属学会】 建築史学会、民俗建築学会、家具道具室内史学会

【主要業績】

[編著]

佐藤浩司編

1998～1999 『シリーズ建築人類学《世界の住まいを読む》1～4』 京都：学芸出版社。

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

東南アジア木造建築史の再構築

・研究の目的、内容

東南アジアの木造建築史を概観するための資料の作成、東南アジア史の再構築。

・成果

東南アジアの木造建築を読み解くための資料を作成中。ホームページにて逐次公開している。<http://www.sumai.org>

◎調査活動

・海外調査

2014年6月28日～7月6日—インドネシア（ニアス島の建築文化に関する調査研究）

2014年8月29日～9月26日—インドネシア（インドネシアの建築文化に関する調査研究）

三島禎子 [みしま ていこ] ————— 准教授

1963年生。【学歴】 セネガル共和国国立応用経済学院社会コミュニケーション学部卒（1989）、津田塾大学大学院国際関係学研究科博士前期課程修了（1992）、パリ第5大学大学院社会科学研究所第2課程修了（1992）、パリ第5大学大学院社会科学研究所第3課程修了（1993）【職歴】 国立民族学博物館第3研究部助手（1995）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2003）【学位】 D. E. A. Sci. Soc（パリ第5大学大学院社会科学研究所 1993）、M. Soc.（パリ第5大学大学院社会科学研究所 1992）、国際関係学修士（津田塾大学大学院国際関係学研究科 1992）【専攻・専門】 文化人類学（西アフリカ研究）【所属学会】 アフリカ学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[編著]

Charbit, Y. et T. Mishima (éds.)

2014 *Question de migrations et de santé en Afrique sub-saharienne*. Paris: L'Harmattan.

[論文]

Mishima, T.

- 2014 Anthropologie des migrations internationales des Soninké : Formation et transmission de la richesse. In Y. Charbit et T. Mishima (éds.) *Question de migrations et de santé en Afrique sub-saharienne*. Paris: L'Harmattan.

三島禎子

- 2011 「民族の離散と回帰——ソニンケ商人の移動の歴史と現在」駒井 洋監修・編、小川充夫編『グローバル・ディアスポラ』pp.105-130, 東京：明石書店。

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アフリカ商業民の財の形成と継承に関する文化人類学的研究

・研究の目的、内容

アフリカ商業民によるアジア・アフリカ間貿易は、中国経済の拡大とともに今日のアフリカ経済の主要な現象のひとつになっている。西アフリカに故地をもつソニンケ民族は、地球規模の民族ネットワークでつながり、他の集団に先駆けてこの新しい経済機会をとらえた。その経済倫理には民族文化の伝統が受け継がれている。

10世紀以上前から商業民として知られるソニンケ民族は、民族文化とともにある種の「財」を継承してきたと考えられる。この有形・無形の「財」の本質と、継承の形態について調査し、移動と商業を生業とするソニンケの民族文化について考察を深めるのが本研究の目的である。

以下2件の科学研究費補助金において現地調査をおこなうとともに、文献調査では歴史的背景を把握する。
基盤研究(A)「環太平洋地域における移住者コミュニティの動態の比較研究——近年の変遷に注目して」(2011～2014年度、代表：栗田和明)

基盤研究(B)「日中韓在住アフリカ人の生活戦略とアジア——アフリカ関係の都市人類学的研究」(2014～2016年度、代表：和崎春日)

・成果

2014年3月1日～2日に開催した国際シンポジウム『個人・家族・国家のゆくえ——文化人類学と人口学からの学際的アプローチ』(人間文化研究機構の機構長裁量経費)の成果をとりまとめ、パリ・デカルト大学・人口開発研究所と共同で下記の本を出版した。

◎出版物による業績

[編著]

Charbit, Y. et T. Mishima (éds.)

- 2014 *Question de migrations et de santé en Afrique sub-saharienne*. Paris: L'Harmattan.

[論文]

Mishima, T.

- 2014 Anthropologie des migrations internationales des Soninké: Formation et transmission de la richesse. In Y. Charbit et T. Mishima (éds.) *Question de migrations et de santé en Afrique sub-saharienne*. Paris: L'Harmattan.

- 2014 Anthropological Analysis on Africa-Asia Trade: Dynamics of an Ethnic Group. In *Proceedings of International Symposium on Global Migration and Transnational Activities in Pacific Rim*, pp.26-34. Tokyo: Rikkyo Institute for Peace and Community Studies.

[その他]

三島禎子

- 2014 「『モノを見る目』といういかがわしさ」『季刊民族学』150: 43。

- 2014 Individual, Family and State: Interdisciplinary Approach from Anthropology and Demography on International Migration and Health, International Symposium, March 1-2, 2014. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 38: 13.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2014年10月11日 「コメント」『ネルソン・マンデラ記念シンポジウム 南アフリカの過去と現在——ネルソン・

マンデラから続く道』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年10月15日 ‘Anthropological Analysis on Africa-Asia Trade: Dynamics of an Ethnic Group,’
International Symposium “Global Migration and Transnational Activities in the Pacific
Rim,” National Taiwan University

・広報・社会連携活動

2014年7月13日 「アフリカの布からみる世界の経済」第351回みんぱくウィークエンド・サロン

2014年12月5日 「一夫多妻のからくりと女性の一生——セネガルの婚姻事情」NPO 法人大阪府高齢者大学校
世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館

2015年1月15日 「アフリカ式ビジネス——移動と商業」NPO 法人大阪府高齢者大学校 世界の文化に親しむ
科、大阪市教育会館

2015年2月20日 「アフリカの布と商人——植民地交易から現代の国際貿易まで」園田・みんぱく連携講座「変
化する現代世界」園田女子学園大学

◎調査活動

・海外調査

2014年10月12日～10月16日—台湾（台北大学における国際シンポジウムへ参加）

2015年2月2日～2月10日—大韓民国、シンガポール、ベトナム（アジア諸都市におけるアフリカ商人の生活
実態についての調査及びアジアにおけるソニンケ商人のネットワークについての
調査）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（1人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクト
の代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（A））「環太平洋地域における移住者コミュニティの動態の比較研究——近年の変
遷に注目して」（研究代表者：栗田和明）研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究（B））「日中韓在住アフリ
カ人の生活戦略とアジア——アフリカ関係の都市人類学的研究」（研究代表者：和崎春日）研究分担者

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

Revue Européenne des Migrations Internationales 編集委員（アジア担当）、『アフリカ研究』編集委員

吉岡 乾 [よしおか のぼる]—————助教

1979年生。【学歴】東京外国語大学外国語学部ウルドゥー語学科卒（2003）、東京外国語大学大学院地域文化研究科
博士前期課程（アジア第三専攻）修了（2007）、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程修了（2012）【職
歴】国立国語研究所言語対照研究系プロジェクト奨励研究員（2013）、日本学術振興会特別研究員PD（2013）、東京
外国語大学世界教養プログラム非常勤講師（2013）、国立民族学博物館民族社会研究部助教（2014）【学位】博士（学
術）（東京外国語大学 2012）、修士（言語学）（東京外国語大学 2007）【専攻・専門】言語学、記述言語学、ブルシ
ヤスキー語、ドマーキ語、シナー語、南アジア（パキスタン）研究【所属学会】日本言語学会、関西言語学会、南
アジア学会

【主要業績】

[博士論文]

Yoshioka, N.

2012 A Reference Grammar of Eastern Burushaski. 東京外国語大学大学院地域文化研究科。

[論文]

吉岡 乾

2014 「格配列パターンを決める動詞的要素と名詞的要素——パキスタンの言語を対照して」『思言：東京外国語
大学記述言語学論集』10：159-202。

Yoshioka, N.

2010 The Interrogative Element in Burushaski. *Language, Area and Cultural Studies* 16: 383-391.

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

北パキスタン諸言語の記述言語学的研究

・研究の目的、内容

北パキスタンは幾つもの系統の言語が多々入り乱れている地域であるが、それらの言語の記述研究はこれまでも少なく、今現在も研究者が多くない状況にある。本研究は、ギルギット・バルティスタン自治州フンザ・ナゲル県モミナバード村などで話されている、消滅の危機にある言語であるドマーキ語を中心にしつつ、ブルシャスキ語、シナー語といった周辺言語も併せて、現地調査によって得られたデータを基に言語記述をしていくことを目的とする。

・成果

2014年度はシナー語の調査にも着手し、北パキスタン諸言語の最大勢力である印欧語インド・イラン語派のいわゆる「ダルド語群」の研究にも本格的に乗り出した。これにより、系統的孤立語のブルシャスキ語、インド語派中央インドグループのドマーキ語、「ダルド語群」のシナー語と、対照研究にも第三の系統グループが加わり、更に相同相異を考察できる環境が整ってきた。成果は、以下に示すように、論文、学会発表の形で公表した。

◎出版物による業績

〔論文〕

吉岡 乾

2014 「格配列パターンを決める動詞的要素と名詞的要素——パキスタンの言語を対照して」『思言：東京外国語大学記述言語学論集』10：159-202 [査読有]。

2014 「ブルシャスキ語の希求法不定詞とは何か」『思言：東京外国語大学記述言語学論集』10：223-233 [査読有]。

〔その他〕

吉岡 乾

2014 「旅・いろいろ地球人 生き物⑧ その角が格好いいから」『毎日新聞』7月18日夕刊。

2014 「名詞化とその周辺に存在する諸問題——Malchukov (2006)の枠組みをもとにして（特集「名詞化」）」『思言：東京外国語大学記述言語学論集』10：205-209。

2015 「ヒトの隣にヒツジ・ヤギ——パキスタン北部」『みんぱく e-news』163 (<http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/163>)。

2015 「パフラヴィー文字と日本のかな・漢字」庄司博史編『世界の文字事典』p.385, 東京：丸善出版。

2015 「アラビア系文字の広がる世界」庄司博史編『世界の文字事典』p.395, 東京：丸善出版。

2015 「異聞逸聞 山奥で飲んで食う人たち」『月刊みんぱく』39(2)：21。

Yoshioka, N.

2014 Yak and Pig, Glacier and Sea. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 39: 1-3.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年6月7日 「ブルシャスキ語の動詞連体修飾構造」日本言語学会第148回大会、法政大学

2014年6月8日 「ブルシャスキ語の希求法不定詞とはなにか」日本言語学会第148回大会、法政大学

2014年9月13日 (with Peter Hook and Omkar Koul) 'Impersonal Causal Expressions: Searching for the likes among Kashmiri, Shina of Gilgit, and Burushaski,' 47th Conference of Societas Linguistica Europaea, Adam Mickiewicz University, Poznań

・みんぱく研究懇談会

2014年10月29日 「何が格を決めるのか——動詞的要素と名詞的要素」第261回みんぱく研究懇談会

・展示

年末年始展示イベント「ひつじ」、本館展示新構築「南アジア」

・広報・社会連携活動

2015年3月1日 「言語の調査とはどういうものか」第374回みんなくウィークエンド・サロン

◎調査活動

・海外調査

2014年7月28日～8月29日—パキスタン・イスラム共和国（プルシャスキー語、ドマーキ語及びシナー語調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点（代表者：三尾 稔）拠点構成員、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究「複雑系としての言語：運用に基づく文法理論の可能性」（代表者：中山俊秀）共同研究員

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

博士論文審査委員（Faculty of Higher Studies, National University of Modern Languages, Pakistan）

民族文化研究部

池谷和信 [いけや かずのぶ] ————— 部長(併)教授

1958年生。【学歴】東北大学理学部地球科学系卒（1981）、筑波大学大学院環境科学研究科修士課程修了（1983）、東北大学大学院理学研究科博士課程単位取得退学（1990）【職歴】北海道大学文学部附属北方文化研究施設助手（1990）、国立民族学博物館第1研究部助手（1995）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学先導科学研究科助教授（1999）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2007）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長（2009～2010）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2014）【学位】理学博士（東北大学大学院理学研究科 2003）【専攻・専門】環境人類学・人文地理学・地球学・生き物文化誌学 1) 世界の狩猟採集文化、家畜文化の研究、2) 植民地時代における民族社会の変容に関する研究、3) 地球環境問題および地球環境史に関する研究【所属学会】日本文化人類学会、日本アフリカ学会、日本地理学会、日本沙漠学会、人文地理学会、日本人類学会、日本熱帯生態学会、日本民俗学会、生き物文化誌学会、ヒトと動物の関係学会、国際人類学民族学連合（IUAES）、アメリカ人類学会（American Anthropological Association）、日本生態学会、日本動物考古学会、東北地理学会、日本養豚学会、環境社会学会、比較文明学会、生態人類学会、日本タイ学会

【主要業績】

[単著]

池谷和信

2003 『山菜採りの社会誌——資源利用とテリトリー』宮城：東北大学出版会。

2002 『国家のなかでの狩猟採集民——カラハリ・サンにおける生業活動の歴史民族誌』（国立民族学博物館研究叢書4）大阪：国立民族学博物館。

[編著]

池谷和信編

2009 『地球環境史からの問い——ヒトと自然の共生とは何か』東京：岩波書店。

【受賞歴】

2007 日本地理学会優秀賞

1998 日本アフリカ学会研究奨励賞

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

狩猟採集民の定住化に関する研究

・研究の目的、内容

人類の歴史のなかで定住化は、大きな社会変化を導いたといわれる。ある研究者は、「定住革命」と呼ぶ。本研究では、遊動時代と比べて、定住化はどのような変化を与えたのかを把握する。事例としては狩猟採集民に限定することなく、人類全体にとっての定住化の意味について考える。

・成果

2014年5月の国際人類学民族学・中間会議（IUAES、千葉市幕張開催）のなかで、「Comission of Nomadic Peoples（遊動民コミッション）」のもとに、人類の定住化に関わるパネルをもうけた。そこでは、狩猟採集民を中心として、焼畑農耕民、牧畜民、商業民なども入れて定住化の過程とその要因に関する議論を行った。その成果は、2015年度に論文集として刊行される予定である。

◎出版物による業績

〔単著〕

池谷和信

- 2014 『人間にとってスイカとは何か——カラハリ狩猟民と考える』（フィールドワーク選書5）京都：臨川書店。

〔論文〕

池谷和信

- 2014 「世界の家畜飼養の起源——ブタ遊牧からの視点」池内 了編『「はじまり」を探る』pp.105-126, 東京：東京大学出版会。
2015 「野鶏から家鶏への道を求めて——熱帯アジアの森から世界の台所へ」『在来家畜研究会報告』27：93-104。

Ikeya, K.

- 2015 Pig Farming at Kinshasa in the Democratic Republic of the Congo. *African Study Monographs. Supplementary Issue* 51: 107-118.

Faruque, M. O., K. Ikeya and T. Amano

- 2015 「Present Status of Gayal in the Home Tract in Bangladesh」『在来家畜研究会報告（Rep. Soc. Res. Native Livestock）』27: 35-46。

〔事典項目〕

池谷和信

- 2014 「希少資源と紛争」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.94-95, 東京：丸善出版。
2014 「ノマド」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.324-325, 東京：丸善出版。
2014 「環境・資源」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』p.609, 東京：丸善出版。
2014 「環境と民族」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.610-611, 東京：丸善出版。
2014 「環境と災害」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.644-645, 東京：丸善出版。

〔その他〕

池谷和信

- 2014 「人と家畜のエピソード25 現代に生きづく牛車やロバ車」『JVM 獣医畜産新報』67(4)：245。
2014 「人と家畜のエピソード26 ニホンミツバチの養蜂」『JVM 獣医畜産新報』67(5)：325。
2014 「人と家畜のエピソード27 カラハリ砂漠の山羊」『JVM 獣医畜産新報』67(6)：405。
2014 「旅いろいろ地球人 生き物① 古代から生き続ける豚」『毎日新聞』6月5日夕刊。
2014 「人と家畜のエピソード28 犬と人の絆」『JVM 獣医畜産新報』67(7)：548。
2014 「世界の動物利用の諸相——地球環境史の視点から」食の文化フォーラム編『野生から家畜へ 第1回 狩猟と家畜の歴史』pp.16-20, 東京：味の素の文化センター。
2014 「掛谷さんと私の修論」『生態人類学会ニュースレター』No.20 別冊（特集 掛谷誠氏追悼）：40-41。
2014 「人と家畜のエピソード29 西アフリカの牛と人」『JVM 獣医畜産新報』67(8)：617。
2014 「みんなく世界の旅 アジアのにわとり 東南アジアのにわとりの祖先」『毎日小学生新聞』8月16日。
2014 「人と家畜のエピソード30 ゾウと人との多様なかわり」『JVM 獣医畜産新報』67(9)：645。
2014 「人と家畜のエピソード31 世界最大級の角を持つ牛——東アフリカのウガンダ」『JVM 獣医畜産新報』67(10)：725。
2014 「アフリカビーズ研究の展開」『季刊民族学』150：88-92。
2014 「人と家畜のエピソード32 ビクターニャからアルパカへ」『JVM 獣医畜産新報』67(11)：805。

- 2014 「人類にとって定住化とは何か——2014年国際人類学民族学科学連合中間会議の成果から」『民博通信』147：12-13。
- 2014 「国立民族学博物館における食文化の展示」『「世界の食文化研究と博物館」要旨集』p.11, 大阪：国立民族学博物館。
- 2015 「人と家畜のエピソード33 ダチョウ——野生から『家畜』へ」『JVM 獣医畜産新報』67(12)：885。
- 2015 「虫と歩む人類史」『月刊みんぱく』39(3)：2-3。
- 2015 「グローバル的視野に立った〈鶏と人の研究〉のあり方——第12回国際動物考古学会に参加して」『家畜資源研究会報』14：2-7。
- 2015 「人と家畜のエピソード34 羊と人とのかかわり」『JVM 獣医畜産新報』68(1)：5。
- 2015 「人と家畜のエピソード35 水牛の移動牧畜」『JVM 獣医畜産新報』68(2)：85。
- 2015 「岩の作品が残されたナミビアの荒野——岩石彫刻画、岩絵、奇岩のギャラリー」(写真解説文)『Newton』2015(4)：82-90。
- 2015 「人と家畜のエピソード36 アッサムのイノシシと豚」『JVM 獣医畜産新報』68(3)：165。

Ikeya, K.

- 2014 Human History of Nomadism and Sedentarism among Nomadic Peoples. In the Organizing Committee of the IUAES 2014 (ed.) *Conference Programme* (Abstract of IUAES 2014 with JASCA) p.79. Makuhari Messe, Chiba, Japan.
- 2014 The Taming Process of Red Junglefowl in Southeast Asia. *Abstract of ICAZ* (International Council for Archaeozoology) p.81, San Rafael, Argentina.

Nakai, S. and K. Ikeya

- 2014 Sedentarizing Process and Socio-economical Changes of the Mlabri Hunter-gatherer in Thailand. In the Organizing Committee of the IUAES 2014 (ed.) *Conference Programme* (Abstract of IUAES 2014 with JASCA), p.86. Makuhari Messe, Chiba, Japan.

◎映像音響メディアによる業績

・TV・ラジオ番組などの制作・監修

[TV 番組]

池谷和信監修

- 2014 「ドラケンスバーク公園 (南アフリカ・レソト)」『THE 世界遺産』TBS (6月15日放送)。
- 2014 「インドネシアのコロワイ族」『所さんのビックリ村7』テレビ東京 (12月27日放送)。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

- 2014年10月11日 「趣旨説明」『南アフリカの過去と現在——ネルソン・マンデラから続く道』講演会「南アフリカの都市化」、国立民族学博物館
- 2014年10月11日 「ケープタウンのカエリチャ地区での20年 (1994-2014) ——掘っ建て小屋のくらしの真実を探る」『南アフリカの過去と現在——ネルソン・マンデラから続く道』講演会「南アフリカの都市化」、国立民族学博物館
- 2014年12月7日 「国立民族学博物館における食文化の展示」『世界の食文化研究と博物館』(国立民族学博物館・立命館大学学術交流協定締結記念国際シンポジウム)、国立民族学博物館

・共同研究会

- 2014年4月26日 「趣旨説明——アジアの森や海と狩猟採集民」『熱帯の「狩猟採集民」に関する環境史的研究——アジア・アフリカ・南アメリカの比較から』
- 2014年7月26日 「狩猟採集民の定住度と社会変化」『熱帯の「狩猟採集民」に関する環境史的研究——アジア・アフリカ・南アメリカの比較から』
- 2015年2月8日 「趣旨説明——これまでの共同研究会」『熱帯の「狩猟採集民」に関する環境史的研究——アジア・アフリカ・南アメリカの比較から』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2014年4月19日 「熱帯林におけるタンパク質の獲得について——コンゴ民主共和国とウガンダの比較」中部アフリカ研究会、京都大学
- 2014年5月15日 ‘Human History of Nomadism and Sedentarism among Nomadic Peoples. Sedentarization and Concentration among Nomadic Peoples.’ (Commission on Nomadic Peoples/NME

- Panel) IUAES, Makuhari Messe, Chiba, Japan
- 2014年 5月15日 (Nakai, S. and K. Ikeya) ‘Sedentarizing Process and Socio-economical Changes of the Mlabri Hunter-gatherer in Thailand.’ IUAES, Makuhari Messe, Chiba, Japan
- 2014年 5月17日 Comments for the panel entitled ‘Hunting, Animal Welfare, and Defence against Wildlife Attack.’ (organized by A. Nobayashi) IUAES, Makuhari Messe, Chiba, Japan
- 2014年 6月 7日 「世界の動物利用の諸相——地球環境史の視点から」『野生から家畜へ 第1回 狩猟と家畜の歴史』第1回食の文化フォーラム、味の素食の文化センター
- 2014年 6月21日 Comments for the panel entitled ‘Indigenous’ Space and Local Politics (organized by J. Lawy and T. Osawa), Association of Social Anthropologists of the UK and Commonwealth Decennial Conference, Edinburgh, UK.
- 2014年 8月18日 Humanity group in HCMR(Japanese side), Tokyo HCMR Seminar, Toshi Center Hotel, Tokyo, Japan
- 2014年 8月24日 「リスクへの対応——三陸海岸での集落と生業の変化」小規模経済プロジェクト 第1回全体会議、地球環境学研究所
- 2014年 9月13日 「山田町でのシンポジウムに対するコメント」東北地理学会 第1回研究集会（公開シンポジウム『山田での東日本大震災を検証する』）、山田町役場
- 2014年 9月14日 「大槌町での民俗芸能と地域復興」東北地理学会 第1回研究集会（公開シンポジウム『大槌での東日本大震災を検証する』）、大槌町公民館
- 2014年 9月15日 「大槌町での民俗芸能の現状（巡検案内）」東北地理学会 第1回研究集会
- 2014年 9月23日 ‘The Taming Process of Red Junglefowl in Southeast Asia.’ 12th International Conference of Archaeozoology, San Rafael, Argentina
- 2014年10月29日 「世界の再構成にむけて」（コスモス国際賞受賞者・フィリップ・デスコラ教授との対談）公益財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会、大丸心斎橋劇場
- 2014年12月 1日 「アフリカの環境史——象牙、ダチョウの羽、キツネの毛皮」アフリカ史とグローバルヒストリー研究会（代表：竹沢尚一郎）、国立民族学博物館
- 2015年 1月13日 ‘Kelp (Konbu) and Abalone Collecting in Small Fishing Communities after the Great East Japan Earthquake.’ 小規模経済プロジェクト第2回全体会議、総合地球環境学研究所
- 2015年 1月24日 「趣旨説明——野生動物から家畜への道」人と動物との関係学会 第106回月例会 あべのハルカス近鉄本店
- 2015年 1月24日 「家畜化と人類文化史——イノシシの事例から」人と動物との関係学会 第106回月例会 あべのハルカス近鉄本店
- 2015年 1月24日 「野生動物から家畜への道（総合討論での司会）」人と動物との関係学会 第106回月例会 あべのハルカス近鉄本店
- 2015年 1月25日 「アフリカの環境史——象牙、ダチョウの羽、キツネの毛皮」新しい世界史研究会（アフリカ史とグローバルヒストリー）、国立民族学博物館
- 2015年 2月 7日 「文化としての豚（総合討論での司会）」生き物文化誌学会・沖縄例会、沖縄子供の国
- 2015年 3月20日 「水牛飼育とその生産物」『料理の環境文化史』成果報告会（代表：野林厚志）、国立民族学博物館
- 2015年 3月27日 「インド・アッサム州における豚・水牛飼育について」、第13回熱帯家畜利用研究会、馬の博物館（横浜市）
- 2015年 3月28日 「東日本大震災以降の三陸の漁村における天然昆布とアワビの採取について」日本地理学会春季大会、日本大学文理学部
- ・みんぱくゼミナール
- 2015年 2月21日 「遊牧の起源——バングラデシュの豚と人のかかわり」第441回みんぱくゼミナール
- ・研究講演
- 2014年 5月21日 「美しさをもとめて——ビーズをめぐる人類の旅」産経新聞社主催、みんぱく創設40周年記念 カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館 9階 SPACE 9
- 2014年 6月 3日 「ブタの文化誌」阪神シニアカレッジ、尼崎市中小企業センター
- 2014年 6月10日 「ラクダの文化誌」阪神シニアカレッジ、尼崎市中小企業センター

- 2014年10月15日 「人類の美の追求——ガラスビーズと鳥の羽の世界」連続講座「みんぱく × ナレッジキャピタル——イメージの力をさぐる」グランフロント大阪ナレッジキャピタル1F CAFE Lab.
- 2014年10月22日 「人間は何を食べてきたか——アフリカの食から考える」産経新聞社主催、みんぱく創設40周年記念 カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館9階SPACE 9
- 2015年1月23日 「ニワトリの文化誌——野鶏から家鶏への道を求めて」阪神シニアカレッジ、尼崎市中小企業センター
- 2015年2月6日 「生き物文化誌① ニワトリと人のかかわり」NPO 法人大阪府高齢者大学校 世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館
- 2015年2月13日 「生き物文化誌② ラクダと人のかかわり」NPO 法人大阪府高齢者大学校 世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館
- 2015年2月27日 「白熱教室」NPO 法人大阪府高齢者大学校 世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館
- 2015年3月7日 「いま、焼畑を考える——自然破壊か、それとも共生か」第440回国立民族学博物館友の会講演会

・展示

常設展示 日本（3点の展示物を変更）

・広報・社会連携活動

- 2014年10月11日 『遠い夜明け』みんぱく映画会（「南アフリカの過去と現在——ネルソン・マンデラから続く道」関連）
- 2015年1月16日 協力『グッド！モーニング』テレビ朝日
- 2015年2月23日 協力『ちちんぷいぷい』毎日放送
- 2015年3月4日 出演『中西哲生のクロノス』TOKYO FM
- 2015年3月8日 「鶏からみた世界史——アジアの森から世界の台所へ」第375回みんぱくウイークエンド・サロン

◎調査活動

・国内調査

- 2014年5月30日～6月1日ー鹿児島県徳之島、奄美大島（イノシシと人のかかわりに関する研究）
- 2014年6月13日～6月15日ー岩手県大槌町（小規模社会の持続可能性に関する研究）
- 2014年8月17日～8月21日ー岩手県大槌町（小規模社会の持続可能性に関する研究）
- 2014年9月12日～9月16日ー岩手県山田町、大槌町（三陸の漁村における資源利用に関する研究）
- 2014年10月18日～10月21日ー岩手県山田町（三陸の漁村における資源利用に関する研究）
- 2014年12月10日～12月15日ー岩手県山田町（三陸の漁村における資源利用に関する研究）
- 2015年2月28日～3月3日ー岩手県山田町（三陸の漁村における資源利用に関する研究）

・海外調査

- 2014年6月18日～6月25日ー英国（英国社会人類学会議に参加及び家畜資料の収集）
- 2014年8月8日～8月15日ーバングラディッシュ、タイ（モンスーンアジアにおける家畜飼育に関する資料収集）
- 2014年8月26日～9月3日ー南アフリカ（熱帯の資源利用に関する研究）
- 2014年9月19日～9月30日ーアルゼンチン（国際動物考古学会議での研究報告及び自然資源利用に関する資料収集）
- 2014年11月8日～11月19日ーケニア（東アフリカにおける高地文明に関する調査研究）
- 2014年12月22日～12月29日ーインド（人と家畜との関わりについての研究）
- 2015年1月30日～2月5日ーモンゴル（乳文化に関する資料収集）
- 2015年2月13日～2月19日ーラオス（狩猟採集民の料理に関する資料収集）
- 2015年3月8日～3月12日ーインド、タイ（熱帯の家畜飼育文化に関する資料収集）
- 2015年3月15日～3月17日ー中華人民共和国（中国の食文化に関する資料収集）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（2人）副指導教員（3人）

・大学院ゼミでの活動

1年生ゼミ テーマシリーズ：環境人類学

・論文審査

博士論文審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（A））「熱帯の牧畜における生産と流通に関する政治生態学的研究」研究代表者、（基盤研究（A））「アフリカ熱帯林におけるタンパク質獲得の現状」（研究代表者：木村大治）研究分担者、（基盤研究（A））「熱帯高地における環境開発の地域間比較研究——『高地文明』の発見に向けて」（研究代表者：山本紀夫）研究分担者、（基盤研究（A））「乳文化の視座からの牧畜論考——全地球的地域間比較による新しい牧畜論の創生」（研究代表者：平田昌弘）研究分担者、（基盤研究（B））「多起源的家畜化モデルの構築と学融合型資料収蔵システムの確立」（研究代表者：遠藤秀紀）研究分担者、総合研究大学院大学・学融合研究事業「料理の環境文化史：生態資源の選択、収奪、消費の過程が環境に与えるインパクト」（代表者：野林厚志）研究分担者、「失われた生態システムの多様性解明に向けた古代DNA研究の展開」（代表者：足立 淳）研究分担者、総合地球環境学研究所研究プロジェクト「地域に根ざした小規模経済活動と長期的持続可能性——歴史生態学からのアプローチ」（代表者：羽生淳子）研究分担者、総合地球環境学研究所研究プロジェクト「在地の農業における環境知の結集」（代表者：舟川晋也）研究分担者、家禽資源研究会（HCMR）研究分担者、牛車研究会（代表者：池内克史）研究分担者

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

Nomadic Peoples, *Berghahn Journal* (UK) 編集委員、*Museum Anthropology* (USA) 編集委員、*Tribes and Tribals* (India) 編集委員、在来家畜研究編集委員、人文地理学会理事、東北地理学会評議員、生き物文化誌学会常任理事、ヒトと動物の関係学会評議員、北海道立北方民族博物館研究協力員、家畜資源研究会理事、総合地球環境学研究所運営会議委員

・非常勤講師

広島大学大学院国際協力研究科「途上国農村地域研究」（集中講義）、奈良女子大学大学院文学研究科「地域環境学特殊研究」（集中講義）

笹原亮二 [ささはら りょうじ] ————— 教授

1959年生。【学歴】早稲田大学第一文学部卒（1982）、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科博士課程前期修了（1995）、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科博士課程後期退学（1995）【職歴】相模原市立博物館学芸員（1982）、国立民族学博物館第1研究部助手（1996）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（2001）、総合研究大学院大学文化科学研究科兼任（2004）【学位】博士（歴史民俗資料学）（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 2001）、修士（歴史民俗資料学）（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 1995）【専攻・専門】民俗学、民俗芸能研究 1) 日本の獅子舞の民俗学的研究、2) 日本の民俗芸能の近代～現代における伝承の研究、3) 民俗学における資料論【所属学会】日本民俗学会、民俗芸能学会、芸能史研究会

【主要業績】

[単著]

笹原亮二

2003 『三匹獅子舞の研究』京都：思文閣出版。

[編著]

笹原亮二編

2009 『口頭伝承と文字文化——文字の民俗学 声の歴史学』京都：思文閣出版。

[論文]

笹原亮二

2005 「用と美——柳田国男の民俗学と柳宗悦の民藝を巡って」熊倉功夫・吉田憲司共編『柳 宗悦と民藝運動』pp.273-294, 京都：思文閣出版。

【2014年度の活動報告】

◎各研究

・研究課題

日本の祭と民俗芸能における装飾性の諸相

・研究の目的、内容

我々の生活の場には、衣類や食器や家具などさまざまなモノが存在し、我々はそれらを所有し、用いて生活を営んできた。そうしたモノに対し、我々は道具としての利便性や実用性に関心を向けがちである。しかし、現実の生活の場には、道具としての利便性や実用性が必ずしも問題とされないモノも存在する。それは、祭や民俗芸能において見られる御幣・仮面・笠・曳山などの品々である。それらは、形態や色彩などに殊更に趣向が凝らされ、日々の生活の場のモノとは大いに趣を異にする。その最たるものが、祭や年中行事の際に地元の人びとが趣向を凝らして作り、見物の観覧に供する造形物、「つくりもの」である。こうしたつくりものを初め、各地の祭や民俗芸能に登場する多種多様なハレの造形物を、人々の願いや喜びや晴れがましさといったハレの機会における闊達な精神活動の所産として捉え、特にその装飾性に注目して実態の把握を試みる。そして、それを通じ、各地でさまざまな祭や民俗芸能を脈々と営んできた人びとの心性、「ハレのこころ」のありようや歴史を考える。

本研究の実施にあたっては、笹原が研究代表者の科学研究費補助金（基盤研究（C））「瀬戸内海及び西日本における多島海世界の民俗芸能の研究」も活用しながら進める。

・成果

各地の祭と民俗芸能について、現地調査や論文・調査報告書等の関係資料の調査を実施し、それらにおける装飾的な造形の多様性の把握を試みた。2014年度は、瀬戸内海の沿岸や島嶼を中心とした中国・四国地方等の西日本に加えて、獅子踊や田植踊等の東北地方の風流系の民俗芸能についても現地調査や先行研究等の関連資料の調査を行い、両者の異同を検討した。特に、瀬戸内海の沿岸や島嶼に関しては、笹原が研究代表者の科学研究費補助金（基盤研究（C））「瀬戸内海及び西日本における多島海世界の民俗芸能の研究」も活用しながら研究を進めた。

その結果、民俗語彙としての「フリユウ」は東北地方でも認められないわけではないが、装飾性を強調した造形的な趣向の具体例に関しては、瀬戸内海地方各地の屋台や曳山の造形物を初め、西日本各地のほうがやはり優越していることが判明した。

こうした研究成果をもとに、『造り物の文化史——歴史・民俗・多様性』（福原敏男・笹原亮二共編著、思文閣出版、2014年）、『ハレのかたち——造り物の歴史と民俗』（笹原亮二・西岡陽子・福原敏男共著、岩田書院、2014年）を作成した。

◎出版物による業績

〔共著〕

笹原亮二・西岡陽子・福原敏男

2014 『ハレのかたち——造り物の歴史と民俗』東京：岩田書院。

〔共編著〕

福原敏男・笹原亮二編

2014 『造り物の文化史——歴史・民俗・多様性』東京：勉成社出版〔査読有、共同研究成果〕。

〔論文〕

笹原亮二

2014 「民俗芸能と祭祀——中在家の花祭の現場を巡って」神奈川大学常民文化研究機構編『国際常民文化研究叢書 7 アジア祭祀芸能の比較研究』pp.369-382, 神奈川：神奈川大学常民文化研究機構。

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

鳥根県古代文化センター資料評価委員・同客員研究員、鳥取県文化財保護審議会専門委員

・非常勤講師

関西学院大学文学部「地理学地域文化学特殊講義」

杉本良男 [すぎもと よしお] 教授

1950年生。【学歴】東京都立大学人文学部人文科学科卒（1974）、東京都立大学大学院社会科学研究科社会人類学専攻修士課程修了（1977）、東京都立大学大学院社会科学研究科社会人類学専攻博士課程単位取得退学（1980）【職歴】国際基督教大学教養学部社会科学科非常勤助手（1979）、南山大学文学部講師（1981）、南山大学人類学研究所第一種研究所員併任（1984）、南山大学文学部助教授（1986）、国立民族学博物館第3研究部助教授（1995）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1995）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（1999）、国立民族学博物館民族学研究開発センター教授（2003）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2007）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2011）【学位】博士（社会人類学）（東京都立大学 1995）、文学修士（東京都立大学 1977）【専攻・専門】社会人類学、南アジア研究【所属学会】日本文化人類学会、「宗教と社会」学会、日本南アジア学会

【主要業績】

[単著]

杉本良男

2002 『インド映画への招待状』東京：青弓社。

[編著]

杉本良男編

2014 『キリスト教文明とナショナリズム——人類学的比較研究』（国立民族学博物館論集2）東京：風響社。

杉本良男・高桑史子・鈴木晋介編

2013 『スリランカを知るための58章』東京：明石書店。

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

キリスト教文明と南アジア・ナショナリズム

・研究の目的、内容

本研究は、主としてフランス革命期以後の「キリスト教文明」の展開が、南アジア地域においてどのような影響を与え、またそれがどのような問題を引き起こしているのかについて、文献研究と現地調査によって系譜論的に明らかにしようとするものである。本年度は、グローバル化が進む南インドにおいて、構造的な社会変動が進んでいることについて実証的に明らかにすることを目的としている。

本年度は、科学研究費補助金（基盤研究（B））「経済自由化後の南インド社会の構造変動に関する総合的研究」（研究代表者：杉本良男）および科学研究費補助金（基盤研究（B））「インドにおける都市消費市場の構造と農村・都市間の物的人的循環——生活文化の視点から」（研究代表者：杉本大三）によって村落、都市部における共同調査を実施し、さらにこれまでの調査資料とあわせて整理してとりまとめの作業を行う。それとともに、科学研究費補助金（基盤研究（B））「神智学運動とその汎アジア的文化接触の比較文学的研究——東西融和と民主主義の相克」（研究代表者：安藤礼二）により、神智（学）協会と南アジア・ナショナリズムとの関連についての調査研究を実施する予定である。

・成果

本年度は、各種外部資金などにより以下のような調査研究を実施した。

科学研究費補助金（基盤研究（B））「経済自由化後の南インド社会の構造変動に関する総合的研究」（研究代表者：杉本良男、2013～2015年度）により、2011年より実施してきた南インド、タミルナードゥ州クンバコーナム市および近郊農村における共同調査を実施し、補足的な資料収集にあたりとともに、インド側のメンバーも含めて、成果公刊に向けての具体的な作業を実施した。また、ヨーロッパ、モーリシャス、韓国などにおけるインド人コミュニティの現状およびインド文化（とくに映画）の受容についての調査研究を実施した。

科学研究費補助金（基盤研究（B））「インドにおける都市消費市場の構造と農村・都市間の物的人的循環——生活文化の視点から」（研究代表者：杉本大三、2013～2015年度）により、南インド農村の構造変化について資料の整理を行った。

科学研究費補助金（基盤研究（B））「神智学運動とその汎アジア的文化接触の比較文学的研究——東西融和と民主主義の相克」（研究代表者：安藤礼二、2014～2017年度）により、アジアにおける近代仏教研究の成果公開

のためのシンポジウム開催の必要経費の一部を負担した。

これらの研究成果は、論文「ネオ・ヒンドゥイズムの系譜学——南アジア宗教ナショナリズムの病い」として公刊したほか、クラクフにおける国際学会、および各種研究会において発表した。

◎出版物による業績

[編著]

国立民族学博物館編（編集委員長：杉本良男）

2014 『世界民族百科事典』東京：丸善出版。

[論文]

杉本良男

2015 「ネオ・ヒンドゥイズムの系譜学——南アジア宗教ナショナリズムの病い」三尾 稔・山根 聡編『英領インドにおける諸宗教運動の再編——コロニアリズムと近代化の諸相』（NIHU Research Series of South Asia and Islam 7）pp.1-40, 京都：人間文化研究機構地域間連携研究の推進事業「南アジアとイスラーム」。

[事典項目]

杉本良男

2014 「ネーション（ネイション）」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.46-47, 東京：丸善出版。

2014 「宗教と紛争」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.116-117, 東京：丸善出版。

2014 「カースト制と仕事」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.404-405, 東京：丸善出版。

[その他]

杉本良男

2014 「キリスト教文明とナショナリズム——人類学的比較研究（国立民族学博物館論集2）」『民博通信』145：28。

2014 「聖概念のイデオロギー性、歴史性」『民博通信』145：12-13。

2015 「旅・いろいろ地球人 信じる⑥ 人は見かけによらず」『毎日新聞』2月19日夕刊。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年5月9日 「変貌するインド社会① 急速な経済発展」NPO 法人大阪府高齢者大学校 世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館

2014年5月11日 「映画からみる現代インドの素顔——グローバル化とローカル化」NHK カルチャー講座、NHK 文化センター梅田教室

2014年5月16日 「変貌するインド社会② カースト社会の空洞化」NPO 法人大阪府高齢者大学校 世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館

2014年5月23日 「変貌するインド社会③ 手織りサリーの危機」NPO 法人大阪府高齢者大学校 世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館

2014年7月26日 「グレート・ゲーム——露国令室無宿渡世記西藏編」第9回「仏教と近代」研究会 第3回神智学研究会「マダム・ブラヴァツキーのチベット」龍谷大学

2014年7月28日 「日本におけるインド研究の現状と今後の学術交流」神戸大学国際文化学研究推進センター開所記念講演会、神戸大学

2014年8月19日 ‘Dynamics of Religious Spaces and Multiplicity of Factors: A Case Study of Thiruppurambiyam in Tamil Nadu, India.’ (S. Subbiah, Y. Sugimoto, A. Sagayaraj and S. Sugimoto) Thematic Session: Religion and Changes of Socio-economic and Cultural Space of Cities and Regions 1, IGU (International Geographical Union) Regional Conference “Changes, Challenges, Responsibility.” Jagiellonian University, Krakow

2014年10月3日 「ネオ・ヒンドゥイズムの系譜学」2014年度人間文化研究機構地域間連携研究推進事業（IAS-INDAS 連携事業）南アジアとイスラーム「現代社会の政治と思想」研究会シンポジウム『英領インドにおける諸宗教運動の再編——コロニアリズムと近代化の諸相』京都大学

2014年11月14日 「グローバルな時空間認識——インド社会に学ぶ」神戸大学附属中等教育学校構内研修会講演、神戸大学附属中等教育学校

2015年2月20日 「2014年度調査報告」科学研究費研究会「インドにおける都市消費市場の構造と農村・都市間の物的人的循環——生活文化の視点から」（研究代表者：杉本大三）名城大学

2015年2月27日 「東と東のすれ違い——アナガーリカ・ダルマパーラと日本」 京都大学人文科学研究所共同研究「日本宗教史像の再構築」特別講演会『秘教的コネクションと近代世界』 京都大学人文科学研究所

◎調査活動

・海外調査

2014年8月9日～9月16日—フランス、チェコ、ポーランド、タイ、インド（インド社会の構造変動に関する調査研究）

2014年10月7日～10月11日—大韓民国（アジアにおけるインド映画受容についての調査研究）

2014年12月18日～2015年1月2日—インド、モーリシャス（モーリシャスにおけるヒンドゥー文化復興に関する調査研究）

2015年3月3日～3月13日—インド（南インド村落社会の構造的変動に関する調査研究）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（B））「経済自由化後の南インド社会の構造変動に関する総合的研究」研究代表者、科学研究費補助金（基盤研究（B））「インドにおける都市消費市場の構造と農村・都市間の物的・人的循環：生活文化の視点から」（研究代表者：杉本大三）研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究（B））「神智学運動とその汎アジア的文化接触の比較文学的研究——東西融和と民主主義の相克」（研究代表者：安藤礼二）研究分担者

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

公益信託「澁澤民族学振興基金」運営委員、日本学術会議連携会員、神戸大学附属中等教育学校文部科学省指定研究開発に係る運営指導委員

竹沢尚一郎 [たけざわ しょういちろう] ————— 教授

1951年生。【学歴】 東京大学文学部宗教学専攻卒（1976）、東京大学大学院人文科学研究科宗教学専攻修士課程修了（1978）、フランス社会科学高等研究院社会人類学専攻博士課程修了（1985）【職歴】 日本学術振興会特別研究員（1985）、九州大学文学部助教授（1988）、国立民族学博物館併任助教授（1996）、九州大学大学院人間環境学研究院教授（1998）、国立民族学博物館民族学研究部教授（2001）、九州大学大学院併任教授（2001）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2002）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長（2007）【学位】 民族学博士（フランス社会科学高等研究院 1985）、文学修士（東京大学 1978）【専攻・専門】 宗教人類学、アフリカ史、人類学学説史【所属学会】 日本宗教学会、日本文化人類学会、日本アフリカ学会

【主要業績】

[単著]

竹沢尚一郎

2013 『被災後を生きる——吉里吉里・大槌・釜石奮闘記』 東京：中央公論社。

2010 『社会とは何か——システムからプロセスへ』（中公新書）東京：中央公論社。

2007 『人類学的思考の歴史』 京都：世界思想社。

【受賞歴】

1988 日本宗教学会賞

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

1) 西アフリカ史研究

2) 被災のコミュニティ研究

・研究の目的、内容

- 1) 2012～2015年度の日本学術振興会の科学研究費補助金を得て、アフリカ史研究を遂行する。具体的には、西アフリカ・マリ国で考古学発掘調査を実施し、その成果を素に西アフリカ史記述をおこなう。また、他のアフリカ史研究者と共同研究を推進する。
- 2) 三井物産環境基金の資金を得て、岩手県の大槌町、釜石市などで、被災者の被災後の行動を記録する。この基金と総合研究大学院大学学融合プロジェクトの資金により、東日本大震災の展示を国内外の博物館で実施するべく準備を進める。

・成果

- 1) 2012～2015年度の日本学術振興会の科学研究費補助金を得て、アフリカ史研究を実施した。成果として、竹沢尚一郎『西アフリカの王国を掘る』（臨川書店、2014年）を出版したほか、これまでの研究成果を、英語、仏語、日本語で出版するべく準備した。
- 2) 三井物産環境基金の資金により、2013年1月に出版した『被災後を生きる』の英訳がほぼ終わっているのので、これを外国の出版社から出版するよう尽力した。また、2009～2012年度に実施した国立民族学博物館機関研究「モノの崇拜」プロジェクト、および2013～2014年度に実施した総合研究大学院大学学融合研究「ニューミュージオロジーの確立のための研究」の成果を、竹沢尚一郎編著『ミュージアムと負の記憶』（東信堂）として2015年10月に出版する。

◎出版物による業績

[単著]

竹沢尚一郎

2014 『西アフリカの王国を掘る』（フィールドワーク選書10）京都：臨川書店。

[論文]

竹沢尚一郎

2015 「イギリスとフランスにおける呪術研究」江川純一・久保田浩編著『「呪術」の呪縛』上巻（宗教史学論叢19）pp.79-98, 東京：リトン。

2015 「西アフリカにおける指導者崇拜」韓 敏編著『近代社会における指導者崇拜』（国立民族学博物館研究報告127）pp.97-115, 大阪：国立民族学博物館 [査読有]。

[その他]

竹沢尚一郎

2014 「パリにサンバはたくさんいる」『サンバ』（映画『サンバ』劇場パンフレット）東京：ギャガ。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年5月15日 ‘Positive or Negative: What Makes Life in the Evacuating Shelter Positive?,’ IUAES (International Union of Anthropological and Ethnological Sciences) 2014 Meetings, Makuhari Messe, Chiba

2014年11月18日 ‘La découverte d’un palais royal le plus ancien en Afrique de l’Ouest,’ “La journée sur l’Afrique,” Université libre de Bruxelles

2014年11月20日 ‘Au-delà du trauma: faire une exposition sur le Tohoku Séisme et préserver ses traumatiques restes,’ Sur le Reste, Musée des Civilisations de l’Europe et de la Méditerranée

◎調査活動

・国内調査

2014年4月17日～4月29日ー岩手県上閉伊郡大槌町（企画展示「東日本大震災の展示」のための準備を実施）

2014年6月18日～6月30日ー岩手県上閉伊郡大槌町（企画展示「東日本大震災の展示」のための準備を実施）

2014年7月13日～7月21日ー岩手県上閉伊郡大槌町（企画展示「東日本大震災の展示」のための準備を実施）

2014年9月24日～9月30日ー岩手県上閉伊郡大槌町（企画展示「東日本大震災の展示」のための準備を実施）

・海外調査

2014年8月19日～9月19日ーベルギー（アフリカ史の研究のための資料収集）

2014年11月2日～11月27日ーフランス（アフリカ史関係の資料収集と研究成果の出版に向けた討議及び民族学博物館に関するシンポジウムの実施）

2015年2月8日～3月4日ーマリ、フランス（マリ国において学術交流及び考古学発掘成果の共同研究、フランスにおいて出版のための調査研究）

◎大学院教育

・論文審査

博士論文審査委員（1件）

予備審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（A））「世界の中のアフリカ史の再構築」研究代表者、総合研究大学院大学学融合プロジェクト「ニュー・ミュージオロジーの確立のための研究」（2013～2014年度）研究代表者

出口正之 [でぐち まさゆき] ————— 教授

1955年生。【学歴】大阪大学人間科学部人間科学科卒（1979）【職歴】ジョンズ・ホプキンス大学国際フィランソロピー研究員（1991）、財団法人サントリー文化財団事務局長（1992）、総合研究大学院大学教育研究交流センター教授（1995）、総合研究大学院大学学長補佐（2001）、国立民族学博物館民族学研究開発センター教授（2003）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科兼任（2004）、内閣府公益認定等委員会委員（2010）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2013）、総合研究大学院大学教授（2014）【専攻・専門】NPO、メセナ、フィランソロピー、ボランティア、言政学【所属学会】国際NPO・NGO学会（ISTR = International Society for Third Sector Research）、米国NPO学会（ARNOVA = The Association for Research on Nonprofit Organizations and Voluntary Action）、非営利法人研究学会、日本NPO学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[共編著]

Vinken, H., Y. Nishimura, B. L. J. White and M. Deguchi

2010 *Civic Engagement in Contemporary Japan Civic Engagement in Contemporary Japan*. New York/Dordrecht/Heidelberg/London: Springer.

本間正明・出口正之編著

1996 『ボランティア革命』東京：東洋経済新報社。

[分担執筆]

Deguchi, M.

2001 The Distortion between Institutionalized and Noninstitutionalized NPO: New Policy Initiative and the Nonprofit Organizations in Japan. In H. K. Anheier, J. Kendall (eds.) *Third Sector Policy at the Crossroads: An International Nonprofit Analysis*, pp.277-301. London and New York: Routledge.

【受賞歴】

1988 東洋経済高橋亀吉賞最優秀賞

1988 日経産業新聞15周年記念論文最優秀賞

1995 ESP 大来佐武郎賞

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

NPO・NGO等の総合的研究

・研究の目的、内容

- 1) 非営利・非政府（公益法人を含む。また、民間助成財団の研究も含む。）の組織に関して、文化人類学を含む広い観点からの研究を実施して、Cris Shore, Susan Wrightらの“Anthropology of Policy”の水準を学術的に向上させる。
- 2) 非営利の「縁」を「社縁」とともに「結社縁」として捉え、中牧弘允、日置弘一郎らが、開拓した「経営人類学」を一層、拡大発展させる。本件については、国立民族学博物館の共同研究に代表者として申請中。

・成果

2)については不採択となり、研究を実施せず。1)について活発な研究活動を行い、下記のような業績を発表した。

◎出版物による業績

[論文]

出口正之

2015 「主務官庁制度のパターナリズムは解消されたのか」岡本仁宏編著『市民社会セクターの可能性——110年ぶりの大改革の成果と課題』pp.79-106, 兵庫：関西学院大学出版会。

2015 「制度統合の可能性と問題——ガラパゴス化とグローバル化」岡本仁宏編著『市民社会セクターの可能性——110年ぶりの大改革の成果と課題』pp.157-183, 兵庫：関西学院大学出版会。

[その他]

出口正之

2014 「新設法人の減少率は『4割強』公益監視等委員会に变身することなかれ 58%」(新年度特別企画 有識者に訊く 新公益法人制度への移行を採点すれば何点か?)『公益・一般法人』866: 8-10。

2014 「全日本テコンドー協会の認定取消し申請の経緯とチャレンジ・グラントについて」『公益・一般法人』870: 15-34。

2014 「収益事業課税試論——イコール・フッティング論を巡って」『公益・一般法人』871: 4-13。

2014 「公益法人制度改革における公益認定等委員会のパターナリズムの傾向」(特集 非営利法人における制度・会計・税制の改革を総括する)『非営利法人研究学会誌』16: 1-13。

2015 「論壇『民間公益活動』の質的・量的拡大を」『公益・一般法人』884: 1-1。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年7月22～25日 “‘Globalization’ of Standards; Study from Participant Observation on Japan’s Charity Commission,” 11th International Conference, “International Society for Third Sector Research,” University of Münster, Münster, Germany

2014年9月10～11日 「学校法人・社会福祉法人創設との比較における公益法人制度改革」第18回大会非営利法人研究学会、横浜国立大学

2015年3月14～15日 「『公益目的事業財産』とNPOの存在意義——『第三の財産』を巡って」日本NPO学会第16回年次大会、武蔵大学

◎調査活動

・海外調査

2014年7月21日～7月27日ドイツ(国際NPO・NGO学会国際会議における研究発表)

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

公益財団法人助成財団センター評議員、茨木市文化振興施策推進委員会委員長

森 明子 [もり あきこ]——教授

【学歴】筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科単位取得退学(1989)【職歴】筑波大学歴史・人類学系文部技官(1989)、筑波大学歴史・人類学系助手(1990)、国立民族学博物館第3研究部助手(1990)、国立民族学博物館第3研究部助教授(1997)、総合研究大学院大学文化科学研究科併任(1999)、国立民族学博物館研究戦略センター教授(2006)、国立民族学博物館研究戦略センター長(2009)、民族文化研究部教授(2011)【学位】文学博士(筑波大学大学院歴史・人類学研究科1997)、文学修士(筑波大学大学院歴史・人類学研究科1984)【専攻・専門】文化人類学 1) ヨーロッパ人類学、2) ドイツ、オーストリアの民族誌研究、3) 民族学・民俗学の歴史的展開【所属学会】日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

森 明子

1999 『土地を読みかえる家族——オーストリア・ケルンテンの歴史民族誌』東京：新曜社。

[編著]

森 明子編

2014 『ヨーロッパ人類学の視座——ソーシャルなるものを問い直す』 京都：世界思想社。

Mori, A. (ed.)

2013 *The Anthropology of Europe as Seen from Japan: Considering Contemporary Forms and Meanings of the Social* (Senri Ethnological Studies 81) Osaka: National Museum of Ethnology.

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

人類学的比較の再考

・研究の目的、内容

比較は、文化人類学研究を、基底的に性格づけている。ポストモダン人類学は、比較のための単位を実体的・硬直的にとらえる文化の理解を批判したが、これに対して最近、超越的な比較ではない水平的な比較という議論が起こってきた。全体を見通すのではない部分的なヴィジョンに着目して、人類学的な比較を説明しようとするものである。本研究は、こうした議論を参照しながら、ヨーロッパ人類学の実践において、民族誌記述と人類学的比較が、いかに照射しあっているのか、検討するものである。

・成果

第1に、本研究課題をこれから数年にわたって取り組むための基盤となる共同研究を組織することに力を注ぎ、2つの共同研究をたちあげた。ひとつめは、ケアと保育の制度化に関する比較研究をテーマとする国立民族学博物館共同研究「家族と社会の境界面の編成に関する人類学的研究——保育と介護の制度化／脱制度化を中心に」（研究代表者：森 明子）で、18人の研究者から構成される共同研究を10月から開始した。ふたつめは、ケア・ネットワークの編成のあり方を比較研究する科学研究費補助金（基盤研究(B)）「ポスト福祉国家時代のケア・ネットワーク編成に関する人類学的研究」（研究代表者：森 明子）の組織で、来年度より研究年度がスタートする。

第2に、民族学・民俗学のディシプリンの比較研究として、大学研究所における研究＝教育の取り組みを、ドイツのベルリン・フンボルト大学ヨーロッパ民族学研究所で調査した。この調査は、本年度開始した科学研究費補助金（基盤研究(A)）「東アジア〈日常学としての民俗学〉の構築に向けて：日中韓と独との研究協業網の形成」（研究代表者：岩本通弥）の研究分担者として、東アジアとドイツとの比較として行った。

第3に、前年度終了した科学研究費補助金（基盤研究(C)）「21世紀の市民運動に関する文化人類学的研究——ベルリン外国人集住地区の事例」（研究代表者：森 明子）の成果とりまとめを進めて、その一部を国際学会で口頭発表した。

◎出版物による業績

[事典項目]

森 明子

2014 「場所・空間」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』p.239, 東京：丸善出版。

2014 「空間の象徴的意味」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.240-241, 東京：丸善出版。

2014 「民族学博物館」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.514-515, 東京：丸善出版。

2014 「カーニバルと他者表象」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.746-747, 東京：丸善出版。

[その他]

森 明子

2014 「旅・いろいろ地球人 父親② ベルリンのイスメット」『毎日新聞』11月27日夕刊。

2015 「ケアの実践から家族と社会の編成を考える」『民博通信』148：14-15。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究

2014年11月16日 「共同研究の趣旨説明と問題提起」『家族と社会の境界面の編成に関する人類学的研究——保育と介護の制度化／脱制度化を中心に』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年5月16日 ‘Rethinking the Social in Berlin: An Ethnographic Study,’ in the Panel: “Mutual Anthropology: A Proposal for Future Equality in the Discipline.” IUAES (the

International Union of Anthropological and Ethnological Sciences), Makuhari Messe;
International Convention Complex, Chiba, Japan

・ **みんなくゼミナール**

2015年3月21日 「ミシンと家庭——100年前のグローバル商品」第442回みんなくゼミナール

・ **研究講演**

2014年11月26日 「オーストリア農村の家と家族」Klub Zukunft、梅田エステートビル

2015年1月30日 「移民とともにつくる社会——ドイツの試み」園田学園女子大学特別講座、園田学園女子大学

・ **広報・社会連携活動**

2015年1月11日 「ドイツのクリスマス・ピラミッド」第367回みんなくウィークエンド・サロン

・ **展示**

2014年9月21日～2015年2月28日 ‘Europe and Bread.’ In “Making Europe(s),” Special Exhibition of
“Museum Europäischer Kulturen, Staatliche Museen zu Berlin, Preußischer Kultur
Besitz,” Germany

◎ **調査活動**

・ **海外調査**

2015年2月19日～3月13日—ドイツ（科研「東アジア〈日常学としての民俗学〉の構築に向けて——日中韓と
独との研究協業網の形成」にかかる調査研究

◎ **大学院教育**

・ **大学院ゼミでの活動**

論文ゼミ委員として論文指導、1年生ゼミ大学院テーマシリーズ講義「人類学的比較——M. Strathernの《部
分的接続》について」（2014年11月20日）

◎ **上記以外の研究活動**

・ **人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクト
の代表者・分担者など**

科学研究費補助金（基盤研究（A））「東アジア〈日常学としての民俗学〉の構築に向けて——日中韓と独との研
究協業網の形成」（研究代表者：岩本通弥）研究分担者

◎ **社会活動・館外活動**

・ **他機関から委嘱された委員など**

独立行政法人大学評価・学位授与機構大学機関別認証評価委員会専門委員、日本学術振興会特別研究員等審査
会専門委員及び国際事業委員会書面審査員、京都大学人文科学研究所 共同利用・共同研究拠点共同研究委員会
委員、日本民俗学会国際交流特別委員会委員、人間文化研究機構男女共同参画委員会委員、Wissenschaftlicher
Beirat von *Historische Anthropologie: Kultur-Gesellschaft-Alltag* (Köln, Weimar, Wien)（ドイツ・オースト
リアで刊行されている学術雑誌の研究顧問）

八杉佳穂 [やすぎ よしほ]——教授

1950年生。【学歴】京都大学文学部卒（1975）【職歴】国立民族学博物館第4研究部助手（1980）、国立民族学博物館
第4研究部助教授（1990）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1991）、国立民族学博物館第2研究部教授
（1997）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長
（2001）【学位】文学博士（総合研究大学院大学 1994）【専攻・専門】言語人類学、マヤ学【所属学会】日本言語学
会、古代アメリカ学会、日本ラテンアメリカ学会

【主要業績】

[単著]

八杉佳穂

2004 『チョコレートの文化誌』京都：世界思想社。

2003 『マヤ文字を解く』東京：中央公論新社。

Yasugi, Y.

1995 *Native Middle American Languages: An Areal-Typological Perspective* (Senri Ethnological Studies
39). Osaka: National Museum of Ethnology.

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

カクチケル語とユカテク語の文献言語学的研究

・研究の目的、内容

古典カクチケル語で書かれた『カクチケル年代記』と古典ユカテク語の代表的文献である『チュマイエルのチラムバラムの書』の分析と翻訳を行う。Torresano (1754), Flores (1753)による古典カクチケル語の文法書の分析を完成させたのち、Domingo de Vico (1555), Varea (1604), Coto (17c), Saenz de Santa Maria (1940), Smiles (1989)らの古典カクチケル語の辞書を用い、合わせて現代カクチケル語の諸文法書や辞書を利用して、『カクチケル年代記』を分析するとともに、その翻訳を完成させる。その後『チュマイエルのチラムバラムの書』の翻訳と文法分析を行う。

・成果

Torresano (1754), Flores (1753)らによる古典カクチケル語の文法書の記述をもとに、『カクチケル年代記』の文法分析を行い、文法記述を行うとともに、逐語的翻訳をより日本語に近づける作業を行った。またユカテク語との相違と類似の点を検討した。『カクチケル年代記』は2016年度中に出版申請の予定である。

◎出版物による業績

[監修]

八杉佳穂

2014 『ずかん文字』東京：技術評論社。

[論文]

八杉佳穂

2014 「メソアメリカ諸文明（マヤ・アステカ等）の暦」岡田芳朗編『暦の大事典』pp.35-44, 東京：朝倉書店。

Koizumi, M., Y. Yasugi, K. Tamaoka, S. Kiyama, J. Kim, J. E. Ajsivinac, Sian and L. P. O. García Mátzar

2014 On the (non) Universality of the Preference for Subject-object Word order in Sentence Comprehension: A Sentence-processing Study in Kaqchikel Maya. *Language* 90(3): 722-736 [査読有]

[その他]

八杉佳穂

2014 「言語学の力——グアテマラ」みんぱく e-news 157 (<http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/157>)。

2014 「千家十職×みんぱく——創造を生みだす刺激と美を追求した展示」『月刊みんぱく』38(9)：4-6。

2014 「旅いろいろ地球人 食べる⑧ ペピアンとホコン」『毎日新聞』9月18日夕刊。

2014 「使命感に燃えて」『季刊民族学』150：34-36。

2014 「みんぱく世界の旅 中央アメリカ① さまざまな文明が栄えた大陸」『毎日小学生新聞』12月13日。

2014 「みんぱく世界の旅 中央アメリカ② 世界中の言語の数は」『毎日小学生新聞』12月20日。

2014 「みんぱく世界の旅 中央アメリカ③ マヤの地も時代とともに変化」『毎日小学生新聞』12月27日。

2015 「みんぱく世界の旅 中央アメリカ④ アメリカ大陸原産の植物たち」『毎日小学生新聞』1月3日。

2015 「中米の地名」庄司博史編『世界の文字事典』pp.182-183, 東京：丸善出版。

2015 「マヤ文字」庄司博史編『世界の文字事典』pp.390-394, 東京：丸善出版。

2015 「数々の思い込み」『月刊みんぱく』39(3)：20-21。

Yasugi, Y.

2014 Head-marked Languages in Middle America. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 39: 7-9.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年12月21日 「マヤ文明の魅力とマヤ語の特徴」公開シンポジウム『マヤ語からみた言語と思考と脳』国立民族学博物館

2015年1月10日～11日 「マヤ文明の魅力とマヤ語の特徴」公開シンポジウム『マヤ語からみた言語と思考と脳』慶應義塾大学三田キャンパス北館ホール

・広報・社会連携活動

2014年4月29日 「マヤ文字で名前を書いてみよう」第342回みんなくウィークエンド・サロン

2014年7月25日 「マヤ文明と世界遺産」立花市民大学、尼崎市立立花公民館

2014年8月5日 「ことばと文化への目覚め」(吉村雅仁・岩坂泰子・八杉佳穂・中牧弘允) 博学連携教員研修
ワークショップ2014 in みんなく

2014年10月15日 「古代マヤ人のことばを探る」阿倍野ハルカスカレッジシアター

2014年11月14日 「チョコレート文化誌」d-labo、ミッドタウン・タワー7F(東京)

新免光比呂 [しんめん みつひろ] ————— 准教授

1959年生。【学歴】早稲田大学政治経済学部政治学科卒(1983)、東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了(1986)、東京大学大学院人文科学研究科博士課程修了(1992)【職歴】東方研究会専任研究員(1992)、横浜国立大学非常勤講師(1992)、帝京大学非常勤講師(1992)、国立民族学博物館第3研究部助手(1993)、国立民族学博物館民族社会研究部助教授(2000)、総合研究大学院大学文化科学研究科併任(2002)、国立民族学博物館民族文化研究部助教授(2004)【学位】文学修士(東京大学大学院人文科学研究科 1986)【専攻・専門】宗教学・東欧研究【所属学会】東方研究会

【主要業績】

[単著]

新免光比呂

2000 『祈りと祝祭の国——ルーマニアの宗教文化』京都：淡交社。

[共著]

新免光比呂・保坂俊司・頼住光子

1998 『比較宗教への途3——人間の文化と神秘主義』東京：北樹出版。

[論文]

新免光比呂

1999 「社会主義国家ルーマニアにおける民族と宗教——民族表象の操作と民衆」『国立民族学博物館研究報告』24(1)：1-42。

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

ルーマニアと日本におけるファシズム運動の比較研究

・研究の目的、内容

1930年代のルーマニアと日本におけるファシズム運動を比較することで、宗教と政治の関係に関する新たな知見を得たい。

・成果

研究主題は、1930年代のルーマニアと日本におけるファシズム運動を比較して宗教と政治の関係に関する新たな知見を得ることであったが、ルーマニア・アメリカ大学から招聘され、2014年5月5日から6日にかけて、ルーマニア・アメリカ大学所属ルーマニア日本研究センターが、ブカレスト大学歴史学部、ルーマニアアカデミー世界経済研究所、ルーマニア日本語教師会と共同して開催した「日本とルーマニア——差異、類似、重複」シンポジウムに参加して、Towards the reflective comparison-Political and religious movements in Japan and Romaniaというテーマで発表した。また論文としては「ルーマニアにおける二つの指導者崇拜——コドレアヌとチャウシェスク」韓 敏編『近代社会における指導者崇拜の諸相』(国立民族学博物館調査報告127) pp.79-95、2014を発表した。

◎出版物による業績

[論文]

新免光比呂

2014 「ルーマニアにおける二つの指導者崇拜——コドレアヌとチャウシェスク」韓 敏編『近代社会における指導者崇拜の諸相』(国立民族学博物館調査報告127) pp.79-95, 大阪：国立民族学博物館 [査

読有]。

◎映像音響メディアによる業績

- ・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

[ビデオテープ]

新免光比呂

2014 『神への祈りと喜びの舞曲—バッハからバルトークへ』 日本語, マルチ。

- ・DVD・CDなどの制作・監修

[DVD]

新免光比呂

2014 『みんなく映像民族誌 第14集 ルーマニアの伝統と信仰』 日本語, 107分。

◎口頭発表・展示・その他の業績

- ・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年5月5日～6日 「日本とルーマニア——差異、類似、重複」 ルーマニア・アメリカ大学所属ルーマニア日本研究センター、ブカレスト大学歴史学部、ルーマニアアカデミー世界経済研究所、ルーマニア日本語教師会との共同開催シンポジウム“Towards the Reflective Comparison: Political and Religious Movements in Japan and Romania”、ルーマニア・アメリカ大学

◎調査活動

- ・海外調査

2014年5月1日～5月14日—ルーマニア、フランス（ルーマニアアメリカ大学日本研究センター国際会議へ参加及び研究打合せ・資料収集）

2014年10月15日～10月31日—アルメニア・グルジア（アルメニア・グルジアの大衆音楽に関する調査研究）

◎大学院教育

- ・指導教員

副指導教員（1人）、特別共同利用研究員の研究指導教員（1人）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究(B)）「旧東欧地域における『演歌型』大衆音楽の比較研究」（研究代表者：伊東信宏）研究分担者

鈴木 紀 [すずき もとみ] ————— 准教授

1959年生。【学歴】東京大学教養学部教養学科卒（1982）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1985）、東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得退学（1991）【職歴】ニューヨーク州立大学ビンガムトン校人類学科教務助手（1992）、千葉大学文学部助教授（1996）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2007）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2013）【学位】社会学修士（東京大学大学院 1985）【専攻・専門】開発人類学・ラテンアメリカ文化論 1) 開発援助プロジェクト評価、2) フェアトレード、3) マヤ・ユカテコ民族の社会変化、4) 先住民族文化の比較展示学【所属学会】日本文化人類学会、国際開発学会、日本ラテンアメリカ学会、Society for Applied Anthropology、American Anthropological Association

【主要業績】

[編著]

鈴木 紀・滝村卓司編

2013 『国際開発と協働——NGOの役割とジェンダーの視点』（みんなく実践人類学シリーズ8）東京：明石書店。

[論文]

鈴木 紀

2014 「開発」山下晋司編『公共人類学』pp.69-84, 東京：東京大学出版会。

2011 「開発人類学の展開」佐藤 寛・藤掛洋子編『開発援助と人類学：冷戦・蜜月・パートナーシップ』pp.45-

66, 東京：明石書店。

【2014年度の活動報告】

◎各研究

・研究課題

国際開発のための実践人類学

・研究の目的、内容

本研究の目的は、社会問題の解決に寄与するための文化人類学である実践人類学を、国際開発活動の分野で推進することにある。とくに開発プロジェクトが、その対象社会で持続、発展していくための条件を、プロジェクトのインパクト（事前に予期された影響および予期されていなかった影響）に関する民族誌的調査を通じて明らかにしていく。

今年度もフェアトレード研究を継続する。フェアトレードのインパクトを調査するため、中央アメリカのカカオ栽培者を事例に、フェアトレードに参加している団体だけでなく、参加していない団体の情報収集を目的とした現地調査をおこなう。この調査には、科学研究費補助金（基盤研究(B)）「フェアトレードによるインパクトの地域間比較：徳の経済を念頭に」（研究代表者：池上甲一）の資金を充当する。

・成果

科学研究費補助金（基盤研究(B)）「フェアトレードによるインパクトの地域間比較——徳の経済を念頭に」（研究代表者：池上甲一）の研究分担者として、研究発表および調査をおこなった。2014年11月8日の白山人類学研究会第7回研究フォーラム（第2回オルタナティブ研究会）（於：東洋大学白山キャンパス）において「ベリーズのカカオ産業——フェアトレードと歩んだ20年」について発表した。また2015年1月5日から17日まで、コスタリカとパナマを訪問し、カカオのフェアトレードがカカオ産地に及ぼす社会経済的影響を調査した。コスタリカではタラマンカ地方を訪問し、カカオのフェアトレードに関連するエコ・ツーリズムやコミュニティー・ツーリズムの発展状況を参与観察した。パナマではカカオ生産者共同組合 COCABO を訪問し、同組合の沿革や、組合員による観光振興の取り組みについて情報収集した。

研究成果の一端として次の出版物を発表した。

- 1) 鈴木 紀「カカオ産地は今——フェアトレードと歩んだ20年」『月刊みんぱく』38(5)：16-17, 2014年。
- 2) 鈴木 紀「フェアトレード」『世界民族百科事典』pp.604-605, 丸善出版, 2014年。
- 3) 鈴木 紀「開発」山下晋司編『公共人類学』pp.69-84, 東京大学出版会, 2014年。

◎出版物による業績

[論文]

鈴木 紀

2014 「開発」山下晋司編『公共人類学』pp.69-84, 東京：東京大学出版会。

青山和夫・米延仁志・坂井正人・鈴木 紀

2014 「『古代アメリカの比較文明論』プロジェクトの目標と展望」『古代アメリカ』17：119-127 [査読有]。

[事典項目]

鈴木 紀

2014 「国際社会」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』p.367, 東京：丸善出版。

2014 「国際社会の構成」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.368-369, 東京：丸善出版。

2014 「国際開発」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.378-379, 東京：丸善出版。

2014 「開発途上国」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.380-381, 東京：丸善出版。

2014 「フェアトレード」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.604-605, 東京：丸善出版。

[その他]

鈴木 紀

2014 「カカオ産地は今——フェアトレードと歩んだ20年」『月刊みんぱく』38(5)：16-17。

2014 「ラテンアメリカ諸国からの米国移民を描いた映画案内——『ヒア・アンド・ゼア』を中心に」『社会科学NAVI』8：18-19。

2015 「旅・いろいろ地球人 父親⑦ がんばるお母さん」『毎日新聞』1月8日夕刊。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年5月15日 ‘Facing Maya Agency: Reflections on Ethnological Studies of Contemporary Mayan

People,' International Union of Anthropological and Ethnological Sciences 2014, Makuhari Messe, Chiba, Japan

2014年5月17日 'Comment to Claudio Lomnitz's Public Life and Anthropology,' International Union of Anthropological and Ethnological Sciences 2014, Makuhari Messe, Chiba, Japan

2014年9月16日 'Comentario al Panel B: Reconstrucción del Pasado en Torno al Origen y la Legitimidad de los Pueblos Indígenas del México Colonial y Contemporáneo,' Consejo de Estudios Latinoamericanos de Asia y Oceanía 2014, Kyoto University

2014年11月8日 「ベリーズのカカオ産業——フェアトレードと歩んだ20年」白山人類学研究会第7回研究フォーラム、東洋大学白山キャンパス

2015年3月21日 「マヤ文明とマヤ民族——博物館展示の比較」アンデス文明研究会、東京外国語大学本郷サテライト

・研究講演

2014年8月30日 「メキシコ・中南米からの米国移民映画案内」みんなくワールドシネマ関連ミニレクチャー、国立民族学博物館

・広報・社会連携活動

2014年8月30日 「Here and There ——メキシコとアメリカの間で生きる人々」みんなくワールドシネマ、国立民族学博物館

◎調査活動

・海外調査

2014年10月5日～10月18日—メキシコ（メキシコの人類学博物館展示の比較研究）

2014年11月22日～12月9日—アメリカ合衆国（古代アメリカ文明に関する博物館展示の比較研究）

2015年1月5日～1月17日—コスタリカ、パナマ（フェアトレードのカカオ生産者への影響調査）

2015年3月3日～3月18日—メキシコ、グアテマラ（メキシコ・グアテマラの人類学博物館の比較調査研究）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（1人）

・大学院ゼミでの活動

比較社会演習 III「社会と経済に関する人類学的アプローチ」担当

・論文審査

博士論文審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（新学術領域（研究領域提案型））「古代アメリカの比較文明論」A04計画研究「植民地時代から現代の中南米の先住民文化」研究代表者、科学研究費補助金（新学術領域（研究領域提案型））「古代アメリカの比較文明論」（代表：茨城大学 青山和夫）研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究(B)）「フェアトレードによるインパクトの地域間比較：徳の経済を念頭に」（代表：近畿大学 池上甲一）研究分担者

・他機関から委嘱された委員など

国際開発学会常任理事（学会誌『国際開発研究』編集長）（～2014年11月）

・非常勤講師

大阪大学「ボランティア論」（10月29日「開発援助とボランティア」担当）

廣瀬浩二郎 [ひろせ こうじろう] ————— 准教授

【学歴】京都大学文学部国史学科卒（1991）、京都大学大学院文学研究科修士課程修了（1993）、カリフォルニア大学バークレイ校留学（1995）、京都大学大学院文学研究科博士課程指導認定退学（1997）【職歴】京都大学文学部研修員（1997）、花園大学社会福祉学部非常勤講師（1999）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（2001）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2008）【学位】文学博士（京都大学大学院文学研究科 2000）、文学修士（京都大学大学院文学研究科 1993）【専攻・専門】日本宗教史、民俗学（日本の新宗教、民俗宗教と障害者文化、福祉の関わりについての歴史、人類学的研究）【所属学会】日本史研究会、「宗教と社会」学会、日本武道学会、日本文化人類学会

【主要業績】

〔単著〕

廣瀬浩二郎

2009 『さわる文化への招待——触覚でみる手学問のすゝめ』 京都：世界思想社。

2001 『人間解放の福祉論——出口王仁三郎と近代日本』 大阪：解放出版社。

〔学位論文〕

廣瀬浩二郎

2000 「宗教に顕れる日本民衆の福祉意識に関する歴史的研究」 京都大学大学院文学研究科。

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

「バリア・フリー」に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

今年度最大の課題は、昨年度（2013年8月～2014年3月）の在外研究の成果を単行本にまとめることである。8か月のシカゴ滞在中、民博のホームページに「ミドルライフ・ブルース」（全18回）を連載した。本連載記事に加筆し、2015年2月に単著『身体でみる異文化の世界』を刊行する予定である。2013年6月に開催した「京都大学バリアフリーシンポジウム」の報告書についても、すでに各パネリストからの原稿が集まり、編集作業に入っている。編著『大学からのバリアフリー』（仮題）の出版予定は、2014年12月である。さらに『季刊民族学』（2012年10月号～2014年1月号）に連載したコラム「世界をさわる」も、単行本化に向けて出版社と交渉している。「世界をさわる」（全6回）は、2012年度に民博で実施した連続講座の内容を紹介するもので、拙編著の形で刊行できれば、「さわる展示」の入門書、民博の展示ガイドの一つとして多方面で活用されることが期待できる。

書籍出版以外では、館外の各種「さわる展示」への協力も、今年度の活動目標である。また、昨年度は在外研究に出たため、共同研究「触文化に関する人類学的研究」の研究会を1度しか開けなかったが、今年度は本共同研究の運用にも注力したい。

・成果

今年度は3冊の著作を刊行することができた。編著『世界をさわる』（2014年9月）は、2012年に行った連続講座「博物館にさわる」、および2013年に実施した体験プログラム「瞽女文化にさわる」の成果をまとめた単行本である。触文化の入門書として多方面で活用されており、新聞・雑誌等でも好意的な評価を得ている。共編著『知のバリアフリー』（2014年12月）は、2013年6月に京都大学で開催した「バリアフリーシンポジウム」の報告書である。単なる障害学生支援のマニュアルというレベルにとどまらず、「障害」を切り口とする新たな学びのあり方を提案している点が本書の特徴といえる。単著『身体でみる異文化』（2015年3月）は、2013年8月～2014年3月の在外研究、シカゴを拠点とするフィールドワークの内容を一般向けに書き下ろしたものである。「触文化から身体論へ」が本書の主題であり、「さわる表紙」「触感を味わう読書法」など、紙の本ならではの魅力を発信する意欲作と位置づけることができる。

出版以外でも、大阪府立中央図書館の企画展「さわっておどろく！」への協力、第87回日本社会学会大会シンポジウム「〈当事者宣言〉の社会学」での報告、大阪大学医学部主催のシンポジウム「アートは脳の楽しみ」での発表など、今年度は学際的な場での発信・交流の機会が多く、自身の触文化研究の広がりを実感している。

◎出版物による業績

〔単著〕

廣瀬浩二郎

2015 『身体でみる異文化——目に見えないアメリカを描く』 京都：臨川書店。

〔編著〕

廣瀬浩二郎編

2014 『世界をさわる——新たな身体知の探究』 京都：文理閣。

〔共編〕

嶺重 慎・廣瀬浩二郎共編

2014 『知のバリアフリー——「障害」で学びを拓ける』 京都：京都大学学術出版会。

[論文]

廣瀬浩二郎

2014 「『さわる』で常識を疑う」『月刊 MOKU』2014(9)：56-63。

2014 「点字研究の最前線」『日本語学』2014(9)：15-19。

2015 「さわる文化が生み出す二つの“なみ”」阿部健一監修『五感／五環——文化が生まれるとき』pp.82-89, 京都：昭和堂。

[事典項目]

廣瀬浩二郎

2015 「日本語点字」庄司博史編『世界の文字事典』pp.370-373, 東京：丸善出版。

[その他]

廣瀬浩二郎

2014 「『さわる展示』の深化と応用②——観光のユニバーサルデザインを考える」『民博通信』145：18-19。

2014 「旅・いろいろ地球人 組織① 日系宗教の海外伝道」『毎日新聞』9月25日夕刊。

2014 「もっと、みんなで、ぴかぴかに」みんぱくミュージアムパートナーズ編『MMP10周年記念誌 あゆみ』p.5, 大阪：MMP ニューズレター編集局。

2014 「絵にさわる——“体”で感じる GF 絵画の魅力」『月刊みんぱく』38(11)：21。

2015 「点字とともに① さわる文字『点字』の起源」『毎日小学生新聞』2月7日。

2015 「点字とともに② 日本で最初の点字図書館」『毎日小学生新聞』2月14日。

2015 「点字とともに③ 日本で最初の盲学校は京都」『毎日小学生新聞』2月21日。

2015 「点字とともに④ 点字新聞 90年以上の歴史」『毎日小学生新聞』2月28日。

2015 「見常者がほしくなるような白杖を」『月刊みんぱく』39(2)：22-23。

2015 「『障害』を切り口に学びを変える」『京都大学新聞』2月16日。

2015 「観光・まちあるきのユニバーサル化をめざして」『からほり新聞』（特定非営利活動法人 高齢者外出介助の会）33：1。

2015 「ふれ愛——『さわる展示』の原点を求めて」『吹田市立博物館だより』61：7-8。

2015 「さわる文化とユニバーサルデザイン」愛媛県博物館協会編『愛媛の博物館』52：4-5。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会

2015年3月1日 「共同研究の回顧と展望」『触文化に関する人類学的研究——博物館を活用した“手学問”理論の構築』国際基督教大学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年6月28日 「“知”のバリアフリー——情報保障から情報変換へ」東海大学課程資格センター主催シンポジウム『ユニバーサル・ミュージアムの未来を語る』東海大学

2014年7月5日 「ユニバーサル・ミュージアムの六原則」吹田市立博物館主催シンポジウム『触ることで何が得られるのか』吹田市立博物館

2014年10月11日 「世界をさわる——盲人文化と現代」日本盲教育史研究会第3回大会基調講演、筑波大学東京キャンパス

2014年11月23日 「触常者とは誰か——自尊心・主導権・持続力を兼ね備えた“当事者”の模索」第87回日本社会学会・大会シンポジウム『〈当事者宣言〉の社会学』神戸大学

2015年1月24日 「頭を使うのか、体を使うのか——さわるミュージアムが先導する“知”のバリアフリー」大阪大学医学部主催シンポジウム『アートは脳の楽しみ』大阪大学・中之島センター

2015年2月22日 「ユニバーサル・ミュージアム論の新展開」日本アートマネジメント学会九州部会主催フォーラム『アートにさわって対話する』大分オアシスタワーホテル

・研究講演

2014年5月17日 「身体でみる異文化の世界——音で伝える、色を創る、心に触れる」大阪府立中央図書館主催『さわっておどろく！——触覚がひらく芸術・読書の世界』企画展関連講演会、大阪府立中央図書館

2014年5月25日 「触文化と身体感覚」大阪大学コミュニケーションデザイン・センター主催講演会、アートエリアB1

2014年 6 月11日 「ユニバーサル・ミュージアムの構想」 南山大学人類学博物館主催講演会、南山大学
 2014年 6 月14日 「触文化入門」 京都大学ポケットゼミ『障害とは何か』特別講義、国立民族学博物館
 2014年 6 月17日 「博物館とバリアフリー」 2014年度博物館学集中コース、国立民族学博物館
 2014年 6 月23日 「ユニバーサル・ミュージアムとは何か」 京都文教大学『博物館教育論』特別講義、京都文教大学
 2014年 7 月28日 「触察による制作・批評の可能性」 間島秀徳個展関連イベント、銀座 steps gallery
 2014年 8 月 1 日 「さわる世界と視覚障害者の文化」 愛知県立岡崎盲学校主催講演会、愛知県立岡崎盲学校
 2014年 8 月20日 「さわる世界と視覚障害者の文化」 石川県立盲学校主催講演会、石川県立盲学校
 2014年 8 月26日 「触常者とは誰か」 東京都教育委員会主催人権研修会、国立オリンピック記念青少年総合センター
 2014年 8 月27日 「視覚障害者と美術教育」 愛知県立名古屋盲学校主催講演会、愛知県立名古屋盲学校
 2014年 8 月31日 「『さわる展示』の現状と課題」 東京都美術館主催ボランティア研修会、東京都美術館
 2014年 9 月 4 日 「触常者とは誰か」 九州地区視覚障害者情報提供施設協会主催講演会、リーガロイヤルホテル小倉
 2014年 9 月26日 「“知”のバリアフリー」 天理教点字文庫主催講演会、天理教本部
 2014年10月26日 「世界をさわる——視覚障害者文化から触文化へ」 岡山県視覚障害を考える会主催講演会、川崎医療福祉大学
 2014年11月 6 日 「“知”のバリアフリー」 大阪府立大手前高校主催講演会、大阪府立大手前高校
 2014年11月 9 日 「さわる文化が遊びと学びの扉をひらく」 わらべ館主催講演会、鳥取市・わらべ館
 2014年11月12日 「視覚障害者の歴史と文化」 宮城県立盲学校主催講演会、大阪市・日本ライトハウス
 2014年11月14日 「触常者とは誰か」 池田市主催人権研修会、池田市役所
 2014年12月 6 日 「風を観る——観光・まちあるきのユニバーサル化をめざして」 空堀まちなみ井戸端会主催講演会、からほりお屋敷再生複合ショップ「練」
 2014年12月19日 「ユニバーサル・ミュージアムの理論と実践」 愛媛県博物館協会主催講演会、愛媛県美術館
 2014年12月24日 「盲人文化と視覚障害教育」 京都府立盲学校主催講演会、京都府立盲学校
 2015年 2 月11日 「深めて、伸ばして、新しくなるカラダのふしぎ」 キッズプラザ大阪主催ワークショップ『くらやみ探検』 キッズプラザ大阪
 2015年 2 月14日 「風を観る——情報保障から情報変換へ」 つくば市民大学主催講演会、筑波学院大学
 2015年 2 月21日 「触学・触楽の魅力」 朝倉文夫記念館主催講演会、朝倉文夫記念館
 2015年 3 月14日 「『世界をさわる』冒険が『知のバリアフリー』をもたらす」 千里コラボ大学主催講演会、千里公民館
 2015年 3 月21日 「身体でみる異文化」 コンタクト・インプロビゼーション・ミーティング・ジャパン実行委員会主催ワークショップ、デザイン・クリエイティブセンター神戸

・広報・社会連携活動

2014年 5 月 2 日 出演「ないとエッセー」『ラジオ深夜便』NHK ラジオ第1
 2014年 5 月 9 日 出演「ないとエッセー」『ラジオ深夜便』NHK ラジオ第1
 2014年 5 月16日 出演「ないとエッセー」『ラジオ深夜便』NHK ラジオ第1

◎調査活動

・国内調査

2014年 5 月 7 日 南山大学人類学博物館（「さわる展示」の現地調査、および関係者との意見交換）
 2014年 6 月20～21日 福島県いわき市（被災地ツーリズムのユニバーサルデザイン化に関する聞き取り調査）
 2014年 9 月11日 株式会社セガ エンタテインメント（3Dサウンドを応用したアトラクション開発に関する情報収集、関係者との意見交換）

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

吹田市立博物館協議会委員

・非常勤講師

筑波大学理療科教員養成施設「視覚障害教育」（集中講義）、関西学院大学「障害と人権」

山中由里子 [やまなか ゆりこ] ————— 准教授

1966年生。【学歴】カラマズー大学フランス語／美術専攻卒（1988）、東京大学大学院総合文化研究科修士課程修了（1991）、東京大学大学院総合文化研究科博士課程中退（1993）【職歴】日本学術振興会特別研究員（1992）、東京大学東洋文化研究所助手（1993）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（2004）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2009）【学位】学術博士（東京大学 2007）、学術修士（東京大学 1991）【専攻・専門】比較文学比較文化 西アジアにおけるアレクサンドロス伝説の比較文学的研究、「驚異」の文化史【所属学会】日本比較文学会、日本中東学会、オリエント学会、日本比較文明学会、国際比較文学会

【主要業績】

[単著]

山中由里子

2009 『アレクサンドロス変相——古代から中世イスラームへ』名古屋：名古屋大学出版会。

[共編]

Yamanaka, Y. and T. Nishio (eds.)

2006 *The Arabian Nights and Orientalism: Perspectives from the East and West*. London: I. B. Tauris.

[論文]

Yamanaka, Y.

2012 The Islamized Alexander in Chinese Geographies and Encyclopaedias. In R. Stoneman, K. Erickson and I. Netton (eds.) *The Alexander Romance in Persia and the East* (Ancient Narrative Supplements 15), pp.263-274. Groningen: Barkhuis.

【受賞歴】

2011 日本学術振興会賞

2011 日本学士院学術奨励賞

2010 島田謹二記念学藝賞

2010 日本比較文学会賞

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

中東およびヨーロッパにおける驚異譚の比較文学的研究

・研究の目的、内容

本研究が対象とする「驚異譚」とは、ラテン語で mirabilia、アラビア語・ペルシア語で 'ajā'ib と呼ばれる、辺境・異界・太古の怪異な事物や生き物についての言説である。未知の世界の摩訶不思議を語るこのようなエピソードは、東西の歴史書、博物誌・地誌、物語、旅行記・見聞記などに登場するが、これらの多くは古代世界から中世・近世の中東およびヨーロッパに継承され、様々な文化圏で共有されてきた。本研究で明らかにしようとする問題点は、次の3つの主要な軸にまとめることができる

- 1) ジャンルの枠組とモチーフの分類：驚異譚を比較研究することによって、実際にその言説の語り手（あるいは編纂者）によってどのように定義され、位置づけられてきたかを明らかにする。複数の文化圏に共通する主なモチーフや逸話を関連作品から抽出し、「異民族の驚異」、「異境の驚異」、「太古の驚異」といった分類を試みる。
- 2) 知識の伝播と世界観の変遷：権力の移行、人間の移動、書物・視覚イメージの普及など、知識の伝播や未踏の地の発見を促した歴史的な文脈を把握した上で、博物学・人文地理学の発展の流れを明らかにする。さらに、世界地図や挿絵・装飾などの視覚的表象にも注目し、中東とヨーロッパにおける世界観の変遷と相互の影響関係を辿る。
- 3) 宗教・言語・文化的な特異性と超域的な包括性：上記1)と2)のような比較研究を通して、宗教・言語・文化による相違点を浮かびあがらせる一方、異なる文化圏の驚異譚の根底に共通して流れる想像の力と語りの力を明らかにする。

本研究は、「中東およびヨーロッパにおける驚異譚の比較文学的研究」と題して、科学研究費補助金（基盤研

究(B))の交付を受けている。

・成果

本各個研究と共同研究の成果をまとめた論文集『＜驚異＞の文化史——中東とヨーロッパを中心に』を、民博の外部出版助成を得て名古屋大学出版会から2015年度中に刊行する。すでに全論文が揃い、編集作業を進めている。

2014年5月31日に東アジア怪異学会で発表し、その論文「＜驚異＞を媒介する旅人」が『怪異を媒介するもの』(アジア遊学)に掲載予定である。2015年1月14日から16日にゲッティンゲン大学で開かれた日独学術コロキウムで“Travelling Narratives and Networks of Knowledge: the Case of the Alexander Romance”を発表した。

本研究は、「中東およびヨーロッパにおける驚異譚の比較文学的研究」と題して、科学研究費補助金(基盤研究(B))の交付を受けている。また、機構連携研究「驚異と怪異の表象——比較研究の試み」とも連携している。館長リーダーシップ経費を得て研究フォーラム「驚異と怪異——想像界の比較研究に向けて」(2014年10月12日～13日)を開催し、研究の次なる展開を議論した。

◎出版物による業績

[論文]

山中由里子

2015 「未知との遭遇——驚異と怪異の比較研究」小松和彦編『怪異・妖怪文化の伝統と創造——ウチとソトの視点から』(国際研究集会報告書45) pp.31-42, 京都:国際日本文化研究センター。

[事典項目]

山中由里子

2014 「民族叙事詩」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.506-507, 東京:丸善出版。

[その他]

山中由里子

2014 「未知との遭遇——怪異と驚異の比較研究」『HUMAN——知の森へのいざない』6:74-78。

2014 「集めてみました世界の〇〇 ベル編」『月刊みんぱく』38(12):10-11。

2014-2015 「編集後記」『月刊みんぱく』38(4)~39(3)。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年5月31日 「驚異と怪異——想像界の比較研究」東アジア怪異学会、園田学園女子大学

2015年1月16日 ‘Travelling Narratives and Networks of Knowledge: the Case of the Alexander Romance,’ 日独学術コロキウム “Knowledge Transfer Across Borders: Integrative Approaches” ゲッティンゲン大学(ドイツ)

2015年1月24日 ‘L’esprit liquéfié en larme et son récipient,’ 国際シンポジウム『時のうつわ、魂のうつし/Réceptacle du passage』パリ日本文化会館

・展示

「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」実行委員、本館展示新構築総括班

・広報・社会連携活動

『月刊みんぱく』編集長

2014年9月28日 「絵解きの時」第357回みんぱくウィークエンド・サロン

2014年10月29日 「描かれた時間」連続講座「みんぱく×ナレッジキャピタル——イメージの力をさぐる」一般社団法人ナレッジキャピタル・国立民族学博物館共催、グランフロント大阪ナレッジキャピタル CAFE Lab.

2014年11月29日 特別展「イメージの力」展開連トークイベント「いいしんじ」司会進行・対談

2014年12月1日 ギャラリートーク「モスクの壁掛け」国立民族学博物館特別展示館

◎調査活動

・海外調査

2014年7月25日～9月1日ドイツ、イタリア(日独科学コロキウム企画調査研究及び驚異譚に関する資料調査)

2014年11月2日～11月23日ドイツ、フランス(ドイツ・フランスにおける日本ポップカルチャーの受容の調査)

2015年1月10日～1月26日ドイツ、フランス(日独科学コロキウムに参加、イスラーム世界における海洋交易に関する資料調査及びシンポジウム「時のうつわ、魂のうつし」に参加)

2015年3月28日～5月11日ドイツ、フランス(驚異の展示手法に関する調査及び驚異譚に関する資料調査)

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

「西アジア文化研究特論」担当

・論文審査

博士論文審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構連携研究代表者「驚異と怪異の表象——比較研究の試み」代表者、科学研究費補助金（基盤研究(B)）「日本現代文学・文化の世界展開の比較文学的研究——〈ポップ〉なテキストを中心に」（研究代表者：平石典子）研究分担者、国際日本文化研究センター共同研究「21世紀10年代日本文化の軌道修正——過去の検証と将来への提言」（代表：稲賀繁美）共同研究員

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

日独学術コロキウム「人文社会科学分野における知識移転（Knowledge Transfer across Borders: Integrative Approaches）」幹事（JSPS ボンセンター、ゲッティンゲン大学、人間文化研究機構主催、2015年1月14日～16日、Aula am Wilhelmsplatz 1, 37073 Göttingen）、日本比較文学会関西支部幹事、日本比較文学会国際活動委員会委員、外来研究員受入担当（ジェフリー・ハンブル、イギリス芸術・人文科学会議（AHRC）2月20日～4月20日）

齋藤玲子 [さいとう れいこ] ————— 助教

1966年生。【学歴】北海道大学文学部行動科学科卒（1989）【職歴】北海道教育委員会社会教育課学芸員（1989）、北海道立北方民族博物館学芸員（1990）、北海道立北方民族博物館主任学芸員（2005）、北海道立北方民族博物館学芸主幹（2010）、国立民族学博物館民族文化研究部助教（2011）【専攻・専門】文化人類学・アイヌの文化変容と表象、北アメリカ北西海岸先住民の美術工芸【所属学会】日本文化人類学会

【主要業績】

[編著]

齋藤玲子・大村敬一・岸上伸啓編

2010 『極北と森林の記憶——イヌイットと北西海岸インディアンの版画』京都：昭和堂。

[論文]

齋藤玲子

2012 「アイヌ工芸の200年——その歴史概観」山崎幸治・伊藤敦規編『世界のなかのアイヌ・アート（先住民アート・プロジェクト報告書）』pp.45-60, 札幌：北海道大学アイヌ・先住民研究センター。

2006 「極北地域における毛皮革の利用と技術」北海道立北方民族博物館編『環北太平洋の環境と文化』pp.65-83, 札幌：北海道大学出版会。

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アイヌ文化の継承と社会的背景の研究

・研究の目的、内容

アイヌ民族は、江戸時代中ごろから徐々に和人の支配下におかれ、明治時代には生業の規制と同化政策により経済的にも精神的にも大きな打撃を被った。戦時中は生活がいっそう困窮するとともに、総力戦体制下で「日本国民」として振る舞うことが当然とされた。こうして独自の文化の継承は次第に困難になり、アイヌ文化は途絶えた、とまで言われるような状態になった。しかし、実際は形を変えながらも多くの文化要素が受け継がれている。

今年度からは、アイヌ文化の継承と当時の社会状況との関係について、とくに物質文化と芸能に注目し、研究する。最終的に、物質文化や芸能が、記録の多く残る江戸時代後期からどう変化してきたかを明らかにし、現代のアイヌ文化の位置づけを示すことを目指す。

具体的には、一昨年スタートした「明治から終戦までの北海道・樺太・千島における人類学・民族学研究と収集活動」の共同研究において、各時代・各地域での生活用具や儀礼具などの製作および使用の状況と、それらを手放した（売却した）事情を明らかにすることから始める。また、科学研究費補助金（基盤研究（B））「北方寒冷地域における織布技術と布の機能」（代表：佐々木史郎、2014～2016年度）の連携研究者として、とくにアイヌの織物の継承についても調査をすすめる。

・成果

共同研究「明治から終戦までの北海道・樺太・千島における人類学・民族学研究と収集活動」では、東京大学大学院情報学環附属社会情報研究資料センター所蔵の坪井正五郎関係資料を中心に調査・研究をおこなった。とくに明治時代に北海道・樺太でアイヌおよびウイльтаやニヅフに関する調査が、どのような目的でどうおこなわれたかについて検討をした。民具類を収集する際の目安となる金額や、具体的な交渉内容を記した文書等を発見することができ、成果が得られた。また、関連して、東京大学理学部人類学教室で収集した民族資料がどのように管理されてきたか、残されたカードや台帳類の整理をとおして検討した。結果、資料移管時に付随してきた『土俗品目録』は資料を収集してすぐに作成された台帳ではなく、おそらく昭和のはじめに、分類をしながら作成されたものであるため、一部に情報の抜け落ちや混同があることもわかった。

芸能に関しては、IUAES2014において、アイヌの歌と踊りの継承と実践についてのパネルを企画・実施した。科学研究費補助金（基盤研究（B））「北方寒冷地域における織布技術と布の機能」では、アイヌの織物の継承のため、イラクサを素材にした糸づくりに実験的に取り組んできた事例について調査をおこなった。

◎出版物による業績

〔監修〕

齋藤玲子

2014 「第1部 トーテムポールの人びと」八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館編『トーテムポールの人びと——漁労・狩猟採集民のくらし』（平成26年度特別展示図録）pp.2-46, 青森：八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館。

〔事典項目〕

齋藤玲子

2014 「トーテム」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.156-157, 東京：丸善出版。

2014 「アイヌ」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.302-303, 東京：丸善出版。

2014 「民族集団と博物館」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.516-517, 東京：丸善出版。

〔その他〕

齋藤玲子

2014 「日本民族学会附属民族学博物館の収集資料」『民博通信』145：22-23。

2014 「グリーンランド・イヌイットの文化」『月刊みんぱく』38(10)：6-7。

2014 「『アイヌ古式舞踊』の多様なかたち」『月刊みんぱく』38(11)：14-15。

2014 「民博でのカムイノミ」（特集：民博の礎）『季刊民族学』150：78-79。

2015 「㊸木綿衣」『図画工作3・4 教師用指導書アートカード』, 大阪／東京：日本文教出版。

2015 「㊹トーテムポール（墓標）」『図画工作3・4 教師用指導書アートカード』大阪／東京：日本文教出版。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会

2014年9月24日 「坪井正五郎の北海道・樺太調査について」『明治から終戦までの北海道・樺太・千島における人類学・民族学研究と収集活動——国立民族学博物館所蔵のアイヌ、ウイльта、ニヅフ資料の再検討』東京大学情報学環

2015年1月24日 「坪井正五郎の樺太調査関係資料から見えるもの」『明治から終戦までの北海道・樺太・千島における人類学・民族学研究と収集活動——国立民族学博物館所蔵のアイヌ、ウイльта、ニヅフ資料の再検討』

2015年2月1日 「アイヌの木彫と表象——松前藩献上品から経産省の伝統的工芸品指定まで」『表象のポリテックス——グローバル世界における先住民／少数者を焦点に』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年5月17日 ‘Introduction.’ “Songs and Dances of the Ainu (Aynu): Heritage and Practice in Akan, Hokkaido, Japan.” 日本文化人類学会50周年記念国際大会 (Panel 136 in JASCA 50th Anniversary Conference + IUAES Inter-Congress 2014)、幕張メッセ

・みんぱくゼミナール

2014年11月15日 「美術館からみたみんぱくコレクション」(長屋光枝・山田由佳子氏と合同講演) 第438回みんぱくゼミナール

・研究講演

2014年8月30日 「サケがつなぐ東西の文化——北西海岸先住民とアイヌ民族」特別展考古学講座、八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館

・展示

「特別展 イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」実行委員、「企画展 未知なる大地——グリーンランドの自然と文化」実行委員、本館展示新構築総括班

・広報・社会連携活動

2014年4月30日 「日本の先住民族アイヌ」JICA 博物館学コース、国立民族学博物館

2014年6月26日 「アイヌ民族の歴史と文化」京都教育大学附属高校2年生対象、京都教育大学F棟大講義室2

2014年7月8日 「アイヌ民族の歴史と文化」プール学院中学校2年生対象、国立民族学博物館

2014年8月4日 「ようこそ国立民族学博物館へ」大阪府教育センター大阪府高等学校・支援学校初任者研修、国立民族学博物館

2014年8月30日 特別展ギャラリートーク「トーテムポールの人びと——漁労・採集民の暮らし」、八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館

2014年9月27日 トークイベント「イメージの力」司会・聞き手、国立民族学博物館講堂

2014年10月20日 特別展ギャラリートーク「今日のフォーカス」国立民族学博物館特別展示場

2014年10月26日 「消費されるイメージ——観光みやげか博物館資料か」第360回みんぱくウィークエンド・サロン

2014年11月11日 「特別展イメージの力の概要について」兵庫県阪神シニアカレッジ、国立民族学博物館

2014年11月12日 「イメージと商品化」連続講座「みんぱく×ナレッジキャピタル——イメージの力をさぐる」、グランフロント大阪ナレッジキャピタルCAFE Lab.

2014年11月22日～23日 ワークショップ「体感!! イメージの力」講師、国立民族学博物館社会連携室・特別展示場

2014年11月27日 「ミンパク オッタ カムイノミ」司会・解説

2014年12月21日 「アイヌ民族の歴史と文化」徳島市立高校対象(博学連携推進モデル事業「高校生が調べる鳥居龍藏——鳥居龍藏とアイヌについて」)、国立民族学博物館

2015年2月22日 特別コーナー展示「北方民族の装い」ギャラリートーク、松浦武四郎記念館

2015年3月18日 「日本とアイヌ民族 隣人としてくらす」産経新聞社主催、みんぱく創設40周年記念 カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館9階SPACE 9

◎調査活動

・国内調査

2014年9月18～22日一釧路市阿寒町(アイヌの織物に関する調査および資料収集)

2015年2月18日一天理市(アイヌの着物および捧酒箸に関する調査)

2015年3月20日一東京都(坪井正五郎関連資料の調査)

2015年3月23～24日一札幌市(アイヌの刺繍資料の調査)

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費(基盤研究(B))「北方寒冷地域における織布技術と布の機能」(研究代表者:佐々木史郎)連携研究者

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

「民族共生の象徴となる空間」における博物館の整備・運営に関する調査検討委員会臨時委員、北海道立北方民

族博物館研究協力員、日本文化人類学会50周年記念国際大会ソーシャル・プログラム委員

・非常勤講師

神戸女子大学「多文化共生論」

藤本透子 [ふじもと とうこ] ————— 助教

1975年生。【学歴】京都大学文学部史学科卒（1998）、京都大学大学院人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻修了（2002）、京都大学大学院人間・環境学研究科環境相関研究専攻博士課程研究指導認定退学（2007）【職歴】日本学術振興会特別研究員（2006）、京都大学大学院人間・環境学研究科研究員（2008）、国立民族学博物館機関研究員（2010）、国立民族学博物館民族文化研究部助教（2012）【学位】博士（人間・環境学）（京都大学大学院人間・環境学研究科 2010）修士（人間・環境学）（京都大学大学院人間・環境学研究科 2002）【専攻・専門】文化人類学、中央アジア地域研究【所属学会】日本文化人類学会、日本中央アジア学会、日本中東学会、日本イスラム協会

【主要業績】

[単著]

藤本透子

2011 『よみがえる死者儀礼——現代カザフのイスラーム復興』東京：風響社。

[共編著]

宇山智彦・藤本透子編著

2015 『カザフスタンを知るための60章』東京：明石書店。

[論文]

Fujimoto, T.

2011 Kazakh Memorial Services in the Post-Soviet Period: A Case Study of Northern Kazakhstan Villages. In T. Yamada and T. Irimoto (eds.) *Continuity, Symbiosis, and the Mind in Traditional Cultures of Modern Societies*, pp.117-132. Sapporo: Hokkaido University Press.

[受賞]

2013 人間文化研究奨励賞

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

中央アジアにおける社会再編とイスラームに関する人類学的研究——カザフスタンの事例を中心として

・研究の目的、内容

本研究は、昨年度から継続して、カザフスタンを中心としながら広く中央アジアの事例をふまえて行うものである。中央アジアの人類学研究は、これまで主にポスト社会主義人類学の枠組みで行われてきたが、現在では社会主義の影響を問うこと自体よりも、中央アジアという地域やイスラームという宗教の特徴に深く根ざした研究が必要となっている。中央アジア諸国では、それぞれ異なるかたちでイスラームが社会再編に一定の役割を果たしてきたが、カザフスタンではイスラームの再活性化が国境を越えた移動と結びつくという新たな現象が顕著である。本研究では、一方では特定の中東諸国との関係、他方ではカザフスタン国外のカザフ人（在外カザフ人）との関係に着目し、カザフスタンにおいてイスラームが再構築され社会空間を創出していくメカニズムを読み解くことを目的としている。

1) カザフのイスラーム動態と共同性再構築に関する調査研究

昨年度までの調査をふまえて、科学研究費補助金（基盤研究(B)）「多文化空間に生きる越境者の共同性再構築に関する地域間比較研究」（代表：山田孝子、2012～2014年度）の分担者として、ウズベキスタンのカザフ社会に関する調査を行う。さらに、ウズベキスタン・モンゴル・中国からカザフスタンに「帰還」したカザフ人の共同性再構築とイスラーム動態に関する調査を、カザフスタンで行う。

2) 中央アジア展示新構築（資料収集および基本設計）

2015年度の中央・北アジア展示新構築にむけて中央アジア資料の充実を図るため、文化資源プロジェクト「中央・北アジア展示新構築のための標本・映像音響資料収集」に基づき、カザフスタンとウズベキスタンで標本資料および映像音響資料を収集する。また、中央アジア展示の基本設計を行う。中央アジア研究の最

新の成果をふまえて「カザフ草原の暮らし」、「オアシス都市と職人の世界」、「人生儀礼とイスラーム」の3つのサブセクションを設けて展示を新構築する予定である。

・成果

1) カザフのイスラーム動態と共同性再構築に関する調査研究

科学研究費補助金（基盤研究(B)）「多文化空間に生きる越境者の共同性再構築に関する地域間比較研究」（代表：山田孝子、2012～2014年度）の分担者として、モンゴル・中国・ウズベキスタンからカザフスタンに「帰還」したカザフ人の共同性再構築とイスラーム動態に関する調査をカザフスタンで行い、ウズベキスタンでも補足調査を行った。この調査を含め、これまで3年間の調査研究の成果として、12月に国際ワークショップ Migration and the Remaking of Ethnic/Micro-regional Connectedness を民博で共催し、Migration to the “Historical Homeland”: Remaking Connectedness in Kazakh Society beyond National Borders と題して発表した。また、国立民族学博物館共同研究（若手）の成果として、『現代アジアの宗教——社会主義を経た地域を読む』（編著）が研究出版委員会の査読を経て採択された（春風社より2015年5月出版予定）。本書では、現代において宗教が（再）活性化するメカニズムを、社会主義をさまざまなかたちで経験してきたアジアを対象として、人類学的アプローチから明らかにしている。

2) 中央アジア展示新構築（資料収集および基本設計）

中央アジア展示を30年ぶりにリニューアルするため基本設計を行い、文化資源プロジェクト「中央・北アジア展示新構築のための標本・映像音響資料の収集」に基づいて、8～9月にカザフスタン、10月にウズベキスタン、3月に再度カザフスタンで計約200点の標本資料を収集した。この資料収集により、「草原の暮らし」「まちの暮らし」「職人の世界」「人生儀礼とイスラーム」という新たな枠組みで中央アジア展示を行う準備が整った（2015年度リニューアル予定）。また、中央・北アジア全体として「自然との共生」「社会主義と民族文化」に関する展示をするため、収蔵資料の選定などを行った。さらに、中央アジアに関する最新の研究成果を社会還元する一環として、『カザフスタンを知るための60章』（共編著、明石書店）を3月に出版した。

◎出版物による業績

〔共編著〕

宇山智彦・藤本透子編著

2015 『カザフスタンを知るための60章』東京：明石書店。

〔論文〕

藤本透子

2014 「カザフスタンの体制移行を生きる女性たち——草原の村の結婚と子育てを中心に」福原裕二・吉村慎太郎編『現代アジアの女性たち——グローバル化社会を生きる』pp.135-153、東京：新水社〔査読有〕。

2015 「『歴史的祖国』への移住——カザフスタンにおける『帰還者』の生活と祝祭・宗教実践」小島敬裕編『移動と宗教実践——地域社会の動態に関する比較研究』（CIAS Discussion Paper No.47）pp.45-54。

〔その他〕

藤本透子

2014 「集めてみました世界の〇〇 お棺編」『月刊みんぱく』28(11)：10-11。

2014 「カザフスタン村落部における恋愛結婚の諸相」『アジ研・ワールドトレンド』22：26-27。

2014 「私の研究と出会い——カザフ草原の村から展望するイスラーム動態」『HUMAN——知の森へのいざない』7：141-146。

2014 「旅・いろいろ地球人 父親⑥ 草原に生きる」『毎日新聞』12月18日夕刊。

2015 「旅・いろいろ地球人 信じる① ゆるやかなイスラム」『毎日新聞』1月22日夕刊。

2015 「書評 島村一平『増殖するシャーマン——モンゴル・ブリヤートのシャマニズムとエスニシティ』2011年、春風社」『日本モンゴル学会紀要』44：83-86〔査読有〕。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2014年12月5日 ‘Migration to the “Historical Homeland”: Remaking Connectedness in Kazakh Society beyond National Borders,’ International Workshop on Migration and the Remaking of Ethnic/Micro-Regional Connectedness, National Museum of Ethnology

・共同研究会

2014年6月28日 「近代宗教制度報告——カザフスタン」『宗教人類学の再創造——滲出する宗教性と現代世界』

2014年7月6日 「イスラーム復興のなかの贈与交換——カザフスタンの事例から」『贈与論再考——「贈与」・「交換」・「分配」に関する学際的比較研究』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年1月10日 『『歴史的祖国』への移住とイスラーム——カザフスタンの事例から』京都大学地域研究統合情報センター共同研究『移動と宗教実践——地域社会の動態に関する比較研究』（代表：小島敬裕）、京都大学地域研究統合情報センター

・研究講演

2015年1月30日 「イスラーム社会の文化人類学——中央アジアを例に」阪神シニアカレッジ国際理解学科2年生、尼崎中小企業センター

2015年1月30日 「イスラーム文化入門」阪神シニアカレッジ国際理解学科1年生、尼崎中小企業センター

2015年2月6日 「中央アジアの社会再編とイスラーム」園田・みんぱく連携講座「変化する現代世界」、園田学園女子大学

・展示

年末年始展示イベント「ひつじ」写真パネル「嫁入り道具のフェルト」、資料写真パネル「羊毛巻き付け具」中央・北アジア展示チームリーダー、文化資源プロジェクト「中央・北アジア展示新構築のための標本・映像音響資料の収集」提案者

・広報・社会連携活動

2015年1月25日 「中央アジアの嫁入り道具」第369回みんぱくウィークエンド・サロン

◎調査活動

・海外調査

2014年8月8日～9月6日—カザフスタン（中央アジアにおける標本・映像音響資料の収集及びカザフ社会における宗教動態と共同性の再構築に関する調査）

2014年9月29日～10月23日—ウズベキスタン（中央アジアにおける標本・映像音響資料の収集及びカザフ社会における宗教動態と共同性の再構築に関する調査）

2015年3月3日～3月28日—カザフスタン（中央アジア展示新構築のための標本・映像音響資料の収集）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（B））「多文化空間に生きる越境者の共同性再構築に関する地域間比較研究」（代表：山田孝子）研究分担者、京都大学地域研究統合情報センター共同研究「移動と宗教実践——地域社会の動態に関する比較研究」（代表：小島敬裕）共同研究員、京都大学地域研究統合情報センター共同研究「書誌情報データベースの地域情報学的新展開を探る」（代表：帯谷知可）共同研究員、『日本中央アジア学会報』編集委員

先端人類科学研究部

寺田吉孝 [てらだ よしたか] ————— 部長(併)教授

【学歴】ワシントン大学総合学部学士課程修了（1979）、ワシントン大学音楽部修士課程修了（1983）、ワシントン大学音楽部博士課程修了（1992）【職歴】ワシントン大学音楽部講師（1994）、ピッツバーグ大学船上大学プログラム講師（1995）、国立民族学博物館第2研究部助手（1996）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科兼任（1999）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2008）【学位】Ph. D.（ワシントン大学音楽部民族音楽学科 1992）、M. A.（ワシントン大学音楽部民族音楽学科 1983）【専攻・専門】民族音楽学【所属学会】東洋音楽学会、Society for Ethnomusicology、International Council for Traditional Music、British Forum for Ethnomusicology

【主要業績】

[編著]

Terada, Y. (ed.)

2008 *Music and Society in South Asia: Perspectives from Japan* (Senri Ethnological Studies 71). Osaka: National Museum of Ethnology.

2001 *Transcending Boundaries: Asian Musics in North America* (Senri Ethnological Reports 22). Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

Terada, Y.

2000 T. N. Rajaratnam Pillai and Caste Rivalry in South Indian Classical Music. *Ethnomusicology* 44(3): 460-490.

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

音楽・芸能の伝承における映像メディアの活用

・研究の目的、内容

民博が映像メディアを用いて蓄積してきた音楽・芸能の情報は膨大な量に達しており、その資料的価値は高い。しかし、活発な収集・制作活動に比べ、映像音響資料の活用に関する議論はこれまで十分に行われておらず、館外での利用、特に取材対象国・地域においての利用は極めて限定的である。本研究は、これまでの番組作成と活用のプロセス（事前調査、取材、編集、上映など）を見直し、音楽・芸能の伝承に寄与することができる映像番組の制作方法を検討することを目的とする。

・成果

映像メディアが音楽芸能の継承に果たす役割について、フィリピン（2014年10月）、スペイン（同年11月）、マレーシア（2015年1月）で開催された国際研究集会で研究発表を行うとともに、国際学会、大学、映画祭などで、民博制作映像番組の上映会を計10回開催し、視聴者からの反応に基づいて映像メディアの活用について考察を進めた。これらの研究発表、上映会に基づいた論文を執筆し、スペインのシンポジウムの報告論文集に投稿した。上記の研究は、本研究は人間文化研究機構連携研究「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的研究」（代表者：福岡正太）および科学研究費補助金（基盤研究(B)）「映像を用いた東南アジアのゴング文化の音楽人類学的研究」（代表者：福岡正太）の一環として実施したものである。

◎出版物による業績

[論文]

Terada, Y.

2014 The Circular Flow of South Indian Music and Dance. In U. Hemetek, E. Marks and A. Reyes (eds.) *Music and Minorities from Around the World: Research, Documentation and Interdisciplinary Study*, pp.47-71. Newcastle upon Tyne: Cambridge Scholars Publishing [査読有].

[事典項目]

寺田吉孝

2014 「芸能・芸術」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』p.473, 東京：丸善出版。

2014 「楽器」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.480-481, 東京：丸善出版。

[その他]

寺田吉孝

2014 「旅・いろいろ地球人 組織⑤ 北米のタイコ」『毎日新聞』10月23日夕刊。

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

[ビデオテープ]

米野みちよ・寺田吉孝制作監修

2014 『祝いの音、勝利の記憶——フィリピン・ルソン島山地民の結婚式』日本語, 25分。

2014 *Sounds of Bliss, Echoes of Victory: A Kalinga Wedding in the Northern Philippines*. 英語, 25分。

2014 *Kasar iti Tabuk*. イロカノ語, 25分。

ガルフィアス, R・寺田吉孝制作監修

2014 *Guitars of Puerto Rico*. 英語, 66分。

2014 *Guitars of Portugal*. 英語, 47分。

・DVD・CDなどの制作・監修

[DVD]

寺田吉孝監修

2015 『みんぱく映像民族誌 第17集 沖縄のエイサー、大阪のエイサー』 日本語, 85分/76分。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2015年1月25日 「カナダ、トロント市における南インド音楽・舞踊の実践」現代インド地域研究民博拠点 第4回研究会（代表：三尾 稔）、国立民族学博物館

・共同研究会

2015年2月28日 「南インド音楽・舞踊とグローバル化」『グローバリゼーションの中で変容する南アジア芸能の人類学的研究』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年10月16日 ‘Recent Documentation Projects at the National Museum of Ethnology’ “Laon-Laon Forum and Conference-Workshop on Preservation of Music Heritage in Asia” フィリピン大学民族音楽学センター（ケソンシティ、フィリピン）

2014年11月5日 ‘On Making *Drumming out a Message*: Filmmaking and Marginalized Communities.’ “MusiCam 2014: International Conference on Visual Ethnomusicology” バリャドリッド大学（バリャドリッド、スペイン）

2015年1月2日 ‘The Music Cultures of the Marginalized Communities’ マドラス大学「メディアと社会」セミナーシリーズ（チェンナイ、インド）

2015年1月26日 ‘Safeguarding Intangible Cultural Heritage: Process-oriented Applications of Audiovisual Media.’ アジア太平洋無形文化遺産国際研究センター（IRCI）国際専門家会議、イスラム芸術博物館（クアラルンプール、マレーシア）

・研究講演

2014年4月9日 「演じる音——チャルメラの音に集う人々」産経新聞社主催、みんぱく創設40周年記念 カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館9階SPACE9

2014年6月11日 「人生は音楽の調べとともに——移り変わるインドの結婚式」産経新聞社主催、みんぱく創設40周年記念 カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館9階SPACE9

2014年9月17日 「島々に響く青銅と竹の音——フィリピンの伝統音楽」産経新聞社主催、みんぱく創設40周年記念 カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館9階SPACE9

2014年10月30日 「神像『ナタラージャ』」特別展『イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる』ギャラリートーク、国立民族学博物館特別展示館

2015年2月21日 「南インド社会と音楽」第10回無形文化遺産理解セミナー、堺市博物館

2015年2月22日 「音楽展示の楽しみ方」第373回みんぱくウィークエンド・サロン

2015年2月25日 「音楽展示は楽器展示？」第5回MMPステップアップ講座、国立民族学博物館

・研究公演

2014年7月20日 「アリラン峠を越えていく——在日コリアン音楽の今」国立民族学博物館講堂

・広報・社会連携活動

[映像番組上映]

2014年7月20日 *Sounds of Bliss, Echoes of Victory: A Kalinga Wedding in the Northern Philippines* (2014年制作) 国際伝統音楽評議会「音楽とマイノリティ」研究グループ第8回国際シンポジウム、国立民族学博物館

2014年10月16日 *Sounds of Bliss, Echoes of Victory: A Kalinga Wedding in the Northern Philippines* および *Music in the Life of Balbalasang: A Village in the Northern Philippines* (共に2014年制作) ラオンラオン会議、フィリピン大学ディリマン校（ケソンシティ、フィリピン）

2014年10月19日 *Musika iti biag ti baryo Balbalasang, amianan ti Pilipinas* (イロカノ語、2014年制作) 聖ボ

ール教会（バルバラサン、フィリピン）

2014年10月21日 *Kasar iti Tabuk*（イロカノ語、2014年制作）撮影現地上映会（タブク、フィリピン）

2014年10月24日 *Sounds of Bliss, Echoes of Victory: A Kalinga Wedding in the Northern Philippines* および *Music in the Life of Balbalasang: A Village in the Northern Philippines* フィリピン人類学会（UGAT）第36回大会、セントルイス大学（バギオ、フィリピン）

2014年11月28日 *Valencia's Virgin Mary Festival and the Dulzaina*（2013年制作）および *Guitars of Puerto Rico*（2014年制作）第4回国際民俗音楽映画祭（カトマンズ、ネパール）

2015年1月17日 『大阪のエイサー——思いの交わる場』（2003年制作）天久ヒルトップ（那覇）

2015年2月4日 *Sounds of Bliss, Echoes of Victory: A Kalinga Wedding in the Northern Philippines* および *Music in the Life of Balbalasang: A Village in the Northern Philippines*、TALA ゲストハウス（バギオ、フィリピン）

2015年2月5日 *Sounds of Bliss, Echoes of Victory: A Kalinga Wedding in the Northern Philippines* および *Music in the Life of Balbalasang: A Village in the Northern Philippines*、フィリピン大学バギオ校（バギオ、フィリピン）

2015年2月7日 *Sounds of Bliss, Echoes of Victory: A Kalinga Wedding in the Northern Philippines* および *Music in the Life of Balbalasang: A Village in the Northern Philippines*、フィリピン大学ディリマン校アジアセンター（ケソンシティ、フィリピン）

[ラジオ放送]

2015年3月23日 出演『中村こずえの smile for you』静岡放送SBS ラジオ

◎調査活動

・国内調査

2014年6月28日、7月12日、8月1日、22日、12月17日、18日、2015年3月12日、20日、27日—大阪市（太鼓製作に関する映像音響資料収集）

・海外調査

2014年10月12日～10月23日—フィリピン（アジア音楽伝統の保存に関する国際会議へ参加及び民博制作映像番組の上映会）

2014年11月3日～11月10日—スペイン（映像民族音楽学国際会議に参加、発表及び研究グループ「映像民族音楽学」設立にむけての審議）

2014年12月24日～2015年1月5日—インド（南インド音楽世界の定量的研究調査）

2015年1月25日～1月27日—マレーシア（アジア・太平洋地域における無形文化遺産保存に関する専門家会議に参加）

2015年2月3日～2月8日—フィリピン（民博制作映像番組の現地上映会）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（1人）

・論文審査

博士論文審査委員（1件）、予備審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（C））「インド音楽の定量的研究」連携研究者、科学研究費補助金（基盤研究（B））「映像を用いた東南アジアのゴング文化の音楽人類学的研究」研究分担者、人間文化研究機構連携研究「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」研究分担者

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

国際伝統音楽評議会 International Council for Traditional Music 理事、学会誌 *Yearbook for Traditional Music* 映画・ビデオレビュー編集委員、「音楽とマイノリティ」研究グループ書記長、*Ethnomusicology Forum* 誌（イギリス）編集助言委員、*Asian Music* 誌（アメリカ合衆国）編集助言委員、ネパール民俗音楽映画祭（ネパール）国際運営委員、博士論文審査委員（沖縄県立芸術大学）

・非常勤講師

北海道教育大学岩見沢校「アジア文化史Ⅱ」（集中講義）

◎学会の開催

2014年5月18日 国際シンポジウム「フィリピン音楽の映像音響記録——ロベルト・ガルフィアスの歴史的貢献」国立民族学博物館

2014年7月19日～23日 国際伝統音楽評議会「音楽とマイノリティ」研究会第8回国際シンポジウム、国立民族学博物館

齋藤 晃 [さいとう あきら]—————教授

【学歴】 京都大学文学部文学科フランス語学フランス文学専攻卒（1988）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻修士課程修了（1991）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程単位取得退学（1994）【職歴】 国立民族学博物館第4研究部助手（1996）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（1998）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（2003）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2006）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2014）【学位】 学術修士（東京大学大学院総合文化研究科 1991）【専攻・専門】 文化人類学、ラテンアメリカ研究【所属学会】 日本文化人類学会、日本ラテンアメリカ学会

【主要業績】

[共著]

岡田裕成・齋藤 晃

2007 『南米キリスト教美術とコロニアリズム』名古屋：名古屋大学出版会。

[編著]

齋藤 晃編

2009 『テキストと人文学——知の土台を解剖する』京都：人文書院。

[共編]

Saito, A. et Y. Nakamura (dir.)

2010 *Les outils de la pensée: étude historique et comparative des «textes»*. Paris: Éditions de la Maison des sciences de l'homme.

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

スペイン領南米における集住政策の先住民社会への影響

・研究の目的、内容

スペイン統治下のアメリカでは、広い範囲に分散する小規模な集落を西欧式の大きな町に統合する集住政策が、植民地全土で実施された。本研究は、この政策の先住民社会への長期的影響を、南米のさまざまな地域の事例の比較を通じて解明する。

・成果

民博の機関研究「近代ヒスパニック世界における国家・共同体・アイデンティティ——スペイン領アメリカの集住政策の研究」の一環として教皇庁立ペルーカトリカ大学（リマ、ペルー）で2013年度に開催した公開セミナーの成果を『国立民族学博物館研究報告』に刊行した。また、2010年度以来進めてきた集住政策に関する国際共同研究の最終成果として、スペイン語の論集をとりまとめた。民博の外部出版経費を申請するため原稿を研究出版委員会に提出し、査読を経て申請が採択された。

民博の研究成果公開プログラムにより、2014年8月、教皇庁立チリカトリカ大学（サンティアゴ、チリ）で開催された第15回国際イエズス会ミッション会議に参加した。会議では、招待講演をおこなうとともに、チリ人研究者と共同でシンポジウムを実施した。成果はスペイン語の論文にまとめ、外国の学術雑誌に投稿した。

◎出版物による業績

[論文]

Saito, A., C. Rosas Lauro, J. R. Mumford, S. A. Wernke, M. Zuloaga Rada y K. Spalding

2014 Nuevos avances en el estudio de las reducciones toledanas. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 39(1): 123-167 [査読有、機関研究成果].

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会

2014年12月21日 「近世カトリックの世界宣教と文化順応——趣旨説明」『近世カトリックの世界宣教と文化順応』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年8月28日 ‘Consolidación y reproducción de las parcialidades en las reducciones jesuíticas de Moxos (パネル報告)’ 国際シンポジウム “XV Jornadas Internacionales sobre las Misiones Jesuíticas.” Santiago de Chile: Pontificia Universidad Católica de Chile

2014年8月29日 ‘La guerra indígena y la expansión misional en Moxos, siglos XVII-XVIII (招待講演)’ 国際シンポジウム “XV Jornadas Internacionales sobre las Misiones Jesuíticas.” Santiago de Chile: Pontificia Universidad Católica de Chile

◎調査活動

・海外調査

2014年8月23日～9月6日一チリ、ペルー（第15回国際イエズス会ミッション会議における研究成果発表及び機関研究の成果刊行のための準備会合）

2015年3月22日～3月27日—中華人民共和国（近世アジアにおけるカトリックの宣教活動に関する文献調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構連携研究『9-19世紀文書資料の多元的複眼的比較研究』共同研究員

佐々木史郎 [ささき しろう] ————— 教授

1957年生。【学歴】東京大学教養学部教養学科第一卒（1981）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1983）、東京大学大学院社会学研究科博士課程中退（1985）【職歴】国立民族学博物館第1研究部助手（1985）、大阪大学言語文化学部助教授（1991）、国立民族学博物館第4研究部助教授（1995）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1995）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助教授（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2003）、国立民族学博物館研究戦略センター長併任（2004-2007）、国立民族学博物館副館長併任（2010-2012）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長併任（2013-2015）【学位】学術博士（東京大学大学院総合文化研究科 1989）、社会学修士（東京大学大学院社会学研究科 1983）【専攻・専門】文化人類学 1) シベリア、ロシア極東先住民の狩猟文化、トナカイ飼育文化の研究、2) ロシア極東先住民の近世史、近代史の研究【所属学会】日本文化人類学会、言語文化学会

【主要業績】

[単著]

佐々木史郎

2015 『シベリアで生命の暖かさを感じる』（フィールドワーク選書13）京都：臨川書店。

1996 『北方から来た交易民——絹と毛皮とサンタン人』（NHK ブックス772）東京：日本放送出版協会。

[編著]

Sasaki, S. (ed.)

2009 *Human-Nature Relation and Historical-Cultural Backgrounds of Hunter-Gatherer Cultures in Northeast Asian Forests: Russian Far East and Northeast Japan* (Senri Ethnological Studies 72). Osaka: National Museum of Ethnology.

【受賞歴】

1997 第25回澁澤賞

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

極東ロシア、日本列島北部における近世から近代への転換

・研究の目的、内容

本研究は、これまで継続してきたアムール川下流域の歴史に関する研究をさらに発展させ、地域、対象民族の幅を広げる。すなわち、アムール川流域だけでなく、樺太（サハリン）、千島列島（クリル列島）、北海道まで対象地域を広げ、そこに暮らしてきた現在の先住民族の祖先たちが近代という時代を迎えて、それにどのように対応したのかという点を検討する。ただし従来のように、受動的な社会や文化の変化（多数派民族文化への同化、あるいは伝統文化、民族文化の衰退、消滅）に着目するのではなく、彼らの変化していく政治経済情勢に対する積極的な対応、適応の過程に着目する。

・成果

本各個研究独自の成果として、千島アイヌの文化のあり方を再考する論考、「鳥居龍蔵が会った北方民族——千島アイヌ」ヨーゼフ・クライナー編『日本とは何か——二〇世紀の民族学』pp.78-79, 東京堂出版（2014年）を発表した。そこで、千島アイヌの独自性は周辺諸民族との交流だけでなく、千島列島をめぐる日ロの政治的な駆け引きにも影響を受けていたことを明らかにした。

ついで、2009年度から2012年度まで実施した科学研究費補助金（基盤研究（A）『ロシア極東森林地帯における文化の環境適応』）による調査研究の成果の一つとして、「北東アジア先住民族の歴史・文化表象——中国黒竜江省敖其村の赫哲族ゲイケル・ハラの人々の事例から」『国立民族学博物館研究報告』39(3)：321-373、2015年を発表した。そこでは、松花江流域とアムール川下流域とに離ればなれになってしまったゲイケル・ハラというナーナイの一族の歴史を文書と伝承から復元すると共に、中国、ロシア、日本に広く流布するナーナイという先住民族のイメージと文化表象のあり方が有する問題点を明らかにした。

また、2008年度から2011年度まで実施した共同研究「ポスト社会主義以後の社会変容——比較民族誌的研究」の成果公開としての論集の編集作業を終え、2015年度初頭に国立民族学博物館論集として研究編集委員会に刊行申請するめどが立った。

◎出版物による業績

[単著]

佐々木史郎

2015 『シベリアで生命の暖かさを感じる』（フィールドワーク選書13）京都：臨川書店。

[共編著]

Шагланова Ольга А. и Сасаки Сиро (ред.)

2015 *Культурное наследие бурят, эвенков и семейских: Предметы материальной и духовной культуры из коллекций Этнографического музея народов Забайкалья (Республика Бурятия, Россия)* (Senri Ethnological Reports 128). Осака: Национальный музей этнологии [査読有].

[論文]

佐々木史郎

2014 「鳥居龍蔵が会った北方民族——千島アイヌ」ヨーゼフ・クライナー編『日本とは何か——二〇世紀の民族学』pp.78-96, 東京：東京堂出版。

2015 「北東アジア先住民族の歴史・文化表象——中国黒竜江省敖其村の赫哲族ゲイケル・ハラの人々の事例から」『国立民族学博物館研究報告』39(3)：321-373 [査読有]。

2015 「クロテンの森の先住民族——極東ロシアの森林開発・森林保護とウデヘの人々」北海道立北方民族博物館編『環境変化と先住民の生業文化——開発と適応』（第29回北方民族文化シンポジウム網走報告）pp.27-32, 北海道：一般財団法人北方文化振興協会。

[その他]

佐々木史郎

2014 「変わる国籍変らない人の絆——旧ソ連地域における収集」『季刊民族学』150：73-77。

2014 「民族学資料の情報化とデジタル化」『民博通信』147：9-10。

2015 「コメント」『『坪井正五郎』の著者川村伸秀氏を囲んで』（基幹研究「人類学におけるミクロ・マクロ系の連関」2013年度第2回公開セミナー（2014年1月23日）報告書）pp.20-27, 東京：東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所。

2015 「集めてみました世界の〇〇 手袋編」『月刊みんぱく』39(2)：10-11。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2015年3月10日 「趣旨説明」、「『国立のアイヌ文化博物館』（仮称）の基本構想」機関研究「民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究——ロシア民族学博物館との国際共同研究」第5回国際ワークショップ『民族学資料の展示への利用とソースコミュニティとの協力関係』、国立民族学博物館

・共同研究会での報告

2015年2月28日 「虻田で作られた木綿衣の分布と年代——ロシアおよび北海道の博物館の資料調査から」『明治から終戦までの北海道・樺太・千島における人類学・民族学研究と収集活動——国立民族学博物館所蔵のアイヌ、ウイラ、ニヅフ資料の再検討』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年5月17日 ‘Commercial Hunting of the Indigenous People in the Russian Far East: the Change of their Hunting Strategy and Techniques. Hunting, Animal Welfare, and Defense against Wildlife Attack’ (P051, convener: Nobayashi Atsushi), International Union of Anthropological and Ethnological Sciences Inter-Congress 2014, Makuhari Messe, Chiba

2014年8月23日 「間宮林蔵が見たデレンの賑わい——交易に集まった人々の実像」『第22回環オホーツク海文化のつどい』紋別市文化会館

2014年10月4日 「クロテンの森の先住民族——極東ロシアの森林開発・森林保護とウデへの人々」『第29回北方民族文化シンポジウム』オホーツク・文化交流センター（網走市）

・研究講演

2014年12月6日 「ナラ林文化を再考する」第437回国立民族学博物館友の会講演会

・広報・社会連携活動

2014年12月10日 「江戸の探検家、間宮林蔵と北方世界」産経新聞社主催、みんぱく創設40周年記念第26回カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館9階SPACE9

2015年1月12日 「北方の織布と織機」第368回みんぱくウィークエンド・サロン

◎調査活動

・国内調査

2014年7月13日～17日—北海道札幌、静内、千歳（アイヌの古い木綿糸擦文時代の出土繊維断片の調査、科学研究費補助金（基盤研究(B)）「北方寒冷地域における織布技術と布の機能」（研究代表者：佐々木史郎）による）

2014年11月15日～18日—北海道函館、札幌、釧路（アイヌの古い木綿衣、アットゥシと千島列島シュムシュ島出土のオホーツク文化期の出土繊維断片の調査、科学研究費補助金（基盤研究(B)）「北方寒冷地域における織布技術と布の機能」（研究代表者：佐々木史郎）による）

・海外調査

2014年6月23日～7月6日—ロシア（科学研究費補助金（基盤研究(B)）「北方寒冷地域における織布技術と布の機能」資料調査、機関研究に係る国際ワークショップへ参加）

2014年8月2日～8月17日—ロシア（科学研究費補助金（基盤研究(B)）「北方寒冷地域における織布技術と布の機能」資料調査）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（2人）、副指導教員（1人）

・論文審査

博士論文審査委員（1件）、予備審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構『日本関連在外資料の調査研究』『シーボルト父子関係資料をはじめとする前近代（19世紀）に日本で収集された資料についての基本的調査研究』ロシアと北欧における日本関連アジア資料の調査研究班共同研究員、科学研究費補助金（基盤研究（B））「野生動物の生息域拡大期における都市防衛システムの開発に関する環境学研究」（代表者：田口洋美）研究分担者

◎社会活動・館外活動

- ・他機関から委嘱された委員など

公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構評議員、「民族共生の象徴となる空間」における博物館の整備・運営に関する調査検討委員会委員、北海道大学スラブ研究センター客員研究員

飯田 卓 [いいだ たく] ————— 准教授

1969年生。【学歴】北海道大学文学部行動科学科卒（1992）、京都大学大学院人間・環境学研究科人間・環境学専攻修士課程修了（1994）、京都大学大学院人間・環境学研究科人間・環境学専攻博士後期課程研究指導認定退学（1999）【職歴】日本学術振興会特別研究員（DC1）（1994）、日本学術振興会特別研究員（PD）（1999）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（2000）、国立民族学博物館研究戦略センター助手（2006）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2008）【学位】博士（人間・環境学）（京都大学 2000）、修士（人間・環境学）（京都大学 1994）【専攻・専門】生態人類学、視覚メディアの人類学、文化遺産の人類学【所属学会】生態人類学会、日本アフリカ学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

飯田 卓

2014 『身をもって知る技法——マダガスカルの漁師に学ぶ』京都：臨川書店。

[編著書]

飯田 卓・深澤秀夫・森山 工編

2013 『マダガスカルのための62章』東京：明石書店。

[論文]

飯田 卓

2010 「プリコラージュ実践の共同体——マダガスカル、ヴェズ漁村におけるグローバルなフローの流用」『文化人類学』75(1)：60-80。

【受賞歴】

2010 日本アフリカ学会学術研究奨励賞

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

南西諸島の火薬漁に関する研究

・研究の目的、内容

終戦前後に南西諸島一帯で広くおこなわれていた火薬漁の実態について、聞きこみ調査をおこなう。火薬漁は、これまでは「ダイナマイト漁」と呼ばれ、関係者のあいだで知られてきた。また、新聞記事や紀行エッセイなどのなかにも断片的な記述がある。しかし、地域を超えた一般的現象としてこの漁を捉え、日本の漁業史の重要な一断面として位置づける作業はなされてこなかった。

その例証として、ダイナマイト漁と呼ばれる実践の多様性がふまえていなかったことがあげられる。じつはこの漁に使われる火薬は、ダイナマイトに由来するものだけでなく、未使用の砲弾や不発弾、機雷などから抜きとるという例がまみられる。調達先も、闇市場、米軍基地、日本軍の弾薬庫、炭鉱などとさまざまである。また、この漁をおこなっていた人たちも、漁獲効率を高めようとする職業的な漁師や、食糧不足時に漁

具や漁船を持たなかった農業者、戦後に駐屯先で居つこうとした旧軍人など、さまざまである。こうした多様性をみていくなかで、戦時中や終戦直後に漁業がもっていた意味を明らかにすることが、本研究の最終的な目的である。

なお、この漁は現在もはやおこなわれていないと考えられているが、本研究の公表によって情報提供者が不利益をこうむらないよう、細心の注意を払うつもりである。とくに、違法行為として興味本位で紹介されてきたこの漁が、特別な時代状況においておこなわれてきたことを強調し、これまでの否定的なイメージを払拭するよう努める。

・成果

沖縄地域や奄美地域、さらには北部九州にいたる複数の地点において聞きとり調査を進めた。その詳細は今後公表する予定だが、大分県での聞きとりから、当初想定していたよりも広範囲においてこのタイプの漁がおこなわれていたことが明らかになった。

文献史料を調査するなかでは、戦後に島嶼地域と中国方面を繋いでいた貿易船がダイナマイトを常備していたことが明らかになり、火薬の有力な入手ルートである可能性が浮びあがってきた。また、「火薬」「爆薬」の呼び分けをふまえて、今後は「火薬漁」でなく「爆薬漁」と呼ぶことも検討課題に上がってきた。

現地調査では、聞きとりにもとづく資料のほか、経験者が鉛筆によって漁のようすを表現した細密な絵画も入手し、今後の調査に活用するための同意を得ることができた。

得られた資料は現在も整理中で、できるだけ早期に論文として刊行する予定である。

◎出版物による業績

[単著]

飯田 卓

2014 『身をもって知る技法——マダガスカル漁師に学ぶ』 京都：臨川書店。

[共著]

高城 玲・飯田 卓・井上 潤・小島摩文・清水郁郎・羽毛田智幸・原田健一・小林光一郎・因 琢哉・岡田翔平
2015 『国際常民文化研究叢書 8 アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象（資料編）』 神奈川：神奈川大学国際常民文化研究機構。

[共編]

東 賢太郎・市野澤潤平・木村周平・飯田 卓編

2014 『リスクの人類学——不確実な世界を生きる』 京都：世界思想社 [査読有、共同研究成果]。

[論文]

飯田 卓

2014 「共有のためのメディア——戦後マスメディア史からみた映像人類学の可能性」 村尾静二・箭内 匡・久保正敏編『映像人類学（シネ・アンソロポロジー）——人類学の新たな実践へ』 pp.176-194, 東京：せりか書房 [査読有、共同研究成果]。

2014 「自然と向きあうための技術的対応と社会的調整——マダガスカル、ヴェズ漁民が生きぬく現在」 東 賢太郎・市野澤潤平・木村周平・飯田 卓編『リスクの人類学——不確実な世界を生きる』 pp.262-284, 京都：世界思想社 [査読有、共同研究成果]。

2015 「昭和初期の公共視覚メディア——渋沢民具学における映画と博物館」『国際常民文化研究叢書10 アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象（論文編）』 pp.245-267, 神奈川：神奈川大学国際常民文化研究機構。

2015 「人類学者はなぜ遊んでいるようにみえてしまうのか？」 床呂郁哉編『人はなぜフィールドに行くのか——フィールドワークへの誘い』 pp.94-107, 東京：東京外国語大学出版会。

2015 「マダガスカル南西部のサンゴ礁利用をめぐる複ゲーム状況」「自然と文化」人間文化研究機構 連携研究『自然と文化』事務局編『人間文化研究機構 連携研究「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」最終年度報告書』 pp.457-463, 東京：大学共同利用機関法人 人間文化研究機構。

Lida, T.

2015 Toward an Anthropology of Heritage Practices. *The Newsletter of International Institute for Asian Studies* 70: 46.

[書評]

飯田 卓

2014 「書評 北窓時男著『海民の社会生態誌——西アフリカの海に生きる人びとの生活戦略』」『アフリカ

研究』84：70-71。

- 2015 「書評 高倉浩樹・滝澤克彦（編）『無形民俗文化財が被災するという——東日本大震災と宮城県沿岸部地域社会の民俗誌』」『文化人類学』79(4)：480-482。

[その他]

飯田 卓

- 2014 「『文化遺産の人類学』とはなにか」『民博通信』145：8-9 [機関研究成果]。

- 2014 「渋沢敬三にかかわる研究ネットワーク」近藤雅樹追悼企画実行委員会企画・発行、大国正美・水口千里編『魅せる！超フォークロア——近藤雅樹ワールドの探検』pp.21-26、兵庫：神戸新聞総合出版センター。

- 2014 「文化遺産を伝える静かなくらし——マダガスカル」『日本経済新聞』11月28日。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

- 2014年11月9日 「文化遺産実践の現場という視点」公開フォーラム『文化遺産の人類学』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2014年4月7日 ‘Fishing Technical Innovation among the Vezo: Toward a New Descriptive Method of Fishing Practice.’ Madagascar Workshop 2014 (9th), University of Toronto, Canada

- 2014年5月17日 ‘Wars and Disasters as Matters of “Anthropology of Heritage.” Inter-Congress of the International Union of Anthropological and Ethnological Sciences,’ Makuhari Messe, Chiba, Japan

- 2014年12月5日 ‘Establishing Hotlines: A Japanese Museum’s Experience of Exhibiting Madagascar Cultural Heritage.’ 113th Annual Meeting of American Anthropological Association, Marriott Wardman Park Hotel, Washington, DC, United States

- 2015年1月16日 ‘Communicative Aspect of Bodily Knowledge: Malagasy Fishers’ Innovation in Gears and Techniques.’ German-Japanese Colloquium “Knowledge Transfer across Borders: Integrative Approaches.” Old Observatory, University of Göttingen, Göttingen, Germany

- 2015年1月27日 ‘Ongoing Project of National Museum of Ethnology, Japan.’ International Experts Meeting of the Project “Mapping Research on the Safeguarding of Intangible Cultural Heritage (ICH) in the Asia-Pacific Region.” Islamic Arts Museum Malaysia, Kuala Lumpur, Malaysia

- 2015年3月4日 「くらしに息づく文化遺産の国際的認知」琉球大学国際沖縄研究所ワークショップ『無形文化遺産の活用と継承』琉球大学50周年記念館

- 2015年3月6日 ‘Appropriation of Traveling Knowledge: A Case of Vezo Coastal Dwellers in Madagascar.’ International Workshop “Politics of Environmental Knowledge: Encounters between Indigeneity and Modernity.” Osaka University Nakanoshima Center, Osaka, Japan

・研究講演

- 2014年4月12日 「お好みどおりのアフリカを作る」日本アフリカ学会創立50周年記念市民公開講座『アフリカ、その魅力と可能性』第8回、京都大学

- 2014年6月5日 「学術資料・学術活動の映像記録とその活用——メディアの発展をふまえて」京都大学研究資源アーカイブ 講演・座談会、京都大学

- 2014年6月6日 「無形遺産に関わる木質文化財——マダガスカル、ザフィマニリの木彫り知識（ユネスコ登録2003年）について」木質文化財研究会2014 第1回見学・講演会、国立民族学博物館

- 2014年7月9日 「霧の森の木彫り——マダガスカルは無形文化遺産」産経新聞社主催、みんなく創設40周年記念 カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館9階SPACE9

- 2014年11月4日 「文化遺産を伝える静かなくらし——マダガスカル」みんなく公開講演会『無形文化遺産——選ぶ視点 選ばれる現実』日経ホール（東京）

◎調査活動

・国内調査

- 2014年4月18日～19日—茨城県つくば市（国立科学博物館の研究動向についての調査）

- 2014年10月25日～26日—大分県佐伯市（九州北部の戦後漁業における爆薬使用についての調査）

- 2014年11月21日～24日—沖縄県那覇市、本部町、今帰仁村、鹿児島県与論町（戦後の移住・出稼ぎ・漁業につ

いての調査)

・海外調査

2014年4月6日～4月11日—カナダ（トロント大学マダガスカル・ワークショップへ参加）

2014年8月26日～9月20日—マダガスカル（政治流動化が漁村の生業に与えた影響、ヴェズ漁村における近代科学知の流用及びヴェズ漁村における民話・伝承に関する調査）

2014年12月3日～12月9日—アメリカ合衆国（アメリカ人類学会へ参加及びアフリカ展示に関する調査）

2015年1月13日～1月19日—ドイツ（日独学術コロキウムに参加及び民族学コレクションに関する調査）

2015年1月26日～1月28日—マレーシア（アジア太平洋無形文化遺産調査研究センター専門家会議への参加）

2015年2月9日～2月27日—マダガスカル共和国（ヴェズ漁村における民話・伝承の情報収集）

◎大学院教育

・指導教員

指導教員（1人）、副指導教員（1人）

特別共同利用研究員の研究指導教員（3人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（C））「バイパス型私企業活動の活性化による、マダガスカル山間部の住民行動と地域構造の変容」研究代表者、科学研究費補助金（基盤研究（A））「インド洋西域島嶼世界における民話・伝承の比較研究」（研究代表者：小田淳一）研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究（A））「『在来知』と『近代知』の比較研究：知識と技術の共有プロセスの民族誌的分析」（研究代表者：大村敬一）研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究（B））「近代都市形成における多文化混住状況と出身地域社会への影響に関する研究」（研究代表者：岡田浩樹）研究分担者、科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究）「宇宙開発に関する文化人類学的アプローチの検討」（研究代表者：岡田浩樹）研究分担者、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究「現代アフリカにおける＜国家的なもの＞に関する研究——ニューメディア・グローバリゼーション・民主主義」（研究代表者：内藤直樹）研究分担者、神奈川大学共同研究拠点整備推進事業「国際常民文化研究」に関わる共同研究「アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象」（研究代表者：高城 玲）研究分担者

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会委員、日本アフリカ学会評議員、マダガスカル研究懇談会世話役代表

・非常勤講師

神戸大学大学院国際文化学研究科「文化情報リテラシー特殊講義」（集中講義）、大阪大学外国語学部「アフリカ地域講義IIa」（集中講義）

菊澤律子 [きくさわ りつこ] ————— 准教授

1967年生。【学歴】東京大学文学部文科三類言語学専修課程卒（1990）、東京大学大学院人文科学研究科修士課程言語学専攻修了（1993）、東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退（1995）【職歴】東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手（1995）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授（2000）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授（2005）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2006）【学位】Ph. D. (Linguistics)（ハワイ大学 2000）、文学修士（言語学）（東京大学 1993）【専攻・専門】言語学、比較（歴史）言語学、オーストロネシア諸語、記述言語学、オセアニア先史研究【所属学会】日本言語学会、日本オセアニア学会、Association of Linguistic Typology、Australian Linguistic Society、日本歴史言語学会、The Philological Society (UK)、日本展示学会、International Society for Historical Linguistics

【主要業績】

[単著]

Kikusawa, R.

2003 *Proto Central Pacific Ergativity: Its Reconstruction and Development in the Fijian, Rotuman and Polynesian Languages*. Canberra: Pacific Linguistics.

[編著]

Kikusawa, R. and L. A. Reid (eds.)

2013 *Historical Linguistics, 2011: Selected papers from the 20th International Conference on Historical Linguistics, Osaka, 25-30 July 2011* (Current Issues in Linguistic Theory 326), Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

[論文]

Kikusawa, R. and K. A. Adelaar

2014 Malagasy Personal Pronouns: A Lexical History. *Oceanic Linguistics* 53(2): 480-516.

【受賞歴】

2015 2014年度学融合推進センター公開研究報告会学融合推進センター賞

2014 2013年度学融合推進センター公開研究報告会学融合推進センター賞

2009 ラルフ・チカト・ホンダ優秀奨学生賞

2008 第4回日本学術振興会賞

2005 第4回日本オセアニア学会賞

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

オーストロネシア諸語の比較形態統語論的研究——動詞の形態法の発達史を探る

・研究の目的、内容

本研究は、オーストロネシア諸語の発達史における「名詞化接辞の動詞接辞化」の具体的なメカニズムと、その発達史を解明することを目的とする。

オーストロネシア諸語においては、早い時期に分岐した言語ほど動詞の形態法が複雑であり、オーストロネシア祖語の動詞のシステムは、これをほぼ直接反映させて再建される傾向にある。これに対し菊澤は、昨年度の研究において、形態統語論的な特徴の変遷はシステムの変遷として捉えるべきであり、drift等の可能性を考慮した、音韻や語彙の再建におけるものとは異なる視点および手法が必要であることを示した。2013年度からはこれに基づき、オーストロネシア諸語における個別事象の比較再建およびそのための方法論の整備、という2つの課題に取り込んでおり、本年度も継続して研究を続ける。

個別事象の比較再建においては、受け入れ中のウィーラ・オスタピラト客員研究員との共同研究データを取り入れることでマクロ語族からの視点をも加味する。また、方法論に関しては、対象語族を超えた一般化に向けて、2015年2月～4月にベルギーのヘント大学からの招聘により、「印欧語の項構造の史的変遷解明のためのプロジェクト」(代表者:ヨハンナ・パースダル)と共同研究を行う予定である。

・成果

オーストロネシア諸語の発達史における「名詞化接辞の動詞接辞化」の具体的なメカニズム解明のために必要な前段階の研究として、統語構造変化の比較・再建の方法について、インド・ヨーロッパ語族およびバンツール諸語における類似の研究を参照しつつ、方法論の確立につとめた。

具体的には、統語構造の変化に関する具体的な変遷の過程を捉えるためには、個別の文法事象を個別に分析した上で相互に与える影響を解明しなくてはならないことを示し、格構造と動詞の形態統語論的特徴の変化の解明に必要な項目をピックアップした。

とくに方法論に関しては、対象語族を超えた一般化に向けて、2015年2月～4月にベルギーのヘント大学からの招聘により、「印欧語の項構造の史的変遷解明のためのプロジェクト」(代表者:ヨハンナ・パースダル)と共同研究を行い、その成果については以下の通り、ほぼ執筆完了したものの2件、海外の学術出版書に論文として刊行される予定のもの2件となっている。

Kikusawa, R.

(to appear) Typological Generalisations and Diachronic Analyses: Actancy Systems in Austronesian Languages. *Historical Linguistics in Japan* 4: 3-32.

Kikusawa, R.

(to appear) Conducting Syntactic Reconstruction of Languages with No Written Records. In E. Luján, J. Barðdal and S. Guildea, *Syntactic Reconstruction: Applying the Comparative Method*.

Brill.

Kikusawa, R.

- (to appear) A Diachronic Typology of Applicative Verbs in Western Austronesian Languages: Toward a Comparison and Reconstruction (synopsis). In L. Kulikov and S. Kittila, *Diachronic Typology of Voice and Valency-changing Categories*.

Kikusawa, R.

- (to appear) Ergativity and Syntactic Change in Austronesian Languages. In J. Coon, D. Massam and L. Travis, *The Oxford Handbook of Ergativity*. Oxford: Oxford University Press.

◎出版物による業績

[論文]

Kikusawa, R. and K. A. Adelaar

- 2014 Malagasy Personal Pronouns: A Lexical History. *Oceanic Linguistics* 53(2): 480–516.

Kikusawa, R.

- 2015 Austronesian. In C. Bowerman and B. Evans (ed.) *The Routledge Handbook of Historical Linguistics*, pp.657–674. London: Routledge, Taylor & Francis Group.

[事典項目]

菊澤律子

- 2014 「フィジー語」 庄司博史編『世界の文字事典』 pp.160–163, 東京：丸善出版。
2014 「言語の分類」 国立民族学博物館編『世界民族百科事典』 pp.166–167, 東京：丸善出版。
2014 「SIL インターナショナル」 国立民族学博物館編『世界民族百科事典』 pp.198–199, 東京：丸善出版。

[その他]

菊澤律子

- 2014 「ミクロネシアの言語」 印東道子編『ミクロネシアを知る本』 pp.50–54, 東京：明石書店。
2014 「新しいことばとコミュニケーションの時代へ——フィリピン・ボントックの言語変化とその担い手たち」『Field + (プラス)』 12：9–10。
2014 What is Your Name? Variations in Fijian Languages and Their Pre-historical Implications. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 39: 3–4.
2014 「手話で膨らむことばへのアプローチ」『民博通信』 146：10–11。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

- 2013年10月3日～10月6日 《機関研究成果公開》「みんなく手話言語学フェスタ2014」コーディネーター

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2014年5月11日 「手話言語学を世界へつなぐ——メディア発信と e-learning 開発に向けて」活動報告、今年度の予定、今後の見通し」『手話言語学を世界へつなぐ——メディア発信と e-learning 開発に向けて』プロジェクト研究会、総合研究大学院大学
2014年6月28日 招待講演「手話で膨らむことばへのアプローチ——国立民族学博物館（みんなく）における——手話言語学事業の展開」手話言語学会第3回手話学セミナー in 関西、国立民族学博物館
2014年6月29日 「関西地域学術手話通訳研究事業プロジェクト概要」関西地域学術手話通訳研究事業第1回ミーティング、国立民族学博物館
2014年7月20日 ‘Associating Morphosyntactic Changes in Austronesian Languages with Human-migration Routes.’ “Minpaku Linguistics Circle,” National Museum of Ethnology
2014年7月29日 招待講演 ‘Variations in Fijian Languages and Their Historical Implications.’ “Migrations and Transfers in Prehistory: Asian and Oceanic Ethnolinguistic Phylogeography,” University of Bern,
2014年10月7日 「手話ってなに？ 言語学ってなに？」東北大学全学教育リレー講義『手話の世界と世界の手話言語☆入門』第1回講義、東北大学
2014年1月16日 手話言語学を世界へつなぐ——メディア発信と e-learning 開発に向けて——3年間の事業報告と今後の見通しにむけてのディスカッション」『手話言語学を世界へつなぐ——メディア発信と e-learning 開発に向けて』プロジェクト研究会、総合研究大学院大学
2015年1月27日 「ディスカッション（半年間のまとめ）」東北大学全学教育リレー講義『手話の世界と世界の

手話言語☆入門』第15回講義、東北大学

2015年2月23日 招待講演 ‘Conducting Syntactic Reconstruction Based on Languages with No Written Records.’ Department of Linguistics, University of Ghent

2015年3月16日 招待講演 ‘After Identifying Cognate Structures Comparing Applicative Systems in Austronesian languages.’ EVALISA-DiaLing Workshop: Hitches in Historical Linguistics 2, University of Ghent

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

2014年度東北大学全学教育リレー講義「手話の世界と世界の手話言語☆入門」コーディネーター、2014年度手話言語学講師派遣事業コーディネーター、2014年度西地域学術手話通訳研究事業コーディネーター

◎調査活動

・海外調査

2014年7月8日～7月18日ーフィジー（フィジー語話者の言語の産出及び理解のプロセスに関する現地調査）

2014年7月25日～8月2日ースイス（国際学会「先史における移住と拡散：アジアとオセアニアの言語人類学的系統地理学的アプローチ」に参加）

2014年8月5日～8月18日ーフィジー（フィジー語話者の言語の産出及び理解のプロセスに関する現地調査）

2015年2月2日～5月5日ーベルギー、ドイツ（ヘント大学（ベルギー）における共同研究及びライブチヒ・マックスプランク進化人類学研究所における学会参加）

◎大学院教育

・指導教員

副主任指導教員（1人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

国立民族学博物館機関研究プロジェクト「マテリアリティの人間学」手話言語と音声言語の比較に基づく新しい言語観の創生」研究代表者、人間文化研究機構連携研究「第3回国際シンポジウム「手話言語と音声言語の記述・記録・保存」の開催」研究代表者、総合研究大学院大学学融合推進センター戦略的共同研究Ⅰ「手話言語学を世界へつなぐ——メディア発信と e-learning 開発に向けて」研究代表者、日本財団助成金「手話言語学に関する講義の実施およびシンポジウム・セミナーの開催」研究代表者、筑波技術大学科研費研究分担者、東北大学科研費研究分担者、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員、国立国語研究所共同研究員

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

日本歴史言語学会事務局担当理事、日本言語学会広報委員、International Society for Historical Linguistics 評議員、Association for Linguistic Typology 評議員、国際オーストロネシア言語学会運営委員、第12回国際オーストロネシア言語学会専門委員、欧州リサーチ・カウンシル審査員、Journal of Historical Syntax 編集顧問委員、Brill's Studies in Historical Linguistics 編集顧問委員、Journal of Historical Linguistics 編集顧問委員

松尾瑞穂 [まつお みずほ] ————— 准教授

【学歴】南山大学文学部人類学科卒業（1999）、名古屋大学大学院国際開発研究科国際協力専攻博士前期課程修了（2002）、総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻博士後期課程単位取得退学（2007）【職歴】日本学術振興会特別研究員（PD）（2007）、新潟国際情報大学情報文化学部情報文化学科講師（2010）、新潟国際情報大学情報文化学部情報文化学科准教授（2013）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2014）【学位】文学博士（総合研究大学院大学文化科学研究科 2008）学術修士（名古屋大学大学院国際開発研究科 2002）、【専攻・専門】文化人類学、ジェンダー医療人類学、南アジア研究【所属学会】日本文化人類学会、日本南アジア学会、日本宗教学会、宗教と社会学会

【主要業績】

〔単著〕

松尾瑞穂

2013 『ジェンダーとリプロダクションの人類学——インド農村社会の不妊を生きる女性たち』京都：昭和堂。

2013 『インドにおける代理出産の文化論——出産の商品化のゆくえ』東京：風響社。

〔論文〕

松尾瑞穂

2009 「『回復』を希求する——インド農村社会における不妊と『流産』経験」『文化人類学』74(3)：423-440。

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

インドにおけるリプロダクションとサブスタンスに関する研究

・研究の目的、内容

インド社会において、グローバル化、医療化、生殖医療技術によってリプロダクション（性と生殖）の実践はいかに変化しているのかを検討することを通して、ヒト、家族、親族、カーストといった自他のカテゴリーの生成や他者とのつながり（relatedness）の様態の変容について明らかにする。

1) 個からみるサブスタンスや親子・親族関係の変容

リプロダクションの変容をとくに生殖医療技術との関わりにおいて考察するうえで、南アジア地域におけるサブスタンスの概念は重要な出発点となる。ヒトの形成に関しては、南アジアの文脈でいえば、子どもの形成における種と大地という象徴的な民俗生殖理論がよく知られている。また、血液や体液のような身体部品や、食、環境の共有を通して身体が構成され、つながりが生み出されるということも議論されてきた。生殖医療がもたらす遺伝子のつながりと、身体のサブスタンスを介したつながりはどのように接合、あるいは断絶しているのか。今年度は特に母乳に注目し、授乳や哺乳に関する慣習・実践の調査や、都市圏の一部で始まっている母乳バンクと母乳のサーキュレーションに関する調査を行う。その際には、すでに先行研究のある血液と比較しながら、よりジェンダー化されたサブスタンスの特徴を把握する。

2) 集団の同定と自他の区別

一方で、サブスタンスは個から派生するつながりを越えた、より集合的な集団形成にも関わっている。インドでは20世紀初頭にインド＝アーリア人を標榜し、社会の浄化を求める優生学運動が、産児制限や社会改革との関わりの中で繰り広げられてきた。植民地官僚やインド学の学者によって古代インドの輝かしい遺産（とそれの反転としての墮落したインド）として喧伝されたアーリア人説は、インドのエリート層にとっては、植民地経験のなかで古代と近代的科学性が接合しながら、自他の区別と自己アイデンティティの確立に寄与する思想として受容された。ヒンドゥー至上主義者によって集団がより科学的な言説によって同定されるなか、人間の差異と同質性はどのように社会的に構築されるのか。今年度はインドにおけるアーリア人学説の検討を行い、現代インドにおいてそれらが表出する文脈を検討する。

・成果

上記のテーマに関し、文献収集と文献読解、インドにおける2度の現地調査、イギリス・オランダにおける南アジア研究者との研究会議とセミナー発表を行った。これらを通して、母乳がインド社会で有する文化的な特徴と、生殖医療（代理出産や配偶子提供など）による、卵子のような新たなサブスタンスの可視化、顕在化について明らかにした。また、アーリア人学説について主に、言説と歴史的概観を把握し、分析した。なお、海外調査出張に関しては、それぞれ科学研究費補助金（基盤研究(B)）「インド高齢女性のライフヒストリー」（代表：押川文子）、科学研究補助金（基盤研究(B)）「経済自由化後の南インド社会の構造変動に関する総合的研究」（代表：杉本良男）および人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド研究」（民博拠点）によって実施した。

また、民博の共同研究会メンバーおよび人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド地域研究」の拠点構成員として、年間を通じた研究会の運営、参加、発表を行った。研究成果の公開としては、社会運動とジェンダーの視点から、インドにおける産児制限運動の展開について分析した論文と、リスク論の視点に基づき、調査地域の家族計画の実践と多元的リスク認識について検討した論文の2本を論集として刊行した。また、インドの人工妊娠中絶にみる被傷性／可傷性と暴力の位相に関する論文と、生殖ツーリズムと代理出産に関する論文を執筆し、それぞれ外部資金による刊行を目指している。さらに、サブスタンスに関するレビューと展望

をまとめ、『民博通信』に投稿した。その他、エッセイや報告書を執筆し公表した。発表による成果公開としては、国際シンポジウムや国内研究会等での研究発表を6回、一般向け講演会を4回実施した。

◎出版物による業績

[論文]

松尾瑞穂

- 2014 「多産、人口、統計学的未来——インドにおけるリスク管理としての産児制限」市野澤潤平・東賢太朗・木村周平・飯田 卓編『リスクの人類学』pp.39-61, 京都：世界思想社 [査読有]。
- 2015 「産児制限運動の複相的展開——危険なリプロダクションへのまなざし」石坂晋哉編『インドの社会運動と民主主義——変革を求める人びと』pp.92-117, 京都：昭和堂 [査読有]。

[事典項目]

松尾瑞穂

- 2014 「生殖医療技術」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.622-623, 東京：丸善出版。
- 2014 「死と誕生」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.712-713, 東京：丸善出版。

[その他]

松尾瑞穂

- 2014 「インドの代理出産にみるジェンダーと格差——なぜ子宮を『貸す』のか?」『SYNODOS』4月14日 (<http://synodos.jp/international/7357>)。
- 2014 「旅・いろいろ地球人 食べる② 母乳をもらおう」『毎日新聞』8月7日夕刊。
- 2014 「西インドのストリートフード ミサル」『月刊みんぱく』38(9)：18-19。
- 2015 「家族計画・避妊・人工妊娠中絶（インド）」白井千晶編『アジア研究4 アジアのジェンダーとリプロダクション』（静岡大学人文社会学部・国際シンポジウム報告書）pp.89-102, 静岡：静岡大学人文社会科学学部アジア研究センター。
- 2015 「南アジア社会とアジア共同体」権 寧俊編『東アジア研究Ⅱ』（新潟県立大学・アジア共同体講座講義集）pp.49-56。
- 2015 「ムガルの皇子ダーラー・シコーとインドの多文化共生の道」『青淵』790：12-14。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会

- 2014年10月2日 「ヒンドゥーの聖地と宗教産業の形成に関する予備的考察」『聖地の政治経済学——ユーラシア地域大国における比較研究』
- 2014年10月9日 「神話と遺伝子——現代インドにおける生殖医療の文化的意味付け」2014年度MINDAS第3回合同研究会

・民博研究懇談会

- 2015年1月14日 「インドにおける生殖医療技術の文化論」第263回民博研究懇談会

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2015年2月7日 「インドの家族計画とIUD」アジアのリプロダクションとジェンダー、東京・大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター
- 2015年2月26日 ‘The Cultural Formation of Assisted Reproductive Technology in India,’ Seminar at the Centre for the South Asian Studies, Edinburgh University, Edinburgh, U.K.
- 2015年3月22日 ‘Traditional Childbirth and the View of Body in India,’ The Locality of “Health”: Traditional/Folk Medicine, People’s Health and the Environment, NIHU Ecohealth Project, Kyoto International Conference Centre, Kyoto, Japan

・研究講演

- 2014年4月28日 「生殖医療をフィールドワークする——『フィールド』ワークから『サイト』ワークへ」桃山学院大学
- 2014年5月20日 「南アジア共同体とアジア」新潟県立大学
- 2014年11月26日 「インドにおけるカレーの誕生と食文化」民族学講座『グローバル化時代の食文化』清和台公民館（大阪）
- 2015年3月8日 「インドの生殖医療と身体の商品化」講座『ジェンダーで社会を考える』第4回講演、新潟・新潟市男女共同参画アルザにいがた
- 2015年3月20日 「インドのメディカル・ツーリズム——癒しから先端医療まで」国立民族学博物館・毎日新聞

社主催、みんぱく公開講演会『いやし旅のウラ？表？——現代アジアツーリズム考』毎日新聞オーバルホール

・展示

南アジア展示新構築チーム

・広報・社会連携活動

[コメンテーター]

2014年8月6日 代理出産に関する解説『情報ライブ・ミヤネ屋』読売テレビ放送

2014年11月14日 インドの家族計画に関する解説『情報ライブ・ミヤネ屋』読売テレビ放送

◎調査活動

・海外調査

2014年8月8日～8月21日—インド（科研プロジェクトに関わるインドの高齢女性のライフヒストリー収集調査）

2014年11月27日～12月13日—インド、タイ（経済自由化後の南インド社会の構造変動に関する総合的研究にかかるインド及びタイの聖地の形成に関する現地調査）

2015年2月23日～3月4日—イギリス、オランダ（研究セミナー「現代インドにおける生殖医療の文化的形成」に参加及び発表、現代インド地域研究プロジェクト及びインドにおける生殖医療にかかる調査研究）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究補助金（基盤研究(B)）「生活世界の変容とジェンダー——インド高齢女性のライフヒストリーを通して」（研究代表者：押川文子）研究分担者、科学研究補助金（基盤研究(B)）「経済自由化後の南インド社会の構造変動に関する総合的研究」（研究代表者：杉本良男）連携協力者、人間文化研究機構「現代インド研究」（国立民族学博物館拠点）拠点構成員

◎社会活動・館外活動

・非常勤講師

南山大学人文社会学部「人類文化学特殊講義」（集中講義）、新潟国際情報大学情報文化学部「国際協力論」（集中講義）

丸川雄三 [まるかわ ゆうぞう] ————— 准教授

【学歴】東京工業大学理学部応用物理学科卒（1996）、東京工業大学大学院理工学研究科地球惑星科学専攻修士課程修了（1998）、東京工業大学大学院情報理工学研究科計算工学専攻博士課程単位取得退学（2001）【職歴】東京工業大学精密工学研究所助手（2001）、科学技術振興機構CREST研究員（国立情報学研究所高野明彦研究室）（2003）、国立情報学研究所高野明彦研究室特任助手（2004）、人間文化研究機構本部プロジェクト研究員（2006）、国立情報学研究所連想情報学研究開発センター特任助手（2006）、国立情報学研究所連想情報学研究開発センター特任准教授（2007）、国際日本文化研究センター文化資料情報企画室准教授（2012）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2013）【学位】博士（工学）（東京工業大学大学院 2003）、修士（理学）（東京工業大学大学院 1998）【専攻・専門】1) 連想情報学、2) 文化財情報発信【所属学会】アート・ドキュメンテーション学会

【主要業績】

[論文]

丸川雄三

2008 「文化財情報発信の実際——文化遺産オンラインの取り組みについて」『画像ラボ』19(4)：26-29.

水谷長志・川口雅子・丸川雄三（執筆順）

2014 「アジアからの美術書誌情報の発信——東京国立近代美術館・国立西洋美術館OPACのartlibraries.netにおける公開の経緯とその意義」『東京国立近代美術館研究紀要』18：6-31.

丸川雄三・阿辺川 武

2010 「横断的連想検索サービス『想-IMAGINE』——データベース連携が拓く新たな可能性」『情報管理』53(4)：198-204.

【受賞歴】

2011 文部科学大臣表彰科学技術賞（理解増進部門）

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

連想情報学に基づく文化財情報発信に関する研究

・研究の目的、内容

連想情報学とは、情報システムをデータと利用者を含む統合的な「場」として扱う考え方であり、発信対象の特性に応じた情報発信手法を主な研究対象としている。本研究課題においては、このうち文化財情報を対象に、データ処理技術および情報検索技術、ユーザインタフェースなどの研究開発を行う。2014年度は、近代日本の身装（身体と装い）関係資料を対象とする情報サービスの研究開発を実施する。この研究は、JSPS 科学研究費補助金（基盤研究（B））「近代日本の身装画像デジタルアーカイブの構築——文化変容に視点を据えて」（代表者：高橋晴子、2012年度～2014年度）の助成を受けて実施するものである。さらに美術情報分野を中心とする制作者典拠データベースとその発信環境の研究開発を実施する。この研究は、JSPS 科学研究費補助金（基盤研究（B））「ミュージアムと研究機関の協働による制作者情報の統合」（代表者：丸川雄三、2014年度～2016年度）の助成を受けて実施するものである。

・成果

画像アーカイブズの活用研究として、近代日本の身装（身体と装い）を発信するウェブサイトの研究開発を実施した。明治から昭和期（1868～1945年）における身装に関する画像（身装画像デジタルアーカイブ）のデータベース化を行い、連想検索技術によって検索・閲覧が可能な「近代日本の身装文化」を開発した。さらに、「絵引」の考えを用いた身装画像の分析手法の研究に着手し、成果を2015年1月に「第105回人文科学とコンピュータ研究発表会」で発表した。この研究は、JSPS 科学研究費補助金（基盤研究（B））「近代日本の身装画像デジタルアーカイブの構築——文化変容に視点を据えて」（代表：高橋晴子、2012年度～2014年度）の助成を受けて実施されたものである。また、文化財情報の活用基盤の研究として、制作者典拠データベースの研究開発を実施した。2014年度は、東京文化財研究所および国立美術館と協働で作家データの調査と収集を行い、人名典拠に必要な要件について検討し統合用のデータベースを試作した。この研究は、JSPS 科学研究費補助金（基盤研究（B））「ミュージアムと研究機関の協働による制作者情報の統合」（代表：丸川雄三、2014年度～2016年度）の助成を受けて実施されたものである。

◎出版物による業績

〔共著〕

〔論文〕

丸川雄三

2015 「身装画像におけるモチーフの分析と絵引の研究」情報処理学会研究報告『人文科学とコンピュータ研究会報告』2015-CH-105(2), pp.1-2.

Marukawa, Y.

2014 Involvement with the Business History Image Index Project. In Gil Latz (ed.) *Rediscovering Shibusawa Eiichi in the 21st Century*, pp.226-228. Tokyo: Shibusawa Eiichi Memorial Foundation.

津田徹英・丸川雄三・中村佳史・吉崎真弓・橘川英規（執筆順）

2015 「ウェブ版『みづゑ』の研究——美術資料のデジタル公開と美術アーカイブズへの展望」『美術研究』414：72-88.

〔その他〕

丸川雄三

2014 「集めてみました世界の〇〇 ポット編」『月刊みんぱく』38(4)：10-11.

2014 「集めてみました世界の〇〇 揺りかご編」『月刊みんぱく』38(5)：10-11.

2014 「集めてみました世界の〇〇 ゲーム編」『月刊みんぱく』38(6)：10-11.

2014 「集めてみました世界の〇〇 帽子編」『月刊みんぱく』38(7)：10-11.

2014 「人間学のキーワード ビッグデータ」『月刊みんぱく』38(7)：20.

2014 「旅・いろいろ地球人 組織② 博物館は地域の『顔』」『毎日新聞』10月2日夕刊.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・みんぱく研究懇談会

2014年 6 月18日 「連想検索技術を用いた身装画像デジタルアーカイブの発信研究」

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年 7 月23日 「東京文化財研究所アーカイブの発信および活用に関する研究」ミュージアムと研究機関の協働による制作者情報の統合・第1回研究会、東京文化財研究所

2014年 9 月13日 「フォーラム型情報ミュージアムに基づく研究資料のデータベース化とその活用」身装文化デジタルアーカイブプロジェクト研究会、国立民族学博物館

2015年 1 月31日 「身装画像におけるモチーフの分析と絵引の研究」第105回人文科学とコンピュータ研究発表会、大阪国際大学守口キャンパス

2015年 2 月 5 日 「制作者情報のデータ構造設計について」ミュージアムと研究機関の協働による制作者情報の統合・第2回研究会、東京文化財研究所

2015年 2 月 8 日 「ウェブサイト『徳之島の唄と踊り』による映像記録資料の共有」フォーラム型情報ミュージアム・徳之島研究会、国立民族学博物館

2015年 2 月28日 「研究資料のアーカイブズと文化遺産オンラインの活用について」文化資源デジタル・アーカイブズに関するワークショップ・第1回研究会、国立民族学博物館

・みんぱくゼミナール

2015年 1 月17日 「デジタルアーカイブズの楽しみ——文化遺産オンラインから実業史錦絵絵引まで」第440回みんぱくゼミナール

・研究講演

2015年 2 月22日 「郵政博物館収蔵資料データベースの公開と文化遺産オンライン」第86回日本アートドキュメンテーション学会研究会、郵政博物館（東京）

・展示

特別展「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」実行委員

・広報・社会連携活動

2014年11月30日 「デジタルビューアで楽しむ『イメージの力』」第363回みんぱくウィークエンド・サロン

◎調査活動

・国内調査

2015年 2 月 6 日—東京国立博物館（文化資源デジタル・アーカイブズにおける資料管理システムの調査）

2015年 3 月26日～3 月27日—九州国立博物館（文化資源デジタル・アーカイブズにおける資料管理システムの調査）

・海外調査

2014年 8 月10日～8 月12日—大韓民国（インフォ・フォーラムミュージアムに関する韓国国立民俗博物館との協議）

2015年 2 月22日～2 月25日—大韓民国（フォーラム型情報ミュージアムに関する韓国国立民俗博物館との協議）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（B））「ミュージアムと研究機関の協働による制作者情報の統合」研究代表者、科学研究費補助金（基盤研究（B））「近代日本の身装画像デジタルアーカイブの構築——文化変容に視点を据えて」（代表：高橋晴子）研究分担者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

国立情報学研究所客員准教授、東京国立近代美術館客員研究員、東京文化財研究所「近現代美術資料の収集、整理、公開に関する調査研究」客員研究員、奈良国立博物館「仏教美術に関する共同調査研究」調査員、立命館大学アート・リサーチセンター「歌舞伎・浄瑠璃データベースの活用に関する研究」客員協力研究員

研究戦略センター

塚田誠之 [つかだ しげゆき] センター長（併）教授

1952年生。【学歴】北海道大学文学部史学科東洋史学専攻卒（1978）、北海道大学大学院文学研究科修士課程東洋史学専攻修了（1980）、北海道大学大学院文学研究科博士後期課程東洋史学専攻単位取得（1987）【職歴】国立民族学博物館第3研究部助手（1988）、国立民族学博物館第2研究部助教授（1993）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1994）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2000）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長（2002）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科研究科長（2011）【学位】文学博士（北海道大学 2001）、文学修士（北海道大学大学院文学研究科 1980）【専攻・専門】歴史学 中国南部地域（広西・貴州等）のチワン（壮）族をはじめとする諸民族の歴史民族学的研究【所属学会】日本文化人類学会、史学会、宋代史研究会、北海道大学東洋史談話会、北大史学会、漢民族研究学会（中国）、壮学学会（中国）

【主要業績】

〔単著〕

塚田誠之

2000 『壮族文化史研究——明代以降を中心として』東京：第一書房。

〔編著〕

塚田誠之編

2010 『中国国境地域の移動と交流——近現代中国の南と北』東京：有志舎。

〔論文〕

塚田誠之

2012 「漢族と非漢族との相互影響について——広西の「蔗園人」の習俗に関する一考察」瀬川昌久編『近現代中国における民族認識の人類学』（東北アジア研究専書）pp.73-104, 京都：昭和堂。

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

中国南部・広西におけるチワン族の歴史の資源化に関する研究

・研究の目的、内容

中国では歴史に関するさまざまな事象が資源化の対象にされてきた。近年、観光化が進む中で、政府・知識人などによって、歴史が資源として活用され、その過程において歴史が「書き換え」られる傾向がある。本年度は、中国南部・広西におけるチワン族の歴史の資源化を対象として、どのような歴史的人物や史跡が、どのような経緯で、いかなる主体によって資源化されているのかについて、歴史文献をも活用して研究を行う。外部資金の活用は今年度は計画をしていない。

・成果

民博共同研究「資源化される『歴史』——中国南部諸民族の分析から」（代表者：長谷川 清）第1回研究会（10月18日）にて、北宋時代の中越国境地域の羈縻州の首長儂智高の蜂起に関して、1940年代以降、現在に至るまで、中国の学者によってどのように解釈され、どこに問題点があるのかを文献資料をもとに報告した。1950、60年代においては、マルクス主義的史観に基づき社会の発展段階が議論され、1979年の中越戦争期にはその国籍問題が議論され、さらに1990年代以降は、「愛国」の「民族英雄」としての位置付けが定着するなど、歴史上の人物に対する記述のされ方が時代の風潮に応じて変化してきたこと、中国の国家としての統一性が一貫して主張されてきたことを明らかにした。さらに、2000年代以降は、インターネットの普及により研究の裾野が拡大したこと、儂智高の経済基盤や宋朝との制度史的な関係など従来研究の対象にされなかった部分を明らかにした。

さらに、儂智高に関して日本では見られない文献資料の調査を中国にて行った。くわえてチワン族の棚田を活用した資源化の現状、広西北部漢族の古建築群の資源化の現状について調査を行った。

この他、チワン族のエスニック・シンボルとしての「繡球文化」の創生の過程を明らかにした（「チワン族の繡

球文化——その実践とシンボリズム」(韓 敏編2014『中国社会における文化変容の諸相——グローバル化の視点から』(国立民族学博物館論集3)、風響社、pp.227-244、国立民族学博物館)。また、貴州の漢族地方集団「屯堡人」をめぐる観光開発の現状を明らかにした(「[有関貴州“屯堡文化”の物語と資源化的現状」(韓 敏・末成道男編 2014『中国社会的家族・民族・国家的物語及其動態——東亜人類学者的理論探索』(Senri Ethnological Studies 90)、pp.93-102、国立民族学博物館)。

◎出版物による業績

[論文]

塚田誠之

2014 「有関貴州“屯堡文化”の物語と資源化的現状」韓 敏・末成道男編『中国社会的家族・民族・国家的物語及其動態——東亜人類学者的理論探索』(Senri Ethnological Studies 90) pp.93-102, 大阪:国立民族学博物館 [査読有, 機関研究成果]。

2015 「チワン族の繡球文化——その実践とシンボリズム」韓 敏編『中国社会における文化変容の諸相——グローバル化の視点から』(国立民族学博物館論集3) pp.227-244, 東京:風響社, 大阪:国立民族学博物館 [査読有, 共同研究成果]。

◎映像音響メディアによる業績

・電子ガイドの制作・監修

[中国地域の文化]

塚田誠之監修

2014 『足踏み式脱穀機』日本語, 英語, 韓国語, 中国語。

2014 『高床式住居』日本語, 英語, 韓国語, 中国語。

2014 『ミャオ族女性衣装の着方』日本語, 英語, 韓国語, 中国語。

2014 『タイ族「花腰(ホワヤオ)タイ」の女性衣装の着方』日本語, 英語, 韓国語, 中国語。

2014 『銀細工』日本語, 英語, 韓国語, 中国語。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2014年11月23日 国際シンポジウム『中国の文化の持続と変化——グローバル化の中の家族・民族・国家』コメンテーター、国立民族学博物館

・共同研究

2014年10月18日 「歴史の解釈をめぐって——壮族の『民族英雄』儂智高を事例として」『資源化される「歴史」——中国南部諸民族の分析から』

・研究講演

2014年4月5日 「中国最大の少数民族、チワン(壮)族の^{いま}現在」第430回国立民族学博物館友の会講演会

◎調査活動

・海外調査

2015年2月23日～3月8日—中華人民共和国(中国広西の漢族の歴史の資源化の調査、チワン族の文化資源の調査、チワン族の「民族英雄」儂智高に関する文献調査)

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

2014年4月17日 特別講義「文献史学の効用と問題——中国の事例から」

岸上伸啓^[きしがみ のぶひろ]—————副館長(研究・国際交流担当)、教授

鈴木七美^[すずき ななみ]—————教授

【学歴】東北大学薬学部薬学科卒(1981)、お茶の水女子大学大学院人文科学研究科修士課程修了(1992)、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士課程修了(1996)【職歴】財団法人仙台複素環化学研究所研究員(1981)、中外製薬株式会社国際開発部(1982)、財団法人相模中央化学研究所第4研究班研究員(1983)、京都文教大学人間学部文化人類学専任講師(1997)、京都文教大学人間学部助教授(2000)、京都文教大学大学院文化人類学研究科助教授(2002)、マギル大学人類学部客員助教授(2003)、放送大学文化人類学'04分担協力講師(2004)、京都文教大学

人間学部文化人類学科専任教授（2005）、京都文教大学大学院文化人類学研究科教授（2005）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2007）、放送大学客員教授（2007）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2009）【学位】博士（学術）（お茶の水女子大学 1996）、修士（人文科学）（お茶の水女子大学 1992）、学士（薬学）（東北大学1981）【専攻・専門】文化人類学、医療社会史【所属学会】日本文化人類学会、日本教育学会、アメリカ学会、日本アメリカ史学会、Association for Anthropology and Gerontology (AAGE)、The International Union of Anthropological and Ethnological Sciences (IUAES)

【主要業績】

[単著]

鈴木七美

2002 『癒しの歴史人類学——ハーブと水のシンボリズムへ』 京都：世界思想社。

1997 『出産の歴史人類学——産婆世界の解体から自然出産運動へ』 東京：新曜社。

[編著]

Suzuki, N. (ed.)

2013 *The Anthropology of Aging and Well-being: Searching for the Space and Time to Cultivate Life Together* (Senri Ethnological Studies 80), Osaka: National Museum of Ethnology.

【受賞歴】

1998 第13回女性史青山を賞

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

エイジフレンドリー・コミュニティと文化的資源

・研究の目的、内容

エイジング研究と社会的包摂に関連し、高齢者のニーズに応える環境形成はすべての世代の人々が暮らしやすい環境に繋がるという「エイジフレンドリー・コミュニティ」構想の動向に関する情報を収集・整理し、この視点に関わる調査研究を進め成果を公開する（外部資金（科学研究補助金（基盤研究（B））特設分野研究（ネオ・ジェロントロジー）研究代表者：鈴木七美）。また、エイジングに関する比較文化研究として、「オルタナティブ・メディスン」の高齢社会における適用に関し現地調査を進める（外部資金（科学研究費補助金（基盤研究（C））研究代表者：鈴木七美）。

・成果

外部資金（基盤研究（B）特設分野研究（ネオ・ジェロントロジー）「多世代共生『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』構想と実践の国際共同研究」研究代表者：鈴木七美）に関連する研究成果公開として、国際研究集会開催、講演および発表を行った。

- 1) 国際パネル開催および発表：国際研究集会 IUAES2014（国際人類学民族科学連合）において、国際パネル“Considering ideas and practices to create ‘age-friendly communities’”（NME / Commission on Aging and the Aged panel）を企画開催し、“Age Friendly Community and Cultural Resources: Considering the experience of care workers in a private sector elderly care institution that experienced the Great East Japan Earthquake”の発表を行った。
- 2) (招待講演) 第151回東北人類学談話会「高齢化時代のエイジング・イン・プレイス——『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』運動と課題」於：東北大学文学研究科棟
- 3) (シンポジウム発表) “Creating an Age-friendly Community in Japan: A Search for Resilient Ways to Cherish New Commons,” Symposium: Culturally Competent Strategies to Assist Underserved Populations From Diverse Cultures, 2015 Aging in America Conference, March 25, Hyatt Regency Chicago. 2014. また、これらの成果を一般向け講演会に生かした。①大阪府高齢者大学校講師「『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』研究とその実践 希望ある高齢期から考える」②大阪府高齢者大学校講師「若者たちが楽しむ町 高齢者のしごとから考える」③「『エイジング・イン・プレイス』をめぐる議論と実践」（みんなくウィークエンド・サロン 研究者と話そう）。

「コミュニティ」に関連する知見を深める作業の一環として、事典項目を執筆した：「コミュニン」『世界民族

百科事典』丸善出版、2015。

外部資金（基盤研究C「スイスにおける高齢者のウェルビーイングと代替医療の適用に関する文化人類学研究」研究代表者：鈴木七美）に関連するSERを編集し、論文および事典項目を執筆した。①「未病から考える高齢社会の養生とレジリエンス」日本未病システム学会『日本未病システム学会雑誌』Vol.20, No.2, 2014, pp.31-35 (2014.8) ②“Care as Self-help: Self-fashioning Conducted by Alternative Medicine in Antebellum America,” Nanami Suzuki ed., *Healing Alternatives: Care and Education as a Cultural Lifestyle*, SER No.120 National Museum of Ethnology, pp.93-118 (2014.9) ③「民族薬学」『世界民族百科事典』国立民族学博物館編、丸善出版、2014。

◎出版物による業績

〔編著〕

Suzuki, N. (ed.)

2014 *Healing Alternatives: Care and Education as a Cultural Lifestyle* (Senri Ethnological Reports 120), Osaka: National Museum of Ethnology [査読有、機関研究・科研（基盤研究(C)）成果].

〔論文〕

鈴木七美

2014 「未病から考える高齢社会の養生とレジリエンス」日本未病システム学会『日本未病システム学会雑誌』20(2)：31-35。

Suzuki, N.

2014 Care as Self-help: Self-fashioning Conducted by Alternative Medicine in Antebellum America. In N. Suzuki (ed.) *Healing Alternatives: Care and Education as a Cultural Lifestyle* (Senri Ethnological Reports 120), pp.93-118. Osaka: National Museum of Ethnology [査読有、機関研究・科研（基盤研究(C)）成果].

〔事典項目〕

鈴木七美

2014 「コミュニケーション」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.556-557, 東京：丸善出版。

2014 「民族薬学」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.706-707, 東京：丸善出版。

〔その他〕

鈴木七美

2014 「*The Anthropology of Care and Education for Life: Searching for Resilient Communities in Multicultural Aging Societies* (Senri Ethnological Studies no.87) Nanami Suzuki (ed.) 国立民族学博物館/2014年」『民博通信』145：29。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2014年5月16日 ‘Age Friendly Community and Cultural Resources: Considering the Experience of Care Workers in a Private Sector Elderly Care Institution that Experienced the Great East Japan Earthquake,’ (小泉敦保と共同発表) パネル027: “Considering Ideas and Practices to Create ‘Age-friendly Communities’ (NME / Commission on Aging and the Aged Panel)” 国際人類学民族科学連合 (IUAES2014)、幕張メッセ (国立民族学博物館機関研究「包摂と自律の人間学」領域プロジェクト「ケアと育みの人類学」成果公開)[査読有、機関研究成果]
- 2015年3月25日 ‘Creating an Age-friendly Community in Japan: A Search for Resilient Ways to Cherish New Commons,’ Symposium: “Culturally Competent Strategies to Assist Underserved Populations From Diverse Cultures,” 2015 Aging in America Conference, Hyatt Regency, Chicago [査読有、科研 特設分野（基盤研究(B)）研究成果]

・研究講演

- 2014年12月17日 招待講演「高齢化時代のエイジング・イン・プレイス——『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』運動と課題」第151回東北人類学談話会、東北大学文学研究科棟2F大会議室
- 2015年1月23日 「『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』研究とその実践——希望ある高齢期から考える」NPO 法人大阪府高齢者大学校 世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館
- 2015年1月30日 「若者たちが楽しむ町——高齢者のしごとから考える」NPO 法人大阪府高齢者大学校 世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館

2015年3月6日 「キルトから広がる世界」NPO 法人大阪府高齢者大学校 世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館

◎調査活動

・海外調査

2014年6月19日～7月14日—スイス、ドイツ（科学研究費補助金（基盤研究（C））「スイスにおける高齢者のウェルビーイングと代替医療の適用に関する文化人類学研究」（研究代表者：鈴木七美）に関わる資料収集及び調査）

2014年11月6日～12月7日—アメリカ合衆国（科学研究費補助金（基盤研究（B））（特設分野研究「ネオ・ジェロントロジー」）「多世代共生『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』構想と実践の国際共同研究」）研究代表者：鈴木七美）に関わる資料収集及び調査）

2015年3月23日～4月14日—アメリカ合衆国（科学研究費補助金（基盤研究（B））（特設分野研究「ネオ・ジェロントロジー」）「多世代共生『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』構想と実践の国際共同研究」）研究代表者：鈴木七美）に関わる学会参加及び調査）

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

Editorial Advisory Board for *Anthropology & Aging* (A&A: The Official Publication of the Association for Anthropology and Gerontology (AAGE)、日本文化人類学会学会誌『文化人類学』編集委員会委員

・非常勤講師

東北大学文学部人文社会学科「文化人類学各論」（集中講義）、東北大学文学研究科人間科学専攻「文化人類学特論Ⅱ」（集中講義）

關 雄二 [せき ゆうじ] ————— 教授

1956年生。【学歴】東京大学教養学部教養学科文化人類学専攻卒（1979）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1982）、東京大学大学院社会学研究科博士課程中退（1983）【職歴】東京大学教養学部助手（1983）、東京大学総合研究資料館助手（1986）、天理大学国際文化学部助教授（1995）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1999）、総合研究大学院大学文化科学研究科兼任（2001）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2004）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2005）、国立民族学博物館先端人類科学研究部長（2007）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2009）【学位】社会学修士（東京大学大学院 1982）【専攻・専門】アンデス考古学、文化人類学 1) 古代アンデス文明の形成過程、2) 現代ペルーの文化行政、3) 考古学と国民国家形成、4) 世界遺産と国別の文化遺産との相互関係【所属学会】日本文化人類学会、日本ラテンアメリカ学会、古代アメリカ学会、Society for American Archaeology

【主要業績】

[単著]

關 雄二

2010 『アンデスの考古学 改訂版』東京：同成社。

2006 『古代アンデス——権力の考古学』京都：京都大学学術出版会。

[共編]

大貫良夫・加藤泰建・關 雄二編

2010 『古代アンデス——神殿から始まる文明』（朝日選書863）東京：朝日新聞出版。

【受賞歴】

2008 濱田青陵賞

2008 科学分野の功績に対する表彰（ペルー国立サン・マルコス大学）

2008 クントゥル・ワシ賞（ペルー文化庁カハマルカ支局）

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

古代アンデスにおける権力生成過程の研究

・研究の目的、内容

南米の太平洋沿岸部、とくに今日のペルー共和国を中心に成立した古代アンデス文明に焦点をあて、権力の形成について理論的な解釈をおこなう。具体的には、ペルー北部山中パコパンパ遺跡を調査し、文明の基礎が築かれた形成期（B.C. 2500～紀元前後）における経済やイデオロギーの様相を検出する。なお上記の調査部分は、科学研究費補助金基盤研究（S）をあてる予定である。

・成果

2011年度から科学研究費補助金基盤研究（S）を取得し、フィールドワークを含め、研究を推進した。成果としては、SES No.89を編集したほか、論文を4本出版した。このほか内外の国際学会、研究集会、シンポジウムにおいて7本の研究発表をおこない、第68回日本人類学会大会においてシンポジウム「アンデス文明形成期における人類学・考古学研究の最新成果」を組織した。

◎出版物による業績

〔編著〕

関 雄二

2014 「他者・表象」（章の編集）国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.721-749, 東京：丸善出版。
Seki, Y. (ed.)

2014 *El Centro Ceremonial Andino: Nuevas Perspectivas para los Períodos Arcaico y Formativo* (Senri Ethnological Studies 89). Osaka: National Museum of Ethnology [査読有].

〔論文〕

関 雄二

2014 「古代アンデス文明におけるモニュメントと社会」一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆編『古墳時代の考古学9 21世紀の古墳時代像』pp.192-210, 東京：同成社。

2014 「古代アンデスにおける神殿の『はじまり』——モノをつくりモノに縛られる人々」池内 了編『「はじまり」を探る』pp.127-140, 東京：東京大学出版会。

2014 「南米ペルーにおける文化遺産観光とその問題点——国際協力の現場から」天理大学アメリカス学会編『アメリカスのまなざし——再魔術化される観光』pp.20-34, 奈良：天理大学出版部。

Seki, Y.

2014 Introducción. En Y. Seki (ed.) *El Centro Ceremonial Andino: Nuevas Perspectivas para los Períodos Arcaico y Formativo* (Senri Ethnological Studies 89), pp.1-19. Osaka: National Museum of Ethnology [査読有].

2014 La diversidad del poder en la sociedad del Período Formativo. Una perspectiva desde la sierra norte. En Y. Seki (ed.) *El Centro Ceremonial Andino: Nuevas Perspectivas para los Períodos Arcaico y Formativo* (Senri Ethnological Studies 89), pp.175-200. Osaka: National Museum of Ethnology [査読有].

〔書評〕

関 雄二

2014 「『渇きの考古学』 スティーヴン・ミズン著 水の管理めぐる文明史たどる」『日本経済新聞』7月6日朝刊。

〔事典項目〕

関 雄二

2014 「他者・表象」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』p.721, 東京：丸善出版。

2014 「世界遺産と民族」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.510-511, 東京：丸善出版。

〔その他〕

関 雄二

2014 「北米先住民のタバコとパイプ」『Herend Owl Club 通信』18：1。

2014 「北米先住民とタバコ」『世界のふくろう2005-2014 モンゴロイドの壮大な旅を追って 第十回＜北アメリカ＞2014』p.5, 東京：星商事株式会社。

- 2014 「土器泥棒と自警団」『月刊みんぱく』38(4)：2-3。
- 2014 「発掘と盗掘の違いはどこにあるのか——盗掘者の論理と、権威の側に立つ国や考古学者の論理と攻防の姿」『図書新聞』3159号（5月24日）3面。
- 2014 「著者自身による新刊書紹介『アンデスの文化遺産を活かす——考古学者と盗掘者の対話』（臨川書店、2014年）」『ラテンアメリカ・カリブ研究』21：82-85。
- 2014 「マフィアばかりではないゴッドファザー」『チャスキ（アンデス文明研究会会報）』49：3。
- 2014 「困ったときにはゴッドファザー」『月刊みんぱく』38(7)：21。
- 2014 「三千年越しの出会い 南米アンデスの文化遺産の保存と活用をめぐる試み」『季刊民族学』150：39-40。
- 2014 「4つの約束」『チャスキ（アンデス文明研究会会報）』50：3。
- 2014 取材・インタビュー「世界遺産 ナスカの地上絵にグリーンピースが落書き！」『FRIDAY』32(1)：10-11。
- 2015 「コメント」『基幹研究「人類学におけるミクロ・マクロ系の連関」二〇一三年度 第二回公開セミナー（二〇一四年一月二三日）』坪井正五郎の著書 川村伸秀氏を囲んで pp.36-44, 東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 基幹研究「人類学におけるミクロ・マクロ系の連関」。

◎映像音響メディアによる業績

・TV・ラジオ番組などの制作・監修

[TV 番組]

関 雄二監修

2015 「アンデス・スペシャルI 激走！7500キロの大山脈」『THE 世界遺産』TBS（1月4日放送）。

2015 「アンデス・スペシャルII 列車でゆく天空のインカ帝国」『THE 世界遺産』TBS（1月11日放送）。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2015年1月25日 関 雄二「古代アンデスにおける神殿の登場と権力の発生」公開フォーラム「古代文明の生成過程——エジプトとアンデス」JPタワー ホール&カンファレンスホール1

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年8月6日 Dos modos del proceso social del Período Formativo en la sierra norte del Perú: Kuntur Wasi y Pacopampa. Simposio Internacional “Los orígenes de la civilización en el Perú: Nuevas perspectivas antes nuevos descubrimientos,” Museo de la Nación, Lima, Perú

2014年8月21日 ¿Quién va a poner en valor al patrimonio cultural? I Congreso Nacional de Arqueología, Museo de la Nación, Lima, Perú

2014年10月9日 Aparición del templo y de la diferenciación social en el Período Formativo: Desde una perspectiva de los estudios realizados por la misión japonesa. Centro Cultural de San Marcos, Lima, Perú

2014年10月10日 Establecimiento del poder en la sociedad del Período Formativo: desde una perspectiva de la sierra norte. 10 de octubre de 2014, Pontificia Universidad de Católica del Perú, Lima, Perú

2014年11月2日 「ペルー北高地パコパンバ遺跡からみたアンデス文明における権力形成」第68回日本人類学会大会シンポジウム『アンデス文明形成期における人類学・考古学研究の最新成果』（オーガナイザー：長岡朋人、関 雄二）アクトシティ浜松コンgresセンター

2014年11月2日 「ペルー、パコパンバ遺跡出土人骨の生物考古学的研究——2005～2014年調査による新知見」（長岡朋人、森田 航、関 雄二、鶴澤和宏、Jan Pablo Villanueva, Mauro Ordóñez Iivia, Diana Alemán Paredes, Daniel Morales Chocan）第68回日本人類学会大会シンポジウム「アンデス文明形成期における人類学・考古学研究の最新成果」（オーガナイザー：長岡朋人、関 雄二）アクトシティ浜松コンgresセンター

2014年11月26日 「アンデス文明の誕生と神殿建設」日本DNA多型学会第23回学術集会、愛知県産業労働センター ウィンクあいち

2014年12月6日 鶴澤和宏、ディアナ・アレマン、関 雄二「パコパンバ遺跡の儀礼的コンテクストから出土した動物骨資料——資料形成過程の解明に果たすタフオノミー分析の可能性について」古代アメリカ学会第19回研究大会、名古屋大学

・広報・社会連携活動

2014年5月19日 「南米アンデスの巡礼路」 芦屋川カレッジ大学院、芦屋市民センター

2014年11月8日 「現代を読み解く世界史 内戦とテロリズムから見る現代ラテンアメリカ グアテマラとペルーの事例から」 朝日カルチャーセンター新宿

2014年11月13日 「文化遺産の国際協力」(中学2年生を対象とした国際理解の講演) 板橋第一中学校

2014年11月14日 「マチュ・ピチュの発見」 立花市民大学、尼崎市立立花公民館

2014年12月20日 「2014年度ペルー北高地パコパンパ遺跡の発掘調査」 アンデス文明研究会、東京外国語大学本郷サテライト

2015年1月21日 「南米アンデス文明の遺跡を巡る考古学者と盗掘者との闘い」 産経新聞社主催、みんなく創設40周年記念 カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館9階 SPACE 9

2015年2月20日 「アンデスの文化遺産の保存と活用」 阪神シニアカレッジ

◎調査活動

・海外調査

2014年7月2日～9月18日—ペルー (中央アンデス地帯における発掘調査)

2014年9月24日～10月18日—ペルー、英国 (中央アンデス地帯における発掘調査及び英国の遺跡の考古学的調査)

2015年2月24日～3月14日—ペルー (ペルー国立サン・マルコス大学との学術協定延長に関する協議及び、昨夏のパコパンパ発掘調査出土遺物の分析)

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員 (4人)

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金基盤研究(S)「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

文化遺産国際協力コンソーシアム副会長、文化遺産国際協力コンソーシアム中南米分科会委員、文化遺産国際協力コンソーシアム企画分科会委員、日本学術会議連携委員、ペルー全国学長会議編集局理事、ペルー国クントゥル・ワシ文化協会(NPO)クントゥル・ワシ博物館監査役、アンデス文明研究会顧問、金沢大学国際文化資源学研究所アドバイザー

平井京之介 [ひらい きょうのすけ]——教授

【学歴】 東北大学文学部社会学科社会学専攻卒 (1988)、ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ人類学部社会人類学修士課程修了 (1992)、ロンドン大学ロンドン経済政治学院人類学部博士課程修了 (1998) 【職歴】 花王株式会社本社チェーンストア部 (1988)、国立民族学博物館第1研究部助手 (1995)、国立民族学博物館民族文化研究部助手 (1998)、国立民族学博物館民族文化研究部助教授 (2001)、総合研究大学院大学文化科学研究科併任 (2006)、国立民族学博物館研究戦略センター教授 (2013) 【学位】 Ph.D. (ロンドン大学ロンドン経済政治学院人類学部 1998)、M.Sc. (ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ人類学部 1992) 【専攻・専門】 社会人類学 1) アジア産業労働者の人類学的研究、2) ラオス仏教の人類学的研究、3) コミュニティの政治人類学的研究 【所属学会】 日本文化人類学会、The Royal Anthropological Institute、組織学会

【主要業績】

[単著]

平井京之介

2011 『村から工場へ——東南アジア女性の近代化経験』 東京：NTT 出版。

[編著]

平井京之介

2012 『実践としてのコミュニティ——移動・国家・運動』京都：京都大学学術出版会。

[論文]

Hirai, K.

2008 The Romantic Ethic and the Notion of Modern Society: Imagining Communities among Northern Thai Factory Women. In S. Tanabe (ed.) *Imagining Communities in Thailand: Ethnographic Approaches*, pp.135-160. Chiang Mai: Silkworm Books.

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

水俣病被害者支援運動の人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究は、人びとが水俣病被害者を支援する運動を通じて新たにコミュニティを形成し、国家や社会との関係をつくりかえようとする過程を、人類学的アプローチを用いて明らかにする試みである。本研究では、熊本県水俣市の水俣病被害者支援NPOをコミュニティという観点から調査研究することによって、1970年代半ばから現在までのあいだに、この運動の活動や組織、関係性、資源と、そこに参加する人びとの志向する社会のイメージがいかに変化してきたか、またその過程において、国家統治や資本主義との関係をどのように変化させてきたかを解明することを目的とする。

・成果

本年度は、昨年度から3年間の予定で実施している科学研究費補助金プロジェクト（基盤研究(C)）「水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究」の研究活動の一部として、熊本県水俣市のNPOにおいて約2か月間の集約的な現地調査を実施し、特に、民間知識や儀礼的知識、社会的記憶など、NPOに蓄積された知や実践の様式に焦点を当てた調査をおこなった。さらに、NPOと、行政機関や政治団体、地域社会との関係を把握するために、聞き取り調査を実施した。また、昨年度に実施した国際シンポジウム“Social movements and the production of knowledge: politics, identity and social change in East Asia”の成果を刊行物としてまとめるための準備をおこなった（2015年7月刊行予定）。

◎出版物による業績

[共編著]

Sonoda, N., K. Hirai and J. Incherdchai (eds.)

2015 *Asian Museums and Museology 2014: International Workshop on Asian Museums and Museology in Thailand* (Senri Ethnological Reports 129). Osaka: National Museum of Ethnology [査読有, 学振研究拠点形成事業Bアジア・アフリカ学術基盤形成型の成果].

[論文]

Sonoda, N. and K. Hirai

2015 Introduction. In N. Sonoda, K. Hirai and J. Incherdchai (eds.) *Asian Museums and Museology 2014: International Workshop on Asian Museums and Museology in Thailand* (Senri Ethnological Reports 129), pp.1-7. Osaka: National Museum of Ethnology [査読有, 学振研究拠点形成事業Bアジア・アフリカ学術基盤形成型の成果].

[事典項目]

平井京之介

2014 「コミュニティ」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.544-545, 東京：丸善出版。

2014 「消費」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.596-597, 東京：丸善出版。

[その他]

平井京之介

2014 「書評『理性の暴力』——水俣病を中心に」『ごんずい』135：28-29。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・展示

常設展東南アジア展示新構築

◎調査活動

・国内調査

2014年4月6日～4月9日—熊本県水俣市（水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究）

2014年5月11日～5月13日—熊本県水俣市（水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究）

2014年5月29日～6月1日—富山県富山市、新潟県新潟市、石川県金沢市（水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究）

2014年6月13日～6月15日—福島県福島市、いわき市（水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究）

2014年6月16日～6月18日—熊本県水俣市（水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究）

2014年7月13日～7月15日—熊本県水俣市（水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究）

2014年8月18日～8月19日—熊本県水俣市（水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究）

2014年9月16日～9月17日—熊本県水俣市（水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究）

2014年10月20日～10月21日—熊本県水俣市（水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究）

2014年11月3日～12月26日—熊本県水俣市（水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究）

2015年3月23日～3月24日—三重県四日市市（水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究）

・海外調査

2014年8月24日～8月28日—タイ（タイの博物館・博物館学に関する共同研究・現地調査）

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

1年生ゼミ担当

樫永真佐夫 [かしなが まさお] ————— 准教授

1971年生。【学歴】早稲田大学第一文学部日本文学専修卒（1994）、東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻修士課程修了（1997）、東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻（文化人類学コース）博士課程単位取得退学（2001）【職歴】日本学術振興会特別研究員（1997）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（2001）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2008）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2010）、総合研究大学院大学准教授併任（2012）【学位】学術博士（東京大学 2006）、学術修士（東京大学 1997）【専攻・専門】文化人類学（東南アジアにおけるタイ系民族の民族誌的研究）【所属学会】日本文化人類学会、早稲田大学文化人類学会

【主要業績】

〔単著〕

樫永真佐夫

2013 『黒タイ歌謡「ソン・チュー・ソン・サオ」——村のくらしと恋』東京：雄山閣。

2011 『黒タイ年代記——「タイ・プー・サック」』東京：雄山閣。

2009 『ベトナムの祖先祭祀——家霊簿と系譜認識をめぐる民族誌』東京：風響社。

【受賞歴】

2010 第6回日本学術振興会賞

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

ベトナムにおける黒タイ文字と文書／東南アジアにおけるボクシングの文化人類学

・研究の目的、内容

今年度も、ベトナム西北地方からラオス北部にかけて居住している盆地民、黒タイの伝統文化の継承に焦点を当てた現地調査と文献調査に基づく民族誌的研究を継続する。とくに今年度は、黒タイ文字の創成と、伝統歌謡テキストに関する考察を中心的に行う。

また昨年度に引き続き、東南アジア（ベトナム、タイ、ラオスを中心とする）におけるボクシングの受容と発展に関する現地調査と文献調査を行う。

・成果

黒タイの古い歌謡テキストを自身の民族誌データに基づいて分析し、黒タイの植物観を考察した論文「黒タイ歌謡の中の植物とくらし」が、落合雪野・白川千尋編『ものとからしの植物誌——東南アジア大陸部から』（臨川書店）の1章として刊行された。

国立民族学博物館編『世界民族百科事典』（丸善出版）刊行にあたっては、編集委員として「神話・歴史」の章を編集したのみならず、「祖先崇拜」の項目も執筆した。庄司博史編『世界の文字事典』（丸善出版）でも、「ベトナム語」の項目を執筆した。

フランスによるインドシナの植民地化が進んだ19世紀後半、当時のベトナム西北部の黒タイ首領たちが、外部の諸国家や首領たちに対するどのような政治的、外交的戦略から黒タイ文字を創成したのかを歴史的に考察した論文を執筆した。現在、編著者とともに編集作業中であり、2015年度以降に出版する。

そのほか、ベトナム社会文化研究の一環として、「今年はヤギ年」「主役は人形なのか、人なのか？——ベトナムの水上人形劇」等の小論を発表した。

◎出版物による業績

[論文]

樫永真佐夫

2014 「黒タイ歌謡の中の植物とくらし」落合雪野・白川千尋編『ものとからしの植物誌——東南アジア大陸部から』 pp.295-310, 京都：臨川書店。

[事典項目]

樫永真佐夫

2014 「ベトナム語」庄司博史編『世界の文字事典』 pp.168-173, 東京：丸善出版。

2014 「祖先崇拜」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』 pp.158-159, 東京：丸善出版。

2014 「歴史・神話」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』 p.205, 東京：丸善出版。

[その他]

樫永真佐夫

2014 「主役は人形なのか、人なのか？——ベトナムの水上人形劇」『月刊みんぱく』38(5)：14-15。

2015 「今年はヤギ年」『月刊みんぱく』39(1)：8-9。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・研究講演

2014年11月1日 「黒タイ歌物語『イン・エン』」（樫永真佐夫&谷 由起子トークショー）OUTBOUNDにおける展覧会『H. P. E 谷 由起子の仕事 ラオス少数民族との布づくり（2014年10月29日～11月17日）』OUTBOUND（東京都武蔵野市）

2015年1月28日 「多民族共生を考える——ベトナム西北部の人々のくらしから」産経新聞社主催、みんぱく創設40周年記念 カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館9階 SPACE 9

・広報・社会連携活動

2014年5月4日 「ベトナム、黒タイのディエンビエンフー60年」第343回みんぱくウィークエンド・サロン

2015年1月16日 「文化って、なに？——こんなものも、あんなものも食べてみた」大阪成蹊女子高等学校美術・イラスト・アニメーションコース進路講演、大阪成蹊女子高等学校

◎調査活動

・海外調査

2014年10月7日～10月17日—ベトナム（ベトナムの黒タイの歌物語に関する研究）

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

1年生ゼミ「地域文化学基礎演習Ⅰ」、リサーチプロポーザル

・博士論文審査委員

予備審査委員（1件）

丹羽典生 [にわ のりお] ————— 准教授

【学歴】慶應義塾大学文学部卒（1996）、東京都立大学大学院社会科学研究科修士課程修了（1999）、東京都立大学大学院社会科学研究科博士課程単位修得満期退学（2005）【職歴】日本学術振興会特別研究員PD・法政大学（2005）、法政大学社会学部兼任教員（2005）、首都大学東京非常勤講師（2006）、筑波大学非常勤講師（2007）、国立民族学博物館研究戦略センター助教（2008）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2012）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2013）【学位】博士（社会人類学）（東京都立大学 2006）、修士（社会人類学）（東京都立大学 1999）【専攻・専門】社会人類学、オセアニア地域研究【所属学会】日本文化人類学会、日本オセアニア学会、東京都立大学社会人類学会、早稲田文化人類学会、Association for Social Anthropology in Oceania、The International Union of Anthropological and Ethnological Sciences

【主要業績】

[単著]

丹羽典生

2009 『脱伝統としての開発——フィジー・ラミ運動の歴史人類学』東京：明石書店。

[共編著]

丹羽典生・石森大知編

2013 『現代オセアニアの〈紛争〉——脱植民地期以降のフィールドから』京都：昭和堂。

[論文]

Niwa, N.

2010 Leaving their Tradition behind: Development of the Lami Movement in Fiji from 1949 to the 1990s. *People and Culture in Oceania* 26: 81-108.

【受賞歴】

2010 第9回オセアニア学会賞

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

応援の人類学：政治・スポーツ・ファン文化からみた利他性の諸相

・研究の目的、内容

本研究は、＜応援＞という視点から人類の諸文化を通文化的に比較することを通じて、利他性という人間性の根源について文化人類学的に考察することを目的とする。＜応援＞の下位項目として、政治、スポーツ、ファン文化をさしあたり設定し、世界の事例を取り上げる検討する。日本からは、大学を中心とする応援団の諸活動を具体的な民族誌的研究の対象とする。調査の遂行に当たっては、科学研究費補助金への応募も計画している。

・成果

神戸、熊本にて調査研究を行った。また、生物学、心理学、法学など隣接諸科学における利他性に関わる研究書の読解を通じて、議論の整理を試みた。事例研究としては、国会図書館などに所蔵されている日本の大学応援団、チアリーダーの関係資料の収集閲覧とデータベースの作成を行った。成果公開としては、研究会を組織して合計4名による研究発表を行ったほか、『月刊みんぱく』にて「野次と喝采」というタイトルの特集がまもなく上梓される予定である。この研究会を母体として、みんぱくの共同研究会の研究グループの立ち上げを計画している。

◎出版物による業績

[事典項目]

丹羽典生

2014 「植民地文学」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.502-503, 東京：丸善出版。

[その他]

丹羽典生

2014 「旅・いろいろ地球人 生き物⑥ いつかは行きたいイノシシ猟」『毎日新聞』7月10日夕刊。

- 2014 「みんなく世界の旅 フィジー① お誕生日会は一生涯に2度」『毎日小学生新聞』 7月12日。
- 2014 「みんなく世界の旅 フィジー② みんなの日々の楽しみは…」『毎日小学生新聞』 7月19日。
- 2014 「みんなく世界の旅 フィジー③ さまざまな文化 もめごと」『毎日小学生新聞』 7月26日。
- 2014 「みんなく世界の旅 フィジー④ かつて、フィジーに移住した日本人もいた」『毎日小学生新聞』 8月2日。
- 2014 「民主制への復帰か、さらなる混乱の序章か——フィジーにおける8年ぶりの総選挙の帰結」『国際人権 ひろば』 118: 12-13。
- 2015 「旅・いろいろ地球人 信じる② 出会った意味」『毎日新聞』 1月29日夕刊。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会

- 2015年2月28日 「神学と宗教的社会運動——フィジー・ダク村落開発事業の事例から」『宗教の開発実践と公共性に関する人類学的研究』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2014年5月5日 ‘Accommodating Political Crisis: the Perspective of Ethnic Minorities in Fiji.’ Panel “Crisis as Ongoing Reality: Perspectives from Different Anthropological Locations” (Covenor: Niko Besnier, Susana Narotzky), IUAES 2014 with JASCA, Makuhari Messe, Chiba, Japan
- 2014年6月22日 「応援の人類学に向けた試論」『応援の人類学——政治・スポーツ・ファン文化からみた利他性の諸相』国立民族学博物館
- 2014年11月29日 ‘Introduction: Challenge for the Traditional Man in Contemporary Japan.’ Anthropology of Japan in Japan, Nanzan University
- 2014年11月29日 ‘Challenge for the Traditional Man in Contemporary Japan: From a Case Study of the College Cheering Group as Japanese Organization.’ Anthropology of Japan in Japan, Nanzan University
- 2015年2月23日 「ヴァヌアツ人としての自己形成——フィジーにおけるヴァヌアツ移民を事例として」『科学研究費補助金「太平洋島嶼部におけるマイノリティと主流社会の共存に関する人類学的研究」研究会』京都大学
- 2015年3月27日 「消えた日本人移民——19世紀フィジーにおける実験とその記録」『日本オセアニア学会』田沢湖公民館大集会室（秋田）

◎調査活動

・海外調査

- 2014年8月5日～8月22日—フィジー（OS型言語の文処理メカニズムに関するフィールド言語認知脳科学的研究）
- 2014年8月25日～9月5日—ニューカレドニア、ヴァヌアツ（太平洋島嶼部におけるマイノリティと主流社会の共存に関する資料の収集）
- 2015年1月30日～2月9日—ニュージーランド、トンガ（「トランスナショナルな社会運動と政治参加の人類学：オセアニア大国の移民を事例に」に関わる資料収集及び調査研究）
- 2015年3月2日～3月16日—オーストラリア（「トランスナショナルな社会運動と政治参加の人類学：オセアニア大国の移民を事例に」に関わる資料収集及び調査研究）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「地域民族誌の方法論と人類学的空間構想力の可能性の探求」（研究代表者：高倉浩樹）共同研究員、科学研究費補助金（基盤研究（A））「太平洋島嶼部におけるマイノリティと主流社会の共存に関する人類学的研究」（研究代表者：風間計博）研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究（C））「トランスナショナルな社会運動と政治参加の人類学：オセアニア大国の移民を事例に」研究代表者

三尾 稔 [みお みのる] ————— 准教授

1962年生。【学歴】東京大学教養学部卒（1986）、東京大学大学院社会学研究科文化人類学専攻修士課程修了（1988）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程退学（1992）【職歴】東京大学教養学部助手（1992）、東洋英和女学院大学社会科学部専任講師（1995）、東洋英和女学院大学社会科学部助教授（1999）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（2003）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2004）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2008）【学位】社会学修士（東京大学大学院社会学研究科 1988）【専攻・専門】社会人類学・インドの宗教と社会【所属学会】日本文化人類学会、日本南アジア学会

【主要業績】

[編著]

三尾 稔編

2011 『インド ポピュラー・アートの世界——近代西欧との出会いと展開』大阪：千里文化財団。

[共編]

出口 顯・三尾 稔編

2010 『人類学的比較再考』（国立民族学博物館調査報告90）大阪：国立民族学博物館。

[論文]

Mio, M.

2009 Young Men's Public Activities and Hindu Nationalism: Naviyuvak Mandals and the Sangh Parivar in Western Indian Town. In D. Gellner (ed.) *Ethnic Activism and Civil Society in South Asia*, pp.27-56. New Delhi: Sage.

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

インド西部における宗教と文化の変容に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

世界市場への直接的な連結や情報テクノロジーの広範な浸透などを背景に、1990年代以降のインドの文化や宗教は地域外の動向と共振しつつ基層的な部分から大きな変容を遂げている。三尾が20年あまりにわたってフィールド調査を継続してきたインド西部の都市や村落においても、それは例外ではない。そこで、本年度の各個研究においては、特に情報テクノロジーの浸透や宗教の政治化・商品化といった全インド規模で見られる宗教や文化の変容動向が、地方のサバルタンの宗教実践をどのように変容させているかという点に注目し、フィールド調査や文献調査をもとに、変容の諸相を実証的に解明し、これが政治・経済・社会の動向とどのように関連するのかを明らかにする。

人間文化研究機構地域研究推進事業の一環である「現代インド地域研究」は、第5年度目に入る。三尾は、この研究プロジェクトにおいて国立民族学博物館拠点の拠点代表を引き続きつとめ、拠点構成員や研究分担者とともに国際的な連携協力のもとでインド研究を推進する。この研究プロジェクトの国立民族学博物館拠点におけるテーマは、「現代インドの文化と宗教の動態」である。各個研究のテーマは、この大テーマに密接に関連するものであり、拠点予算も活用しつつ拠点の研究テーマの本での1つの実証的研究として各個研究を遂行する。

また、文化資源プロジェクト予算を獲得した、『沖 守弘インド民族文化写真資料アーカイブ』のデータベース作成プロジェクトでは、上記「現代インド地域研究」プロジェクト経費も活用しつつ、20世紀後半のインドの文化変容を写真によって跡づけられるデータベース資料とすべく、スライド写真のデジタル化およびデータベース化に向けた資料詳細目録の作成を、昨年度に引き続いて実施する。

一方、文化資源プロジェクト「『ラージャスターン州の生活・信仰・儀礼』に関する映像資料の編集と現地語版の作成」では、2015年度における現地語版の映像音響番組作成にそなえ、まず今年度は2011年度に実施した映像音響資料取材プロジェクト（「インド・ラージャスターン州における社会変容と婚礼」）の成果に基づき、取材資料をビデオテープ・マルチメディア・コンテンツ番組として編集製作に取り組む。

・成果

上記テーマに関して、「現代インド地域研究」推進経費に基づき2014年7月～8月にインドに赴き民衆的で地域限定的なヒンドゥー教の信仰実践のサイバー空間利用に関して現地調査を行った。また、2014年10月に「現代イ

ンド地域研究」国立民族学博物館拠点が主催した国際研究ワークショップにおいてその成果を英文で発表した。

「現代インド地域研究」推進事業に関しては、国立民族学博物館拠点の代表として、研究会やシンポジウムの開催、研究資料の受け入れなど拠点事業の推進を主導した。拠点の研究はグループ1「現代インドの宗教：運動と変容」及びグループ2「環流する現代インド文化」から組織される。今年度は両グループ合同の研究会を3回開催したほか、国際研究セミナーと国際研究ワークショップを1回ずつ開催した。報告者はこれらの国内研究会の企画立案に関与し、研究会を主宰した。拠点プロジェクトの研究成果は、「現代インド地域研究」ネットワーク全体で出版を計画している全6巻の研究叢書のうちの第6巻として編集し、2015年5月初旬に出版される予定である。この巻において、報告者自身は編者として関与するだけでなく、序論および第12章を執筆している。

また、「現代インド地域研究」プロジェクトと「イスラーム地域研究プロジェクト」との連携研究プロジェクト「南アジアとイスラーム」プロジェクトにおいて、報告者が企画・立案・責任者となって2014年10月にシンポジウムを開催した。このシンポジウムの成果は、報告者が共編者となって2015年3月に論文集として刊行された。

「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点は、研究ネットワークの国際化の推進にも積極的に取り組んでいる。2010年度に研究交流に関する覚書を交わしたエジンバラ大学南アジア研究センターとの間では日本の南アジア研究の成果の英文叢書としての刊行事業を進めている。本年度は、原稿の取りまとめ等の編集作業を進め、刊行が開始された。報告者は、この英文叢書のうちの2冊の編集執筆を行っており、このうち1冊は2015年5月中に出版される予定である。

『「沖 守弘インド民族文化写真資料アーカイブ」のデータベース作成』プロジェクトでは、文化資源プロジェクト経費と「現代インド地域研究」プロジェクト経費を活用し、総点数20,217点のスライド写真のうち8,200点あまりのデジタル化を終えるとともに、5,000点あまりのテキスト情報の打ち込みを行った。

文化資源プロジェクト『「ラージャスターン州の生活・信仰・儀礼」に関する映像資料の編集と現地語版の作成』では、2011年度に実施した映像音響資料取材プロジェクト（「インド・ラージャスターン州における社会変容と婚礼」）の成果による取材資料を、ビデオテープ・マルチメディア・コンテンツ番組として編集製作した。

◎出版物による業績

[編著]

三尾 稔・山根 聡編

2015 『英領インドにおける諸宗教運動の再編——コロニアリズムと近代化の諸相』京都：人間文化研究機構地域研究間連携研究の推進事業「南アジアとイスラーム」。

[事典項目]

三尾 稔

2015 「4. 宗教・信仰」(編集担当) 国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.127-163, 東京：丸善出版。

2015 「4. 宗教・信仰 (セクション概説)」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』p.127, 東京：丸善出版。

2015 「ディアスポラ・ナショナリズム／遠隔地ナショナリズム」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.76-77, 東京：丸善出版。

2015 「ヒンドゥー・ナショナリズム」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.78-79, 東京：丸善出版。

2015 「分類される『宗教』」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.128-129, 東京：丸善出版。

[その他]

三尾 稔

2014 「みんなく世界の旅インド① インドの人はカレーが大好き？」『毎日小学生新聞』5月17日。

2014 「みんなく世界の旅インド② インド人はことばの天才!？」『毎日小学生新聞』5月24日。

2014 「みんなく世界の旅インド③ 牛と一緒に暮らす人びと」『毎日小学生新聞』5月31日。

2014 「みんなく世界の旅インド④ めざせ！プロクリケットプレーヤー」『毎日小学生新聞』6月7日。

2015 「問われる故郷と祖国の意味 映画『ミルカ』で考える印パ問題」『産経新聞』2月3日夕刊。

◎映像音響メディアによる業績

・DVD・CDなどの制作・監修

[DVD]

三尾 稔監修

2015 『みんなく映像民族誌 第15集 ラージャスターンの結婚式』日本語, 106分。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機構の連携研究会での報告

2014年10月11日 ‘Enchantment of the Past: Nature of “Faith through Things” in the Worrier’s Spirits” Cult of Southeastern Rajasthan.’ 現代インド地域研究国立民族学博物館拠点 2014年度国際研究ワークショップ、国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年12月14日 ‘Circum-Terrestrial Movements and Its Global Impacts.’ 2014年度現代インド地域研究国際全体集会 “Perspectives, Dialogues and Challenges: India, Japan and the Making of Modern Asia,” India Habitat Centre, New Delhi, India

・研究講演

2014年11月4日 みんなく公開講演会『無形文化遺産——選ぶ視点 選ばれる現実』総合司会、日経ホール

2014年11月13日 「暮らしの変化から見る『躍動』 インドの姿」クラブ広島例会、ウェスティンホテル大阪

2015年3月20日 みんなく公開講演会『いやし旅のウラ？おもて？——現代アジアツーリズム考』企画・パネルディスカッション司会、毎日新聞オーバルホール

・広報・社会連携活動

2014年4月16日 「インドの大地に春を呼ぶ——ホーリーの火祭り」産経新聞社主催、みんなく創設40周年記念 カレッジシアター「地球探究紀行」第2回、あべのハルカス近鉄本店 ウイング館9階SPACE9

2014年5月31日 みんなくワールドシネマ『マイネーム・イズ・ハーン』解説

2014年6月25日 「家族をつなぐ 社会をつなぐ——インドの婚礼」産経新聞社主催、みんなく創設40周年記念 カレッジシアター「地球探究紀行」第9回、あべのハルカス近鉄本店 ウイング館9階SPACE9

2014年9月10日 「インドの女神にささげる歌と踊り」産経新聞社主催、みんなく創設40周年記念 カレッジシアター「地球探究紀行」第16回、あべのハルカス近鉄本店 ウイング館9階SPACE9

2014年10月5日 「ヒンドゥー教世界の神々のイメージ」第358回みんなくウィークエンド・サロン

・展示

南アジア展示場の新構築（2015年3月19日オープン）南アジア展示チーム責任者

◎調査活動

・海外調査

2014年7月23日～8月11日—インド（現代インドにおける宗教の動態および大都市の消費文化の現状に関する調査）

2014年10月21日～10月25日—イギリス（国立民族学博物館とエディンバラ大学の国際学術交流協定の延長に関する審議）

2014年12月11日～12月18日—インド（「現代インド地域研究」プロジェクト主催国際シンポジウム参加）

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

1年生ゼミ担当

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点 拠点代表

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

京都大学地域研究統合情報センター運営委員、日本南アジア学会理事、日本文化人類学会評議員

・特別講師

2014年5月23日 「暮らしに根ざすヒンドゥー教の世界」園田学園女子大学総合生涯学習センター・シニア専修コース「国際文化学科」

2015年1月28日 「南アジア展示場の新展示」大阪大学人間科学部「人類学実習実験」

伊藤敦規 [いとう あつのり]———助教

1976年生。【学歴】東京都立大学人文学部卒（社会学学士）（2000）、東京都立大学大学院社会科学研究科修士課程修了（社会人類学修士）（2003）、国立民族学博物館平成19年度特別共同利用研究員修了（2008）、国立民族学博物館平成20年度特別共同利用研究員修了（2009）、東京都立大学大学院社会科学研究科博士課程単位取得満期退学（2009）【職歴】三重大学人文学部非常勤講師（2008）、北海道大学アイヌ・先住民研究センター研究員（2008）、A: shiwi A: wan Museum and Heritage Center Visiting Researcher（2009）、日本学術振興会特別研究員PD（2009）、立教大学兼任講師（2009）、北海道大学アイヌ・先住民研究センター客員研究員（2010）、国立民族学博物館平成22年度文化資源プロジェクト共同研究員（2010）、東北大学東北アジア研究センター共同研究員（2010）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教（2011）【学位】博士（社会人類学）（東京都立大学 2011）、修士（社会人類学）（東京都立大学 2003）【専攻・専門】社会人類学・米国先住民研究、先住民の知的財産権問題、博物館人類学【所属学会】日本文化人類学会、東京都立大学社会人類学会、民族藝術学会、西洋史学会、アメリカ学会、日本知財学会、American Anthropological Association、International Union of Anthropological and Ethnological Sciences

【主要業績】

〔編著〕

山崎幸治・伊藤敦規編著

2012 『世界のなかのアイヌ・アート』北海道大学アイヌ・先住民研究センター。

〔論文〕

伊藤敦規

2015 「国立民族学博物館における研究公演の再定義——『ホビの踊りと音楽』の記録とフォーラムとしてのミュージアムの視点からの考察」『国立民族学博物館研究報告』39(3)：397-458。

2013 「民族誌資料の制作者名廻り調査——『ホビ製』木彫人形資料を事例として」『国立民族学博物館研究報告』37(4)：495-633。

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本国内博物館等所蔵アメリカ南西部先住民資料の協働管理に向けた調査研究

・研究の目的、内容

本研究は5年計画で実施される。その目的は、第1に日本国内の博物館等が所蔵しているアメリカ先住民資料（物質文化）の来歴や情報管理や保存状況を総合的に把握することである。第2の目的は日本国内での調査結果をアメリカ先住民コミュニティと共有し、将来的な管理に向けた要望等を聞き取り調査することである。第3の目的は、先住民コミュニティから寄せられる声を博物館などと共有することによって、今後の資料管理に反映されるだろう協働の制度的な枠組みを整理・検討することである。なお、具体的な調査対象機関は、東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館（宮城）、豊島みみずく資料館（東京）、静岡市立芹沢銈介美術館（静岡）、柏木博物館（長野）、リトルワールド（愛知）、天理参考館（奈良）、国立民族学博物館（大阪）、日本郷土玩具博物館（広島）、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館（香川）、の9機関とする。また、資料調査対象とする民族集団は、約20のプエブロ諸民族、ナバホ、アパッチ、ヤキなどである。なお、必要な場合はアイヌ民族も対象に含める。

・成果

2014年度は、2012年に調印した民博とズニ博物館との間の学術協定、および2014年7月に調印した民博と北アリゾナ博物館との間の学術協定に基づき、民博にて10月に国際ワークショップを開催した（科学研究費補助金若手研究(A)「日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究」とフォーラム型情報ミュージアム・開発型プロジェクト「北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有」共同主催）。このワークショップ以後も米国南西部先住民ホビの人々が民博でホビ製木彫人形資料の熟覧を行い、その様子は全てデジタル映像収録した。これによって本研究の第2と第3の目的が達成された。

また、民博共同研究『米国本土先住民の民族誌資料を用いるソースコミュニティとの協働関係構築に関する研究』の機会を利用し、2015年1月には愛知県犬山市の野外民族博物館リトルワールドにて研究会を実施し、収蔵庫や展示場にてホビ製資料を確認した。これにより本研究の第1の目的が達成された。

本年度の成果として、『国立民族学博物館研究報告』などに寄稿し採択、掲載された。

◎出版物による業績

〔論文〕

伊藤敦規

- 2015 「国立民族学博物館における研究公演の再定義——『ホピの踊りと音楽』の記録とフォーラムとしてのミュージアムの視点からの考察」『国立民族学博物館研究報告』39(3)：397-458 [査読有]。
- 2015 「博物館をめぐる対話——国立民族学博物館における〈ホピの踊りと音楽〉公演」高倉浩樹編『展示する人類学——日本と異文化をつなぐ対話』pp.113-141, 京都：昭和堂 [査読有]。

〔事典項目〕

伊藤敦規

- 2014 「北米先住民」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.296-297, 東京：丸善出版。
- 2014 「手工芸」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.496-497, 東京：丸善出版。
- 2014 「博物館と返還」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.518-519, 東京：丸善出版。
- 2014 「表象に対する権利」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.736-737, 東京：丸善出版。

〔その他〕

伊藤敦規

- 2014 「日本国内の米国先住民研究の展開のために——民族誌資料で関係者を束ねる」『民博通信』145：20-21。
- 2014 「旅・いろいろ地球人 生き物⑦ 精霊の化身、仮面」『毎日新聞』7月17日夕刊。
- 2015 「みんなく世界の旅 アメリカ先住民ホピ① おいのりで雨雲を呼ぶ」『毎日小学生新聞』1月10日。
- 2015 「みんなく世界の旅 アメリカ先住民ホピ② 願いを込めて『ソーシャルダンス』」『毎日小学生新聞』1月17日。
- 2015 「みんなく世界の旅 アメリカ先住民ホピ③ 身体能力高いホピの人々」『毎日小学生新聞』1月24日。
- 2015 「みんなく世界の旅 アメリカ先住民ホピ④ 伝統的な生活を大切に」『毎日小学生新聞』1月31日。

Ito, A.

- 2014 Re-Collection and Sharing Traditional Knowledge, Memories, Information, and Images: Problem and the Prospects on Creating Collaborative Catalog. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 38: 11-12.
- 2014 (掲載記事) International Collaboration Helps Connect Museum of Northern Arizona to Hopi Community. *Navajo-Hopi Observer* 34(50): 1, 4.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

- 2014年5月7日 'Intellectual Property: Consideration on "Copyrighted Works" to be Uniquely Given by Ethnological Museums,' "JICA Museology Course," National Museum of Ethnology
- 2014年10月5日 'Introduction,' Minpaku International Workshop "Collection Review: Methodology and Effective Utilization for the Museum and the Source Community," National Museum of Ethnology
- 2014年10月5日 'Tasks of Collection, Accumulation, Documentation, and Effective Utilization of SC's Comments,' Minpaku International Workshop "Collection Review: Methodology and Effective Utilization for the Museum and the Source Community," National Museum of Ethnology
- 2014年10月5日 'Reconnect Museum and Source Community,' (with R. Breunig and K. H.-Gilpin) Minpaku International Workshop "Collection Review: Methodology and Effective Utilization for the Museum and the Source Community," National Museum of Ethnology
- 2014年10月6日 'Introduction of "Kachina doll" Collection Labeled Hopi in Minpaku,' Minpaku International Workshop "Collection Review: Methodology and Effective Utilization for the Museum and the Source Community," National Museum of Ethnology

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2014年5月15日 'Collaborating with the Source Community,' IUAES panel "Re-imagining Ethnological Museums: New Approaches to Developing the Museum as a Place of Multi-lateral Contacts and Knowledge (Commission on Museums and Cultural Heritage)," Makuhari Messe [査読有]

- 2014年6月8日 「米国先住民資料の所在と管理情報の現状、国立民族学博物館のInfo-Forum Museum構想の報告」アメリカ学会第48回年次大会、米国先住民分科会、沖縄コンベンションセンター
- 2014年11月1日 「米国先住民ホピ製宝飾品の真髓を真贋判断から考える」首都大学東京「学術成果の都民への発信拠点・組織の形成」研究グループシンポジウム『伝統文化は誰のもの？ 文化資源をめぐる協働を考える』首都大学東京
- 2015年3月26日 ‘Collaborative Collection Research with Source Community: Introduction of “Info-Forum Museum Project”,’ 36th American Indian Workshop “Knowledge and Self-Representation,” Johann Wolfgang Goethe-Universität, Frankfurt am Main [査読有]

・民博研究懇談会

- 2014年9月4日 「所蔵博物館とソースコミュニティにとっての資料熟覧」第260回民博研究懇談会

・展示

- 「ホンモノ？ニセモノ？——『ホピ製』宝飾品の真作贋作」（2014年10月31日～2014年11月13日、首都大学東京「学術成果の都民への発信拠点・組織の形成」研究グループ企画展『伝統文化は誰のもの？——文化資源をめぐる協働を考える』）、首都大学東京91年館

・広報・社会連携活動

- 2014年10月31日～11月13日 映像作品上映『アメリカ先住民 ホピの銀細工づくり——銀板に重ね合わせる伝統』首都大学東京「学術成果の都民への発信拠点・組織の形成」研究グループ企画展『伝統文化は誰のもの？——文化資源をめぐる協働を考える』首都大学東京91年館
- 2014年10月31日～11月13日 映像作品上映『インディアン・ジュエリーの現在』首都大学東京「学術成果の都民への発信拠点・組織の形成」研究グループ企画展『伝統文化は誰のもの？——文化資源をめぐる協働を考える』首都大学東京91年館
- 2015年2月17日 「ソースコミュニティと収蔵資料の『再会』の重要性について」北海道アイヌ協会・国立民族学博物館第2回研修生講義、国立民族学博物館
- 2015年2月27日 「米国先住民アートの知的財産権問題——ソースコミュニティと収蔵資料の『再会』」園田学園女子大学 平成26年度特別講座「現代世界の諸問題」第5回講義、園田学園女子大学

◎調査活動

・海外調査

- 2014年6月29日～7月11日—アメリカ合衆国（北アリゾナ博物館との学術協定調印式に参加及び米国南西部の博物館等文化施設調査）
- 2014年11月17日～12月12日—アメリカ合衆国（北アリゾナ博物館での資料調査）
- 2015年3月15日～3月30日—オランダ、ドイツ（フォーラム型情報ミュージアムに関する事前調査、及び American Indian Workshop での研究発表）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

国立民族学博物館共同研究会「米国本土先住民の民族誌資料を用いるソースコミュニティとの協働関係構築に関する研究」研究代表者、国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム・開発型プロジェクト「北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有」研究代表者、科学研究費補助金（若手研究（A））「日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究」研究代表者、国立民族学博物館機関研究「民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究——ロシア民族学博物館との国際共同研究」（研究代表者：佐々木史郎）共同研究員、国立民族学博物館機関研究「文化遺産の人類学——グローバル・システムにおけるコミュニティとマテリアリティ」（研究代表者：飯田 卓）共同研究員、北海道大学アイヌ・先住民研究センター共同研究「先住民民族アートプロジェクト」（研究代表者：山崎幸治）共同研究者、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究「地域民族誌の方法論と人類学的空間構想力の可能性の探求」（研究代表者：高倉浩樹）共同研究者

◎社会活動・館外活動

- ・他の機関から委嘱された委員など

地域研究コンソーシアム運営委員、日本文化人類学会50周年記念誌国際大会ソーシャル・プログラム委員

◎学会の開催

2014年10月5日～10日 国立民族学博物館国際ワークショップ『資料熟覧——方法論および博物館とソースコミュニティにとっての有効活用を探る』主催、国立民族学博物館・科学研究費補助金（若手研究（A））『日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究』・フォーラム型情報ミュージアム・開発型プロジェクト「北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有」

河合洋尚 [かわい ひろなお]——— 助教

1977年生。【学歴】関西学院大学社会学部卒業（2001）、東京都立大学大学院社会科学研究科（修士課程）修了（2003）、東京都立大学大学院社会科学研究科（博士課程）修了（2009）【職歴】嘉応大学客家研究院講師（2008）、中山大学社会学・人類学学院助理研究員（講師）（2010）、国立民族学博物館研究戦略センター機関研究員（2011）、国立民族学博物館研究戦略センター助教（2013）【学位】博士（社会人類学）（東京都立大学 2009）、修士（社会人類学）（東京都立大学 2003）【専攻・専門】都市人類学、景観人類学、漢族研究【所属学会】日本文化人類学会、東京都立大学社会人類学会、日本華僑華人学会、中国広東民族学会

【主要業績】

[単著]

河合洋尚

2013 『景観人類学の課題——中国広州における都市環境の表象と再生』東京：風響社。

[編著]

河合洋尚編

2013 『日本客家研究の視角与方法——百年の軌跡』北京：社会科学文献出版社。

[論文]

Kawai, H.

2012 Creating Multiculturalism among the Han Chinese: Production of Cantonese Landscape in Urban Guangzhou. *Asia Pacific World* (International Association for Asia Pacific Studies, New York and London: Berghahn) 3(1): 50-68.

【受賞歴】

2001 安田三郎賞

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

- 1) 中国漢族地域の都市景観形成にまつわる人類学的研究
- 2) 環太平洋における客家の移動、文化再生、景観形成にまつわる越境民族誌
- 3) 漢族の人類学的研究にまつわる先行研究の整理

・研究の目的、内容

- 1) 景観人類学の理論と手法を再考するとともに、その視点と手法をもって中国華南地方の漢族社会における景観形成を解説する。
- 2) 客家、特に中国南部とベトナムに居住するンガイ人に着目し、その国境を超えた文化的ネットワークを明らかにする。科研「漢族の特色の空間利用とエスニシティの再編——中・越隣接エリアの調査研究」の一環として、中国南部、ベトナムだけでなく、再移住先であるアメリカ等でも調査をおこなう。
- 3) 日本、アメリカ、中国等における漢族の人類学的研究を整理する。

・成果

- 1) 景観人類学の理論を簡潔に紹介し、中国華南地方の事例からそれを再考する論文「景観人類学の射程と展望——中国客家地域における景観建設の事例から」（『山形大学歴史・地理・人類学論集』16号）を発表した。

- 2) 今までほとんど知られていなかったベトナム客家の概況、および移動、社会組織、文化創造、アイデンティティの実態について「ベトナム客家の移住とアイデンティティ——ンガイ人に関する覚書」（『客家與多元文化』9号）や「ベトナムの客家に関する覚書——移動・社会組織・文化創造」（『華僑華人研究』11号）という2つの論文でまとめた。また、四川省や広西チワン族自治区における客家および客家文化の生成について華僑とのかかわりから論じた。その成果は、中国語論文「族群話語与社会空間——四川成都、広西玉林客家空間的建構」（黄忠彩・張繼焦編『企業和城市發展——并非全是經濟的問題』）、「客家話語与文化產業——以梅州、玉林、成都為例」（韓敏・末成道男編『中国社会与民族的話語分析——人類学的理框架論及個案研究』）などで発表した。これらの論文は、科研「漢族の特色の空間利用とエスニシティの再編——中・越隣接エリアの調査研究」の研究成果の一部である。
- 3) 日本の客家研究について中国語で紹介した論文「日本客家研究の軌跡——從日本時代台灣調查到後現代主義視角」（『全球客家研究』創刊号）を台湾の雑誌で発表した。

◎出版物による業績

[論文]

河合洋尚

- 2014 「『客家の故郷』の誕生——広東省・福建省・江西省の省境における客家空間の生産をめぐって」末成道男・劉志偉・麻国慶編『人類学と「歴史」——第一回東アジア人類学フォーラム論文集』北京：社会科学文献出版社（日中両言語）。
- 2014 「对于日本客家民間信仰以及風水研究的個人見解——从空間——場所論的觀點来看」周建新・温春香編『客家民間信仰和地域社会研究』pp.16-25, 哈爾濱：黑龍江人民出版社。
- 2014 「人工環境的社会文化人類学理論——走向調整論的途径」羅勇・邹春生編『客家民居与聚落文化研究』pp.296-312, 哈爾濱：黑龍江人民出版社。
- 2014 「族群話語与社会空間——四川成都、広西玉林客家空間的建構」韓敏・末成道男編『中国社会的家族・民族・国家的話語及其動態——東亞人類学者的理論探索』（Senri Ethnological Studies 90）pp.115-131, 大阪：国立民族学博物館〔査読有〕。
- 2014 「社会主義中国における宗教復興」『唯物論研究』129：1-5。
- 2015 「景観人類学の射程と展望——中国客家地域における景観建設の事例から」『山形大学歴史・地理・人類学論集』16：39-54。

河合洋尚・呉雲霞

- 2014 「ベトナムの客家に関する覚書——移動・社会組織・文化創造」『華僑華人研究』（日本華僑華人学会）11：93-103〔査読有〕。
- 2014 「ベトナム客家の移住とアイデンティティ——ンガイ人に関する覚書」『客家與多元文化』（日本客家文化協会）9：6-51。

[その他]

河合洋尚

- 2014 「景観人類学——さらなる可能性の模索」『民博通信』146：24-25。
- 2014 「旅・いろいろ地球人 父親③ 出稼ぎと故郷への帰還」『毎日新聞』12月4日夕刊。

◎映像音響メディアによる業績

・電子ガイドの制作・監修

[中国地域の文化]

河合洋尚監修

- 2014 『メルボルンの中華街』日本語、英語、韓国語、中国語。

陳天璽・河合洋尚監修

- 2014 『冥界用品』日本語、英語、韓国語、中国語。
- 2014 『獅子舞・龍舞』日本語、英語、韓国語、中国語。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム

- 2014年4月26日 「華僑与宗教復興——華南客家地区的客家景観和靈性」国際シンポジウム『宗教与文化』南京大学社会学院人類学研究所
- 2014年5月18日 「趣旨説明：ランドスケープの人類学——競合論から整合論へ」「構造色としての景観——中国客家地区における文化的景観の競合と整合」第48回日本文化人類学会分科会『ランドスケ

ープの人類学——競合論から整合論へ』（代表：河合洋尚）、幕張メッセ

2014年5月21日 「日本茶道と潮汕功夫茶の比較」安溪人民政府主催国際シンポジウム『中国茶の世界』安溪永隆国際酒店

2014年5月31日 「趣旨説明」仙人の会座談会『中国の宗教とフィールドワーク』武蔵大学

2014年8月2日 「中国雲南省における＜僑郷空間＞の創出」（阿部朋恒との共同発表）華僑華人学会研究会、東京大学

2014年8月3日 「ベトナム客家の移住とアイデンティティ——ンガイ人に関する覚書」日本国際客家文化協会主催、国際学術シンポジウム『客家と多元文化』明治大学

2014年9月13日 「日本の財神信仰と徐福信仰——新宮市地方団体と華僑（客家）団体の信仰実践」国際シンポジウム『第三回財神信仰研討会』遼寧省本溪県

・みんぱくゼミナール

2014年8月16日 「世界遺産に住む——中国・客家の伝統家屋」第435回みんぱくゼミナール

・研究講演

2014年6月21日 「景観人類学の射程と展望——中国客家地域における景観建設の事例から」山形大学歴史・地理・人類学研究会第16回大会、山形大学

2014年8月1日 「客家料理の多様性と商業利用」立命館大学経済学部主催、立命館大学経済学セミナーシリーズ、立命館大学びわこくさつキャンパス

2014年9月16日 「景観人類学的視角と展望——粵東客家地域の景観建設為例」中国社会科学院連続講演会・第56回人類学論壇、中国社会科学院人類学・民族学研究所

2014年10月4日 「中国客家地域における生命観と『抱護』の思想」第2回学際シンポジウム『沖縄の村落観を問い直す』沖縄県立博物館・美術館

・広報・社会連携活動

2014年6月1日 「華僑の移住と文化——ベトナム」第347回みんぱくウィークエンド・サロン

◎調査活動

・海外調査

2014年4月22日～5月6日—中国（科学研究費補助金（若手研究（B））「漢族の特色の空間利用とエスニシティの再編」による調査及び南京大学における成果発表）

2014年5月20日～5月25日—中国（国際シンポジウムへ参加）

2014年6月3日～6月10日—中国（科学研究費補助金（若手研究（B））「漢族の特色の空間利用とエスニシティの再編」による調査）

2014年8月17日～9月17日—中国（科学研究費補助金（若手研究（B））「漢族の特色の空間利用とエスニシティの再編」による調査）

2015年2月11日～3月6日—中国（広東漢族（潮州系、客家系）の春節調査）

2015年3月12日～3月21日—中国、香港（中国においてシンポジウムへ参加及び発表、客家料理調査、香港において食博物館の調査）

◎社会活動・館外活動

・非常勤講師

流通科学大学「民族文化誌」

菅瀬晶子 [すがせ あきこ] ————— 助教

【学歴】東京外国語大学外国語学部アラビア語学科卒（1995）、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士前期課程（アジア第三専攻）修了（1999）、総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程（地域文化学専攻）修了（2006）

【職歴】日本女子大学文学部史学科非常勤講師（2006）、総合研究大学院大学葉山高等研究センター上級研究員（2006）、日本女子大学文学部史学科非常勤講師（2008）、日本女子大学文学部史学科非常勤講師（2009）、神奈川大学経営学部非常勤講師（2010）、日本女子大学文学部史学科非常勤講師（2010）、共立女子大学国際学部非常勤講師（2010）、大阪大学外国語学部非常勤講師（2010）、総合研究大学院大学学融合推進センター特別研究員（2010）、国立民族学博物館民族社会研究部助教（2011）【学位】博士（文学）（総合研究大学院大学 2006）、修士（学術）（東京外国語大学大学院 1999）【専攻・専門】文化人類学・中東地域研究（パレスチナ・イスラエルを中心とした、東地中海地域アラビア語圏）【所属学会】日本中東学会、日本文化人類学会、京都ユダヤ思想学会

【主要業績】

〔単著〕

菅瀬晶子

2012 『豊穡と共生への祈り——パレスチナ・イスラエルにおける聖者アル・ハディル崇敬』（民族紛争の背景に関する地政学的研究19）大阪：大阪大学世界言語研究センター。

2010 『イスラームを知る 6 新月の夜も十字架は輝く——中東のキリスト教徒』東京：山川出版社。

2009 『イスラエルのアラブ人キリスト教徒——その社会とアイデンティティ』広島：溪水社。

【受賞歴】

2006 長倉研究奨励賞、総研大研究賞

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

東地中海アラブ諸国における宗教的アイデンティティの表象

・研究の目的、内容

共同研究「パレスチナ・ナショナリズムとシオニズムの交差点」が本年度で終了予定であり、本年度後半に成果公開としての国際シンポジウムを、東京で開催することをめざしている。その発表内容にあわせ、キリスト教徒のパレスチナ・ナショナリスト2名の調査を進めることが今年度の目標である。したがって、本年度の研究は歴史学的文献調査が中心となるであろう。昨年度後半におこなった現地調査で入手した文献を精読し、いかにしてキリスト教徒がパレスチナ・ナショナリズムに貢献してきたのかを解き明かす。

また、イスラエルで現在起こっているアラブ人キリスト教徒徴兵問題と、その結果として蔓延しつつあるキリスト教徒に対するヘイトクライムの事例を収集し、排外主義が日常的にみられるようになった日本の現状と比較検証する。

・成果

先行研究の精読とともに、キリスト教徒アラブ・ナショナリスト2名（前項でパレスチナ・ナショナリストと表記しているが、研究を進める過程でアラブ・ナショナリストと呼んだほうが適切であるという判断に至ったので、以降はアラブ・ナショナリストと表記する）の調査をパレスチナ・イスラエルにおいて夏期におこなった。その結果、パレスチナ・イスラエルで入手できる文献資料は限られており、また研究機関に所蔵されていても閲覧に制限がかけられていることが判明した。そこで、入手できる範囲で文献を収集し、現地の研究者と意見交換をおこなった。この調査の最中に、イスラエル国内のアラブ人キリスト教徒に対するヘイト・クライムの実態や、徴兵問題に対する一般市民の見解についても聞き取り調査をおこなった。このテーマについても、次年度以降も引き続き調査を続行してゆく予定である。

夏の調査で収集した文献の調査に基づき、共同研究内で発表をおこなったほか、その内容を増補したものを成果報告としてのシンポジウム「イスラエル建国以前のパレスチナをめぐるナショナリズムの諸相」にて発表した。本シンポジウムのプロシーディングスは、次年度になんらかのかたちで出版予定である。

また、当該年度に受け入れていたユーセフ・カンジョウ外国人研究員とともに、機関研究「文化遺産の人類学——グローバル・システムにおけるコミュニティとマテリアリティ」の研究成果として、国際フォーラム「紛争地の文化遺産と博物館」を企画し、開催した。この国際フォーラムにおいて、報告者はイスラエルの占領下にあるパレスチナ自治区における、パレスチナ文化やパレスチナ人アイデンティティの定義の成立と博物館のかかわりについて発表をおこなった。

◎出版物による業績

〔論文〕

菅瀬晶子

2015 「レバノン南部の聖者アル・ホドル崇敬にみられる『聖者の占有』とその背景——歴史的パレスチナとの比較から」『国立民族学博物館研究報告』39(4)：465-510〔査読有〕。

Sugase, A.

2014 The Beginnings of a New Coexistence: a Case Study of the Veneration of the Prophet Elijah (Mar Ilyas) among Christians, Muslims and Jews in Haifa after 1948. In P. S. Rowe, J. H. A. Dyck and J. Zimmermann (eds.) *Christians and the Middle East Conflict*, pp.84-98, London/

New York: Routledge [査読有].

[書評]

菅瀬晶子

2014 「中東の宗教史を概観するうえで、画期的な専門書（アズィズ・S・アティーヤ著『東方キリスト教の歴史』）」『週刊読書人』8月22日4面。

[事典項目]

菅瀬晶子

2014 「4. 宗教・信仰 正統と異端」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.132-133, 東京：丸善出版。

2014 「9. 移動・移民 ディアスポラ」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.352-353, 東京：丸善出版。

[その他]

菅瀬晶子

2014 「旅・いろいろ地球人 共に生きる ①究極の祝祭」『毎日新聞』4月10日夕刊。

2014 「旅・いろいろ地球人 共に生きる ⑤イスラム横丁の人情」『毎日新聞』5月8日夕刊。

2014 「世界宗教地勢 パレスチナ・イスラエル——教皇訪問に冷めた目 マロン派大司教は歓迎」『中外日報』7月9日。

2014 「キリスト教徒アラブ・ナショナリストの先進性と限界——第4回パレスチナ・アラブ会議を例に」『民博通信』146：14-15。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年5月15日 「Distribution of Pork in the Islamic/Jewish-dominant areas: A Case Study of Palestine and Israel」The Conference of the International Union of Anthropological and Ethnological Studies, Makuhari Messe, Chiba, Japan

2015年2月7日 「占領下における博物館の運営と課題——パレスチナの事例」国際フォーラム『紛争地の文化遺産と博物館』国立民族学博物館

2015年3月13日 「ナジーブ・ナッサールのアラブ・ナショナリズム観——『シオニズム』とカルメルでの活動から」シンポジウム『イスラエル建国以前のパレスチナをめぐるナショナリズムの諸相』東京大学東洋文化研究所

・研究講演

2014年5月31日 招待講演「イスラエルのアラブ人キリスト教徒とその現状」日本ユダヤ学会公開シンポジウム『イスラエルの内なる他者——「イスラエル・アラブ」とユダヤ人社会』早稲田大学戸山キャンパス

2014年10月10日 「パレスチナ・イスラエル紛争を知る」泉北教養講座ライフセミナー、ビッグ・アイ1階研修室

2015年2月18日 「聖地に生きる——パレスチナとイスラエル」産経新聞社主催カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店ウイング館9階「SPACE 9」

2015年2月28日 展示場ミニレクチャー（みんぱくワールドシネマ『もうひとりの息子』関連）、国立民族学博物館ナビひろば

2015年3月16日 「パレスチナにおける巡礼——エルサレム、ベツレヘム、その他あまたの聖地への旅」芦屋川カレッジ、芦屋市民センター

2015年3月19日 「中東のキリスト教徒からみたイスラーム世界」宝塚国際理解ゼミナール、宝塚南口会館

・広報・社会連携活動

2014年6月7日 「多みんぞくの街・新大久保とハラールフード産業」第432回国立民族学博物館友の会講演会

2014年7月6日 「多みんぞくの街・新大久保物語——生まれ育った者の視点から」第350回みんぱくウィークエンド・サロン

2014年7月12日 みんぱく映画会『かぞくのくに』国立民族学博物館講堂

2014年10月19日 国立民族学博物館友の会東京講演会「多みんぞくの街・新大久保とハラールフード産業」モンベル渋谷店5階サロン

2014年12月21日 「みんぱくクッキングスクール in 総研大」講師、総合研究大学院大学文化科学研究科学術交

流フォーラム2014『文化をカガクする?』国立民族学博物館

2015年2月28日 みんなくワールドシネマ『もうひとりの息子』国立民族学博物館講堂

◎調査活動

・海外調査

2014年8月7日～8月28日—イスラエル（パレスチナにおけるアラブ／パレスチナ・ナショナリストについての資料収集、及びパレスチナ・イスラエルのアラブ人キリスト教徒のアイデンティティに関する聞き取り調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

東京工業大学大学院イノベーションマネジメント研究科「ぐるなび」食の未来創成寄付講座「世界の食文化と食ビジネス——文化人類学的アプローチから」共同研究者

・非常勤講師

滋賀県立大学「国際関係論」（2014年10月1日～2015年3月31日）

◎学会の開催

2015年2月7日 国際フォーラム「紛争地の文化遺産と博物館」国立民族学博物館

文化資源研究センター

野林厚志 [のばやし あつし]——教授

1967年生。【学歴】東京大学理学部生物学科卒（1992）、東京大学大学院理学系研究科修士課程修了（1994）、東京大学大学院理学系研究科博士課程中退（1996）【職歴】国立民族学博物館第3研究部助手（1996）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手（2000）、総合研究大学院大学先導科学研究科兼任（2000）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助教授（2003）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科兼任（2004）【学位】博士（学術）（総合研究大学院大学 2003）、修士（理学）（東京大学大学院理学系研究科 1994）【専攻・専門】人類学、民族考古学 1) 人間と動物との関係史、2) 生業文化論【所属学会】日本台湾学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

野林厚志

2008 『イノシシ狩猟の民族考古学——台湾原住民の生業文化』東京：御茶の水書房。

[編著]

日本順益台湾原住民研究会編（野林厚志主編）

2014 『台湾原住民研究の射程』台北：順益台湾原住民博物館。

[論文]

野林厚志

2010 「文化資源としての博物館資料——日本統治時代に収集された台湾原住民族の資料が有する現地社会での意義」『国立民族学博物館研究報告』34(4)：623-679。

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

台湾原住民族の工芸生産とエスニシティとの関係に関わる人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、台湾のオーストロネシア系先住諸民族（「原住民族」）の現在のエスニシティの動態を工芸生産という営みをもって分析し、個人の民族への帰属意識と民族集団のエスニシティとの関係に関する人類学的モデルを引き出すことである。具体的には原住民族の人たちの工芸生産の目的、過程、それらがおよぼす社会

的な影響を、現地調査を中心に明かにする。そのうえで、工芸生産がエスニシティの形成やそれを利用した諸行動とどのような関係にあるのかについて探究する。調査対象としては原住民族（タイヤル、パイワン、サキザヤ）、平埔族（クヴァラン、シラヤ）を予定している。

なお、本研究は科学研究費補助金（基盤研究（B））「台湾原住民族の分類とアイデンティティの可変性に関する人類学的研究」に連動して実施するものである。

・成果

本年度は、当初の研究計画にしたがい、特にパイワン族の工芸生産に焦点をあてながら、現地で制作、流通している盛装用の衣装をめぐる集団内、集団間関係、ならびに盛装用の衣装に不可欠な刺繍の基本的な技法についてフィールド調査を行った。パイワン族は原住民族の中でもその社会組織の特徴から、エスニシティが他の集団と比較的明確に区別されてきた。同時に、パイワン族は南部と東部とで異なる系統を自覚し、これらは物質文化の特徴にも反映されている。南部は盛装衣服にはビーズが多用され、東部集団は刺繍が優占で、両者を視覚的に区別する一つの特徴となっていた。ただし、こうした相違が形成されたのは、系統の違いというよりは、交易等による外部からの物質の流入といった社会経済的環境に委ねられる部分が多く、南部から東部へ移住した人々も移住先における衣装制作の環境に適応した衣服の変化を見せていることから、系統が必ずしも物質文化の特徴を維持する機能をもつのではないという、物質文化の歴史的変化に関する仮説モデルを引き出すことになった。新たな仮説モデルに関連したこれまでの研究成果を台湾における国際シンポジウム、アメリカ人類学会の年次大会等で発表した。なお、本研究は科学研究費補助金（基盤研究（B））「台湾原住民族の分類とアイデンティティの可変性に関する人類学的研究」に連動して実施した。

◎出版物による業績

〔単著〕

野林厚志

2014 『タイワンイノシシを追う——民族学と考古学の出会い』 京都：臨川書店。

〔編著〕

日本順益台湾原住民研究会編（野林厚志主編）

2014 『台湾原住民研究の射程——接合される過去と現在』 台北：順益台湾原住民博物館。

〔論文〕

野林厚志

2014 「平埔族の物質文化の境界性——国立民族学博物館の収蔵資料を事例として」日本順益台湾原住民研究会編（野林厚志主編）『台湾原住民研究の射程——接合される過去と現在』 pp.341-368, 台北：順益台湾原住民博物館。

2014 「台湾原住民族の料理の環境文化史」『第七回台日原住民族研究論壇』 pp.235-247, 台北：国立政治大学原住民族研究中心。

〔事典項目〕

野林厚志

2014 「先住民運動」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』 pp.276-277, 東京：丸善出版。

2014 「博覧会と民族」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』 pp.524-525, 東京：丸善出版。

2014 「被差別民コミュニティ」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』 pp.576-577, 東京：丸善出版。

2014 「民族と身体的特徴」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』 pp.692-693, 東京：丸善出版。

〔その他〕

野林厚志

2014 「旅・いろいろ地球人 悪人、悪玉⑧ 呉鳳という伝説」『毎日新聞』 4月3日夕刊。

2014 「親日の真意」『産経新聞』 4月15日夕刊。

2014 「旅・いろいろ地球人 共に生きる⑧ 失われない時を求めて」『毎日新聞』 5月29日夕刊。

2014 「旅の読書室64 旅の装い」『まほら』 79：50-51。

2014 「MAP システム」『月刊みんぱく』 38(5)：3。

2014 「自然環境に対応した生業」『月刊みんぱく』 38(5)：4-5。

2014 「古きを温めて新しきを創る」『月刊みんぱく』 38(5)：6-7。

2014 「前言」日本順益台湾原住民研究会編（野林厚志主編）『台湾原住民研究の射程』 pp.4-6, 台北：順益台湾原住民博物館。

2014 「みんぱく——持ち出し可能な小さな博物館」『月刊 初等教育資料』 2014(6)：84-85。

- 2014 「旅の読書室66 外国人が感じる日本の魅力とは」『まほら』81：50-51。
 2014 「『2014年第7回日台原住民研究フォーラム』に参加して」『台湾原住民研究』18：161-164。
 2014 「百年を超える輝き」『季刊民族学』150：71-72。
 2014 「口蹄疫のパンデミック」『月刊みんぱく』38(11)：6-7。

◎映像音響メディアによる業績

・電子ガイドの制作・監修

[中国地域の文化]

野林厚志

- 2014 『中国地域の展示』日本語、英語、韓国語、中国語。
 2014 『弩弓』日本語、英語、韓国語、中国語。
 2014 『原住民族の工芸』日本語、英語、韓国語、中国語。
 2014 『民博に収蔵されている台湾資料』日本語、英語、韓国語、中国語。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

- 2015年2月20日 ‘Rewiring Museum Information: Mobile and Cloud.’ International Symposium “New Horizons for Asian Museums and Museology,” National Museum of Ethnology, Osaka, Japan

・共同研究会

- 2015年1月18日 「肉食のブランド化——イベリコ豚を事例として」『肉食行為の研究』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2015年2月6日 「ブタを大きく育てる意義——客家社会の生き物観」生き物文化誌学会第58回例会、沖縄こども国チルドレンセンター
 2014年12月5日 ‘Beyond Repatriation: A Sustainable Relationship Between Source Community and the Ethnological Museum,’ “Negotiating Identities: A Role or a Challenge for the Museum?” The 113th Annual Meeting of the American Anthropological Association. Washington D.C., United States of America
 2014年10月12日 「台湾原住民族の料理の環境文化史」『第7回台日台湾原住民族研究論壇』国立政治大学原住民族研究中心、台北
 2014年9月15日 ‘Representation of Taiwan Indigenous Peoples’ Culture in Japanese Museum.’ “Museum, Exhibition, and Cultural Representation,” The 2014 International Conference on Formosan Indigenous Peoples: Contemporary Perspectives, Institute of Ethnology, Academia Sinica, Taipei, Taiwan
 2014年5月17日 ‘A Hunting Practice of “Ryoyukai”: the Relationship between Hunters in Voluntary Organization in Japanese Local Society.’ “Hunting, Animal Welfare, and Defense against Wildlife Attack.” (P051), IUAES Inter-Congress 2014, Makuhari Messe, Chiba, Japan

・研究講演

- 2014年10月24日 「ブタの弁明Ⅰ——なゼイノシシはブタになったのか」NPO 法人大阪府高齢者大学校 世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館
 2014年10月31日 「ブタの弁明Ⅱ——中国客家のブタ飼養と性のタブー」NPO 法人大阪府高齢者大学校 世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館
 2014年11月14日 「ブタの弁明Ⅲ——生ハムはなゼイバリア半島で作られるのか」NPO 法人大阪府高齢者大学校 世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館
 2015年2月26日 招待講演 ‘An Ethno-archaeological Approach to Hunting: a Comparative Study of Hunting Techniques among Taiwanese Indigenous Groups.’ Lecture at the University of Ottawa, sponsored by the School of Sociological and Anthropological Studies and the Chair in Taiwan Studies

・広報・社会連携活動

- 2014年4月20日 「台湾原住民族の工芸文化——むかし、今、そして未来」第341回みんぱくウィークエンド・サロン
 2014年4月29日 「日本統治時代の台湾の日常」『台湾映画鑑賞会 映画から台湾を知る「村と爆弾（原題：稻

- 草人)』 民ぱく映画会
- 2014年 5月 6日 「二二八事件とその後の政治的弾圧とむきあった台湾の人びと」『台湾映画鑑賞会 映画から台湾を知る「超級大国民（原題：超級大國民）」』 民ぱく映画会
- 2014年 5月28日 「美麗島の手しごと——台湾の伝統刺繍」産経新聞社主催、民ぱく創設40周年記念 カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館 9階SPACE 9
- 2014年 6月 8日 「経済成長にともなう台湾化の中の外省人の経験」『台湾映画鑑賞会 映画から台湾を知る「童年往事 時の流れ（原題：童年往事）」』 民ぱく映画会
- 2014年 6月14日 「現代の台湾社会の温度を感じさせる世代間関係」『台湾映画鑑賞会 映画から台湾を知る「海角七号 君想う、国境の南（原題：海角七號）」』 民ぱく映画会
- 2014年 8月27日 「五年に一度、祖先に会う——台湾パイワン族の五年祭」産経新聞社主催、民ぱく創設40周年記念 カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館 9階SPACE 9
- 2014年 8月31日 「悪い魚と普通の魚——タオ族の魚食文化」『連続講座 台湾を知る』国立民族学博物館
- 2014年 9月 7日 「高砂族と向き合った日本人研究者——鹿野忠雄と馬淵東一」『連続講座 台湾を知る』国立民族学博物館
- 2014年 9月23日 「パイワン族工芸の伝統と今」『連続講座 台湾を知る』国立民族学博物館
- ◎調査活動
- ・海外調査

2014年 8月16日～8月25日—台湾（台湾原住民の分類とアイデンティティの可変性に関するフィールド調査）

2014年 9月14日～9月18日—台湾（順益台湾原住民博物館開館20周年記念国際シンポジウムへの参加）

2014年10月10日～10月14日—台湾（研究成果の公開ならびに文献資料の渉猟）

2014年12月 3日～12月 8日—アメリカ合衆国（アメリカ人類学会研究大会参加及び発表）

2015年 2月24日～2月28日—カナダ（オタワ大学での講義ならびにカナダ歴史博物館キュレーターからの情報収集）

2015年 3月26日～3月30日—台湾（台湾における原住民族食文化に関する文献調査）
- ◎大学院教育
- ・指導教員

主任指導教員（1人）、副指導教員（2人）
 - ・論文審査

予備審査委員（1件）
- ◎上記以外の研究活動
- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

総合研究大学院大学学融合推進センター戦略的共同研究「『料理』の環境文化史——生態資源の選択、収奪、消費の過程が環境に与えるインパクト」代表者、科学研究費補助金（基盤研究(B)）「台湾原住民の分類とアイデンティティの可変性に関する人類学的研究」代表者
 - ・民間の奨学金および助成金からのプロジェクト

順益台湾原住民博物館研究賛助金「台湾原住民族の文化、社会、歴史に関する総合的研究」代表者、“Hunting, Animal Welfare, and Defense against Wildlife Attack.” IUAES Inter-Congress 2014シンポジウム、パネル等の組織

久保正敏 [くぼ まさとし]——副館長（企画調整担当）、教授

園田直子 [そのだ なおこ]——教授

【学歴】パリ第1大学文学部卒（1980）、パリ第1大学科学技術修士課程修了（1982）、エコール・ド・ルーブル卒（1983）、パリ第1大学博士課程修了（1987）【職歴】フランス博物館科学研究所研究員（1987）、国立美術館絵画修復研究所（フランス）研究員（1989）、国立歴史民俗博物館助手（1991）、国立民族学博物館第5研究部助手（1993）、国立民族学博物館第5研究部助教授（1997）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1999）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授（2004）、国立民族学博物館文

化資源研究センター教授（2007）、国立民族学博物館情報管理施設長（2009）、館長補佐（2010）【学位】 Doctorat de 3^{ème} cycle (Histoire de l'art) 博士（美術史）（Université de Paris I, 1987）、Maîtrise des Sciences et Techniques (Conservation et restauration des oeuvres d'art, des sites et objets archéologiques et ethnologiques) 科学技術修士（Université de Paris I, 1982）【専攻・専門】保存科学【所属学会】ICOM（国際博物館会議）、IIC（国際文化財保存学会）、文化財保存修復学会、IIC-Japan（国際文化財保存学会日本支部）

【主要業績】

[編著]

園田直子編

2010 『紙と本の保存科学（第2版）』東京：岩田書院。

日高真吾・園田直子編

2008 『博物館への挑戦——何がどこまでできたのか』千葉：三好企画。

[学位論文]

Sonoda, N.

1987 Identification des matériaux synthétiques dans les peintures fines pour artistes par pyrolyse couplée avec la chromatographie en phase gazeuse. Application à l'étude de quelques tableaux d'art contemporain, Thèse de Doctorat de 3^{ème} cycle, Université de Paris I, Panthéon-Sorbonne.

【受賞歴】

2010 文化財保存修復学会第4回業績賞

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

大型民族資料を対象とした環境に「やさしい」殺虫処理法の使い分け

・研究の目的、内容

国立民族学博物館では、民族資料の防虫・殺虫処理法を選択するにあたっては、ひと、資料、環境に配慮してきた。2004年度以降は、海外からの新着資料には化学薬剤を用いた殺虫・殺カビ処理を行い、国内で加害された資料に関しては二酸化炭素処理、高温処理、低温処理など、化学薬剤を用いない手法で殺虫処理している。この方針に沿いながら、船資料に代表される大型民族資料を対象に、いかに適切かつ効率的に殺虫処理法の使い分けができるか検討する。そして、その方針をもとに多機能資料保管庫への船資料の戻し入れを、今年度より始める。

・成果

資料の大きさ・形態・材木の厚みに着目し、化学薬剤を使用しない殺虫処理法の使い分けの基準を検討した。まず、多機能保管庫（船資料用に新設）に併設した処理室で、大型密封バッグを用いた二酸化炭素処理の初動実験を実施、検証し、稼働可能な状態とした。その結果をふまえて、バッグ内での二酸化炭素処理と、保管スペースの一角での大型資料用の包み込み二酸化炭素処理にふりわけ、全体のおよそ8割の船資料の殺虫処理と戻し入れが完了した。ここまでの成果は、2015年6月の文化財保存修復学会で発表している。二酸化炭素処理以外の手法として、同じく大型密封バッグを用いての低酸素濃度処理の初動実験を実施、検証し、稼働可能な状態にした。また、太陽熱を利用したコンテナ内での高温処理の可能性を検証したところ、夕方以降の温度降下をいかに遅らせるかが課題としてあがった。次年度の夏季に追加実験を行い、実施条件を精査する。

◎出版物による業績

[共編著]

園田直子・小長谷有紀・I. Lkhagvasuren 編

2014 『アジアにおける博物館・博物館学の「いま」——モンゴル、ミュージアム・クリルタイ』ウランバートル：モンゴル国立文化遺産センター（日本語・モンゴル語）。

Sonoda, N., K. Tamura and Nu Mra Zan (eds.)

2015 *Asian Museums and Museology 2013: International Research Meeting on Museology in Myanmar* (Senri Ethnological Reports 125). Osaka: National Museum of Ethnology [査読有]。

Sonoda, N., K. Hirai and J. Incherdchai (eds.)

- 2015 *Asian Museums and Museology 2014: International Workshop on Asian Museums and Museology in Thailand* (Senri Ethnological Reports 129). Osaka: National Museum of Ethnology [査読有]。
- [論文]
- 園田直子
- 2014 「『染象牙果菜置物』（安藤緑山作）の観察結果」『超絶技巧！明治工芸の粋——村田コレクション一挙公開』（特別展カタログ）pp.146-149, 東京：三井記念美術館。
- 2014 「持続的な資料管理に向けた収蔵庫『再』編成」園田直子・小長谷有紀・I. Lkhagvasuren 編『アジアにおける博物館・博物館学の「いま」——モンゴル、ミュージアム・クリルタイ』pp.19-27（日本語）, pp.187-197（モンゴル語）, ウランバートル：モンゴル国立文化遺産センター。
- 2015 Museum Environment Control for Sustainable Collection Management. In N. Sonoda, K. Hirai and J. Incherdchai (eds.) *Asian Museums and Museology 2014: International Workshop on Asian Museums and Museology in Thailand* (Senri Ethnological Reports 129), pp.27-35. Osaka: National Museum of Ethnology [査読有]。
- 2015 「『染象牙果菜置物』（安藤緑山作）の観察結果」『三井美術文化史論集』8：15-22。
- [その他]
- 園田直子
- 2014 「評論・展望 民博の国際協力——博物館学国際研修の20年」『民博通信』147：2-7。
- 2014 「絵画をかたちづくるもの——絵具の科学」『平成25年度文化財保存修復セミナー講義録』pp.75-82, 大阪：関西大学国際文化財・文化研究センター。
- Sonoda, N.
- 2015 Introduction. In N. Sonoda, K. Tamura and Nu Mra Zan (eds.) *Asian Museums and Museology 2013: International Research Meeting on Museology in Myanmar* (Senri Ethnological Reports 125), pp.5-10. Osaka: National Museum of Ethnology [査読有]。
- 2015 Closing Remarks for the Bagan Meeing. In N. Sonoda, K. Tamura and Nu Mra Zan (eds.) *Asian Museums and Museology 2013: International Research Meeting on Museology in Myanmar* (Senri Ethnological Reports 125), pp.81-82. Osaka: National Museum of Ethnology [査読有]。
- 2015 Opening Remarks. In N. Sonoda, K. Tamura and Nu Mra Zan (eds.) *Asian Museums and Museology 2013: International Research Meeting on Museology in Myanmar* (Senri Ethnological Reports 125), pp.151-152. Osaka: National Museum of Ethnology [査読有]。
- 園田直子・日高真吾・和高智美
- 2014 「博物館害虫・不快害虫の発生源に関する一考察」『文化財保存修復学会第36回大会於東京研究発表要旨集』pp.184-185 [査読有]。
- Sonoda, N. and K. Hirai
- 2015 Introduction. In N. Sonoda, K. Hirai and Jarunee Incherdchai (eds.) *Asian Museums and Museology 2014: International Workshop on Asian Museums and Museology in Thailand* (Senri Ethnological Reports 129), pp.1-7. Osaka: National Museum of Ethnology [査読有]。
- 関 正純・園田直子・谷本佳奈・岡山隆之
- 2014 「フリース法を用いた強化処理の有効性」『文化財保存修復学会第36回大会於東京研究発表要旨集』pp.102-103 [査読有]。
- 殿山真央・関 正純・桐山亮平・岡山隆之・園田直子
- 2014 「紙資料のためのセルロース誘導体を用いた静電紡色（エレクトロスピンニング）による紙の強化法」『文化財保存修復学会第36回大会於東京研究発表要旨集』pp.30-31 [査読有]。
- 日高真吾・園田直子・和高智美・北村 繁・小谷竜介・川又隆央
- 2014 「被災した漆器製品の応急処置事例」『文化財保存修復学会第36回大会於東京研究発表要旨集』pp.162-163 [査読有]。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

- 2014年8月25日 Museum Environment Control for Sustainable Collection Management, International Research Meeting on Museology in Thailand, Kanchanaphisek National Museum and Central Storage, Thailand

- 2015年2月21日 「趣旨説明」国際シンポジウム『アジアにおける新しい博物館・博物館学の展望』国立民族学博物館
- 2015年2月21日 「Managing and Analyzing Museum Environmental Data (博物館環境データの管理・分析システムの開発)」国際シンポジウム『アジアにおける新しい博物館・博物館学の展望』国立民族学博物館
- 2015年2月22日 「司会」(セッション5 総合ディスカッション:博物館と国際協力)国際シンポジウム「アジアにおける新しい博物館・博物館学の展望」国立民族学博物館
- 2015年3月29日 「博物館・博物館学に関する国際協力・研修——国立民族学博物館の事例から」国立民族学博物館・金沢大学共同開催文化資源学シンポジウム『文化資源の保存・継承に向けた国際協力』石川県政記念しいのき迎賓館
- ・機構の連携研究会での報告
- 2015年2月20日 「趣旨説明」人間文化研究機構・連携研究「人間文化資源」の総合的研究「人間文化資源の保存環境研究」国立民族学博物館研究フォーラム『持続可能なIPMに向けて——博物館環境データの分析手法を考える』文化財保存修復学会例会、国立民族学博物館
- 2015年2月20日 「総括・今後の展望」人間文化研究機構・連携研究「人間文化資源」の総合的研究「人間文化資源の保存環境研究」国立民族学博物館研究フォーラム「持続可能なIPMに向けて——博物館環境データの分析手法を考える」文化財保存修復学会例会、国立民族学博物館
- ・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告
- 2014年6月7日 「紙資料のためのセルロース誘導体を用いた静電紡糸(エレクトロスピンニング)による紙の強化法」(殿山真央・関 正純・桐山亮平・岡山隆之・園田直子、発表は関 正純)、文化財保存修復学会第36回大会、明治大学アカデミーコモン
- 2014年6月7日 ポスター発表「フリース法を用いた強化処理の有効性」(関 正純・園田直子・谷本佳奈・岡山隆之)文化財保存修復学会第36回大会、明治大学アカデミーコモン
- 2014年6月7日 ポスター発表「被災した漆器製品の応急処置事例」(日高真吾・園田直子・和高智美・北村繁・小谷竜介・川又隆央)文化財保存修復学会第36回大会、明治大学アカデミーコモン
- 2014年6月7日 ポスター発表「博物館害虫・不快害虫の発生源に関する一考察」(園田直子・日高真吾・和高智美)、文化財保存修復学会第36回大会、明治大学アカデミーコモン
- ・広報・社会連携活動
- 2014年7月12日 「資料の保存・取り扱いについて」MMP2014年度新規メンバー養成研修、みんなくミュージアムパートナーズMMP、国立民族学博物館
- 2014年12月10日 「資料の保存と活用」文化資源プロジェクト2014年度年末年始展示イベント「ひつじ」、国立民族学博物館
- ◎調査活動
- ・国内調査
- 2014年4月21日—三井記念美術館(資料保存と展示に関する情報収集)
- 2015年2月9日—名古屋工業試験場(紙の分析手法に関する情報収集および打ち合わせ)
- 2015年2月28日～3月1日—名古屋工業大学(紙の強化処理実験に関する研究打ち合わせ)
- 2015年3月6日～3月7日—東京文化財研究所(文化財を取り巻く環境と保存についての情報収集)
- ・海外調査
- 2014年8月24日～8月28日—タイ(タイの博物館・博物館学に関する共同研究・現地調査)
- 2014年9月21日～9月27日—香港(国際文化財保存学会第25回大会に参加及び東アジアにおける紙資料保存に関する情報収集、動向調査)
- ◎大学院教育
- ・大学院ゼミでの活動
- 2014年10月27日、28日、29日 「資料保存科学(モノ資料・基礎)」平成26年度学融合教育事業・総研大レクチャー、国立民族学博物館
- ◎上記以外の研究活動
- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など
- 人間文化研究機構連携研究「人間文化資源」の総合的研究「人間文化資源の保存環境研究」研究代表者、科学

研究費補助金（基盤研究（B））（一般）「劣化の進んだ図書・文書資料の長期保存に向けた大量強化法の開発」研究代表者、日本学術振興会研究拠点形成事業 B. アジア・アフリカ学術基盤形成型「アジアにおける新しい博物館・博物館学創出のための研究交流」日本側コーディネータ

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

国立歴史民俗博物館資料保存環境検討委員会委員、独立行政法人文化財研究所自己点検評価・外部評価委員、舞鶴市ユネスコ世界記憶遺産有識者会議委員、知覧特攻平和会館保存検討委員会委員

・非常勤講師

東京農工大学「環境資源物質科学特論」（集中講義）、関西大学国際文化財・文化研究センター平成25年度文化財保存修復セミナー「文化財各論（保護と活用）・美術工芸品（I）絵画」

◎学会の開催

2015年2月20日 研究フォーラム「持続可能なIPMに向けて——博物館環境データの分手法を考える」（人間文化研究機構・連携研究「人間文化資源」の総合的研究「人間文化資源の保存環境研究」・文化財保存修復学会例会）、国立民族学博物館第5セミナー室

2015年2月21～22日 国際シンポジウム「アジアにおける新しい博物館・博物館学の展望」国立民族学博物館第4セミナー室

信田敏宏 [のぶた としひろ] ————— 教授

1968年生。【学歴】東京都立大学人文学部人文科学科社会学専攻卒（1992）、東京都立大学大学院社会科学研究科社会人類学専攻修士課程修了（1995）、東京都立大学大学院社会科学研究科社会人類学専攻博士課程単位取得退学（2000）【職歴】東京都立大学人文学部社会学科助手（2001）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手（2003）、国立民族学博物館研究戦略センター助手（2004）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2006）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2014）、総合研究大学院大学文化科学研究科教授併任（2014）【学位】社会人類学博士（東京都立大学 2002）【専攻・専門】社会人類学、東南アジア研究【所属学会】日本文化人類学会、東南アジア学会、日本マレーシア学会、東京都立大学社会人類学会

【主要業績】

[単著]

信田敏宏

2013 『ドリアン王国探訪記——マレーシア先住民の生きる世界』（フィールドワーク選書1）京都：臨川書店。

2004 『周縁を生きる人びと——オラン・アスリの開発とイスラーム化』京都：京都大学学術出版会。

Nobuta, T.

2009 *Living on the Periphery: Development and Islamization among the Orang Asli in Malaysia.* SubangJaya, Malaysia: Center for Orang Asli Concerns.

【受賞歴】

2006 第4回東南アジア史学会賞

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

マレーシアの先住民コミュニティに関する民族誌的研究

・研究の目的、内容

本研究では、マレーシアの先住民コミュニティ（集落や村落などの伝統的コミュニティから NGO や先住民ネットワークなどを媒介とする新たなコミュニティを含む）の変容過程について、世界の先住民が置かれた状況と比較しながら民族誌的に検討する。具体的には、グローバル化のなかで変容する先住民のコミュニティや人びとの関係性、近年になって活発化している先住民運動や NGO 活動などに焦点を当てながら研究を進める。

・成果

私自身がプロジェクトチーム・リーダーを務めた東南アジア展示新構築において、「都市の風景」セクションの

「民族工芸の今昔」コーナーで本研究の成果の一部を公開した。私自身が収集したマレーシア先住民の民族工芸品を展示し、それらが現在 NGO の支援のもと制作、販売されていることを展示キャプションで解説することにより、一般の来館者にマレーシア先住民の生活や現在の NGO による支援の状況を知ってもらうことは、マレーシアのみならず世界の先住民の現状に関心を持ってもらえるきっかけとなるのではと考えている。

また、国立民族学博物館編『世界民族百科事典』（丸善出版）の企画・編集に携わり、事典項目の選定や編集作業において、本研究の成果を示した。グローバル化のなかで変容しつつある伝統的コミュニティやそこに生きる人びとの関係性の変化など、世界の先住民が置かれている新たな状況を紹介している。

そのほか、障がい児の子育てに関するエッセイと単著を執筆した。当初は本研究とは直接関係のない分野ではあったが、執筆に際して「マイノリティ」という立場についての考察を深めていくにつれ、同じく「マイノリティ」であるマレーシア先住民との共通項を多く見いだすことができ、障がい者を取りまく状況や社会のあり方、人びとの意識等について、本研究の成果が生かされた。

◎出版物による業績

[単著]

信田敏宏

2015 『「ホーホー」の詩ができるまで——ダウン症児、こころ育ての10年』東京：出窓社。

[論文]

信田敏宏

2015 「私たちの選択」道信良子編『いのちはどう生まれ、育つのか——医療、福祉、文化と子ども』（岩波ジュニア新書799）pp.29-42, 東京：岩波書店。

[事典項目]

信田敏宏

2014 「東南アジア先住民」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.308-309, 東京：丸善出版。

2014 「NGO」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.390-391, 東京：丸善出版。

2014 「仕事・労働」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』p.399, 東京：丸善出版。

2014 「文化特異性障害」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.690-691, 東京：丸善出版。

[その他]

信田敏宏

2014 「旅・いろいろ地球人 父親① 入り婿の村」『毎日新聞』11月20日夕刊。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会

2014年4月26日 「統治される森に生きる——マレーシア、オラン・アスリの事例」『熱帯の「狩猟採集民」に関する環境史的研究——アジア・アフリカ・南アメリカの比較から』

・広報・社会連携活動

2014年6月26日 「東南アジアの文化人類学——マレーシア先住民のフィールドワークより」龍谷大学附属平安中学校対象、国立民族学博物館

2014年7月15日 「東南アジアの文化人類学——マレーシアを中心に」帝塚山中学校対象、国立民族学博物館

2015年2月4日 「マレーシアの自然と生きる人びと」産経新聞社主催、みんぱく創設40周年記念 カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館9階SPACE9

2015年2月28日 「多様なイスラームを知ろう——アジアのイスラーム社会・マレーシアを例に」TIFA セミナー、豊中市立男女共同参画センター

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（1人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「地域民族誌の方法論と人類学的空間構想力の可能性の探求」共同研究員（代表：高倉浩樹）

吉田憲司 [よしだ けんじ] 教授

1955年生。【学歴】京都大学文学部哲学科美学美術史学専攻卒（1980）、大阪大学大学院文学研究科芸術学専攻博士前期課程修了（1983）、大阪大学大学院文学研究科芸術学専攻博士後期課程単位取得退学（1987）【職歴】ザンビア大学アフリカ研究所共同研究員（1984）、大阪大学文学部助手（1987）、国立民族学博物館助手（1988）、国立民族学博物館助教授（1992）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1993）、国立民族学博物館博物館民族学研究部教授（2000）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2004）、国立民族学博物館文化資源研究センター長（2006）、放送大学客員教授（2010）【学位】学術博士（大阪大学大学院文学研究科 1989）、文学修士（大阪大学大学院文学研究科 1983）【専攻・専門】文化人類学、博物館人類学【所属学会】日本文化人類学会、日本アフリカ学会、民族藝術学会、王立人類学協会（Royal Anthropological Institute イギリス）、アフリカ学会美術協議会（The Arts Council of the African Studies Association アメリカ）

【主要業績】

[単著]

吉田憲司

- 2014 『宗教の始原を求めて——南部アフリカ聖霊教会の人びと』東京：岩波書店。
 1999 『文化の「発見」——驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで』東京：岩波書店。
 1992 『仮面の森——アフリカ・チェワ社会における仮面結社、憑霊、邪術』東京：講談社。

【受賞歴】

- 2004 第1回木村重信民族藝術学会賞
 2000 第22回サントリー学芸賞（芸術・文学部門）
 1993 日本アフリカ学会研究奨励賞

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

文化の創造・継承と表象に関する博物館人類学的研究

・研究の目的、内容

文化の創造と継承、そしてその表象における博物館・美術館の役割に改めて注目が集まっている。文化の創造と継承の過程をいかに追跡し、いかなる形で自文化と異文化を含む文化の表象に結び付けていくのか。その作業に、博物館・美術館はいかなる形で関与するのか。文化の研究と表象の課題を改めて検証し、問題点を洗い出すとともに、その将来に向けての新たな可能性を考究する。

・成果

文化の創造・継承のプロセスをリアルタイムで観察した記録として、南部アフリカにおける新たなキリスト教文化の生成過程についての過去25年の研究成果を集大成し、単著『宗教の始原を求めて——南部アフリカ聖霊教会の人びと』（岩波書店、2014年6月）として刊行した。その書の中で、社会の危機的あるいは萌芽的な状況において、憑依や降霊を伴う宗教運動が興隆する事実を明らかにした。

また、文化遺産の表象の新たな理論と手法に関して、単著『文化の「肖像」——ネットワーク型ミュージオロジーの試み』（2013）等を通じて得られた研究成果を、2014年2月から6月まで東京の国立新美術館で、同年9月から12月まで国立民族学博物館で開催した「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」展の展示に反映し、実践的なかたちで公開した。同展は、博物館と美術館の垣根をこえた協働のもとで開ける、美術（アート）と器物（アーティファクト）といった区別を無化する、新たな文化表象のありかたを示すものとなった。

◎出版物による業績

[単著]

吉田憲司

- 2014 『宗教の始原を求めて——南部アフリカ聖霊教会の人びと』東京：岩波書店。
 2014 『文化の「発見」——驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで（岩波人文書セレクション）』東京：岩波書店。

[論文]

吉田憲司

- 2014 「イメージの力——民博から新美、そして民博へ」『季刊民族学』150：4-7。
2014 「民博における仮面の収集」『季刊民族学』150：98-103。
2014 「シンポジウム・イメージの力再考」『民族藝術』31：8-27。
2014 「博物館と美術館の壁を越える——『イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる』展から」『NACT Review 国立新美術館研究紀要』1：211-212。
2014 「『イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる』展——国立新美術館と民博、そして日本文化人類学会との協働の試み」『文化人類学』79(4)：439-443。

Yoshida, K.

- 2014 Exhibition “The Power of Images: The National Museum of Ethnology Collection.” *MINPAKU Anthropology Newsletter* 39: 13-14.
2015 Museum Exhibition Today, 2013. In N. Sonoda, K. Tamura and Nu Mra Zan (eds.) *Asian Museums and Museology 2013: International Research Meeting on Museology in Myanmar* (Senri Ethnological Reports 125), pp.37-56. Osaka: National Museum of Ethnology [査読有].

[その他]

吉田憲司

- 2014 「世界無形文化遺産と民族のアイデンティティ——南部アフリカ、チェワの祭りから」『月刊みんぱく』38(10)：14-15。
2014 吉田憲司・石毛直道・藤井龍彦・松原正毅・和田正平「座談会 民博の礎」『季刊民族学』150：8-17。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

- 2014年5月19日 「アートと人類学のあいだ」国際コロキウム『アートと人類学』国立民族学博物館
2014年8月5日 討論「モノとの対話——何が聞こえる？何が見える？」博学連携教員研修ワークショップ2014 in みんぱく『学校と博物館でつくる 国際理解教育——センセイもつくる・あそぶ・たのしむ』国立民族学博物館
2014年9月22日 「イメージの力を再考する」民族藝術学会創立30周年記念大会 公開シンポジウムⅡ『イメージの力・再考』国立民族学博物館
2015年2月7日 「コメント」機関研究成果公開国際フォーラム『紛争地の文化遺産と博物館』国立民族学博物館
2015年2月21日～2月22日 「博物館と開発協力」国際シンポジウム『アジアにおける新しい博物館・博物館学の展望』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2014年5月15日 ‘Re-imagining Ethnological Museums: New Approaches to Developing the Museum as a Place of Multi-lateral Contacts and Knowledge (Commission on Museums and Cultural Heritage).’ 日本文化人類学会50周年記念国際研究大会合同開催 (IUAES 2014)、幕張メッセ
2014年5月17日 ‘Memory, Heritage and Disasters: the Cases in Tohoku, Japan and Mozambique.’ 日本文化人類学会50周年記念国際研究大会合同開催 (IUAES 2014)、幕張メッセ
2014年11月8日～10日 「アート（美術）とアーティファクト（器物）、美術館と博物館のあいだ」シンポジウム『日本における「美術」概念の再構築』福岡アジア美術館
2014年11月30日 「人類学の視点から見る仮面」神戸女子大学古典芸能研究センター研究プロジェクト「日本古典芸能の横断的総合的研究拠点の形成」主催、国際研究集会『見つめる能面・能面を見つめる』シンポジウム「能面を科学する」神戸女子大学ポートアイランドキャンパス
2015年3月16日 「人類学からみた『イメージ人類学』」シンポジウム『ノマドとしてのイメージ——ハンス・ベルティンク「イメージ人類学」再考』立命館大学 衣笠キャンパス

・みんぱくゼミナール

- 2014年9月20日 「イメージの力——みんぱくのコレクションが語るもの」第436回みんぱくゼミナール

・研究講演

- 2014年7月9日～13日 招待講演「文化遺産の返還をめぐる世界の動き2014」国立台湾歴史博物館

2014年 8月26日 ‘Ongoing Movements in the Museum Exhibition 2014,’ Kanchanaphisek National Museum, Bangkok, Thailand

2015年 1月13日～15日 基調講演「文明の転換点における博物館——次代のミュージアム像を求めて」シンポジウム『Museum 2015 Tokyo』明治大学

・展示

2014年 2月19日～6月9日 「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」実行委員長、国立新美術館

2014年 5月26日 秋篠宮文仁親王・同妃両殿下ご視察に際する「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」展についてのご進講、国立新美術館

2014年 9月11日～12月9日 特別展「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」実行委員長、国立民族学博物館

◎調査活動

・国内調査

2014年 4月8日～9日—国立新美術館（「イメージの力」展の展示資料の調査）

2014年 7月28日～30日—神奈川県立生命の星・地球博物館・東京大学文学部・東京国立博物館（博物館を通じた地域コミュニティの活性化をめぐる研究動向の把握・資料調査）

2014年10月11日～12日—弥勒寺官衛遺跡群・関市洞戸円空記念館（造仏表現における鉋ばつり技法の発祥と展開に関する調査研究）

2014年11月24日～25日—東京藝術大学美術館（特別展「イメージの力」展の展開に関する施設・資料調査）

2015年 1月18日～19日—福井県陶芸館・越前陶芸村（海外日本古美術展への越前焼復興・出品事例の資料を調査）

2015年 1月29日～30日—石川県九谷焼美術館・石川県立美術館・九谷ミュージアム（鎗木商舗）（海外日本古美術展への九谷焼出品事例の資料を調査）

2015年 3月23日～24日—金ヶ崎要害歴史館（被災文化遺産所在調査専門委員会議による調査）

2015年 3月28日～30日—唐桑町津波石・南三陸町防災対策庁舎・女川町旧女川交番（東北地方三陸海岸部における被災遺構の処遇と記憶の継承に関わる現地調査）

・海外調査

2014年 6月23日～6月29日—ロシア（機関研究「民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究——ロシア民族学博物館との国際共同研究」国際ワークショップへ参加）

2014年 8月24日～8月27日—タイ（タイの博物館・博物館学に関する共同研究・現地調査）

2015年 2月25日～3月11日—オランダ、イギリス（日本古美術展にみる日本観とその変遷に関する基礎的研究、及び文化資源デジタル・アーカイヴズの実態調査）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（5人）、特別共同利用研究員（1人）

◎社会活動・館外活動

・非常勤講師

お茶の水女子大学「生活文化学講座」、「文化情報論」（集中講義）、大阪芸術大学「芸術行動論の研究」（集中講義）

◎学会の開催

2014年 9月20日～22日 民族藝術学会第30回（30周年記念大会）、国立民族学博物館

上羽陽子 [うえば ようこ] ————— 准教授

1974年生。【学歴】大阪芸術大学芸術学部工芸学科染織コース卒（1997）、大阪芸術大学大学院芸術文化研究科博士課程前期修了（1999）、大阪芸術大学大学院芸術文化研究科博士課程後期修了（2002）【職歴】大阪芸術大学大学院芸術文化研究科研究員（2002）、大阪芸術大学通信教育部工芸学科ファイバーコース非常勤講師（2003）、大阪市立クラフトパーク織物工房非常勤指導員（2003）、京都精華大学非常勤講師（2007）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教（2008）、総合研究大学院大学准教授併任（2014）【学位】博士（芸術文化学）（大阪芸術大学 2002）、修士（芸術文化学）（大阪芸術大学 1999）【専攻・専門】民族芸術学、染織研究、手工芸研究【所属学会】民族藝術

学会、意匠学会、日本風俗史学会、日本南アジア学会、生き物文化誌学会

【主要業績】

[単著]

上羽陽子

2006 『インド・ラバーリー社会の染織と儀礼——ラクダとともに生きる人びと』 京都：昭和堂。

[論文]

上羽陽子

2010 「NGO 商品を作らないという選択——インド西部ラバーリー社会における開発と社会変化」『地域研究』10(2)：204-223。

2008 「インドの手工芸と振興活動——ラバーリー社会を事例に」デザイン史フォーラム編、藤田治彦責任編集『近代工芸運動とデザイン史』pp.292-299、京都：思文閣出版。

【受賞歴】

2010 意匠学会作品賞

2007 第4回木村重信民族藝術学会賞

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

現代インドの手工芸文化に関する民族芸術学的研究

・研究の目的、内容

現代インドにおいて、ものづくりの作り手の創意工夫や、手工芸技術の継承法について実践的にアプローチし、製作者が伝統的形態の継承と現代的な要素の採用をいかに選択しているかを明らかにすることを目的とする。同時に、文化資源である現地の人びとのものづくりに関する知識に関して、展示やワークショップを通じてどのように活用することができるか実践的研究を行う。なお、本研究は、科学研究費補助金（基盤研究(C)「現代インドにおける染織技術の戦略的継承法に関する民族芸術学的研究」、2014～2017年度）および（基盤研究(A)「アジア地域における布工芸品の生産・流通・消費をめぐる文化人類学的研究（代表：中谷文美）」、2014～2017年度）の課題として実施する予定である。

・成果

本年度は、2014～2017年度に研究代表者として実施する科学研究費プロジェクト（基盤研究(C)）「現代インドにおける染織技術の戦略的継承法に関する民族芸術学的研究」の研究活動の一部として、インド西部の女神儀礼用染色布の生産現場およびデリーを中心とした大都市の手工芸関連マーケットにおいて約1か月間の現地調査を実施した。また、2014～2017年度に研究分担者として実施する科学研究費プロジェクト（基盤研究(A)）「アジア地域における布工芸品の生産・流通・消費をめぐる文化人類学的研究（代表：中谷文美）」の研究活動の一部として、インド東部およびブータンでの織物製作、ラック染色の現状、野蚕飼養についての基礎的データを収集した。

現在、南アジアで急激に進む経済成長やグローバル化は、このような染織生産地へも多くの影響を与えている。そういったなかで、染織の現場において生産者がどのように素材や手工芸技術を継承するとともに、日々開発が進む化学繊維や化学染料といった新たな素材や技術をどのように取り入れる、あるいは排除しながら産地を維持しているかについても参与観察を行った。

そして、本研究の成果としてインドの染織技術に関するフィールドワークに焦点をあてた単著（『インド染織の現場——つくり手たちに学ぶ』（フィールドワーク選書12）臨川書店）を発表した。また、これまでの研究・収集の成果として、本館南アジア展示新構築「染織の伝統と現代」のセクションを公開した。展示では、商品としての職人による手仕事と、自家用としての村落の女性たちの手仕事が比較できる工夫を試み、同時に、現代の都市におけるファッションがいかに伝統的染織技術と関連しているかも提示した。さらに、それらの染織技術が目で見えて理解できるように染織技術解説パネルを作成し、物質文化の展示における手法開発を実践した。

◎出版物による業績

[単著]

上羽陽子

2015 『インド染織の現場——つくり手たちに学ぶ』（フィールドワーク選書）京都：臨川書店。

[事典項目]

上羽陽子

2014 「衣と流行」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.438-439, 東京：丸善出版。

[その他]

上羽陽子

- 2014 「実りと豊かさに覆われる（世界の民族衣装 手仕事からうまれる花々 file.4）」『フラワーデザインライフ』555：8。
- 2014 「ヨーロッパからの花束（世界の民族衣装 手仕事からうまれる花々 file.5）」『フラワーデザインライフ』556：8。
- 2014 「色とたわむれる（世界の民族衣装 手仕事からうまれる花々 file.6）」『フラワーデザインライフ』557：8。
- 2014 「マヤが培う彩り（世界の民族衣装 手仕事からうまれる花々 file.7）」『フラワーデザインライフ』558：8。
- 2014 「バルカンに舞う草花（世界の民族衣装 手仕事からうまれる花々 file.8）」『フラワーデザインライフ』560：8。
- 2014 「特集・座談会 コラボの力 新美術館 × みんなく——座談会「イメージの力」展ができるまで」『月刊みんなく』38(9)：2-9。
- 2014 「舞い踊る蝶と花（世界の民族衣装 手仕事からうまれる花々 file.9）」『フラワーデザインライフ』561：8。
- 2014 「大平原を飾る花（世界の民族衣装 手仕事からうまれる花々 file.10）」『フラワーデザインライフ』562：8。
- 2014 「花嫁に映える伝統ファッション（世界の民族衣装 手仕事からうまれる花々 file.11）」『フラワーデザインライフ』563：8。
- 2014 「旅・いろいろ地球人 父親④ わが子を婚約させるために」『毎日新聞』12月10日夕刊。
- 2014 「新たな『手芸』の構築をめざして」『民博通信』147：10-11。
- 2014 「ゴワゴワを活かす——ネパールの羊毛加工から」『月刊みんなく』39(1)：4-5。
- 2014 「パレスチナに咲く花（世界の民族衣装 手仕事からうまれる花々 file.12）」『フラワーデザインライフ』564：10。
- 2015 「幼児の成長を願う（世界の民族衣装 手仕事からうまれる花々 file.13）」『フラワーデザインライフ』565：10。
- 2015 「野蚕の宝庫 インド」『月刊みんなく』39(3)：4-5。
- 2015 「ステッチに包み込まれる（世界の民族衣装 手仕事から生まれる花々 file.14）」『フラワーデザインライフ』566：10。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会

2014年4月12日 「インド、ラバーリーの刺繍布の『消費』をめぐる表象」『表象のポリティクス——グローバル世界における先住民・少数者を焦点に』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2014年12月13日 「家畜糞の染色利用について——インド西部カッチ県の事例から」砂漠化プロジェクト・日本沙漠学会沙漠誌分科会主催『日本沙漠学会沙漠誌分科会研究会／南アジアの生業（なりわい）研究会第4回研究会「世界の半乾燥地における家畜糞利用」』総合地球環境学研究所
- 2015年1月15日 ‘Embodied Knowledge in Rabari Embroidery Patterns.’ “Knowledge Transfer Across Borders: Integrative Approaches, A German-Japanese Colloquium,” University of Göttingen, German
- 2015年3月30日 「次年度のインド野蚕調査にむけて」科学研究費補助金（基盤研究(A)）『アジア地域における布工芸品の生産・流通・消費をめぐる文化人類学的研究』（代表：中谷文美）2014年度第3

回研究会、岡山大学津島キャンパス

・研究講演

- 2014年5月25日 「インド染織の伝統と現代——ラバーリー女性の手仕事から」大阪日本民芸館主催、大阪日本民芸館春季特別展『インドの染織と絵——Folkcrafts of India』（2014年3月8月～7月21日）関連みんげいゼミ、国立民族学博物館第3セミナー室
- 2014年6月3日、2014年6月10日、2014年6月24日 「模写実践と異文化理解——インド西部の刺繍布を読みとる」（3回連続講座）川島テキスタイルスクール
- 2014年6月12日 「手織り絨毯の織技術について」株式会社絨毯ギャラリー主催『シルクロード絨毯塾』クロス・ウェーブ梅田
- 2014年6月27日 「インド、ラバーリーの手工芸——牧畜文化と男性の手仕事から」NPO 法人大阪府高齢者大学校 世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館
- 2014年7月4日 「インド、ラバーリーの手工芸——幼児婚と女性の手仕事から」NPO 法人大阪府高齢者大学校 世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館
- 2014年7月5日 「インドのキタープチャルカで糸紡ぎ」ワークショップ2014、川島テキスタイルスクール
- 2014年7月21日 夏休みこどもワークショップ「貝からわかる世界の暮らし」ファシリテーター、国立民族学博物館本館企画展示場
- 2014年8月30日、8月31日 「インド伝統的刺繍技術入門」京都造形芸術大学 × 東北芸術工科大学『公開講座25選』大阪藝術学舎
- 2014年9月23日 「『民族衣装』とファッション」神戸ファッション美術館主催、特別展示『世界のファッション——100年前の写真と衣装は語る』展関連イベント「世界と日本のファッションの現在と未来を考える」神戸ファッション美術館4階セミナー室
- 2014年9月27日 「インド刺繍からみる女性の知恵と工夫」大阪府男女共同参画推進財団主催、第2回『はなみずき会』大阪府男女共同参画・青少年センター（ドーンセンター視聴覚スタジオ）
- 2014年11月26日 「色と光が放つイメージ」「みんぱく × ナレッジキャピタル——イメージの力をさぐる」国立民族学博物館主催、グランフロント大阪ナレッジキャピタル CAFE Lab.
- 2014年11月22日～11月23日 「体感!! イメージの力」特別展『イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる』展 関連ワークショップ講師、国立民族学博物館特別展示館
- 2015年3月22日 「現代インド『民族衣装』の魅力——ラバーリーの衣文化から」NHK 文化センター梅田教室主催、梅田阪急ビルオフィスタワー17階

・広報・社会連携活動

- 2014年12月7日 「邪視をはねかえす力」第364回みんぱくウィークエンド・サロン

◎調査活動

・海外調査

- 2014年8月9日～8月23日—インド、ブータン（アジア地域における布工芸品の生産・流通・消費をめぐる文化人類学的研究に関する現地調査）
- 2014年10月4日～10月23日—インド（現代インドにおける染織技術の戦略的継承法に関する民族芸術学的研究調査）
- 2015年1月13日～1月18日—ドイツ（日独学術コロキウムに参加）

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

民族芸術学会編集（学会誌）委員

・非常勤講師

京都精華大学「文様史1」、「クラフト1」

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（C））「現代インドにおける染織技術の戦略的継承法に関する民族芸術学的研究」研究代表者、科学研究費補助金（基盤研究（A））「アジア地域における布工芸品の生産・流通・消費をめぐる文化人類学的研究」（研究代表者：中谷文美）研究分担者

林 勲男 [はやし いさお] ————— 准教授

【学歴】立教大学文学部史学科卒（1980）、立教大学大学院文学研究科地理学修士課程修了（1983）、一橋大学大学院社会学研究科地域社会研究専攻博士課程単位取得退学（1992）【職歴】シドニー大学人類学科客員研究員（1992）、国立民族学博物館第4研究部助手（1994）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1999）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2001）【学位】文学修士（立教大学大学院文学研究科 1983）【専攻・専門】社会人類学 1) パプアニューギニアにおける社会組織と世界観に関する研究、2) オセアニア近代史の人類学的研究、3) 自然災害への対応に関する人類学的研究【所属学会】日本文化人類学会、日本オセアニア学会、地域安全学会、日本災害復興学会

【主要業績】

[編著]

林 勲男編

2010 『自然災害と復興支援』（みんぱく実践人類学シリーズ9）東京：明石書店。

[共編著]

岩崎信彦・田中泰雄・林 勲男・村井雅清編

2008 『災害と共に生きる文化と教育——〈大震災〉からの伝言（メッセージ）』京都：昭和堂。

[論文]

林 勲男

2006 「意識の変容、多次元的な自己——ベトナムにおける夢と交霊をめぐる」田中雅一・松田素二編『ミクロ人類学の実践——エイジェンシー／ネットワーク／身体』pp.351-378, 京都：世界思想社。

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

災害と記憶

・研究の目的、内容

人文社会科学の分野において、「記憶」を取り上げた論考が多くなっている。日本では、とりわけ東日本大震災とそれに続く福島第1原発事故によって、それまでの生活が一変した被災者・被害者の言説を扱う際に、当事者の主観性にアプローチする研究者のスタンスを同時に開示するものとして、「記憶」をキーワードとして前面に押し出した議論が少なからず見受けられる。しかしそれは、この概念の拡大の有効性への疑問も投げかけている。

本研究では、東日本大震災に関する研究やマスコミ報道における「記憶」概念に着目しながら、被災地の情報環境の中で、人々自身が「記憶」や類似概念をいかに使っているかを、災害以前の生活について語るときと、災害発生以降の体験を語るときとの2つのフェーズについてデータを収集、分析するものである。

・成果

国際人類学民族科学連合（IUAES）中間会議（2014年5月14日～19日、幕張メッセ）のMourning, memorialization and recovery in post-disaster contextsのパネル（5月17日開催）にて、被災地における災害遺構の保存を巡る問題を遺族の記憶と関連付けた論考Disasters and memories: traces, recollections and storiesのタイトルで発表した。その成果を踏まえて、パネルの論考を集めた出版計画をオーガナイザーであるDavid Slater（上智大学）を中心に進めている。

また、災害遺族にとっての家族の死の「場」は、その死者とのパーソナルな、濃密な意味空間であるが故に、忌避と執着の一見相反する感情を生むことを記憶との関係で論じた「生者の記憶、死者との対話」を、木部暢子編『災害に学ぶ——文化資源の保全と再生』（勉誠出版、2015年3月）の一つの章として（pp.39-62）出版した。

さらに研究成果の一部は、2015年3月に仙台市で開催された第3回国連防災世界会議の際に、私が実行委員を務めたパブリックフォーラム「災害ミュージアムを通じた被災経験の語り継ぎと防災・減災」（3月17日、世界災害語り継ぎネットワーク主催）における発表者の人選や構成、そこにおいて展示で紹介した民博の大規模災害復興支援委員会によるデータの収集調査とデータベース構築などにも大きく寄与した。

◎出版物による業績

[論文]

林 勲男

2014 「無形文化遺産に関する復興支援」園田直子・小長谷有紀・I. Lkhagvasuren 共編『アジアにおける博物館・博物館学の「いま」——モンゴル、ミュージアム・クリルタイ』pp.127-135, ウランバートル：モンゴル国立文化遺産センター。

2015 「生者の記憶、死者との対話」木田暢子編『災害に学ぶ——文化資源の保存と再生』pp.39-65, 東京：勉誠出版。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2015年2月22日 ‘Museums as Hubs for Disaster Recovery and Rebuilding Communities,’ International Symposium “New Horizons for Asian Museums and Museology,” National Museum of Ethnology

・共同研究会

2015年1月25日 「防災研究と在来知」『災害復興における在来知——無形文化の再生と記憶の継承』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年5月17日 ‘Disasters and Memories: Traces, Recollections and Stories,’ International Union of Anthropological and Ethnological Sciences, Makuhari Messe, Chiba, Japan

・研究講演

2014年10月12日 「災害の記憶・記録をいかに未来に伝えるか——世界の被災地での試み」長岡市立図書館長岡市文書資料室、川口公民館

2015年3月17日 「TeLL-Netの10年の活動紹介」TeLL-Net フォーラム実行委員会、TKP ガーデンシティ仙台勾当台

・広報・社会連携活動

2014年10月19日 「死者を送る——ニューギニアの彫刻と儀礼」第359回みんなのウィークエンド・サロン

◎調査活動

・国内調査

2014年6月21日～6月24日—岩手県大船渡市・遠野市・釜石市・宮古市（科学研究費補助金（基盤研究（S））「減災の決め手となる行動防災学の構築」（研究代表者：林 春男）に関わる現地調査）

2014年8月6日～8月9日—新潟県長岡市・新潟市（災害復興・地域づくり活動の記録化に関する現地調査）

2014年8月13日～8月17日—岩手県遠野市・大船渡市（東日本大震災の記録・記憶に関する現地調査）

2014年12月8日—宮城県仙台市（科学研究費補助金（基盤研究（S））「減災の決め手となる行動防災学の構築」（研究代表者：林 春男）に関わる調査）

2014年12月12日～12月13日—宮城県宮崎市（外所地震（1662年）による津波災害の記憶の継承と防災に関する調査）

2014年12月20日～12月21日—新潟県長岡市（科学研究費補助金（基盤研究（S））「減災の決め手となる行動防災学の構築」（研究代表者：林 春男）に関わる中越地震災害復興調査）

2015年1月9日～1月13日—宮城県名取市・南三陸町・仙台市・山形県山形市（科学研究費補助金（基盤研究（S））「減災の決め手となる行動防災学の構築」（研究代表者：林 春男）に関わる調査）

・海外調査

2014年8月24日～8月28日—タイ（タイの博物館・博物館学に関する共同研究・現地調査）

2014年11月9日～11月17日—ニュージーランド（ジョージ・ブラウン・コレクションの総合的データベース構築に関する協議）

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

鹿児島大学博士論文審査委員

◎学会の開催

2014年11月24日 日本文化人類学会課題研究懇談会「災害の人類学」第5セミナー室

日高真吾 [ひだか しんご] ————— 准教授

1971年生。【学歴】東海大学文学部史学科日本史学専攻卒（1994）【職歴】財団法人元興寺文化財研究所研究員（1994）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（2002）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手（2003）、国立民族学博物館文化資源研究センター助手（2004）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2008）【学位】文学博士（東海大学 2005）【専攻・専門】保存科学、保存修復【所属学会】文化財保存修復学会、文化財科学会、日本民具学会、近畿民具学会

【主要業績】

[単著]

日高真吾

2015 『災害と文化財——ある文化財科学者の視点から』大阪：千里文化財団。

2008 『女乗物——その発生経緯と装飾性』神奈川：東海大学出版会。

[編著]

日高真吾編

2012 『記憶をつなぐ——津波被害と文化遺産』大阪：千里文化財団。

【受賞歴】

2009 日本文化財科学会第4回ポスター賞

2008 文化財保存修復学会第2回奨励賞

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

文化遺産の復興に向けたミュージアムの活用のための基礎的研究——大学共同利用機関の視点から

・研究の目的、内容

本研究は、大規模災害において壊滅的な被害を受けた文化遺産を被災地の大学機関やミュージアムと連携し、どのように復興させ、活用していくのかを調査・研究するものである。そして、そのような活動に研究機関である大学共同利用機関がどのような役割を果たせるのかを明らかにしていくことを目的とする。このテーマのなかで、本研究では、特に保存科学な見地から、被災地における一時保管場所の環境改善対策の立案に力点をおく。なお、本研究は主に、人間文化研究機構連携研究「大規模災害と人間文化研究」のうち、日高が主催する「文化遺産の復興に向けたミュージアムの活用のための基礎的研究——大学共同利用機関の視点から」において実施する。

・成果

気仙沼施設において、外気の影響対策について、多くの収蔵庫を制作している(株)金剛からの協力で2013年度に、保管場所へ調湿壁を取り付けられることとなった。このことによって、窓側とのエアドライゾーンの確保ができ、外気の影響を受けにくい環境を作ることができることと、ある程度の調湿効果が得られる可能性が出てきた。また、窓と保管場所の間に遮蔽壁が設けられることで、保管場所への虫の侵入や外からの塵埃、カビの浮遊菌の侵入も防ぐ効果が期待できる。そこで、次の展開として、改修後の施設の環境改善の効果について、モニタリングを実施していくことを考えている。

◎出版物による業績

[論文]

日高真吾

2014 「有形文化遺産のレスキュー」園田直子・小長谷有紀・I. Lkhagvasuren 共編『アジアにおける博物館・博物館学の「いま」——モンゴル、ミュージアム・クリタイ』pp.115-125, ウランバートル：モンゴル国立文化遺産センター。

Hidaka, S.

2015 Conservation and Restoration of Tangible Cultural Properties: Rescue Operations Related to the Great East Japan Earthquake. In N. Sonoda, K. Tamura and Nu Mra Zan (eds.) *Asian Museum and Museology 2013: International Research Meeting on Museology in Myanmar* (Senri

- Ethnological Reports 125), pp.69-78. Osaka: National Museum of Ethnology [査読有].
- 2015 Rescue and Emergency Treatment for Tangible Cultural Properties. In N. Sonoda, K. Hirai and J. Incherdchai (eds.) *Asian Museum and Museology 2014: International Workshop on Asian Museums and Museology in Thailand* (Senri Ethnological Reports 129), pp.57-62. Osaka: National Museum of Ethnology [査読有].
- 2015 「企画展『歴史と文化を救う』を振り返る」『展示学』52: 36-39。
- 2015 日高真吾責任編集「公開シンポジウム『災害と展示』」『展示学』52: 32-54。
- 2015 「生活の記憶を取り戻す——文化財レスキューの現場から」木部暢子編『災害に学ぶ——文化資源の保全と再生』pp.175-199, 東京: 勉誠出版。

[その他]

日高真吾

- 2014 「安藤緑山作『染象牙果菜置物』『染象牙貝尽し置物』の蛍光X線分析」広瀬麻美・小林祐子・藤田麻希・朝山衣恵編集『超絶技巧! 明治工芸の粋』図録 pp.150-153, 東京: 浅野研究所。
- 2014 「文化という視点からの支援活動」『季刊民族学』148: 10-11。
- 2014 「文化財レスキュー活動の現在——保存科学の現場から」『季刊民族学』148: 13-17。
- 2014 「時代玩具コレクションについて」『月刊みんぱく』38(12): 2-3。
- 2015 「箱根駅伝のユニフォーム」『月刊みんぱく』39(1): 22-23。
- 2015 「駕籠について」『第137回開場30周年記念文楽公演 国立文楽劇場』pp.24-25, 大阪: 国立文楽劇場。

古水 力・笹山政幸・橋本裕之・日高真吾

- 2014 「支援をどうつないでいくか——沿岸部民俗芸能をとりまく状況から」『季刊民族学』148: 32-39。

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

[ビデオテーク]

日高真吾制作監修

- 2015 『金属加工技術彫金と鍛金 1 ——金槌の種類』日本語, 8分。
- 2015 『金属加工技術彫金と鍛金 2 ——器をつくる』日本語, 13分。
- 2015 『金属加工技術彫金と鍛金 3 ——指輪をつくる』日本語, 15分。
- 2015 『金属加工技術彫金と鍛金 4 ——タガネをつくる』日本語, 12分。
- 2015 『金属加工技術彫金と鍛金 5 ——ペンダント』日本語, 8分。
- 2015 『金属加工技術彫金と鍛金 6 ——タガネの種類』日本語, 19分。
- 2015 『金属加工技術彫金と鍛金 7 ——糸鋸』日本語, 9分。
- 2015 『金属加工技術彫金と鍛金 8 ——キサゲ』日本語, 6分。
- 2015 『金属加工技術彫金と鍛金 9 ——地金を丸くする』日本語, 5分。

・電子ガイドの制作・監修

[日本の文化]

日高真吾監修

- 2015 『三線をつくる』日本語, 英語, 韓国語, 中国語。
- 2015 『エイサー』日本語, 英語, 韓国語, 中国語。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

- 2014年12月14日 「民博の資料管理技術をエジプトで活用する」一般社団法人文化財保存修復学会主催・国立民族学博物館共催、公開シンポジウム『文化財を伝える——日本の保存技術が古代エジプト文明の秘宝を救う』国立民族学博物館
- 2015年3月29日 「古代文明の遺産を守る——大エジプト博物館保存修復センターにおける人材育成プロジェクト」金沢大学主催・国立民族学博物館共催、文化資源学シンポジウム『文化資源の保存・継承に向けた国際協力』石川県政記念しいのき迎賓館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2014年5月12日 「文化財レスキューとは何か? レスキュー活動を通じて考えたこと」東海大学公開連続講座「モノを守り・伝えるコトとは? 文化財の保存と活用をめぐる」東海大学

- 2014年5月20日 ‘Exhibition Techniques 1: Text Information including Explanation.’ “The 6th Domestic Workshop on Conservation of Archaeological Bronze Objects at the History Museum of Armenia in May 2014,” History Museum of Armenia
- 2014年5月20日 ‘Renovation of Permanent Exhibition in National Museum of Ethnology.’ “The 6th Domestic Workshop on Conservation of Archaeological Bronze Objects at the History Museum of Armenia in May 2014,” History Museum of Armenia
- 2014年5月21日 ‘Management of exhibition hall in National Museum of Ethnology.’ “The 6th Domestic Workshop on Conservation of Archaeological Bronze Objects at the History Museum of Armenia in May 2014,” History Museum of Armenia
- 2014年5月21日 ‘Exhibition Techniques 2: Management of Lighting Temperature and Humidity.’ “The 6th Domestic Workshop on Conservation of Archaeological Bronze Objects at the History Museum of Armenia in May 2014,” History Museum of Armenia
- 2014年6月7日 「被災した漆器製品の応急処置事例」(日高真吾・園田直子・和高智美・北村 繁・小谷竜介・川又隆央) 文化財保存修復学会第36回大会、明治大学
- 2014年6月7日 「博物館害虫・深い害虫の発生源に関する一考察」(園田直子・日高真吾・和高智美) 文化財保存修復学会第36回大会、明治大学
- 2014年6月7日～8日 「阪神・淡路大震災における文化財保存修復学会の活動」(日高真吾・内田俊秀) 文化財保存修復学会第36回大会、明治大学
- 2014年6月7日～8日 「東日本大震災における文化財保存修復学会の活動」(日高真吾・内田俊秀) 文化財保存修復学会第36回大会、明治大学
- 2014年7月5日～6日 「安藤緑山の牙彫技術に関する一考察」(日高真吾・園田直子・和高智美・河村友佳子・橋本沙知・小林祐子) 日本文化財科学学会第31回大会、奈良教育大学
- 2014年8月12日 「東日本大震災の文化財レスキューについて——民俗文化財の事例」『「みんなでまもるミュージアム」事業 第2回全体会議』九州国立博物館
- 2014年9月4日 「展示と災害——博物館における被災文化財の可能性」『展示論講座』日本展示学会、京都国立博物館
- 2014年9月25日 ‘Rescue and Emergency Treatment for Tangible Cultural Properties.’ “International Research Meeting on Museology Thailand,” Kanchanaphisek National Museum, Thailand
- 2014年10月27日 ‘Museum Exhibition: Renovation of Permanent Exhibition in the National Museum of Ethnology.’ “2014, 8th Training Workshop for the Protection of Cultural Heritage in Central Asia: Training Workshop on Exhibition and Publication of the Excavation Report,” The Institute of History and Cultural Heritage of the National Academy of Sciences of the Kyrgyz Republic
- 2014年10月28日 ‘Management of Lighting/Temperature and Humidity in a Museum’ “2014, 8th Training Workshop for the Protection of Cultural Heritage in Central Asia-Training Workshop on Exhibition and Publication of the Excavation Report,” The Institute of History and Cultural Heritage of the National Academy of Sciences of the Kyrgyz Republic
- 2014年10月28日 ‘Management of Exhibition Hall: Case Study of the National Museum of Ethnology.’ “2014, 8th Training Workshop for the Protection of Cultural Heritage in Central Asia: Training Workshop on Exhibition and Publication of the Excavation Report,” The Institute of History and Cultural Heritage of the National Academy of Sciences of the Kyrgyz Republic
- 2014年11月20日 「気仙沼市仮収蔵施設の保存環境」平成26年度宮城県被災文化財等保全連絡会議研修会、東北歴史博物館
- 2014年12月4日 「文化財保存修復学会における今後の備え」平成26年度文化庁委託事業「文化財（美術工芸品）等緊急保全活動・現況調査事業」研究会『これからの文化財防災——災害への備え』東京文化財研究所
- 2015年1月16日 「文化財の保存科学研究に見る人文科学と自然科学の連携の可能性」『第10回日・韓人文政策フォーラム——人文科学に関する新しい視点』韓国メルキュールホテル

・研究講演

2015年2月8日 「文化財レスキュー事業後の民博の東北支援」『心を繋ぐ衣服と伝統文化』神戸ファッション美術館

2015年3月4日 「被災文化財等のレスキュー活動」『文化財の防災に関する研修』奈良文化財研究所

2015年3月8日 「被災民俗文化財のレスキュー活動」兵庫県立歴史博物館

◎調査活動

・海外調査

2014年5月17日～5月30日—アルメニア共和国（アルメニア歴史博物館における人材育成ワークショップの講義・実習に参加及び保存修復に関連する技術・材料に関する情報収集）

2014年8月24日～8月28日—タイ（タイの博物館・博物館学に関する共同研究・現地調査）

2014年10月22日～10月30日—キルギス共和国（キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所における人材育成ワークショップの講義および実習に参加、保存修復に関する情報収集）

2015年1月15日～1月17日—大韓民国（日韓における人文学の政策に関する意見交換と情報収集）

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

文化財保存修復学会理事、日本民具学会理事、文化財虫害研究所総合的防除対策検討委員会委員

福岡正太 [ふくおか しょうた] ————— 准教授

1962年生。【学歴】東京藝術大学音楽学部楽理科卒（1986）、東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程修了（1991）、東京藝術大学大学院博士課程単位取得退学（1994）【職歴】国立民族学博物館第2研究部助手（1994）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（1998）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（2003）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授（2004）【学位】芸術学修士（東京藝術大学大学院 1991）【専攻・専門】民族音楽学、東南アジアとくにインドネシア西ジャワのスダ伝統音楽についての研究【所属学会】東洋音楽学会、日本音楽学会、日本ポピュラー音楽学会

【主要業績】

[論文]

福岡正太

2003 「音楽からみた『インドネシア民族』の形成」端 信行編『民族の二〇世紀』（二〇世紀における諸民族文化の伝統と変容9）pp.144-160, 東京：ドメス出版。

2003 「小泉文夫の日本伝統音楽研究——民族音楽学研究の出発点として」『国立民族学博物館研究報告』28(2)：257-295。

Fukuoka, S.

2003 Gamelan Degung: Traditional Music in Contemporary West Java. In S. Yamashita and J. S. Eades (eds.) *Globalization in Southeast Asia: Local, National, and Transnational Perspectives*, pp.95-110. New York and Oxford: Berghahn Books.

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

音楽芸能研究における映像音響メディア

・研究の目的、内容

音声および映像の記録技術は、学術的な記録および分析の手段として、音楽芸能研究に大きな影響を与えてきた。民族音楽学の誕生と展開は、映像音響メディアの影響を抜きにして論じることとはできない。一方で、20世紀を通じて、映像音響メディアは、人々が音楽芸能を楽しむ媒体として普及定着し、メディアの変化が音楽芸能の展開に大きな影響を及ぼすようになった。さらに、ビデオ撮影機器の普及により、音楽芸能の伝承や創造、研究の過程において、関係者が自ら作成する映像が一定の役割をもつようになり、映像作成が、音楽芸能の活動に不可分なものとして組み込まれつつある。本研究は、様々な位相における音楽芸能と映像音響メディアの結びつきについて明らかにすることを目的としている。

具体的には、1) 鹿児島県硫黄島および徳之島の芸能を例として、映像による芸能の民族誌的記録の作成および活用のあり方を探る。特に、映像を音楽芸能の関係者と記録者との相互関係を築くメディアとして位置づけ、映像による民族誌の作成が音楽芸能の上演や伝承に与える影響について研究する。2) 東南アジアの音楽芸能、特にゴングにかかわる文化に焦点をあて、映像を用いて地域間の比較研究を進め、相互関係を明らかにする。また、1)、2)を通じて、映像音響資料のアーカイブ化と公開における諸課題についても検討したい。なお、1)は主に人間文化研究機構連携研究「人間文化資源」の総合的研究「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」班の研究活動として進め、2)は、科学研究費補助金（基盤研究(B)）「映像を用いた東南アジアのゴング文化の音楽人類学的研究」の研究活動として進める。

・成果

- 1) 硫黄島の芸能（八朔太鼓踊り）について、さらに調査撮影を進め、これまでの映像素材を整理した。また、人間文化研究機構連携研究メンバーである、藤岡幹嗣氏が編集した映像および過去の記録映像を現地で上映し、意見交換を行った。その結果、現在からの隔たりに応じて、毎年の踊り手の構成の変化、映った人の成長や島の社会構成の変化、生活文化の歴史的变化など、それぞれの映像に異なる関心が抱かれる傾向が明らかになった。映像記録の意味は、視覚的、聴覚的に記録されたものにより客観的に決まるのではなく、見る側の視点によって変化するということができる。徳之島の芸能については、すでに作成したマルチメディア番組「徳之島の唄と踊りと祭り」に新たな撮影素材を加え、天城町ユイの館における公開を開始した。また、同じ素材を基に、「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」プロジェクトにより、「徳之島の民俗芸能に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」を進めた。このシステムは、コメント機能により、ユーザーが新たな情報を加えられるところに特徴があり、このシステムにより、それぞれのレパートリーに関する経験や知識を蓄積することを目指している。基本的なデザインと画面遷移を決定し、現地において、デモンストレーションに基づき、次年度の現地公開に向けた協議を行った。なお、これらの成果について人文科学とコンピュータ研究会（情報処理学会）および日本民俗音楽学会等で発表を行った。
- 2) 東南アジアのゴング文化について、インドネシアのジャワ島にて、鉄のゴングの製作と流通について調査撮影を行った。この20～30年の間に、学校へのガムランの導入などにより、鉄のガムランの受容が増え、新たな製作拠点の形成や流通ルートの発展があったことが明らかになった。鉄製のゴングのこぶ状の部分に真鍮製のこぶをさらにかぶせて取り付けるなど、製作技法にも工夫が加えられており、その様子を映像で記録した。また、2011年に開催した国際シンポジウムおよび2013年に行った東洋音楽学会大会のシンポジウムの成果に基づく英文報告書を刊行した。

◎出版物による業績

〔編著書〕

Fukuoka, S.

- 2014 *International Symposium Audiovisual Ethnography of Gongs in Southeast Asia: Proceedings*. Inter-Institutional Research Project "A Study on Visual Ethnography of Performing Arts as Human Cultural Resources." Tokyo: National Institutes for the Humanities.

〔論文〕

福岡正太

- 2014 「音楽芸能の伝承において映像記録が果たしうる役割——徳之島の芸能を例に」『研究報告人文科学とコンピュータ』2014-CH-104(10): 1-3。
- 2014 「音盤に聴く東アジアの音楽交流——日本コロムビア外地録音資料を例に」国際常民文化研究機構編『洪沢敬三の資料学——日常史の構築』（国際シンポジウム報告書5）pp.33-39, 横浜：国際常民文化研究機構。

〔その他〕

福岡正太

- 2014 「みんぱく世界の旅 東南アジアの芸能① 聖なる楽器ゴン・スカティ——インドネシア」『毎日小学生新聞』6月14日。
- 2014 「みんぱく世界の旅 東南アジアの芸能② 人形芝居ワヤン・ゴレック——インドネシア」『毎日小学生新聞』6月21日。
- 2014 「みんぱく世界の旅 東南アジアの芸能③ 影絵芝居スパエク・トム——カンボジア」『毎日小学生新聞』6月28日。

2014 「みんなく世界の旅 東南アジアの芸能④ 仮面のおどりトベン・チルボン」『毎日小学生新聞』7月5日。

2014 「芸能の映像記録」『季刊民族学』38(4)：150。

2015 「無形文化遺産と音楽研究（文化遺産おもてうら）」『月刊みんなく』39(2)：14-15。

2015 「国際伝統音楽学会『音楽とマイノリティ』研究会 第8回シンポジウム」日本音楽学会『西日本支部通信』8：15-16。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年10月18日 「音楽芸能の伝承において映像記録が果たしうる役割——徳之島の芸能を例に」人文科学とコンピュータ研究会（情報処理学会）発表会、関西大学千里山キャンパス第三学舎 D501教室

2014年12月13日 「映像記録を民俗芸能の営みの中に位置づける」シンポジウム『民俗音楽の新たな胎動をさぐる』日本民俗音楽学会第28回大会、東京音楽大学 A 館200教室

2015年2月8日 「フォーラム型情報ミュージアム・徳之島について」「徳之島の民俗芸能に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」研究会、国立民族学博物館特別研究室

・研究講演

2014年5月6日 「探求！現役フィールドワーク研究者に聞く記録と意味」『梅棹忠夫と21世紀の「知的生産の技術」シンポジウム』グランフロント大阪ナレッジキャピタル北館タワーC8階

2014年5月14日 「霊と交流する楽器ゴングの今」産経新聞社主催、みんなく創設40周年記念 カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館9階SPACE9

2014年7月16日 「影が紡ぎ出す物語——カンボジア無形文化遺産の伝承」産経新聞社主催、みんなく創設40周年記念 カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館9階SPACE9

2014年8月6日 「島のまわりに人がつどう——鹿児島県硫黄島」産経新聞社主催、みんなく創設40周年記念 カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館9階SPACE9

2014年9月5日 「世界のリズムの多様性——足し算のリズム」NPO 法人大阪府高齢者大学校 世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館

2014年9月12日 「世界のリズムの多様性——おしりで合わせるリズム」NPO 法人大阪府高齢者大学校 世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館

2014年11月4日 「コメント」国立民族学博物館・日経新聞社主催、みんなく公開講演会『無形文化遺産——選ぶ視点、選ばれる現実』日経ホール

・研究公演

2014年7月20日 みんなく研究公演「アラン峠を越えていく——在日コリアン音楽の今」司会、国立民族学博物館講堂

・展示

東南アジア展示

・広報・社会連携活動

2014年6月22日 音楽の祭日、国立民族学博物館

◎調査活動

・国内調査

2014年8月25日～8月27日—三島村硫黄島（連携研究「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」の一環として「八朔太鼓踊り」の調査撮影）

2014年9月27日～9月29日—徳之島（連携研究「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」の一環として映像番組の上映会の開催および伝統芸能の上演の撮影等）

2015年1月7日～1月8日—徳之島（フォーラム型情報ミュージアムの構築における今後の連携協力についての打ち合わせ、および芸能の調査撮影についてロケーションハンティング）

2015年1月17日～1月18日—那覇市（連携研究「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」の一環として、「大阪のエイサー——思いの交わる場」（国立民族学博物館製作）の上映会および意見交換会）

2015年2月14日～2月16日—徳之島（フォーラム型情報ミュージアムの構築にかかわる芸能の調査撮影および今後の連携協力についての打ち合わせ）

2015年3月5日～3月7日—三島村硫黄島（連携研究「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」の一

環として「八朔太鼓踊り」映像の上映会を開催)

・海外調査

2014年8月8日～8月17日—インドネシア（東南アジアのゴング文化についての調査及び資料収集）

2014年9月14日～9月21日—インドネシア（東南アジアのゴング文化についての調査及び資料収集）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「徳之島の民俗芸能に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」代表者、人間文化研究機構連携研究「人間文化資源」の総合的研究「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」代表者、科学研究費補助金（基盤研究(B)）「映像を用いた東南アジアのゴング文化の音楽人類学的研究」代表者

◎社会活動・館外活動

- ・非常勤講師

大谷大学「民族誌講義」「社会学研究」、同志社大学「芸術学特論」、京都文教大学「音楽人類学」

南 真木人 [みなみ まきと] ————— 准教授

1961年生。【学歴】弘前大学人文学部人文学科卒（1985）、筑波大学大学院修士課程環境科学研究科修了（1989）、筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科中退（1991）【職歴】国立民族学博物館第3研究部助手（1991）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2003）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2005）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2007）、文化資源研究センター准教授（2011）【学位】学術修士（筑波大学大学院修士課程環境科学研究科 1989）【専攻・専門】人類学、南アジア研究【所属学会】日本文化人類学会、日本南アジア学会、生態人類学会

【主要業績】

〔共編〕

南 真木人・石井 溥編

2015 『現代ネパールの政治と社会——民主化とマオイストの影響の拡大』（世界人権問題叢書92）東京：明石書店。

Yamashita, S., M. Minami, D. W. Haines and J. S. Eades (eds.)

2008 *Transnational Migration in East Asia: Japan in a Comparative Focus* (Senri Ethnological Reports 77), Osaka: National Museum of Ethnology.

〔論文〕

Minami, M.

2007 From *Tika* to *Kata*?: Ethnic Movements among the Magars in an Age of Globalization. In H. Ishii, D. N. Gellner and K. Nawa (eds.) *Social Dynamics in Northern South Asia Vol.1: Nepalis Inside and Outside Nepal*, pp.443-466. New Delhi: Manohar.

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

- ・研究課題

在留ネパール人の移住システムとネットワークに関する研究

- ・研究の目的、内容

本研究の目的は、在留ネパール人の移住システムとネットワークを明らかにし、移民の促進、選別、水路づけ、適応の機能を分析することである。2013年末現在31,531人を数える在留ネパール人は、主に各種専修学校の留學生、インド・ネパール系レストランの調理師およびその家族であるが、それぞれの移住システムとネットワークがいかに形成されてきたのかを国内とネパールでの調査から明らかにする。併せて、入国後に難民申請をするネパール人の数がトルコ人について多い現状を移住システムと社会関係資本の視点から解明する。比較のため、マレーシアにおけるネパール人移住労働者の現地調査も計画している。調査は、人間文化研究機構地域研究推進事業・現代インド地域研究・国立民族学博物館拠点（代表者：三尾 稔）、および科学研究費補助金（基

盤研究(B))「体制転換期ネパールにおける『包摂』を巡る社会動態の展開に関する比較民族誌的研究」(代表者:名和克郎)により実施し、関連するテーマで科研費の応募をすすめる。

・成果

科学研究費補助金(基盤研究(B))「体制転換期ネパールにおける『包摂』を巡る社会動態の展開に関する比較民族誌的研究」(代表者:名和克郎)により、ネパールにおいて現地調査を行い、随時国内での聞き取り調査を実施した。調理師には独自のネットワークがあり縁故採用が多い一方、各種専修学校の留学生はネパールの教育コンサルタントを介して同郷の友人が先行者を頼って同じ学校に留学するケースが多いことが明らかになった。留学は開かれた移住システムといえるが、ヴィザの発給率が高い出入国管理局がある地域の特定の学校に集中することも確認できた。成果の一部は、国立民族学博物館編『世界民族百科事典』の「出稼ぎ労働者コミュニティ」、「移民送り出しシステムとネットワーク」、「トランスナショナル社会空間」、および「移民大国ネパール」三尾 稔・杉本良男編『現代インド6 環流する文化と宗教』pp.122-126、東京大学出版会(2015年)で発表した。

◎出版物による業績

[共編]

南 真木人・石井 溥編

2015 『現代ネパールの政治と社会——民主化とマオイストの影響の拡大』(世界人権問題叢書92) 東京:明石書店 [査読有, 共同研究成果]。

[論文]

南 真木人

2015 「民族運動とマオイスト——マガルの事例から」南 真木人・石井 溥編『現代ネパールの政治と社会——民主化とマオイストの影響の拡大』(世界人権問題叢書92) pp.339-381, 東京:明石書店 [査読有, 共同研究成果]。

[事典項目]

南 真木人

2014 「トランスナショナル社会空間」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.260-261, 東京:丸善出版。

2014 「移民送り出しシステムとネットワーク」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.334-335, 東京:丸善出版。

2014 「出稼ぎ労働者コミュニティ」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.550-551, 東京:丸善出版。

[その他]

南 真木人

2014 「旅・いろいろ地球人 共に生きる⑦ 鶏ともつながる」『毎日新聞』5月22日夕刊。

2014 「筑波時代の掛谷さん」『生態人類学会ニュースレター』No.20 別冊:31-3。

2014 「苦学して夢をかなえるネパール人」『月刊みんぱく』38(8):5。

2014 「みんぱく世界の旅・ブータン① 幸せの国 ブータンの『ヤク』」『毎日小学生新聞』10月18日。

2014 「みんぱく世界の旅・ブータン② 天日干しの野菜やお肉」『毎日小学生新聞』10月25日。

2014 「ネワール寺院用方杖」『国立民族学博物館2015年オリジナルカレンダー』千里文化財団。

2014 「みんぱく世界の旅・ネパール① ネパール ヒンドゥー教のカースト」『毎日小学生新聞』11月1日。

2014 「みんぱく世界の旅・ネパール② ネパールの村照らすLED灯」『毎日小学生新聞』11月8日。

2015 「バーラ——ネパール、マガル人の豆コロッケ」『月刊みんぱく』39(1):18-19。

2015 「プルキシ仮面」『図画工作教師用指導書アート・カード解説1・2上/1・2下』p.35, 東京:日本文教出版。

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

[ビデオテープ]

南 真木人・寺田吉孝制作監修, 井ノ本清和・安藤葉月制作, 国立民族学博物館製作

2015 「ネパール 都市の結婚式」日本語, 28分15秒。

2015 「ネパール 山村の結婚式」日本語, 28分05秒。

2015 「ネパールの金細工」日本語, 19分08秒。

南 真木人・寺田吉孝・藤井知昭(1982年取材)制作監修、井ノ本清和・安藤葉月制作、国立民族学博物館製作
2015 「カトマンドゥ盆地の30年」日本語、25分30秒。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機構の連携研究会での報告

2015年1月25日 『『移民の文化』の形成過程——ネパール人移住労働者から』『現代インド地域研究国立民族学博物館拠点(MINDAS)第4回合同研究会』国立民族学博物館

・共同研究

2015年2月1日 「包摂の制度にアクセスする主体と力——移民の送り出しシステム」『ネパールにおける「包摂」をめぐる言説と社会動態に関する比較民族誌的研究』

・展示

南アジア展示新構築、巡回展「マンダラ展——チベット・ネパールの仏たち」(高知県立歴史民俗資料館)

・広報・社会連携活動

2014年5月18日 「在留ネパール人の現在」第345回みんなくウィークエンド・サロン

2014年12月4日 「仮面『バイラヴ』ほか」『特別展イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる』ギャラリートーク、国立民族学博物館特別展示棟

2014年12月4日 「ネパールの移住労働の現状——増えてきた女性労働移民」NPO法人国際交流の会とよなか・とよなか男女協働推進センターすてっぷ共催、「すてっぷ」視聴覚室

2015年2月7日 「都市の婚礼、山村の婚礼——ネパール社会の現在(いま)を結婚式に探る」第439回国立民族学博物館友の会講演会、国立民族学博物館

2015年2月25日 「ネパールの今と昔——1982年の映像から」産経新聞社主催、みんなく創設40周年記念 カレッシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館9階SPACE9

◎調査活動

・海外調査

2014年11月16日～11月28日—ネパール(民族名自治州をめぐるマガル人の対応に関する調査研究)

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員(2人)

・論文審査委員

博士論文審査委員(1件)

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点(代表者:三尾 稔)研究分担者、科学研究費補助金(基盤研究(B))「体制転換期ネパールにおける『包摂』を巡る社会動態の展開に関する比較民族誌的研究」(研究代表者:名和克郎)研究分担者

山本泰則 [やまもと やすのり] ————— 准教授

【学歴】大阪大学基礎工学部生物工学科卒(1978)、大阪大学大学院基礎工学研究科博士前期課程修了(1980)、大阪大学大学院基礎工学研究科博士後期課程退学(1983)【職歴】国立民族学博物館第5研究部助手(1983)、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手(1998)、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授(1998)、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授(2004)【学位】工学修士(大阪大学大学院基礎工学研究科 1980)【専攻・専門】文化資源情報学【所属学会】情報処理学会、電子情報通信学会

【主要業績】

[論文]

山本泰則

2011 「国立国会図書館PORTAと人間文化研究機構統合検索システムの連携について」『人間文化情報資源共有化研究会報告集』2: 53-68。

Yamamoto, Y., F. Adachi and K. Hachimura

2013 Common Metadata to Search for Non-digital Cultural Resources in Heterogeneous Databases.
Proceedings of the International Conference on Culture and Computing 2013, pp.225-224, IEEE
Computer Society (CD-ROM).

宇陀則彦・山田太造・村田良二・山本泰則

2012 「転写資料記述のための概念モデルの特徴と課題」『国立歴史民俗博物館研究報告』176：239-266。

【2014年度の活動報告】

◎各研究

・研究課題

機械学習をもちいた民族学情報の検索

・研究の目的、内容

国立民族学博物館では、さまざまな民族資料情報のデータベースを作成して公開しているが、必ずしも十分な情報が付与されているわけではない。特に標本資料に関するものは、同種の資料が多数ある、同じ資料に異なる名称が与えられているなど、単純な検索文字列の照合による従来の検索手法で情報を得るには限界がある。

本研究は、最近情報科学の分野で進展がめざましい機械学習の技術を応用して、データベースから有用な情報を抽出しようとするものである。多量のデータの統計処理やクラスタリングなどの手法により、データの構造を概観して全容を把握し、また不完全な情報から有用な情報を抽出する可能性について研究をおこなう。

・成果

今年度は研究の現状のサーベイをさらに進めるとともに、民博のデータベースの情報について、以下のような応用を試みた。

- 1) ジョージ・ブラウン・コレクション・データベースの収集地情報をカテゴリ化し、位置情報に変換する。
- 2) 標本資料データベースの寸法・重量情報のパターンを分析する。
- 3) 図書・雑誌目録データベースの情報から規格外のデータを見つける。

◎出版物による業績

[その他]

山本泰則

2014 「『ジョージ・ブラウン・コレクション』を地図にプロットする」『みんぱく e-news』160 (<http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/160>)。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・広報・社会連携活動

2014年8月24日 「みんぱくシンボルマークをえがく」第354回みんぱくウィークエンド・サロン

川瀬 慈 [かわせ いつし] ————— 助教

1977年生。【学歴】立命館大学文学部卒（2001）京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程修了（2010）【職歴】日本学術振興会PD（2007）、マンチェスター大学研究員（2010）、ベルギー SoundImageCulture 客員講師（2011）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教（2012）【学位】博士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 2010）、修士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科 2007）【専攻・専門】映像人類学、民族誌映画制作【所属学会】英国王立人類学協会、日本映像民俗学の会、日本文化人類学会、日本アフリカ学会、日本ナイル・エチオピア学会

【主要業績】

[共編]

鈴木裕之・川瀬 慈編

2015 『アフリカン・ポップス！——文化人類学からみる魅惑の音楽世界』東京：明石書店。

分藤大翼・川瀬 慈・村尾静二編

2015 『フィールド映像術』（FENICS 100万人のフィールドワーカーシリーズ15）東京：古今書院。

[論文]

Kawase, I.

2014 The Amharic Oral Poetry by Lalibāločč. *Japanese Review of Cultural Anthropology* 15: 185-198.

【受賞歴】

2013 第19回日本ナイル・エチオピア学会高島賞

2008 最も革新的な映画賞 Premio per il film più innovativo イタリア・サルデーニャ国際民族誌映画祭

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

民族誌映画のナラティブの革新

・研究の目的、内容

人類学、映画、アートの実践が交差する場から、従来のテキスト主体の民族誌記述に依存した民族誌映画のナラティブを革新し、文化の記録と表象における表現の地平を理論的・実践的に開拓する。

・成果

2014年度は、5月に開催された日本文化人類学会50周年記念国際研究大会（IUAES 2014、於：幕張メッセ）にて、川瀬が代表を務める民博共同研究「映像民族誌のナラティブの革新」メンバーたちとともに、『New Horizon of Anthropological Films from Japan』と題した上映企画を行い、各国の映像人類学者と民族誌映像の制作方法論や活用に関する議論を行った。そこでは、作品内における文字情報（ナレーション、あるいは解説字幕）の様式や研究者のパフォーマンス（立ち振る舞い、被写体との会話を含むインタラクション）の見せ方、或いは、次世代に向けた無形文化の記録保護というパースペクティブからの作品活用のありかたについて等の意見が交わされた。本企画を通し、映像人類学の研究拠点であるトロムソ大学や中国社会科学院の研究者と、人類学における映像実践に関する国際的な研究交流、共同研究についての具体的な計画を練ることができたのは大きな収穫であった。

出版を通じた成果では、査読付きの学術雑誌『年報カルチュラル・スタディーズ』第2号の映像人類学特集企画に、研究課題に関する論稿を発表した。年度の後半には、編著者として関わった出版物『フィールド映像術』（古今書院）、そして『アフリカンポップス！文化人類学からみる魅惑の音楽世界』が刊行された。これらの出版物では、報告者の制作方法論やその変遷について紹介しつつ、民族誌映像を完結した作品としてではなく、被写体や、それを視聴する人々との創発的な営みのプロセスにあることを自身の制作や作品公開を基軸にしつつ考察した。民族誌映像のナラティブの革新と創造にむけた研究活動を展開することができたといえる。

◎出版物による業績

[共編]

分藤大翼・川瀬 慈・村尾静二編

2015 『フィールド映像術』（FENICS 100万人のフィールドワーカーシリーズ15）東京：古今書院。

鈴木裕之・川瀬 慈編

2015 『アフリカン・ポップス！——文化人類学からみる魅惑の音楽世界』東京：明石書店。

[論文]

川瀬 慈

2014 「音、身体、イメージの新たな関係——Sensoryscape from Gondar のこころみ」『年報カルチュラル・スタディーズ』2：198-203 [査読有]。

Kawase, I.

2014 Documentary Films in Japan-Critically Engaging with the Society. *The 8th IRAN International Documentary Film Festival "CINEMA VERITE" Catalogue*, pp.112. Tehran: Documentary and Experimental Film Center.2014 Prospects and Challenges of Ethnographic Filmmaking in Ethiopia. In H. Kim and Y. Park (eds.) *Audiovisual augmentation of the Intangible Cultural Heritage*, pp.74-85. Jeonju: Kim Geon.2014 The Amharic Oral Poetry by Lalibāločč. *Japanese Review of Cultural Anthropology* 15: 185-198 [査読有]。

[事典項目]

川瀬 慈

2014 「奏でられる集団の歴史」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.234-235, 東京：丸善出版。

2014 「民族誌映画」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.490-491, 東京：丸善出版。

Kawase, I.

2014 Visual Anthropology and Ethiopia. In A. Bausi and S. Uhlig (eds.) *Encyclopaedia Aethiopica Vol. 5: Y-Z*, pp.326-327. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.

[その他]

川瀬 慈

2014 「本と映画のはなし」『POPEYE』809：142-143, 東京：マガジンハウス。

2014 「無形文化遺産をめぐる認識——エチオピアの音楽職能集団ラリベロッチ」『月刊みんぱく』38(6)：14-15。

2014 「映像民族誌の新たな時代」『民博通信』146：12-13。

2014 「第19回高島賞受賞記念講演」『JANES ニュースレター』21：43-45。

2014 「現代のことば 路上の精霊」『京都新聞』7月9日夕刊。

2014 「現代のことば ムルの蛇」『京都新聞』9月3日夕刊。

2014 「現代のことば ゆでたまご売りの少女チャイナ」『京都新聞』11月4日夕刊。

2015 「現代のことば 神にささげる歌」『京都新聞』1月8日夕刊。

2015 「旅・いろいろ地球人 信じる⑥ エチオピアの刺青」『毎日新聞』2月26日夕刊。

2015 「現代のことば あるシンフォニー」『京都新聞』3月12日夕刊。

森田良成・伊藤良成・川瀬 慈

2014 座談会「フラハティから現在まで」『ドキュメンタリーマガジン neoneo』4：107-114。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会

2014年7月6日 「Sensory Turn の人類学への返答」『映像民族誌のナラティブの革新』

2015年1月25日 「トロムソ大学映像文化学科の研究動向、第8回 Cinema Verite 国際ドキュメンタリー映画祭（イラン）の報告」『映像民族誌のナラティブの革新』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年5月15日 ‘Video Messages from the World: the Future with/of Anthropologies.’ “JASCA Roundtable,” IUAES Inter-Congress 2014, the International Conference Hall of Makuhari Messe, Chiba, Japan

2014年5月18日 ‘New Horizon of Anthropological Films from Japan.’ “Film Screening Program,” IUAES Inter-Congress 2014, the International Conference Hall of Makuhari Messe, Chiba, Japan

2014年10月10日 ‘Prospects and Challenges of Ethnographic Filmmaking in Ethiopia.’ “Audiovisual Augmentation of the Intangible Cultural Heritage,” International Intangible Film Festival Conference, National Intangible Heritage Center, Jeonju, Korea

2014年11月25日 ‘Ethnographic Approaches towards Visual Documentation-Camera as Witness of Communication and Collaboration.’ Bremer Initiative Qualitative Method Colloquium, University of Bremen, Germany

2014年12月1日 ‘Anthropological Knowledge in Audio-visual Storytelling.’ “The 8th IRAN International Documentary Film Festival Cinema Verite” Documentary & Experimental Film Center, Tehran, Iran

・研究講演

2014年10月22日 ‘Transcultural Encounters: Doing Visual Anthropology.’ Celebration talk for the new MA students, Transcultural Studies, University of Bremen, Germany

2014年11月24日 ‘Intangible Cultural Heritage and Ethnographic Filmmaking.’ Tromsø University Museum, Norway

・映像上演

2014年5月18日 *When Spirits Ride Their Horses* (Dir. Itsushi Kawase), “Film Screening Program,” IUAES Inter-Congress 2014, the International Conference Hall of Makuhari Messe

- 2014年 8月10日 *When Spirits Ride Their Horses* (Dir. Itsushi Kawase), *Zaffimaniry Style* (Dir. By Itsushi Kawase and Taku Iida) 第7回中華人民共和国映像人類学会年次集会 (貴州市、中国)
- 2014年10月11日 *When Spirits Ride Their Horses* (Dir. Itsushi Kawase), 第1回無形遺産国際映画祭 (全州市、韓国)
- 2014年11月13日 *When Spirits Ride Their Horses* (Dir. Itsushi Kawase), *Zaffimaniry Style* (Dir. By Itsushi Kawase and Taku Iida), *Tattoo Gondar* (Dir. Itsushi Kawase), 川瀬 慈作品特集, プレーメン大学人類学・文化調査学部 (ドイツ)
- 2014年11月21日 *When Spirits Ride Their Horses* (Dir. Itsushi Kawase), *Zaffimaniry Style* (Dir. By Itsushi Kawase and Taku Iida), *Tattoo Stories from Gondar* (Dir. Itsushi Kawase), 川瀬 慈作品特集, トロムソ大学映像文化研究科 (ノルウェー)
- 2014年12月1日 *Room11, Ethiopia Hotel* (Dir. Itsushi Kawase), *Lalibalocc-Living in the Endless Blessing* (Dir. Itsushi Kawase) 第8回シネマ・ヴェリテ・国際ドキュメンタリー映画祭 (イラン)
- 2015年 2月19日 *Room11, Ethiopia Hotel* (Dir. Itsushi Kawase), *When Spirits Ride Their Horses* (Dir. Itsushi Kawase), *Tattoo Stories from Gondar* (Dir. Itsushi Kawase) 川瀬 慈作品特集, La Péniche ANAKO (フランス)

◎調査活動

・海外調査

- 2014年 7月17日～7月21日—韓国 (民博ビデオテーク制作プロジェクト、韓国国立民俗博物館)
- 2014年 8月8日～8月13日—中国 (第7回中華人民共和国映像人類学会年次総会発表、中国の映像人類学研究動向調査、貴州師範大学)
- 2014年10月8日～10月12日—韓国 (第1回無形遺産国際映画祭での発表、韓国の映像人類学研究動向調査、国立無形遺産センター、全州市)
- 2014年10月15日～11月20日—ドイツ (ドイツのエチオピア研究動向調査、民族誌映画収集、プレーメン大学人類学・文化調査学部、ハンブルグ大学アジア・アフリカ研究所)
- 2014年11月20日～11月25日—ノルウェー (トロムソ大学の映像人類学研究、アフリカ研究動向調査、トロムソ大学博物館、トロムソ大学映像文化研究科)
- 2014年11月30日～12月8日—イラン (イランの民族誌映画の収集、テヘラン)
- 2014年12月8日～12月16日—ドイツ (ドイツのエチオピア研究動向調査、民族誌映画収集、プレーメン大学人類学・文化調査学部、ハンブルグ大学アジア・アフリカ研究所)

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など
国立歴史民俗博物館共同研究「研究資源としての民俗研究映像の制作と活用に関する研究」(研究代表者：内田順子) 共同研究員

◎社会活動・館外活動

- ・他の機関から委嘱された委員など
Scientific Committee, Last Focus Visual Studies Conference, Sorbonne University of Paris, 2015
- ・客員教授
プレーメン大学人類学文化調査学部客員教授 (2014年10月～12月)
- ・非常勤講師
京都学園大学「民俗学特殊講義」(集中講義)、龍谷大学「多文化映像論B」(前期)

国際学術交流室

岸上伸啓 [きしがみ のぶひろ]——— 室長 兼：副館長 (研究・国際交流担当)、研究戦略センター教授

印東道子 [いんとう みちこ]——— 兼：民族社会研究部教授

菊澤律子 [きくさわ りつこ]————兼：先端人類科学研究部准教授

齋藤 晃 [さいとう あきら]————兼：先端人類科学研究部准教授

MATTHEWS, Peter Joseph [マシウス、ピーター・ジョセフ]————兼：民族社会研究部准教授

山中由里子 [やまなか ゆりこ]————兼：民族文化研究部准教授

横山廣子 [よこやま ひろこ]————兼：民族社会研究部准教授

梅棹資料室

久保正敏 [くぼ まさとし]————室長 兼：副館長（企画調整担当）、文化資源研究センター教授

機関研究員

加賀谷真梨 [かがや まり]————研究員

1977年生。【学歴】お茶の水女子大学文教育学部卒（2001）、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科発達社会科学専攻（博士前期課程）修了（2003）、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科比較社会文化学専攻（博士後期課程）修了（2006）【職歴】放送大学非常勤講師（2005-2014）、法政大学非常勤講師（2006-2011）、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科附属人間文化研究所研究院研究員（2006-2009）、札幌医科大学非常勤講師（2008-現在）、日本学術振興会特別研究員PD（2009-2011）、国立民族学博物館研究戦略センター機関研究員（2012）【学位】博士（社会科学）（お茶の水女子大学 2006）修士（社会科学）（お茶の水大学 2003）【専攻・専門】文化人類学、民俗学、南西諸島研究、ジェンダー研究【所属学会】日本文化人類学会、日本民俗学会、比較家族史学会、Society for Applied Anthropology

【主要業績】

[博士論文]

加賀谷真梨

2006 「小浜島と竹富島の生存戦略にみる女性の実践——沖縄におけるジェンダー関係の再検討」お茶の水女子大学。

[論文]

加賀谷真梨

2012 「プロセスとしての〈共同体〉——沖縄・波照間島の『戦争マラリア』をめぐる語りを事例に」『東洋文化』93：79-97。

2005 「沖縄県・小浜島における生涯教育システムとしての年中行事」『日本民俗学』242：35-63。

【受賞歴】

2006 第26回日本民俗学会研究奨励賞

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

1) 高齢者介護と相続の相関にみる沖縄の「家族」に関する人類学的研究

2) 離島の子どもの身体観・健康観・医療観に関する研究

・研究の目的、内容

- 1) 介護保険サービスの拡充後もなお「家族」が高齢者の生に対する責任を手放さない要因を「継承」という行為でそれ自体を重んじる日本人の観念に由来すると仮定し、それを高齢者介護と位牌や土地の相続との相関に関する実態調査を通じて検証する。調査地は沖縄の波照間島と久高島とする。
- 2) 離島社会における子どもの身体・健康・医療に関する文化的知識と行動パターン、及びその変化を沖縄県波照間島の調査を通じて明らかにする。

・成果

- 1) 2014年度は、沖縄県内で同時期に同じプロジェクトの傘下で開始された離島の高齢者地域介護事業の現在の状況について、波照間島と久高島で比較調査を行い、特に久高島で同活動の継続が困難であった背景を、島の歴史、生業、社会構造等との連関に留意しながら明らかにした。その結果、近代化（世俗化）のうねりに対して、久高島の人々が霊的世界をそのまま保持し、それに依拠することで対応（対抗）しようとしたことが、地域介護をはじめとする祭祀以外の自律的な活動の継続を困難にしていることを明らかにした。具体的な研究成果として、波照間島における地域介護の実態を、論文「ジェンダー視角の民俗誌——個と社会の関係を問い直す」にまとめ、森話社刊行の『＜人＞と向き合う民俗学（2014）』に寄稿した。久高島に関しては、みんなのウィークエンド・サロンで発表した。また、アソシエーションの維持や存続という観点から、非営利で女性相談活動を行う女性団体を読み解いた論文「An Alternative Place for Women: A Case Study of Women's Support Activities in Japan」を『Senri Ethnological Studies』No.91に投稿した。
- 2) 2014年度は、子どもの健康や医療を取り巻く社会環境の変化に着目しながら、子どもと「地域社会」との結びつき及びその変化について考察した。波照間島では1978（昭和53）年頃まで仮親慣行が盛んで、体の弱い子どもや神経質な子どもに産みの親とは別に「オヤ」をつけることで子どもの確かな成長を願う慣習があったこと。子どものいのちを救った恩人も「オヤ」となり、子どもの成長を見届ける役割を果たしたこと。子どもの病はマブヤ（魂）を落とした状況としても認識され、医師の診断に加えて呪医がその治療に当たっていたこと等を明らかにした。これらの成果の一部を、論文「子どもも親もみんなで育てる」にまとめ、岩波ジュニア新書『いのちはどう生まれ、育つのか——医療、福祉、文化と子ども』に上梓した。

◎出版物による業績

[論文]

加賀谷真梨

- 2014 「ジェンダー視角の民俗誌——個と社会の関係を問い直す」門田岳久・室井康成編『＜人＞に向きあう民俗学』pp.156-187, 東京：森話社。
- 2015 「子どもも親もみんなで育てる」道信良子編『いのちはどう生まれ、育つのか——医療、福祉、文化と子ども』（岩波ジュニア新書799）pp.95-106, 東京：岩波書店。

[その他]

加賀谷真梨

- 2014 「旅・いろいろ地球人 食べる③ 歴史とつながる給食」『毎日新聞』8月14日夕刊。
- 2015 「旅・いろいろ地球人 信じる④ 母親の妙案」『毎日新聞』2月12日夕刊。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会

- 2015年1月8日 「誰のための福祉事業か？——沖縄県A島の高齢者地域福祉活動に生じるコンフリクト」『家族と社会の境界面の編成に関する人類学的研究——保育と介護の制度化／脱制度化を中心に』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2014年4月25日 「民俗学の方法論の探求——沖縄・八重山諸島の高齢者福祉を事例に」渡邊欣雄ゼミ研究発表、國學院大学
- 2014年5月16日 「Family and “family-like” People: Conflicts over Community-based Elderly Care」IUAES、幕張メッセ
- 2014年5月31日 「福祉化する社会と家族のインターフェイス」南西諸島研究会、明治大学
- 2014年6月15日 「インタビュー調査報告 “みずら” はどのように歩み、どこへ向かうのか？」特定非営利活動法人 かながわ女のスペースみずら総会における研究報告会、かながわ県民活動サポートセンター
- 2014年7月6日 シンポジウム「老化を考える——霊長類学から現代社会へのアプローチ」コメント、第30回

日本霊長類学会、大阪科学技術センタービル大ホール

2014年7月12日 「人類学におけるミクロ・マクロ系の連関」公開セミナー（第1回東アジア人類学研究会研究大会との共催）コメント、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

・広報・社会連携活動

2014年9月6日 波照間すごろくの企画運営、『ひらめき☆ときめきサイエンス こどものいのちと対話しよう！ 世界のこどもたちの生活と医療』

2014年12月14日 「男の世界と女の世界——沖縄の離島社会の現在」第365回みんなくウィークエンド・サロン

◎調査活動

・国内調査

2014年4月29日～5月4日—沖縄県竹富町（高齢者介護にみる沖縄の「家族」に関する人類学的研究）

2014年8月2日～17日—沖縄県石垣市、南城市（高齢者介護にみる沖縄の「家族」に関する人類学的研究）

2014年9月5日～7日—北海道利尻町、利尻富士町（離島の子どもの身体・健康・医療に関する文化的知識と行動パターンに関する研究）

2014年12月22日～29日—沖縄県竹富町（離島の子どもの身体・健康・医療に関する文化的知識と行動パターンに関する研究）

・海外調査

2015年3月1日～3月16日—オーストラリア（オーストラリアにおける日本（沖縄）研究の動向調査）

◎社会活動・館外活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（若手研究(B)）「高齢者介護と相続の相関にみる沖縄の『家族』に関する人類学的研究」研究代表者、科学研究費補助金（基盤研究(C)）「離島社会における子どもの身体・健康・医療に関する文化的知識と行動パターン」（代表者：道信良子）研究分担者、法政大学沖縄文化研究所研究員

・非常勤講師

お茶の水女子大学「地域文化論」、札幌医科大学「21世紀問題群」

金田純平 [かねだ じゅんぺい] ————— 研究員

1977年生。【学歴】関西学院大学総合政策学部総合政策学科卒業（2000）、神戸大学大学院総合人間科学研究科コミュニケーション学専攻博士前期課程修了（2005）、神戸大学大学院総合人間科学研究科コミュニケーション科学専攻博士後期課程修了（2008）【職歴】しんきん大阪システムサービス株式会社（2000-2003）、日本学術振興会特別研究員（DC2）（2006-2008）、神戸大学大学院国際文化学研究科特命助教（2008-2010）、株式会社国際電気通信基礎技術研究所専任研究員（2010-2011）、ATR Learning Technology 株式会社（2010-2011）、関西大学文学部特別任用准教授（2010-2012）、関西大学教育推進部特別任用准教授（2012-2013）、国立民族学博物館機関研究員（2013）【学位】博士（学術）（神戸大学大学院総合人間科学研究科 2008）、修士（学術）（神戸大学大学院総合人間科学研究科 2005）【専攻・専門】話し言葉における文法と音声および非言語行動の対照研究、人文研究および教育に関するコンピュータシステムのユーザーインタフェース研究【所属学会】情報処理学会、日本語教育学会、日本音声学会、日本語文法学会、ヨーロッパ日本語教師会

【主要業績】

[共著]

定延利之・森 篤嗣・茂木俊伸・金田純平

2012 『私たちの日本語』東京：朝倉書店。

[論文]

金田純平

2015 「文末の感動詞・間投詞——感動詞・間投詞の対照を視野に入れて」友定賢治編『感動詞の言語学』pp.28-59, 東京：ひつじ書房。

2014 「日本語教師によるビデオ教材の作成と共有のすすめ——企画・制作・公開・コミュニケーション」『日本語音声コミュニケーション』2：28-59, 日本語音声コミュニケーション研究会。

【受賞歴】

2013 日本音声学会学術研究奨励賞

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

- 1) 博物館展示情報システムのユーザビリティの研究
- 2) 人文研究・教育における ICT 技術の活用

・研究の目的、内容

- 1) 来館者が直接利用する博物館展示情報システムについて、その利用状況やログの解析による数値・統計的手法に加え、人文・社会科学的手法である参与観察・行動観察による定性分析を通じて、そのシステムのユーザビリティ（使いやすさ）における問題点を明らかにし、根拠に基づいた改善案を提示することでユーザビリティの向上につなげる。
- 2) ICT 技術を人文研究および教育に活用する場合、予算規模が小さく、また、特別な ICT スキル（サーバ構築・運営技術等）を持たない個々の研究者・教員のレベルでも導入可能でかつ効果的な手法を提案する。当初は日本語教育分野に的を絞って研究を行う。

・成果

- 1) ビデオテークの利用ログからの利用状況と実際に被験者を用いたユーザーテストの結果を分析して、操作画面における問題点を洗い出し、ユーザーインターフェースの改善策について検討を行った。また、他のビデオライブラリーを訪問して、利用方式や端末のユーザーインターフェース、什器類の形状について調査を行い、次世代のビデオテークに相応しい仕組みの検討を行った。
次世代電子ガイドの開発において、展示場の特定の位置に Bluetooth の発信機（ビーコン）を設置し、展示物に接近するだけで電子ガイドの映像が取捨選択される仕組みを実験的に導入し、実用化に向けた試験を実施した。
- 2) 日本語を学習するフランスの大学生（レンヌ第1大学）と日本語教育を学ぶ日本の大学生（神戸大学国際文化学部）の間でインターネットを介し協働して動画によるプレゼンテーションを制作する教育プロジェクトにおいて、動画の作成・公開に関する講義と授業 Web サイトおよび動画の発信環境の整備を行った。プロジェクトの成果は2014年8月のヨーロッパ日本語教育シンポジウムでのポスター発表にて報告した。

◎出版物による業績

[論文]

金田純平

2015 「文末の感動詞・間投詞——感動詞・間投詞の対照を視野に入れて」友定賢治編『感動詞の言語学』pp.28-59, 東京：ひつじ書房。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2014年4月5日 ‘The Lexical Correlates of “Characters”: A Contrastive Study on the Role Language among English, French and Japanese,’ “Colloque international: Japonais en contexte,” Université Bordeaux Montaigne
- 2014年8月26日 「キャラクタと文法」“Workshop on Japanese ‘character’ in Communication and Grammar,” Ljubljana University
- 2014年8月29日 「複言語・複文化環境における協働プロジェクト——日仏の遠隔授業を通して」(林 良子・国村千代と連名) 第18回ヨーロッパ日本語教師会シンポジウム、リュブリャナ大学(スロベニア)

・展示

文化資源プロジェクト2014年度年末年始展示イベント「ひつじ」プロジェクトメンバー

◎調査活動

・海外調査

- 2014年4月2日～4月7日—フランス（国際会議「コンテキストに基づいた日本語の話し言葉」での研究発表及び言語コミュニケーションに関する打ち合わせ・情報収集）
- 2014年8月25日～9月5日—スロベニア、イタリア（第14回ヨーロッパ日本学会国際大会・ヨーロッパ日本語

教師会シンポジウムに参加及び情報収集、博物館・美術館における展示場情報メディア機器の調査)

◎社会活動・館外活動

・非常勤講師

神戸大学大学院国際文化学研究科「アカデミックライティング・日本語」「文化情報リテラシー専門演習」、関西大学大学院文学研究科「日本文献情報処理研究 A・B」、関西大学文学部「日本語学 1 A・B」、関西大学人間健康学部「スタディスキル・ゼミ」「導入演習」、兵庫医科大学「医学概論入門」

呉屋淳子 [ごや じゅんこ] ————— 研究員

1978年生。【学歴】沖縄国際大学法学部卒(2001)、ソウル大学大学院人類学科修士課程修了(2007)、名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育科学専攻博士後期課程単位取得退学(2012)【職歴】ソウル大学大学院人類学科ティーチングアシスタント(2005)、日本学術振興会特別研究員(DC2)(2010)、国立民族学博物館文化資源研究センター機関研究員(2012)【学位】博士(教育学)(名古屋大学大学院教育発達科学研究科 2015)、修士(人類学)(ソウル大学大学院 2007)【専攻・専門】教育人類学、比較教育学【所属学会】日本文化人類学会、韓国文化人類学会、日本比較教育学会、沖縄民俗学会

【主要業績】

[博士論文]

呉屋淳子

2015 「沖縄県八重山諸島における『学校芸能』の創造と展開に関する研究」愛知：名古屋大学大学院教育発達科学研究科。

[論文]

고야준코 (呉屋淳子)

2014 「오키나와현야에야마의 3고교의 향토예능」고려대학교한국어문교육연구소역음『세계연극교육의 현황과 전망』(「沖縄県八重山の3高校の郷土芸能」高麗大学韓国語文教育研究所編『世界演劇教育の現況と展望』) pp.259-268, ソウル：民俗院。

고야준코 (呉屋淳子)

2014 「박물관자료를활용한교육활동'일본국립민족학박물관사례를중심으로」국립민속박물관역음『어린이와 박물관연구』(「博物館資料を活用した教育活動——日本国立民族学博物館の事例を中心に」韓国国立民俗博物館編『子どもと博物館研究』) 7：60-70。

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

「境界領域における民俗芸能の教授・創生に関する研究：奄美諸島の高等学校を中心に」

・研究の目的、内容

本研究の目的は、「鹿児島／沖縄」の境界に位置する奄美諸島の高等学校における民俗芸能の教授と創生に着目し、境界領域であるが故に生じる民俗芸能の新しい継承過程の様相を明らかにすることである。奄美諸島の各地域は、鹿児島県や沖縄県の影響を認めつつも、どちらか一方に帰属することはないという重層的でマージナルな文化的特徴を有している。そのうち芸能に関しては、徳之島以北が大和系、沖永良部以南が琉球系の芸能の影響を受けて展開してきた。本研究は、奄美諸島内部の文化的特徴に焦点を当て、民俗芸能の教授と創成する様相を学校教育から示し、学校教育の果たす役割と機能の検討から、民俗芸能の持続的な継承の可能性を検討する。

・成果

初年度は、奄美高校、沖永良部高校、鹿児島高校の郷土芸能部だけでなく、奄美諸島内の高校（奄美大島、喜界島、徳之島、喜界島）を卒業した若者を対象に行った。その結果、島を離れる若者の進学・就職先が鹿児島か沖縄（本島）かによって、奄美諸島内部の民俗芸能の教育も異なっていることが明らかになった。つまり、若者の移動が、島内部の教育に影響を与えていた。たとえば、沖縄本島北部にある名桜大学が2010年に公立大学に変わったため、奄美諸島からの入学者が増加している。高校卒業後、喜界島以北は鹿児島へ、徳之島以南

は沖縄（本島）へ進学あるいは就職する若者が一般的であったが、名桜大学の制度改革によって、喜界島以北からも沖縄への移動がみられる。これは、奄美諸島内部の島々対沖縄（本島）を意識する状況を生み出していた。そのため、島内部では、民俗芸能の教育も「外」を意識した取り組みが行われるようになっていた。この「外」が沖縄だけなので、あるいは鹿児島を含んでいるものかは、今後の課題である。また、この成果は、2014年7月に名古屋大学で開催された日本比較教育学会において発表した。

◎出版物による業績

[博士論文]

呉屋淳子

2015 「沖縄県八重山諸島における『学校芸能』の創造と展開に関する研究」愛知：名古屋大学大学院教育発達科学研究科。

[論文]

고야준코 (呉屋淳子)

2014 「오키나와현야에야마의 3고교의 향토예능」 고려대학교한국어문교육연구소역음 『세계연극교육의 현황과 전망』(「沖縄県八重山の3高校の郷土芸能」高麗大学韓国語文教育研究所編『世界演劇教育の現況と展望』) pp.259-268, ソウル：民俗院。

고야준코 (呉屋淳子)

2014 「박물관자료를 활용한 교육활동'일본국립민족학박물관 사례를 중심으로」 국립민속박물관역음 『어린이와 박물관연구』(「博物館資料を活用した教育活動——日本国立民族学博物館の事例を中心に」韓国国立民俗博物館編『子どもと博物館研究』) 7：60-70。

呉屋淳子

2014 「『伝統と文化』の教授を巡る教育制度と学校の関係性——沖縄県立八重山高等学校の教育課程の事例から」『(日本研究)』(韓国，中央大学) 36：93-310。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年6月30日 「박물관자료를 활용한 교육-국립민족학박물관의 사례를 중심으로 (博物館資料を活用した教育——国立民族学博物館の事例を中心に)」韓国国立民俗博物館子ども博物館

2014年7月13日 「沖縄県八重山諸島における『学校芸能』の誕生と展開」『第50回日本比較教育学会』名古屋大学

・研究公演

2014年11月1日 「りんけんバンドみんぱく公演」企画・解説

・広報・社会連携活動

2014年7月5日 「ウチナンチュと教育」第433回国立民族学博物館友の会講演会

2014年8月4日 「モノ資料を活用した教育方法」大阪府初任者研修、国立民族学博物館

2014年8月5日 ワークショップ企画・運営者「『みんぱく』で世界と教室をつなごう！」博学連携教員研修 ワークショップ2014 in みんぱく「学校と博物館でつくる 国際理解教育——センセイもつくる・あそぶ・たのしむ」国立民族学博物館

2014年10月23日 「フィールドワークの実践方法」兵庫県西宮今津高校総合学科1年次（国際文化班23名、引率教員1名）講義、国立民族学博物館

◎調査活動

・国内調査

2014年7月13日一名古屋（「日本比較教育学会」に参加）

2014年7月26日～8月1日一茨城県（全国高等学校総合文化祭郷土芸能大会の調査）

・海外調査

2014年6月29日～7月2日一韓国（韓国国立民俗博物館・子ども博物館における国際学術大会での研究発表）

2015年2月24日～3月1日一韓国（日韓の高等学校における「学校芸能」の創造に関する比較研究）

2015年3月10日～3月19日一ペルー（海外における琉球古典芸能の教育とその継承に関する沖縄・奄美・ペルーの比較研究）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（若手研究（B））「境界領域における民俗芸能の教授・創生に関する研究——奄美諸島の高等学校を中心に」研究代表者

末森 薫 [すえもり かおる]—————研究員

1980年生。【学歴】国際基督教大学教養学部人文科学科卒業（2004）、筑波大学大学院芸術研究科世界遺産専攻修了（2006）、筑波大学大学院人間総合科学研究科世界文化遺産学専攻単位取得満期退学（2009）【職歴】東京文化財研究所客員研究員（2009–2010）、国際協力機構専門家（2010–2014）【学位】修士（学術）（筑波大学大学院 2006）【専攻・専門】文化財保存科学、中国仏教美術史、文化遺産学【所属学会】文化財保存修復学会、日本中国考古学会、日本文化財科学科、東アジア文化遺産保存学会、国際文化財保存学会（International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works）

【主要業績】

[論文]

末森 薫

2009 「天水麦積山石窟の東崖面の復元的考察」『中国考古学』9：111–131。

[共著]

麦積山石窟芸術研究所・筑波大学世界遺産専攻編

2011 『麦積山石窟環境と保護調査報告書』北京：文物出版社。

[修士論文]

末森 薫

2006 「文化遺産・麦積山石窟の評価に関する一考察——麦積山石窟の造営概念を通して」筑波大学大学院芸術研究科。

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

国立民族学博物館における文化資源の保存・管理システムの構築に関わる実証的研究

・研究の目的、内容

本研究では、国立民族学博物館に展示・収蔵される30万点以上の資料を安定的かつ長期的に保存・活用するための恒常的な管理システムを構築することを目的に、システム構築に係る基礎実験や各種の分析機器（ガスクロマトグラフ質量分析計（GC/MS）、フーリエ変換赤外分光光度計（FR-IR）、蛍光X線分析装置（XRF）、分光測定器等）を用いた分析調査により、資料の保存・管理に関する実証的な検証を行う。2014年度は、主に下記3点について、調査・研究を実施した。

- 1) 博物館資料の保存・管理に係る機器分析調査
- 2) 展示場で使用する発光ダイオード（LED）光源の光学特性に関する調査
- 3) 光学的調査法を用いた資料点検システムの開発に係る検証実験

・成果

- 1) 2013年度に導入されたGC/MSについて、分析条件が設定されると共に、標準試料のレファレンスが整備された。また各種の分析機器を用いた調査により、展示場や収蔵庫で確認された未知物質の物性や、収蔵・展示に使用する資材から発生するオフガス成分等が検証された。
- 2) 新構築展示場に導入するLED光源について、分光放射照度計および光学撮影法を用いた検証実験を実施し、光学的特性に関する基礎情報が得られた。
- 3) 狭域帯の光源および各種の光学フィルターに関する光学情報が得られ、光学調査の基礎条件が設定された。また油や微生物等、資料の付着物等を点検する手法としての有効性が確認された。

◎出版物による業績

[その他]

末森 薫

2014 「第36回文化財保存修復学会参加記」『文化財保存修復学会通信』148:3。

2014 「旅・いろいろ地球人 食べる⑦ エジプトB級グルメ」『毎日新聞』9月11日夕刊。

2014 「春の再訪を待つエジプト古代文明——アラブの春が過ぎて」『みんぱく e-news』159 (<http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/159>)。

2014 コメント「和紙：技術をパピルス修復に——エジプト人、京都で研修」『毎日新聞』11月27日。

末森 薫・松田泰典・山内和也・藤澤 明

2014 「大エジプト博物館保存修復センター（GEM-CC）における人材育成を目的とした国際協力プロジェクト（Ⅲ）」『文化財保存修復学会第36回大会要旨集』pp.290-291。

Galal, H., M. Mahmoud, M. Ramadan, B. Dewidar, H. Tawfik, H. Ahmed, M. Mohamed, A. Mahdy, A. Wahab, W. Mostafa, H. Gamil, K. Suemori and Y. Matsuda

2014 Preventive Measures and Activities for Protection of Ancient Egyptian Artifacts in the Grand Egyptian Museum: Conservation Center (GEM-CC). In J. Bridgland (ed.) *ICOM-CC 17th Triennial Conference Preprints, Melbourne, 15-19 September 2014*. Paris: International Council of Museums.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年6月7日～8日 「大エジプト博物館保存修復センター（GEM-CC）における人材育成を目的とした国際協力プロジェクト（Ⅲ）」文化財保存修復学会第36回大会、明治大学

2014年12月14日 「大エジプト博物館保存修復センターへの技術支援プロジェクト」一般社団法人文化財保存修復学会主催『公開シンポジウム 文化財を伝える——日本の保存技術が古代エジプト文明の秘宝を救う』国立民族学博物館講堂

・展示

文化資源プロジェクト2014年度年末年始展示イベント「ひつじ」プロジェクトメンバー

◎調査活動

・海外調査

2014年9月21日～9月27日—香港（第25回国際文化財保存学会（International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works (IIC)）への出席および情報収集）

2014年10月24日～11月9日—中国（河西回廊沿い（西安、天水、蘭州、武威、敦煌）の仏教石窟に関する調査研究活動）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（研究活動スタート支援）「中国石窟芸術技法・材料の解明による美術史観再考——麦積山石窟を事例として」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

文化財保存修復学会第37回大会実行委員、国際協力機構（JICA）大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト専門家会議 JICA 専門家

浜田明範 [はまだ あきのり]—————研究員

1981年生。【学歴】千葉大学文学部行動科学科卒業（2003）、千葉大学大学院文学研究科人文科学専攻修士課程修了（2005）、一橋大学大学院社会学研究科総合社会科学専攻単位取得（2010）【職歴】産業能率大学兼任教員（2008）、日本学術振興会特別研究員（PD）（2010）、江戸川大学非常勤講師（2011）、国立民族学博物館機関研究員（2013）、高知大学非常勤講師（2013）、立命館大学客員協力研究員（2013）【学位】博士（社会学）（一橋大学社会学研究科2012）、修士（文学）（千葉大学文学研究科2005）【専攻・専門】医療人類学・アフリカ地域研究（西アフリカにおける生物医療と生政治の展開に関する研究）【所属学会】日本文化人類学会、日本アフリカ学会、The International

【主要業績】

[単著]

浜田明範

2015 『薬剤と健康保険の人類学——ガーナ南部における生物医療をめぐる』東京：風響社。

[論文]

浜田明範

2015 「書き換えの干渉——文脈作成としての政策、適応、ミステリ」『一橋社会科学』7（別冊）：125-150。

2010 「医療費の支払いにおける相互扶助——ガーナ南部における健康保険の受容をめぐる」『文化人類学』75(3)：371-394。

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

西アフリカにおける生権力の複数性に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、ガーナ南部における生物医療の展開に注目することにより、生物医療が、1) どのように異なる立場の人々の行為を統制しながら全体的な目標を達成しようとしているのか、2) どのようなモノ・行為・制度の配置によって人々の自己統治を促しているのか、3) どのように「生かすべき者」と「死ぬに任せる者」を結果的に選別しているのか、の3点について明らかにすることにある。

・成果

2014年度は、ガーナ南部の農村地帯における結核対策プログラムに関する現地調査を実施した。具体的な成果として、以下の諸点が明らかになった。1) 結核対策では実際に患者を発見・治療する看護師への働きかけが重視されている。2) しかし、看護師の結核対策への参加は限定的である。3) これは看護師の怠慢というよりは予算と人員の不足に由来する。4) 看護師に頼れない患者は、逆説的に、ドキュメントを用いて自己管理をしている。5) 患者の生活は結核対策というよりは家族の影響を強く受けている。6) 結果的に、結核治療の成否は、看護師と家族がいかに結核対策に参加するかに依然として依存している。

これらの成果のうち、生権力の複数性を解明するという本研究の目的に照らして、特に重要なのは、看護師に配布されたドキュメントを用いて患者自身が投薬管理を行っている点である。結核対策プロジェクトは、最終的には患者の体内にいる結核菌の振舞いを統治しようと試みるものであるが、そのためには患者に定期的な薬剤の服用させる必要がある。結核対策では、患者の行為を統制するために、直接監視下短期治療法（DOTS）という方法が世界的に標準化されている。これは、患者が服薬しているかどうかを看護師に確認させる方法であり、患者ではなく看護師の行為を統制しようと試みている。しかし、ガーナではこの直接監視下短期治療法が不徹底であることによって、つまり、看護師への統治がうまく機能していないことによって、患者自身による自己統治が要請されている。その結果、結核対策が配布している投薬チェックシートは、看護師の統治ではなく、患者の統治のための装置となっている。このように、ガーナ南部の結核体先においては、ある対象（看護師）への生権力的な働きかけの失敗が、別の対象（患者）への生権力的な働きかけの前提となるという、複数の対象に対する生権力的な働きかけの干渉のひとつの形態が見られた。このような生権力の複数性とその複雑な関係性を明らかにした本研究は、アフリカにおけるグローバルヘルスについての医療人類学研究だけでなく、生権力論にも大きな貢献となりうる。

今後の展望として、本研究で得られた成果を発展させ、マラリアやオンコセルカといったその他の感染症を対象に、ガーナ南部における感染症対策と生権力の動態を明らかにしていく予定である。

◎出版物による業績

[単著]

浜田明範

2015 『薬剤と健康保険の人類学——ガーナ南部における生物医療をめぐる』東京：風響社。

[論文]

浜田明範

2014 「アフリカにおける薬剤の流通と副作用——ガーナ南部のカカオ農村地帯を事例として」落合雄彦編

『アフリカ・ドラッグ考——交錯する生産・取引・乱用・文化・統制』pp.169-190, 京都：晃洋書房。

2015 「書き換えの干渉——文脈作成としての政策、適応、ミステリ」『一橋社会科学』7（別冊）：125-150。
Hamada, A.

2014 Payment and Milieu of Mutual-Aids: The National Health Insurance Scheme and Multiple Cares in Southern Ghana. In G. Mohácsi (ed.) *Ecologies of Care: Innovations through Technologies, Collectives and the Senses* (Readings in Multicultural Innovation 4), pp.161-177. Osaka: Doctoral Program for Multicultural Innovation, Osaka University.

2014 Medical Technology as Cultural Interface. In H. W. Wong and K. Maegawa (eds.) *Revisiting Colonial & Post-Colonial: Anthropological Studies of Cultural Interface*. Los Angeles: Bridge21.

[その他]

浜田明範

2014 「書評 浜本満著『信念の呪縛』」『くにたち人類学研究』9：1-9。

2014 「旅・いろいろ地球人 生き物④ カカオ畑のハチミツ」『毎日新聞』6月26日夕刊。

2014 「なぜいま再分配の人類学なのか」『民博通信』145：24-25。

2014 「ガーナの楽しい選挙」『月刊みんぱく』38(10)：19。

2015 「人間学のキーワード 再分配」『月刊みんぱく』39(2)：20。

2015 「旅・いろいろ地球人 信じる③ エボラへの備え」『毎日新聞』2月5日夕刊。

2015 「薬剤から見る西アフリカの医療——医療人類学の視点から」*THE LUNG perspectives* 23(1)：95-97。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会

2014年4月5日 「再分配を通じた集団の生成——論点整理と四つの方向性」『再分配を通じた集団の生成に関する比較民族誌的研究——手続きと多層性に注目して』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年5月18日 ‘Payment and Milieu of Mutual-Aids: The National Health Insurance Scheme and Multiple Cares in Southern Ghana,’ The International Union of Anthropological and Ethnological Sciences Inter-Congress 2014, Makuhari-Messe, Chiba, Japan

2014年5月30日 「環境の書き換え——ガーナ南部における結核と複数の統治」『京都人類学研究会』京都大学

2015年1月24日 「再分配研究の射程について」『現代人類学研究会』東京大学

・広報・社会連携活動

2014年12月21日 「エボラ出血熱と文化」第366回みんぱくウィークエンド・サロン

◎調査活動

・海外調査

2014年7月30日～8月30日—ガーナ共和国（「西アフリカにおける生権力の複数性——ガーナ南部における結核対策を事例に」に関する調査研究）

2014年11月30日～12月11日—アメリカ合衆国（北米における医療人類学の研究動向調査）

2015年2月1日～3月15日—ガーナ共和国、イギリス（ガーナ共和国における「西アフリカにおける生権力の複数性——ガーナ南部における結核対策を事例に」にかかる調査研究及びロンドンにおけるアフリカ地域を対象とした医療人類学の研究動向調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（研究スタート支援）「西アフリカにおける生権力の複数性——ガーナ南部における結核対策を事例に」研究代表者、国立民族学博物館共同研究若手「再分配を通じた集団の生成に関する比較民族誌的研究——手続きと多層性に注目して」研究代表者、立命館大学生存学研究センター若手研究者研究協力型プロジェクト「現代社会エスノグラフィ研究会」客員協力研究員、立命館大学国際言語文化研究所萌芽的プロジェクト研究「アフリカの社会と笑い研究会」客員協力研究員

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

IUAES Inter-Congress 2014 Social Programme Sub-Committee Member

・非常勤講師

産業能率大学「文化を知る」、江戸川大学「福祉・医療人類学」、高知大学「医療人類学」（集中講義）

◎学会等の開催

2014年11月8日 日本文化人類学会第3回次世代育成セミナー、国立民族学博物館第3・第4セミナー室

2014年11月22日 日本文化人類学会課題研究懇談会「医療人類学教育の検討」第4回研究会、国立民族学博物館第5・第6セミナー室

山本 睦 [やまもと あつし] ————— 研究員

1978年生。【学歴】埼玉大学教養学部教養学科卒（2001）、埼玉大学大学院文化科学研究科修了（2003）、総合研究大学院大学文化科学研究科単位取得退学（2009）【職歴】日本学術振興会特別研究員PD（2009）、法政大学非常勤講師（2009）、茨城大学非常勤講師（2010）、埼玉大学非常勤講師（2010）、文京学院大学非常勤講師（2012）、国立民族学博物館研究戦略センター機関研究員（2013）、山形大学人文学部助教（2014）【学位】博士（文学）（総合研究大学院大学文化科学研究科 2012）、修士（文化科学）（埼玉大学大学院文化科学研究科 2003）【専攻・専門】アンデス先史学、ラテンアメリカ研究、文化人類学 1) アンデス文明形成期の社会動態、2) 神殿における建設活動と儀礼行為、3) 地域間交流と社会変化の相互関連、4) 地域間移動ルートの形成・維持過程、5) ペルー、とくに地方における文化遺産の管理と活用【所属学会】日本文化人類学会、古代アメリカ学会、Society for American Archaeology

【主要業績】

[博士論文]

山本 睦

2012 「先史アンデス形成期の社会動態——ペルー北部ワンカバンバ川流域社会における社会成員の活動と戦略から」総合研究大学院大学文化科学研究科。

[論文]

山本 睦・伊藤裕子

2013 「ペルー北部とエクアドル南部における形成期の地域間ルートと地域間交流——GISによる加重コストルート分析を用いて」『古代アメリカ』16：1-30。

Yamamoto, A.

2010 Ingatambo: Un sitio estratégico de contacto interregional en la zona norte del Perú. *Boletín de Arqueología PUCP* 12: 25-52.

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

古代アンデスにおける文明形成期の社会動態

・研究の目的、内容

南米ペルーを中心に成立したアンデス文明形成期（紀元前3000年～紀元前後）社会の展開に際して、公共・祭祀建造物をめぐる諸活動や地域間交流が重要な役割をはたしたことは明白である。しかし、両者の関係性についての実証的研究は不十分であるため、ペルー北部地域の考古学調査を通じて、既述の動態的相関を明らかにし、従来の文明論に新たな視座をもたらすことを目的とする。

・成果

2014年度は、8月から9月にかけて、ペルー北部山地のインカワシ市とクテルボ市周辺地域において、広域的な遺跡分布調査を実施した。この成果については、国内の学会で発表した。昨年までに実施したペルー北部地域の調査データを整理・分析し、その成果をもとにして、日本語論文を執筆した。また、同年度12月から3月には、ペルー南部のナスカ市近郊において、地上絵や遺跡の分布にかかわる考古学調査に従事した。

◎出版物による業績

〔論文〕

山本 陸

2014 「先史アンデス形成期における神殿をめぐる人々の活動と戦略——ペルー北部ワンカバンバ川流域のセトルメント・パターンと地域間交流から」『年報人類学研究』4：1-33〔査読有〕。

2015 「先史アンデスにおけるペルー北部チョターノ川流域社会の形成と変遷」『国立民族学博物館研究報告』39(4)：511-573〔査読有〕。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年5月18日 「アンデス文明形成期における神殿をめぐる人々の活動」日本文化人類学会第48回研究大会、幕張メッセ国際会議場（千葉県千葉市）

2014年12月6日 「ペルー北部地域の遺跡踏査——地域間ルート試論」古代アメリカ学会第19回研究大会、名古屋大学東山キャンパス野依学術交流館（愛知県名古屋市）

◎調査活動

・海外調査

2014年8月1日～9月12日—ペルー（ペルー共和国・北部山地における考古学調査）

2014年12月16日～3月27日—ペルー（ナスカ周辺地域における地上絵や遺跡の分布にかかわる考古学調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究(S)）「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」（研究代表者：關 雄二）研究協力者

吉田ゆか子〔よしだ ゆかこ〕—————研究員

1976年生。【学歴】国際基督教大学教養学部卒（2000）、筑波大学地域研究研究科東南アジアコース（修士課程）修了（2002）、筑波大学人文社会科学研究科現代文化・公共政策専攻（博士課程）修了（2012）【職歴】株式会社インテージ マーケティング事業部（2002-2004）、日本学術振興会 特別研究員（DC2）（2009-2010）、筑波大学人文社会系博士特別研究員（2012）、国立民族学博物館先端人類学研究部機関研究員（2012）【学位】博士（学術）（筑波大学2012）、修士（地域研究）（筑波大学2002）【専攻・専門】文化人類学 インドネシア地域研究 芸能研究【所属学会】日本文化人類学会、東方学会、「宗教と社会」学会、the International Union of Anthropological and Ethnological Sciences、International Council for Traditional Music、障害学会

【主要業績】

〔論文〕

吉田ゆか子

2011 「仮の面と仮の胴——バリ島仮面舞踊劇にみる人とモノのアッサンブラージュ」『文化人類学』76(1)：11-32。

2011 「仮面が芸能を育む——バリ島トペン舞踊劇に注目して」床呂郁哉・河合香吏編『ものの人類学』pp.191-210, 京都：京都大学学術出版会。

2009 「バリ島仮面舞踊劇トペン・ワリと『観客』——シアターと儀礼の狭間で」『東方学』117：156-139。

【受賞歴】

2013 日本文化人類学会奨励賞

2011 みんぱく若手セミナー賞

2009 東方学会賞

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

- 1) バリ島天女の舞におけるレプリカの仮面の利用に関する研究
- 2) 観光ショーにおける仮面の利用に関する研究
- 3) バリ島における障害のある役者たちの演劇実践に関する研究
- 4) モノからみるバリ芸能文化のグローバル化に関する研究

・研究の目的、内容

- 1) ケテウェル村の仮面舞踊「天女の舞（topeng legong）」は長い歴史と際立った神聖性においてバリ社会で特別な価値を置かれている奉納芸であり、そこに使われる一連の仮面はご神体としてパヨガン・アグン寺院にて祀られている。この演目は芸術祭などの世俗のイベントに招かれることがあるが、仮面の神聖性を守るため、寺院はレプリカの仮面を作成しそちらで代用している。本研究は、このレプリカの仮面の位置づけがしばしば曖昧であり、かつオリジナルとの境界をかく乱するような側面を有していることに着目する。そして、このレプリカの仮面が天女の舞の実践や地元共同体にどのような影響をもたらしているのかを明らかにし、レプリカや類似品の制作や利用といった営みが有している豊かな可能性について考える。
- 2) バリの村落ではパロンの仮面がご神体として祀られている。バリでは、観光芸能ショーなど世俗の上演にはこれらご神体ではなく、神聖でない仮面を用いることが法令で定められている。しかし実際には、この観光用の仮面が、次第に神聖性を帯びたり、儀礼で地元のご神体の仮面と共演したりというケースがある。本研究は、観光ショー用に生み出された仮面が引き起こす様々な出来事や、人々と仮面の関わり合いを分析し、これまで人間中心的に論じられてきた芸能の観光資源化という現象を再考する。
- 3) バリの演劇では、身体・精神障害を模倣した表現が、頻繁にジョークに用いられる。役者（通常は健常者）は麻痺のある不規則な歩き方や、ナンセンスな物言いを演じ、劇に生き生きとしたニュアンスを添える。このバリで、実際に自ら障害を抱えつつ演劇活動をする者たちがいる。本研究は、彼らの演劇実践の実態、動機、活動実態、その社会的受容を明らかにし、身体の損傷の有り方の社会的文化的多様性を考察する。
- 4) バリ芸能が、世界各地で現地の芸能家によって実践されるようになった現象について、仮面や楽器といったモノの移動の側面から考察する。バリでは、楽器や仮面は神格（あるいはその力）を宿す存在である。これらのモノが新たな土地でどのように扱われ、またその土地のモノの配置（e.g. 住環境）や物質文化や音楽文化にどのように影響され、また現地の人々にどのように働きかけるのか。音や舞や演技だけでなく、それを支える物質文化をも含みこんだ「芸能文化」の越境の問題として、このバリ芸能のグローバル化の現象を問い直す。

・成果

- 1) 昨年度の研究成果を海外の学会（国際伝統音楽評議会 東南アジアのパフォーミング・アーツ部会）にて発表し、英語のプロシーディングにまとめた。また、複製論と関連付けながら東京外国語大学の共同研究会にて口頭発表し、人類学的モノ研究の立場から様々なコメントと課題を得ることができた。
- 2) 昨年度の研究成果を国際学会（IUAES）にて発表した。また、これまでの事例研究の成果を、文化人類学における資源化の理論と接合し、観光人類学に対して議論を開いてゆくための考察を行った。この成果については2015年4月の東京大学の現代人類学研究会における口頭発表にむけて準備した。
- 3) 4月には、国立民族学博物館の共同研究会において、「少数者の表象のポリティクス」というテーマに関連させた口頭発表を行った。そして、上演が単に何かを表象する場であるのではなく、その演技を笑ったり笑わなかったりする観客や共演者たちと「障害」のある演者たちが関係を確かめ合ったり、新たな関係を築いたりする場であることを論じた。夏の調査では、芸能活動を展開する3つの障害者団体のリーダーおよびメンバーにインタビューを行ったほか、上演のビデオ記録および即興劇中の台詞の文字起こしと翻訳を行った。また、健常者の役者、劇団のスタッフや支援者といった周囲の人々のインタビューも行った。これまでの成果を、協力者の田中みわ子氏と共に障害学会でポスター発表し、障害学の立場からの様々なコメントを得ることができた。
- 4) 本年度は、3つの米国のガムランチーム（Galak Tika/ Sekar Jaya/ University of Hawaii）を訪れ、活動状況を調査した。バリの音楽的形式や文化的な要素を取り入れる度合いは、チームによって大きな幅があったが、どのチームにおいてもある程度バリのモノをめぐる信仰を尊重し、楽器への供物の献上などの実践がみられることがわかった。特にSekar Jayaでは社を建て、祈りの場とするなど、本研究にとって興味深い活動がいくつか見られた。また香港大学のチームに関しても指導者にインタビューすることができた。ジャ

カルタ調査では、バリ芸能におけるバリ・ヒンドゥ的な要素（モノをめぐる信仰もここに含まれる）に新たに解釈が加えられ、大多数を占めるムスリムの生徒たちに受け入れられやすいものへと再編されている側面があることがわかった。また、バリ調査ではゴン・クビヤール（ガムランの最も一般的な形式）誕生100周年記念イベントを参与観察した。国内では阿佐ヶ谷バリ舞踊祭および富岡八幡宮の大祭等、主に神社や寺という空間で実施されるバリ芸能イベントを観察した。日本のバリ芸能活動におけるこれらの宗教的な空間の活用のあり方について考察し、翌年の国際伝統音楽評議会での発表へむけて準備を行った。

◎出版物による業績

[共著]

吉田ゆか子

2015 「フィールドでの芸能修行——出来事を引き起こすことと特殊例となること」床呂郁哉編『人はなぜフィールドに行くのか——フィールドワークへの誘い』pp.110-131, 東京：東京外国語大学出版会。

[論文]

Yoshida, Y.

2015 How Replicated Masks Work in Balinese Society: The Case of Topeng Legong. In Mohd. Anis Md. Nor (ed.) *Proceedings of the 3rd Symposium of the ICTM Study Group on Performing Arts of Southeast Asia*, Institute Seni Indonesia Denpasar, Bali, Indonesia [査読有].

[その他]

吉田ゆか子

2014 「文化遺産は誰のもの？——越境する人形劇ワヤン」『月刊みんぱく』38(7)：14-15。

2014 「旅・いろいろ地球人 食べる④ 1人で黙々、という作法」『毎日新聞』毎日新聞8月21日夕刊。

2014 「評論展望 モノの人類学から芸能を考える——バリ島仮面舞踊劇トペンを手がかりとして」『民博通信』145：2-7。

2014 「旅・いろいろ地球人 驚く② 君は何曜日生まれ？」『毎日新聞』3月26日夕刊。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2014年4月12日 「バリの障害者の演劇活動にみる表象のポリティクス——笑いとインペアメントの視点から」『表象のポリティックス——グローバル世界における先住民／少数者を焦点に』

2015年1月31日 「芸能研究とマテリアリティの人類学の交差点——研究会の主旨と背景」『演じる人・モノ・身体——芸能研究とマテリアリティの人類学の交差点』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年5月17日 ‘How Masks Made for Tourist Show Work in Balinese Society: Rethinking Balinese Cultural Tourism.’ International Union of Anthropological and Ethnological Science Inter-Congress 2014, Makuhari Messe, Chiba, Japan

2014年6月13日 ‘How Replicated Masks Work in Balinese Society: The Case of Topeng Legong,’ International Council for Traditional Music, Study Group on Performing Arts of Southeast Asia, Institute Seni Indonesia Denpasar,

2014年11月8日 ポスター発表「インペアメントをもつ身体と笑い——バリ島における演劇実践を事例として（田中みわ子との共同発表）」障害学会、沖縄国際大学

2014年12月14日 「複製がつむぐ天女の舞——インドネシア・バリ島の事例から」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究会『「もの」の人類学的研究(2) 人間／非人間のダイナミクス』東京外国語大学

2015年3月23日 ‘Human and Non-human Agents in Topeng Dance Drama in Bali.’ Exchange Lecture on Culture and Society in Asia and Africa, University of Malaysia Sabah and Tokyo University of Foreign Studies

・展示

東南アジア展示新構築

・広報・社会連携活動

2015年2月15日 「インドネシア・バリ島の聖獣バロンと魔女ランダのいる暮らし——宗教儀礼から観光ショーまで」第372回みんぱくウィークエンド・サロン

◎調査活動

・国内調査

2014年5月30日～6月1日—東京（ガムランスタジオ音の森演奏発表会の調査）

2014年8月2日～8月4日—東京（阿佐ヶ谷バリ舞踊祭の調査）

2014年8月15日～8月16日—東京（富岡八幡宮におけるバリ舞踊の奉納に関する調査）

・海外調査

2014年6月13日～7月16日—インドネシア（バリ芸能文化のグローバル化に関する人類学的研究のための現地調査、国際伝統音楽評議会国際学会において研究発表及び情報収集）

2014年8月22日～9月14日—香港、インドネシア（香港におけるインドネシア芸能実践に関する情報収集及びバリ島における障害のある役者たちの演劇実践に関する人類学的研究のための現地調査）

2014年11月11日～11月22日—アメリカ合衆国（米国を中心とした民族音楽学の動向調査）

2015年2月15日～3月3日—アメリカ合衆国（米国においてバリ芸能実践に関する調査、ハワイ大学においてインドネシア芸能研究に関する動向調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 共同利用・共同研究課題『『もの』の人類学的研究(2)——人間／非人間のダイナミクス』（研究代表者：床呂郁哉）共同研究員、科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究）「音響解析を用いたインドネシア・バリ島のガムランの変遷」（研究代表者：塩川博義）研究協力者

・民間の奨学金および助成金からのプロジェクト

公益財団 財団 アジア・オセニア財団 調査研究・国際交流活動助成 研究課題「バリ島における障害のある役者たちの演劇実践に関する人類学的研究」代表

◎社会活動・館外活動等

・非常勤講師

岡山大学「文化人類学」（集中講義）

プロジェクト研究員

相良啓子 [さがら けいこ] ————— 研究員

【学歴】筑波大学大学院修士課程教育研究科障害児教育専攻修了（1999）、英国セントラル・ランカシャー大学国際手話ろう文化学研究所大学院 MPhil 課程修了（2014）【職歴】株式会社 JTB 本社 IT 企画部（1999）、株式会社 JTB 首都圏新橋支店営業三課バリアフリーツアー推進担当（2002）、英国セントラル・ランカシャー大学国際手話ろう文化学研究所研究官（2010）、国立民族学博物館プロジェクト研究員（2014）【学位】修士（教育研究科障害児教育専攻）（筑波大学大学院 1999）、手話言語学修士（M.Phil.）（セントラルランカシャー大学国際手話言語学・ろう者学研究所（iSLanDS）2014）【専攻・専門】手話言語学類型論・聴覚障害児教育【所属学会】日本手話学会、日本言語学会

【主要業績】

[修士論文]

相良啓子

1999 「聴覚障害学生の障害認識に関する研究」筑波大学大学院教育研究科（障害児教育）。

[M.Phil. Thesis]

Sagara, K.

2014 The Numeral System of Japanese Sign Language from a Cross Linguistic Perspective. University of Central Lancashire.

[論文]

Palfreyman, N., K. Sagara and U. Zeshan

- 2015 Methods in Carrying out Language Typological Research. In E. Orfanidou, B. Woll and G. Morgan (eds.) *Research Methods in Sign Language Studies: A Practical Guide*, 173–192, West Sussex: Wiley-Blackwell.

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本手話の数詞のバリエーションについて——関東地方と近畿地方の数詞「10」、「100」、「1000」に焦点を当てて

・研究の目的、内容

日本手話の数詞「10」、「100」、「1000」にみられる各2種類の変種に焦点を当て、関東地方と近畿地方でどちらの表現がどのように使用されているのか、またその現象にはどのような社会的要因が影響しているのか調査する。さらに、関連する表現について、日本手話と同じグループに属するとされている台湾手話と韓国手話にみられる分布についても例を記述し、整理する。なお、ここでは関東地方で主としてみられる変種をTEN-1、HUNDRED-1、THOUSAND-1、近畿地方で主としてみられる変種をTEN-2、HUNDRED-2、THOUSAND-2と呼ぶことにする。

・成果

関東地方と近畿地方で使われる「1000」の表現と、近畿地方における「10」、「100」、「1000」の表現の違いについて、どのような社会要因があるのかをみるために、Rbrulを用いて検定を行った。「1000」の表現については、関東地方では年齢や性差に有意差が認められなかったが、近畿地方のろう者がTHOUSAND-1よりもTHOUSAND-2の方を使用する傾向があることに対して、有意差 ($P < 0.00002$) が認められた。また、近畿地方については、「10」、「100」、「1000」3つの表現のうち特に「1000」について有意差が認められ ($P < 3.67 \times 10^{-14}$)、「10」、「100」については、年齢による有意差も認められた ($P < 0.048$)。46才以上にTEN-2、HUNDRED-2の表現を用いる人が多く、45才以下ではあまり用いられていないという結果が出た。

佐々木 (2007) によると、台湾では日本時代、台北では東京の聾学校の教師、台南では大阪の聾学校の教師により、手話が普及した。数詞にもこの背景が反映されており、台北ではTEN-1、HUNDRED-1、THOUSAND-1が、台南ではTEN-2、HUNDRED-2、THOUSAND-2が使用されていることが確認できた。韓国手話については、韓国内における地域による違いは得られなかったが、文脈により、TEN-1もしくはTEN-2が使い分けられることがわかった。

◎出版物による業績

[M.Phil. Thesis]

Sagara, K.

- 2014 The Numeral System of Japanese Sign Language from a Cross Linguistic Perspective. University of Central Lancashire.

[論文]

Palfreyman, N., K. Sagara and U. Zeshan

- 2015 Methods in Carrying out Language Typological Research. In E. Orfanidou, B. Woll and G. Morgan (eds.) *Research Methods in Sign Language Studies: A Practical Guide*, 173–192. West Sussex: Wiley-Blackwell.

[その他]

相良啓子

- 2014 「旅いろいろ地球人 組織⑦ 手話で広がる世界」『毎日新聞』11月6日夕刊。
2014 「異聞逸聞 耳が聞こえないからコミュニケーション障害か？」『月刊みんぱく』38(12):21。

Sagara, K.

- 2014 Numeral Systems in Sign Languages Across the World. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 39: 5–7.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2014年10月5日 「手話言語類型論からの知見——いくつかの意味領域に対する通言語的調査の方法論」機関研究効果公開 第3回手話言語と音声言語に関する国際シンポジウム『言語の記述・記録・保存と通モード言語類型論』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年5月1日～3日 (With Palfreyman, N.) ‘Counting the Difference: Variation in the Number Systems of Japanese, Taiwan and South Korean Sign Language,’ New Ways of Analysing Variation Asia-Pacific 3, Victoria University, Wellington, New Zealand

2014年8月28日～29日 ‘Historical Relationship between the Numeral Signs of Japan, Taiwan and South Korea Sign Languages,’ The International Summer School 2014: Current Issues in Sign Language Linguistics (CISL), Charles University, Prague, Czech

2014年11月2日 「日本手話の数詞のバリエーションについて——関東地方と近畿地方の数詞『10』『100』『1000』に焦点を当てて」日本手話学会第40回大会、タワーホール船堀（東京）

2015年1月31日 パネリスト「パネルディスカッション いま、なぜろう通訳者なのか」特定非営利活動法人手話教師センター主催『ろう通訳シンポジウム』桑山ビル（名古屋）

2015年2月1日 パネリスト「パネルディスカッション いま、なぜろう通訳者なのか」特定非営利活動法人手話教師センター主催『ろう通訳シンポジウム』関西学院大学梅田キャンパス

2015年2月14日 パネリスト「パネルディスカッション いま、なぜろう通訳者なのか」特定非営利活動法人手話教師センター主催『ろう通訳シンポジウム』フラクシア品川クリスタルスクエア（東京）

・研究講演

2014年11月11日 「世界の手話における数のしくみ、日本手話系言語における数表現の変化」2014年度東北大学全学教育リレー講義『手話の世界と世界の手話言語☆入門』東北大学川内北キャンパス

◎調査活動

・海外調査

2014年6月26日～7月22日—イギリス（日本手話、台湾手話、韓国手話の歴史言語学研究及びデータベースに関する打ち合わせ）

2014年8月23日～9月1日—チェコ（手話言語学に関する夏期講座の調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

国立民族学博物館学術手話通訳養成事業運営委員

拠点研究員

■人間文化研究機構地域研究推進センター・「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点

竹村嘉晃 [たけむら よしあき] ————— 研究員

【学歴】日本大学芸術学部演劇学科卒（1995）、沖縄県立芸術大学大学院音楽芸術研究科音楽学専攻修士課程修了（2001）、大阪大学大学院人間科学研究科人間科学専攻博士前期課程修了（2003）、大阪大学大学院人間科学研究科人間科学専攻博士後期課程修了（2012）【職歴】独立行政法人日本学術振興会特別研究員（DC2）（2005）、大阪大学国際企画推進本部特任研究員（2008）、和歌山県立医科大学保健看護学部非常勤講師（2009–2013）、国立民族学博物館外来研究員（2010–2014）、奈良大学社会学部非常勤講師（2011–2012）、国立民族学博物館共同研究員（2011–2014）、人間文化研究機構地域研究推進センター・現代インド地域研究国立民族学博物館拠点研究員（2014）【学位】博士（人間科学）（大阪大学大学院 2012）、修士（人間科学）（大阪大学大学院 2003）、修士（音楽学）（沖縄県立芸術大学大学院2001）【専攻・専門】芸能人類学、南アジア地域研究【所属学会】日本文化人類学会、日本南アジア学会、舞踊学会、民族芸術学会、日本スポーツ人類学会、東洋音楽学会、The Congress on Research in Dance

【主要業績】

〔博士論文〕

竹村嘉晃

2012 「神霊に生きる人びとの『現在』——南インド・ケーララ州のテイヤム祭祀の実践者たちをめぐる民族誌的研究」大阪大学大学院人間科学研科。

〔論文〕

竹村嘉晃

2014 「インド・ケーララ州出身者たちの神霊を介した故地とのつながり」細田尚美編『湾岸アラブ諸国における移民労働者——「多外国人国家」の出現と生活実態』pp.229-250, 東京：明石書店。

2012 「鉄道局組合が祀るローカル神——南インド・ケーララ州における神霊信仰の隆盛と『ダルシャン運行』」『民族藝術』28：92-100。

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

南インド社会における身体文化とその担い手たちの社会的世界の変容に関する研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、南インドのケーララ州北部に伝わるテイヤム祭儀を伝統的職業として担う不可触民の実践者たちを照射し、現代社会の動態や祭儀を取り巻く巨視的な位相と、彼らの生計活動や社会とのつながりといった微視的な要素がいかに実践レベルと関係し、影響を与えているのかを彼らの生活世界に足場をおく民族誌的記述から解明することにある。この思考過程を通じて神霊祭祀を「神秘化」することなく、審美的要素や芸態だけを語る芸能論に陥るのでもなく、「浄」「不浄」のカースト・ヒエラルキーのもとに「虐げられた人びと」として枠づけることもなく、グローバル化のなかでわれわれと同時代を生きる彼らの存在と生の営みへの理解を深めることを目指す。また、人類学的視点と舞踊・芸能研究の観点を融合させた方法論のもとで、市場経済原理に対する実践者たちの適応戦略の実態を調査し、彼らが技芸や社会的形態を維持しながらもその実践を創発・変容させていく過程を実践レベルから捉える芸能民族誌の新たな方法論を提示することも試みる。

・成果

南インド・ケーララ州北部のローカルなヒンドゥー社会では、テイヤムと呼ばれる神霊祭祀を照射し、カーストの伝統的職業として神霊の役割を担う実践者集団に密着した長期のフィールドワークをもとに、現代ケーララ社会におけるテイヤム祭儀の受容動向を多角的に考察した。また、実践者たちの間で生じる軋轢や世代間の齟齬、かれらの社会的世界の変容について、祭儀を取り巻くマクロな動向と技芸などのミクロな実践レベルと関連づけながら、神霊に生きる今日の「不可触民」の生の姿を民族誌として『神霊を生きること、その世界』（2015年5月刊行）を執筆した。

◎出版物による業績

〔論文〕

竹村嘉晃

2014 「インド・ケーララ州出身者たちの神霊を介した故地とのつながり」細田尚美編『湾岸アラブ 諸国における移民労働者——「多外国人国家」の出現と生活実態』pp.229-250, 東京：明石書店。

〔書評〕

竹村嘉晃

2015 「書評 山本達也『舞台の上の難民——チベット難民芸能集団の民族誌』」『現代インド研究』5：261-264。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2015年1月24日 「ローカルの伝統からナショナル、ハイブリットなコンテンツまで——シンガポールにおける〈インド芸能〉の発展と文化政策」MINDAS 2014年度第4回合同研究会、国立民族学博物館

・共同研究会

2015年2月21日 「〈インド舞踊〉は国家と踊る——シンガポールにおける文化・芸術政策とインド芸能の発展」『東南アジアのポピュラーカルチャー——アイデンティティ、国家、グローバル化』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年5月18日 ‘Transmission of Local Ritual Performance in the Kerala Diaspora and its Impact of the Life: World of the Practitioners,’ IUAES 2014 with JASCA: the Future with/or Anthropologies, Makuhari Messe, Chiba, Japan

2014年6月22日 「神霊祭祀という文化イベント／ビジネス——湾岸諸国で暮らすケーララ移民の宗教実践と認識の齟齬」、「宗教と社会」学会第22回学術大会パネルセッション『グローバル資本主義を背景とした宗教実践の新展開——南アジア芸能の場合』天理大学

2014年12月7日 ‘Positioning Bharatanatyam in Singapore in the 21st Century: Ethnic/National/South Asian or World Dance?’ International Conference on Bharatanatyam in Singapore 2014: the Emergence, Development & Future Directions of Bharatanatyam in Singapore & Malaysia, National University of Singapore, Singapore

◎社会活動・館外活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構地域研究推進事業 現代インド地域研究国立民族学博物館拠点 拠点構成員、国立民族学博物館若手共同研究「演じる人・モノ・身体——芸能研究とマテリアリティの人類学の交差点」（代表者：吉田ゆかり）共同研究員、科学研究費補助金（基盤研究（B））「インドにおける新しいメディア状況と芸能のグローバル化：文化の環流の人類学的研究」（研究代表者：松川恭子）研究分担者

◎社会活動・館外活動等

・非常勤講師

立命館大学産業社会学部非常勤講師、「スポーツ人類学」「スポーツ方法実習」、摂南大学外国語学部非常勤講師、「多文化の共生」「東南アジア文化論」、関西大学文学部非常勤講師、「南アジア・内陸アジア論1・2」

◎学会の開催

2014年7月19日～23日 8th International Symposium of the International Council for Traditional Music (ICTM) “Music and Minorities” Study Group, National Museum of Ethnology, 実行委員／事務局長

豊山亜希 [とよやま あき]————— 研究員

1977年生。【学歴】近畿大学文芸学部文化学科卒（2000）、関西大学大学院文学研究科哲学専攻修士課程修了（2002）、関西大学大学院文学研究科哲学専攻博士課程後期課程修了（2008）【職歴】関西大学文学部総合情報学部非常勤講師（2007-2012）、関西大学大学院文学研究科「EU-日本学教育研究プログラム」ポストドクトラル・フェロー（2008）、日本学術振興会特別研究員（PD）（2009）、国立民族学博物館外来研究員（2012-2014）、宮城学院女子大学附属キリスト教文化研究所客員研究員（2013-現在）、人間文化研究機構地域研究推進センター・現代インド地域研究国立民族学博物館拠点研究員（2014）【学位】博士（文学）（関西大学 2008）【専攻・専門】インド美術史 1) 植民地インドにおける近代化概念の形成と美術の大衆化、2) 戦間期の南アジア・東南アジアにおける日本製タイルの受容実態、3) 古代インドにおける仏教石窟寺院の消長と社会変容【所属学会】美術史学会、美学会、日本南アジア学会、民族芸術学会、社会経済史学会

【主要業績】

[論文]

豊山亜希

2014 「ハヴェーリーにおける『インド的近代』の表象——植民地インドにおける商業集団マールワリーの変わりゆくアイデンティティ」『多民族社会における宗教と文化』17：3-23。

2012 「『土着の伝統』と『複製の近代』——ハヴェーリー壁画にみる英領インド期の大衆美術とマールワリー・アイデンティティ」『南アジア研究』24：56-80。

Toyoyama, A.

2012 Asian Orientalism: Perceptions of Buddhist Heritage in Japan. In P. Daly and T. Winter (eds.) *Routledge Handbook of Heritage in Asia*, pp.339-349. Oxon: Routledge.

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

植民地インドにおける視覚イメージの消費と日本製タイルの受容に関する美術史的研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、両大戦間期のインドにおいて、日本製の装飾タイルが都市部の中産階級住宅を中心に愛好された事実に注目し、その実態を明らかにすることによって、消費文化とアイデンティティ表象の相関性を理解することにある。

経済史の領域においては近年、当該時期の日印貿易について詳細な研究が進んでいる。しかし、陶磁器の一品目であるタイルへの注目度は決して高くなかった。実際にはタイルは、綿製品・絹製品・マッチなど他の主要輸出品と比較すると、消費市場における現存率がきわめて高く、実証性の高い研究資料である。

本研究においては特に、1) 現存するタイル張建造物の来歴とタイルの施工状況、2) タイル表面に施されたデザイン、3) タイル裏面（解体された建造物からの収集例によって確認可能）に施された商標、の3点に視座を定め、日本製タイルの消費者層とその嗜好性、および戦前期日本のタイル業界におけるインド市場への販売戦略を分析する。これらの考察を通して、両大戦間期という国際情勢の転換期において、インド社会のアイデンティティはいかなる変容を遂げ、そこに日本がどのように介在したのかを、表象文化の観点から明らかにする。

・成果

「現代インド地域研究」推進経費に基づいて、2015年2月から3月にかけて、インド、マレーシア、シンガポールにおいて調査を実施した。日本製タイルは、インドだけでなく東南アジア一帯にも広く流通したことが知られるため、今後の比較研究を視野に入れて調査対象に含めた。いずれの地域においてもイギリス支配期（19世紀から20世紀前半）にいわゆる植民地都市に建てられた歴史建造物について、その様式的展開とタイルの使用に関する調査を実施した。その結果、19世紀に対象地域で受容が進んだイギリス製タイルと比べると、両大戦間期に市場を席卷した日本製タイルは、移住商人など新興の中産階級に消費者層が集中していたこと、また消費者が現地の文化的伝統をタイルのデザインに求めていたことが実体的に把握された。

また同じ経費に基づいて、2014年10月にエジンバラ大学南アジア研究センターにおいてセミナー発表を行い、本研究の成果の一端を紹介した。さらに、科学研究費補助金（若手研究(B)）「植民地インドにおける商業カーサトの邸宅建築に関する基礎的研究」（研究代表者：豊山亜希）に基づき、2014年8月から9月にイギリスのスコットランド国立図書館および大英図書館において文献調査を実施した。特に、植民地政府が刊行した衛生環境や都市計画に関する報告書を重点的に調査した。その結果、19世紀後半に疫病が多発したことを受けて、都市の公衆衛生向上が推進された際に、タイルの積極的使用が推奨されたことを示す資料を多数収集することができた。次年度は、その成果の論文刊行を目指す。

◎出版物による業績

[論文]

豊山亜希

2014 「ハヴェーリーにおける『インド的近代』の表象——植民地インドにおける商業集団マールワーリーの変わりゆくアイデンティティ」『多民族社会における宗教と文化』17：3-23。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・民博研究懇談会

2014年12月10日 「植民地インドにおける日本製マジョリカタイルの受容——公衆衛生、消費、アイデンティティ表象」第262回民博研究懇談会

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年5月25日 「大戦間期のインド建築における日本製マジョリカタイルの受容とその記号性」社会経済史学会第83回全国大会、同志社大学

2014年7月22日 「公衆衛生と民族意識の表象——戦間期マールワーリーの日本製マジョリカタイル受容」科学研究費補助金（基盤研究(B)）「インド商業集団（マールワーリー）の研究——実体と表象への学際的アプローチ」（研究代表者：中谷純江）研究会、追手門学院大阪梅田サテライト

2014年9月17日 「植民地インドと日本製〈マジョリカ〉タイル——公衆衛生と民族意識をめぐる美学」2014年度現代インド・南アジアセミナー、広島大学

2014年10月23日 ‘Aesthetics, Sanitation, and Nationalism: Japanese Majolica Tiles in Late Colonial India,’ “Seminar Series of the Centre for South Asian Studies,” The University of Edinburgh,

Edinburgh, United Kingdom

2014年12月13日 ‘Japanese Majolica Tiles in the Making of Indian Modernism and Nationalism,’ “SNU-INDAS Conference,” India Habitat Centre, New Delhi, India

2015年 1 月22日 「植民地インドにおける近代性の表象と変容——日本製タイルの受容に注目して」NIHU 地域研究推進センター研究員研究会、人間文化研究機構

2015年 3 月22日 「石窟寺院をめぐる西デカンの長期の景観変容——立地環境・建築様式・装飾形式の分析から」2014年度マハーラーシュトラ研究会例会、東京外国語大学本郷サテライト

◎調査活動

・国内調査

2014年 4 月28日—東京（19世紀から20世紀前半において日本およびイギリスで製作された美術工芸資料の熟覧調査）

・海外調査

2014年 8 月20日～9 月 4 日—イギリス（植民地インドにおけるタイルの普及拡大に関する文献調査）

2014年10月21日～10月31日—イギリス（エジンバラ大学南アジア研究センターにおけるセミナー発表および植民地インドにおけるタイルの普及拡大に関する文献調査・資料熟覧調査）

2014年12月13日～12月16日—インド（「現代インド地域研究」推進事業の一環である INDAS-SNU Conference への参加および研究発表）

2015年 2 月12日～3 月 4 日—インド、マレーシア、シンガポール（イギリス統治下のアジアにおけるタイルの普及と日本製タイルの受容実態に関する調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（若手研究（B））「植民地インドにおける商業カーストの邸宅建築に関する基礎的研究」研究代表者、科学研究費（基盤研究（B））「インド商業集団（マールワリー）の研究——実体と表象への学際的アプローチ」（研究代表者：中谷純江）研究分担者、国立民族学博物館文化資源共同研究員、宮城学院女子大学附属キリスト教文化研究所客員研究員

客員教員

■先端人類科学研究部・文化動態研究部門

STIRK, Ian Christopher [スターク、イアン・クリストファー]——教授

1946年生。【学歴】ケンブリッジ大学卒（1967）、北ウェールズ大学教職専門課程修了（1969）、エセックス大学言語学部博士課程単位取得（1978）【職歴】アンカラ大学講師、トリポリ大学（リビア）講師、エセックス大学講師を経て大阪外国語大学外国人教師（1980）、国立民族学博物館併任助教授（1994）、国立民族学博物館先端人類科学研究部客員助教授（2004）【学位】M. A.（エセックス大学 1976）

【主要業績】

[論文]

Stirk, I. C.

2005 「Restoring the naturalness of deduction」『大阪外国語大学英米研究』29：43-61。

2004 「Naturally ad absurdum」『大阪外国語大学英米研究』28：99-109。

2003 「On the Welsh verb system」『大阪外国語大学英米研究』27：19-32。

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

対照言語学の研究

- ・研究の目的、内容

自然言語の統語論的解析、類推（analogy）構成文法の成立過程を考察する。

- ・成果

今年度も、自らの考えのいくつかを統語論（syntax）およびウェールズ語教授法に適用してきた。その結果を論文としてまとめたものを自身のホームページに掲載している。

Rhagarweiniad i' r Iaith Gymraeg ac Ieithyddiaeth — Introduction to the Welsh Language and Linguistics（ウェールズ語およびウェールズ言語学入門、www.iancstirk.com/Teaching//Welsh.html）
Braslun o'r Ynganiad — Sketch of the Pronunciation（ウェールズ語発音の概略、www.iancstirk.com/Teaching/Iaith_Gymraeg_Braslun_Ynganiad.pdf）

Gwers 1 — Lesson 1（レッスン1、www.iancstirk.com/Teaching/Iaith_Gymraeg_1.pdf）
Social expressions（挨拶などの社会生活で使われる表現、www.iancstirk.com/Teaching/Social_expressions.pdf）

■先端人類科学研究部・応用民族学研究部門

中山京子 [なかやま きょうこ] ————— 教授

1972年生。【学歴】東京学芸大学教育学部卒（1990）、東京学芸大学教育学研究科修士課程修了（1997）【職歴】静岡県公立小学校教諭、東京学芸大学附属世田谷小学校教諭を経て、京都ノートルダム女子大学講師（2005）、京都ノートルダム女子大学准教授（2009）、帝京大学教授（2013）【学位】学術博士（総合研究大学院大学 2010）【専攻・専門】社会科教育 国際理解教育【所属学会】日本国際理解教育学会、日本社会科教育学会、全国社会科教育学会、日本移民学会、異文化間教育学会

【主要業績】

[単著]

中山京子

2012 『先住民学習とポストコロニアル人類学』東京：御茶の水書房。

[編著]

中山京子編著

2012 『グアム・サイパン・マリアナ諸島を知るための54章』東京：明石書店。

森茂岳雄・中山京子編著

2008 『日系移民学習の理論と実践——グローバル教育と多文化教育をつなぐ』東京：明石書店。

【受賞歴】

2012 冲永壮一文化学術奨励賞

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

- ・研究課題

文化人類学と教育をつなぐ国際理解教育

- ・研究の目的、内容

本研究では、以下の2つを目的とする。

- 1) 文化人類学と教育が重なる領域「教育人類学」に関する文献を継続して収集し、これまで内外で示されてきた概念および領域の整理をする。その検討をふまえて、現代の「教育人類学」の定義、整理を試みる。
- 2) 1)の中から特に国際理解教育に関わる方法論・内容論に着目し、具体的な教材開発やワークショップ、交流活動を行う。

以上の目的達成にむけて、本館展示を本研究の視点から調査する他、民博研究者へのヒアリングを行う。また、具体的に以下の研究活動を計画している。

- ・共同研究「文化人類学と教育をつなぐ国際理解教育」を申請し、人類学と教育にかかわる専門家による議論を集中的に行う。
- ・日本国際理解教育学会特定課題研究「海外研修・スタディツアーと国際理解教育」（2011～2013年度）チーム

を中心として、教育活動としてのフィールドワークの在り方や教材としての資料の提示や扱い方についての議論を継続する。

- ・ 8月5日開催の国立民族学博物館と日本国際理解教育学会共催による「博学連携教員ワークショップ in 民博——学校と博物館でつくる国際理解教育」(文化資源プロジェクト)においては、「学校と博物館の連携」という枠に限定せず、教育と文化人類学と教育をつなぐ方法を思考するために、これまでのワークショップの在り方を批判的に検討し、問題点や課題の抽出を試みる。
- ・ 民博でリニューアルされた東アジア展示を中心に、展示の構成や内容を分析し、文化人類学と教育をつなぐ「国際理解教育」として、どのように展示を活用することが可能か、教育現場でどのようなテーマで教材開発や授業をすることができるか、検討をする。
- ・ マリアナ諸島先住民民族チャモロのアイデンティティ育成活動の一つとなっている「チャモロダンス」についての調査活動を継続し、教育人類学の視点から論考する。

外部資金の獲得に関しては、科学研究費補助金「グローバル時代における移民学習の教材開発——ポストコロニアルの視点から」(代表：森茂岳雄、2012～2016年度)と連携して本研究を展開することとする。

・成果

共同研究「文化人類学と教育をつなぐ国際理解教育」を申請し不採択となったが、研究協力メンバーと随時意見交換を行い、学際的な研究の課題と可能性を検討することができた。

日本国際理解教育学会特定課題研究「海外研修・スタディツアーと国際理解教育」(2011～2013年度)チームを中心として、教育活動としてのフィールドワークの在り方や教材としての資料の提示や扱い方についての議論を継続し、「スタディツアーにおける学びと変容——グアム・スタディツアーを事例に」国際理解教育学会編集『国際理解教育』20号、明石書店、pp.51-60。(共著)にまとめた。

8月5日開催の国立民族学博物館と日本国際理解教育学会共催による「博学連携教員ワークショップ in 民博——学校と博物館でつくる国際理解教育」においては、ワークショップ10回の成果と課題を確認する作業を開始した。民博で行うワークショップの意味と教員研修の意味を再度検討することにより、実践的研究として分析をする必要が明らかになった。

7月と2月に、日本と歴史的、経済的に関わりが深いものの、学校教育ではほとんど取り上げられていないグアムにおいて、教育人類学の視点からフィールドワークを行った。特に、チャモロダンスの教育的取り組みについて参与観察し、文化と伝統の再生について検討することができた。

外部資金の獲得に関しては、科学研究費補助金「グローバル時代における移民学習の教材開発——ポストコロニアルの視点から」(代表：森茂岳雄、2012～2016年度)と連携し、移民を事例に人類学と教育をつなぐ教材の検討を行った。

◎出版物による業績

[論文]

中山京子

2014 「スタディツアーにおける学びと変容——グアム・スタディツアーを事例に」『国際理解教育』(国際理解教育学会紀要) 20: 51-60 [査読有]。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年7月23日 ‘Educational Activities for Connecting Japan with Guam,’ ‘History Methods: Teaching with Historic Places’, 2014 Guam Teacher Institute, Pacific Historic Parks, Latte of Freedom, Guam

2014年11月22日 ‘The Prospect if Global Citizenship Education in the 21st Century and the Task of Education for International Understanding,’ The 15th Annual Conference on Education for International Understanding at APCEIU, Korea

・研究講演

2014年9月29日 「グアムの歴史と文化」埼玉県立志木高等学校

2014年10月9日 「グアムの歴史と文化」大阪府立茨木西高等学校

2014年12月14日 「カルタ・紙芝居で学ぶ移民の歴史と多文化共生」八王子国際協会主催『市民のための国際理解講座』八王子学園都市センター

2015年2月6日 「多文化共生をめざす内なる国際理解教育への一步」八王子国際協会主催『教員のための国際理解教育ワークショップ』八王子学園都市センター

・研究公演

- 2015年2月15日 ‘East meets West.’ (チャモロダンス公演) チャモロ文化フェスティバル“Dinaña Migagof Chamorro Dance Festival” Guam Historical Village at Gef Pa’go Park in Historic Inalajan
- 2015年2月16日 ‘A Cultural Exchange Gathering at UOG with Professor Michael Lujan Bevacqua.’ (チャモロダンス公演) Organiser: Dr. Micgael Lujan Bevacqua, University of Guam
- 2015年2月16日 ‘East meets West.’ (チャモロダンス公演) Micronesia Shopping Mall

山内直樹 [やまうち なおき] ————— 教授

1947年生。【学歴】早稲田大学第二文学部卒業（1977）【職歴】山内編集事務所設立（1984）、季刊文化誌『is』編集長（1984）【所属学会】文化資源学会

【主要業績】

[共著]

山内直樹・辛島 昇・坂田貞二他

1981 『インド』東京：実業之日本社。

[編著]

山内直樹編

1998 『ぬっとあったものと、ぬっとあるもの』東京：ポラ文化研究所。

[論文]

山内直樹

1976 「中部インド・ビームベトカの岩壁画群Ⅰ～Ⅲ」『考古学ジャーナル』121, 124, 125。

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

広報誌のあり方に関する研究

・研究の目的、内容

現代的なテーマ、ヴィヴィッドな話題・問題を取り上げ、また若手研究者（書き手）の発掘により誌面の活性化をはかる。また、紙媒体の特性を活かした誌面構成を考える。

・成果

特集で現代的なテーマ、問題を意欲的に取り上げたことにより、紙面が活性化した。「今」のことが取り上げられることによって内容がヴィヴィッドになり、ヴィジュアル面においても工夫があった。

■文化資源研究センター・民族学応用教育研究部門

中村嘉志 [なかむら よしゆき] ————— 准教授

1971年生。【学歴】神奈川大学理学部情報科学科卒（1994）、電気通信大学大学院情報システム学研究科博士前期課程修了（1996）、電気通信大学大学院情報システム学研究科博士後期課程退学（1997）【職歴】電気通信大学大学院情報システム学研究科助手（1997）、独立行政法人産業技術総合研究所特別研究員（2002）、独立行政法人産業技術総合研究所研究員（2005）、芝浦工業大学大学院連携大学院客員助教授・客員准教授（2006）、独立行政法人産業技術総合研究所技術研究員（2010）、電気通信大学大学院情報システム学研究科非常勤講師（2010）、国立民族学博物館文化資源研究センター客員准教授（2010）、国士舘大学理工学部准教授（2011）【学位】博士（工学）（電気通信大学 2005）【専攻・専門】情報システム学、情報通信工学、メディア情報学【所属学会】情報処理学会、電子情報通信学会、人工知能学会、IEEE、ACM

【主要業績】

〔分担執筆〕

赤松幹之・荒井民夫・内藤 耕・村上輝康・吉本一穂監修
2012 『サービス工学 51の技術と実践』東京：朝倉書店。

〔論文〕

中村嘉志・濱崎雅弘・石田啓介・松尾 豊・西村拓一
2008 「個人端末を Web 支援システム ID へリンクする一手法の提案」『日本知能情報ファジィ学会誌』20(4)：130-141。
中村嘉志・並松祐子・宮崎伸夫・松尾 豊・西村拓一
2007 「複数の赤外線タグを用いた相対位置関係からのトポロジカルな位置および方向の推定」『情報処理学会論文誌』48(3)：1349-1360。

【受賞歴】

2003 Best Presentation Award, The 29th Annual Conference of the IEEE Industrial Electronics Society (IECON2003)
2003 優秀論文賞、情報処理学会マルチメディア、分散、協調とモバイルシンポジウム (DICOMO2003)
2002 野口賞 (優秀デモンストレーション賞)、情報処理学会マルチメディア、分散、協調とモバイルシンポジウム (DICOMO2002)

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

インタラクティブセンシングのアプローチによる学術資料の情報提供に関する方法論的研究

・研究の目的、内容

昨年度に引き続き、情報展示新構築を推進するため、学術資料の情報提供を来館者に行うためのインタラクティブな情報支援システムの方法論および設計法について、情報工学の側面から実践的に研究・議論する。2012年度から手がけてきたリサーチデスクと呼ばれる机に埋め込み式のみんぱく資料と展示に関する情報支援システム：イメージ・ファインダーについて、利用状況分析を進め、学術研究発表を行うことを本年度の主な研究内容とする。また、引き続きシステムの拡充についても専任教員らと議論する。

・成果

2014年度では、2012年度で運用を開始した本館2階の探究ひろばの情報支援システム：イメージ・ファインダーの利用状況分析を工学的だけでなく社会学的な実験によっても進めた。具体的には、来館者のユーザとしての利用状況を第三者視点で記録して分析し、結果をまとめて2014年6月に開催された日本展示学会第33回研究大会にて対外的に学術研究発表を行った。また、社会学的な見地からシステムと広場の被験者実験を組み立て、2014年8月に実施した。2014年8月末より1年間、本務の在外研究により国内不在のため国立民族学博物館での実作業は進められてはいないが、8月の被験者実験で得られたデータの分析結果は、2015年6月に開催されるJSAI2015（第30回人工知能学会全国大会）にて共著者が発表予定である。これにより、国立民族学博物館の研究推進ならびに広報の一助をなした。

◎口頭発表・展示・その他の業績

2014年6月22日 「仮想的な構造展示手法を用いた展示物提示システムの定点観測による利用状況分析」（中村嘉志・Harry Vermeulen・高橋 徹・中川 隆・福岡正太・野林厚志）日本展示学会第33回研究大会、三重県総合博物館

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

情報処理学会 ヒューマンコンピュータインタラクション研究会運営委員、日本ソフトウェア科学会第22回インタラクティブシステムとソフトウェアに関するワークショップ運営委員

・客員研究員

ドイツ人工知能研究センター（DFKI）客員研究員（2014年9月～2015年8月）

平井康之 [ひらい やすゆき] ————— 准教授

1961年生。【学歴】京都市立芸術大学デザインコース卒（1983）、英国王立芸術大学院修士課程修了（1992）【職歴】コクヨ株式会社本社設計部（1983）、コクヨ株式会社家具事業本部オフィス家具部商品開発課（1988）、コクヨ株式会社人事部人材開発課付（1990）、コクヨ株式会社オフィス家具事業本部商品開発部商品開発室主任（1992）、コクヨ株式会社オフィス家具事業本部商品開発部商品戦略グループ課長補佐（1995）、コクヨ株式会社オフィス家具事業本部商品開発部商品戦略グループ課長（1997）、IDEO Product Development Senior Designer（1997）、IDEO Product Development Grand Rapids Studio（米国）Senior Designer（1998）、九州芸術工科大学芸術工学部助教授（2000）、九州大学大学院芸術工学研究院助教授（2003）、九州大学大学院芸術工学研究院准教授（2007）【学位】修士（英国王立芸術大学院 1992）【専攻・専門】デザイン専攻【所属学会】日本インテリア学会、日本デザイン学会、芸術工学会

【主要業績】

[監修]

平井康之

2006 『インクルーシブデザインハンドブック』財団法人たんぽぽの家編，奈良：財団法人たんぽぽの家。

[共著]

ジュリア・カセム・塩瀬隆之・森下静香・水野大二郎・小島清樹・荒井利春・岡崎智美・梅田亜由美・小池 慎・田邊友香・木下洋二郎・家成俊勝・桑原あきら著

2014 『インクルーシブデザイン』京都：学芸出版社。

[論文]

Elokla, N., Y. Hirai and Y. Morita

2010 Emotion Measurement: A Proposal for Measuring User's Kansei. *Journal of Kansei Engineering and Emotional Research International Conference*, pp.2281-2292.

【受賞歴】

- 2014 2014年度グッドデザイン賞（研究活動・研究手法カテゴリー）
- 2014 第8回キッズデザイン賞（子ども視点の安全安心デザイン 子ども部門）
- 2013 「ユニバーサル都市・福岡賞 みんなにやさしい部門」最優秀賞（こども×くすり×デザイン実行委員会）
- 2013 The Include Asia Conference Awards「Champion of Inclusive Design」賞
- 2013 IAUD アウォード2013 入賞「みんなの美術的プロジェクト」
- 2010 第4回キッズデザイン賞（ソーシャルキッズサポート部門）
- 2009 2009年度グッドデザイン賞（パブリックコミュニケーションデザイン部門）
- 2009 第3回キッズデザイン賞（コミュニケーションデザイン部門）
- 2008 2008年度グッドデザイン賞（子どもの服薬に関するデザイン研究、こども＋くすり＋デザイン）
- 2008 第2回キッズデザイン賞（リサーチ部門、子どもの服薬に関するデザイン研究、こども＋くすり＋デザイン）
- 2003 三菱オスラム LED デザインコンテスト審査員奨励賞
- 2002 富山プロダクトデザインコンペティション入選
- 2002 2002年度国際デザイン年鑑（英国）掲載（審査付、Full Metal Jacket Chair）
- 1996 1996年度グッドデザイン賞（シナジアシリーズ）
- 1996 海南デザインコンペティション大賞（健康器具バンボレオ）
- 1996 1996年度レッド・ドット賞〈ドイツ・エッセンデザインセンター〉（インタープレイスシリーズ）
- 1994 1994年度グッドデザイン賞（インタープレイスシリーズ）
- 1993 第2回旭川国際家具デザインコンペティション入選（インタープレイスシリーズ）
- 1993 コクヨ株式会社功労賞（インタープレイスシリーズ）
- 1992 1992年度国際デザイン年鑑（英国）掲載（審査付、Perch Chair, Stacking Table）
- 1991 1991 Office Design Competition, EIMU, Milano, Italy 入選

【2014年度の活動報告】

◎各研究

・研究課題

博物館を中心とした公共空間におけるインクルーシブデザインの理論と方法に関する実践的研究

・研究の目的、内容

本研究では、民博が目指すユニバーサルミュージアムの次のステップとしての次世代ユニバーサルミュージアム構築にむけて、多様な来館者が問題なくアクセスでき快適に観覧できるだけでなく、展示空間における知覚鑑賞が可能となる展示デザインの評価手法の開発を行う。具体的には、これまでのユニバーサルミュージアムの議論を整理し、新たに展示資料や環境およびスタッフサービスなど既存の展示鑑賞を構成する諸要素について調査を行う。また多様な来館者の視点から、展示空間体験を調査し相互比較分析を行う。その結果をもとに課題を抽出、展示デザインの総合的なプロトタイプを制作し、最終的に知覚鑑賞に関する指標を作成することを目的とする。

・成果

本研究では、ユニバーサルミュージアムマトリクスに関する研究と、そのひとつの解決策のプロトタイプであるデジタル触地図の評価・実証実験と特許申請が本年度の成果である。これまで培ってきた多様な障がい者の気づきデータベースをもとに、アクセスだけではなく知覚鑑賞も含めて評価する指標づくりを行い、2015年1月に明治大学で開催された国際学会ミュージアム2015にて発表を行った。

デジタル触地図に関しては、2014年12月にその特許性が認められ、特許申請を行った。視覚障がいユーザーによる評価実験、ならびに2015年1月から2階受付の館内案内マップ前に試作機を約1か月設置し、実証実験を行った。その結果をもとにした修正に加え、視覚障がいユーザーだけではなく多様な利用者を想定した本体ボディの原寸デザインも合わせて行い、最終試作機を完成した。

◎出版物による業績

[監修]

ジュリア・カセム著、平井康之監修、ホートン・秋穂訳

2014 『「インクルーシブデザイン」という発想 排除しないプロセスのデザイン』東京：フィルムアート社。

[共著]

ジュリア・カセム・塩瀬隆之・森下静香・水野大二郎・小島清樹・荒井利春・岡崎智美・梅田亜由美・小池 慎・田邊友香・木下洋二郎・家成俊勝・桑原あきら

2014 『インクルーシブデザイン』京都：学芸出版社。

[その他]

平井康之

2014 「人間学のキーワード インクルーシブデザイン」『月刊みんぱく』38(9)：20。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年1月14日 「Study on the Evaluation of Universal Museum」大妻女子大学博物館・国立臺北教育大学・国立歴史博物館・全日本博物館学会・東京国立博物館・明治大学文学部・レスター大学博物館学研究室主催『Museum 2015 自己変革する博物館——変化し続ける組織づくり』明治大学駿河台校舎

・研究講演

2014年9月11日 「デザイン思考とは？」公益財団法人北九州産業学術推進機構主催、第130回産学交流サロン「ひびきのサロン」『デザイン思考セミナー』fabbitt(北九州市)

2015年3月12日 「介護分野におけるデザイン思考の活用と成果」公益財団法人北九州産業学術推進機構主催、第136回産学交流サロン「ひびきのサロン」『デザイン思考セミナー Part 2』北九州学術研究都市産学連携センター2階研修室

2015年3月28日 「高齢者の視点からのソーシャルインクルージョンCOI」九州大学大学院芸術工学研究院・九州大学産学官連携本部主催『高齢者の視点からのソーシャルインクルージョンCOI——高齢者イノベーションのプロジェクト報告』JR博多シティ会議室9F大会議室2

・広報・社会連携活動

2014年8月8日 出演「子ども×バリバラ “学校をデザインするプロジェクト” (前編)」『バリバラ』NHK E

テレ
2014年8月15日 出演「子ども×バリバラ “学校をデザインするプロジェクト”（後編）」『バリバラ』NHK E
テレ

・特許出願

2014年12月26日 「案内装置」特許申請（発明者：平井康之・富本浩一郎・吉田憲司・日高真吾・山中由里子）

◎社会活動・館外活動等

・非常勤講師

放送大学面接授業「欧州のユニバーサルデザイン」（集中講義）、明石工業高等専門学校「インクルーシブデザイン」

特別客員教員

■先端人類科学研究部・社会環境研究部門

末成道男 [すえなり みちお]——教授

1938年生。【学歴】東京大学教養学部卒（1962）、東京大学大学院生物系研究修士課程修了（1964）、東京大学大学院社会学研究科文化人類学専攻博士課程単位取得満期退学（1970）【職歴】聖心女子大学文学部専任講師（1972）、聖心女子大学文学部助教授（1975）、聖心女子大学文学部教授（1983）、東京大学東洋文化研究所教授（1990）、東洋大学社会学部教授（1998）、東洋文庫研究員（1998）、国立民族学博物館先端人類学研究部特別客員教員（2013）【学位】社会学博士（東京大学社会学系大学院 1975）、文学修士（東京大学人文系大学院 1964）【専攻・専門】社会人類学・東アジアの社会と祖先祭祀（とくに親族。地域集団の構造と宗教）【所属学会】日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

末成道男

1998 『ベトナムの祖先祭祀——潮曲の社会生活』東京：風響社。

1983 『台湾アミ族の社会組織と変化』東京：東京大学出版会。

[編著]

末成道男

1995 『中国文化人類学文献解題』東京：東京大学出版会。

【受賞歴】

1975 第8回澁澤賞

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

東アジアにおける祖先祭祀の変動に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

1) これまで行ってきた社会人類学調査（台湾、韓国、ベトナム）の映像・画像資料の整理。デジタル化については、かなり進捗しているため、その注釈、分析、小論文執筆などを行う。

2) 上記作業の過程で、問題点や変化を確認するため、条件の許す範囲で、短期（1～3か月程度）の再調査を行う。

3) 機関研究「中国における家族・民族・国家ディスコースの生成と実態」へ参加し、東アジア人類学における中国研究の位置づけを考究する。

・成果

以下の論文集および論文を編集、執筆した。

◎出版物による業績

[共編著]

末成道男・劉 志偉・麻 国慶編

2014 『人類学と歴史』（第一屆東亜人類学論壇報告集）北京：北京社会科学文芸出版社（上巻：中文，下巻：日文）。

韓 敏・末成道男編

2014 『中国社会的家族・民族・国家の物語及其動態——東亜人類学者理論探索』（Senri Ethnological Studies 90）大阪：国立民族学博物館 [査読有]。

[論文]

末成道男

2014 「2013年七夕に21世紀初頭の台湾原住民研究を振り返る」『台湾原住民研究の射程——接合された過去と現在』 pp.369-386, 日本順益台湾原住民研究会。

2014 「中華漢族の家族和家——東亜人類学調査之所見」韓 敏・末成道男編『中国社会的家族・民族・国家の物語及其動態——東亜人類学者理論探索』（Senri Ethnological Studies 90） pp.19-29, 国立民族学博物館 [査読有]。

2014 「導言」末成道男・劉 志偉・麻 国慶編『人類学と歴史』（第一屆東亜人類学論壇報告集） pp.3-19, 北京：社会科学文芸出版社。

2014 「人類学と史学在家譜研究方面的不同」末成道男・劉 志偉・麻 国慶編『人類学と歴史』（第一屆東亜人類学論壇報告集） pp.43-49, 北京：社会科学文芸出版社。

古谷嘉章 [ふるや よしあき]—————教授

1956年生。【学歴】東京大学教養学部教養学科卒（1980）、東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学（1986）【職歴】東京大学助手（1988）、九州大学助教授（1989）、九州大学教授（2002）【学位】博士（学術）（東京大学大学院総合文化研究科 1992）、社会学修士（1982、東京大学大学院）【専攻・専門】文化人類学【所属学会】日本文化人類学会、日本ラテンアメリカ学会、American Anthropological Association

【主要業績】

[単著]

古谷嘉章

2003 『憑依と語り』福岡：九州大学出版会。

2001 『異種混淆の近代と人類学』京都：人文書院。

[論文]

古谷嘉章

2010 「物質性的人类学に向けて」『社会人類学年報』 36：1-23。

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

現代社会における先史文化の物質性についての研究

・研究の目的、内容

過去の時代に生きた人々の生活の営みは、現在でも物質的に存在しているが、その様態は様々である。本研究は、先史文化すなわち歴史資料の存在しない過去の社会に生きていた人々の文化が、現代社会において物質的に存在している（あるいは存在しなくなっている）様態について、人類学的に分析することを目的とする。具体的には、一方で、考古学的調査研究を対象として、他方で、現代の世界各地の社会において「先史文化がどのように物質的に存在しているか」を対象として、人類学的に研究する。

前年度より継続の科学研究費補助金・基盤研究(C)「現代アートを用いての先史文化理解と先史文化を用いての現代アート制作の人類学的研究」の研究代表者として、船橋市飛ノ台史跡公園博物館における「縄文コンテナラリー展」をひきつづき調査するほか、国内2か所（青森市、岩手県一戸市・滝沢村）において「現代社会における縄文文化の意味づけと利用」の様態についてフィールドワークを行い、さらに連合王国2か所（セ

インズベリー視覚芸術センター、大英博物館）において、先史文化と現代アートのあいだに表われつつある新しい関係の実態について調査を行う。

・成果

民博共同研究「物質性の人類学——物性・感覚性・存在論を焦点として」を組織し、3回の研究会を主宰した（内容の一部は「世界は物質の流れのなかにある」『民博通信』146号に掲載した）。

ブラジルおよび日本における「現代社会における先史文化」についての調査にもとづき、IUAES 2014において招待発表を行った（Inheriting the Prehistoric Past, Artistically: Two Case Studies）。

船橋市飛ノ台史跡公園博物館における「縄文コンテンポラリー展」に前年から引き続いて協力し、企画段階から展覧会の全体について調査すると同時に、同展カタログに展覧会レビュー論文を日本語および英語で掲載した（「イノチを生む動く線とリクツが生む複雑な形」ならびに Moving Lines engender Life / Complicated Forms are generated by Logic, 『縄文の手・現代の手』）。

科学研究費補助金・基盤研究(C)「現代アートを用いての先史文化理解と先史文化を用いての現代アート制作の人類学的研究」の研究代表者として、船橋市飛ノ台史跡公園博物館のほか、青森県（特別史跡三内丸山遺跡および縄文時遊館、青森県立美術館、小牧野遺跡、青森県立郷土館等）においてフィールドワークを行い、「現代社会における縄文文化の意味づけと利用」の様態について具体的かつ詳細に調査を実施した。また連合王国（Sainsbury Centre for Visual Arts, University of East Anglia; Museum of Archaeology and Anthropology, University of Cambridge; British Museum）において「現代社会における先史文化の物質性」について調査を行い、UEAにおいてはセミナーで研究報告を行った。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年5月16日 ‘Inheriting the Prehistoric Past, Artistically: Two Case Studies.’ IUAES 2014、幕張メッセ

森山 工 [もりやま たくみ] ————— 教授

【学歴】 東京大学教養学部教養学科卒（1984）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1986）、東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了（1994）【職歴】 広島市立大学国際学部講師（1994）、広島市立大学国際学部助教授（1997）、東京大学大学院総合文化研究科助教授（2000）、東京大学大学院総合文化研究科教授（2012）【学位】 博士（学術）（東京大学大学院、1994）、修士（社会学）（東京大学大学院、1986）【専攻・専門】 文化人類学、マダガスカル地域文化研究【所属学会】 日本文化人類学会、日本アフリカ学会、日本オセアニア学会

【主要業績】

〔編著〕

森山 工・飯田 卓・深澤秀夫編著

2013 『マダガスカルを知るための62章』 東京：明石書店。

〔論文〕

Moriyama, T.

2013 Cultural Resource in Action: Mobilization of Culture in Madagascar under French Colonial Rule. *Japanese Review of Cultural Anthropology* 14: 31-53.

〔翻訳〕

森山 工訳

2014 『贈与論 他二篇』（マルセル・モース著）東京：岩波書店（岩波文庫）。

【受賞歴】

1997 第25回澁澤賞

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

葬送と遺体の「所有」に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究計画は、マダガスカル中央高地北東部の農村地域における現地調査にもとづき、国家独立後の農村開発事業の影響によって変化しつつある葬送の実態を明らかにするとともに、そこにおいて遺体を「所有する」ということが持つようになった社会的意義を解明するものである。遺体の「所有」をめぐるのは、当該の死者に連なる過去、および当該の死者から連なる過去によって現在を正当化するという観点から、その「所有」のあり方を考察する。マダガスカルについては、1988年以来断続的に行っている現地調査を継続するとともに、マダガスカル以外の他地域についても歴史学的・人類学的な文献を精査することにより、比較論的な視角から考察をほどこす。

・成果

2014年度は、諸般の事情によりマダガスカルにおける現地調査を実施することができなかった。それを補うべく、上記の「研究の目的、内容」に応じた文献による調査を適宜行うとともに、「遺体の『所有』」という研究課題と直接的に関係するものではないながら、「所有」を取り巻く問題群として「贈与」と「交換」に関する人類学的知見を考察し、以下の成果を発表した。

◎出版物による業績

[翻訳]

森山 工訳

2014 『贈与論 他二篇』（マルセル・モース著）東京：岩波書店（岩波文庫）。

[その他]

森山 工 「訳者解説——マルセル・モースという『場所』」 pp.467-489, 森山 工訳『贈与論 他二篇』（マルセル・モース著）東京：岩波書店（岩波文庫）。

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

公益信託澁澤民族学振興基金運営委員、文部科学省教科用図書検定調査審議会専門委員

■先端人類科学研究部・文化動態研究部門

佐々木利和 [ささき としかず]——教授

1948年生。【学歴】國學院大學文学部文学科卒（1976）、法政大学大学院人文科学研究科日本史学修士課程修了（1979）【職歴】東京国立博物館（1969）、文化庁（2002）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2006）、北海道大学アイヌ・先住民研究センター教授（2010）【学位】博士（文学）（早稲田大学 2000）【専攻・専門】日本近世史、アイヌ民族史【所属学会】日本文化人類学会、日本考古学会

【主要業績】

[単著]

佐々木利和

2004 『アイヌ絵誌の研究』千葉：草風館。

[共編]

佐々木利和・ビルギト・マヤ編

2003-2006 『在独日本文化財総合目録1～3』東京：国書刊行会。

[学位論文]

佐々木利和

2000 「アイヌ絵誌の研究」早稲田大学。

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

民族学博物館におけるアイヌ文化展示の研究

・研究の目的、内容

民博の展示改定計画のなかで、アイヌ文化に関わるそれをいかに行うかを検討する。とりわけ、東大からのア

アイヌ資料については精査しておく必要がある。東大のアイヌ資料の大半は民博に収蔵されているが、アイヌ絵等の貴重作品はなお東大にある。これらは歴史性を踏まえた展示に欠くことができないものである。

・成果

本年度は東大総合博物館保管『蝦夷生計圖説』について精査した。この作品は作者村上嶋之允の養子である村上貞助が、作者の意を受けて増補したもので、18世紀末のアイヌの生業を知るうえで欠くことができないものである。今回の調査において、東大本は村上貞助の自筆本であることが確認され、資料として極めて信頼性が高いことが明らかとなった。

山田孝子 [やまだ たかこ] ————— 教授

【学歴】 京都大学理学部数学科卒（1970）、京都大学大学院理学研究科動物学専攻博士課程単位修得退学（1977）【職歴】 京都大学総合人間学部助教授（1997）、京都大学大学院人間・環境学研究科教授（2003）、京都大学名誉教授（2012）【学位】 博士（理学）（京都大学 1983）【専攻・専門】 文化人類学、認識人類学、シャマニズム研究【所属学会】 日本文化人類学会、日本人類学会、American Anthropological Association、International Association for Academic Shamanistic Research

【主要業績】

[単著]

山田孝子

2012 『南島の自然誌——変わりゆく人—植物関係』 京都：昭和堂。

2009 『ラダック——西チベットにおける病いと治療の民族誌』 京都：京都大学学術出版会。

1993 『アイヌの世界観——「ことば」から読む自然と宇宙』（講談社選書メチエ） 東京：講談社。

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

多文化空間におけるミクロ・リージョナル共同性構築・維持

・研究の目的、内容

これまでの研究により、1990年代以降の社会状況は、文化的同質性をもたらすとされた近代化やグローバル化の予想に反し、ローカルな文化の価値の見直しと、それにもとづく共同性とコミュニティの再構築に特徴があるという知見を得てきた。これを踏まえ、本研究は、チベット難民をはじめとする越境した人々に焦点をあて、ホスト社会の多文化空間のなかで、どのように自分たちのコミュニティを作り出していくのか、共同性構築と維持の原理を解明することを目的とする。

2013年度と同様に、科学研究費助成事業（基盤研究（B）「多文化空間に生きる越境者の共同性再構築に関する地域間比較研究」課題番号24310181、研究代表者：山田孝子）との連携により、比較の視点から調査研究を進めるとともに、この研究の一環として、2014年12月には、国際ワークショップ「人の移動と地域的共同性の再構築」を開催し、ミクロ・リージョナルな共同性構築・維持の原理についての考察を深化させる。

・成果

JSPS 科研費24310181により、2014年 6月26日～7月18日にかけてインド、ラダックで開催されるダライ・ラマによるカーラ・チャクラ儀礼を対象とするフィールド調査を実施し、カーラ・チャクラ儀礼のもつ宗教的意味はもちろんのこと、神々の実在性を顕現させる儀礼の式次第や荘厳さなどの典礼構造により、この儀礼が、チベット仏教圏におけるダライ・ラマを核とする連帯性を更新・強化させる役割を担っているという知見を得た。さらに、この研究の一環として、12月5日～7日には、国際ワークショップ「人の移動と民族的／地域的共同性の再構築（Migration and the Remaking of Ethnic/Micro-Regional Connectedness）」を国立民族学博物館、京都大学稲盛会館を会場に、JSPS 科研費（課題番号24310181）とCIAS 共同利用・共同研究プロジェクト「移動と宗教実践——地域社会の動態に関する比較研究」（2013～2014年度、代表：小島敬裕）との共同開催、および館長リーダーシップ経費による補助のもと実施した。日本人研究者7名、モンゴル、タイ、ロシア、スウェーデンからそれぞれ1名、カナダと中国四川省からのチベット人2名の計13名の研究発表により、多角的、領域横断的に、人の移動という動態をキーワードに共同性再構築の多様な事例が提示され、その共通性と個性が明らかになった。

◎出版物による業績

[論文]

Yamada, T.

- 2015 Continuity of Shamanism Among the Ladakhi and the Sakha. In D. Eigner and J. Kremer (eds.) *Transformation of Consciousness: Potentials for Our Future*, pp.163-182. Kathmandu: Vajra Books.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2014年12月6日 ‘Leadership and Empathy in the Remaking of Communal Connectedness among Tibetans in Toronto.’ International Workshop on “Migration and the Remaking of Ethnic/ Micro-Regional Connectedness,” National Museum of Ethnology [JSPS科研費(課題番号: 24310181)、CIAS共同利用・共同研究プロジェクト「移動と宗教実践——地域社会の動態に関する比較研究」(代表: 小島敬裕)との共催、国立民族学博物館2014年度館長リーダーシップ経費]

2015年3月26日 「ホスト社会における難民の自己再定置と共同性再構築・維持——トロント・チベット人社会の事例から」第20回生態人類学会研究大会、仙北市田沢湖公民館大集会室・プラザホテル山麓荘大会議室、大会事務局東京大学人類生態学教室

陳 天璽 [チェン ティエンシ] ————— 准教授

1971年生。【学歴】筑波大学第三学群国際関係学類卒(1994)、香港中文大学国際交流計画学部修了(1995)、筑波大学大学院国際政治経済学研究科博士前期課程修了(1996)、筑波大学大学院国際政治経済学研究科博士後期課程修了(2000)【職歴】ハーバード大学フェアバンクセンター東アジア研究所客員研究員(1997)、筑波大学社会科学系日本学術振興会特別研究員(1999)、ハーバード大学法学部東アジア法律研究所客員研究員(1999)、東京大学総合文化研究科日本学術振興会特別研究員(2001)、杏林大学社会学科非常勤講師(2001)、国立民族学博物館先端民族学研究部助教授(2003)、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授(2004)、国立民族学博物館民族社会研究部准教授(2008)、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授(2010)【学位】国際政治経済学博士(筑波大学大学院博士課程国際政治経済学研究科 2000)【専攻・専門】文化人類学、移民・移動者研究【所属学会】移民政策学会、日本華僑華人学会、American Anthropology Association、日本文化人類学会、アジア政経学会

【主要業績】

[単著]

陳 天璽

2011 『無国籍』(新潮文庫) 東京: 新潮文庫。

[編著]

陳 天璽・近藤 敦・小森宏美・佐々木てる編

2012 『越境とアイデンティフィケーション——国籍・パスポート・IDカード』東京: 新曜社。

陳 天璽編

2010 『忘れられた人々——日本の「無国籍」者』東京: 明石書店。

【受賞歴】

2002 第1回井植記念「アジア太平洋研究奨励賞」

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アジアにおける移民と文化

・研究の目的、内容

民博の中国展示場の「華僑・華人」コーナー、日本展示場の「多みんぞくニホン」コーナーのリニューアルオープンの一環として企画されているイベントでの研究発表、華僑・華人はじめアジアにおける移民の文化をテ

ーマとした電子ガイドの企画編集、展示場体験コーナーのモニタリング、情報追加などを行う。

また、共同研究会「人の移動と身分証明の人類学」の最終年度にあたり、移民の身分証明に着目した資料収集、インタビュー調査を行い、身分証明が人の移動に与える影響について明らかにする。

・成果

本年度は、東アジア展示場のリニューアルオープンに関連したイベント、例えば2014年4月19日に開催された、第431回みんぱくゼミナール「世界の華僑・華人と“故郷”」の講演を行ったほか、展示場体験コーナーのモニタリングや修正、情報追加などの作業を定期的に行った。ほかにも、同展示場についての紹介講演を、横浜商科大学「中華街まちなかキャンパス」において行った。

この他、2015年5月に千葉で行われたIUAESのパネルにおいて日本における無国籍者について、6月にジュネーブで行われたUNHCR-NGO コンサルテーションにおいて無国籍問題について、8月パナマで行われた世界華僑華人学会では横浜中華街における新華僑が街に与える影響について、9月にハーグで行われた無国籍グローバルフォーラムでは無国籍者の支援について、11月に早稲田大学で行われた日本華僑華人学会では華僑2世のアイデンティティについて発表を行った。

この他にも、日本におけるアジアの移民の2世の国籍問題について、インタビュー調査を行った。

◎出版物による業績

[論文]

陳 天璽

2014 「無国籍」山下晋司編『公共人類学』pp.205-223, 東京：東京大学出版会。

2014 「中華学校の変容と華僑華人研究への問い」『華僑華人研究』（特集 日本華僑華人学会設立10周年記念シンポジウム 華僑華人研究の回顧と展望）11：66-70。

2014 「無国籍状態の人から国籍・戸籍を再考する」『比較日本文化研究』17：29-47。

[書評]

Chen, T. (Lara)

2014 Book review: Creation of Culture and Identity of Ethnic Chinese in Japan: Chinese School, Lion Dance, Guandi Temple, Overseas Chinese History Museum, written by Yuling Zhang. *Journal of Chinese Overseas* 10(1): 118-120.

[その他]

陳 天璽

2014 「いくつもの『故郷』の融和」『月刊みんぱく』38(5)：8-9。

2014 「在米華人の故郷の在り処——国立民族博物館に寄贈された一枚の剪紙」『月刊 東亜』2014(6)：74-75。

2014 「中華学校の子どもたちにみるニホン」『月刊みんぱく』38(8)：6。

2014 「グローバル移動時代の領事ホットライン」『月刊 東亜』2014(9)：86-87。

2014 「越境時代の身分証明」『民博通信』146：18-19。

2014 「特別企画 無国籍というはざま 無国籍だった私」『法学セミナー』717：40-43。

2014 「真夏の中のヒマワリ——国家に揺らされて」『現代中国』プロジェクト著『Views on China：中国の今、プロが観る 政策研究報告「現代中国」プロジェクトWEB論考集3』pp.46-50, 公益財団法人 東京財団。

2014 「無国籍のドクター・アクションノフ氏永眠」『月刊 東亜』2014(12)：80-81。

2015 「世界を移動するチャイニーズ」『月刊 東亜』2015(3)：86-87。

2015 「NPO 法人無国籍ネットワークの代表『日本にも無国籍者がいることを知って。』」『国連 UNHCR 協会公式ブログ チャリティ通信』2015年1月24日 (<http://www.japanforunhcr.org/charity-blog/?p=1196>)。

2015 「なんみん応援隊インタビュー Vol.6 無国籍者に寄り添う 陳天璽さん」『国連難民高等弁務官駐日事務所 なんみん応援隊』(<http://unhcr.or.jp/ouentai/interview/ouentai-interview06.html>)。

2015 「無国籍の人が生きやすいよう支える」『女のしんぶん』（I 女性会議中央本部）2015年1月31日 (http://www.joseikaigi.com/_src/sc2980/2015_0131s.pdf)。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年5月11日 「第2部 パネルディスカッション」（船曳建夫・與那覇 潤・陳 天璽・小川さやか）日本文化

人類学会50周年記念公開シンポジウム『人類学の明日、人類学との明日——「いま・ここ」から考える』東京大学駒場キャンパス

2014年 5月16日 ‘The Stateless in Japan: their identity and identification,’ Invited Session: Public Education Initiative: Mobilities, Migrations and Displacements, IUAES 2014 with JASCA, Makuhari Messe, Chiba

2014年 5月24日 「分科会 2：難民 国内外の難民の状況を通じて健康支援を考える」第29回日本国際保健医療学会 東日本地方会「マイノリティと健康——いのちの格差をどう縮めていくか」国立国際医療研究センター

2014年 6月19日 ‘A Personal Story of Overcoming Statelessness,’ Panel chaired by Chris Nash and Mark Manly, Invited Session: Campaigning to End Statelessness, UNHCR Annual Consultations with NGOs, Geneva

2014年 6月21日 ‘Officially Invisible: The Stateless (mukokusekisha) and the Unregistered (mukosekisha),’ Panel chaired by David Chapman, Invited Session: Identifying Self: Contemporary Japan and the Koseki (II), Asian Studies Conference Japan, Sophia University, Tokyo

2014年 8月 8日 ‘The Impact of New Immigrants on Yokohama Chinatown,’ Panel chaired by Kathleen López, Invited Session: The Impact of New Immigrants on Yokohama Chinatown, International Society for the Studies of Chinese Overseas, Panama

2014年 9月15日 ‘Transnational and Interdisciplinary Collaboration on Statelessness: Case Studies in Asia,’ Invited Session: Networking for Change: the Importance of Collaboration on Statelessness, First Global Forum on Statelessness, Hague

2014年 9月16日 Invited Thematic Roundtable: A Roundtable Discussion on ‘Statelessness and Empowerment’ with Stateless and Formerly Stateless Persons, Led by Barbara Hendricks, First Global Forum on Statelessness, Hague

2014年11月29日 「華人とは何か？華人 3 世、2 世、1.5 世の語りから見る在日華人意識の変容」パネリスト、2014年度日本華僑華人学会研究大会 第 2 回サーキュラー、早稲田大学

・広報・社会連携活動

2014年 5月20日 「写真家 Greg Constantine 氏トークイベント・写真展 in 早稲田 見えなかった世界——写真の奥にみる無国籍の人々 (Unseen World: Stateless People)」早稲田大学

2014年11月19日 「無国籍者をゼロに」『くらし☆解説』NHK

2014年11月21日 「夕方特集 知っていますか？“無国籍”の問題」『先読み！夕方ニュース』NHK ラジオ第 1

■先端人類科学研究部・応用民族学研究部門

市田泰弘 [いちだ やすひろ]—————教授

1962年生。【学歴】立教大学文学部教育学科卒（1986）、立教大学大学院文学研究科博士課程前期課程修了（1989）

【職歴】名古屋文化学園言語訓練専門職員養成学校専任教員（1989）、国立身体障害者リハビリテーションセンター更生訓練所生活訓練専門職（1991）、国立身体障害者リハビリテーションセンター学院手話通訳学科教官（1996）、国立障害者リハビリテーションセンター学院手話通訳学科主任教官（2010）【学位】文学修士（立教大学 1989）【専攻・専門】手話言語学【所属学会】日本言語学会、日本手話学会、日本認知言語学会、日本通訳翻訳学会

【主要業績】

[共著]

木村晴美・市田泰弘

2014 『改訂新版・はじめての手話』東京：生活書院。

[論文]

Ichida, Y.

2010 Introduction to Japanese Sign Language: Iconicity in Language. *Studies in Language Sciences* 9: 9–32.

Sakai, K., Y. Tatsuno, K. Suzuki, H. Kimura, and Y. Ichida

2005 Sign and Speech: Amodal Commonality in Left Hemisphere Dominance for Comprehension of Sentences. *Brain* 128(6) 1407-1417.

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本手話の特徴をふまえた手話言語学教授法に関する研究

・研究の目的、内容

現在、大学および大学院レベルで手話言語学の講義を行うための日本語による教科書は存在しない。また、国内の大学において手話言語学を導入するにあたっては、日本手話の言語事実を取り込むのが適当であると考えられているが、その教授法はまだ確立していない。近年の手話言語学に対する関心の高まりなどから、各単年度の講義の教授法を踏まえたシラバスの内容の検討が急務となっている。本研究では、複数の大学において実施する手話言語学の講義を通して、シラバス案の策定とその実効性の検証を行い、その結果を長期的には、日本語による手話言語学講義のための教科書執筆という形に反映させることを目的とする。具体的な内容としては、シラバスの検討においては受講学生の一般言語学の基礎知識の程度に合わせた内容および用例の選択を中心に、実効性の検証については主として受講学生の評価の集計によって行う（2013年度に研究を開始し、本年度は2年目にあたる）。

・成果

東京大学にて「日本手話研究Ⅱ」の講義を担当、シラバス案を策定し実践した。社会言語学的背景について扱う導入と、ヴォイス⇒アスペクト⇒モダリティという文法カテゴリーを基盤とした配列による本編からなるシラバス案を採用した。このようなタイプのシラバスにおいては、その実効性が受講学生の一般言語学の知識の程度に大きく依存することが昨年度明らかになったため、各文法カテゴリーの概説を十分に行うことにした。受講学生からは、日本手話の言語事実を検討するための基盤を提供するものとして有益であるとする意見がある一方、肝心の日本手話の言語事実の紹介と検討にあてる時間が相対的に減少することによる弊害を指摘する者もいた。講義の終盤においては、まずは日本手話の言語事実から出発し、その解釈にあたって文法カテゴリーとの関連にふれる、という形態をとったが、この方法はおおむね好評であった。来年度のシラバス案策定に生かしたい。

そのほか、みんぱく手話言語学フェスタ2014・第3回手話言語と音声言語に関する国際シンポジウム「言語の記述・記録・保存と通モード言語類型論」において移動表現について発表、東北大学のリレー講義にて音韻と文法に関する概論を担当した。

◎出版物による業績

〔共著〕

木村晴美・市田泰弘

2014 『改訂新版・はじめての手話』東京：生活書院。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2014年10月3日 「日本手話における移動事象の表現——文法上の制約と動詞連続構文による解決」みんぱく手話言語学フェスタ2014・第3回手話言語と音声言語に関する国際シンポジウム『言語の記述・記録・保存と通モード言語類型論』、国立民族学博物館

・みんぱく発 手話言語学講義と関連事業

「日本手話研究Ⅱ（学部／通年）」、「言語学特殊講義（大学院／半年）」東京大学

2014年6月19日 「日本手話のしくみ（文法）について」関西学院大学

2014年10月14日 「【音韻論】日本手話の音韻と文法」東北大学全学教育リレー講義「手話の世界と世界の手話言語☆入門」東北大学

清水郁郎 [しみず いくろう] ————— 教授

1966年生。【学歴】芝浦工業大学工学部（1990）、芝浦工業大学大学院建設工学専攻修了（1992）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻修了（2001）【職歴】大同工業大学工学部建築学科助教授（2005）、芝浦工業大学

工学部建築工学科准教授（2009）、芝浦工業大学工学部建築工学科教授（2013）【学位】博士（文学）（総合研究大学院大学 2001）【専攻・専門】建築学（計画）、東南アジア研究、物質文化研究【所属学会】日本文化人類学会、日本建築学会

【主要業績】

[単著]

清水郁郎

2005 『家屋とひとの民族誌——北タイ山地民アカと住まいの相互構築誌』東京：風響社。

[編著]

日本建築学会編

2012 『フィールドに出かけよう！住まいと暮らしのフィールドワーク』東京：風響社。

[論文]

清水郁郎

2014 「映画をめぐる生の交差——時間と空間の共有がもたらすもの」村尾静二・箭内 匡・久保正敏編『映像人類学——人類学の新たな実践へ』pp.158-174, 東京：せりか書房。

【受賞歴】

1992 第3回日本建築学会優秀修士論文賞

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

東南アジアにおける木造建築建設にかかわる比較研究

・研究の目的、内容

本研究は、東南アジア大陸部のタイ系民族集団の木造住居や寺院について、建設にかかわる比較研究を行うことを目的とする。研究においては、現地調査を実施し、そこで得られた資料を中心に使う。また、国立民族学博物館所蔵の資料を適宜利用し、かつ文献資料とあわせて、当該地域の建築生産の現在の様態を明らかにする。そのさいには、建築物自体の物理的特徴に加え、建設にかかわる道具の伝播や材料の加工方法に留意し、それらによって産み出される建築構法にも着目する。さらに、建築生産にかかわる職能や社会組織の把握も行う。これらを統合して、当該地域における木造建築生産の整理・分類と理解の一助としたい。

現地調査については、2014年度から3年間に渡って、科学研究費補助金（基盤研究（B））『東南アジア諸国の建築生産システムの実態および現代化プロセスに関する研究』（代表：蟹澤宏剛）の分担者となることが決まっており、東南アジア大陸部および島嶼部での調査をこうした資金を使って実現する予定である。

・成果

2014年9月に、タイ王国チェンライ県、メーサイ郡のコン・ムワン人の村と、チェンマイ県サンパトーン郡のタイ・クーン人の村で、それぞれ1週間程度の調査を行った。現地調査では、実測による住居の各種図面と村落全図の作成を行い、また、建設道具の把握、建築生産の様態について調べ、住居の形式、構法、間取り、職能などを明らかにした。さらに、住居内外で行われる儀礼や宗教的実践の分析から空間の意味論的分析を行い、居住空間と宗教的概念のかかわりやジェンダーによる空間の使用法の違いなどを明らかにした。また、生業である農耕（水稲耕作）が居住空間の組織にどのように関与するのかを明らかにした。

当該研究を含む一連の研究に関する書籍・発表等の成果としては、以下が該当する。

2014 Spatial Characteristics Seen among the Phuan in Vientiane Province, Lao P.D.R., Especially Focusing on the House and Village. *Journal of Fine Arts* (Chiang Mai University) 2557(1): 21-66.

2014 「タイ・ヤイの居住空間の特徴——東南アジア大陸部低湿地帯の居住空間にかかわる研究 その4」『日本建築学会学術講演梗概集（近畿）』pp.963-964.

◎出版物による業績

[論文]

清水郁郎

2014 「映画をめぐる生の交差——時間と空間の共有がもたらすもの」村尾静二・箭内 匡・久保正敏編『映

像人類学（シネ・アンソロポロジー）——人類学の新たな実践へ』pp.158-174, 東京：せりか書房
[査読有]。

2014 「タイ・ヤイの居住空間の特徴——東南アジア大陸部低湿地帯の居住空間にかかわる研究 その4」
『日本建築学会学術講演梗概集（近畿）』pp.963-964, 東京：日本建築学会。

2015 「十島村の居住空間の現在——口之島を中心に」『国際常民文化研究叢書 第10巻 アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象（論文編）』pp.207-218, 神奈川大学国際常民文化研究機構 [査読有]。

Shimizu, I.

2014 Spatial Characteristics Seen among the Phuan in Vientiane Province, Lao P.D.R., Especially Focusing on the House and Village. *Journal of Fine Arts* (Chiang Mai University) 2557(1): 21-66 [査読有]。

[事典項目]

清水郁郎

2014 「水稲耕作民の住——移住と開拓」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.460-461, 東京：丸善出版。

2014 「都市民の住——現代のヴァナキュラー」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.468-469, 東京：丸善出版。

◎映像音響メディアによる業績

・DVD・CDなどの制作・監修

清水郁郎

2014 「しずかな生活」村尾静二・箭内 匡・久保正敏編『映像人類学——人類学の新たな実践へ』付録（日本語、27分），東京：せりか書房。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年9月12日～9月14日 「タイ・ヤイの居住空間の特徴——東南アジア大陸部低湿地帯の居住空間にかかわる研究 その4」日本建築学会学術講演会（近畿）、神戸大学国際文化部／工学部

◎調査活動

・国内調査

7月29日～8月10日一沖縄県宮古島市（池間島の住居、村落の調査）

12月3日～12月6日一宮崎県東臼杵郡椎葉村（椎葉神楽の調査）

・海外調査

2014年9月15日～10月1日一タイ王国チェンライ県、チェンマイ県（タイ系集団の住居と村落の調査）

2015年2月27日～3月11日一ラオス人民民主共和国（南部諸県における住宅生産に関わる調査）

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

日本建築学会・住宅計画運営委員会幹事、日本建築学会・建築計画委員会幹事

関本照夫 [せきもと てるお]——教授

1947年生。【学歴】東京大学大学院社会学研究科博士課程中退（1976）【職歴】国立民族学博物館第五研究部助手（1976）、一橋大学社会学部講師（1981）、同学部助教授（1983）、東京大学東洋文化研究所助教授（1987）、同研究所教授（1991）、同研究所長（2006-2009）、東京大学を定年退職（2010）、国立民族学博物館先端人類科学研究部特任教授（2010-2013）【学位】社会学修士（東京大学 1974）【専攻・専門】仕事の人類学、布、工芸、物質文化、東南アジア研究【所属学会】日本文化人類学会、東南アジア学会、日本マレーシア学会、Association for Asian Studies

【主要業績】

[編著]

Sekimoto, T. (ed.)

2000 *Handicrafts and Industrial Development in Southeast Asia* (Toyota Foundation Research Grant Report). Tokyo: Institute of Oriental Culture, University of Tokyo.

[共編著]

関本照夫・船曳建夫編

1994 『国民文化が生れる時——アジア・太平洋の現代とその伝統』東京：リプロポート。

Sekimoto, T., Semiarto Aji Purwanto and Hanantiwi Adityasari(eds.)

2003 *Handicrafts in the Age of Global Economy: Indonesia and Japan*. Depok: Center for Japanese Studies, University of Indonesia.

【受賞歴】

1983 第14回澁澤賞

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

布と人間の人類学的研究

・研究の目的、内容

- 1) 2011年1月～2013年3月の間に実施した機関研究・マテリアリティの人間学のプロジェクト「布と人間の人類学的研究」の成果刊行のため、編集作業を進める。
- 2) インドネシアのパティック染物業の研究を基軸に、物質性の人類学、布と人間の人類学について、執筆作業を行う。

・成果

学術雑誌に論文として発表するため、準備を進めている。『国立民族学博物館研究報告』に投稿予定。

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

財団法人東洋文庫研究員、国立大学法人教育研究評価委員会委員

曾我 亨 [そが とおる]——教授

【学歴】名古屋大学理学部卒（1988）、京都大学大学院理学研究科後期博士課程修了（1994）【職歴】京都大学理学部助手（1994）、弘前大学人文学部助手（1995）、同助教授（2000）、同教授（2010）【学位】理学博士（京都大学 1999）【専攻・専門】生態人類学 1) 北東アフリカの牧畜社会を対象とした生業・社会に関する研究、2) エスニシティと稀少資源に関する研究、3) 難民の生存戦略に関する研究、4) 人類進化論的研究【所属学会】日本アフリカ学会、日本ナイル・エチオピア学会、生態人類学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[共著]

高倉浩樹・曾我 亨

2011 『シベリアとアフリカの遊牧民』宮城：東北大学出版会。

[論文]

曾我 亨

2011 「国家に抗する拠点としての生業——牧畜民ガブラ・ミゴの難民戦術」松井 健・名和克郎・野林厚志編『生業と生産の社会的布置』pp.389-426, 京都：昭和堂。

曾我 亨

2007 「〈稀少資源〉をめぐる競合という神話——資源をめぐる民族関係の複雑性をめぐって」松井 健編『資源人類学06 自然の資源化』pp.205-249, 東京：弘文堂。

【受賞歴】

1999 高島賞（日本ナイル・エチオピア学会）

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

東アフリカ牧畜社会における降雨変動と紛争頻度の関係

・研究の目的、内容

近年、アフリカにおける紛争の原因を、降雨や気候変動等による水資源量の変化と関連づける議論が活発になってきた。降雨変動が紛争に関係していること自体は、古くから指摘されてきたが、紛争解決には「政治的問題の解決よりも水問題を解決するほうが有効」という開発目標が、エビデンスに基づいて議論されるようになってきている。単純な環境決定論を乗り越え、現代的な牧畜社会の実状を踏まえた上で、降雨変動が紛争を引き起こす具体的なメカニズムを解明する必要がある。本研究は研究期間内に、東アフリカ乾燥帯の牧畜社会を対象に、1) 降雨変動と紛争頻度の相関を測定し、相関がある場合には、2) 降雨量の変動が紛争を引き起こすメカニズムを解明する。

・成果

2014年度は、科学研究費補助金を用いて南エチオピア地域のガブラ・ミゴ社会を対象に、約4週間の現地調査を実施した。調査に先立ち、2013年9月に現地へ赴いた際、現地の調査協力員が毎日の降雨のデータと、紛争の場所・規模・原因などについて正確な記録をとれるようトレーニングした。2014年の調査では、データを回収し、試験的な分析を試みた。まず、アメリカ海洋局が運営するARC2 (African Rainfall Climatology version 2) の降雨データは、乾燥帯では精度がおちると言われている。そこで、現地協力員の記録と付き合わせることで、南エチオピアにおけるARC2のデータの精度を確認した。つぎに降雨変動と紛争頻度の相関を計算したが、相関はみられなかった。これは、低強度の紛争が雨季・乾季に関係なく頻発していたことから、このような結果になったものと思われる。この結果をうけて、低強度の紛争をどこまで含めて分析すべきか、方法論的な再検討をおこなった。

◎出版物による業績

〔論文〕

曾我 亨

2014 「生業」松田素二編『アフリカ社会を学ぶ人のために』pp.56-69, 東京：世界思想社。

日比野愛子・曾我 亨

2015 「地域に埋め込まれた／地域を創りだすローカル・イノベーション」『人文社会論叢 社会科学篇』33：1-16。

◎口頭発表・展示・その他の業績

2014年10月11日 「三項関係のなかで生まれる他者」第12回人類社会の進化史的基盤研究研究会、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

2014年11月3日 「人類学的視点から考える新たな他者像」第68回日本人類学会大会進化人類学分科会、アクロシティ浜松コンgresセンター

2014年12月6日 「生態人類学の観点から」基幹研究「人類学におけるミクロ・マクロ系の連関」第2回公開シンポジウム『制度——人類社会の進化』（河合香吏編 京都大学学術出版会、2013）をめぐって」、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機関や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員、科学研究費補助金（基盤研究（A））「アフリカ在来知の生成と共有の場における実践的地域研究」（代表：重田真義、京都大学）研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究（C））「難民の生存を支える新たな経済活動に関する人類学的研究」（代表：曾我 亨）

◎社会活動・館外活動等（2013年4月1日～2014年3月31日）

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所海外調査専門委員、京都大学アフリカ地域研究センター African Study Monographs 編集委員

林 史樹 [はやし ふみき]——教授

1968年生。【学歴】同志社大学文学部社会学科卒業（1992）、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士前期課程修了（1997）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻博士後期課程修了（2001）【職歴】神田外語大学外国語学部専任講師（2003）、神田外語大学外国語学部准教授（2007）、神田外語大学外国語学部教授（2013）【学位】博士（文学）（総合研究大学院大学 2001）【専攻・専門】文化人類学、韓国研究、移動研究【所属学会】日本文化人類学会、韓国・朝鮮文化研究会、社会学研究会

【主要業績】

[単著]

林 史樹

2007 『韓国サーカスの生活誌——移動の人類学への招待』東京：風響社。

2004 『韓国のある薬草商人のライフヒストリー——「移動」に生きる人々からみた社会変化』東京：御茶の水書房。

[論文]

林 史樹

2008 「韓国・朝鮮における場所の観念——移動と所有の関係からの考察」『韓国朝鮮の文化と社会』7：7-30。

【受賞歴】

2006 旅の文化研究奨励賞

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

韓国食文化の人類学的研究

・研究の目的、内容

植民地期は韓国で負の遺産としてばかり捉えがちであるが、この時代に人々は大きく動き、さまざまな文物が伝播していった側面も無視できない。とくに植民地期は収奪の歴史とともに語られるが、韓国ではその後も朝鮮戦争が勃発し、食糧難が1960年代まで続いていく。食うに困った時期が続いたことは、一方で、否応なしに食のスタイルを変えたと、食の伝播も盛んに起こった。そこで本研究では、朝鮮半島を中心に、戦中・戦後期に人々が大移動することで、どのように食が伝播していったのかを明らかにする。とくに東アジア全体を視野に入れる上で、中華料理として分類されやすい小麦粉食の波及・定着について研究調査する。

・成果

初年度は、植野弘子教授（東洋大学）を研究代表者とする「帝国日本下における人と物の移動」の研究プロジェクトとも連動させ、資料収集を行っている。また、2014年8月に仁川と群山で、2015年1月に釜山と大邱で聞き取り調査を行った。調査でもわかってきたのは、韓国の場合、一世や二世といった華僑が小麦粉食の普及に圧倒的に寄与した点と、粉食奨励運動が大きな契機になった点である。これはたとえば、粉食系の中華料理の普及において、華僑よりも引揚者が大きな役割を果たした日本と対照的で、隣接する地域でみられる中華料理の波及に違いをみせていることがわかる。また2014年12月に開催された「世界の食文化研究と博物館」においても司会として参加したほか、2015年8月から開催される特別展示「韓国と日本の食文化と博物館」にも、そこで得た知見を活かして準備を進めている。

◎出版物による業績

[論文]

林 史樹

2014 「全斗煥元大統領を通して見る第五共和国——‘悪人’と‘悪役’のはざまでの発展」『グローバル・コミュニケーション研究』1：113-134。

[その他]

林 史樹

2014 「韓国の街角で出会うことば——‘약（薬）’」『グローバル・コミュニケーション研究所報告書』2：38-44。

2014 「フィールドはだれのもの?」『韓国朝鮮の文化と社会』13: 237-241。

◎口頭発表・展示・その他の業績

- ・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2014年12月6日 司会「韓国の事例」国立民族学博物館・立命館大学学術交流国際シンポジウム『世界の食文化研究と博物館』国立民族学博物館

◎調査活動

- ・国内調査

2015年2月4日～2月6日一対馬市（日韓間における人と移動に関する調査）

- ・海外調査

2014年8月22日～8月29日一大韓民国（インタビュー調査およびソウル大学でのシンポジウム参加）

2015年2月1日～2月4日一大韓民国（韓国華僑にインタビュー調査）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機関や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（A））「帝国日本のモノと人の移動に関する人類学的研究——台湾・朝鮮・沖縄の他者像とその現在」（研究代表者：植野弘子）研究協力者

◎社会活動・館外活動等

日本文化人類学会編集委員

飯高伸五 [いいたか しんご] ————— 准教授

1974年生。【学歴】慶應義塾大学文学部卒（1998）、東京都立大学大学院社会科学研究科修士課程修了（2001）、東京都立大学大学院社会科学研究科博士課程単位取得退学（2008）【職歴】神奈川県立平塚看護専門学校非常勤講師（2005-2008）、専修大学法学部兼任講師（2007-2008）、日本学術振興会特別研究員PD（筑波大学）（2008-2011）、ハワイ大学マノア校訪問研究員（2010）、高知県立大学文化学部講師（2011）、首都大学東京非常勤講師（2011）、国立民族学博物館客員教員（2014）【学位】博士（社会人類学）（東京都立大学、2009）、修士（社会人類学）（東京都立大学、2001）【専攻・専門】社会人類学、オセアニア研究【所属学会】日本文化人類学会、日本オセアニア学会、東京都立大学社会人類学会、Association for Social Anthropology in Oceania

【主要業績】

〔論文〕

飯高伸五

2011 「南洋庁下の民族学的研究の展開——嘱託研究と南洋群島文化協会を中心に」山路勝彦編『日本の人類学——植民地主義、異文化研究、学術調査の歴史』pp.175-208, 兵庫：関西学院大学出版会。

2009 「経済開発をめぐる『島民』と『日本人』の関係——日本統治下パラオにおける鉱山採掘の現場から」吉岡政徳監修、遠藤 央・印東道子・梅崎昌裕・中澤 港・窪田幸子・風間計博編『オセアニア学』pp.345-359, 京都：京都大学学術出版会。

Itaka, S.

2011 Conflicting Discourses on Colonial Assimilation: A Palauan Cultural Tour to Japan, 1915. *Pacific Asia Inquiry* 2(1): 85-102.

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

- ・研究課題

アジア・太平洋地域における日本統治の記憶と記録に関する歴史人類学的研究

- ・研究の目的、内容

本研究の目的は、研究従事者が旧南洋群島（ミクロネシア）のパラオで収集してきた日本統治経験の民族誌的データとともに、国立民族学博物館の民族学アーカイブズを精査することによって、日本統治経験の記録と記憶を歴史人類学的に検討していくことである。具体的には 1) 日本の民族学者がパラオ社会に対して向けたまなざしを検討しつつ、かれらが記録した当該社会の変動を検討すること、2) ポスト植民地期のパラオ社会におけ

る植民地期の史資料の活用可能性を検討することである。事例の検討によって、アジア・太平洋地域における日本統治の記憶と記録の比較研究に向けた基盤を提供することも視野に入れる。

・成果

科学研究費補助金（基盤研究（A））「太平洋島嶼部におけるマイノリティと主流社会の共存に関する人類学的研究」（研究代表者：風間計博＝京都大学）の分担者として、また慶應義塾大学次世代研究プロジェクト推進プログラム「太平洋島嶼の歴史生態学：『高い島』と『低い島』の景観史研究」（研究代表者：山口 徹＝慶應義塾大学）の協力者として、パラオおよび沖縄で現地調査を実施した。パラオでは、慶應義塾大学考古学研究室の調査に同行し、現地芸術文化局の協力のもと日本統治期の産業遺構の調査を実施した。沖縄では、戦前パラオに移住していた人々の同窓会で聞き取り調査を実施し、日本統治下パラオにおける現地社会と日本人社会との関係を、沖縄出身者の特異性に留意しつつ検討した。

パラオでの調査研究の一部は、飯高伸五「パラオ諸島における日本統治期の鉱山採掘跡の現在」『太平洋諸島研究』2, pp.1-19（2014年7月、査読有）として刊行し、国際学会での発表 Iitaka, Shingo, “Mining, Bombing, and Touring: Dark Tourism and War Memory in Palau.” Pacific History Association 21st Biennial Conference 2014（2014年12月3日、於：国立台湾大学）も実施した。また、沖縄での調査研究の一部は、飯高伸五「沖縄の『南洋帰り』による『記憶の継承』事業」『日本オセアニア学会 NEWSLETTER』110, pp.12-20（2014年12月、査読無）として刊行した。加えて、2014年度日本オセアニア学会関東地区例会では、パネル発表「オセアニアにおける『インターマリッジ』の現代的諸相——マジョリティとマイノリティの観点から」に参加し、飯高伸五「母系社会における『ハーフ』の潜在化と顕在化」（2014年12月13日、於：立教大学池袋キャンパス）を発表し、日本統治下パラオにおける植民地的コンタクトの一端を明らかにしようと試みた。

◎出版物による業績

[論文]

飯高伸五

2014 「パラオ諸島における日本統治期の鉱山採掘跡の現在」『太平洋諸島研究』2：1-19 [査読有]。

2014 「沖縄の『南洋帰り』による『記憶の継承』事業」『日本オセアニア学会 NEWSLETTER』110：12-20。

◎口頭発表・展示・その他の業績

2014年12月3日 ‘Mining, Bombing, and Touring: Dark Tourism and War Memory in Palau.’ Pacific History Association 21st Biennial Conference 2014, National Taiwan University, Taiwan

2014年12月13日 「母系社会における『ハーフ』の潜在化と顕在化」2014年度日本オセアニア学会関東地区例会、立教大学池袋キャンパス

◎調査活動

・国内調査

2015年2月5日～2月9日—沖縄（科学研究費補助金（基盤研究（A））「太平洋島嶼部におけるマイノリティと主流社会の共存に関する人類学的研究」（研究代表者：風間計博＝京都大学）の研究分担者として、南洋群島帰還者会の「記憶の継承」事業の調査を実施）

・海外調査

2014年8月26日～9月3日—パラオ共和国（慶應義塾大学次世代研究プロジェクト推進プログラム「太平洋島嶼の歴史生態学：『高い島』と『低い島』の景観史研究」（研究代表者：山口 徹＝慶應義塾大学）に参加、日本統治期の産業遺構の調査を実施）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機関や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「地域民族誌の方法論と人類学的空間構想力の可能性の探求」（研究代表者：高倉浩樹）共同研究員、科学研究費補助金（基盤研究（A））「太平洋島嶼部におけるマイノリティと主流社会の共存に関する人類学的研究」（研究代表者：風間計博）研究分担者

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

日本オセアニア学会理事・評議員、NPO 法人地域文化資源ネットワーク理事

・他大学の客員、非常勤講師

土佐リハビリテーションカレッジ「人間科学概論」

大杉 豊 [おおすぎ ゆたか] ————— 准教授

【学歴】 University of Rochester (米国ロチェスター大学) 大学院言語研究科博士課程修了 (1997) 【職歴】 人形劇団「デフパペットシアターひとみ」団員 (1983)、学校法人名古屋文化学園言語訓練専門職員養成学校教員 (1989)、米国ロチェスター大学アメリカ手話学科客員教員 (1997)、財団法人全日本ろうあ連盟本部事務所長 (2000)、筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター障害者基礎教育研究部准教授 (2007)、筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター障害者基礎教育研究部教授 (2015) 【学位】 Ph. D (ロチェスター大学 1997) 【専攻・専門】 手話言語学、ろう者学 【所属学会】 日本特殊教育学会、日本手話学会、日本聾史学会

【主要業績】

[単著]

大杉 豊

2005 『聾に生きる——海を渡ったろう者山地彪の生活史』 東京：財団法人全日本ろうあ連盟出版局。

[共編]

大杉 豊・関 宣正編

2010 『わたしたちの手話学習辞典』 東京：財団法人全日本ろうあ連盟出版局。

[論文]

大杉 豊

2012 「日本の手話における語彙の共通化の現象」『手話学研究』 21：15-24。

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

手話言語学に関する研究ネットワーク拠点の形成に向けての現状調査

・研究の目的、内容

学術的により堅固な基盤をもって手話言語学研究を推進するための研究ネットワーク拠点を形成することを長期的な目標とし、今年度は昨年度に引き続き、国内外の手話言語学研究の現状及び課題、その背景的要因の整理を継続することを目的とする。方法としては、人間文化研究機構連携研究として「手話言語と音声言語のシンポジウム(3)『言語の記述・記録・保存と通言語種類型論』」を10月4日～5日に実施する準備過程等で研究者との情報・意見交換を行う。筑波技術大学で継続している「情報保障のための情報・技術・人材拠点の整備」事業では、言語学分野の学術発表の通訳映像データに言語学情報を付与するコーパスを作成する。

・成果

人間文化研究機構連携研究として「言語の記述・記録・保存と通言語種類型論」をテーマとする「手話言語と音声言語のシンポジウム」に関わる中で、国内外の手話言語学研究の現状および課題、その背景的要因について情報・意見交換を行った。この成果を出版物にまとめるにはいたらなかったが、国立大学法人筑波技術大学で2014年度に開設された大学院技術科学研究科情報アクセシビリティ専攻手話教育コースの開設科目「手話言語学特論」「手話教育特論」等の授業構成に活かすことが出来た。成果の執筆は2015年度の課題とする。

一方、筑波技術大学の「情報保障のための情報・技術・人材拠点の整備」事業では、国立民族学博物館の「関西地域学術手話通訳研究事業」を部分的（人材派遣・情報保障等）に支援する中で得た知見を活かし、学術手話通訳研修を目的とするeラーニングサイト構築に必要なリソースの製作を進めることが出来た。

◎出版物による業績

[共著]

青柳美子・浅野順一・浅利義弘・池上芳夫・石川 渉・石倉義則・伊藤芳子・植野圭哉・江原こう平・大内祥一・大瀧浩司・大杉 豊・奥田しのぶ・加藤 薫・亀田明美・小畑修一・金原輝幸・黒崎信幸・小出真一郎・斎藤千英・鈴木博司・高田英一・高塚千春・高塚 稔・高橋幸子・竹島春美・田中保明・長野秀樹・中山真理・那須英彰・西滝憲彦・浜野秀子・早瀬久美・曲 真理子・前田真紀・本村順子・柳 喜代子・山口健二・山本直樹・吉岡真人・吉田正雄・吉野木の実・若杉義光・若浜ひろ子

2014 『わたしたちの手話 新しい手話2015』 東京：一般財団法人全日本ろうあ連盟。

[共編]

西滝憲彦・関 宜正編

2014 『私たちの手話学習辞典Ⅱ』 東京：一般財団法人全日本ろうあ連盟。

[その他]

大杉 豊

2014 「手話人文学の構築に向けて——『聾唖教授手話法』を読み解く」『手話・言語・コミュニケーション』1：104-144。

2014 「国際手話——手話言語接触現象とその先に見えるもの」『ことばと社会』15：255-261。

小林昌之・大杉 豊

2014 「ニュージーランド手話言語法の形成と発展」『手話学研究』23：57-75。

管野奈津美・大杉 豊・小林洋子・戸井有希

2014 「ろう者学教育コンテンツの開発と共同利用の展望」『筑波技術大学テクノレポート』22(1)：16-20。

◎映像音響メディアによる業績

・電子ガイド・データベースの制作・監修

大杉 豊・小林洋子・管野奈津美制作

2014 『ろう者学教育コンテンツ開発プロジェクト』（日本語・日本手話）昨年度より継続（<http://www.deafstudies.jp/>）

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年10月17日 「ろう者学教育コンテンツ及び手話言語コーパスの開発と共同利用——聾学校（特別支援学校）における活用の可能性」（小林洋子・戸井有希・管野奈津美との合同発表）第48回全日本聾教育研究大会、神戸国際会議場

2014年11月2日 「手話言語の語彙共有現象を記述・分析するにあたって」（坊農真弓・金子真美・岡田智裕との合同発表）日本手話学会第40回大会、鈴鹿医療科学大学千代崎キャンパス

2014年11月6日 「聴覚障害者の障害発生年齢による健康状態及びサービスへのアクセスの違い——全国調査から」（小林洋子・田宮菜奈子との合同発表）第72回日本公衆衛生学会、宇都宮

・研究講演

2014年6月22日 「世界から見た日本のろう文化」広島県ろうあ連盟、広島市

2014年7月13日 「手話言語条例について」足立区聴覚障害者協会、東京都足立区

2014年7月19日 「手話言語法と手話言語条例」関東ろう者大会、茨城県土浦市

2014年7月26日 「ことばの仕組み」札幌市聴覚障害者協会、北海道札幌市

2014年7月27日 「手話言語法と私たちの暮らし」埼玉県聴覚障害者協会、埼玉県与野市

2014年7月28日 「授業における手話の活用」青森県立青森聾学校

2014年8月3日 「手話言語法制定に向けて」香川県聴覚障害者協会、香川県高松市

2014年8月11日 ‘Japanese Sign Language Corpus Project,’ Institute on Disability and Public Policy for the ASEAN Region, Kuala Lumpur, Malaysia

2014年8月31日 「教育を変えるために手話言語法を」岩手県聴覚障害者協会、岩手県盛岡市

2014年9月6日 「手話言語法への取組」九州ろうあ団体連合会、佐賀県佐賀市

2014年11月1日 「手話言語条例と手話言語法」京都府聴覚障害者協会、京都府城陽市

2014年11月16日 「手話言語法の制定を目指そう」四国ろうあ連盟、愛媛県松山市

2014年11月30日 「手話言語法の制定を目指そう」青森県ろうあ協会、青森県青森市

2015年1月18日 「手話言語法を考える」足立区聴覚障害者協会、東京都足立区

2015年1月23日 「手話言語法を考える」調布市聴覚障害者協会、東京都調布市

2015年2月5日 「手話言語法を考える」荒川区聴覚障害者協会、東京都荒川区

2015年2月11日 「手話言語法を考える」練馬区聴覚障害者協会、東京都練馬区

2015年3月21日 「ろう者学から見る合理的配慮の意義」朝日大学

◎調査活動

・国内調査

2014年11月28日～30日—長崎県・長崎地域の手話言語データ収集

2015年1月16日～18日—福岡県・福岡地域の手話言語データ収集

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構連携研究「第3回国際シンポジウム「手話言語と音声言語の記述・記録・保存（代表：菊澤律子）」連携研究員、総合研究大学院大学学融合戦略的共同研究支援事業「手話言語学を世界へつなぐ——メディア発信とe-learning開発に向けて（代表：菊澤律子）」研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究(B)）「ろう者コミュニティの視点による日本手話語彙体系の記録・保存・分析」研究代表者、筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター「東日本大震災における聴覚障害学生への支援経験をベースとした大学間コラボレーションスキームの構築」事業「情報保障に関する研究基盤構築：日本語－手話コーパスの作成」研究代表者、筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター「聴覚・視覚障害学生のイコールアクセスを保障する教育支援ハブの構築——情報保障と障害特性に基づく教育方法の協調の開発と資源共有に向けて」事業「ろう者学教育コンテンツ開発」研究代表者

◎社会活動・館外活動等

- ・他の機関から委嘱された委員など

社会福祉法人全国手話研修センター日本手話研究所事務局長、NPO法人日本ASL協会会長、財団法人現代人形劇センター理事、Executive committee member, Institute on Disability and Public Policy for the ASEAN Region、福島県郡山市手話言語条例検討委員会委員、鳥取県手話パフォーマンス甲子園実行委員会委員

- ・非常勤講師

「聴覚障害児指導法概論」国立大学法人群馬大学教育学部（集中講義）、「基礎英語」立正大学地球環境科学部（集中講義）、「ろう者文化と教育」国立特別支援教育総合研究所 特別支援教育専門研修（単発講義）

高城 玲 [たかぎ りょう] ————— 准教授

1969年生。【学歴】東京外国語大学外国語学部卒（1992）、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士前期課程修了（1994）、総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程単位取得退学（2000）【職歴】日本学術振興会特別研究員（PD）（2000）、国立民族学博物館機関研究員（2006）、神奈川大学経営学部助教（2007）、神奈川大学経営学部准教授（2009）、神奈川大学日本常民文化研究所所員（2009）、神奈川大学アジア研究センター所員（2013）【学位】博士（文学）（総合研究大学院大学 2006）、修士（国際学）（東京外国語大学 1994）【専攻・専門】文化人類学、東南アジア（タイ）研究【所属学会】日本文化人類学会、東南アジア学会

【主要業績】

[単著]

高城 玲

2014 『秩序のミクロロジー——タイ農村における相互行為の民族誌』 横浜：神奈川大学出版会。

[論文]

高城 玲

2013 「相互行為としての制度——タイ農村における研修と選挙の集まりの場から」永野善子編著『植民地近代性の国際比較——アジア・アフリカ・ラテンアメリカの歴史経験』pp.157-193, 東京：御茶の水書房。

2012 「国家統治の過程とコミュニティ——タイの国王誕生日と村民スカウト研修の相互行為」平井京之介編『実践としてのコミュニティ——移動・国家・運動』pp.187-217, 京都：京都大学学術出版会。

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

- ・研究課題

タイにおける社会運動の相互行為に関する人類学的研究

- ・研究の目的、内容

本研究は、現在変動の中にあるタイ社会の動態を、主に社会運動に着目し、鳥瞰図的なマクロな視点のみではなく、人々が不断に繰りひろげる相互行為の過程というミクロな視点から人類学的に記述し探求することを目的とする。なお、本研究は2012～2014年度に推進している科学研究費補助金（基盤研究(C)）「タイにおける社会運動の相互行為に関する人類学的研究——都市と辺境の動態から」（代表者：高城 玲）と密接に連動してお

り、今年度の現地調査などに関しては主として科研費を利用する。

・成果

今年度は、上記科学研究費補助金と連動し、タイ北部チェンマイ県や中部ナコンサワン県、バンコクなどにおいて、都市部と農村部双方での政治・社会運動に関する現地調査、資料収集を計4回にわたって行った。関連する研究成果として、タイにおける政治・社会運動と地方農村部の関係を時系列的に整理した論文を発表したほか、国際研究会議での口頭発表も行った。

◎出版物による業績

[論文]

高城 玲

2015 「タイの政治・社会運動と地方農村部——1970年代から2014年までの概観」『神奈川大学アジア・レビュー』2:4-39。

2015 「アチックフィルム・写真と現地上映会——薩南十島と台湾パイワン族を中心に」神奈川大学国際常民文化研究機構編『国際常民文化研究叢書 第10巻 アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象（論文編）』pp.19-50, 横浜：神奈川大学国際常民文化研究機構。

[事典項目]

高城 玲

2014 「コミュニティの象徴的構築」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.554-555, 東京：丸善出版。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年4月22日 ‘Community and State Governance: Interaction of the king’s Birthday Ritual and Village Scout Training in Central Thai Village.’ The 12th International Conference on Thai Studies, University of Sydney

◎調査活動

・海外調査

2014年7月6日～7月20日—タイ王国チェンマイ県およびバンコク（タイにおける社会運動の相互行為に関わる現地調査）

2014年9月3日～9月10日—タイ王国ナコンサワン県（タイにおける社会運動の相互行為に関わる現地調査）

2014年12月11日～12月7日—タイ王国チェンマイ県（タイ農村部における社会運動に関わる現地調査）

2015年3月3日～3月16日—タイ王国チェンマイ県およびバンコク（タイにおける社会運動の相互行為に関わる現地調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機関や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

日本学術振興会科学研究費助成（基盤研究(C)）「タイにおける社会運動の相互行為に関する人類学的研究——都市と辺境の動態から」研究代表者、神奈川大学国際常民文化研究機構 共同研究「アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象」研究代表者

■文化資源研究センター・民族学応用教育研究部門

前川啓治 [まえがわ けいじ]——教授

【学歴】大阪大学文学部卒（1980）、大阪大学人間科学研究科博士前期課程修了（1983）、大阪大学人間科学研究科博士後期課程単位取得退学（1989）【職歴】筑波大学歴史・人類学系講師（1992）、静岡大学人文学部助教授（1996）、筑波大学人文社会科学研究科准教授（2000）、筑波大学人文社会科学研究科教授（2004）【学位】博士（文学）（筑波大学 1993）【専攻・専門】文化人類学・民族学【所属学会】日本オセアニア学会、日本文化人類学会

【主要業績】

〔単著〕

前川啓治

2004 『グローカリゼーションの人類学——国際文化・開発・移民』東京：新曜社。

2000 『開発の人類学——文化接合から翻訳的適応へ』東京：新曜社。

〔編著〕

前川啓治編

2012 『カルチュラル・インターフェースの人類学——「読み換え」から「書き換え」の実践へ』東京：新曜社。

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

グローバリゼーションから見る組織文化の比較研究

・研究の目的、内容

大分県安心院および石川県能登の春蘭の里の農村民泊の組織化の経緯とその展開についてインタビューを中心に明らかにしてゆく。また、筑波地区において実施しているフットパス整備と農村民泊との融合の可能性を探ってゆく。

先立つ調査で、すでに農村民泊の先駆と認知されている安心院におけるグリーンツーリズム組織の制度化の過程を一定程度まとめているが、この研究課題ではとくに規制緩和の観点から、安心院の例を、後発の石川県能登の春蘭の里における農村民泊の展開や制度化の過程と比較し、行政の関わりや役割の可能性と限界という観点から一般化し、モデル化を試みる。そのうえで、筑波地区への農村民泊導入の可能性について具体的に検証してゆく。

大分県安心院および石川県能登の春蘭の里における農村民泊をそれぞれ2週間程度行い、農村民泊体験の参与観察をしながら、ビジターや役所の関連部署担当者にインタビューを行う。筑波地区で十年来継続しているフィールド調査は引き続き、随時行う予定である。

・成果

主として大分県安心院での農村民泊のフィールドワークによる実践の開発誌「安心院農村民泊のモデルと課題——日本における農泊の誕生」を報告書として作成している。この研究は、科学研究費補助金（基盤研究（C））による研究の一部である。20年前に開始された「安心院方式」といわれる会員制農泊であるが、大分県では安心院町を軸に官民が共同して規制緩和を進めてきた成果であり、この画期的な試みが後に、国の法律である旅館業法の施工規則の改正を促し、その対象外として明確化された。こうした動きは、草の根に起因する運動であり、その自然体での農村の提示という新たな観光形態の展開とともに、「下」からのグローカリゼーションの進展過程として捉えられるものであり、従来の理論的研究を検証し、さらにすすめるものである。

また、地域づくりという大きな枠組みからは、筑波山麓地域の地域づくり活動の中心的な担い手であり、郷土史家でもある元筑波町長・つくば市教育長による筑波山麓地域の遺跡についてのガイドウォークを録画・編集し、映像資料として作成した。具体的には、筑波大学人文社会系プロジェクト資金による映像アーカイブとして保存した。さらに、前川啓治編『筑波山から学ぶ——「とき」を想像・創造する』（査読あり）を、2015年1月に筑波大学出版会から刊行し、筑波山麓地域の歴史や民俗、文化、経済への理解が、具体的な地域づくりやその組織化の過程とどのように結びついているのかという点を明らかにしている。この編著は筑波山についての初めての総合的専門書として位置づけられている。

◎出版物による業績

〔編著〕

前川啓治編

2015 『筑波山から学ぶ——「とき」を想像・創造する』茨城：筑波大学出版会〔査読有〕。

〔共編著〕

Wong, H. W. and K. Maegawa (eds.)

2015 *Revisiting Colonial and Post-colonial: Anthropological Studies of the Cultural Interface*. Los Angeles: Bridge21 Publications〔査読有〕。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・研究講演

2015年2月13日 「筑波山から学ぶ」茨城県商工会女性部研修会、つくば国際会議場

◎調査活動

・国内調査

2015年3月9日～3月20日 大分県安心院（農村民泊の調査）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（C））「開発から実践へ——安心院農村民泊による地域再生のモデル化と移植に関する政策的提言」研究代表者

外国人研究員 客員

■研究戦略センター・超領域研究部門

CHU Xuan Giao [チュ スワン ザオ] ————— 准教授

任期：2014年7月1日～2015年6月29日

研究課題：ベトナムのヌン（Nung）族の社会変動と信仰に関する歴史人類学的研究

【学歴】 ハノイ総合大学文学部卒（1994）、ベトナム社会科学院民俗文化研究所大学院修士課程（民俗学専攻）修了（2000）、東京外国語大学大学院研究生（文化人類学専攻、文科省国費留学生）（2000-2001）、東京外国語大学大学院博士後期課程（文化人類学専攻、文科省国費留学生）単位取得退学（2007）【職歴】 ベトナム社会科学院民俗文化研究所契約研究員（1995）、ベトナム社会科学院民俗文化研究所研究員（1996-2011）、東洋大学社会学部外来研究員（1999）、東洋大学社会学部特別講師（2004）、ベトナム社会科学院民俗文化研究所上席研究員（2011）【学位】 修士（民俗学）（ベトナム社会科学院 2000）【専攻・専門】 文化人類学

【主要業績】

[単著]

Chu Xuan Giao

2013 *Đời sống, vai trò và đặc trưng của thầy Tào người Nùng An qua trường hợp bản Phia Chang, Nxb Từ điển Bách khoa.*（『ヌン族ヌン・アン集団の宗教職能者タオに関する研究』）ハノイ：ベトナム百科辞典出版社（ベトナム語）。

[共編著]

Chu Xuan Giao and Phan Lan Huong (eds.)

2011 *Nghiên cứu cơ bản về Phủ Tây Hồ : Di tích và lễ hội, Nxb Từ điển Bách khoa.*（『ハノイの聖母信仰の聖地「西湖府」に関する基本研究』）ハノイ：ベトナム百科辞典出版社（ベトナム語）。

Chu Xuan Giao and Nguyễn Thị Lương (eds.)

2010 *Thăng Long thế kỉ 17 đến thế kỉ 19 qua tư liệu người nước ngoài, Nxb Quân đội nhân dân.*（『外国人の文献資料から見た17世紀——19世紀のハノイ』）ハノイ：人民軍隊出版社（ベトナム語）。

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

ベトナムのヌン（Nung）族の社会変動と信仰に関する歴史人類学的研究

・研究の目的、内容

これまで主に文化人類学の視点から、ベトナムのヌン族・キン族・中部高原のパナ族の村落及び日本の九州地方における現地調査の成果に基づいて、それぞれの社会における社会変動と民間信仰との相互の関連性を検討してきた。とくに、歴史学の方法論を取り入れ文献史料と調査のデータを併用する歴史人類学の視点から検討

してきた。

1996年からベトナムの東北地方に居住するヌン族の社会で長期間調査を行い、ヌン族が18世紀以降に中国から移住して以降の社会変動のプロセスと、村の宗教職能者である道公（タオ）の特質と社会的役割を明らかにしてきた。ヌン族の社会について、移住して以降、1954年に共産党政権が確立するまでは、王朝やフランスの統治下であって、自律的な社会が維持されていた。その後、共産党統治下でヌン族が国民として把握され元来の自律的な社会が解体して行く。道公を中心としたヌン族の民間信仰は、「迷信異端」としてその価値を否定され、抑圧された。1986年以降のドイモイ政策以降、市場経済が浸透し、村民が個別に経済的利益を求め、社会の変動が顕著に見られるようになった。他方、ヌン族が自らの伝統文化を見直すようになり、道公は民族のアイデンティティの一端を担う重要な民族文化として再評価されるようになった。しかし、過去に否定されたゆえ、道公を肯定的にとらえ直す枠組みがまだ不完全で、その地位は確定していない。こうした問題についてベトナム語と日本語の研究論文を発表してきた。

招聘期間中は、ヌン族の特にこの20年間の社会変動の諸側面や道公信仰のあり方についてより掘り下げた研究を行いたい。その際に、同系の民族で、現在、社会変動の波に直面している中国広西の壮（チワン）族社会との比較研究は不可欠である。また、キン族における聖母信仰の状況との比較の視点からの検討も不可欠である。過去に塚田誠之教授・谷口房男教授（東洋大学）らの中国西南少数民族研究者、田村克己名誉教授・末成道男教授（国立民族学博物館客員）・三尾裕子教授（慶應義塾大学）・中西裕二教授（日本女子大学）らキン族研究者のとの交流を行ってきた。招聘期間中にも塚田誠之教授らとの共同研究を経て壮族・キン族との比較検討を行い、ヌン族の社会と信仰に対する理解を深めたい。

・成果

研究課題について、とくにカオバン省クワンウエン県に居住するヌン・アン集団に関して、20世紀後半から21世紀初めのドイモイ以降のヌン・アン集団の社会文化変容について日本語での論文『ベトナムにおける市場経済化の進展と地域文化の生成——東北地方のヌン・アン集団の事例から』を執筆した。従来の研究ではヌン族は一枚岩として扱われてきたが、その下位集団に注目した。そして、従来は「中央から地方へ」、「経済から文化へ」という視点で研究がなされてきたが、地域住民の日常的な社会文化的行為のミクロな実態から、個々人のライフヒストリー、個々の家族や村の置かれた条件を考慮しつつ、ヌン・アンによる主体的な経済活動と伝統文化の復興・創造の実態を明らかにした。その中で当該集団の社会変動や民間信仰の動向についても検討を加え、その実態を明らかにした。この研究を進める過程で、ベトナム研究者の研究会「百越の会」（於：国立民族学博物館）で4回連続で発表した（2014年9月6日、11月8日、2015年1月17日、3月14日）。

さらに、上記の論文の要点を、2015年5月20日に開催された第265回民博研究懇談会で発表した。他に奈良大学社会科学部における科研「中越国境地域の市場から見た民族間交流とエスニシティの文化人類学的研究」の研究会（基盤研究(B)、代表者：芹澤知広教授）に招かれてコメントを行った。くわえて、末成道男教授、三尾裕子教授、中西裕二教授をはじめ、ベトナム研究者と学術交流を積極的に行った。

これらのほか、ベトナム語で課題に関連する論文「ヌン族ヌン・アン集団の研究史（Lịch sử nghiên cứu nhóm Nùng An trong tộc người Nùng ở Việt Nam）」、「ベトナムの聖母・柳杏伝説におけるハノイの西湖府の位置づけの変遷プロセス（Phủ Tây Hồ ở Hà Nội trong hệ thống truyền thuyết Mẫu Liễu）」を執筆した。

FISCHER, Susan Donna [フィッシャー、スーザン ドンナ]——教授

任期：2014年11月1日～2014年11月30日

研究課題：手話言語学研究のとりまとめと今後の方向性に関する検討

【学歴】ハーバード大学ラドクリフ・カレッジ卒（1967）、マサチューセッツ工科大学博士課程修了（1972）【職歴】ソーク研究所研究員（1971）、ハワイ大学 第二言語としての英語学部客員助教（1974）、サンディエゴ州立大学言語学科講師（1977）、ロチェスター工科大学国立聾工科大学コミュニケーション研究科准教授、研究員（1978）、ロチェスター工科大学国立聾工科大学研究科教授、研究員（1993）、カリフォルニア大学サンディエゴ校客員研究員（2006-）、ニューヨーク市立大学大学院客員研究員（2013-）【学位】Ph.D.（言語学、心理学）（マサチューセッツ工科大学 1972）【専攻・専門】言語学

【主要業績】

[論文]

Fischer, S. D.

- 2011 Nominal Markers in ASL (with foreword, afterword, and commentary). *Sign Language & Linguistics* 15(2): 243-250.
- 2011 Marked Hand Shapes in Asian Sign Languages. In R. Channon and H. van der Hulst (eds.) *Formational Units in Sign Language*, pp.19-41. Boston: DeGruyter.
- 2011 Numeral Incorporation in Taiwan Sign Language. In Jung-hsing Chang (ed.) *Language and Cognition: Festschrift in Honor of James H.-Y. Tai on His 70th birthday*, pp.147-169. Taipei: The Crane Press.

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

手話言語学研究のとりまとめと今後の方向性に関する検討

・研究の目的、内容

手話を対象とした記述言語学のみならず、手話言語の歴史変化の過程等についても深い造詣を持った研究者であること、また専門のアメリカ手話だけでなく、日本手話系の言語の調査も行っていること、さらに、音声言語学者が主として集まる研究集会へも積極的に参加しているという研究背景を活かし、機関研究「手話言語と音声言語の比較に基づく新しい言語観の創生」後半を迎えるにあたり、これまでのまとめと今後の方向性に関する検討を民博側の研究者と一緒に行う。また、昨年に引き続き、諸大学・機関において、集中講義、講演等を担当する。

・成果

機関研究プロジェクト「手話言語と音声言語の比較に基づく新しい言語観の創生」、および日本財団助成事業「手話言語学に関する講義の実施およびシンポジウム・セミナーの開催」に関して、そのとりまとめと今後の方向性に関する協議・検討を行った。また、手話言語学研究促進のための共同利用事業としての日本財団助成事業「手話言語学に関する講義の実施およびシンポジウム・セミナーの開催」（関連サイト <http://www.r.minpaku.ac.jp/shuwa/103.html>）関連では、関西学院大学での講義、香港中文大学、上海の復旦大学への出張を行った。

◎調査活動

・海外調査

2014年11月15日～11月23日—中国（復旦大学、香港中文大学において講演、及び手話言語学にかかる調査研究）

KANJOU, Youssef [カンジョウ、ユーセフ] ————— 准教授

任期：2014年3月17日～2015年3月16日

研究課題：戦争と博物館——戦火のものと文化遺産の保護とコミュニティの再生

【学歴】シリア国立ダマスカス大学理学部卒（1994）、メキシコ自治大学スペイン語デュプロマ課程修了（1997）、メキシコ自治大学人類学部修士課程修了（1999）、メキシコ自治大学人類学部博士課程修了（2002）【職歴】シリア国立アレppo博物館先史学部門副キュレーター（2003）、シリア文化省考古総局アレppo支局発掘部長（2004）、シリア国立アレppo博物館館長（2010）【学位】Ph.D.（人類学）（メキシコ自治大学 2002）、M.Sc.（人類学）（メキシコ自治大学 1999）【専攻・専門】人類学

【主要業績】

[論文]

Kanjou, Y.

- 2012 The Archeological Excavation Results in Necropolis of Menbej City. *Civilization Cradle Magazine* (Ministry of Culture, Syria) 15(16): 123-133 (in Arabic).

Mazurowski, R. F. and Y. Kanjou

- 2011 Preliminary Report on the Eleventh Season of Excavations at Tell Qaramel (Spring 2009). *Chronique Archéologique en Syrie*, DGAM 5: 19-30.

Nishiaki, Y., Y. Kanjo, S. Muhesen and T. Akazawa

- 2011 Newly Discovered Late Epipalaeolithic Lithic Assemblages from Dederiyeh Cave, the Northern Levant. In E. Healey, S. Campbell and O. Maeda (eds.) *The State of the Stone Terminologies, Continuities and Contexts in Near Eastern Lithic* (Studies in Early Near Eastern Production, Subsistence, and Environment 13), pp.79-89. Berlin: ex oriente.

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

戦争と博物館——戦火のもとの文化遺産の保護とコミュニティの再生

・研究の目的、内容

これまでアレッポ国立博物館館長就任とともに新規プログラムを立ち上げ、一部はすでに実施してきた。その経験を生かし、本館の機関研究「マテリアリティの人類学」の一環であるプロジェクト「文化遺産の人類学」に関連して、以下のような活動に従事する。1) 東日本大震災後の博物館復興支援プロジェクトへの参加。まずは震災時の日本における事例と、現在シリアの諸博物館が直面している問題の事例を比較研究する。その上で、文化遺産が紛争・自然災害のもとで直面する破損・消失・略奪等に対する防災と復元復興に有用な社会環境・技術・法律等に関する調査、研究をおこない提言する。2) ワークショップ・シリーズの開催。1) で得られた知見をもとに、現在のシリアが直面している問題や、やはり内戦を経験したレバノン、JICA 共催博物館学ワークショップにも参加者を派遣しているパレスチナの事例を比較し、戦災によるコミュニティの崩壊・再生と博物館の役割についてのワークショップ・シリーズを開催する。これにより、館内・館外の研究者との意見交換を活発におこない、機関研究の進展に貢献する。

・成果

民博における1年間の研究と収集資料整理の成果として、シリア、アレッポ博物館を事例に内戦下の文化遺産を保護するための新たな方策を構築中である。同時に、内戦下および将来において、特にローカル・コミュニティとの協力のもとに文化遺産を保護する最善の方法についてシリアの研究者仲間に提言した。さらに、民博での研究成果を下記の論文にまとめた。

◎出版物による業績

〔論文〕

Kanjou, Y.

- 2014 The Syrian Cultural Heritage Tragedy: Cause, Effect, and Approaches to Future Protection. (シリアの文化遺産の悲劇——原因・結果および保護に向けての今後の取り組み) 『歴史都市防災論文集』8: 271-278。

- 2014 An Anthropological Study of Neolithic Graves in Tel Qaramel, Northern Syria. *Adumatu Journal* 30: 7-19.

カンジョウ, ユーセフ

- 2014 「シリアの考古学的遺産の現状と将来」東京文化財研究所文化遺産国際協力センター編『シンポジウム Postwar Reconstruction of Syria and Cultural Heritage. (シリア復興と文化遺産) 報告書』pp.49-61。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2014年5月15日～18日 「内戦からの復興の展望——博物館と社会的絆」国際人類学・民族学科学連合(IUAES) 国際研究大会(日本文化人類学会50周年記念合同共催)、幕張メッセ

- 2014年6月9日～13日 「内戦下における保護戦略とアレッポ国立博物館」第9回国際古代西アジア考古学会議、スイス、バーゼル大学

- 2014年6月23日 「内戦下のシリアにおける文化遺産の惨劇」東京文化財研究所

- 2014年12月2日～4日 「内戦下におけるアレッポ国立博物館」危機的遺産研究所(ACHS)会議 キャンベラ、オーストラリア国立大学

KHOSRONEJAD, Pedram [ホスローネジャード、ペドラム]——准教授

任期：2013年9月13日～2013年6月20日

研究課題：イランにおける信仰とジェンダーの表象——映像資料に見るシーア派儀礼

【学歴】テヘラン芸術大学卒（1997）、テヘラン芸術大学修士課程修了（1999）、パリ社会科学高等研究院（EHESS）専門研究過程修了（2001）、パリ社会科学高等研究院（EHESS）博士課程修了（2007）【職歴】オックスフォード大学、東洋学研究所中近東学科研究員（2004）、オックスフォード大学、セント・アントニーズ・コレッジ中東センター若手研究員（2005）、セント・アンドリュース大学、社会人類学部特任研究員（2007）、セント・アンドリュース大学、社会人類学部専任研究員（2010-現在）、フランス国立科学センター（CNRS）「社会、宗教、世俗性」グループ客員（2010-2013）【学位】博士（社会人類学）（パリ社会科学高等研究院（EHESS）2007）、D. E. A.（美術史）（パリ社会科学高等研究院（EHESS）2001）、修士（美術史）（テヘラン芸術大学 1999）【専攻・専門】映像人類学

【主要業績】

[編著]

Khosronejad, P. (ed.)

2012 *Saints and their Pilgrims in Iran and Neighboring Countries*. Herefordshire: Sean Kingston Publishing.

2012 *Unburied Memories: The Politics of Bodies, and the Material Culture of Sacred Defense Martyrs in Iran* (Special Issue of the Journal of Visual Anthropology 25(1)). Taylor & Francis, USA.

2011 *The Art and Material Culture of Iranian Shi'ism: Iconography and Religious Devotion in Shi'i Islam*. London: I. B. Tauris Publishers.

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

イランにおける信仰とジェンダーの表象——映像資料に見るシーア派儀礼

・研究の目的、内容

ホスローネジャードは、イラン山岳遊牧民の宗教文化の研究者であると同時に、民族誌映画に関する国際的な学術行事をスイス、フランス、英国でオーガナイズするなど、欧州を拠点に活動してきた。自らもイランにおいて民族誌映像を制作しているが、映画やフッテージフィルムなども含めた映像資料を人類学においていかに活用するかという理論的な観点から、イラン関係の映像を多く収集してきた。このコレクションの中から、特にシーア派の宗教実践に係る映像を民博内外の研究者と共有し、信者が儀礼の中で体験する神や聖者とのつながりや、儀礼の場における男女の位置づけの違いを、民族映像がどのように捉えているかということを明らかにする。

・成果

1) 研究活動の概要

- ・国内のイラン研究者や学生と交流し、研究活動の支援、将来的な日本の研究機関とセント・アンドリュース大学（スコットランド）社会人類学部の共同研究プロジェクトを提言した。
- ・イラン研究およびイスラム研究に関する研究会、セミナー、学会に大阪、京都、東京各地で参加した。

2) 研究成果の概要

- ・EASA 2014、中東・中央ユーラシア人類学第1回民族誌映像・メディアプログラムの制作。
- ・EASA 2014、現代における中東・中央ユーラシアの人類学と人類学者の将来像（討論会）。
- ・聖者崇拜についての編集版（2015年初旬に出版予定）。

KIM Chang-ho (金 昌鎬) [キム チャンホ]——准教授

任期：2014年7月1日～2015年6月29日

研究課題：Digital Signage 技法を活用した博物館所蔵標本の情報サービス及び Virtual Museum 改善方案の研究

【学歴】韓神大学校宗教学科卒（1999）、漢陽大学校大学院文化人類学科修士課程修了（2002）、漢陽大学校大学院文化人類学科博士課程修了（2007）【職歴】漢陽大学校 ERICA 付設民族学研究所研究助教（1999）、韓国国立民俗博

博物館民俗研究科研究員（2002）、韓国国立民俗博物館 専門契約職ニ級（2007.2-8）、韓国国立民俗博物館遺物科学科民俗アーカイブ学芸研究士（2007）、韓国国立民俗博物館展示運営科学芸研究士（2010）、韓国国立民俗博物館民俗研究科学芸研究士（2013）【学位】修士（漢陽大学大学院 2002）【専攻・専門】文化人類学

【主要業績】

〔修士論文〕

金 昌鎬

2002 『韓国巫の他界観研究』 漢陽大学校。

〔論文〕

金 昌鎬

2004 「韓国の符籙に関する小考」『生活文物研究』（韓国国立民俗博物館）12：53-73。

2002 「韓国巫俗の死（Death）と再生（Rebirth）」『韓国巫俗学』（韓国巫俗学会）5：31-56。

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

Digital Signage 技法を活用した博物館所蔵標本の情報サービス及び Virtual Museum 改善方案の研究

・研究の目的、内容

1) 進行中の研究概要

- ・人間の文化（生活史）を主題にする博物館で標本の物理的な情報のみならず、それに内在した人間の文化（行為）を効果的に伝達することのできる必要性が台頭——多様な媒体を活用した情報伝達の方法の模索が必要
- ・“博物館の資料はそれ自体も重要であるが、資料自体は文化についてのアイコン（icon）であるだけで、文化と人間を直接的に代弁することはできない”と認識
- ・資料に内在した文化的基盤の表現が排除された博物館→資料についての形態・材質・時代などの情報を越え、資料に内在した文化的基盤までも見せることのできる博物館を模索

2) 進行的研究の目的

- ・博物館所蔵資料に含意された文化を効果的に表現する多様な説明技法の創出
- ・進歩した情報の具現技術の積極的な活用を通して観覧客の知的欲求に即刻反応することのできる対話型（双方向）展示技法の開発：博物館型 Digital Signage のモデル確立
- ・民族学博物館としての変化を志向する韓国国立民俗博物館が多くの地域・民族の文化的特徴を多様な方法で導出・表現が可能のように企画力と技術力を蓄積

3) 今後の研究方向

- ・民族学博物館として世界的な認知をもつ国立民族学博物館の所蔵品を中心に民族学資料についての博物館型 Digital Signage の基本運用モデルを設計
- ・博物館観覧客を対象とした対話型（双方向）Digital Signage モデルを発展させ Virtual Museum に接続、on-line と off-line が統合した情報の能動的な伝達体系を模索
- ・Virtual Museum に積極的な関心をもつ者への情報伝達力の強化方案を研究：Retargeting 技法の活用など、多様な方案を通して on・off-line 博物館の調和する発展方向を設定

・成果

日本の国立民族学博物館と韓国国立民俗博物館が志向するフォーラム型情報ミュージアムについて、その具体的方法論について相互に検討していくための基礎的研究を行った。

- ・国立民族学博物館における民族学資料の情報化に関する研究についてレビューを行った。
- ・国立民族学博物館の情報学研究スタッフおよび情報システム課のスタッフの協力を得て、韓国国立民俗博物館が志向する民族学資料の情報化と本館のそれとの接点について検討した。

2015年度に両館で共同開催をする特別展の準備作業を行った。

◎調査活動

・海外調査

2014年8月28日～8月31日—韓国（韓国国立民俗博物館との共同進行プロジェクト、フォーラム型情報ミュージアム構築と関連会議に参加）

2014年11月23日～12月2日—韓国（民博と韓国国立民俗博物館の共同進行特別展示に活用可能な遺物実査及び、資料の収集）

2015年3月24日～4月1日—韓国（民博と国立民俗博物館（韓国）の共同進行プロジェクトと関連して対象の遺物を点検）

NARENGERILE（娜仁格日勒）〔ナランゲレル〕——教授

任期：2014年4月3日～2015年2月28日

研究課題：東スニト旗の社会変容：1944～2014年——梅棹資料を手掛かりに

【学歴】内モンゴル大学哲学学部大学本科卒（1987）、京都府立大学文学部史学科研究生（1997-1998）、大阪外国語大学大学院地域言語社会専攻修士学位取得（2000）、大阪外国語大学大学院博士課程学位取得（2003）【職歴】内モンゴル商業専門学校基礎教養学部助手（1987）、内モンゴル大学基礎教養部講師（1993）、桃山学院大学国際文化学部客員教授（2003）、内モンゴル大学外国語学院準教授（2004）、内モンゴル大学外国語学院教授（2008-）、国立民族学博物館外来研究員（2009-2010）、日本学術振興会外国人招へい研究者（長期）（2009-2010）【学位】博士（言語文化学）（大阪外国語大学大学院 2003）、修士（言語文化学）（大阪外国語大学大学院 2000）【専攻・専門】文化人類学、モンゴル社会研究

【主要業績】

〔単著〕

娜仁格日勒

2010 『赤い監獄の記——“二重の冷戦”と民衆の受難史：オーラル・ヒストリの視点から』京都：モンゴル原典研究会。

2005 『蒙古族祖先崇拝の固有特徴及其文化蘊涵：兼与日本文化的比較』北京：内蒙古教育出版社。

〔論文〕

娜仁格日勒

2011 「モンゴルの民間信仰における女性禁忌への文化人類学的アプローチ——ホルチン地方におけるオーラル資料を使って」『比較民俗研究』25：5-24。

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

東スニト旗の社会変容：1944～2014年——梅棹資料を手掛かりに

・研究の目的、内容

梅棹忠夫が1944年から1945年にかけて実施した内モンゴル牧畜民の調査の重点地域である東スニト旗に焦点をあてて、梅棹の調査資料を文献史料として扱い、当該地域で現在得られた実態調査資料と比較することによって、自然環境、人口構成、社会構造、経済生業状況などの諸側面における変化を明らかにし、梅棹資料を学術的に位置付けた。

・成果

- 1) 2012～2014年までに東スニトで実施したフィールド・ワーク資料を整理し、テキストを作成した。
- 2) 梅棹アーカイブズ資料を精査し、現在の実態調査資料と比較して、中国内モンゴルにおける諸集団の相互関係の変化を整理した。諸集団のなかでもとりわけ東スニト旗を含む内モンゴル各地のモンゴル族と漢族に焦点をあわせて、日本側の関連する日本語文献を渉猟し、裏づけ、論文を執筆した。
- 3) 日本で開催された各種の研究会および学会等に参加し、日本の研究者との議論を経ることによって梅棹研究の分析の範囲と精度を高めたうえで、共同研究「梅棹忠夫モンゴル研究資料の学術的利用」（2011～2014年度、代表者：小長谷有紀）の成果として現地研究者の論文をとりまとめ、『梅棹忠夫の内モンゴル調査を検証する』として『国立民族学博物館調査報告』への刊行準備を終えた。

OSTAPIRAT, Weera^[オスタピラト、ウィーラ]———准教授

任期：2013年6月18日～2014年6月17日

研究課題：クラ・ダイ祖語の語彙再建とオーストロ・タイ（クラ・ダイとオーストロネシア）系民族の歴史

【学歴】ラムカムヘン大学卒（1987）、カリフォルニア大学バークレー校修士課程修了（1996）カリフォルニア大学186バークレー校博士課程修了（1999）【職歴】カリフォルニア大学バークレー校（シナ・チベット語源辞典・分類語彙プロジェクト）研究員（1994）、国立民族学博物館外国人研究員（2000）、台湾中央研究院語言学研究所客員研究員（2002）、マヒドール大学アジア言語文化研究所（タイ）准教授（2005）【学位】博士（言語学）（カリフォルニア大学バークレー校 1999）、修士（言語学）（カリフォルニア大学バークレー校 1996）【専攻・専門】言語学（タイおよび東南アジア諸言語、歴史比較言語学）、言語民族文化史

【主要業績】

[論文]

Ostapirat, W.

- 2013 Northern-Min glottalized onsets and the principles of tonal split and tonal merger. In Peng Gang and Shi Feng (eds.) *Eastward Flows the Great River (Festschrift in Honor of Professor William S-Y. Wang on his 80th Birthday)*. Hong Kong: City University of Hong Kong Press.
- 2013 The Rime System of Proto-Tai. *Bulletin of Chinese Linguistics* 7(1): 189-227.
- 2009 Proto-Tai and Kra-Dai final *-l and *-c. *Journal of Language and Culture* 28.2: 41-56.

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

クラ・ダイ祖語の語彙再建とオーストロ・タイ（クラ・ダイとオーストロネシア）系民族の歴史

・研究の目的、内容

これまで、クラ・ダイ祖語の数百に及ぶ共通語根を再建し、そこに反映された話者の歴史に関する研究をすすめてきた。今回の招聘期間中は、そのなかでも特に、オーストロネシア系民族との関係を解明することを目的とする。

クラ・ダイ祖語は、中国南部から東南アジアの地域にまたがる、タイ系およびラオ系の民族の属する重要な言語グループの祖語をさす。現在クラ・ダイ系民族は中国広東省からインド・アッサム地方、そして雲南省からマレー半島にかけて広範囲に居住している。再構された語彙は、社会的・文化的に意味を持つグループごとに分類することが可能と考えられ、それに基づき、クラ・ダイ系民族の先史における世界観、生活、社会の構図を浮かび上がらせること、さらには歴史を共有し、もしくは文化接触のあった他の民族の生活史をも明らかにできると考えられる。

・成果

クラ・ダイ語系の特定の18言語を選び包括的なデータベースを再建した。歴史言語学の比較研究法に基づきクラ・ダイとオーストロネシアの語彙比較を体系的に行った。予備研究と研究成果はさまざまな場、すなわち MINPAKU Linguistic Circle の研究会、国際シンポジウム「ヒト・穀物・言語の拡散」（国立国語研究所、立川）で発表・発信した。またその他の研究会、特に、国際シンポジウム「アジア・太平洋における生物文化多様性」（総合地球環境学研究所、京都）や、総合研究大学院大学国際シンポジウム「Modern Human Diversity on Genes and Culture」（総合研究大学院大学本部、葉山）では本研究について内外の研究者と討論や意見交換を行った。

クラ・ダイ祖語の約380語彙リストを作成した。各原語の推定形を再建したが、規則的音法則についての記述は総じてかなり確信のあるものである。本研究によりクラ・ダイ／オーストロネシアに関連するとみられる80～90の語根を発見した。予備研究の結果、基礎語彙、特に身体部分の語彙分野の共通語彙数の多さからクラ・ダイ／オーストロネシアは系統関係があることを示唆している。初期のクラ・ダイ／オーストロネシアの農業的関連性は“湿田”“米（総称）”“籾穀”“植える”などの共通の語根から考えられそうである。その一方、クラ・ダイにはオーストロネシアに広く分布する海や航海術に関する原語がなく、海洋志向のオーストロネシアの文化史がオーストロ・タイ系民族の祖先からの分離後、海に向かって展開したことに深い関連性があるのと対称的にクラ・ダイの祖先（おそらくオーストロ・タイ系民族）は陸地志向であったことを示している。クラ・ダ

イとオーストロネシア間の語彙上の関連性は、親族語彙（祖父母、父、子、娘婿、配偶者 等）、代名詞（I, we, thou, you 等）、野生動物（例：クマ、カワウソ、鳥、ヒル、ムカデ）、植物（例：タロイモ、ゴマ）、天然資源（例：火、水、月、雨）、物質文化（例：船）、記述的な動詞や感覚（例：生の、酸っぱい、黒い）、数字（1～10の基本数字）等の分野に顕著である。

STRATHERN, Andrew [ストラサーン アンドリュー]——教授

任期：2014年4月1日～2014年6月30日

研究課題：自然災害とその後——被災者はいかに対応し、希望をもつか

【学歴】 ケンブリッジ大学トリニティ・カレッジ卒（1960）、ケンブリッジ大学大学院（Ph.D取得）（1965）【職歴】 ケンブリッジ大学トリニティ・カレッジ研究員（1965）、オーストラリア国立大学太平洋研究所研究員（1969）、パプアニューギニア大学教授（1973）、ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン人類学科教授（1976）、国立パプアニューギニア研究所所長（1981）、ピッツバーグ大学、アンドリュー・メロン客員教授（1987）、ジェームズ・クック大学太平洋研究所所長（1996）、ピッツバーグ大学、アンドリュー・メロン特別教授（1988）【学位】 Ph.D.（ケンブリッジ大学大学院 1965）【専攻・専門】 社会人類学

【主要業績】

[共著]

Strathern, A. and P. J. Stewart

2011 *Peace-making and the Imagination: Papua New Guinea Perspectives*. Brisbane: University of Queensland Press.

Strathern, A. and P. J. Stewart

2011 *Kinship in Action: Self and Group*. Upper Saddle River, N. J.: Prentice Hall Publishing.

Stewart, P. J., A. Strathern, J. Trantow

2011 *Melpa-German-English Dictionary*. Pittsburgh, PA: University of Pittsburgh Library System.

【2014年度の活動報告】

◎各研究

・研究課題

自然災害とその後——被災者はいかに対応し、希望をもつか

・研究の目的、内容

過去数年間にわたり、東アジア・オセアニア地域における大規模自然災害被災地（パプアニューギニア、西サモア、ニュージーランド、台湾南部など）でエスノグラフィー調査に基づく、災害研究をおこなってきている。研究テーマは、人びとが絶望という状況から協働しながら自らの生活再建への希望を見出し、それがコミュニティの復興に結びついていくプロセスを明らかにすることにある。これまでの研究で構築したこの「共生と希望」のモデルを発展させるため、東日本大震災に関する研究を日本の人類学者とともに実施し、上記の調査地でこれまで共同研究を実施してきた研究者や、海外の被災地調査に従事する日本の人類学者をも含めたネットワークを拡充し、災害人類学の確立とさらなる発展を目指す。

・成果

- 1) 災害人類学者の国際ネットワークを確立した。
- 2) 民博のジョージ・ブラウン・コレクション研究の今後の取り組みを企画した。
- 3) ノースカロライナのカロライナ・アカデミック・プレスと出版契約している次の著作にテクニカルな付加した。
Stewart, Pamela J. and Andrew Strathern. *Diaspora, Disasters, and the Cosmos: Rituals and Images*. Durham, N. C.: Carolina Academic Press. (契約済、出版準備中)

◎出版物による業績

Stewart, P. J. and A. Strathern

2014 *Working in the Field: Anthropological Experiences across the World*. Palgrave Macmillan (<http://us.macmillan.com/workinginthefield/PamelaJStewart#>).

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年5月12日 (Pamela J. Stewart and Andrew J. Strathern) ‘Local Peace-making Strategies and Meta-pragmatics.’ “Real and Symbolic Paths to Conflict Transformation and Cultural Reclamation,” 2014 OICD (Organization for Intra-Cultural Development) Annual Workshop, Doshisha University

2014年5月12日 (Andrew J. Strathern and Pamela J. Stewart) ‘Past and Present Ethnography and Shifting Strategies of Conflict Resolution.’ “Real and Symbolic Paths to Conflict Transformation and Cultural Reclamation,” 2014 OICD Annual Workshop, Doshisha University

◎調査活動

・国内調査

4月21日-24日一宮城県名取市（仙台における災害復興に関する現地調査）

・海外調査

2014年5月16日～6月7日ドイツ（アウグスブルク大学での特別講義及び平和と紛争、災害に関連する資料・情報収集）

YONENO, Michiyo (米野みちよ) [よねの みちよ] ————— 准教授

任期：2014年4月1日～2014年6月30日

研究課題：民博映像番組の有効利用に関する研究

【学歴】東京芸術大学音楽学部楽理科学士課程（音楽学専攻）卒（1991）、アジア典礼音楽研究所研究生（1993-1994）、フィリピン大学音楽学部修士課程（音楽学専攻）修了（1998）、フィリピン大学社会科学哲学フィリピン研究プログラム博士課程（フィリピン研究専攻）修了（2011）【職歴】日本近代音楽館「新聞に見る日本の洋楽プロジェクト——明治編」調査員（1990）、フィリピン大学アジアセンター大学院専任講師（1998）、フィリピン大学アジアセンター大学院助教授（2005）、フィリピン大学アジアセンター大学院准教授（2012）【学位】Ph.D（フィリピン大学 2011）【専攻・専門】民族音楽学、地域研究

【主要業績】

[論文]

Yoneno, M.

- 2011 Singing of Modernity and US Shadow: Bodily Aesthetics and Ideology in Salidummay and Shoka. In K. Fujiwara and Y. Nagano (eds.) *The Philippines and Japan in America's Shadow*, pp.229-260. Singapore: National University of Singapore Press.
- 2002 Under Attack: Impact of Mass Media Technology on Indigenous Musical Practice in the Cordillera in the Philippines. In T. Craig and R. King (eds.) *Global Goes Local: Popular Culture in Asia*, pp.40-57. Vancouver: University of British Columbia Press.
- 2010 Song of Women?: A Reflection on Singing and Gender Complementarity in Modernizing Indigenous Communities in Northern Philippine Highlands. *JATI (Journal of Southeast Asian Studies)* 15: 61-81.

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

民博映像番組の有効利用に関する研究

・研究の目的、内容

米野は、受入教員の寺田吉孝が2008年にフィリピン・ルソン島でおこなった映像音響資料収集プロジェクトに参加した。本研究の目的は、このプロジェクトで収集した音響資料に基づいて、映像番組を編集するとともに、その過程で伝統音楽の継承における、映像メディア活用の可能性を検討することである。とくに、取材対象国・地域における映像番組の有効利用のための具体的な方法と問題点を整理検討する。

・成果

主な取材地としたタブク町とバルバラサン村は、報告者が長年調査を継続している地域である。編集にあたっては、現地の生活における音楽の重要性が十分に理解できるよう、これまでの経験と研究成果を生かすように努め、現地における有用性を高めるために、日本語、英語、イロカノ語の3言語で制作をおこなった。また、映像音響番組における文字情報の出し方に留意し、映像音響メディアの特性を最大限に引き出すための編集方法を議論しながら作業を進めた。番組中では、文字情報を最小限に抑え、追加情報を提供する方式について議論を重ね、ブックレットを作成することが実現の可能性が高いだけでなく、映像音響メディアの活用の面からも最も効果的であるという結論を得た。ブックレットの完成にはいたらなかったが、記載内容について取捨選択をおこなった。ブックレットの作成を念頭において、編集をすすめ、番組の制作を無事終えることができた。

WILDE, Guillermo [ウィルデ・ギジェルモ] 准教授

任期：2015年1月16日～2016年1月14日

研究課題：ラテンアメリカとアジアにおけるキリスト教宣教と文化適応の比較研究

【学歴】 ブエノスアイレス大学哲学文学部人類学専攻卒（1999）、ブエノスアイレス大学哲学文学部人類学専攻博士課程修了（2003）【職歴】 国立科学技術研究会議（アルゼンチン）研究員（2005-）、ヌエストラセニョーラデアスンシオン・カトリカ大学大学院（パラグアイ）社会人類学専攻客員教授（2007）、国立サンマルティン大学（アルゼンチン）社会科学高等研究所准教授（2008-）、教皇庁立リオグランジドスウ・カトリカ大学大学院（ブラジル）歴史学専攻客員教授（2008）、リオデジャネイロ連邦大学大学院社会人類学専攻客員教授（2009）、社会科学高等研究所（フランス）宗教人類学センター客員教授（2010）、国立ミシオネス大学大学院（アルゼンチン）社会人類学専攻客員教授（2010）、パリ第3新ソルボンヌ大学ラテンアメリカ高等研究所パブロ・ネルーダ講座客員教授（2010-2011）【学位】 Ph.D（ブエノスアイレス大学 2003）【専攻・専門】 文化人類学

【主要業績】

[単著]

Wilde, G.

2009 *Religión y poder en las misiones de guaraníes*. Buenos Aires: Editorial SB.

[編著]

Wilde, G. (comp.)

2011 *Saberes de la conversión: jesuitas, indígenas e imperios coloniales en las fronteras de la cristiandad*. Buenos Aires: Editorial SB.

[論文]

Wilde, G.

2011 Entre las tipologías políticas y los procesos sociales: elementos para el análisis de liderazgos indígenas en una frontera colonial. *Revista Anos 90* 18(34): 19-54.

【受賞歴】

2010 Premio iberoamericano of Latin American Studies Association

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

ラテンアメリカとアジアにおけるキリスト教宣教と文化適応の比較研究

・研究の目的、内容

16世紀から18世紀にかけてのラテンアメリカのカトリック修道会の宣教活動を、同時代のアジアのそれと比較し、共通点と相違点を明らかにする。基本的な問題設定は次のふたつである。1) 世界宣教のネットワークの解明。宗主国の首府や修道会の本部が位置したヨーロッパの中枢と、宣教活動が展開されたラテンアメリカやアジアの辺境はどのように結ばれていたのか。辺境地域相互の関係はどのようなものだったのか。人やもの、情報の往還はどのようになされたのか。2) 文化適応の実態の解明。ヨーロッパ人宣教師と現地の人びとは互いをどのように認識し、どのように対応したのか。他者理解や文化相対主義はどの程度発達しえたのか。排斥され

るものと受容されるものの境界はどのように引かれたのか。社会や文化の混淆や融合はどのような形態をとったのか。

・成果

1月16日に国立民族学博物館に着任して以降、近世の日本・中国・インドにおけるカトリック修道会の文化適応に関する先行研究を収集し、検討した。また、共同研究『近世カトリックの世界宣教と文化順応』のメンバーを中心に、日本在住の研究者と交流し、意見交換を行った。3月末には中国に出張し、南米辺境のカトリック修道会の集住政策について報告するとともに、現地の研究者と交流した。

◎出版物による業績

[その他]

Wilde, G.

2014 Imagining Guaranis and Jesuits: Yesterday's History, Today's Perspective. *ReVista: Harvard Review of Latin America* 14(3): 58-60.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2015年2月21日 「Writing Rites, Translating Concepts, Appropriating Customs: Missionary Anthropology in the South American Borderlands of Iberian Empires」『近世カトリックの世界宣教と文化順応』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年3月27日 Resettlement Policy in the Colonial Borderlands of Iberian Empires: Ethnocide, Ethnification, Ethnogenesis? 国際シンポジウム: Migration, Ethnicity, and the State. Guangzhou, China: Sun Yat-Sen University

◎調査活動

・海外調査

2015年3月22日～3月31日—中華人民共和国（近世カトリックの世界宣教に関する文献調査とシンポジウム参加）

2 研究および共同利用

概観

本館の研究は2004年度の法人化以降、「機関研究」「共同研究」「各個研究」という3種類の研究を柱としている。「機関研究」は近年の研究動向や問題の所在を調査した上で、研究テーマを設定し、本館が全館規模で取り組む研究活動である。2010年4月より法人化第2期を迎えるにあたり、2009年10月から新たな研究領域「包摂と自律の人間学」と「マテリアリティの人間学」を設定し、研究プロジェクトを開始した。

「共同研究」は、ある共通の研究テーマの下に複数の研究者が集まって研究会などを開催し、共同で研究をおこなう活動で、本館の研究活動の柱の1つであるとともに、大学共同利用機関としての「共同利用」の一環でもある。機関研究が研究テーマの設定やプロジェクトの選定から、その運営、成果の公表まで本館主導でおこなうのに対して、共同研究は研究テーマと組織について、館員のみならず、本館を共同利用する研究者の自主的な提案に基づく。すなわち、館員（客員教員を含む）を対象とした館内募集に加えて、公募もおこなっている。応募された共同研究の提案は、館内募集、公募の区別なく共同利用委員会で審査され、選定される。また、2010年度から「若手研究者による共同研究」が制度化され、一般の共同研究と同様に公募している。さらに、2004年度以来、共同研究会のメンバーだけではなく、研究者、学生、一般への研究会の公開を推進している。

「各個研究」は、館員（客員教員を含む）が自主的にテーマを設定して、個人で実施する研究であるが、館の公的な研究活動の一環に組み入れられている。

館の研究活動である「機関研究」や個々の研究者による「各個研究」を資金面でサポートするのが、館長リーダーシップ経費と科学研究費助成事業などの外部資金である。前者では「研究成果公開プログラム」という枠組みがあり、機関研究プロジェクト以外の大規模なシンポジウムの実施をはじめ、共同研究や各個研究の成果を公開するための研究フォーラムや国外の学会、研究集会での発表を支援するものである。

しかし、4件の機関研究プロジェクト、39件の共同研究、客員教員や外国人研究員、機関研究員などを含めると100を超える各個研究の研究資金を運営費交付金だけから捻出することは到底できない。さらに研究に客観性を担保していく上でも、科学研究費助成事業などの競争的外部資金の導入を積極的に行っている。そのほか、日本学術振興会以外の独立行政法人が募集する助成金や民間の助成団体による奨学寄付金なども積極的に受け入れている。これら外部資金に付随する間接経費は貴重な研究支援経費となっており、それらを使用した館内の研究環境整備事業が実施されている。なお、館長リーダーシップ経費の「事業・調査経費」という枠組みも同じ目的で使われる。

また、本館が属する人間文化研究機構が主催する研究として「連携研究」が2005年度から本格的に始動した。連携研究は、人間文化研究機構を構成する6機関（国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国立国語研究所、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所、国立民族学博物館）が連携してさらに高次の研究を目指すもので、「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」、「『人間文化資源』の総合的研究」、「大規模災害と人間文化研究」という3種類の大型プロジェクトが実施されている。

本館における研究成果公開の主軸のひとつである刊行物に関しては、2014年度には『国立民族学博物館研究報告』39巻1号～4号が刊行されるとともに、SES (Senri Ethnological Studies)、SER (『国立民族学博物館調査報告』または Senri Ethnological Reports)、『国立民族学博物館論集』、『民博通信』、『研究年報2013』が刊行され、外部出版制度を利用した成果公開も行った。さらに、研究成果を広く市民に公開するための学術講演会を、東京と大阪で開催している。

2014年度に共同利用に関してその強化を目的とする改革をおこなった結果、本館の共同利用では共同研究の公募、公開の推進と資料・設備の共同利用の促進を強調するようになった。なお、従来から、共同利用を積極的に推進するために、「外来研究員」「特別共同利用研究員」といった研究員制度を設けており、若手研究者の育成支援もおこなっている。

本館は開設以来40余年にわたり世界の民族と文化、社会を研究し、多様な有形・無形の民族資料とそれらに関連する情報を集積してきた。本館では、それらの資料と情報を「人類の文化資源」と位置づけ、同時代の人々と共有し、かつ後世に伝えるため、国際共同研究を組織し、国内外の複数の研究機関、大学、博物館、現地社会と連携しながら研究を推進している。この実現のため、グローバルな共同利用デジタル・データバンクとして「フォーラム型情報ミュージアム」を創出し、人類の文化資源に関する情報の発信、交換、生成、共有化を図る「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」プロジェクトを立ち上げた。このプロジェクトによって、研究者コミュニティのみならず、文化資源を作り出した現地社会との双方向的な交流も実現したいと考えている。初年度となる2014年度は、北米先住民や韓国の文化資源等に関する4件の研究プロジェクトの活動やシステムの基本設計を開始した。

本館の資料は2004年度より標本資料、映像音響資料、文献図書資料、民族学研究アーカイブズ資料に大きく4分

類されている。それぞれの整備および利用状況をみると、まず標本資料は、文化資源プロジェクトの一環として海外資料収集が行われており、寄贈などにより新たに加わった資料もある。映像音響資料の収集も文化資源プロジェクトの一環として行われている。

文献図書資料に関しては、継続的な事業として国立情報学研究所 NACSISCAT（全国規模の総合目録データベース）への登録作業を推進している。2014年度は日本語図書約10,000冊を始めとしてサンスクリット語図書1,452冊、その他諸語の図書約4,400冊の他、コレクション資料から牧野漢籍7,089冊を登録した。週及入力事業で登録された所蔵情報は、本館の図書システムの蔵書データベースとして、Internet を介して広く公開・利用されており、2014年度は本館所蔵図書資料の相互利用での貸出受付が833件、文献複写受付は1,898件と、大学間の共同利用に大きく貢献していることがわかる。また、館外者への貸出冊数も、延べ1,774冊と好評である。

2007年度より民族学研究アーカイブズの共同利用を促進するため、ホームページを開設し、各アーカイブの目録等を公開してきた。2014年度は、泉靖一アーカイブ、馬淵東一アーカイブ、北村甫旧蔵資料（仮称）アーカイブの権利処理を完了するとともに、梅棹忠夫アーカイブのリストを Web 公開した。また、岩本公夫アーカイブの写真資料2,237点をデジタル化し、全5,323点のデジタル化を完了した。

2006年度に「民族学資料共同利用窓口」を設置し、利用に関する多様な問い合わせを1つの窓口で対応することにより、利用者に対するサービス向上を図っている。2014年度には402件の問い合わせに対応し、利用促進に寄与した。

また、蔵書点検5年計画の2年目として、視聴覚室資料、大型図書（書庫1層）、漢籍（書庫2層）の実査に加えて、雑誌（書庫2層）約3万3千冊の資料に「カラーバーコード」を貼付し、総計5万冊の点検をおこなった。また、昨年度より整理およびリスト化を実施していた地図資料（約5万枚）についても、整備が完了し、そのリストに沿った配置換えも実施した。

2-1 みんなの研究

機関研究

●機関研究の意義

本館では、現代世界が直面する学術的かつ社会的に重要な諸課題について探求するため、本館の組織をあげて重点的に取り組む大型で公開性の高い共同研究として、2004年度から機関研究を実施している。機関研究は、国内外の大学や研究機関との連携や学術協定に基づき研究者が参加する国際共同研究である。その研究プロジェクトの内容は、申請時に大学・研究機関などの外部評価者の意見を反映させるなど、大学共同利用機関として研究者コミュニティの意見が十分に反映されるような体制がとられている。また、機関研究ではプロジェクトに参加する海外の研究者をも国際共同研究員に任じており、本館と海外の研究者との連携を強化する機能も担っている。

2009年度には、それまで4つに分かれていた研究領域の改組を行い、学術的かつ社会的な要請に基づいて、「包摂と自律の人間学」と「マテリアリティの人間学」という2つの研究領域をたちあげた。前者は人と人の関係に、後者は人とモノの関係に研究の焦点をあわせつつ、新たな社会観や人間観の創出をめざして関連諸分野の研究者と協力しながら研究を実施している。

研究領域「包摂と自律の人間学」では、「中国における家族・民族・国家のディスコース」（代表者：韓 敏）の1件のプロジェクトが展開している。一方、研究領域「マテリアリティの人間学」では、研究プロジェクト「民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究——ロシア民族学博物館との国際共同研究」（代表者：佐々木史郎）、「手話言語と音声言語の比較に基づく新しい言語観の創生」（代表者：菊澤律子）および「文化遺産の人類学——グローバル・システムにおけるコミュニティとマテリアリティ」（代表者：飯田 卓）の合計3件のプロジェクトを行っている。

「包摂と自律の人間学」では、2014年11月に国際シンポジウム「中国文化の持続と変化——グローバル化の中の家族・民族・国家」（本館開催）を開催した。

「マテリアリティの人間学」では、国際ワークショップ「民族学博物館の展示基本構想」（2014年6月、ロシア民族学博物館で開催）、国際シンポジウム「言語の記述・記録・保存と通モード言語類型論」（2014年10月、本館開催）、国際フォーラム「紛争地の文化遺産と博物館」（2015年2月、本館開催）を含め合計9件の国際研究集会を開催した。

以上のように、両領域において国際シンポジウムなどによる研究成果の公開を着実に進めている。

また、機関研究プロジェクトが当初の目的に沿って効果的かつ適切に達成されたかについて評価するとともに、

将来における機関研究の水準の向上とさらなる発展に資する助言を受けるため、「機関研究プロジェクト評価要項」を2013年6月に策定した。2014年度には、要項に基づき3人の委員からなる機関研究プロジェクト評価委員会を立ち上げ、2013年度末に終了した2件の機関研究プロジェクトについて評価を実施した。

2014年度機関研究一覧領域

領域	プロジェクト	代表者	研究年度
1 包摂と自律の人間学 (領域代表：塚田誠之)	中国における家族・民族・国家のディスコース	韓 敏	2012～2014
2 マテリアリティの人間学 (領域代表：寺田吉孝)	民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究 ——ロシア民族学博物館との国際共同研究	佐々木史郎	2012～2014
	手話言語と音声言語の比較に基づく新しい言語観の創生	菊澤律子	2013～2015
	文化遺産の人類学——グローバル・システムにおけるコミュニティとマテリアリティ	飯田 卓	2013～2015

●機関研究の領域とプロジェクト

1 「包摂と自律の人間学」 領域代表：塚田誠之

グローバル化が進む状況において人と人の関係を、人類学を核としつつ学際的に再検討して、新しい社会の構築を展望する。現代社会においては、マイノリティの自律性を保つとともに、社会的公正をめざす思想や方策が求められている。具体的には、公共圏や市民運動、ネットワーク、トランスナショナル、無国籍・重国籍、福祉、支援などが主要な研究テーマとなる。

「中国における家族・民族・国家のディスコース」

代表者：韓 敏 2012～2014

研究目的

家族・民族・国家は、人類の普遍的現象である。特に中国においては、家(jia)、族(Zu)、華夷、民族、国家などの概念は、複合的社会関係を生み出す仕組みとして機能してきた。また、中国の歴史を貫き、社会構造の連続性と非連続性を作り出す重要な要素でもある。上記の概念の中に家、族、華夷のような、歴史において中国人が自ら形成したものもあれば民族、国家のような外部から導入され、制度化されたものもある。王朝体制から共和制、社会主義国家へ、農耕社会から工業化・情報化社会への移行の中、上記の2種類の概念は複数の主体によって様々な状況に応じて再構築されている。グローバル化が進む近年、これらの概念は開発、福祉、移動、観光、文化遺産化などにおいて、人びとの関係や行動パターンを規制するディスコースとして再構築される局面をむかえている。

本研究の目的は、日本、中国、韓国、アメリカの中国研究者による国際共同研究を通して、中国の国民国家の成立と社会主義政権の誕生以降の家族・民族・国家の概念と動態を検討するところにある。またグローバルな観点から、中国の家族・民族・国家のディスコースの特殊性と普遍性の議論を通して非欧米型の人類学の視点と理論を構築する作業も射程に入れる。

実施状況

1) 国際シンポジウムの実施

2014年11月22日～23日、国際シンポジウム「中国の文化の持続と変化——グローバル化の下での家族・民族・国家(Continuity and Change of Chinese Culture: Family, Ethnicity and State under Globalization)」を本館で実施した。

2) 機関研究の成果刊行

2012年度に開催された機関研究・国際シンポジウム「中国の社会と民族——人類学的枠組みと事例研究」の成果をまとめ、2013年11月に中国語論文集『中国社会の家族・民族・国家的话语及其动态——东亚人类学者的理论探索』(Senri Ethnological Studies 90)を刊行した。

成果

- 1) 中国社会科学院民族学・人類学研究所などと連携して、中国、台湾、香港、韓国、アメリカ海外から13名の研究者を招き、機関研究の3回目の国際シンポジウムを開催した。1日目は70名、2日目は61名、合計131名の方が参加した。本企画は、これまでの成果と蓄積を活かし、歴史の視点から、中国の家族、民族、国家のディスコースとその動態を分析し、文化の持続と変化のメカニズムを考察した。また、中国本土に限らず、華人社会、カナダ、ロシア、韓国、日本などとの比較を通し、実体論的な見方というより、関係論の視野から、ディスコースがいかに交差して生成されて、人びとの生き方やアイデンティティに影響を与えているかを明らかにした。
- 2) 中国語論文集『中国社会的家族・民族・国家的话语及其动态——东亚人类学者的理论探索』（Senri Ethnological Studies 90）では、東アジアの視点から家族・民族・国家に関する機関研究の最新成果を世界に発信した。

本書は、14名の人類学者と歴史学者によって執筆され、①家族・民族・国家と生／熟のディスコース、②国家枠組みの中の文化遺産とその資源化、③歴史の視点からみる民族とその文化の構築の3つの部分によって構成されている。

第1部は中国社会の基本的な概念である家族を東アジアの中で比較し、ディスコースや制度としての中国の家族と東アジアの諸社会との類似性を提示した（末成道男）。また、「民族」構築の理論的系譜を旧ソ連およびヨーロッパの国民国家のモデルまでもさかのぼり、中国の国家レベルの民族のディスコースのもつ連続性を明らかにした（翁 乃群）。一方、国家と社会の対立関係を前提とする欧米の主流である抵抗論とは違って、中国の国家と社会の関係性において、両者間の共謀、競合と妥協の側面がむしろ多く観察されていることがわかった（金 光億）。近年、国境を超えた宗族のネットワークの形成、祖先崇拜や族譜編集などの復興などは、民間と国家の共謀によるものであることが事例として上げられている。

また、レヴィ＝ストロースの構造主義人類学の「生のもの／火を通してのものの」二分法をふまえた上で、漢族社会において、「生／熟」という二項対立のカテゴリーが食べ物からエスニックグループ、個人中心とした人間関係の作り方、人間の成長過程まで徹底されており、特にそれによる異民族への分類が、中国歴史上における複雑な民族間関係に計り知れない影響を与えたことが指摘された（周 星）。

第2部においては、ディスコース構築の諸主体とその構築プロセスに着目することにより、民族のディスコースが観光開発、アイデンティティの確立、建築や衣装の創出に活用される文化資源に転化したことを明らかにした（塚田誠之、色 音、河合洋尚、宮脇千絵）。アカデミックのディスコースが行政や経済的枠組みに組み入れた場合、本来多様で、流動的、包括的な文化現象を一律化、固定化あるいは分割してしまう傾向がある。また、構築されたディスコースは、時間と空間を越えて、影響力をもち続けたり、変えられたりすることもある。たとえば国家のコンテクストの中で、「迷信」のディスコースで語られてきた満州族の民間信仰の「焼香」とダフル族の「ワミナ儀礼」は、文化遺産ブームが高まる近年に、シャーマン文化のもつ国際性、観光資源としての価値が認められ、政府や知識人により「文化遺産」のディスコースに置き換えられた（劉 正愛、呉 鳳玲）。

第3部は、漢方薬の老舗や国際移民が、20世紀において社会主義の国民国家と地方行政の管理の枠組に組み入れられた過程（張 継焦、李 海燕）、都市開発におけるエスニック空間や歴史事件に関する複数の主体による異なるディスコース構築のメカニズム（今中崇文、田村和彦）を分析した。

東アジアの諸社会は、異なる近代化の道を歩んできたが、共通の文字と倫理基盤を共有してきた東アジアの人類学者には、問題意識と研究方法において多くの共通点が見られる。本書で見られたような家族に関する東アジアのモデル比較、人類学と歴史学の結合、ディスコースの構築をめぐる国家と社会の間の多様で柔軟な関係性のとらえ方は、東アジアの中国研究の特徴として発見されたと言える。これらは今後のさらなる国際共同研究の基礎となろう。

機関研究に関連した公表実績

韓 敏・末成道男

2014 『中国社会的家族・民族・国家的话语及其动态——东亚人类学者的理论探索』（Senri Ethnological Studies 90）大阪：国立民族学博物館。

韓 敏

2014 「日中の人類学の交流と今後の展開」『民博通信』146: 8-9, 国立民族学博物館。

2014年11月22日～23日、国際シンポジウム「中国の文化の持続と変化——グローバル化の下での家族・民族・国家（Continuity and Change of Chinese Culture: Family, Ethnicity and State under Globalization）」を本館で実施した。

http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/project/corp/human_world

2 「マテリアリティの人間学」 領域代表：寺田吉孝

グローバル化が進む状況においてモノと人の関係を、人類学を核としつつ学際的に再検討して、新しい人間観の構築をめざす。モノと人の関係を、産業化や都市化、越境化などの脈絡で問い直し、また長期的時間軸を視野にいれて歴史的にも究明する。物神化の問題、人によるモノの収集と所有の問題、人工知能や情報技術など先端的科学技術と人の関係などが主要な研究テーマとなる。

「民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究——ロシア民族学博物館との国際共同研究」

代表者：佐々木史郎 2012～2014

研究目的

本研究プロジェクトの目的は、民族学資料（標本資料と映像音響資料から構成される）の収集、保存、修復、情報化、そして利活用までを包括する総合的研究と実践を通じて、本館の大学共同利用機関としての機能と博物館としての機能を高め、その存在感を向上させることにある。そして、この目的を達成するために、2010年度に協定を締結したロシア民族学博物館（ロシア連邦サンクトペテルブルク市）との国際共同研究を実施する。本研究はマテリアリティ研究の最も基礎的な部分である、研究対象となるモノの選定、保存、記録化、情報化、そしてその価値の社会的、文化的文脈での見出し方を見直すものである。同時に、このような作業は博物館の実際の機能に欠かさないものでもある。本研究プロジェクトは基礎研究であるとともに、実践的な研究でもある。

なぜ、このような研究が必要なのか？実はこの種類の基礎研究は不断の見直しが必要とされるものである。「民族」の概念と社会的な枠組みは常に流動しており、民族学博物館が収集すべき資料もその時代によって変化する。また、過去の民族学資料の概念や枠組みに則って収集された資料の保存や管理、情報化、利用方法も不断に見直されていなければならない。しかし、日本の博物館はそのようなことを苦手とすることが多く、ことに本館ではそれが十分に行われて来なかったことは否めない。そこで古い伝統を持ち、資料の整理、管理、情報化でも長年の蓄積を持つロシアの民族学博物館の協力を得て、改めてその見直し作業に着手するわけである。ただし、本研究は本館とロシア民族学博物館との間だけでの共同研究にとどめるつもりはない。研究会や国際シンポジウムの際に2館以外からも研究者を招聘し、欧米やアジアの研究者や博物館とも情報交換を行う。それによって機関研究「マテリアリティの人間学」に基礎研究と実践研究の両面から貢献することを目指す。

実施状況

2014年6月24日から27日まで、ロシアサンクトペテルブルク市のロシア民族学博物館において、第4回国際ワークショップ「民族学博物館の展示基本構想」を実施した。まず6月24日に研究集会を行い、代表者の佐々木の他、班員の吉田憲司教授、研究協力者として吉本 忍名誉教授が研究報告を行い、ロシア側からはスヴェトラナ・ロマノヴァ研究員とイリーナ・カラベトヴァ主任研究員が研究報告を行った。それに引き続き、25日にはロシア民族学博物館の収蔵庫における資料保管状況の視察、同市にある26日には人類学民族学博物館と27日にはエルミタージュ美術館の展示状況の視察を行い、研究員、学芸員と意見交換を行った。

2015年3月9日から13日まで国際ワークショップ「民族学資料の展示への利用とソースコミュニティとの協力関係」を実施した。まず3月10日に国立民族学博物館において8本の研究報告が行われ、3月12日には北海道白老郡白老町にあるアイヌ民族博物館において2本の研究報告が行われた。そのほか3月9日と11日に国立民族学博物館における展示と収蔵施設の視察と検討が、12日にアイヌ民族博物館における展示の視察とそれを題材とした討論が行われた。また、13日には苫小牧市美術博物館において、展示と収蔵庫の視察、そして市民との協力に基づく博物館作りについての説明と検討を行った。

成果

今年度の展示を主要なテーマとして、研究報告と議論を行った。6月のロシア側でのワークショップでは、民族学博物館が現在求められる展示コンセプトとはいかなるものなのかということを中心に議論を行った。事例として、日本側からはアフリカの芸術家の協力の下に行った企画展の事例、織物・織機をテーマにした特別展の事例が出され、ロシア側からは仏教美術を題材とした企画展の事例、シベリアの先住民族の工芸を中心とした企画展の事例が報告された。また、視察ではロシア民族学博物館での民族衣装の企画展示とエルミタージュ美術館が最近開設した匈奴の遺跡から出土した織物、繊維製品に関する常設展示の制作について、展示を見ながらの説明と議論を行った。

3月のワークショップでは、おもに民族学博物館の展示制作における、「ソースコミュニティ」と呼ばれる展示資料や文化情報を提供してくれる人々の役割、博物館と彼らとの協力関係の構築についての諸問題を議論した。このワークショップにはロシア民族学博物館、アメリカ自然史博物館（ニューヨーク）、国立民俗博物館（ソウル）といった国立あるいはそれと同等以上の規模を持つ博物館の研究者を招聘し、そのような大型の博物館が、展示対象とする人々からの要請、需要に基づく展示をどのように制作したのかという点に着目した研究報告を行った。さらに、北海道白老町のアイヌ民族博物館に場を移して、先住民というソースコミュニティと国立クラスの博物館が展示、資料の収集管理をはじめ博物館運営のためにどのような関係を構築するのがよいのかについての議論を行った。

これら2回のワークショップの成果としては、まず民族文化の展示もあるいは民俗の展示も、展示資料や情報を提供してくれる生活世界を生きる人々との密接な信頼関係の構築が重要であること、さらには特に3月のワークショップで報告された事例では、展示資料や情報を提供してくれた人々が、同時に観客にもなるケースで、ソースコミュニティが展示や収集資料を消費したり活用したりするコミュニティにもなる場合に、どのような関係を構築すればよいのかということを考えさせられた。

機関研究に関連した成果の公表実績

昨年度10月13日、14日に実施した「博物館コレクションの中のシベリア、極東諸民族の文化——収集、保存、展示方法の検討」の報告書の原稿が整い、*Культура народов Сибири и Дальнего Востока в музейных коллекциях: методы сбора, учета, хранения и экспозиции*（博物館コレクションにおけるシベリア、ロシア極東諸民族の文化——収集、研究、保存、展示）としてSenri Ethnological Reportsの出版を申請し、採用が決定されている。現在査読の後、そのときのコメントにしたがって改稿を行い、最終稿が編集室に提出されて入稿を待つばかりとなっている。

また、6月のロシア民族学博物館での研究集会も、3月の国立民族学博物館での研究集会も研究者向けに公開し、前者で3名、後者では4名の研究者がオブザーバー参加した。

「手話言語と音声言語の比較に基づく新しい言語観の創生」

代表者：菊澤律子 2013～2015

研究目的

本プロジェクトは、言語と、言語を担うヒトとの関係を、手話言語と音声言語の比較を通じてとらえ直すことを目的とする。

言語は、客観的に観察可能であり記述の対象となるという点で、ヒトからは独立した存在であり、人間が用いるツールのひとつととらえることができる。人間の言語には、手話言語と音声言語というふたつの形態があり、コード化という面で共通性を持つ一方、伝達のために用いるのが音なのかビジュアル情報なのかという「モダリティ」の面で異なっている。言語学は、長く、音声言語を対象とした研究成果に依ってきており、手話言語の記述研究への関心が高まってきた当初は、その音声言語との共通性について論じられることが多かった。本プロジェクトでは、そこから一歩すすみ、モダリティの違いに起因する「違い」を論じることで、人間の言語をよりよく理解しようと試みる。

手話言語と音声言語の違いを見ることは、さまざまな面で、言語学における基本概念の見直しにつながる可能性がある。たとえば、時間軸に沿って一本の情報が流れ続けるとされる「言語の線条性」は、長く言語の基本的な特徴とされてきた。手話では、時間軸に沿う、という点では共通しているものの、同時に並行する複数の系統による表出が可能である。同時並行する情報を、手話話者はどのようにコードとして認識し、理解しているのだろうか？

モダリティの違いに焦点をあてることで、言語というツールを人間がどのように認識しつづけているのかを新たに認識し、これからヒトはどのように言語と付き合っていくのか、本研究により、単にその記述のための方法論にとどまるのではなく、言語教育や社会体制などといったより広い文脈においても考察することができるようになることが期待される。

実施状況

みんなく手話言語学フェスタ2014を以下の要領で開催した。

時 期：2014年10月4日～5日

場 所：国立民族学博物館

対象者：国内外の大学生、大学院生、および研究者（一般公開）

内 容：「言語の記述・記録・保存と通モード言語類型論」

手話言語学の研究成果を国内で紹介すると同時に、音声言語学の専門家とのディスカッションの場を持つことで、言語分析についての新しいアプローチの可能性を模索することを目的として、国際シンポジウム「言語の記述・記録・保存と通モード言語類型論」を開催した。言語研究におけるさまざまな分野をカバーし、ディスカッションのきっかけとするため、オムニバス形式の講演会方式をとった。手話言語学における最新の研究トピックの各発表に対し、音声言語学における研究成果をマッチングで報告してもらった後、講演者の間での公開ディスカッションの時間を設けることにより、各トピックにおける共通課題とモード（コミュニケーションの形態）の違いにもとづく相違点を明らかにする手がかりとすることができた。2日目の午後は、研究者のみのディスカッションタイムを設け、講演内容を掘り下げた。

成果

1年目は、手話言語学研究者と音声言語の研究者との接点をなかなか見いだせずにはいたが、2014年度のシンポジウムにおいては、手話言語の研究者と音声言語の研究者の間でテーマを合わせた発表を3組含めることができた。具体的には、アスペクト、方向動詞、調音器官と音韻論、というそれぞれの分野で、たとえば、調音器官についていえば、具体的な調音メカニズムの類似点と違い、音韻論についていえば人間の認知と弁別、アスペクトや方向動詞については、チャンネルにより何が表現できて何が表現しにくいのか等、対比するにあたり具体的な項目が話題となった。講演者の組それぞれの間での公開討論の場では、このような、チャンネルの異なる2種類の言語（視覚言語と聴覚言語）間の違いや共通点について議論を進めることで、研究の進め方についても手がかりが少し見えてきたと感じている。2014年度には手話言語のみについてのみの発表となったテーマについても、映像等での記録を利用し、次年度は対応する音声言語学の発表を招待するなどして、成果を広げてゆくことができればと考えている。

機関研究に関連した公表実績

講演等はすべて映像収録し、とくに大切と考えられるものについては、ろう者やろうの研究者への情報保障を考慮し、インターネット上で情報保障（字幕付き・手話通訳）付き映像資料として以下のサイトに掲載している（総合研究大学院大学学融合推進センタープロジェクト「手話言語学を世界へつなぐ——メディア発信とe-learning開発に向けて（研究代表者：菊澤律子）」ウェブサイト <http://www.minpaku.ac.jp/sokendai/ssll/index.html>）。

2014年分の映像については、現在、文字起こしおよび翻訳待ち状態となっており、映像配信アプリを利用して順次、上記ウェブサイトに掲載する。

なお、シンポジウム当日は、すべての講演内容とディスカッションをインターネット上で配信しており、さらに配信した映像については、館内でオフライン閲覧してもらえるよう、DVDの形に収録している。

「文化遺産の人類学——グローバル・システムにおけるコミュニティとマテリアリティ」
代表者：飯田 卓 2013～2015

研究目的

過去との結びつきを断とうとするモダニティの圧力が高まり、記憶が共同体のなかで無条件には存続しえなくなったいま、文化遺産を伝えようとする人びとがどのような物質的基盤をよりどころに過去との結びつきを保っているかを実証的かつ理論的に示す。また、過去との結びつきを模索する人たちの動きが合流し、文化遺産を支えるコミュニティがたち現われるプロセスを論ずる。

実施状況

前年度に引き続いて1回の研究打ち合わせをおこない、前年度から数えて2回にわたる打ち合わせの成果を国際シンポジウム、国際ワークショップ、公開フォーラムのかたちで公開した。以下、5月17日の分科会と6月28日の公開研究会をのぞいては、すべて民博を会場として開催した。

- 2014年5月17日 国際人類民族科学連合（IUAES）分科会「遺産は人びとを橋渡す」（千葉市幕張メッセで開催）
- 2014年6月26日 研究集会「島唄研究の来しかたとゆくえ」
- 2014年6月27日 公開研究会「文化遺産管理における住民参加」（文化遺産国際協力コンソーシアムと共同主催、大阪国際交流センターで開催）
- 2014年6月28日 公開フォーラム「和食は誰のものか？」（追手門学院大学と共同主催）
- 2014年11月8日 公開フォーラム「文化遺産の人類学」

2015年1月24日～25日 国際フォーラム「中国地域の文化遺産——人類学の視点から」

2015年2月7日 国際フォーラム「紛争地の文化遺産と博物館」

成果

2014年度は一般公開むけの企画を集中的におこなったため、文化遺産がもつ学術的な問題性を広く周知できたと考えている。とくに公開フォーラム「和食は誰のものか？」では、身近なユネスコ無形文化遺産のもつ課題を提示し、公開研究会「文化遺産管理における住民参加」と国際フォーラム「紛争地の文化遺産と博物館」では、文化援助や紛争解決といった問題に周辺住民がどのように関わるかを紹介した。また、国際フォーラム「中国地域の文化遺産」では、日本と同じ東アジア地域に属する台湾や、日本や台湾と文化行政の文脈を同じくしながら文化大革命を経験した中華人民共和国においてどのような文化運動が展開しているのか、国家制度的な枠組みを参照しながら議論していくことの意義を紹介した。

学術的な成果としては、文化遺産の問題を歴史学や美術史としての問題だけでなく、現在に生きる人々の生活実践の問題として捉えることの意義を多くの文化人類学者と共有し、ネットワークを形成できたことが大きな成果である（公開フォーラム「文化遺産の人類学」、国際フォーラム「中国地域の文化遺産」）。このことは、最終年度の2015年度にむけて、重要な布石となった。2015年度の最終シンポジウムは、2014年度に固めたネットワークをふまえて実施していく予定である。また、文化遺産を制度的に認定されたものにかぎるのではなく、現代社会において文化的実践がもつ意味を明らかにするヒューリスティックな（課題解決というより課題発見のための）概念として用いることの有効性も確認された。

上述したような一般的課題における文化遺産概念の有効性のほか、公開フォーラム「和食は誰のものか？」では、聴衆全体にとって身近な「和食」を無形文化遺産と位置づける場合の課題が、学術的にも、行政的にも、また生活と文化との関わりを考えるうえでも、解決すべきものとして残されていることが明らかになった。このことは、2015年度（最終年度）に無形文化遺産をテーマにシンポジウムを開催するうえで、論点整理の意義をもつ。また、学会分科会「遺産は人びとを橋渡す」、国際フォーラム「紛争地の文化遺産と博物館」、公開研究会「文化遺産管理における住民参加」では、それぞれ、復興災害や紛争解決、文化援助といった異なった文脈において文化遺産の問題が関わる局面を具体的な事例から明らかにすることができた。3つの問題に共通して指摘できるのは、担い手のいない「文化遺産」の担い手コミュニティを再構築していく過程で、多面的機能をもつ社会関係を構築できる可能性である。この目標を実現していくうえでは、偏狭なナショナリズムに陥らない方策を見きわめる必要があるが、目標そのものは、21世紀の文化が目ざすべきもっとも重要なもののひとつとして提起されうる。

機関研究に関連した公表実績

2013年に開催した国際シンポジウムでの報告と議論をもとに、“Heritage Practices in Africa”と題する論文集を編集集中である。この原稿は2014年度内にすべて集まる予定で、集まった原稿の書きかえなどの作業を2015年度にかけておこなう予定である（形態はSenri Ethnological Studiesを予定）。

IUAESの分科会として開催した国際フォーラムの結果も、原稿が集まりつつある。ただしこれは1冊の論文集とするには分量が不足しているので、2015年度に開催する国際シンポジウムの成果とあわせて出版する予定である（形態はSenri Ethnological Studiesを予定）。

公開フォーラム「文化遺産の人類学」でなされた報告は、同名の2巻本に収録するべく、出版社と連携しながら編集を進めている。この2冊本のなかには、国際フォーラム「中国地域の文化遺産」でなされた報告の一部や、レギュラーメンバーが継続的に議論してきた内容をふまえた論文も収録し、30章から成る予定である（形態は外部出版を予定）。

さらに、国際フォーラム「中国地域の文化遺産」で発表されたすべての報告は、Senri Ethnological Reportsの形態で総合討論を含めたプロシーディングズを刊行すべく準備が進んでいる。

人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築

2014年度から、本館が所蔵する様々な人類の文化資源をもとに国際共同研究を実施し、情報生成型で多方向的なマルチメディア・データベースの構築を行う、「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」を行っている。初年度は、プロジェクトに係る基盤構築として、フォーラム型情報ミュージアム委員会のもとにシステム開発WGを置き、資料データ整備やデータベース間の総合連携、公開方法等について検討を進めた。併せて、ウェブサイト公開のため、既存紙ベース『月刊みんぱく』378冊について、写真のデータ化及びPDF化を実施した。

また、「北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有」、「『朝鮮半島の文化』に関するフォーラム型情報ミュージアムの基盤構築」、「徳之島の民俗芸能に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」及び「民博所蔵『ジョージ・ブラウン・コレクション』の総合的データベースの構築」の4つの研究プロジェクトを開始し、ソースコミュニティとの共同作業、北アリゾナ博物館（米国）、アシウィ・アワン博物館・遺産センター（米国）及び国立民俗博物館（韓国）との国際学術協定に基づく国際共同研究等を通じて、情報の多層化、多言語化を推進した。

「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」研究プロジェクト

代表者*	プロジェクト課題名	区分	期間**
伊藤敦規	北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有	開発型	2013年6月～2018年3月
朝倉敏夫	「朝鮮半島の文化」に関するフォーラム型情報ミュージアムの基盤構築	強化型	2014年6月～2016年3月
福岡正太	徳之島の民俗芸能に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築	強化型	2014年6月～2016年3月
林 勲男	民博所蔵「ジョージ・ブラウン・コレクション」の総合的データベースの構築	強化型	2014年6月～2016年3月

*2014年度実施分

**開発型は4年以内、強化型は2年以内

「北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有」

代表者：伊藤敦規 2013～2018

実施状況

2014年6月から7月にかけて須藤健一本館館長と渡米し、本プロジェクトの連携機関を訪問した。連携機関であるコロラド州デンバーのデンバー自然科学博物館では、ジョージ・スパークス館長を表敬訪問した。本プロジェクトの国際共同研究員で人類学担当学芸員のチップ・コルウェル博士とステイブ・ナッシュ博士に展示場や収蔵庫を紹介してもらった後、博物館人類学の最前線について意見を交わした。7月4日には、本プロジェクト実施のために本館と連携機関である北アリゾナ博物館とが学術協定を交わすことになり、その調印式をアリゾナ州フラッグスタッフの北アリゾナ博物館で開催した。この日は北アリゾナ博物館のホビ展の開幕日でもあり、開幕式にて須藤館長と本プロジェクトが列席者の前で紹介された。

7月から8月にかけては、本館が所蔵するホビ製木彫人形（約280点）を科研費補助金（（若手研究（A））『日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究』（研究課題番号：26704012））にて撮影し、photoVR（ヴァーチャル・リアリティ）加工した。

10月5日から17日まで、photoVRというデジタル資料を活用しながら本館収蔵庫にて資料熟覧を実施した。海外からの招聘者はソースコミュニティ（ホビ）の国際研究協力者4名（Ramson Lomatewama、Darance Chimerica、Merle Namoki、Gerald Lomaventema）と、国際共同研究員6名（Robert Breunig [北アリゾナ博物館]、Kelley Hays-Gilpin [北アリゾナ大学]、Chip Colwell [デンバー自然科学博物館]、Jim Enote [ズニ博物館]、Cynthia Chavez-Lamar [国立アメリカン・インディアン博物館]、Henrietta Lidchi [国立スコットランド博物館]）のほか、天理大学附属天理参考館、野外民族博物館リトルワールドなどの日本国内のホビ製木彫人形所蔵博物館などが多数参加した（招聘について一部は科研費補助金を使用した）。このときに記録した10日分の音声・映像は日英両言語で文字起こしをし、発話者本人のチェックを受けて、日本語に翻訳している。

10月下旬から11月上旬にかけては、首都大学東京の「学術成果の都民への発信拠点・組織の形成」研究グループによる企画展（『伝統文化は誰のもの？ 文化資源をめぐる協働を考える』）とシンポジウム（同名）を行い、フォーラム型情報ミュージアムに係る資料整理やオンライン以外の情報公開・共有の可能性を検討・確認した。

11月には再度米国アリゾナ州の北アリゾナ博物館を訪問し、本館での資料熟覧時に記録した口頭解説の英文チェックを行いながら、北アリゾナ博物館所蔵のホビ製宝飾品資料（約450点中約380点）の資料写真撮影と採寸など既存のレコードの確認と追記を行った。

1月には2015年度に実施予定のリトルワールドでの資料熟覧のための打合せを、リトルワールドにて行った。そ

の機会は、本プロジェクト代表者の伊藤が代表者を務める民博共同研究（米国本土先住民の民族誌資料を用いるソースコミュニティとの協働関係構築に関する研究）を利用し、収蔵庫や屋内展示場、屋外展示場の実見も行った。

ソースコミュニティ（ヤキ）について、本館の所蔵資料約50点を対象とする資料調査を国内共同研究員の水谷裕佳（上智大学）とともにに行った。水谷が資料撮影し、そのデータをヤキ政府の担当者に送り、公開適正に関する意見を収集し、一部の資料についてはソースコミュニティから管理上の提言が出たので、民博にてそれを実施するように情報企画課標本係に指示を出し、対処した。

本館のフォーラム型情報ミュージアム構想に類似する博物館間ネットワーク型データベースを運営している、ブリティッシュコロンビア大学附属人類学博物館（Reciprocal Research Network）、極北研究センター（Sharing Knowledge）などに国内共同研究員（岸上伸啓）を派遣する予定であったが、人間文化研究機構の「問題解決志向型基幹研究プロジェクト形成に係る準備調査提案書」に基づく調査経費が得られたので、その予算で1月から2月にかけて派遣した。

本プロジェクトの現状を中間報告するため、伊藤は6月に沖縄で開催されたアメリカ学会とドイツのフランクフルトで開催されたAIW（欧州における北米先住民学会、3月）に参加し口頭発表を行った。欧州滞り期間中は、オランダのトロッペン博物館およびライデン国立民族学博物館の視察とフォーラム型情報ミュージアムプロジェクトのプロモーションを行った。また、3月に上記の人間文化研究機構の準備調査提案書に基づく調査経費にて、オランダのアムステルダム大学を訪問し、情報社会学のRobin Boast教授とフォーラム型情報ミュージアムのシステム構築に関する意見交換を行った。

成果

本館をはじめ日本国内外の博物館が所蔵する米国先住民ホピ製資料などのデジタルアーカイブズを構築するために、その手法や、ドキュメンテーションの仕方や、公開を対象とする相手の選定など、博物館とソースコミュニティ双方にとっての意義を探り、コンテンツを収集・整理することが初年度の実施内容の大半を占めた。

今後の展開に最も影響を与えることになるとと思われる本年度の内容は、資料のphotoVR撮影とソースコミュニティの招聘と熟覧の実施であった。ソースコミュニティを本館などの博物館に招聘する場合には、現地での就業形態や生活の流れ（繁盛期など）、健康状態、交通手段といった物理的手段やタイミングも親身になって配慮しなければならない。招聘する側の予算との兼ね合いもあり、人の移動を伴わない現地での擬似的な熟覧の機会を工夫して創出することが課題となっていた。

それをある程度解消するのがphotoVRである。ターンテーブルの上に乘せた資料を回転させながら水平0度、30度、60度、90度をそれぞれ36ショット撮影し、底面1ショットを加えた合計145ショットの画像を1枚のファイルに統合する。これにより、モノ資料を手でハンドリングしているかのようになった。顔を近づけて熟視することも、高解像度撮影した画像を拡大・縮小することで擬似的な環境を整えることができるようになった。もちろん臭いに関する嗅覚や重さや手触りに関連する触覚などの感覚を擬似的に再生することはできないが、それでも平面の写真1枚よりは格段に操作性が増すことになった。このphotoVR撮影を科研費を用いて実施したことで、その後の熟覧作業や、連携機関への解説が簡便になり、将来の展開や事業の可能性の幅が大幅に広がった。

ソースコミュニティによる熟覧は10月5日から17日の期間の平日である7日間行った。対象とする資料は祖霊や精霊や雨や雨雲を表す超自然的存在（カチーナ）を象った木彫人形である。民博は約280点の資料を所蔵している。4名の熟覧者は人形作家が2名、使用者（宗教指導者）が2名で、それぞれ年齢も居住村落も異なる人々である。全員が資料の熟覧経験がなかったため、まず、2012年に本館と学術協定を結んでいて、本館での資料熟覧経験もあるズニ博物館のJim Enote館長と国立アメリカン・インディアン博物館のCynthia Chavez-Lamar博士に熟覧の仕方や記録の仕方などについて実演を行ってもらった。彼ら自身も米国先住民であるため、ホピの熟覧者は非先住民の博物館関係者だけではなく、先住民からの指導も受けたことになる。一資料について全員でホピ語で意見を述べた後、一人一人が村落での役割などについて解説した。さらに全員の意見を聞いた要約として、黒背景で語りに集中できる映像撮影を行った。熟覧の様子は全て映像資料として記録しており、数百時間に及ぶ一次資料に関する貴重な資料が収集できた。全ての音声はテープ起こし済みで、発話者による英語のチェックが終わった分については日本語への翻訳も行った。これらがフォーラム型情報ミュージアムの一つとして新たに制作するデータベースに掲載する主要なコンテンツとなる。

その他にも、北アリゾナ博物館での資料調査と資料撮影、国内外の機関や学会やシンポジウムや展示会などでの口頭発表を介したプロジェクトの広報活動を行った。

資料台帳のレコード項目数としては、合計36,380レコードの確認、加筆を行った。内訳は以下の通りである。「民博所蔵ホピ製木彫人形資料」については、1資料あたり145点の静止画を撮影し、それらを1点のphotoVRに加工

した。10月5日から17日を期間とする約140点の資料熟覧の結果、1資料あたり最低9レコードの確認と加筆を行った（小計21,560レコード）。「北アリゾナ博物館所蔵ホピ製宝飾品資料」については、約380点の資料の写真撮影を行った（1点あたり約10点）。さらに寸法やデザインの確認など、39項目のレコードを確認・加筆した（小計14,820レコード）。

成果の公表実績

論文

伊藤敦規 「国立民族学博物館における研究公演の再定義——『ホピの踊りと音楽』の記録とフォーラムとしてのミュージアムの視点からの考察」『国立民族学博物館研究報告』39(3)：397-458（2015）。

エッセイなど

伊藤敦規 「日本国内の米国先住民研究の展開のために——民族誌資料で関係者を束ねる」『民博通信』145：20-21，国立民族学博物館（2014）。

Atsunori Ito “Re-Collection and Sharing Traditional Knowledge, Memories, Information, and Images: Problem and the Prospects on Creating Collaborative Catalog.” *MINPAKU Anthropology Newsletter* 38: 11-12, National Museum of Ethnology (2014).

公開シンポジウム・ワークショップ

Minpaku International Workshop Collection Review: Methodology and Effective Utilization for the Museum and the Source Community, National Museum of Ethnology（2014年10月5日～10月10日）。

首都大学東京「学術成果の都民への発信拠点・組織の形成」研究グループシンポジウム『伝統文化は誰のもの？文化資源をめぐる協働を考える』、首都大学東京（2014年11月1日）。

口頭発表

Atsunori Ito “Collaborating with the Source Community”, IUAES panel Re-imagining ethnological museums: new approaches to developing the museum as a place of multi-lateral contacts and knowledge (Commission on Museums and Cultural Heritage), Makuhari Messe（2014年5月15日）。

伊藤敦規 「米国先住民資料の所在と管理情報の現状、国立民族学博物館のInfo-Forum Museum構想の報告」、アメリカ学会第48回年次大会、米国先住民分科会、沖縄コンベンションセンター。（2014年6月8日）

伊藤敦規 「所蔵博物館とソースコミュニティにとっての資料熟覧」、第260回 民博研究懇談会、国立民族学博物館（2014年9月24日）。

Atsunori Ito ‘Introduction,’ Minpaku International Workshop Collection Review: Methodology and Effective Utilization for the Museum and the Source Community, National Museum of Ethnology（2014年10月5日）。

Robert Breunig, Kelley Hays-Gilpin and Atsunori Ito ‘Reconnect Museum and Source Community,’ Minpaku International Workshop Collection Review: Methodology and Effective Utilization for the Museum and the Source Community, National Museum of Ethnology（2014年10月5日）。

Atsunori Ito ‘Tasks of collection, accumulation, documentation, and effective utilization of SC’s comments,’ Minpaku International Workshop Collection Review: Methodology and Effective Utilization for the Museum and the Source Community, National Museum of Ethnology（2014年10月5日）。

Atsunori Ito ‘Introduction of “Kachina doll” collection labeled Hopi in Minpaku,’ Minpaku International Workshop Collection Review: Methodology and Effective Utilization for the Museum and the Source Community, National Museum of Ethnology（2014年10月6日）。

伊藤敦規 「米国先住民ホピ製宝飾品の真髄を真贋判断から考える」（首都大学東京「学術成果の都民への発信拠点・組織の形成」研究グループシンポジウム『伝統文化は誰のもの？文化資源をめぐる協働を考える』）、首都大学東京（2014年11月1日）。

展示活動

伊藤敦規 「ホンモノ？ニセモノ？——『ホピ製』宝飾品の真作贋作」（首都大学東京「学術成果の都民への発信拠点・組織の形成」研究グループ企画展『伝統文化は誰のもの？——文化資源をめぐる協働を考える』）、首都大学東京91年館（2014年10月31日～11月13日）。

事典項目執筆

伊藤敦規 「北米先住民」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.296-297，丸善出版（2014年7月10日）。「手工芸」pp.496-497。

「博物館と返還」pp.518-519。

「表象に対する権利」pp.736-737。

新聞

伊藤敦規 「精霊の化身、仮面(7)生き物」『毎日新聞夕刊』(旅・いろいろ地球人)(2014年7月17日)。

伊藤敦規 「おいのりで雨雲を呼ぶ(みんぱく世界の旅 アメリカ先住民ホピ1)」『毎日小学生新聞』(2015年1月10日)。

伊藤敦規 「願いを込めて『ソーシャルダンス』(みんぱく世界の旅 アメリカ先住民ホピ2)」『毎日小学生新聞』(2015年1月17日)。

伊藤敦規 「身体能力高いホピの人々(みんぱく世界の旅 アメリカ先住民ホピ3)」『毎日小学生新聞』(2015年1月24日)。

伊藤敦規 「伝統的な生活を大切に(みんぱく世界の旅 アメリカ先住民ホピ4)」『毎日小学生新聞』(2015年1月31日)。

メディア掲載

「民博が国際ワークショップを開催——“フォーラム型情報ミュージアム”実現に向け」『文教速報』7973:15, 官庁通信社(2014年2月26日)。

『日本経済新聞』(関西)「民族学資料 共有化へ 民博40年で変わる」(http://www.nikkei.com/article/DGXLASIH21H02_R21C14A0AA1P00/)(2014年10月26日)

“International collaboration helps connect Museum of Northern Arizona to Hopi community,” *Navajo-Hopi Observer* 34(50): 1, 4 (2014年12月10日)。

その他(電子媒体など)

「国立民族学博物館(日本国 大阪)および北アリゾナ博物館(米国 アリゾナ州 フラッグスタッフ)との学術協力・協働協定書」(http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/exchange/agreement/northernarizona_2014)

“Museum of Northern Arizona, Japan’s National Museum of Ethnology Lead Global Initiative” (<http://musnaz.org/press-releases/museum-northern-arizona-japans-national-museum-ethnology-lead-global-initiative/>)

「『朝鮮半島の文化』に関するフォーラム型情報ミュージアムの基盤構築」

代表者：朝倉敏夫 2014～2016

実施状況

本館「朝鮮半島の文化」に関する本館の資料のうち、1988年以前に収集した約2,700点について当時の収集に携わった辛 瑋根 温陽民俗博物館顧問に協力を依頼し、データベースの基礎となるコンテンツを作成する作業を推進した。

また、本館は韓国国立民俗博物館と学術協定を締結しているが、これまで両館が協力してあげた成果をもとに、どのような情報生成型のマルチメディア・データベースを作成することができるか両館において協議した。

2014年7月から1年間、本館外国人客員研究者として韓国国立民俗博物館においてデータベース作成に関わってきた金 昌鎬を招聘し、2015年に開催する特別展「韓日食博」において公開する情報生成型のマルチメディア・データベースの作成について議論し、大阪工業大学の佐野睦夫教授とも共同で「食」関連資料のデータベースの作成に着手した。

標本資料の画像情報を組み込み可能な情報生成型のマルチメディア・データベースとして、資料の管理および公開のためのシステム開発を行った。機能設計にあたっては、日本語、韓国語、英語への対応とユーザ管理機能およびユーザによる関連情報の書き込み機能を要件とし、それらの機能を実現するためのバックエンドシステムの実装を行った。

成果

1988年以前に収集した本館「朝鮮半島の文化」に関する資料約2,700点について、データの補充およびクリーニングを行った。そのうち「食」に関する資料約500点のデータについて韓国語、日本語版を作成した。

韓国国立民俗博物館の『韓民族歴史文化図鑑——食生活』に掲載された120種の資料についての記載事項について韓国語、日本語、英語版を作成した。

情報生成型データベースとして、標本資料の管理および公開用の環境を開発した。公開用環境においては、標本資料に付加情報を書き込めるユーザコメント機能および日本語、韓国語、英語の表示および自動翻訳を組み込んだインタフェースを試作した。また、作成したデータを情報生成型データベースに登録し、データおよびシステムの

実証を行った。

「徳之島の民俗芸能に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」

代表者：福岡正太 2014～2016

実施状況

1) 基本的なデータベースシステムのデザイン

次の条件を満たすシステムのデザインを進めた。

- a) 主なデータは芸能を記録した映像ファイルと関連する文字、写真、音響、映像資料とする。
- b) それぞれのデータに対し、アノテーションを加えられるようにする。
- c) それぞれのデータに対し、コメントを加えディスカッションをできるようにする。
- d) 利用者が新たなデータを追加できるようにする。

2) 追加データの作成

このシステムの主なデータは、民博の文化資源プロジェクトおよび人間文化研究機構の連携研究「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」等により撮影した映像だが、若干手薄であった伊仙町等の民俗芸能について調査撮影を行いデータの充実をはかった。

伊仙町では、新たに阿三および目手久集落にて民俗芸能ならびにシマウタの調査撮影を行い、天城町で未撮影だった松原上区にて集落誌ならびに民俗芸能の撮影を行った。

3) 主なデータの英訳

コンテンツの解説等の英訳を進めた。全解説の9割程度の英訳を完成した。

4) 徳之島3町との連携調整

徳之島3町の各教育長や教育委員会関係者等とフォーラム型情報ミュージアム公開に向けて協議を進めた。

5) 研究会の開催

民博にて研究会を開催し、フォーラム型情報ミュージアムのコンセプトとシステムおよび徳之島関連コンテンツの紹介、『日本民謡大観（沖縄・奄美）』（日本放送協会、1989-1993）関連調査資料のデジタル化とアーカイブの報告、徳之島3町における芸能関連資料の所蔵やデジタル化作業等についての報告等を行い、今後のフォーラム型情報ミュージアムの展開の可能性について議論した。

成果

データについては、一部のデータの英訳が残っているものの、公開に向けてほぼ整備を終えることができた。システムについては、仕様とデザインが固まり、プロトタイプがほぼ完成しており、データの移植を進めれば公開できる状態に近づいている。徳之島3町の教育委員会等には、フォーラム型情報ミュージアムの有用性を理解していただき、端末の設置等について前向きな対応をいただいている。また、奄美地域の民謡や民俗芸能の研究者ともフォーラム型情報ミュージアムの構想についての議論を深めることができた。

成果の公表実績

天城町町立ユイの館にて、マルチメディアコンテンツ「徳之島の唄と踊りと祭り」の公開を開始した。その他の成果の公表は以下の通り。

電子媒体

福岡正太 「音楽芸能の伝承において映像記録が果たしうる役割——徳之島の芸能を例に」『研究報告人文科学とコンピュータ』2014-CH-104(10), 1-3

口頭発表

福岡正太 「音楽芸能の伝承において映像記録が果たしうる役割——徳之島の芸能を例に」、人文科学とコンピュータ研究会（情報処理学会）発表会、関西大学千里山キャンパス第三学舎 D501教室、2014年10月18日。

福岡正太 「映像記録を民俗芸能の営みの中に位置づける」、シンポジウム「民俗音楽の新たな胎動をさぐる」、日本民俗音楽学会第28回大会、東京音楽大学 A 館200教室、2014年12月13日。

「民博所蔵『ジョージ・ブラウン・コレクション』の総合的データベースの構築」

代表者：林 勲男 2014～2016

実施状況

2014年度は、本プロジェクトの初年度に当たるため、国内メンバーによる役割の確認と、フォーラム型情報ミュージアムの概念についての共通認識の確立を図るために丸川雄三准教授による説明を聞く会合からスタートした。

8月に国内共同研究員である友永雄吾が、オーストラリアのメルボルンにて国外共同研究員であるヘレン・ガードナー博士と面会し、プロジェクトの概要を説明し、ジョージ・ブラウンおよび同時代の他の宣教師たちの南太平洋における民族誌資料収集活動について情報をえた。またメルボルン博物館で、収蔵資料管理について情報を得た。シドニーのオーストラリア博物館では、研究協力者のロビン・トレンス博士、シドニー大学マクリー博物館のジュード・フィリップ博士と会い、それぞれに収蔵する関連使用調査を実施した。

11月に林とピーター・J. マシウスがニュージーランドを訪れ、オークランド博物館でアウトリーチプログラム、歴史部門、デジタル・システム、コレクション・マネージメント、保存科学のそれぞれの担当者と面談し、プロジェクトの遂行への協力を依頼した。ウェリントンでは、ニュージーランド国立博物館テ・バパにて、太平洋地域のコレクションのマネージャーと、デジタル・コレクション専門家から収蔵資料とデータ管理、他の機関とのデータベース共有化について情報を得た。また、民博へ招聘予定のリース・リチャーズ氏を訪ね、打ち合わせを行った。

今年度は、上記のソロモン諸島担当のリチャーズ氏以外に、メラネシア資料の植物材料調査のためロビン・ハイド博士（オーストラリア国立大学名誉教授）、イタリアからトロブリアンダ諸島資料調査のためジャンカリオ・スコディティ博士の招聘を予定していたが、スコディティ博士の都合で来日は叶わなかった。

ジョージ・ブラウン・コレクション及びそのデータベースに関する簡単な説明文を、日本語と英語に加えて、メラネシア・ビジン語、サモア語、トンガ語、フィジー語にし、インターフェイスを修正してそれぞれの言語でこの解説を読めるようにした。

さらには、ジョージ・ブラウンの日記と手紙から、民族資料収集の足取りを探る調査を始め、これは来年度に継続される。

成果

ハイド博士とリチャーズ氏という専門家を招聘したことによって、ジョージ・ブラウン・コレクションの個別資料に関する情報の充実化が進んだ。オーストラリアとニュージーランドの博物館の専門部署のスタッフとプロジェクトについて協力を取り付けたことによって、その結果として、その後も情報の提供を得られるようになったことは大きい。

成果の公表実績

- 1) Bunkamura のザ・ミュージアムで開催されたジョセフ・バンクス展に、ジョージ・ブラウン・コレクションから標本資料を選定し、この展示の図録に寄稿した。また、マスコミ向けの内覧会では、解説をつとめた。貸し出したことで日本においてもその存在の周知を行うことができた。
- 2) Mchugh, Christopher (海外研究協力者) (in Press) Recontextualizing the George Brown Collection through Creative Ceramics, *Journal of Museum Ethnography* 26.
- 3) 2015年3月29日に開催されたみんなくウィークエンド・サロン「パプアニューギニアのタイムカプセル」で、来館者にジョージ・ブラウン・コレクションの紹介を行った。

共同研究

2014年度の応募・採択状況

課題1：文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究

課題2：本館の所蔵する資料に関する研究

研究会の区分			2014年度			
研究代表者		課題区分	申請	採択	継続	計
一般	館 内	課題 1	6	3	8	13
		課題 2	0	0	2	
	客 員	課題 1	0	0	2	2
		課題 2	0	0	0	
	公 募	課題 1	10	4	12	18
		課題 2	1	1	1	
若 手		課題 1	4	1	5	6
		課題 2	0	0	0	
計			21	9	30	39

共同研究課題一覧

○印は館外研究代表者による実施課題、□印は特別客員教員（申請時）による実施課題、●印は若手による実施課題

研究課題	研究代表者	課題区分	研究年度
パレスチナ・ナショナリズムとシオニズムの交差点	菅瀬晶子	1	2011-2014
□○ 人の移動と身分証明の人類学	陳 天璽	1	2011-2014
NGO活動の現場に関する人類学的研究——グローバル支援の時代における新たな関係性への視座	信田敏宏	1	2011-2014
□○ 物質性の人類学（物性・感覚性・存在論を焦点として）	古谷嘉章	1	2011-2014
○ ストリート・ウィズダムとローカリティの創出に関する人類学的研究	関根康正	1	2011-2014
○ ネパールにおける「包摂」をめぐる言説と社会動態に関する比較民族誌的研究	名和克郎	1	2011-2014
○ グローバリゼーションの中で変容する南アジア芸能の人類学的研究	松川恭子	1	2011-2014
○ 現代の保健・医療・福祉の現場における「子どものいのち」	道信良子	1	2011-2014
○ 音盤を通してみる声の近代——台湾・上海・日本で発売されたレコードの比較研究を中心に	劉 麟玉	2	2011-2014
○ 災害復興における在来知——無形文化の再生と記憶の継承	橋本裕之	1	2012-2014
熱帯の「狩猟採集民」に関する環境史的研究——アジア・アフリカ・南アメリカの比較から	池谷和信	1	2012-2014
贈与論再考——「贈与」・「交換」・「分配」に関する学際的比較研究	岸上伸啓	1	2012-2014
肉食行為の研究	野林厚志	1	2012-2014
触文化に関する人類学的研究——博物館を活用した“手学問”理論の構築	廣瀬浩二郎	1	2012-2014
明治から終戦までの北海道・樺太・千島における人類学・民族学研究と収集活動——国立民族学博物館所蔵のアイヌ、ウイルト、ニヅフ資料の再検討	齋藤玲子	2	2012-2015
○ アジア・オセアニアにおける海域ネットワーク社会の人類史的研究——資源利用と物質文化の時空間比較	小野林太郎	1	2012-2015

○ 「統制」と公共性の人類学的研究——ミャンマーにおけるモノ・情報・コミュニティ	土佐桂子	1	2012-2015
● 現代消費文化に関する人類学的研究——モノの価値の変化にみるグローバル化の多元性に着目して	小川さやか	1	2012-2014
● ランドスケープの人類学的研究——視覚化と身体化の視点から	河合洋尚	1	2012-2014
● 「国家英雄」から見るインドネシアの地方と民族の生成と再生	津田浩司	1	2012-2014
映像民族誌のナラティブの革新	川瀬 慈	1	2013-2015
聖地の政治経済学——ユーラシア地域大国における比較研究	杉本良男	1	2013-2016
米国土土先住民の民族誌資料を用いるソースコミュニティとの協働関係構築に関する研究	伊藤敦規	2	2013-2016
○ 表象のポリティックス——グローバル世界における先住民／少数者を焦点に	窪田幸子	1	2013-2016
○ エージェンシーの定立と作用——コミュニケーションから構想する次世代人類学の展望	杉島敬志	1	2013-2016
○ 宗教人類学の再創造——滲出する宗教性と現代世界	長谷千代子	1	2013-2016
○ 東南アジアのポピュラーカルチャー——アイデンティティ、国家、グローバル化	福岡まどか	1	2013-2016
○ 近代ヒスパニック世界における文書ネットワーク・システムの成立と展開	吉江貴文	1	2013-2016
● 宗教の開発実践と公共性に関する人類学的研究	石森大知	1	2013-2015
● 再分配を通じた集団の生成に関する比較民族誌的研究——手続きと多層性に注目して	浜田明範	1	2013-2015
現代「手芸」文化に関する研究	上羽陽子	1	2014-2017
近世カトリックの世界宣教と文化順応	齋藤 晃	1	2014-2017
家族と社会の境界面の編成に関する人類学的研究——保育と介護の制度化／脱制度化を中心に	森 明子	1	2014-2017
○ 政治的分類——被支配者の視点からエスニシティと人種を再考する	太田好信	1	2014-2017
○ 生活用品から見たライフスタイルの近代化とその国別差異の研究	鏡味治也	1	2014-2016
○ 呪術の実践＝知の現代的位相——他の諸実践＝知との関係性に着目して	川田牧人	1	2014-2017
○ 資源化される「歴史」——中国南部諸民族の分析から	長谷川 清	1	2014-2017
○ モノにみる近代日本の子どもの文化と社会の総合的研究——国立民族学博物館所蔵多田コレクションを中心に	是澤博昭	2	2014-2017
● 演じる人・モノ・身体——芸能研究とマテリアリティの人類学の交差点	吉田ゆか子	1	2014-2016

「パレスチナ・ナショナリズムとシオニズムの交差点」

本研究会の目的は、パレスチナ・ナショナリズムとシオニズム、アラブ・ナショナリズムの比較研究を、人類学的、歴史学的、政治学的、地理学的、社会学的視点から多角的におこなうことにある。

パレスチナ・ナショナリズムの起源は1834年、オスマン帝国治下のパレスチナの主要都市で起こった民衆蜂起にさかのぼるといわれている（Kimmering and Midgal 1995）。しかしながら、これについては批判も多く、列強によるシリア行政州の分割と植民地化が契機であるとする反論がなされてきた。なかでも、シオニストとの対峙によってパレスチナ人アイデンティティが形成されたとする、ハーリディの説（Khalidi 1997）が有名である。いずれにせよ、同じくオスマン帝国治下にあった周辺アラブ地域におけるアラブ・ナショナリズム、およびロシア・東欧地域からのシオニストによる入植活動に触発されて、パレスチナ・ナショナリズムが発生したことについて、疑問を差し挟む余地はないであろう。本共同研究会は、この三者を扱う研究者をメンバーに迎え、互いに情報を提供しあうことで、三者の相関関係を解明してゆくことを目的とする。

研究代表者 菅瀬晶子

班員（館外） 赤尾光春 池田有日子 白杵 陽 奥山真知 蒲生裕恵 田浪亜央江 田村幸恵
奈良本英佑 早尾貴紀 藤田 進 細田和江 森 まり子 山本 薫 横田貴之

研究会

2014年11月22日

成果公開シンポジウムに向けての準備発表：

菅瀬晶子 「ナジブ・ナッサールの『シオニズム』にみるパレスチナにおける初期アラブ・ナショナリズム」

田村幸恵 「オスマン帝国時代末期の『オスマン臣民』概念とユダヤ教徒」

田浪亜央江「英国委任統治時代のパレスチナにおけるスカウト運動」

田村幸恵・池田有日子 「Zeina B. Ghandour, “A Discourse on Domination in Mandate Palestine: Imperialism, Property and Insurgency”」

シンポジウム開催に向けての話し合い

2015年3月13日

シンポジウム『イスラエル建国以前のパレスチナをめぐるナショナリズムの諸相』

田村幸恵 「『ナショナリズム』揺籃：第一次世界大戦下のパレスチナにおける『臣民』」

赤尾光春 「ディアスポラ・ナショナリズムとシオニズムのはざままで——S・アン＝スキーの思想的遍歴における精神的力と身体的力」

菅瀬晶子 「ナジブ・ナッサールのアラブ・ナショナリズム観——『シオニズム』とカルメル誌における活動から」

田浪亜央江「パレスチナにおけるB-P系スカウト運動と『ワタンへの愛』」

成果

本共同研究で当初から目標としていた、アラブ／パレスチナ・ナショナリズムとシオニズムの多角的比較研究というテーマは、おおむね果たすことができた。共同研究員それぞれの関心に基づき、定義の洗い直しや、文化活動に焦点をあてたナショナリズム表象のありかたの研究を進め、互いに知見をひろめることができた。また、初期シオニズムの揺籃であった帝政ロシア末期の社会主義がアラブ・ナショナリストに与えた影響など、今後研究を深化させてゆくうえでのあらたな課題も見つけることもできた。今後はシンポジウムの内容を論文集というかたちで出版することを目標に、共同研究員間の情報交換を密に保ってゆく予定である。

「人の移動と身分証明の人類学」

本研究は、人の移動・越境・滞在と身分証明をめぐる法的・行政的制度、そしてそれらを利用する実践のあり方を明晰化することをねらいとする。具体的には、生から死に至るいろいろなライフステージにおいて、人の移動と在留管理に基づく身分証明が、移動する人々の人生と次世代にどのような影響を与えるのかという視点に立ち、旅券、渡航証、身分証といった身分証明は、個人のアイデンティフィケーションや社会のトランスナショナリズムにどのように関わっているのかを解明していきたい。

2012年には外国人登録制度が廃止され、新たに在留管理制度が始動した。こうした社会的変化のなかで、身分証明のあり方を明らかにし、「国家」と「住民」が織り成す関係を分析し、さらには国境を越えて移動する人々たちの国家との関係を明らかにすることを目的としている。

研究代表者 陳 天璽（客員）

班員（館内） 庄司博史 南 真木人

（館外） 明石純一 李 仁子 石井香世子 大西広之 郭 潔蓉 川村千鶴子 窪田順平
小林真生 小森宏美 近藤 敦 佐々木てる 館田晶子 中牧弘允 錦田愛子
西脇靖洋 付 月 松田睦彦 三谷純子 南 誠 宮内紀子 柳下宙子
柳井健一 山上博信 山田美和 林 泉忠

研究会

2014年7月18日

柳下宙子 「外交史料館所蔵戦前期の諸外国の旅券と関係史料より見る人の移動」

2014年 7月19日

研究打ち合わせ

館田晶子 「移民の家族呼び寄せと親子関係の証明」

出版に向け各メンバー執筆内容概要発表・打ち合わせ

2014年12月 6日

宮脇幸生 「アフリカの移民——歴史と現状」

武田里子 「メコンデルタにおける中国人コミュニティの生存戦略——一斉帰化、結婚移住、民族教育をめぐる」

三谷純子 「インドのチベット人の曖昧な法的地位の認証——国家と個人の折り合いの付け方」

討論・研究成果の公開打ち合わせ

2014年12月 7日

出版および研究成果公開打ち合わせ

小山雅徳 「紛争後のコソヴォにおける人の移動の管理と民族的アイデンティティ」

久保山亮 「入国管理政策の系譜学——ドイツ、ヨーロッパ、アメリカを事例に」

成果

本年度は最終年度であるため、成果論文執筆などを視野に入れて研究会を組織・開催した。研究会開催に際しては、各共同研究員が収集した資料に関する情報交換と分析のほか、成果公開に向けた打ち合わせも定期的に行った。7月には、外交史料館の所蔵されている資料から、戦前期における諸外国の旅券と関係資料から人々がどのように日本から移出、移入していたのかについて詳細に分析することができた。

また、本研究メンバーを組織する際、世界的な移動を視野に入れ、できる限りグローバルな人の移動と身分証明の人類学を研究・分析できるよう構成したつもりではあるが、3年ほどの共同研究を終えるにあたり、アフリカ地域や東欧地域の研究メンバーが手薄であったこと、その地域についても学び、比較研究したいと考え、本共同研究の最終回は、外部からアフリカにおける移動を専門とする研究者のほか、コソヴォの移動管理を研究のみならず、実務としても携わってきた研究者、そしてドイツをはじめとするヨーロッパとアメリカの入国管理政策を専門とする研究者を招き、研究発表をしていただき、これまでの研究と比較分析することができた。

「NGO 活動の現場に関する人類学的研究——グローバル支援の時代における新たな関係性への視座」

グローバルな支援の輪が地球規模で広がっている今日、NGOの活動域は、人類学が伝統的に研究のフィールドとしてきた世界各地の周辺地域にまで及んでいる。人類学が対象とするフィールドの人びとは、NGOによるボランティア活動や支援活動を媒介として、血縁や地縁に基づく従来の関係性を超えて新たな関係性を構築するようになってきており、NGO活動に関わる人びとは、グローバルな社会的ネットワークの中に自らを世界とつながる存在として位置づけるようになってきている。一方、人類学者はフィールドワークの傍らで、ローカルNGOや国際NGOが様々な支援活動を行っているのを目にするようになり、時には人類学者自身もNGOの活動に深く関わり、場合によっては自らが支援のエージェントとなっている。こうしたNGOと人類学が接近しつつある今日の状況を鑑みて、本研究では、NGO活動の現場における人びとの新たな関係性とグローバル支援のメカニズムを、人類学のミクロな視点を生かしてローカルな現場から解明していくことを目的とする。また、新しい電子メディアを通じて人びとが国境を越えて直接むすびつく「草の根レベルのグローバリゼーション」が進行する中で、国家や世界秩序の変革・再編にNGOをはじめとする市民社会の諸アクターがどのような役割を果たしているのかを探究することも大きな目的となっている。

研究代表者 信田敏宏

班員（館内） 宇田川妙子 鈴木 紀 関根久雄（客員）
 （館外） 綾部真雄 小河久志 加藤 剛 清水 展 杉田映里 内藤直樹 中川 理
 子島 進 福武慎太郎 藤掛洋子 増田和也 三浦 敦 渡邊 登

研究会

2014年10月 5日

白川千尋 「国際協力NGOの担い手の『世代間差異』をめぐる試論」

三浦 敦 「市民社会論と農民支援——フィリピンとセネガルの市民社会とグローバル支援」

全 員 「全体討論」

全 員 「論集出版に向けての話し合い」

2014年12月6日

全 員 「論集出版に向けての話し合い」

関根久雄 「なぜ持続しないのか——ソロモン諸島における開発 NGO の実践と矛盾」

中川 理 「グローバル市民社会の想像力と『国家の外』の想像力——フランス農民のケース」

綾部真雄 「裂け目に分け入る——リス、『私』、そして NGO」

全 員 「全体討論」

成果

最終年度である本年度は、合計2回の研究会を実施した。本年度は、個別発表とそれに伴う議論と並行して、論集の出版に向けた話し合いを行った。個別発表については、2014年10月5日に、大阪大学の白川千尋による国際協力 NGO の担い手に関する報告と、三浦 敦による市民社会論の整理および農民支援に関するフィリピンとセネガルの比較についての報告がなされた。また、2014年12月6日に、関根久雄によるソロモン諸島の開発 NGO がなぜ持続しないのかについての要因分析、中川 理による青果市場におけるフランス農民の行動分析、綾部真雄によるタイの少数民族であるリス社会における人類学者の役割についての報告がそれぞれ行われた。本研究会の研究成果については、研究会メンバーおよび白川千尋が仮の論文タイトルを提出し、論集の趣旨や目次案などについて全体的な整合性の観点から十分に議論した上で、『グローバル支援の人類学—— NGO 活動の現場から』というタイトルで昭和堂から商業出版を目指すことで合意した。

「物質性の人類学（物性・感覚性・存在論を焦点として）」

インターネットをはじめとするテクノロジーの革新による仮想現実の蔓延の結果、人文社会科学の領域においても、人間にとっての物質世界の重要性が急速に低下しているかに見える。しかし、人間は依然として、（それぞれ特定の物性をもつ生物や無生物、自然物や人工物から構成される）物質世界のなかに存在し、その物質世界に物質たる身体感覚を介して物質的に関与する、それ自身徹頭徹尾、物質的存在でありつづけている。本研究は、人間の生活と人生の基盤をなす「物質性」（materiality）が人類学においてこれまで不当に看過されてきたとの認識に立ち、今後の人類学が問うべき「物質性」に関する問題系を、物性・感覚性・存在論の観点からラディカルに再考察することを通じて明らかにすることと、「物質性」に照準する具体的な手触りのある事例研究を、各自のフィールドワークに基づいて生みだし、今後の研究のために範を示すことを目的とする。

研究代表者 古谷嘉章（客員）

班員（館内）関 雄二 野林厚志

（館外）秋山 聡 鏡味治也 川田順造 佐々木重洋 武井秀夫 出口 顕 松本直子
溝口孝司 箭内 匡 渡辺公三

研究会

2014年7月12日

全員のミニ報告および討論 「物質と非物質のあいだ」

成果公表についてのディスカッション

2014年9月20日

『イメージの力』展覧会および「展示と物質性」についての総合討論

成果公表についてのディスカッション（公刊書籍の趣旨および構成）

2014年12月14日

全員による総括討論 「物質性の人類学の可能性」

成果公表についてのディスカッション

成果

第4期「結」として、やや包括的なテーマについてのディスカッションのための研究会を2回開催した。具体的には、1)「物質と非物質のあいだ」というテーマの下で各自がミニ報告を行い、物質性の問題そのものを搦手から

再度あぶりだすことを試みた。2) 民博で開催中の『イメージの力』展を見学し、国立新美術館（東京）で開催された同展の展示との比較を視野に入れて、展示における物質性というテーマについて討論を行った。3) 最終回の研究会において、これまでの研究会で提起された様々な問題について再度検討することを通して、今後の「物質性的人类学」の展開を視野に入れた総括的検討を行った。分析概念等、共通のツールボックスを整備するという目標は予想以上に困難であったが、広範な議論を通して、問題領域の広がりとともに追究すべき問題群についてかなり具体的な共通理解に到達することができた。単行本出版を視野に入れて、書籍の全体構成等、成果公開のための準備作業を行った。

「ストリート・ウィズダムとローカリティの創出に関する人類学的研究」

今日、ネオリベラリズムの主導する世界資本主義の浸透は社会に「恒常性の喪失」をもたらしている。しかも、主流社会とアンダークラスという垂直的に分離した「管理型」社会を産出している。アンダークラスや不安定労働者層は、保障なき世界をストリートに近接して剥き出しで生きる現代の前衛と言える。主流ホーム社会の中核の人々さえも現代社会の強い遠心力に不安を募らせている。故に、縁辺のストリートを生き抜く人々のぎりぎりの実践知は、今日すべての人々に要求されている。この図式を現代の地域構造に向ければ、今日のローカリティの盛衰も広義の「ストリート現象」と言える。流動する時間を生きるグローバル・シティの強大化の下で、周辺化されるローカリティはその生き残りをかけて格闘している。この狭義から広義までの「ストリート」現象（敗北と再創造の過程）の記述分析が本研究の第一の目的となる。つまり、主流社会の設計主義が通用しない、偶発的なフローを資源にしたストリートの戦術的生き延び方のエスノグラフィを作成する。

研究代表者 関根康正

班員（館内）岸上伸啓

（館外）朝日由実子	阿部年晴	小田 亮	姜 竣	北山 修	高坂健次	鈴木晋介
関根康正	近森高明	Gill, Tom	内藤順子	西垣 有	根本 達	野村雅一
古川 彰	松本博之	丸山里美	南 博文	森田良成	和崎春日	

研究会

2014年10月26日

根本 達 「野生の仏教序説——現代インドを生きる仏教僧佐々井秀嶺と『当事者になること』について」

朝日由実子「『エスニック・タウン』とストリート」

姜 竣 「漂白芸能にまつわるノスタルジアのイデオロギーと（当事者の）「痛み」について——街頭紙芝居と淡路人形伝統を事例に」

関根康正 「ストリート人類学の展望」

成果に向けての討論

2014年12月20日

丸山里美 「イギリスのスクウォット運動」

鈴木晋介 「伝統野菜の復興——背景と問題の所在」

西垣 有 「近傍論——ローカリティの創発へ向けての一試論」

関根康正 「ストリート人類学の挑戦」

野村雅一 「総括コメント」

総合討論

成果

最終年度の本年度は、本研究会の若手メンバーの「ストリート的なもの」をめぐるインテンシブなフィールドワークに基づく6本の発表を得て、新鮮で活発な討議が展開された。根本はインド社会の最周辺化されたダリトの間で仏教をストリート僧として生きる佐々井秀麗に学びつつ、ストリート研究のコミットメントの問題に肉薄した。朝日は、東京コリアンタウンの表象と実態のずれに注目しつつ多様な次元の文脈がずれたまま共存しながらストリートの盛衰が起こるアンヴィバレントな様相を描写した。姜は、街頭紙芝居と淡路人形伝統などを踏まえ漂白芸能にまつわるノスタルジアが内包する人が内発的に集まり生きる遊動性の原義を探究した。丸山は、イギリスのホームレスの空き家占拠というスクウォット運動のうちにネオリベ的遊動性への根本的抵抗を示す。鈴木もまた、ネオ

リベ経済の進展の中で逆説的に発現している伝統野菜の復興の背景を探って、二重の遊動性の差異を析出することを試みた。西垣には、本研究会の総括的な議論を依頼したがそれを見事に果たしてアパドゥライのローカリティと近傍の議論を深化させて、ストリート人類学の探求の焦点の所在を存在論的遊動性にあることを明示しようとした。野村と関根が最後にストリート人類学は何に挑戦しようとしているかを総括的に論じてまとめた。

「ネパールにおける『包摂』をめぐる言説と社会動態に関する比較民族誌的研究」

本研究は、かつてヒマラヤのヒンドゥー王国であり、現在連邦民主共和制に向けた体制転換期にあるネパールにおいて、多種多様な中間集団の存在を前提として展開される種々の政治的な主張と、そうした中間集団に属するとされる様々な人々の行う実践とが織りなす布置を、近年ネパールにおいて急速に普及した翻訳語サマーベシーカラン（「包摂」）を鍵概念として明らかにするものである。カースト的秩序から一元的な国民統合路線を経て多民族性、多言語性が認められた1990年以降のネパールにおいて、「先住民族」「ダリト」などグローバルに或いは国境を越えて流通する概念に基づいた様々な権利主張の運動と、マオイストから王党派に至るナショナルな水準での政党の主張、さらには人類学的なフィールドワークによって明らかにされる、必ずしもこうした運動や主張により回収されないローカルな水準での人々の状況、以上三者の間の関係と齟齬を多層的、多元的に検討することから、ネパール社会の歴史と現状に関する統合的理解を提出することが目的である。

研究代表者 名和克郎

班員（館内）南 真木人

（館外）石井 溥	上杉妙子	鹿野勝彦	佐藤齊華	高田洋平	橘 健一	田中雅子
外川昌彦	中川加奈子	丹羽 充	幅崎麻紀子	藤倉達郎	別所裕介	
Maharjan, Keshav Lall		宮本万里	森田剛光	森本 泉	安野早己	渡辺和之

研究会

2015年1月31日

名和克郎・中川加奈子 「成果発表論文について」

橘 健一・森田剛光・渡辺和之・藤倉達郎 「成果発表論文について」

丹羽 充・（森本 泉）・（上杉妙子）・（宮本万里） 「成果発表論文について」

※（ ）内は、本人は参加出来なかったが、送られた原稿に基づき議論を行った

2015年2月1日

田中雅子・佐藤齊華・南 真木人・別所裕介 「成果発表論文について」

安野早己・石井 溥・幅崎麻紀子 「成果発表論文について」

成果

本年度は最終年度であり、予算の制約もあって、本研究会の成果出版に向けた草稿検討のための研究会を2日間にわたり開催するのみで終了した。2日間の検討を通して、本研究会が、第1に、「先住民族」「ダリト」などグローバルに或いは国境を越えて流通する概念に基づいた様々な権利主張の運動の動態を、複数の概念枠組の間での選択や、従来こうした概念を用いてこなかった人々による使用の問題も含め、運動家を含む当該社会の人々の内的な多様性に留意しつつ明らかにしてきたこと、第2に、国民国家という枠組と、民族やカースト、ジェンダーといった概念を所与の前提としては見えにくい様々な人々を巡る問題についても、様々な角度からこれまでにない視点を提供してきたことが明らかになった。さらに、本研究を通して、「包摂」を巡る問題を含む現代ネパールの現状を理解するために、海外への移住・出稼ぎという要素が決定的に重要であることが明確になった。研究成果のとりまとめにあたっては、この点についても配慮する所存である。また、昨年度までの研究成果の一端を、2014年5月に幕張で開催されたInternational Union of Anthropological and Ethnological Sciences Inter-Congress 2014における2つのパネルの中で発表した。

「グローバリゼーションの中で変容する南アジア芸能の人類学的研究」

本研究の目的は、グローバリゼーションの中で変容する南アジア芸能の現状を、同地域の政治・経済・社会的変化という文脈に位置づけ、人類学的な観点から明らかにすることである。インドで起こった1990年代の経済自由化

を端緒として、2000年代に入り南アジアの社会変化は更に進展した。そして、儀礼、演劇、舞踊、音楽などの南アジア芸能が、多様化する情報メディアの拡大及び人の移動を通じて幅広く受容・消費される状況をもたらした。それに合わせ、芸能の実践形態や実践者の社会経済的な状況に大きな変化が生じていると同時に、海外への芸能の拡散状況や南アジアへの逆輸入という現象がみられる。本研究では、芸能実践者たちが従来の社会関係を越えたネットワークに参入することで生じる、南アジア芸能の再定義と拡張について考察を行う。現代の芸能実践者たちは、様々な観客・消費者の嗜好に応えるため、従来とは異なる美意識とパフォーマンスを身につけ、市場経済原理に合わせたマネジメントとマーケティングを行う必要に迫られている。彼らが新たな需要に応える一方で、既存の芸能形態や社会形態を維持しつつ、南アジア芸能を創発・変容させていく過程を描き出す。

研究代表者 松川恭子

班員（館内）杉本良男 寺田吉孝

（館外）飯田玲子 岩谷彩子 岡田恵美 小尾 淳 古賀万由里 小西公大 竹村嘉晃

橋 健一 田森雅一 村山和之 山本達也

研究会

2014年 5月10日

※現代インド地域研究 MINDAS との合同研究会

MINDAS 今年度の計画について（MINDAS 共同研究員のみ）

研究発表 David Trasoff “Hindustani Music in America: The First Fifty Years”

コメント及び討論（コメンテーター：田森雅一、岡田恵美）

北インド古典音楽ミニコンサート David Trasoff（サロード）

MINDAS 研究論集出版に関する打合せ

2014年 5月11日

全 員 「本年度の計画についての打ち合わせ」

2015年 2月28日

寺田吉孝 「南インド音楽・舞踊とグローバル化——研究の課題と展望」

松川恭子 「研究成果発表に向けて」

各 自 「研究成果原稿について」

2015年 3月 1 日

全 員 「研究成果発表についての全体討論」

成果

本年度は研究会を2回実施し、研究成果の発表について主に議論を行った。2016年度中に『世界を環流する＜インド＞——グローバル化の中での変容する南アジア芸能の人類学的研究』（仮題）として出版予定である。その中では、グローバル化の中での南アジア芸能の変容を以下4つの類型に分け、南アジアの外で変容を遂げた後、南アジアに戻っていく、あるいは、更に他地域に広がっていく環流という観点から分析する。すなわち1) 「ワールド・ミュージック」の生成を背景に、1980年代以降、アメリカ、ヨーロッパ、日本などで起こった、エキゾチックな他者を喚起させるモノとしての芸能の消費の中での変容、2) グローバリゼーションとの交渉の中でネーション化など様々な方向に向かうローカルな場での芸能の変容、3) グローバルに移動しているように見えながら、リージョナリズムの媒介物として「閉じた観客」を対象に演じられる芸能の変容、4) イギリス植民地時代の南アジア系移民（特にインド系移民）の動きにともなった、南アジア地域外（たとえばシンガポールやマレーシア）への芸能の展開とホスト国の状況に合わせた変容の4つである。

「現代の保健・医療・福祉の現場における『子どものいのち』」

子どもは年齢、性別、生育の環境における違いにかかわらず、生きることにおいて主体性をもち、自分のいのちに関する情報を発信している。個別の社会や文化には子どもが発信する情報を適切に捉え、対応するための共通の認識枠組みが発達しており、子育てに関わる文化的慣習のあり方などを規定している。他方において、個別社会や文化の内部には、それぞれの文化的慣習にとらわれない多様な子どものいのちの認識もみとめられる。現代社会においては、人びとの認識は一層複雑になり、また、多様化しているが、子どものいのちをめぐる互いの認識のギャ

ップが、子どもの保健、医療、福祉にかかわる政策や現場の対応に影響を与えている。そこで、本研究では、人類学、社会学、医学および保健医療系の研究者と実践家による共同研究を行い、現代の保健・医療・福祉の現場における子どものいのちのありようとその捉え方について考察する。研究の成果は、子どものいのちにかかわる現代的課題に学際的に対応するための取り組みに応用する。

研究代表者 道信良子

班員（館内）信田敏宏

（館外）神谷 元 亀井伸孝 白川千尋 波平恵美子 西方浩一 幅崎麻紀子 樋室伸顕
藤田美樹 前田浩利 山崎浩司

研究会

2014年10月25日

全体会議 「研究成果の出版に向けて」
道信良子 「企画書の説明 他」

2014年10月26日

全体会議 「共同研究のまとめ」
公開研究会

成果

本年度は研究員及び特別講師による研究発表及び議論によって明らかになったことを研究の当初の目的に照らし、まとめた。具体的には、保健・医療・福祉の現場で働く医療者、病気や障がいのある子どもの家族、保健・医療・福祉の領域で研究活動を行っている研究者それぞれの「子ども」と「いのち」に対する考え方・捉え方とその共通性について議論し、人類学、社会学、医学及び保健医療福祉分野の研究者・実践家が子どものいのちに関わる課題に協働で取り組むための基本的視点について議論した。5月の日本文化人類学会（第48回研究大会）において中間的な成果を報告し、9月に日本学術振興会「ひらめき☆ときめきサイエンス」の助成を得て、利尻島で小学生向けのワークショップを開催した。10月に「地域における疾病予防と子どものいのち」というテーマで公開研究会を民博で行い、翌年3月に最終成果を中高生向けの本にまとめ、岩波ジュニア新書から刊行した。

「音盤を通してみる声の近代——台湾・上海・日本で発売されたレコードの比較研究を中心に」

本研究は、1945年以前に日本のレコード会社によって台湾と上海で発売されたレコードを取り上げ、両地域におけるレコード産業および音楽の発展の特徴とそれらの関連性を明らかにすることを目的としている。本研究では、数多く存在する東アジアのレコード音楽から、「声」・「歌」を含む音楽ジャンルのレコードに焦点を当てる。東アジアの在来音楽には語り物が多い上、初期レコードは、演説、映画説明、戯劇など、「音楽」に限定されない多様な音を収録した。そこで、ここでは「声」という概念を用いた。具体的には、次の2点に重点をおいて研究を進める。

- 1) 台湾、上海、日本で発売されたレコードを比較し、各地域の音楽嗜好の傾向、共通点、独自性を探求し、更にそれらの関連性を見いだす。
- 2) レコード産業の発達と各地域の社会、文化、音楽の間の相互的影響について研究する。

台湾と上海の音楽文化には共通点があり、録音されたレパートリーには重なり合う部分も見られる。一方で、日本の企業が初期からレコード産業を支配した台湾と、欧米のレーベルが産業の基礎を築き、後に日本企業が進出した上海では、レコード制作のあり方は大きく異なっていた。両地域のレコードの比較は、東アジア音楽の近代史においてメディアの発展、日本の支配、そして地域間の相互交流がどのような影響を与えていたかを明らかにするだろう。

研究代表者 劉 麟玉

班員（館内）野林厚志

福岡正太

（館外）今田健太郎 大畑（長嶺）亮子 尾高暁子 垣内幸夫 黄 英哲 西村正男
星宏宏修 細川周平 三澤真美恵 四方田（垂水）千恵

研究会

2014年 6月21日

張 偉品 「民族学博物館所蔵『京劇』のSPレコードについて」

西村正男 「神戸華僑作曲家・梁 楽音と上海・香港・日本」

2014年11月24日

星名宏修 「耳で聞く文学体験——植民地期台湾のラジオドラマ」

成果発表に向けての準備会議

2015年 2月28日

三澤真美恵「成果発表に向けての備忘録」

成果発表に向けての討論会

成果

本年度の研究会では、共同研究員による研究報告が2件と特別講師による研究報告が1件行われた。共同研究員による研究成果は、西村正男の「作曲家の事例研究」と星名宏修の「耳で聞く文学体験」の2つである。西村の報告では梁 楽音という神戸華僑作曲家を取り上げた。西村によると、梁 楽音は大阪音楽学校出身で1942年に上海に渡り、「中華連合製片有限公司」という映画会社の音楽課の課長に就任した。任期中、「売糖歌」、「戒烟歌」などの曲を作り、李 香蘭によって歌われた。特に「売糖歌」が流行っていたそうである。戦時中1945年までは、梁 楽音の音楽活動は日本と深い関わりを持っていたようである。一方、星名は、植民地台湾時代の日本語のラジオドラマや文学作品に焦点を当て、台湾人や在留日本人が、ラジオを通して、日本語のラジオドラマや文学作品の朗読を聞いたことを明らかにした。娯楽と動員という2つの役割をもったラジオで、日本語によるラジオドラマの「声」がどのように響いたのかを明らかにすることは、日本統治下の台湾における近代を理解する上で重要な課題である。

「災害復興における在来知——無形文化の再生と記憶の継承」

被災体験の記録化や記憶の継承は、被災者自身による体験記の執筆や第三者による聞き取り調査などによって、これまでも数多く試みられてきた。近年では、災害発生によって予期せぬ事態に遭遇した際の判断と行動に関して、一般市民だけでなく災害の現場での対応に当たった行政官や消防士などをも対象として、言語記録として残し、そしてそれを災害状況下での教訓として共有化を図るための災害エスノグラフィも実施されている。しかしながら災害エスノグラフィでは、将来の防災や減災への貢献を目的に、災害発生直後や避難所などの非日常的な環境下での判断・行動にテーマが限定されがちである。本研究は、人びとが自然・社会環境と日々関わる中で形成される実践的、経験的な知（在来知）が、災害発生により被った影響やその再生の活動、地域社会の再建に果たす役割、さらにはそうした経験の継承に注目し、社会的・歴史的背景に照らして、解明することを目的としている。主な対象は東日本大震災における無形文化とする。

研究代表者 橋本裕之

班員（館内）	林 勲男	日高真吾	吉田憲司				
（館外）	猪瀬浩平	植田今日子	柄谷友香	川島秀一	木村周平	小谷竜介	佐治 靖
	関 礼子	寺田匡宏	丹羽朋子	政岡伸洋	松前もゆる		

研究会

2014年 7月12日

丹羽朋子 「非当事者から『当事者』へ——東日本大震災における民間支援を考える」

小谷竜介 「『おらほの祭りを取り戻す』こと——石巻市雄勝町におけるチーム鼓舞の試みから」

2014年 7月13日

橋本裕之・林 勲男 「成果出版について」

メンバー各自の執筆計画発表

2014年10月 4日

岡本翔馬 「桜ライン311の活動」

2014年10月 5日

山内宏泰 「常設展示『東日本大震災の記録と津波の災害史』の試み」

2015年 1月25日

全員による成果出版用論文の中間発表

成果

最終年度に当たる本年度は、研究成果のとりまとめにあたり、3回の研究会のうち1回を館外開催とし、東日本大震災被災地にて展開する記憶継承活動のなかで、本研究会と密接に関わる2つのプロジェクトについて、研究会メンバーで情報を共有し、意見交換をおこなう機会とした。桜ライン311の岡本翔馬氏は津波到達線上に桜を植樹することによって、リアスアーク美術館の山内宏泰氏は被災地の写真と被災物を主とした展示「東日本大震災の記録と津波の災害史」を通して、それぞれに災害の記憶をつなぐ方法の可能性を追求する試みを実践している。東北地方太平洋沿岸は、いわゆる津波常襲地域であり、過去の大災害においても経験と教訓の継承の試みはなされてきているが、新たな媒体を通じて、多くの人びとを巻き込むプロジェクトとして運用を図っていることは斬新なものである。両名に各プロジェクトについて発表してもらい、意見交換をおこなった。他の2回の研究会は、研究発表と成果の取りまとめに向けて、出版社から編集担当者にも参加してもらい開催した。

「熱帯の『狩猟採集民』に関する環境史的研究——アジア・アフリカ・南アメリカの比較から」

本研究は、熱帯の「狩猟採集民」を対象にして彼らの資源利用や民族間関係を環境史の視点から構築することを目的とする。申請者によると、彼らの歴史は、1) 狩猟採集民の時代、2) 狩猟民と農耕民との共生関係や農耕民化の時代、3) 前近代・近代の国家形成の時代、4) グローバル化の時代という4時代に便宜的に区分できる。本研究では、これらの時代状況をふまえて、アジア、アフリカ、南アメリカという3大陸に暮らす「狩猟採集民」の視点からみた世界史を環境史として新たに構築することを試みる。具体的な問いは、時間軸に沿って 1) 狩猟採集民は、熱帯雨林や熱帯高地において自給的に暮らしていたのか、2) どういう状況下で狩猟採集民と農耕民との共生関係がみられたのか、3) 前近代の国家形成（ムガル帝国と林産物、コンゴ王国と象牙など）や植民地形成にともない狩猟民はどのように対応したのか、4) 沈香などの森林産物や象牙を求める中国経済の増大などグローバル化が進むなかで、狩猟民社会にどのような変化がみられたのか、などである。これら4つの個別の問題を解くことによって、これまでの都市文明中心の世界史ではなく狩猟採集民の視点からの世界史を、地球の環境史として構築することが研究会のねらいである。

研究代表者 池谷和信

班員（館内）信田敏宏

（館外）伊澤紘生	稲村哲也	大石高典	大橋麻里子	小谷真吾	小野林太郎	加藤裕美
金沢謙太郎	小泉 都	佐藤廉也	鯨島弘光	関野吉晴	高田 明	辻 貴志
鶴見英成	中井信介	那須浩郎	服部志保	増野高司	松井 章	松浦直毅
八塚春名	山本太郎					

研究会

2014年 4月26日

池谷和信 「趣旨説明——アジアの森や海と狩猟採集民」

高木 仁 「ウミガメ類と人のかかわり——カリブ海からの視点」

鯨島弘光 「ボルネオのヒゲイノシシと人々」

信田敏宏 「統治される森に生きる——マレーシア、オラン・アスリの事例」

総合討論

2014年 4月27日

参加者全員 「ノマッドの遊動と定住——アジアの事例を中心として」

2014年 7月26日

池谷和信 「趣旨説明・『狩猟採集民』の定住度と社会変化」

小泉 都 「東南アジア（ボルネオ）の狩猟採集民の由来と半定住」

コメント：小野林太郎

羽生淳子 「東アジアの『定住狩猟採集民』・縄文人」

コメント：荘司一歩

三宅 裕 「西アジアの定住狩猟採集民の実像」

コメント：佐藤廉也

全体討論

2015年2月8日

池谷和信 「趣旨説明——これまでの共同研究会から」

小野林太郎「海域アジアの人類史と狩猟採集民——人類の島嶼適応から狩猟・漁撈専門民の出現まで」

大橋麻里子「アマゾンの氾濫原の土地利用の変遷——過去数十年ぐらいの狩猟民と漁労民のかかわりから」

大石高典 「狩猟民と農耕民、漁労民——コンゴ盆地の環境史」

高田 明 「ナミビア北中部におけるクン・サンの再定住——宣教団の活動に注目して」

服部志帆 「定住化による生業と民族関係の変化——カメルーン東南部の狩猟採集民バカを事例に」

全 員 「成果出版」

成果

本年度の研究成果は、3回にわたる民博での共同研究会の開催のみならず、5月に幕張で開催された国際人類学民族学会議でのパネル報告（タイトル：狩猟民、遊動民からみた地球環境史）などと多岐にわたっている。本研究会では、1回目および2回目とも、人類にとっての定住化の過程やその社会経済的な影響について焦点を当てた。これらの事例の対象地域は異なるものの、地域と地域との比較をとおして共通の特質を抽出することができる。それと同時に、これらの定住化が、人類史のなかでどのように位置づけるのか、地球環境史の視点から考察することができた。

「贈与論再考——『贈与』・『交換』・『分配』に関する学際的比較研究」

個人間や集団間のモノや食料などのやり取りを説明する人類学理論にモースの贈与論がある。この贈与論は後に、互酬性（reciprocity）に着目したレヴィ＝ストロースによって社会的交換論へと展開を見た。また、贈与論を批判的に検討したワイナーやゴドリエは「贈与できないモノ」の概念を提起した。これらの流れとは別にマリノフスキーはクラ交易によって当事者間に連帯が生み出され、社会が統合されるという一種の交換論をモース以前に提起していた。狩猟採集社会を研究する人類学者は、食料のやり取りを分配（sharing）や再分配（redistribution）、交換（exchange）などの概念で記述し、説明しようと試みてきた。さらに上記の概念に関連する説明モデルとして、サーリンズモデルなどが存在している。

本研究の目的は、アメリカやオセアニア、アジア、アフリカなど世界各地における贈与や交換、分配の民族誌事例を学際的に比較検討することによって、贈与や交換、分配などの概念と説明モデルの内容や有効性を検証することである。また、グローバル化が進む市場経済の浸透によって、各社会の贈与・交換・分配慣行がどのように変化してきたかについても検討を加えたい。

研究代表者 岸上伸啓

班員（館内）丹羽典生 藤本透子

（館外）井上敏昭 小川さやか 小田 亮 風戸真理 近藤 宏 佐川 徹 立川陽仁

友野典男 中川 理 中倉智徳 仁平典宏 比嘉夏子 深田淳太郎 丸山淳子

溝口大助 山極寿一 山口 睦 渡辺公三

研究会

2014年7月6日

岸上伸啓 「総論」

藤本透子 「イスラーム復興のなかの贈与交換——カザフスタンの事例から」

風戸真理 「モンゴル牧畜における労働交換——雇用と贈与のあいだで」

山口 睦 「災害支援と贈与——婦人会活動と慰問袋を中心に」

全 員 「成果出版についての意見交換」

2014年11月8日

岸上伸啓 「これまでの研究会の成果について」

近藤 宏 「パナマ東部先住民エンペラにおける不信と道徳」

中倉智徳 「贈与論における発明の位置——モースとタルド」

全 員 「成果本の出版計画について」

2015年1月31日

岸上伸啓 「成果刊行について」

中川 理 「『反-市場』としての贈与——フランスの青果市場の事例」

仁平典宏 「近現代日本における『ボランティア』言説の構造と東日本大震災の位置——〈贈与のパラドックス〉に着目して」

全 員 総括

成果

2014年度は、ユーラシア地域、中米、ヨーロッパにおける贈与交換に関する事例の検討および社会科学から見た贈与論の検討を行った。本年度の成果は次の通りである。

1) 贈与交換の事例

カザフ人には、相互に贈与が行われるスィクルとイスラームに基づく贈与の2種類があり、カザフ社会における贈与や交換、分配の体系はイスラームの教義のみからでは理解できないことが藤本によって指摘された。グローバル化が贈与交換に影響を及ぼしている事例として、モンゴルのゲルは親から子にのみ受け継がれるものであったが、自由経済の拡大するに従い非家族間で金銭によって移譲されるようになったことが風戸によって報告された。近藤はパナマ東部の先住民エンベラを事例として毒の無いモノを分け与えることは、信頼できない他者との生活において良いことを生み出す手段となっていると指摘した。これらの事例は、贈与交換と社会関係が不可分の関係にあることを示している。

2) モースの「贈与論」の社会科学研究での応用的展開

災害支援と贈与について婦人会活動と慰問袋を事例として検討した山口は、災害支援としての贈り物は、非日常・日常時の贈与行為として贈与研究と災害研究が重なり合う研究領域であることを指摘した。中倉は、発明と贈与との関係についてモースとタルドの研究を比較検討し、発明やイノベーションを贈与論の視点から理解する可能性を提示した。また、中川はフランスの青果市場を事例として、社会に埋め込まれた市場という視点から贈与（反市場）/市場の構図を見直す必要性を指摘した。さらに、仁平はボランティアの言説分析によって贈与にはパラドックスが付随していることを指摘した。これらの研究は、「贈与」を現代的現象の解明に援用できる可能性を示している。

「肉食行為の研究」

本研究の目的は、人類の採食行動の構成要素の1つである肉食に焦点をあて、その生態学的適応と文化的位置づけとの関係、さらに今日のグローバル消費社会のなかで変質してきた人類の肉食行為の動態を明らかにし、将来の展望を与えることである。人類は進化の過程において、肉食と菜食の双方に生態学的に適応するとともに、それを文化的な行為として社会の中に位置づけてきた。食肉の分配や共食、供犠における利用、肉食の忌避や規範化は、人類学が明らかにしてきた肉食の重要な社会的機能である。食肉の生産や流通が産業化された20世紀後半から、肉食は先進国社会の中で日常化される反面、動物から食肉を得るという光景は希薄となった。こうした社会的背景のもと、欧米では「動物解放論」に代表される倫理的なアプローチを中心に、肉食の是非を含めた動物の権利をめぐる議論が盛んとなった。しかしながら、これらは功利主義と義務論が中心で、異なる社会的、文化的脈絡の中で人間と動物との関係が構築されてきたことについては必ずしも注意がはられていない。本研究では、肉食とそれに関連する行為の背景にある複雑で多様な問題群を明らかにしたうえで、これからのグローバル消費社会における肉食のありかた、さらには、人間と動物との関係のありかたに新たな視座を作り出すことをねらいとする。

研究代表者 野林厚志

班員（館内）池谷和信

岸上伸啓

（館外）伊勢田哲治

五百部 裕

鶴澤和宏

梅崎昌裕

永ノ尾信悟

大森美香

小川 光

加藤裕美

筒井俊之

林 耕次

原田信男

本郷一美

山田仁史

研究会

2014年 5月10日

野林厚志 本年度の計画概要

梅崎昌裕 「パプアニューギニア高地人の肉食」

山田仁史 「禁断の肉?——人類学におけるカニバリズムの虚実」

2014年 5月11日

本郷一美 「狩猟から牧畜へ——肉食行為の変化」

2014年 7月27日

筒井俊之 「動物疾病から見た世界の畜産の動向」

小川 光 「グローバル時代の食肉需要と供給の変化」

全員による討論

2014年 7月28日

参加者による現代の食肉生産に関わる議論

2015年 1月17日

原田信男 「日本の動物供犠と穢れ」

伊勢田哲治「動物福祉の論理と動物供養の倫理」

成果出版に関する討議

2015年 1月18日

野林厚志 「肉食のブランド化——イベリコ豚を事例として」

成果

2014年度は人類社会における肉食行為を文化的に規定する諸要素、グローバル化する社会の中での肉食の位置づけや変化、そして、肉食や屠殺の倫理を課題とする研究会を実施した。文化的に肉食をかたちづくる要素として着目したのは饗宴、カニバリズム、そして肉食に対比的な植物（菜食）の実践である。特別な状況での採食の対象として食肉の相対的な価値が高くなることは、肉食行為に文化的な意味を付与する背景となること等が議論された。グローバル時代の肉食行為を考えるための議論は経済学と獣医疫学の分野を中心に行った。グローバル世界での肉食の未来の予見、大量生産社会における食肉生産と消費との間に存在する矛盾が議論の対象となった。また、肉食が倫理的な規範の中でどのように存在しうるのかという課題を通して、「西洋」と「東洋」における倫理規範の接合の可能性を探る議論が行われた。また、当該年度は、研究会の最終年度であり、成果刊行に関する意見交換も並行して行い、共同研究員の全員が寄稿する成果論文集の構成を決定した。

「触文化に関する人類学的研究——博物館を活用した“手学問”理論の構築」

本共同研究は、2009～2011年度に実施した科学研究費プロジェクト「誰もが楽しめる博物館を創造する実践的研究——視覚障害者を対象とする体験型展示の試み」を発展的に継承し、人類学的視点から「触文化」（さわらなければわからない事実、さわって知る物の特徴）について考察することを目的としている。上記科研プロジェクトの成果としてまとめられた広瀬編『さわって楽しむ博物館——ユニバーサル・ミュージアムの可能性』（青弓社、2012年5月）は、「ユニバーサル・ミュージアム＝誰もが楽しめる博物館」の入門書、実践事例集と位置づけることができる。この本の内容を敷衍する形でユニバーサル・ミュージアム、さらには21世紀の多文化共生社会の具体像を指し示すための理論構築を試みるのが本研究の狙いといえよう。これまでの人類学においては、視覚（映像）・聴覚（音響）などに比較して、触覚に注目する研究は少なかった。本研究では、博物館展示を活用した“手学問”理論を切り口として、「触文化」にアプローチする。

研究代表者 廣瀬浩二郎

班員（館外）石塚裕子 及川昭文 大石 徹 大高 幸 小山修三 五月女賢司 鈴木康二
原 礼子 藤村 俊 堀江典子 真下弥生 増子 正 宮本ルリ子 山本清龍

研究会

2014年 7月 6日

さかいひろこ 「『縄文文化にさわる』ワークショップの実践事例報告1」

堀江武史 「『縄文文化にさわる』ワークショップの実践事例報告2」

寺岡茂樹 「『疱瘡絵にさわる』展覧会の実践事例報告」

2014年11月30日

安芸早穂子 「『アート&アーケオロジー』の可能性1——レプリカの制作と活用」

村野正景 「『アート&アーケオロジー』の可能性2——考古展示のユニバーサル化の模索」

堀江典子 「公園のユニバーサルデザイン——その現状と課題」

半田こづえ 「視覚障害者の美術鑑賞1——彫刻作品の触察」

真下弥生 「視覚障害者の美術鑑賞2——絵画作品へのアプローチ」

総合討論

2015年3月1日

鈴木康二 「ワークショップの可能性——レプリカのその後」

藤村 俊 「身体を刺激する場としての博物館」

宮本ルリ子 「『つつこ！プログラム』（普及事業）の触る展示とワークショップ事例報告」

五月女賢司 「宇治の世界遺産・触って散歩ツアーについての考察」

山本清龍 「大阪空堀のまちあるき体験の評価——ユニバーサルな楽しみ方の提案に向けて」

大石 徹 「触常者も見常者も満喫できる娯楽施設——マードーロッジの事例」

廣瀬浩二郎 「共同研究の回顧と展望——総合討論」

成果

共同研究の最終年度である今年度は、3回の研究会を実施した。全体として、「さわる」「視覚障害」をキーワードとする多様な実践報告が積み上げられ、本プロジェクトが掲げる「博物館を活用した“手学問”理論の構築」という目標を達成できた手応えを感じている。初回研究会（7月6日）では考古学、現代アート、近世風俗史などの分野で触察系のワークショップを展開しているゲスト講師の発表を元に、ユニバーサル・ミュージアムにおける「さわる展示」の重要性を確認した。第2回研究会（11月30日）では視覚障害者の美術鑑賞を中心に、多様な角度から触文化の意義を探究した。第3回研究会（3月1日）では2年半の活動の総括を意識し、共同研究員が自己の研究の現状と課題を報告した。個々のメンバーが最終回となる研究会において、来年度以降の新たな共同研究に向かう展望を共有できたことは有意義である。

「明治から終戦までの北海道・樺太・千島における人類学・民族学研究と収集活動

——国立民族学博物館所蔵のアイヌ、ウイльта、ニヴフ資料の再検討」

国立民族学博物館が所蔵する北海道、樺太、千島の民族資料のうち、第二次世界大戦終戦までに収集されたことが明らかなものは、アイヌが1,000点以上、ウイльтаで280点以上、ニヴフで70点以上ある。これらは伝統的な特徴をよく残しており、素材や製作技法といった物質文化研究を進めるうえで重要であるとともに、現在では収集できない貴重なものが多数含まれている。ただ残念なことに、当時の調査・収集時の誤解・誤認や資料管理の限界、また、数度の管理替えによる情報の紛失、転記・入力時のミスなどにより、資料データの欠けているものや誤りが少なくない。しかし、これらの資料は収集者が明らかなものが大部分で、その足跡をたどることによって、情報を再検討し、修正・追加できる可能性が十分にある。本研究では、各民族の物質文化、言語等に関する専門家が共同研究を行うことによって、資料に適正な情報を付すとともに、あわせて明治から昭和前期までの人類学または民族学者と被調査者・資料提供者との関係など、資料が集められた当時の研究状況と社会的な背景を明らかにする。

研究代表者 齋藤玲子

班員（館内）佐々木史郎

（館外）大塚和義 小川正人 加藤 克 北原次郎太 木名瀬高嗣 小西雅徳 田村将人
丹菊逸治 津曲敏郎 手塚 薫

研究会

2014年9月24日

齋藤玲子 「坪井正五郎の北海道・樺太調査について」

2014年 9 月25日

東京大学大学院情報学環附属社会情報研究資料センター所蔵「坪井家関係資料」のうち坪井正五郎関係資料とその内容に関する検証

2014年 9 月26日

東京大学大学院情報学環附属社会情報研究資料センター所蔵「坪井家関係資料」のうち坪井正五郎関係資料とその内容に関する検証

研究計画に関する打ち合わせ

2015年 1 月24日

齋藤玲子 「坪井正五郎の樺太調査関係資料から見えるもの」

加藤 克 「旧東京大学理学部人類学教室資料の管理変遷について」

2015年 1 月25日

木名瀬高嗣「国立民族学博物館所蔵資料と『アイヌ民族総合調査』」

2015年 2 月28日

山田祥子 「ウイルク民族資料の現地呼称——資料カードと辞書の照合による民族誌研究の展開」

佐々木史郎「虻田で作られた木綿衣の分布と年代——ロシアおよび北海道の博物館の資料調査から」

2015年 3 月 1 日

小西雅徳 「石田収蔵の第4回樺太調査（大正6年）について」

成果

引き続き、東京大学理学部人類学教室旧蔵資料と日本民族学（協）会附属民族学博物館旧蔵資料を中心に、情報の再検討・修正を進めた。とくに東大人類学教室の主任教授であった坪井正五郎（1863-1913）の遺した野帳や日記などと著作について調べ、明治時代におこなわれた北海道と樺太の調査・収集活動の状況を検討した。さらに、東大の資料カード類については、複数回の整理・作成がおこなわれているが、それらを比較調査し、記載情報の変化をつきとめ、作成された時代や状況等を推察した。

また、日本民族学協会の旧蔵資料については、同協会が1938（昭和13）年に樺太に派遣した北方文化調査隊の一人、宮本馨太郎が残した収集資料のカードに記録されたウイルク語およびニヴフ語の現地呼称について、共同研究員および特別講師の言語学研究者によって分析をおこない、調査時の状況や今後の課題について検討した。

「アジア・オセアニアにおける海域ネットワーク社会の人類学的研究——資源利用と物質文化の時空間比較」——

アフリカ大陸で誕生した現生人類は、約5万年前頃までにはアジアやオセアニアの島嶼海域に移住・拡散した。島嶼海域に進出した人類は、自然資源や加工生産物を交換するために海を渡る移動を繰り返し、その過程で広範囲に及ぶネットワークを形成してきた。アジア・オセアニアには、そうした海域ネットワークを生活基盤とする社会が各地にみられる。本研究の目的は、この海域ネットワーク社会の普遍性と地域性を、物質文化と資源利用の様式ならびにその分布に関する時空間の双方の面からの比較を通じて、人類史的な視点で検討するところにある。このうち時間面では、5万年程度の幅の考古学的時間と約100年程度の幅の民族誌的時間を、空間面では、日本を含む東アジア、東南アジア、オセアニアの海域を、それぞれ比較の準拠枠と、主な検討事項としては資源利用と物質文化をテーマに検討を進め、海域ネットワーク社会の普遍性と地域性を明らかにするのが狙いである。

研究代表者 小野林太郎

班員（館内）飯田 卓 印東道子

（館外）赤嶺 淳 秋道智彌 片桐千亜紀 島袋綾野 鈴木佑記 田中和彦 玉城 毅

長津一史 橋村 修 山形真理子 山極海嗣 山口 徹

研究会

2014年 7 月 6 日

小野林太郎「本年度の計画」

瀬木志央 「フィリピン中央ビサヤ地域の小規模漁業と商業漁業を巡る海域ネットワーク」

2014年10月19日

小野林太郎・長津一史 「第2回研究会の趣旨と発表者の紹介」

深田淳太郎「ムシロガイ交易の地域史——ニューブリテン島—ブーゲンビル島—ソロモン諸島西部地域を結ぶ海域ネットワークの歴史の変遷」

玉城 毅 「沖縄・糸満漁民を生み出した力学——漁業町形成過程における政治経済と文化」

2014年11月16日

秋道智彌 「海のエスノ・ネットワーク論からみた東南アジア・オセアニア・琉球」

印東道子 「ミクロネシアの海域ネットワーク——その起源に関する一考察」

山口 徹 「海域ネットワークが生み出したリモートオセアニアの環礁景観」

島袋綾野 「更新世以降における八重山列島の人類移住と海域ネットワーク——課題と現状」

山極海嗣 「下田原期～無土器時代における先史宮古・八重山諸島と海域ネットワーク」

小野林太郎「新石器～金属器時代におけるウォラシア海域の人類移住と海域ネットワーク」

田中和彦 「土器・副葬品からみた先史南シナ海における海域ネットワーク——フィリピンの事例から」

深山絵実梨「鉄器時代の南シナ海における海域ネットワーク——耳飾の分布と年代からの復元の試みから」

山形真理子「鉄器時代の南シナ海における海域ネットワークと人類の移住——ベトナムの甕棺墓に残された証拠から」

成果

本年度の主な研究成果としては、3回の共同研究会の開催があげられる。このうち本年度1回目の共同研究は2014年の7月6日に開催し、特別講師としてメルボルン大学の瀬木志央氏にフィリピン中央ビサヤ地域の小規模漁業と商業漁業を巡る海域ネットワークについて発表してもらうことができた。次に2回目の共同研究は2014年10月19日に開催し、特別講師として一橋大学の深田淳太郎氏にメラネシアの事例として、ソロモン諸島西部地域におけるムシロガイ交易の地域史から、海域ネットワークの歴史の変遷について発表してもらったほか、本研究メンバーの玉城 毅氏に沖縄・糸満漁民の事例として、糸満集団による漁業町形成過程における政治経済と文化的背景について発表してもらい、両事例を踏まえた総合討論を行うことができた。さらに3回目の共同研究は、日本東南アジア考古学会の大会を兼ねる形で2014年11月16日に上智大学を会場とした、公開研究会として開催し、本研究メンバーのうち、考古学的時間軸を中心に計8名が発表したほか、特別講師として早稲田大学の深山絵実梨氏に南シナ海の鉄器時代における海域ネットワークの事例について発表してもらうことができた。

「『統制』と公共性の人類学的研究——ミャンマーにおけるモノ・情報・コミュニティ」

ミャンマー（ビルマ）は1962年ネーウインの軍事クーデター以来、半世紀の間に3つの政治体制（社会主義、軍政、大統領制）と2つの経済体制（社会主義体制における統制経済、経済制裁下の市場経済）を経験したが、一貫して物の流れや人的移動、情報などを中心に厳しい統制が課せられてきた。本研究会で扱う「統制」とは比較的可視化されやすい国家政策に留まらず、宗教、ジェンダーといった多様な領域に及ぶ不可視のイデオロギーと支配装置、さらに、隣組的な相互監視システムや言論統制などを通じて身体化された統制をも含む。他方、それぞれのコミュニティ内で、例えばミャンマーであれば、僧院を核とする宗教ネットワークや在家組織、精霊信仰の霊媒や信者たち、各少数民族や国際・国内NGOなどの組織やその参加者、その他ジェンダーや「親しい（キン）」を媒介とする繋がりの中に、「統制」をすり抜け、オルタナティブなネットワークを作る戦略的实践が存在してきた。本研究会では、こうした実践に着目し、「統制」と公共性という2つの観点から、統制解除へと急激に移行しつつあるミャンマーを中心に、社会的再編成、コミュニティの公共性やその変容を明らかにすることを目指す。

研究代表者 土佐桂子

班員（館内）信田敏宏

（館外）飯國有佳子	生駒美樹	伊藤まり子	伊野憲治	岡本正明	藏本龍介	斎藤紋子
高谷紀夫	田村克己	田村慶子	テッテツヌティ	松井生子		

研究会

2014年4月26日

田村慶子 「2006年12月調査から見るミャンマー華人」

木村 自 「クレオールとしてのミャンマー華人／華人系ミャンマー人——ミャンマー地方都市における華人と非華人の協働から考える」

総合討論

2014年 5月24日

生駒美樹 「パラウン自治区ナムサン郡における茶生産者間の関係の変化とその背景」

山本文子 「ヤンゴンにおける霊媒カルト集団の現状——霊媒 KMT とその信者の事例から」

総合討論・情報交換

2014年 6月29日

岡本正明 「民主化・自由化とセキュリティの民営化——インドネシアとミャンマーの比較」

菱山宏輔 「バリ島の地域セキュリティとゲート・コミュニティ」

総合討論・情報交換

2014年 9月28日

土佐桂子 「『統制』と公共性をめぐる人類学的研究の可能性」

全 員 「研究に関する中間報告」

総合討論・情報交換

成果

2014年度は全部で4回の研究会を開催した。今年度の核は3つあり、第1が昨年度に引き続き、華人や少数民族といったマイノリティに対する統制に関わる考察である。マイノリティの言語、生産、宗教活動に対する統制という局面に着目することにより、彼らの置かれる状況は可視化しやすい。ただし、逆に、公共性へのアクセスがどれほど開けるかという点においては当該社会の状況により異なり、今後の研究課題として残されている。第2に、統制、統治を考察する重要な核として、民主化プロセスにおけるセキュリティの民営化に着目する研究がある。インドネシアにおけるセキュリティの民営化、さらにミャンマーにおけるセキュリティ事業への元軍人の関与、さらに、バリのゲート・コミュニティに関する考察を通じて、ゲートが人の動きを統制する反面、バリ島における伝統的門の機能に重なる公共性を担う可能性も示された。第3の核は、統制と公共性に関する従来の理論を振り返り、これまでの発表における「公共性」の理論的検討を行うものである。参加者全員の討論を通じて、50年近い言論統制の歴史を通じた統制の在り方、民主化運動の意義を振り返りつつ、いくつかの課題が示された。次年度再度、概念や議論のすりあわせを行いつつ、出版に向けて考察を深めることが課題といえる。

「現代消費文化に関する人類学的研究——モノの価値の変化にみるグローバル化の多元性に着目して」

本研究の目的は、モノの流通・消費をめぐるグローバル化現象の多元性に注目した、現代消費文化に関する人類学的研究の新しい可能性を提起することにある。具体的には、アフリカにおける中古品やコピー商品、タイに輸入される日本アニメ、ガーナやラオスのフェアトレード製品、ネパールの宝石、既製服化される中国ミャオ族の民族衣装、トルコの手織り絨毯、エジプトにおける学校教育や教養としての宗教実践を通じたステータスの消費、鯨肉の流通・消費における日本人論の消費といった多様なモノ・価値の流通・消費にかかわる事例報告をおこない、以下の二つの課題に取り組む。第1に、先進諸国・新興国・研究対象地域のあいだをモノが動くプロセスと、そこでモノの価値変化を明らかにし、グローバルな経済システムの再編・再創造のあり方を考察する。第2に、モノの流通・消費の実践にみられる研究対象地域の自己表現のあり方やアイデンティティの変容、新しい環境観・ジェンダー観、階層化や世代間関係を析出し、研究対象地域間、および日本をふくむ先進諸国におけるそれらとの共通性・異質性を考察する。

研究代表者 小川さやか

班員（館外） 相島葉月 牛久晴香 田村うらら 鳥山純子 箕曲在弘 宮脇千絵 若松文貴
渡部瑞希

研究会

2014年 7月13日

小川さやか「今年度の研究計画について意見交換」

宮脇千絵 「手製から既製服へ——中国雲南省におけるモンの服飾の商品化・流通・消費」

相島葉月 「教養へのあこがれ——現代エジプトの都市中間層によるイスラーム・教育・メディアの消費をめぐる」

討論

2014年12月20日

今年度の研究計画について意見交換

鳥山純子 「現代カイロの教育学校市場に関する一考察——分析ツールとしての「消費」概念を援用して」

小川さやか「消費の人類学の論点整理と成果公開について」

討論

2015年2月1日

これまでの研究会と今後の成果公開について意見交換

田村うらら「消費者の志向を想像／創造する——トルコ絨毯の修繕と流通に関わる人びとに注目して」

渡部瑞希 「フレンドへの信頼と懐疑から生成する取引空間——ネパールの観光市場、タメルにおける宝飾商売の事例から」

討論

成果

本年度は、計3回の共同研究会を開催した。第1回目は小川が、昨年度の共同研究の論点を整理した後、2つの個人発表がなされた。宮脇は、中国少数民族ミャオ族の民族衣装が既製服化されるプロセスに光をあて、装いと民族アイデンティティを結びつける他者からの視線や識別と着用者による認識のずれを考察した。また相島は、現代エジプトの都市中間層による聖典の暗誦教室やメディア、教育の消費が「教養」の獲得の切望と結びついていることを示し、中流層的な倫理観とモダニティの関係性をめぐる従来の議論を再考した。第2回の研究会では、鳥山が大塚英志の「物語消費」論を援用して、社会的成功をめぐる「神話」により、エジプトの中間層のあいだでいかに学校選択という記号消費が過熱していくかを論じた。第3回では、田村が古い絨毯に価値を置く消費者の志向性と呼応した／を創造するトルコ絨毯のビンテージ化と修繕の試みについて報告した。また渡部はネパールの宝石商が観光客の購買行動や消費に「フレンド」という「信頼」をめぐる記号を用いていかに働きかけているかを議論した。本年度で予定していたすべての研究発表を終え、メンバーの共通した切り口としてモノの価値や消費のコンテキストの断絶をつなぐ「インターフェイス」に注目したアプローチが析出された。

「ランドスケープの人類学的研究——視覚化と身体化の視点から」

グローバル化の進展に伴い世界各地で地域的特色をつくりだす動きが顕著になっているが、なかでも自然、建築、公園などの景観は、現地の歴史文化や民族文化と結合し、その特色を示すランドマークとなっている。しかし、こうした景観と文化のポリティクスの関係性について、我が国の人類学はいまだに十分な議論を展開しておらず、景観人類学という分野も定着していない。本共同研究は、多様な行為主体による景観への意味付与や競合に焦点を当てることで、景観研究における人類学の意義と役割を考察する。

本共同研究は具体的に、主に2つの視点から、世界各地における景観形成のメカニズムを検討する。まず、地方政府、プランナー、開発業者、旅行会社、マス・メディアなどが、紋切型の現地文化を可視化し、現地らしい景観を物理的に構築していく「視覚化」の力学(1)について探求する。次に、そうした景観が住民、観光客、芸能集団の身体経験に基づき再解釈されていく「身体化」の過程(2)を、民族誌的記述により探求する。さらに、この2つの枠組みを統合する理論モデル(3)を導き出すことで、日本における景観人類学の促進を図ることを、本共同研究の目的とする。

研究代表者 河合洋尚

班員(館外) 石村 智 岩田京子 大西秀之 小西公大 小林 誠 里見龍樹 辻本香子
椿原敦子 土井清美 安田 慎

研究会

2014年6月28日

小西公大 「風車が村にやってきた!——インド・タール沙漠における風力発電開発事業と変容する社会的景観」

辻本香子 「共有される／されない音風景——香港の龍舞の屋外活動をめぐって」

2014年6月29日

石村 智 「景観を読む——Reading the Landscape」

総合討論

2015年1月10日

河合洋尚・岩田京子・椿原敦子・安田 慎 「研究成果原稿読み合わせ(1)」

2015年1月11日

大西秀之・石村 智・辻本香子 「研究成果原稿読み合わせ(2)」

成果

最終年である2014年度は、3名の発表者が事例報告をおこなった。今年度は、景観人類学において今後重要になると思われる、2つの問題について主に議論を展開した。第1は、景観と五感との関係性についてである。従来の景観人類学では、景観の概念がまなざしと関係するため、特に視覚について焦点を当ててきた。それに対し、本研究会は、景観人類学の議論における視覚への偏重を確認するとともに、視覚以外の五感（聴覚、嗅覚、触覚）にいかにかアプローチしていくかについて議論した。第2は、応用実践への取り組みである。目下、景観人類学は、景観の形成とその競合を論じることはあっても、景観問題を解決することに必ずしも注意を払ってきたわけではない。この状況を鑑みて、景観問題の解決に取り組もうとする先行研究を整理するとともに、インド、カンボジアなどの事例から、人類学が景観問題にいかように役に立ちうるのか討議した。さらに、パブリック人類学／考古学と景観人類学の接点についても新たに確認することができた。

『「国家英雄」から見るインドネシアの地方と民族の生成と再生』

現代インドネシアでは、中央の民主化と地方分権化政策に呼応した地方の小地域社会や民族集団が、独自の文化や歴史を創生し、国家レベルの認証制度を活用しながらその権威づけを目指す動向が顕在化している。本研究では、これらの諸動向を複数の地域・民族間で比較検討することで、対象社会が国家中央との関係を模索しながら文化的自己呈示を行い、そこから「地方」や、特定地域への帰属によらない「民族」といった人間集合が生成、再生する動態を、文化、歴史、政治、開発など複眼的に考察する。具体的には、本来は国民統合の手段であった「国家英雄」認定制度に注目することで、1) 近現代の国民国家の形成過程を再検討し、2) 国民統合とは異なる次元で進む「国家英雄推戴運動」による地域振興や文化創生の現状、3) その動機と背景となる各対象社会の歴史過程を共通の問題として探求しながら、脱中央集権を標榜する国民国家と「地方」や「民族」との関係を、グローバルな政治経済的状況や民主化動向を視野に明らかにすることを目指す。

研究代表者 津田浩司

班員（館外）太田 淳 岡本正明 小國和子 金子正徳 北村由美 佐々木拓雄 中野麻衣子
見市 建 森下明子 森田良成 山口裕子 横山豪志

研究会

2014年7月19日

小國和子 「地方分権時代の〈国家〉英雄——南スラウェシにおける Sultan Daeng Raddja 家族の語りを中心に」

森下明子 「なぜ国家英雄推戴の動きが活発な地方とそうでない地方があるのか——カリマンタン4州の国家英雄推戴の動向を比較しながら考える」

森田良成 「西ティモールと新しい国家英雄」

全体討論

2015年2月22日

岡本正明 「国民英雄の死後管理」

太田 淳 「国民英雄の歴史文脈——バンテンおよびランブンの歴史叙述から」

全体討論

成果

本年度は研究集会を2度実施し、各メンバーの研究成果に基づき、各事例の共通性と差異について、各地域社会の政治・経済状況や文化的特性、歴史過程を踏まえて相互参照的に検討した。具体的には、これまでまだ発表を行っていなかったメンバーによる、ティモール島、カリマンタン島などの諸社会・諸団体における事例および政治学や歴史学の視点からの発表をもとに、議論を行った。

近年、民族誌映画祭を中心とした国際的な研究交流が、メディアアートや映画界をも包摂しつつ、世界各地で盛んに展開し、人類学における新たな理論潮流が生み出されている。本研究の目的は、これらの国際的な研究動向を踏まえ、人類学、映画、アートの実践が交差する場から、文化の記録と表象における表現の地平を理論的・実践的に開拓することである。本研究では、映像人類学の各学派の研究潮流の分析、アートや映画界における人類学的に援用可能な方法論の考察を行う。そして、共同研究のメンバーが実践する民族誌映画制作、音や写真のインスタレーション等の報告、議論を経て、映像民族誌の新たなナラティブを創造し、人類学および隣接する学問へその可能性を提言する。

研究代表者 川瀬 慈

班員（館外）伊藤 悟 春日 聡 小林直明 佐藤剛裕 田沼幸子 丹羽朋子 分藤大翼
村橋 勲 柳沢英輔

研究会

2014年7月6日

川瀬 慈 「はじめに——Sensory Turnの人類学への返答」

分藤大翼 「第12回ゲッティンゲン国際民族誌映画祭報告」

佐藤剛裕 「NGAGPA STYLE ——ヒマラヤの在家密教行者の世界」粗編集版の発表／ブラッシュアップ

村橋 勲 「これまでの作品紹介と今後の撮影計画——南スーダンと「難民」の映画製作に向けて」

丹羽朋子 「フィールドワークの経験を「展示」する——「窓花／中国の切り紙」展における映像実践」

柳沢英輔 「実験的な民族誌映画における音・身体・環境」

久保田テツ総評

2015年1月25日

伊藤 悟 映像作品 『Sensing the Journey of the Dead』

春日 聡 映像作品 『スカラ＝ニスカラ——バリの音と陶酔の共鳴』

下道基行 「すぐ目の前にある『見えない風景』」

小林直明 「なぜ、映画をつくるのが人を元気にするのか——『市民映画』の成果と展望」

川瀬 慈・伊藤 悟 「トロムソ大学映像文化学科の研究動向、第8回 Cinema Verite 国際ドキュメンタリー映画祭（イラン）の報告」

成果

2014年度は計2回の会合を開催し、映像人類学の各学派の研究潮流に関する発表、共同研究員の制作した、あるいは制作過程の作品の発表、さらにはアート界からの招聘講師による発表等を行った。5月には、日本文化人類学会50周年記念国際研究大会（IUAES 2014 合同開催）映画上映プログラム『New Horizon of Anthropological Films from Japan』において、共同研究員4名が制作した研究作品を発表し、各国の映像人類学者と制作方法論に関する活発な議論を行った。その後の出版や上映企画につながる研究交流の場となった。また3月には、日本映像民俗学会第37回大会において、共同研究員3名が実行委員として運営に携わり、映画界や様々な分野の研究者と、映像民族誌のナラティブに関する議論を行った。関連する出版としては共同研究員による映像人類学の制作方法論に関する論稿を含む2冊の著作を出版した。

本研究は、聖地の現代的意義について、その多様性と共通性を明らかにするための比較研究である。その際、聖性の定義に関しては基本的に社会学的・社会人類学的視点に立ち、比較の対象をインド、中国、ロシアに限定し、当該地域における聖地の現代的意義とその歴史的背景について比較検討しようとするものである。西欧近代世界において、宗教伝統は再定義され、それが自己意識化、実体化され、軌近のポスト・モダン状況のもとでさらに再々定義され、イデオロギーとして固定化、原理主義化される事態となっている。こうした現代的状況のなかで聖地は、実体化・イデオロギー化された「伝統宗教」の金城湯池であり、また遺産化・商品化された「消費宗教」の花園である。本研究では、いわゆるユーラシア地域大国、ロシア、中国、インドにおける聖地の政治経済学的研究を通じ

て、宗教の現代的意義を問い直すとともに、西欧主導の聖俗論、宗教論を根本的に再考することが主要な目的である。

研究代表者 杉本良男

班員（館内）河合洋尚 韓 敏 松尾瑞穂
（館外）川口幸大 後藤正憲 小林宏至 桜間 瑛 高橋沙奈美 前島訓子 望月哲男

研究会

2014年6月14日

高橋沙奈美「奇跡の起こる場所——ロシアにおける聖人崇拜の伝統とその現代的諸相に関する予備的考察」
後藤正憲「モノから場所へ——ロシア・チュヴァシの在来信仰をめぐる政治学」

2014年10月4日

松尾瑞穂「インド・ヒンドゥー聖地の『宗教産業』と在地社会の変容に関する予備的考察」
前島訓子「インドにおける『仏教聖地』構築の諸相——『聖地』の場所論的視座」

2015年1月31日

韓 敏「近代中国の聖地作り——指導者ゆかりの場所を事例に」
望月哲男「世俗聖地としてのロシア地主領地——ヤースナヤ・ポリャーナを中心に」
総合討論「客家の『聖地』をめぐる政治経済学」

成果

本年度は、ロシア、インド、中国それぞれの事例を取り上げた研究会を3回開催した。それぞれの事例報告と考察によって、さまざまな基礎概念について整理が必要であることが明確になった。本研究会では、西欧近代的な「宗教」、「聖俗」などの諸概念をいったん棚上げしつつ、各地域のそれぞれの文脈における事例の比較検討を行ってきた。その結果、鍵概念である「聖地」あるいはその前提となる「聖」あるいは「聖俗」概念の歴史性、イデオロギー性がむしろ浮かび上がる結果となった。とくに、卓越した人物の崇拜およびその故地の「聖地」化についてのいくつかの事例報告から、俗人、聖人といった二分法そのもののイデオロギー性が明らかになった。また、「聖地」はいずれも場所、空間に関わる概念であるが、理論的に場所論、空間論などの再吟味が必要であることが、やはり基本的な方法論の問題として確認された。また、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターにおける公開の外部開催によって、いっそう幅広い研究交流の可能性が開かれたことも大きな成果であった。来年度以降は、研究の幅を広げるとともに、基本概念の整理を行い、最終年度のとりまとめに備える計画である。

「米国土先住民の民族誌資料を用いるソースコミュニティとの協働関係構築に関する研究」

近年のITおよび交通網の整備により、世界の「秘境」は急激に消滅しつつある。現在ではかつての「秘境」に暮らす人々は、研究者に直接問い合わせをすることが可能で、民族学系の博物館にその民族集団に関連する資料情報の提供を求めたり、熟覧や適切な管理を依頼することもある。その意味で、現在、民族学系の博物館や研究者は、対象として設定するユーザー（来館者・資料等の利用者や研究成果の読者）を、来館圏居住者や学界だけではなく、資料を製作したソースコミュニティの人々にも拡大していく必要性に迫られており、それを実施するための協働のあり方を模索することが緊急の課題となっている。本研究の目的は、「調査者・被調査者（米国先住民）との関係」、「知的財産管理」、「所蔵先機関と研究者との協働」を柱として、博物館資料をきっかけとするソースコミュニティの人々と研究者や所蔵先機関との新たな関係性構築のあり方を模索することにある。そのために、米国土先住民資料を所蔵する日本国内のいくつかの民族学系の博物館を事例として、資料情報のソースコミュニティの人々との共有のための協働に関する思想を、社会学、博物館学、歴史学、社会心理学、文化人類学などを専門とする研究者と所蔵先機関とで検討・考察する。

研究代表者 伊藤敦規

班員（館内）岸上伸啓
（館外）阿部珠理 大野あずさ 川浦佐知子 佐藤 円 谷本和子 玉山ともよ 野口久美子
藤巻光浩 水谷裕佳 宮里孝生 山崎幸治 山本真鳥

研究会

2014年5月31日

山崎幸治 「アイヌ資料調査結果のソースコミュニティとの共有について」

岸上伸啓 「民博企画展（「未知なる大地 グリーンランドの自然と文化」）でのソースコミュニティや所蔵機関との協働関係」

全 員 ディスカッション

2014年6月1日

川浦佐知子「NAGPRA と先住民の記憶」

全 員 ディスカッション

2014年7月12日

大野あずさ「現代史研究におけるインタビュー調査と成果公開・現地還元」

佐藤 円 「史資料の利用に関する倫理的問題」

全 員 ディスカッション

2014年7月13日

野口久美子「トライプ政府のために働くという関わり方」

全 員 ディスカッション

2014年10月4日

谷本和子 「Association of Tribal Archives, Libraries, and Museums の活動動向」

水谷裕佳 「先住民および博物館の立場から見た NAGPRA の限界」

全 員 ディスカッション

2015年1月17日

宮里孝生 「民族学博物館とソースコミュニティとの連携」

リトルワールド収蔵庫実見

2015年1月18日

阿部珠理 「協働の思想におけるヴァイン・デロリア・ジュニアの影響」

全 員 ディスカッション

リトルワールド展示場実見

成果

2014年度には4回の研究会を開催した。

第1回研究会では、博物館などでの展示活動を行うために欠かせない資料調査や資料管理におけるソースコミュニティとの協働、および展示実践における協働を、アイヌ、グリーンランド先住民、ノーザンシャイアン（米国先住民）を事例として検討した。第2回研究会では歴史学（特に近現代史）を専門とする研究者による報告となった。民博など民族学系の博物館が所蔵する物質文化資料や映像音響資料とソースコミュニティとの関係だけではなく、すでに歴史の一部になっている歴史資料や今後トライプ史に組み込まれる可能性がある「生きた」資料の取り扱いや倫理的問題などに関して議論を行った。第3回研究会では米国先住民と博物館関係者が多数会員となっている ATALM の創設理由や動向についての発表と、米国とメキシコ国境にくらす先住民ヤキに関する博物館からの資料返還の問題点を考察する発表が行われた。それらの発表からは、博物館——ソースコミュニティという一対一の関係だけではなく、米国法や国際法、経済問題や歴史問題など広い視野をもって本研究を分析考察する必要性が確認された。第4回研究会では、愛知県犬山市の野外民族博物館リトルワールドを会場とした。収蔵庫での資料管理方法や、展示方法を確認しただけではなく、ソースコミュニティとの資料（家屋・建築資料）の保存や修復や再建築における協働の事例が報告された。また、協働の思想の前段階として位置づけることが可能な、先住民側から学界への批判を行ったヴァイン・デロリア・ジュニアの足跡をたどる発表も行われた。

「表象のポリティックス——グローバル世界における先住民／少数者を焦点に」

本研究では、先住民／少数者集団が、彼らを包摂する主流社会において様々に表象されている場面に注目する。彼らが絵画や工芸品、布、衣装などを製作し、それらが市場にのり、時には国際的な注目をあつめる。こうしたモノによって表象されることで、少数者には経済的恩恵がもたらされ、地位の向上につながるがある一方で、彼らを本質化する圧力ともなり、また商品化によって表象が希薄化される場面もある。このような表象のポリティッ

クスの違いは、少数者集団に対する各主流社会の対応と国際社会を背景にしているとともに、グローバリゼーション、ネオリベラルの動きなど多層的な社会的状況の絡み合いの中でおきている。この共同研究では、このような動態の現場に注目することによって、先住民／少数者の生のリアリティに迫り、主流社会と少数者の関係の諸相を具体的な形で明らかにすることをめざす。

研究代表者 窪田幸子

班員（館内）上羽陽子 齋藤玲子 竹沢尚一郎 野林厚志 吉田ゆか子
（館外）青木恵理子 池本幸生 大村敬一 川崎和也 新本万里子 隅 杏奈 田村うらら
中谷文美 中村香子 名和克郎 深井晃子 松井 健 丸山淳子 宮脇千絵
渡辺 文

研究会

2014年 4月12日

窪田幸子 「前回までの研究会の論点の整理」
宮脇千絵 「中国雲南省におけるモン衣装の変化と継承にみる自他意識」
上羽陽子 「インド、ラバリーの刺繍布をめぐる自己と他者」
吉田ゆか子「バリの障害者の演劇活動にみる表象のポリティクス——笑いとインベアメントの視点から」

2014年 5月22日

ハワード・モーフィー 「Living Collections: Researching Australian Aboriginal Art and Material Material Culture」

2014年 7月19日

窪田幸子 「前回研究会の論点の整理」
緒方しらべ「『アート』の語りのポリティックス——ナイジェリア南西部の都市で生きる『アーティスト』の事例から」
川崎和也 「アボリジニの美術工芸品と経済生活——オーストラリア北部、ティウイの事例から」
青木恵理子「布とフェティシズム」

2014年10月11日

窪田幸子 「前回研究会の論点の整理」
中谷文美 「バリ島の手織り布のファッション化・文化遺産化をめぐる」
松井 健 「布の経済的転位と付加価値」
窪田幸子 「表象研究の課題と展望」
討議と意見交換

2014年12月20日

窪田幸子 「前回研究会の論点の整理」
名和克郎 「ネパール、ランにおける自己——表象の近年の展開？民族運動から写真展まで」
中谷和人 「表象から出来事へ——『生態学的』視角からみた知的障害者のアート活動」
大村敬一 「旅するアート／インヴェオリュションするアート——美の様式をめぐる人類学を目指して」
全体討議

2015年 2月 1 日

窪田幸子 「前回研究会の論点の整理」
齋藤玲子 「アイヌの木彫と表象——松前藩献上品から経産省の伝統的工芸品指定まで」
丸山淳子 「プッシュマンの観光と表象」

成果

研究第2年度にあたる本年は、6回の研究会を開催した。あと2人の発表を残し、ほぼ全員の発表を一巡することができた。先住民／少数者のアイデンティティにかかわり、モノの流通、モノの転化、美術と工芸というカテゴリー、表象の粘着度、などのいくつかの研究のまとまりを見出すことができてきた。次年度予定しているシンポジウム形式の研究会で、それぞれのテーマごとに分担者を配分する作業を次の研究会で行う予定である。この作業によって、研究の視座の多層性が全員に共有される見通しができてきた。

「エージェンシーの定立と作用——コミュニケーションから構想する次世代人類学の展望」

人間が営む生活の諸局面は、特定の具体的な権威者を中心とするコミュニケーションとして成立しており、そこでは、規範や信念への随順やその異端的解釈の抑制が図られるとともに、生々しい実在感をもち、対他的に作用する非-人間存在を含むエージェンシーが定立され、作用する。現代世界において、精霊は呪医を権威者とするコミュニケーションでは人に病気をもたらすエージェンシーとして働くかもしれないが、近代医療関係者はそうした病因を否定するだろう。同様に、米国の銃規制運動において銃は「人を殺す」エージェンシーとされるが、全米ライフ協会はそのようなエージェンシーの定立に強く異議をとなえる。

本共同研究では、こうしたエージェンシーとコミュニケーションとの等根源性に留意しながら民族誌研究をおこなうなかで、エージェンシーの定立と作用について適切に語るための一群の概念を開発する。そうすることで、個別におこなわれる傾向にあったモノ、技術、身体、動物に関する近年の研究と、親族、交換、儀礼、信仰、医療、土地制度などに関わるこれまでの研究を架橋する、通地域的・通研究对象的であると同時に、民族誌的データを豊かに内包しうる次世代人類学の理論基盤を整備する。

研究代表者 杉島敬志

班員（館内）飯田 卓

（館外）東 賢太郎 片岡 樹 金子守恵 桑原牧子 高田 明 津村文彦 中村 潔
馬場 淳 森田敦郎

研究会

2014年 5月31日

杉島敬志 「トールキン、ラトゥール、ジェルの指輪物語——推移的定立、継時的作用、主体プロジェクションに関する考察」

発表をめぐる総合討論と本年度研究計画に関わる議論

2014年 7月 5日

小川さやか「模造品の増殖を促す複ゲーム状況——エージェンシー研究の展望と可能性」

発表をめぐる総合討論

2014年10月 4日

金子守恵 「土器をつくる手、デンプンをつかむ手——エージェンシーの作用と定立に関わる問題関心の整理と研究計画」

杉島敬志 「オーストロネシア諸族における『原初対』と『生命根』」

各研究発表をめぐる総合討論

2014年12月20日

里見龍樹 「『育つ岩』と『われわれ』——ソロモン諸島のサンゴ礁居住民の事例からのエージェンシー論『批判』の試み」

田所聖志 「パプアニューギニア、ポートモレスビーにおけるフリ人移民の人口流動」

各研究発表をめぐる総合討論

2015年 2月 7日

共同研究構成員による研究進捗状況報告

各研究発表をめぐる総合討論

成果

計5回の研究会を開催した。昨年度同様、共同研究が目的とするところについての基本的考えにもとづき、研究代表者は、具体的内容のある研究の成果を発表し、共同研究構成員のあいだでの議論を活発化することに努めた。それとともに、本年度は、本共同研究の目的や本共同研究が包摂する研究領域に造詣の深い、共同研究構成員外の研究者を特別講師にむかえて研究発表をおこなっていただき、その内容について議論をおこなうことで、共同研究を組織する枠組みを、いわば外部の視点から対象化してとらえる機会をもうけた。具体的には、2014年7月5日に小川さやか氏、2014年12月20日に里見龍樹氏と田所聖志氏にご協力いただき、上記のような意味で、共同研究の内容を充実させることに努めた。また、第5回研究会では、共同研究構成員が本年度の研究進捗状況を報告するとともに、その報告内容について議論をおこなうとともに、来年度の研究計画について意見交換をおこなった。

「宗教人類学の再創造——滲出する宗教性と現代世界」

合理化を推進する近代主義の影響のもと、これまで多くの地域において、人々は「宗教」を政治・社会制度から排除しようとしてきた。しかし近年、宗教原理主義や公共宗教論の盛行、宗教伝統の復興や再評価などに見られるとおり、いったん隔離したはずの「宗教」がわれわれの社会へと滲み出し、新たな姿を見せつつある。その場合の「宗教」はかつての伝統的な姿のままとは限らず、環境思想のような新たな倫理・道徳の底流に見え隠れしたり、観光資源として人目を驚かせたりしている。

このように、伝統宗教のみならず、従来の「宗教」イメージとは異なりながらどこか宗教性を感じさせる新たな現象をも視野に取り込み、現代世界の「宗教」状況をよりよく理解することが、本研究の目的である。また、その研究実践を通じて、個々の宗教的世界観の研究に特化した感のある日本の「宗教人類学」を、上記のようなグローバルな潮流に対応したものへと鍛えなおしたい。

研究代表者 長谷千代子

班員（館内）藤本透子

（館外）岡本亮輔 加藤敦典 門田岳久 川口幸大 川田牧人 神原ゆうこ 國弘暁子
内藤順子 西村 明 藤野陽平 別所裕介 溝口大助 宮本万里 矢野秀武

研究会

2014年 5月24日

長谷千代子「これまでのまとめとお知らせ」

國弘暁子 「近代宗教制度報告」（インド）

實川幹朗 「日本からの宗教人類学はなぜ見込みがあるのか——事実と意識をめぐって」

田中雅一 「日本の宗教人類学はなぜ自壊したのか？」

2014年 6月28日

藤本透子 「近代宗教制度報告（カザフスタン）」

IAHR に向けての話し合い

伊達聖伸 「『宗教』から『宗教的なもの』へ——フランスの宗教研究における近年の動向と人類学への示唆」

2014年 6月29日

IAHR に向けての討論及び打合せ

成果

2014年度は2回の研究会を行った。このなかでまず、昨年度から続けてきた、各研究員の担当地域における近代的宗教制度についての概要の発表を一通り終了した。これにより、各国の宗教政策環境が予想以上に大きく異なることが明らかとなり、宗教概念のみならず、各国の宗教行政機関や宗教行政、宗教研究のあり方なども、近代における宗教と政治の関係をj知るために調査する余地があることが分かった。ゲスト講師としては實川幹朗、田中雅一、伊達聖伸の各氏を招き、日本の従来の宗教人類学のあり方を概観すると同時に、研究主体の立ち位置や研究対象の特定の仕方なども再考しつつ、今後の研究方向を模索すべきであるとの展望を得た。また、2015年度に行われる国際学会での発表に向けて打ち合わせを行い、一部のメンバーがIAHRとIUAESで1つずつパネル発表を企画し、どちらも受理されて現在鋭意準備中である。

「東南アジアのポピュラーカルチャー——アイデンティティ、国家、グローバル化」

この共同研究は、東南アジアのポピュラーカルチャーを対象とする。研究の目的は、グローバル化する現代社会における文化表現や身体表象の検討を通して、人々の複合的で流動的なアイデンティティのあり方を考察することである。対象地域の東南アジアは、その多くが20世紀の半ば以降に植民地支配からの独立を果たした国民国家であり、多様な民族文化を擁する国家としてのアイデンティティが常に模索されてきた。一方でポストコロニアル時代の国民国家は民族や宗教の違い、地域間の格差、社会階級やジェンダーの格差などの様々な差異を内包している。人やモノや情報が越境するグローバル化の状況において多くの文化的表現は既存の文化的境界を越えて流通し読み替えられている。この研究会では現代東南アジア社会における音楽、舞踊、映画、文学、ファッションなどの各分野におけるポピュラーカルチャー産業や、出版物、電子媒体などを含む各種メディアを研究対象として取り上げ、

文化的表現の生産と消費の場における人々の実践を通して現代東南アジア社会におけるアイデンティティ形成の複合的で流動的なプロセスを考察する。

研究代表者 福岡まどか

班員（館内） 寺田吉孝 福岡正太
（館外） 井上さゆり 小池 誠 竹下 愛 津村文彦 馬場雄司 平松秀樹 丸橋 基
山本博之

研究会

2014年7月5日

竹下 愛 「巡回野外映画上映会『ラヤール・タンチャップ』の現在」

コメント：コメンテーター 福岡正太

丸橋 基 「インドネシアにおける1960年代の録音資料紹介——ロカナンタの資料を中心に」

総合討論

2014年10月11日

井上さゆり「ビルマの近現代歌謡と現代の演奏」

馬場雄司 「メコンの歌師の現代的展開と『伝統』へのこだわり」

総合討論

2014年11月24日

津村文彦 「妖しげなるものの姿——タイのピー表象を手がかりに」

山本博之 「マレーシア映画に見る混成性と境界性」

総合討論

2015年2月21日

坂川直也 「ベトナム映画のニューウェーブ（新潮流）——B級映画都市サイゴン復活以後」

竹村嘉晃 「『インド舞踊』は国家と踊る——シンガポールにおける文化・芸術政策とインド芸能の発展」

総合討論

2015年2月22日

篠崎香織 「東南アジアにおける大衆文化の担い手としての華人——秩序転換に揺れた100年」

平田晶子 「グローバル化するタイ東北地方音楽モーラム——聴かせる・魅せる・繋がる」

成果

2014年は4回の研究会を開催し、東南アジアの各地における事例の検討を通して議論を深めることを行った。研究会のメンバーに4人の特別講師を加えた10名ほどの発表者からは、インドネシア、マレーシア、タイ、ベトナム、ミャンマー、シンガポールの諸地域における多様な事例が提示された。対象とされた事例は音楽、舞踊、映画、文学作品、各種メディアの流通などの多岐にわたり、文化表現と身体表象の生産と消費に関わる事例が検討された。これらの事例研究の検討と議論を通して、伝統芸術と現代芸術の相互関係、文化表現を通じた社会関係構築の場の形成、地域や社会階層による情報格差、伝統的概念のメディアを通じた図像化や表象、現代社会に見られる複合的な混成性のあり方、メディアや芸術実践によるディアスポラ社会の関係構築、などの諸テーマが浮かび上がってきたと考えられる。一方で、地域横断的テーマとしては東南アジアにおける華人文化の位置づけ、東南アジアにおけるインド文化の影響についても考察を行った。これらの問題設定を通して今後の成果の方針について議論を行い、研究成果の全体構成の大枠に各メンバーの研究を位置づけることも試みた。

「近代ヒスパニック世界における文書ネットワーク・システムの成立と展開」

本研究は、15世紀末以降、スペインが世界規模で拡張した帝国統治のメカニズムについて、行政・司法・財政・宗教・軍事の諸分野を交差して領域横断的に張り巡らされた文書ネットワーク・システムの展開に焦点を当てながら解明を目指すものである。

近代初期、アジアからアメリカに至る広大な領域を支配下に治めたスペインの統治原理は、文書主義の優越というイデオロギーに支えられており、帝国内の統治機構においては、マドリッド中枢から植民地最末端の先住民までをカバーする広域的な文書ネットワークが張り巡らされていた。その網の目に沿って、植民地経営の実務を支える

ヒトやモノ、情報の流れが構造化され、領域の隅々にまで拡張されることで、近代ヨーロッパ史上、類をみない規模の世界帝国を支えた統治機構の礎が整備されていったのである。

本研究では、スペインおよびラテンアメリカ、アジア各地の文書館における実地調査を通して史料分析の研鑽を積み、文化人類学、歴史人類学、識字・リテラシー研究、史料論、エスノヒストリー、文書管理論、アーカイブズ学などの方法論に精通したエキスパートたちの知見を結集することにより、スペイン帝国の礎となった文書ネットワークの成り立ちと植民地社会における展開について総合的に究明を試みるものである。

研究代表者 吉江貴文

班員（館内）齋藤 晃

（館外）足立 孝 網野徹哉 井上幸孝 小原 正 坂本 宏 清水有子 菅谷成子
武田和久 中村雄祐 伏見岳志 溝田のぞみ 安村直己 横山和加子

研究会

2014年 6月28日

小原 正 「インディオ村落共同体と通貨——1570年代から1730年代までのグアテマラ聴訟院領チアパス地方の事例から」

全 員 「報告内容についての質疑応答・討論」、「専修大所蔵のヌエバ・エスパーニャ写本資料の閲覧」

安村直己 「インディオ村落共同体金庫と村の生活——18世紀後半のヌエバ・エスパーニャ副王領の事例から」

全 員 「報告内容についての質疑応答・討論」、「今年度の研究活動について」

2014年 9月23日

全 員 「報告内容についての質疑応答・討論」

三宅真紀 「テキストマイニングの基礎と実践——新約聖書校訂本の比較研究を事例に」

全 員 「報告内容についての質疑応答・討論」、「今年度後半の研究活動について」

2014年11月29日

吉江貴文 「植民地の行政司法機関における文書実践の仕組み」

全 員 「報告内容についての質疑応答・討論」

横山和加子 「メキシコ植民地初期有力入植者の文書戦略——大西洋間の連絡を中心に」

全 員 「報告内容についての質疑応答・討論」、「次回及び来年度以降の研究会について」

2015年 1月31日

溝田のぞみ 「先住民の文書利用——17世紀ペルー・ワマンガの公正証書の分析を通じて」

全 員 「報告内容についての質疑応答・討論」

網野徹哉 「アンデス先住民遺言書論序説」

全 員 「報告内容についての質疑応答・討論」、「来年度の研究会開催計画の検討」

成果

2014年度は4回の共同研究会を実施し、スペイン帝国の諸機関において生産・管理された文書群の実態について、文書と人間のインターフェースにまつわる諸相に焦点を当てた究明作業を行った。具体的に、ヌエバ・エスパーニャ副王領における先住民村落共同体会計文書をスペイン本国の財務官僚から植民地の村落共同体役職者に至る多様な主体による連鎖的折衝の産物として描き出した安村および小原報告、司法の場を主舞台に個と制度の狭間を縫って展開される文書戦略の複雑な在り方について、メキシコとボリビアの事例に基づいて明らかにした横山および吉江報告、17世紀ペルー副王領で作成された私人契約文書（公正証書・遺言状）の成立背景について、宗教的感情、経済的利害、文書実務といった異質な力のせめぎ合う闘争の力学という視点から分析した網野および溝田報告などをベースに、スペイン帝国の統治機構を下支えした文書管理体制の重層的な成り立ちの実相について十分に議論を深めることが出来た。

「宗教の開発実践と公共性に関する人類学的研究」

20世紀後半以降、世界各地で宗教復興が顕在化すると同時に、公共領域における宗教の影響力が増大している。その背景には、新自由主義経済の浸透による国家財政の緊縮化とそれともなう社会・福祉サービスの低下がみられるなか、宗教（宗教者や宗教集団）が、独自のネットワークに基づき、そして多くの場合、地域社会・援助供与

国・国際 NGO などと連携しながら、社会開発に積極的に参画するというグローバルな流れが指摘できる。

そこで本研究では、宗教の開発実践が顕著にみられるアジアとオセアニアをおもな舞台として、以下の2点を目的とする。第1に、宗教による経済開発、医療と公衆衛生、教育などの領域における活動を民族誌的な事例として収集し、そこに反映される宗教固有の理念や規範およびネットワークの性質を明らかにする。第2に、このような現象が社会全体にかかわる諸問題を主題化し、公共性およびその変容を喚起していることを明らかにする。この2点を明らかにすることで、本研究は、ポスト世俗化の宗教論を超える視点を提示することを目指す。

研究代表者 石森大知

班員（館内）丹羽典生

（館外）岡部真由美 岡本亮輔 小河久志 門田岳久 倉田 誠 小西賢吾 白波瀬達也
野上恵美 舟橋健太

研究会

2014年9月27日

石森大知 「ソロモン諸島の紛争経験と宗教・開発・公共性——アングリカン系メラネシア教会の事例を中心に」

岡本亮輔 「ポスト世俗化の宗教論——現代宗教におけるコミュニティの再形成」

全 員 「本年度の研究計画」

2015年2月28日

丹羽典生 「神学と宗教的社会運動——フィジー・ダク村落開発運動を中心に」

倉田 誠 「近代化と世俗化——サモア・カソリック教会による慈善活動の展開」

藏本龍介 「ミャンマーの社会参加仏教——出家者の活動に注目して」

成果

2014年度は、2回の共同研究会を開催した。1回目の研究会では、世俗化論・ポスト世俗化論に関する批判的な検討をおこなうとともに、ソロモン諸島および日本のフィールドから事例を報告した。そのなかで、現代社会における世俗化と私事化のインパクト、公的領域における宗教の影響拡大などをどのように捉えるか、そして修正派世俗化論に対する評価などをめぐって議論を重ねた。また2回目の研究会では、オセアニアと東南アジアの事例に基づく3つの報告があった。まず現代オセアニアに広くみられる伝統（土地、祖先）、宗教、政府という三位一体の神学について考察をおこなうと同時に、オセアニアの国家とキリスト教の関係性について検討した。つぎにミャンマーの事例を踏まえ、出家をめぐるジレンマについて議論を交わした。その後、これらの事例報告の検討から発展する形で、非西洋における宗教と世俗（開発）の境界および宗教の公共性など、本共同研究全体にかかわるテーマについて総合討論をおこなった。

「再分配を通じた集団の生成に関する比較民族誌的研究——手続きと多層性に注目して」

本共同研究では、再分配が集団を生成している点に注目することで、集団と再分配の関係の多様性を明らかにしていく。ポランニーは、再分配を〈富や労働を中心に集めたうえで配り直す〉経済活動の様式として定式化し、その中に儀礼や祝祭、租税、家政が含まれるとした。そこでは、社会の存在が前提とされ、いかに再分配が社会統合に役立つかという構造機能主義的な枠組みが強調されている。それに対し本研究では、社会の存在を自明視するのではなく、他ならぬ再分配によって集団が立ち現われている点に注目する。思想史家のエヴァルドがフランスの社会保険を例に示したように再分配はそれに参加する者に連帯感を喚起することで集団意識を醸成しうるし、また、再分配への参加は集団の境界を引く際の重要な留意点にもなるからである。本共同研究では、この視点から世界各地の事例を比較し、再分配の具体的な手続きと集団の特性の関係について検討していく。

研究代表者 浜田明範

班員（館内）加賀谷真梨 吉田ゆか子

（館外）伊東未来 久保忠行 里見龍樹 高橋絵里香 高橋慶介 田口陽子 友松夕香

研究会

2014年4月5日

全 員 「今後の方向性と日程の確認」

田口陽子 「インドの『市民的』モラルと再分配——『社会的なもの』批判の比較を通して」

浜田明範 「再分配を通じた集団の生成——論点整理と四つの方向性」

2014年10月25日

今後の方向性と日程の確認

里見龍樹 「メラネシア再分配論とは何だったか——マーシャル・サーリンズを中心に」

河野正治 「儀礼的再分配にみる価値の創造と流通——ミクロネシア連邦ポーンペイの位階称号を事例として」

伊東未来 「再配分としての季節労働——マリ共和国ジェンネにおける都市民の収穫労働を事例に」

成果

本共同研究の2年度目にあたる2014年度は、4月と10月に2度の研究会を開催した。また、1月に東京大学で行われた現代人類学研究会に東京大学の森 政稔教授をコメンテーターに迎えて「特集：再分配」を組織し、30名以上の参加者を得た。

より具体的には、浜田明範によるボランニーの再読や里見龍樹によるサーリンズの再読といった理論的な検討とともに、田口陽子によるインドにおける再分配に関する言説、伊東未来によるマリの都市民の出稼ぎの収穫労働、高橋絵里香によるフィンランドの高齢者福祉における安心電話の利用状況、友松夕香によるガーナ北部のラッカセイ収穫における分益といった世界各地の事例についての報告がなされた。また、特別講師として招聘した筑波大学の河野正治には、ミクロネシアの位階称号に関する詳細な報告をお願いした。

同時に、2015年度の日本文化人類学会の研究大会で分科会を開催するための準備も進めることができた。

「現代『手芸』文化に関する研究」

本研究は日本の手芸に相当する余暇的・趣味的仕事とその造形物の現代的展開を明らかにする。手芸とは、主に女性を担い手とする家庭内での商業化されていない趣味的な制作を意味する概念として明治期に形成された。そのため手芸の領域は、美的に評価された美術や利潤を生みだす工芸に比べて二重に周辺化されてきたといえる。しかし現在、世界各地で従来の日本の手芸概念ではとらえられない余暇的・趣味的仕事が多様な展開をみせている。それらは男性も担い手に含み、アート、フェアトレード商品、エスニック雑貨などとして美術や市場の領域にも進出している。また、趣味を通じた人的ネットワークの形成や、それらの災害後におけるケアとしての機能などが注目を集めている。こうした従来の手芸概念ではとらえきれない新たな領域を「手芸」として捉え返し、その現代的展開を民族誌的に分析し、新たな「手芸」概念の創出を目指すものである。

研究代表者 上羽陽子

班員（館内） 齋藤玲子 南 真木人

（館外） 蘆田裕史 五十嵐理奈 金谷美和 坂田博美 新本万里子 杉本星子

中谷文美 野田涼美 平芳裕子 ひろいのぶこ 村松美賀子 山崎明子

研究会

2014年11月30日

上羽陽子 「共同研究の着想およびめざすところ」

全 員 「自己紹介および各自の活動・研究について」

山崎明子 「近代日本の『手芸』から戦後の手芸ブームまで」

全 員 「今後の研究会の進め方と打ち合わせ」

2015年3月1日

上羽陽子 「前回までの研究会の論点の整理」

笠井みぎわ「祈りの手刺繍——日本聖公会の教会刺繍をめぐる考察」

山崎明子 「近代日本の『手芸』から戦後の手芸ブームまで（2）」

坂田博美 「キルトショップにおける顧客関係——キルターとキルトショップ・オーナーの事例」

全 員 「今後の研究会の進め方と打ち合わせ」

成果

第1回目の研究会では上羽が本共同研究の着想およびめざすところについて提示した。それを踏まえて各研究員が各自の活動や研究について報告をし、本共同研究における役割や方向性について議論した。さらに副代表の山崎が、近代日本の手芸から戦後の手芸ブームについて報告し、新たな「手芸」概念を再検討するための問題の共有化を図った。

第2回目の研究会では、笠井が日本聖公会の教会刺繍について報告し、宗教や祈りの現場とそれらを取りまく手仕事について検討した。山崎は、第1回目の報告をふまえて総括的に戦後から現在までの手芸ブームについて提示した。坂田は経済学の視点からキルトショックにおけるキルター（キルトをする人）とオーナーの顧客関係について報告し、自己目的志向の小売業者が存続するメカニズムを指摘した。

「近世カトリックの世界宣教と文化順応」

本研究は、16～18世紀のアジアとアメリカにおけるカトリック教会の宣教、とりわけ「適応」と呼ばれる政策に焦点を当て、ローカルな事例の比較とヨーロッパの世界観・人間観の検討を通じて、その歴史的意義を明らかにする。適応とは、宣教師が現地の規範や慣習を学ぶことで地元社会に溶け込み、現地人の改宗を促す政策である。言語、衣食住、礼儀作法、法律、学問など、現地文化の幅広い側面が対象となる。事例としては、ヴァリニャーノの日本宣教方針やリッチの中国古典研究など、アジアのイエズス会の政策が有名である。特に中国での政策は「典礼論争」というカトリック教会を二分する論争を引き起こした。

近世カトリックの宣教師の適応はしばしば今日の文化相対主義の先駆けとみなされるが、この評価は正しいのだろうか。両者の共通点と相違点はなんだろうか。今日の相対主義的文化概念が近世カトリックの世界宣教に負うものがあるとすれば、それはなにか。これらの問いに答えるため、本研究は、宣教師の適応をローカルなコンテクストに位置づけ、通文化的実践としてのその特徴を探る。同時に、宣教師が適応に与えた理論的根拠を世界の諸文化の多様性についてのヨーロッパの思索の流れに位置づけ、その思想史的意義を解明する。

研究代表者 齋藤 晃

班員（館外） 網野徹哉 伊川健二 井川義次 王寺賢太 岡田裕成 折井善果 小谷訓子
鈴木広光 中砂明德 真下裕之 松森奈津子 Guillermo Wilde

研究会

2014年12月21日

齋藤 晃 「近世カトリックの世界宣教と文化順応——趣旨説明」

実施計画策定

2015年2月21日

Guillermo Wilde 「Writing Rites, Translating Concepts, Appropriating Customs: Missionary Anthropology in the South American Borderlands of Iberian Empires」

折井善果 「Joan-Pau Rubiés著 “The Concept of Cultural Dialogue and the Jesuit Method of Accommodation: Between Idolatry and Civilization” について」

成果

本年度は3年半の研究期間の初年度に相当し、しかも半年しかない。それゆえ、本研究の趣旨についてメンバーの理解と合意を確立することを最優先課題とした。12月21日に開催された第1回研究会では、代表者の齋藤が本研究の対象・目的・方法を説明した。とりわけ、宣教師の適応を、宣教現場における通文化的実践、およびヨーロッパにおける比較文明論的思索というふたつのコンテクストに位置づけ、その複合的意義を解明することの重要性を強調した。2月21日に開催された第2回研究会では、実質的な副代表者である Guillermo Wilde が、植民地時代南米の事例に依拠しながら、宣教師の適応を研究するうえで重要な諸問題を指摘し、地域間比較の必要性を説いた。これらふたつの報告により、本研究の趣旨についてメンバー各自の十分な理解が得られたと判断している。

第2回研究会の後半では、折井善果が Joan-Pau Rubiés の論文について論評した。折井の報告は、来年度以降引き続き実施される先行研究の合評の第1回に相当する。Rubiés の論文はイエズス会の適応政策の思想史的意義を広い視野のもと究明しており、先行研究の到達点のひとつとみなすことができる。この論文の合評を通じて、本研究が目指す方向を明確にすることができた。

「家族と社会の境界面の編成に関する人類学的研究——保育と介護の制度化／脱制度化を中心に」

子供の保育や老人・病人の介護などのケアと呼ばれるサービスは、その一部を家族の外部で、家族外の担い手によって行なうことが可能であり、制度化もされている。このサービスを公的な支援として行うのが福祉であるが、今日、福祉国家制度の限界は明らかとなり、ケアはどのように実現されるのか、そのあり方があらためて問い直されている。こうした状況をふまえ、本研究は、保育や介護をめぐるケアの制度化／脱制度化の様相を、個別のローカルな状況のもとでとらえ、比較検討するものである。その分析を通して、人間社会は、社会と家族のインターフェースをどのように編成してきたのか、それは今後どうありうるのか展望する。これまでの人類学研究を批判的に検討する視点から、人類学、社会学、歴史学の分野を横断する議論を展開し、西欧近代の福祉国家システムを、人類学研究として批判的に検討していく。

研究代表者 森 明子

班員（館内）加賀谷真梨 浜田明範

（館外）天田城介 岩佐光広 岡部真由美 加藤敦典 木村周平 工藤由美 沢山美果子
高田 実 高橋絵里香 土屋 敦 内藤直樹 中野智世 西 真如 速水洋子
モハーチゲルゲイ

研究会

2014年11月16日

森 明子 「共同研究の趣旨説明と問題提起」

全 員 「研究課題をめぐる各自の研究状況と今後の研究計画」

2014年12月20日

岡部真由美「宗教をつうじたケアのかたち——現代タイ社会における仏教僧による『開発』の事例より」

沢山美果子「乳からみた産み育てることの近世・近代」

全 員 討論

2015年1月8日

加賀谷真梨「誰のための福祉事業か？——沖縄県 A 島の高齢者地域福祉活動に生じるコンフリクト」

西 真如 「『南の』世界におけるケアの実践を計る——エチオピア農村社会におけるチャイルドケアの量的把握に関する方法論上の課題」

全 員 討論

成果

研究初年度にあたる本年度は、3回の研究会を開催した。第1回研究会で、研究代表者が本共同研究の企図・目標等を説明し、各メンバーの関心や研究状況を配置していった。第2回研究会では、岡部がタイの寺院におけるケアについて報告し、ケアという問題系に、宗教のかかわりはどうあらわされてきたのか、キリスト教や仏教を素材にした議論が展開した。沢山は、日本の近世・近代の乳に注目した報告を行い、子どもの養育において、乳が家族と社会を接合する様態について議論が展開した。第3回研究会では、加賀谷が、離島の高齢者地域福祉の実践を報告し、特定のローカリティのもとにある各アクターの意思決定をめぐって議論が展開した。また、西は、ケアの実践が社会の持続性という観点から重要な意味をもつことを理論的に整理し、それを量的に計る可能性について方法論的な議論のための回路を開く発表を行った。

以上より、本共同研究が前提とすべき状況と研究水準が参加者の間で共有され、さらに、特定のローカリティのもとで、ケアの制度化／脱制度化の実践をとらえていく議論の端緒が開かれた。

「政治的分類——被支配者の視点からエスニシティと人種を再考する」

21世紀になり、エスニシティ（文化的実践による社会的分類）や人種（肌の色による社会的分類）が構造化された社会に住み不利益を受けている人々は、カラーブラインド主義や逆差別というリベラリズムの変奏が世界規模で支持を得ている中で、不利益の是正を求める根拠すら失われかねない状況に直面している。本共同研究は、歴史的・民族誌的資料に基づいて、被支配者側からの政治的抵抗の基礎となる分類の編成を解明し、リベラル民主主義の陥穽を批判的に乗り越える契機とする研究視座の確立を目指す。より具体的には、これまでコロニアリズムの歴史に

において不可視だった支配者側のエスニシティや人種（たとえば、アイヌ民族のいう「シャモ」、沖縄の人々が発する「ナイチャー（ヤマトンチュ）」、カナカ・マオリが用いる「ハオレ」、グアテマラ・マヤ人が口にする「カシュラン」）を可視化する視点として政治的分類という考え方を提示する。

研究代表者 太田好信

班員（館外） 青木恵理子 池田光穂 石垣 直 川橋範子 慶田勝彦 辻 康夫 深山直子
細川弘明 松田素二 山崎幸治 山本真鳥 横田耕一

研究会

2014年11月14日

太田好信 「共同研究会の趣意説明」

参加者による自己紹介

太田好信 「政治的分類としての人種とエスニシティ——リベラル民主主義と歴史の重み」

質疑と応答

2014年11月16日

質疑と応答（継続） 共同研究会の今後の開催予定、成果発表までのプロセスに関する説明

2015年1月31日

前回、欠席した共同研究会参加者の自己紹介（3名）

深山直子 「『(ポスト)和解時代』におけるマオリの再組織化とパーケハーの可視化」

討論（質疑応答）

辻 康夫 「多文化主義と『不可視性』の問題」

2015年2月1日

総合討論（前日の発表に関する質疑と応答）

成果

本年度は、2回の共同研究会を開催した。第1回目では、代表者が本共同研究を構想した過程を含め、目標と課題を説明した。研究者が集団の一員として名指される経験を人種主義や民族絶対主義として否定するのではなく、そこに理論的価値を見出すことができるのか、などという疑問について議論し、リベラル民主主義において自然化している発想を対象化する契機として、名指される経験を位置づけた。第2回目は、深山がニュージーランドにおけるパーケハー（白人）とマオリとの関係性について、詳細な民族誌的資料に基づいた報告をおこなった。なかでも重要な点は、マオリの先住民性がニュージーランド在住のヨーロッパ系住民をしてパーケハーを自称するという現象が起きていることである。また、辻は、憲法学の視点から、リベラル民主主義の枠内で人種主義を超え、いかにして多文化主義を構想できるか、規範論的認識に根差した報告をおこなった。

「生活用品から見たライフスタイルの近代化とその国別差異の研究」

本研究は、世界各地の衣食住にかかわる生活必需品の調査を通じて、その変化が伝統的生活様式から近代的生活様式への変化にいかに関連し、またその近代的生活様式が世界的な共通性を示しつつ、なお国ごとの差異をどのような面で保持しているかを検証し、近代化の一般性と国ごとの個性およびその要因を考察することを目的とする。国家制度や生業経済の近代化は、住民生活のレベルでは生活様式の変化として経験される。生活様式の近代化は、衣類や台所用品、また家具や部屋の間取りの刷新と連動している。そうした生活用品の変化という物質文化研究を切り口に、生活様式が近代化に伴っていかに変化したかをあぶりだそうとするのが本研究の狙いである。生活の近代化には世界規模での画一性が認められる一方、衣食住の伝統慣行に由来する国ごとの差異も予測され、近代化の過程に文化的差異が関与していることを示唆している。本研究ではそうした「近代化」の一般理論についても物質文化の観点から検討を加える。

研究代表者 鏡味治也

班員（館内） 宇田川妙子 笹原亮二 関 雄二 野林厚志 加賀谷真梨 浜田明範
（館外） 阿良田麻里子 金子正徳 中谷純江 松村恵里 古谷嘉章

研究会

2014年11月22日

鏡味治也 「趣旨説明」

金子正徳 「インドネシアでの資料収集およびデータベース保存・共有方法」

阿良田麻里子 「インドネシアでの資料収集方法」

2014年12月13日

鏡味治也 「今回の研究会趣旨説明」

中谷文美 「オランダにおける家事の文化」

全 員 生活用品資料収集上の問題点の検討

成果

本年度は、2011年度から実施している科学研究費補助金（基盤研究（B））「消費様式から見た国民文化形成の文化人類学的研究：インドネシア等の生活用品調査から」（研究代表者：鏡味治也）のこれまでの資料収集実績を、その科研の分担者・協力者でもある金子正徳・阿良田麻里子両氏から報告してもらい、本研究会参加者への情報提供と引き継ぎをはかった。また生活用品と密接に関わる「家事」領域の生成発展について、中谷文美氏を特別講師として招きオランダにおける家事文化について話していただいた。その上で、本研究会がめざす生活用品の全世界的な資料収集に向けて、これまでインドネシアでの資料収集で用いた生活用品リストや情報収集方法の問題点や修正が必要な点について、参加者の間で意見を交換した。それを受けて新たに「生活用品質問表」をとりまとめ、従来の生活用品リストと合わせて資料収集を行えるよう整えた。

「呪術的实践＝知の現代的位相——他の諸実践＝知との関係性に着目して」

現代世界を構成するさまざまな実践＝知（本研究では、感覚を含む行為と知識・信念の双方にわたる概念として、便宜的に「実践＝知」という語を用いる）のなかで、呪術的实践＝知はいかなる位置をしめ、またそれ以外の諸実践＝知といかなる関係性をもつのか。本研究では、呪術的实践＝知とそれ以外の諸実践＝知（すなわち科学、宗教、病院医療、学校教育、メディア表象など）との関係性を明らかにすることによって、現代世界における呪術の個別性（特殊性）と普遍性（他の諸実践＝知との共通性）をうきほりにすることをめざす。

本研究は、先立つ民博共同研究「知識と行為の相互関係からみる呪術的諸実践」（2007～2009年度、代表：白川千尋）とその成果論集『呪術の人類学』（2012年、白川・川田編、人文書院）をふまえて、その基本的枠組みであった「言葉／行為」を、宗教・世界観や制度との関わり、また世界とのインターフェースとしての感覚などの観点を組み込むことによって、「信じる／知る／行なう／感じる」の各理論的次元へ継承的に発展させる。それを通じて呪術論の観点から、現代世界における実践論や知識論を刷新することをこころざす。

研究代表者 川田牧人

班員（館内）飯田 卓 藤本透子 松尾瑞穂 浜田明範

（館外）飯田淳子 梅屋 潔 片岡 樹 黒川正剛 近藤英俊 島藺洋介 白川千尋

田中正隆 中川 敏 中村 潔

研究会

2014年11月16日

川田牧人 「現代における呪術と他の諸実践＝知——本研究会の趣旨と基本的ビジョン」

白川千尋 「呪術と科学の違いに関する省察——『どのようにして』と『なぜ』の問いを手がかりにして」

全員による討論「本研究会の研究構想」、ならびに事務連絡

2015年2月8日

近藤英俊 「偶然的他者の呪術的『再必然化』」

『信念の呪縛』（浜本 満著、九州大学出版会、2014）検討会

次年度計画、ならびに事務連絡

成果

2014年度は研究会を2回開催した。まず第1回では、本共同研究の開始にあたり、1) 呪術的实践＝知と隣接する

「その他の諸実践＝知」との関係性を検討する、2) 触知性や物質性といった感覚特性を視野に入れて、「信じる・知る・行なう・感じる」という活動領域に着目して検討するという研究の方向性が確認された。第1回目後半と第2回目では各論に入り、「どのようにして」の問いに答えるものとしての科学に対し、「なぜ」の問いに答えるものとしての呪術というとらえ方が可能であること、また、不可解さや理不尽さに満ちた偶然性を再必然化するという呪術の一側面について検討がなされた。そしてそれらから、当事者にとっても必ずしも自明ではないことへ向かう呪術的实践＝知に関する議論が深められた。また第2回では浜本 満著『信念の呪縛』を全員で講読して検討会がおこなわれた。当共同研究にも関連する論点として、偶然性と賭博性、不在を核とした信念群と真理化プロセス、不可解さに関する想像力・感性などの諸点が指摘され、それらはいかにして展開可能かといった議論もなされた。

「資源化される『歴史』——中国南部諸民族の分析から」

「歴史」を表象、叙述、再編成し資源化する現象は人類社会では普遍的に見られる。近年、中国のインパクトが強まり、日本や世界に多大な影響を及ぼしており、中国に関する関心が高まり、その研究が緊急の課題になっている。また、中国では「中華民族」の一体性が政治的に強調される傾向が顕著である。さまざまな「歴史」の細片をハイブリッドな形で縫合して構築し、それを実利に結びつくものとして「資源化」しがちな傾向が見られる。「歴史」を「資源化」する主体は、各級政府、研究者、知識人、マスメディア、一般民等、複数あり、それらが互いに対立、交渉、妥協しあひながら、資源化の潮流を作り出している。同時に、「歴史」は「資源化」される際に、実用価値的な側面だけでなく、様々な認識主体が自分たちの正当性とアイデンティティの維持を担保しようとして構築される側面をも有する。本研究では、いかなる「歴史」が多様な主体によって、実利の獲得やアイデンティティの維持のため、どのように「資源化」されているのか、エスノ・ローカルな政治社会空間を舞台として批判的・分析的に明らかにする。

研究代表者 長谷川 清

班員（館内） 樫永真佐夫 河合洋尚 韓 敏 塚田誠之
（館外） 稲村 務 上野稔弘 兼重 努 瀬川昌久 曾 士才 孫 潔 高山陽子
長谷千代子 長沼さやか 野本 敬 松岡正子 吉野 晃

研究会

2014年10月18日

長谷川清 「趣旨説明」

稲村 務 「資源としての歴史と記憶——アカ種族とハニ種族の事例より」

塚田誠之 「歴史の解釈をめぐる——壮族の『民族英雄』儂智高を事例として」

2015年1月11日

野本 敬 「イ族系土司・土目にみる歴史の記録と構築について」

長谷川清 「国境地域の〈歴史〉とその資源化——孟連タイ族の事例から」

成果

上記の4名の報告者により、研究報告がなされた。すなわち、第1回研究会では、雲南省南部のハニ族社会において系譜意識、土司遺跡、棚田の文化的景観など、多様な媒体や様式によって伝承されてきたコミュニティの集会的記憶と資源化の過程（稲村報告）、中国・ベトナム境域においてチワン族の間で「民族英雄」とみなされる儂智高について歴史叙述やディスコースの変遷、中華ナショナリズムとの関わり（塚田報告）が取り上げられた。第2回研究会では、中国西南部のイ族社会に残されている碑文資料の保存状況、記述スタイルの諸特徴、中華的秩序のもとでの政治的意義（野本報告）、現存するタイ族の土司官署の歴史展示とナラティブ、文化的記憶との関係（長谷川報告）が扱われ、それらをめぐって議論が行われた。

「歴史」の資源化をめぐる問題領域と理論的な枠組みに関して、民族誌的事例からアプローチしていくことの重要性や意義を確認し、今後の比較研究に向けた論点を明らかにすることができた。

「モノにみる近代日本の子どもの文化と社会の総合的研究——国立民族学博物館所蔵多田コレクションを中心に」

国立民族学博物館に所蔵される多田コレクション（通称「時代玩具」）は、江戸時代から戦後にかけての玩具を中

心とした子どもに関わる様々なモノから構成される、総数5万数千点に及ぶ膨大な資料群である。玩具を初めとした子どもに関する多種多様なモノの数々は、それぞれの時代の子どもに対する人々や社会の意識を克明に映し出している。しかし、近代以降、それらは消費を前提として商品化されたこともあって、遺存は少なく実態は明らかではない。多田コレクションは、そうした子どもに関する品々が網羅的に収集・保存されている希有な例として価値が高い。

本研究は、児童学・美術史・玩具学・歴史学・民俗学・文化地理学・保存科学といった様々な専門分野の研究者が一堂に会し、コレクションの資料に対して多角的・総合的に検討し、分析を加えることで、コレクションの全体像を正確に把握することを試みる。それと共に、従来漠然としたイメージでしか理解されてこなかった近代日本の子どもの文化や社会の実態を、モノを資料として活用することで具体的かつ精緻に解明する。そして、その成果に基づき、近代以降の子ども観に代わる時代に即した新たな子ども観の見通しを提示し、展示会の開催を通じて広く社会に問うことを目的とする。

研究代表者 是澤博昭

班員（館内）笹原亮二 日高真吾

（館外）稲葉千容 内田幸彦 香川雅信 亀川泰照 小山みずえ 是澤優子 神野由紀
滝口正哉 濱田琢司 森下みさ子 山田慎也

研究会

2014年10月11日

共同研究の趣旨・目的について及び共同研究者の自己紹介

笹原亮二 「国立民族学博物館の多田コレクションについて」

稲葉千容 「多田コレクションについて——基本的な性格と全体像の把握」

2014年10月12日

是澤博昭 「教育玩具の近代——教育対象としての子供の誕生」

フリートーク 多田コレクション研究の今後の課題と展望

2015年1月10日

稲葉千容 「多田コレクションの分類別資料紹介」

目録の熟覧と内容等に関する質疑応答

原山 煌 「福島安正の研究から見る多田コレクションの意義」

2015年1月11日

内田幸彦 「渋沢敬三とアチックミュージアム——埼玉県との関わりを中心に」

全 員 今後の研究の進め方の検討

成果

多田コレクションの特徴やその基本性格の全体像把握の一環として、近代日本の子どもをめぐる物質文化総体における位置付けに関連する研究報告を行った。

これと並行して、大阪府指定有形民俗文化財指定から国立民族学博物館への寄贈へいたる経緯とともに、分類における諸問題をはじめとする現状を共有した。その上で、同コレクションを学術的に研究活用するためには何が必要かという視点から問題点を整理した。

それに基づきモノをベースにした各共同研究員のアプローチの方法に関する共同討議を行うことで、それぞれの専門分野に関わる個別研究テーマの設定と今後の方向性を模索することができた。次年度以降各地の類似のコレクションとの比較検討を含め、各共同研究員の専門分野と研究テーマにそって多田コレクションの資料に関する具体的な調査研究のための基盤を形成した。

「演じる人・モノ・身体——芸能研究とマテリアリティの人類学の交差点」

1980年代以降の人類学は、モノが人間に使われたり、意味や価値を付与される側面だけでなく、モノの側からの人間への働きかけや、モノと人の相互的作用によって出来事が生成されるプロセスに着目している。また、そこに物質性がいかに関わるのかという問いも重要性を帯びている。本研究は、こうした「マテリアリティの人類学」の関心を芸能研究に差し入れ、新たな芸能研究の視座を探求する。この芸能にはいわゆる「民俗芸能」からコンテン

ポラリーまでを含む。また本研究の関心は、身体や上演を取り囲む環境にも向けられる。本研究の第1の目的は、芸能を人とモノの織りなす営みと捉え直し、表現や伝承にモノがどのように関与するのかを考察する事である。

芸能に特徴的な、人とモノ（例えば仮面や楽器や他者の身体）が「一つになる」相互浸透的な在り方や、モノに触発され想像力や創造性が刺激されるプロセスにも注目する。動きや音や物語の中で展開する人とモノの関係性の特性を考察し、人類学を進展させることが本研究の第2の目的である。

研究代表者 吉田ゆか子

班員（館外） 佐本英規 大門 碧 竹村嘉晃 田中みわ子 辻本香子 増野亜子 松嶋 健
柳沢英輔 山口未花子

研究会

2015年1月31日

全員 自己紹介

吉田ゆか子「マテリアリティの人類学と芸能研究の交差点——研究会の主旨と背景」

丹羽朋子「中国陝北地域の剪紙と、その民族誌的展示表現における物質性——パフォーマンス研究との対話にむけて」

成果

本年度は第1回目の研究会を実施し、各メンバーが取り組もうとしている課題について情報交換した。その上で、代表の吉田が、研究会の背景や構想、マテリアリティに関わる人類学的議論の系譜と経緯、そして近年の民族音楽学および演劇研究における、楽器や人形や仮面といったモノを扱った研究の動向を紹介した。この発表を受け、全体では、音をモノとして扱うことの意義について議論がなされた。音はモノのように現れることも、モノとしては捉え難いあり方をすることもある。分析上どう位置づけることが有益かは、ケースごとに異なること等が議論された。

続いて特別講師の丹羽が、中国の陝北地域の剪紙や暮らしを展示した経験について話した。創られては、消耗し、再び創られ再生する窓花のパフォーマティブなあり方を、影や断片的な映像も用いつつ展示場に表現。その中で現れた、モノやイメージをずらし再構成することによる翻訳、モノが反響させる複数の「時間性」の効果といった視点は芸能分析に活かしうる示唆的なものであった。

人間文化研究機構連携研究

「人間文化資源の保存環境研究」

代表者：園田直子

本研究は、これまで人間文化研究総合推進事業で進めてきた「文化資源の高度活用：有形文化資源の共同利用を推進するための資料管理基盤形成」（2006～2008年度）、「保存環境解析法の再検証」（2009年度）の研究成果を発展的に継承し、より広範囲な資料群を対象とした保存環境研究を行うことを目的としている。研究対象はモノ資料にかぎらず、映像音響資料、図書文書資料、さらには電子データなど多様な形態から構成される研究資源に広げ、それぞれの形態に応じた保存環境モデルを構築するために必要となる保存環境分析システムを研究開発する。

成果

- 1) 温度・湿度分析システム・スモールパッケージのプロトタイプの検証と問題点の抽出
- 2) 生物生息調査分析システム・スモールパッケージのプロトタイプ完成

研究会開催

2014年6月7日 園田直子・日高真吾・和高智美（ポスター発表）「博物館害虫・不快害虫の発生源に関する一考察」文化財保存修復学会第36回大会（明治大学アカデミーコモン）

2014年8月25日 Sonoda, N. 'Museum Environment Control for Sustainable Collection Management.' International Research Meeting on Museology in Thailand, Kanchanaphisek National Museum & Central Storage, Thailand

- 2015年2月20日 人間文化研究機構・連携研究「人間文化資源」の総合的研究「人間文化資源の保存環境研究」平成26年度第1回研究会・国立民族学博物館研究フォーラム「持続可能なIPMに向けて——博物館環境データの分析手法を考える」・文化財保存修復学会例会、国立民族学博物館
園田直子 「趣旨説明」
河村友佳子「温度・湿度分析システム・スモールパッケージ試作版の概略」
小瀬戸恵美「考古・歴史・民俗資料の保存環境分析」
青木 睦 「典籍・文書資料の保存環境分析」
和田 浩 「文化財の保存環境分析」
山口孝子 「写真資料の保存環境分析」
芳賀文絵 「地方博物館での保存環境分析」
和高智美 「生物生息調査分析システム・スモールパッケージ試作版の概略」
園田直子 「総括・今後の展望」
- 2015年2月21日 Sonoda, N. 'Managing and Analyzing Museum Environmental Data.' 国際シンポジウム「アジアにおける新しい博物館・博物館学の展望」国立民族学博物館

論文発表

園田直子・日高真吾・和高智美（ポスター発表）

- 2014 「博物館害虫・不快害虫の発生源に関する一考察」『文化財保存修復学会第36回大会於東京研究発表要旨集』pp.184-185。

園田直子

- 2014 「持続的な資料管理に向けた収蔵庫『再』編成」園田直子・小長谷有紀・I. Lkhagvasuren 編『アジアにおける博物館・博物館学の「いま」——モンゴル、ミュージアム・クリルタイ』、pp.19-27（日本語）、pp.187-197（モンゴル語）、ウランバートル：モンゴル国立文化遺産センター。

Sonoda, N.

- 2015 Museum Environment Control for Sustainable Collection Management. In N. Sonoda, K. Hirai and J. Incherdchai (eds.) Asian Museums and Museology 2014: International Workshop on Museology in Thailand (Senri Ethnological Studies 129), pp.27-35, Osaka: National Museum of Ethnology（査読有）。

「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」

代表者：福岡正太

一定の視点から芸能の動きと音を記録し、再生することができる映像は、第三者に具体的に芸能の姿を伝えることができる。その性質により、学術資料であっても、多くの人に活用され、芸能のイメージを広めることにひと役買う可能性をもっている。一方、芸能の関係者にとって、外部の人間が撮影編集した映像を見ることは、外からのまなざしを意識し、自己イメージを再形成する機会ともなる。この研究は、映像による芸能の民族誌的記録が、芸能を支える人々や研究者、映像を視聴する第三者など、立場を異にする人々のあいだにどのような相互関係を築き、どのように芸能の上演と伝承に影響を与えうるのかを実践的に明らかにし、学術的な民族誌映像の作成および活用の望ましいあり方を探ることを目的としている。

成果

硫黄島においては、八朔太鼓踊り、盆踊りと柱松行事、九月踊りなどの調査撮影を進めて島の芸能を概観するとともに、八朔太鼓踊りについては年ごとの変化を映像で記録した。硫黄島は、人口120名ほどであり、小中学校教員や「しおかぜ留学」制度により島の学校で学ぶ生徒、ジャンバスクールの「留学生」など、一定期間島に暮らす島外の人々の存在が社会の維持に欠かせない。刻々と変化する島の社会や島の社会関係構築の1つの結節点としての芸能を、映像によりとらえることができた。変化する社会を記録する方法として、こうした芸能の映像記録が有効であることが明らかになった。また、三島開発総合センターにて、「八朔太鼓踊り調査映像2007-2013」（藤岡幹嗣撮影編集）、宮本馨太郎撮影フィルムから竹島、硫黄島の記録フィルム（九月踊りと八朔太鼓踊りなど、1934年撮影）、「八朔踊りとメンドン」（民族文化映像研究所、1983）の上映会を行い、島の人々が歴史を振り返る媒体として映像が有効であることも確認することができた。

徳之島については、島内3町の教育委員会等との協力により、各集落の芸能の映像記録を進め、マルチメディア番組「徳之島の唄と踊りと祭り」にまとめた。同番組は、26集落の芸能のべ約250曲の芸能の映像を収めており、徳之島の多様な芸能を概観比較することのできるコンテンツである。現地における映像上映会も繰り返し開催し、当事者にとって映像がもたらす意義についても考察を進めた。その結果、映像を見ることが、自らの芸能を振り返ったり、他の集落の芸能と比較したり、一緒に視聴する者との情報や意見を交換し、芸能の営みそのものを様々な角度から見直す機会となることがわかった。そして、芸能の映像記録のアーカイブを構築する場合、芸能の伝承の過程に記録を位置づける工夫が必要だとの結論に至った。この点を踏まえ、民博で始まった「フォーラム型情報ミュージアム」構築のプロジェクトにおいて、これらの映像記録をさらに効果的に公開していくこととした。

東南アジア大陸部及び東南アジア島嶼部におけるゴング文化についての映像記録作成を通じた研究は、主に科研費により調査を進めてきた。ベトナム中部高原からラオス南部、およびフィリピン北部の少数民族のゴング文化については、これまであまり多くの報告がなかったが、そうした空白を埋めることができた。また、ジャワ島およびバリ島、ロンボク島において、鉄のゴングの製作と流通について調査を行い、青銅製に比べて軽視されてきた鉄製ゴングの重要性が明らかになった。さらに、ベトナムにおける青銅製ゴング製作、ジャワ島とバリ島における青銅製と鉄製ゴング製作の映像記録により、それぞれの製作技法の比較などが可能となった。

研究会開催

- 2014年5月18日 国際シンポジウム “An Audiovisual Exploration of Philippine Music: The Historical Contribution of Robert Garfias”、国立民族学博物館第4セミナー室
- 2015年2月8日 「徳之島の民俗芸能に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」研究会、国立民族学博物館特別研究室

論文発表

福岡正太

- 2014 「音楽芸能の伝承において映像記録が果たしうる役割——徳之島の芸能を例に」『研究報告人文科学とコンピュータ』2014-CH-104(10):1-3。

著作物

〔映像作品〕

寺田吉孝

- 2014 『祝いの音、勝利の記憶——フィリピン・ルソン島山地民の結婚式』（日本語、英語、イロカノ語、各25分）。

藤岡幹嗣

- 2015 『八朔太鼓踊り調査映像2007-2013』。

〔プロシーディングス〕

Fukuoka, Shota (ed.)

- 2015 International Symposium Audiovisual Ethnography of Gongs in Southeast Asia: Proceedings. National Institutes for the Humanities Inter-Institutional Research Project “A Study on Visual Ethnography of Performing Arts as Human Cultural Resources.”

その他

福岡正太

- 2014年5月6日 「探求！現役フィールドワーク研究者に聞く記録と意味」梅棹忠夫と21世紀の「知的生産の技術」シンポジウム、グランフロント大阪ナレッジキャピタル北館タワーC8階
- 2014年5月14日 「霊と交流する楽器ゴングの今」みんなくカレッジシアター地球探究紀行、あべのハルカス近鉄本店ウイング館9階「スペース9」
- 2014年8月6日 「島のまわりに人がつどう——鹿児島県硫黄島」みんなくカレッジシアター地球探究紀行、あべのハルカス近鉄本店ウイング館9階「スペース9」
- 2014年10月18日 「音楽芸能の伝承において映像記録が果たしうる役割——徳之島の芸能を例に」人文科学とコンピュータ研究会（情報処理学会）発表会、関西大学千里山キャンパス第三学舎D501教室
- 2014年12月13日 「映像記録を民俗芸能の営みの中に位置づける」シンポジウム「民俗音楽の新たな胎動をさぐ

- る」日本民俗音楽学会第28回大会、東京音楽大学 A 館200教室
- 2015年2月8日 「フォーラム型情報ミュージアム・徳之島について」「徳之島の民俗芸能に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」研究会 国立民族学博物館特別研究室
- 寺田吉孝
- 2014年10月16日 ‘Recent documentation projects at the National Museum of Ethnology.’ “Laon-Laon Forum and Conference-Workshop on Preservation of Music Heritage in Asia”、フィリピン大学民族音楽学センター（フィリピン、ディリマン）
- 2015年1月26日 ‘Safeguarding Intangible Cultural Heritage: Process-oriented Applications of Audiovisual Media.’ アジア太平洋無形文化遺産国際研究センター（IRCI）国際専門家会議、イスラム芸術博物館（マレーシア、クアラルンプール）

人間文化研究総合推進事業

「第3回手話言語と音声言語に関する国際シンポジウム『言語の記述・記録・保存と通言語種類論』の開催」——
代表者：菊澤律子

目的

本国際シンポジウムは、手話言語と音声言語の比較を通じた研究成果を共有し、言語の新たな理解につなげること、また、最新の研究動向を国内の若手研究者やろう者（話者）が聴講する場を提供すること、のふたつを目的として開催する。

人間の言語には、手話言語と音声言語というふたつの形態があり、情報のコード化という面で共通性を持つ一方、伝達のために用いるのが音中心なのかビジュアル情報なのかという「モダリティ」の面で異なっている。言語学は長く、音声言語を対象とした研究成果に依ってきたが、近年では、手話言語を研究対象に含めることで、基本概念の見直しにつながるさまざまな事実が明らかになりつつある。たとえば、長く言語の基本特徴とされてきた「言語の線条性」「（形態と意味の結びつきの）恣意性」などの性質は、手話言語の特徴に照らして近年見直されつつあるが、その一方で、音声言語と手話言語の研究者が同時に集う場はまだ多くはない。

本シンポジウム・シリーズは、このような新たな研究の促進という意義のみならず、その内容が言語教育や社会制作の応用にもつながることから、国内外で定評を得つつある。

成果

- ・講演等はすべて映像収録し、とくに大切と考えられるものについては、ろう者やろうの研究者への情報保障を考慮し、インターネット上で情報保障（字幕付き・手話通訳）付き映像資料として以下のサイトに掲載する予定である（総合研究大学院大学学融合推進センタープロジェクト「手話言語学を世界へつなぐ——メディア発信とe-learning 開発に向けて（研究代表者：菊澤律子）」ウェブサイト <http://www.minpaku.ac.jp/sokendai/ssll/index.html>）。
- ・2014年分の映像については、主要なものについては文字起こしおよび翻訳済みとなっており、映像配信アプリを利用して順次字幕つけ作業を進めている。完成したものから上記ウェブサイトに掲載する。
- ・シンポジウム当日は、すべての講演内容とディスカッションをインターネット上で配信し、さらに配信した映像についてはDVDの形に収録した。

シンポジウム開催

第3回手話言語と音声言語に関する国際シンポジウム「言語の記述・記録・保存と通モード言語種類論」

開催日：2014年10月4日、5日

場 所：国立民族学博物館 講堂（本館2F）

言 語：英語、日本語、日本手話、アメリカ手話（日英同時通訳、日本語-日本手話、英語-アメリカ手話通訳、英文パソコン要約筆記付き）

一般公開（参加無料／要事前申込／定員各日400名）、USTREAMによるインターネット中継あり

プログラム

10月4日

9：45～9：55 「ご挨拶」 須藤健一（国立民族学博物館長）

9：55～10：00 「諸連絡」 菊澤律子（国立民族学博物館／総合研究大学院大学）

- 10:00~10:30 「手話言語における未完了相の解釈」 クリスチャン・ラスマン（ハンブルグ大学）
 10:30~11:00 「未完了相の通言語学的分析——二構成理論アプローチ」 白井恭弘（ピッツバーグ大学）
 11:00~11:30 ディスカッション
 話者：クリスチャン・ラスマン／白井恭弘、司会：桐生和幸（美作大学）
 12:30~13:00 「移動表現に関する通言語学的実験研究——様態、経路、ダイクシスの頻度と表現位置」 松本 曜（神戸大学）
 13:00~13:30 「日本手話における移動事象の表現——文法上の制約と動詞連続構文による解決」 市田泰弘（国立障害者リハビリテーション学院／国立民族学博物館）
 13:30~14:00 ディスカッション
 話者：市田泰弘／松本 曜、司会：秋田喜美（大阪大学）
 14:30~15:00 「手話言語間のコード・スイッチングに関する新たな発見」 ロバート・アダム（ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン）
 15:00~15:30 「単一モード・バイリンガルに関する観察——単一コミュニティにおける二つの手話併用の実例」 ウルリケ・ゼシャン（セントラル・ランカシャー大学）
 16:00~16:50 一般からの質疑応答 司会：ブラシャント・バルデシ（国立国語研究所）
 16:50~17:00 「諸連絡」 菊澤律子

10月5日

- 9:00~9:10 「諸連絡」 相良啓子（国立民族学博物館／総合研究大学院大学）
 9:10~9:40 「手話における調音的姿勢と変型のタイプ」 ロバート・ジョンソン（ギャロデット大学／国立民族学博物館）
 9:40~10:10 「固有母音素性とフィジー語の母音体系」 那須川訓也（東北学院大学）
 10:10~10:40 ディスカッション
 話者：ロバート・ジョンソン／那須川訓也、司会：森 壮也（日本貿易振興機構アジア経済研究所）
 11:00~11:30 「手話言語類型論からの知見——いくつかの意味領域に対する通言語学的調査の方法論」 相良啓子
 11:30~12:00 「ハワイ大学手話言語記録教育センター（SLDTC）——成功のための処方」 ジャン・フリード（ハワイ大学）
 12:00~12:25 一般からの質疑応答
 司会：原 大介（豊田工業大学）
 12:25~12:30 「ご挨拶」 菊澤律子
 13:30~16:00 研究者による打合せ
 司会：菊澤律子

「驚異と怪異の表象——比較研究の試み」

代表者：山中由里子

目的

本連携研究は、申請者が代表を勤めた共同研究「驚異譚にみる文化交流の諸相——中東・ヨーロッパを中心に」と国際日本文化研究センターの小松和彦教授が率いてきた共同研究「怪異・妖怪文化の伝統と創造——研究のさらなる飛躍に向けて」の成果を対照させ、未知なるものをめぐる思考様式の地域性や時代性を浮かびあがらせ、伝承やイメージの東西伝播を明らかにしようとするものである。機構連携展示としての特別展の開催を成果の一つとすることを視野に入れつつ、特に驚異・怪異の表象物（挿絵・絵画、民俗資料、珍品・からくり、博物標本など）に焦点をあてる。

中東とヨーロッパという一神教世界における驚異にある程度の共通性があるとしたら、中国の『山海経』あるいは『日本霊異記』のような「怪異譚」とは、またどう違うのか、といった問題に取り組む。

成果

代表者が下記にあげる複数の国際研究会・シンポジウムで、驚異と怪異の比較研究の枠組みについて発表した。分野の異なるそれぞれの会合で、今後の研究の展開に参考になる反応を得ることができた。

研究会開催

2014年5月31日 「驚異と怪異——想像界の比較研究」東アジア怪異学会、園田学園女子大学

2014年10月12日～13日 研究フォーラム「驚異と怪異：想像界の比較研究に向けて」国立民族学博物館

2015年1月14日～16日 ‘Travelling Narratives and Networks of Knowledge: the Case of the Alexander Romance,’ “Knowledge Transfer Across Borders: Integrative Approaches,” ゲッティゲン大学、ドイツ

論文発表

「未知との遭遇——怪異と驚異の比較研究」『HUMAN』6巻（特集：日本の魑魅魍魎）pp.74-78, 平凡社, 2014年7月。

「＜驚異＞を媒介する旅人」『怪異を媒介するもの』（アジア遊学）勉誠社、2015年5月刊行予定。

データベース等の公開

本機構連携研究開始以前からすでに日文研で立ち上げられているものとして、「怪異妖怪伝承データベース」が挙げられる（<http://www.nichibun.ac.jp/YoukaiDB/>）。

「文化遺産の復興に向けたミュージアムの活用のための基礎的研究——大学共同利用機関の視点から」

代表者：日高真吾

目的

本研究は、大規模災害において壊滅的な被害を受けた文化遺産を被災地の大学機関やミュージアムと連携し、どのように復興させ、活用していくのかを調査・研究するものである。そして、そのような活動に研究機関である大学共同利用機関がどのような役割を果たせるのかを明らかにしていくことを目的とする。

成果

連携研究最終年に当たる今年度は、これまで同様、一時保管場所である気仙沼市旧月立中学校の環境モニタリングを継続するとともに、石巻市鮎川収蔵庫資料の脱塩処理の技術移転をおこなった。無形の文化遺産の保護活動では、民博などの施設を利用し、被災地の芸能の公演を企画し、芸能をおこなう場の創出とそれに伴う地域活性の状況について検証をおこない、民博研究公演「りんけんバンドみんぱく公演」の実施へとつなげた。「災害の記録・記憶の継承」では、三陸沿岸の津波碑等のデータベースを作成し、今後の備えとしてこれらのデータベースがどのように役に立つのかについて検証し、次年度以降の本格運用に向けた準備をおこなった。「災害時における大学間の連携体制の構築」では、大学機関を中心に設置が急速に進んでいる資料ネットワークとの連携を目指し、災害時における協力関係の構築を目指した打ち合わせを重ねてきた。以上の結果、人間文化研究機構基幹研究「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」の準備に向けた体制を作ることができた。

1) 研究会開催

2014年11月1日 研究フォーラム「学校芸能の現在」, 国立民族学博物館

2015年1月24日 民博研究公演「りんけんバンドみんぱく公演」, 国立民族学博物館

2) 著作物名

日高真吾 『災害と文化財——ある文化財科学者の視点から』千里文化財団, 2015年2月。

3) 論文発表

林 勲男 「生者の記憶、死者との対話」木部暢子編『災害に学ぶ——文化資源の保全と再生』勉誠出版、2015年3月。

日高真吾 「生活文化の記憶を取り戻す 文化財レスキューの現場から」木部暢子編『災害に学ぶ——文化資源の保全と再生』勉誠出版、2015年3月。

Hidaka, S. “Conservation and Restoration of Tangible Cultural Properties: Rescue Operations Related to the Great East Japan Earthquake.” *Asian Museum and Museology: International Research Meeting on Museology in Myanmar* (Senri Ethnological Reports 125) pp.69-78, National Museum of Ethnology, February, 2015.

Hidaka, S. “Rescue and Emergency Treatment for Tangible Cultural Properties.” *Asian Museum and Museology: International Research Meeting on Museology in Thailand* (Senri Ethnological Reports 129) pp.57-62, National Museum of Ethnology, March, 2015.

日高真吾 責任編集 公開シンポジウム「災害と展示」『展示学』52: 32-54, 展示学会, 2015年2月。

日高真吾 「有形文化遺産のレスキュー」『アジアにおける博物館・博物館学の「いま」——モンゴル、ミュージ

アム・クリタイ』 pp.115-125, モンゴル国立文化遺産センター, 2015年11月。

日高真吾 「東日本大震災で被災した民俗文化財の脱塩処理に関する一考察」『民具研究』（日本民具学会）2015年度刊行予定。

日高真吾 「規模災害時における文化財レスキュー事業に関する一考察——東日本大震災の活動から振り返る」『国立民族学博物館研究報告』2015年度刊行予定。

人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド地域研究」

人間文化研究機構は、わが国にとって学術的、社会的に重要な意義を有する地域の文化、社会を総合的に理解、解明するため、関係大学・機関と協力して2006年度から「地域研究推進事業」を開始した。本事業は、機構が関係大学・機関と研究拠点を共同設置し、拠点間のネットワークを構築して研究を推進する方式の研究事業である。2006年度から「イスラーム地域研究」事業、2007年度からは「現代中国地域研究」が始められているが、これに加え2010年度より「現代インド地域研究」事業が開始された。

「現代インド地域研究」事業においては、京都大学を中心拠点とし、これに東京大学、広島大学、東京外国語大学、龍谷大学、および国立民族学博物館の5拠点が加わってネットワーク型の研究推進が図られている。

以下では「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点の2014年度の事業概要を記載する。

【拠点の整備】

「現代インド地域研究」プロジェクトの国際的ネットワーク化へのブリッジ的拠点として、本拠点は2010年度～2012年度において日本学術振興会「頭脳循環を活性化する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」経費による「現代南アジア研究の国際的ネットワークの形成」事業の経費受入研究拠点となった。今年度は、本プロジェクトの成果を論文集として出版するため、デリー大学やエジンバラ大学との協力により編集作業を進めた。論文集は2015年度中に刊行される見通しである。

拠点独自の研究活動としては、現代インドの宗教と文化の動態に関して、グローバルな人・モノ・情報の流動との関連に着目しながら研究メンバーを海外に派遣して調査を進めるとともに、研究会を開催した。インド発の環流現象に関する本拠点の研究成果は、現代インド地域研究全体の叢書第6巻として編集が進められ、2015年5月に出版した。

上記の論文集とは別に拠点独自の研究成果論文集の出版も計画しており、今年度の研究会では、論文集の取りまとめを念頭に、拠点メンバーがこれまで継続してきた海外調査の成果の発表と討論を行った。また研究交流協定を結んでいるエジンバラ大学南アジア研究センターとの間で若手研究者を相互に派遣し合い、相手先のセンターのセミナーで研究発表を行ったり、派遣された研究者と意見交換を行ったりした。これらの調査や研究会を通じて、1) 環流的な現象はインドのみならず南アジア地域全体で、コロニアル期から世界的な経済や社会状況と交渉しつつ、宗教や文化の幅広い側面で生じてきた。コロニアル期からの環流的現象としては、例えば宗教的領域における神智協会の活動の歴史、あるいは文化的な側面では陶磁器産業における日本とインドの動的な交流などが具体的に跡づけられた。2) 宗教の動態においては、インドからの移民を担い手とする環流的動態に関する事例が次第に集積され、東南アジアやヨーロッパなど地域間の比較に着手できる見通しがついた。一方、インド国内の宗教的運動の研究においては国家の規制や情報テクノロジーの進展との交渉の中で伝統的宗教実践の領域が変容しつつ、なお庶民の切実な願いや苦しみからの解決のための重要な領域となっている 等の点が明らかとなった。この成果は上記叢書のほか、拠点独自の成果報告書の刊行という形で公表する計画である。

研究資料の受け入れに関しては、インドの宗教祭礼や民俗文化の写真撮影を行ってきた写真家沖守弘氏のスライド写真約2万点と関連文書資料を、民族学博物館図書館と共同して受け入れてデータベースとして公開するプロジェクトを進めた。今年度は、昨年度受け入れを完了した資料のうち、スライド写真8,200点余りをデジタル化するとともに、5,000点余りについて写真情報の打ち込み作業を行った。データベースはデジタル化と資料情報の整理が終わり次第、2015年度中に公開する予定である。

【拠点の活動と成果】 国際シンポジウムの共催

国際ワークショップの開催

①国際研究セミナーの開催

日時：2014年5月10日 午後1時30分～午後5時30分

場所：国立民族学博物館第3セミナー室、第7セミナー室

概要：インド発の文化的環流動態の研究の一環として、アメリカ合衆国において自らインド音楽を学び、演奏しつつ、インド音楽の同国における受容の歴史を研究している David Trasoff 氏を招聘し、講演会を行い、その後で氏自身によるインド音楽演奏ワークショップを開催した。

講演では、アメリカ合衆国におけるインド音楽受容史において2つの重要な画期が指摘された。1つは1960年代から80年代の「ニュー・エイジ」音楽ブームである。この音楽の流行はヨーロッパや日本も巻き込んだ流行の一環である。この時期に多数の著名なインド人音楽家が渡米して演奏を行って人気を博した。またアメリカ合衆国においてはさまざまなインド音楽の教育機関が設立され、インド系移民だけでなくそれ以外の合衆国住民にも伝統的なインド音楽の技法や哲学が伝えられた。2つめの画期は1990年代以降の「アメリカン・キールタン」の流行である。これはサンスクリット文献から引用された宗教的な賛歌をストリートや演奏会場で歌い踊るものである。こちらの音楽においては、歌詞や意味内容はインド由来のものだが楽曲はインドの伝統音楽の技法とは無関係で、合衆国のポピュラー音楽的な技法によるものである。このような音楽のあり方が1960年代から80年代の「ニュー・エイジ」音楽のように世界的に流行するような環流的動態を示すのかどうかは今後注目に値するだろう。

プログラム

Opening Address: Yoshitaka Terada (National Museum of Ethnology)

Lecture & Performance: David Trasoff (Lila Vihun Music)

“Hindustani Music in America: The First Years”

Commentator: Masakazu Tamori (University of Tokyo)

Emi Okada (University of the Ryukyus)

②国際研究ワークショップの開催

日時：2014年10月11日 午後1時30分～午後6時

場所：国立民族学博物館第6セミナー室

概要：インド西部ラージャスターン地方のローカルな宗教実践が現代の政治や社会、あるいは技術の変容とどのように関連しあうのかという観点から、アメリカ合衆国からも研究者を招聘して国際研究ワークショップを開催した。ローカルな宗教実践の現代における変容に関わる要素の検証を通じて、現代インドにおける宗教の動態を捉える視点をより明確にすることがワークショップの目的であった。

ワークショップは3人の発表者がそれぞれの研究に基づく発表を行い、その後で総合討論を行った。最初に三尾が自らの調査に基づき、ラージャスターン州メーワール地方の戦士の霊にまつわる信仰をめぐる信者集団のあいだで活発に用いられるようになったフェイスブックを取り上げて事例報告と考察を行った。この霊をめぐる宗教実践では、神像や霊媒に現前する神霊との具体的で直接的な交流が重視されてきた。神霊との交流は身体的であり、そうであるがゆえに場所拘束的であった。しかし、フェイスブックなどの電子的メディアは場所の拘束からの自由を与えるとともに、神霊の現前を必要としないことから、電子メディアが宗教実践を媒介することで宗教実践の内容そのものを大きく変える可能性を持っている。報告では、フェイスブックと言うメディアの特性がコアな信者集団が神霊によせる信仰の篤さを競わせるという結果をもたらし、それによりこの神霊信仰で重視される神像の飾りつけがかえって頻繁かつ壮麗に行われるようになっていることが指摘された。電子技術は神霊の現われの特性を変える一方で、伝統的な神霊信仰のある部分を強化する側面を持つのである。

次の報告では、三尾が取り上げた神霊信仰に関する語りの複数性と変容に関して、招聘研究者である Harlan 氏が発表を行った。神霊の起源譚は主たる寺院で伝承されている、神霊となった戦士を主人公としたストーリー以外にも多数あり、その起源譚が焦点化する主人公の帰属する集団やジェンダーによってその趣きを大きく異にしている。Harlan 氏は多数の起源譚を収集しているが、今回の発表では神霊となった戦士の父と関わったジャイナ教徒の女性を主人公とした起源譚に基づく分析を行った。その読みからは、ジャイナ教とヒンドゥー教の関係性や、当時及び現代のジェンダー関係の複雑さが浮かび上がってくる。起源譚の複数性から、ローカルな信仰実践が支配的な政治・宗教勢力と巧みに交渉しつつ、支配勢力を批判的に捉え、庶民の独自の想像力や信仰の世界を確保してきた歴史が読みとれる。これがグローバル化の進む現代においてどれだけの想像力や批判力の源泉となりうるかが今後の注目点となるだろう。

第3の報告は、ラージャスターンにおけるローカルな女神寺院の設立と経営に関して調査を行ってきた田中が、寺院経営と国家や司法との関わりという観点から発表を行った。田中の調査対象は、サティー（寡婦殉死）を行ったとされる女性の霊を女神として祭る寺院である。それゆえ、サティーが現代インドにお

いて問題化された1980年代以降、サティーやそれに関わる信仰を規制しようとする国家と、女神をコミュニティの伝統として守ろうとする商人カーストとの間で、寺院や祭礼の性格、また運営のあり方をめぐってさまざまな交渉が繰り返されてきた。田中は、商人カーストの信者集団が国家と交渉するため寺院トラストをどのようにして形成し、どのような論理で国家の規制と対峙し、自らの信仰を守ろうとしてきたのか、またその中で宗教的实践がどのように変化したのかを考察した。世俗主義を掲げるインドにおいて、宗教は全く自由な領域ではなく、常に国家の規制が及ぶ領域であった。しかし、その規制の実態は、特にローカルな宗教実践に即した形ではほとんど研究の対象となっていなかった。田中の報告は、国家の規制がローカルな実践をどれだけ動的に変容させるかを明らかにしており、今後のインドの宗教研究において重要な視点を提供したと考えられる。

ワークショップを通じて、ローカルな宗教実践が独自の実践の空間を維持するために、国家をはじめとする権力や時代ごとの主導的な技術と交渉し、ある場合にはそれらを柔軟に取り入れながら変容を遂げている姿が具体的な事例を通じて明らかとなった。ローカルな宗教実践の動態を考える上では、装置としての近代国家や情報テクノロジーとの交渉過程を詳細かつ具体的に解明する必要があることも、このワークショップによってより明確となった。

なお、このワークショップは、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（B）「南アジアの移住商人（マルワリー）の研究：実態と表象への学際的アプローチ」（代表：中谷純江 鹿児島大学国際連携推進センター・准教授）との共同で開催した。

プログラム

Opening Address: Minoru Mio (National Museum of Ethnology)

Lecture (1): Minoru Mio (National Museum of Ethnology)

“Enchantment of the Past: Nature of Faith through Things in the Worrier’s Spirits’ Cult of Southeastern Rajasthan”

Lecture (2): Lindsey Harlan (Professor of Religious Studies, Connecticut College)

“Stories of Gevar Bai and the Construction of Mewar’s Rajsamand Reservoir”

Lecture (3): Tetsuya Tanaka (National Museum of Ethnology)

“Consideration on Struggles of Rani Sati Temple Management after Implementation of Commission of Sati (Prevention) Act, 1988”

General Discussion

研究会活動

研究グループ1および2合同の拠点研究会を合計3回開催した。今年度は、国立民族学博物館拠点が独自に出版を計画している、拠点の成果報告論文集の出版をめぐって拠点の構成員や拠点の研究分担者・協力者がこのプロジェクトにおいて行った各自の研究成果を発表した。

各回の研究会の発表者と題目は下記の通り。

①国立民族学博物館拠点第1回合同研究会

日時：2014年7月19日 午後2時～午後5時

7月20日 午前10時30分～午後3時30分

場所：国立民族学博物館4階第1演習室

プログラム

報告1：松川恭子（甲南大学文学部准教授）「地域的想像力の故地への環流：ボンベイのゴア人コミュニティ形成と演劇シアトルの発展」

報告2：小牧幸代（高崎経済大学地域政策学部教授）「現代インドのテーマパークにおける商品としてのイスラーム：アドラブズ・イマジカの事例を中心に」

報告3：福内千絵（京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科・研究員）「近現代インドにおける「ナショナル・アート」の生成：ラヴィ・ヴァルマーをめぐる言説から」

②国立民族学博物館拠点第2回合同研究会

日時：2014年10月12日 午前10時30分～午後4時30分

場所：国立民族学博物館4階第1演習室

プログラム

報告1：松尾瑞穂（国立民族学博物館准教授）「神話と遺伝子——現代インドにおける生殖医療とサブスタンス

の文化的意味付け」

報告2：山下博司（東北大学大学院国際文化研究科教授）「ディアスポラにおけるヒンドゥー儀礼の制約と変質——世界数カ所の事例をもとに」

報告3：鈴木晋介（関西学院大学先端社会研究所専任研究員）「ラフィング・ブッダ——現代スリランカの民間信仰とグローバリゼーション」

③国立民族学博物館拠点第3回合同研究会

日時：2015年1月24日 午後1時30分～午後5時

1月25日 午前10時30分～午後3時

場所：国立民族学博物館4階第4演習室

プログラム

報告1：竹村嘉晃（現代インド地域研究国立民族学博物館拠点研究員）「ローカルの伝統からナショナル、ハイブリットなコンテンポラリーまで——シンガポールにおける〈インド芸能〉の発展と文化政策」

報告2：寺田吉孝（国立民族学博物館教授）「カナダ、トロント市における南インド音楽・舞踊の実践」

報告3：五十嵐理奈（福岡アジア美術館学芸員）「美術制度に抗する南アジア美術ネットワーク——「第5回福岡アジア美術トリエンナーレ2014」より」

報告4：南 真木人（国立民族学博物館准教授）「『移民の文化』の形成過程——ネパール人移住労働者から」

海外調査

拠点の研究メンバーをのべ13回インド、アメリカ、マレーシア、タイ、ドバイ、フランス、ベルギー、イギリス、シンガポール、オランダ等に派遣し、海外現地調査や学会等での研究成果発表や意見交換にあたらせた。派遣先やテーマの詳細は下記の通り。

- ① 17th North American Zoroastrian Congress の動向調査
出張期間：2014年12月26日～2015年1月2日
出張先（アメリカ）：ロサンゼルス
出張者：香月法子（中央大学政策文化総合研究所準研究員）
- ② 現代インドの娯楽・観光産業における「商品」としての宗教・民族に関する現地調査
出張期間：2014年8月28日～9月18日
出張先（インド）：デリー、ハイダラーバード、ブネー、ムンバイー
出張者：小牧幸代（高崎経済大学地域政策学部教授）
- ③ 研究発表および意見交換
出張期間：2014年12月13日～12月21日
出張先（インド）：チェンナイ
出張者：アントニサーミー・サガヤラージ（南山大学人文学部准教授）
- ④ インドにおけるローカルな宗教実践の動態に関する調査
出張期間：2014年7月23日～8月11日
出張先（インド）：ウダイプル市及びその近郊
出張者：三尾 稔（国立民族学博物館准教授）
- ⑤ 東南アジアのヒンドゥー寺院における寺院儀礼と空間構造の調査
出張期間：2014年12月19日～1月5日
出張先（マレーシア、タイ）：ペナン、バンコク
出張者：山下博司（東北大学大学院国際文化研究科教授）
- ⑥ 共同研究および国立民族学博物館南アジア展示新構築関連事業に関する協議
出張期間：2015年3月3日～3月13日
出張先（インド）：チェンナイ
出張者：杉本良男（国立民族学博物館教授）
- ⑦ 神霊信仰にもとづく舞踊芸能の脱領域的広がりに関する実態調査
出張期間：2015年4月1日～4月6日
出張先（ドバイ）：ドバイ市
出張者：竹村嘉晃（現代インド地域研究国立民族学博物館拠点研究員）

- ⑧ インド音楽・舞踊のグローバリゼーションに関する実態調査
出張期間：2014年9月12日～9月25日
出張先（フランス）：パリ
出張者：田森雅一（東京大学非常勤講師）
- ⑨ インド音楽・舞踊のグローバリゼーションに関する実態調査
出張期間：2015年2月5日～2月15日
出張先（ベルギー、フランス）：ブリュッセル、パリ
出張者：田森雅一（東京大学非常勤講師）
- ⑩ インド音楽・舞踊のグローバルな環流に関する実態調査
出張期間：2014年12月24日～2015年1月5日
出張先（インド）：チェンナイ
出張者：寺田吉孝（国立民族学博物館教授）
- ⑪ 研究発表・意見交換および美術資料の熟覧調査
出張期間：2014年10月21日～10月31日
出張先（イギリス）：エジンバラ、グラスゴー、ロンドン
出張者：豊山亜希（現代インド地域研究国立民族学博物館拠点研究員）
- ⑫ 南アジア・東南アジアにおける日本製雑貨の受容史に関する調査
出張期間：2015年2月12日～3月4日
出張先（インド、マレーシア、シンガポール）：左記各国の諸都市
出張者：豊山亜希（現代インド地域研究国立民族学博物館拠点研究員）
- ⑬ 研究発表および意見交換
出張期間：2015年2月23日～3月4日
出張先（イギリス、オランダ）：エジンバラ、ライデン
出張者：松尾瑞穂（国立民族学博物館准教授）

研究資料の整備

1970年代からインド各地の祭礼や民俗芸能、絵画等に関する写真撮影を行ってきた写真家沖 守弘氏の写真資料と写真取材に関連する文書資料を一括して受け入れデジタル保存し、広く研究用に公開するためのデータベースを作成する作業を行った。今年度は、昨年度に資料受け入れが完了した約2万点のスライド写真のうち、8,200点余りをデジタル化するとともに、5,000点余りについて写真情報の打ち込み作業を行った。

日本関連在外資料調査研究

「ロシアと北欧における日本関連アジア資料の調査研究」

代表者：佐々木史郎

19世紀に収集されたことが確実な日本関連資料のうち、まとまりがあり同時代の日本文化や歴史を表象することのできるコレクションを、可能な限り総合的に調査研究する。その際、少なくとも資料に関する詳細なデータをできる限り多く共有することで、同時期の「規準」となる「もの資料」を明確にする。19世紀のコレクションのうち、いくつかのモデルケースを設定し、国内外の研究者コミュニティが、詳細な「記録」というかたちであれ、「実物」のままであれ、未来にわたって「共有」するために、長期にわたって継続でき、かつ成果を広く共有しうる調査方法と実現できる調査計画と公開方法を立案、実行する。同時に、すでに目録が整備されているもののうち、相互利用に関する合意ができる場合は、協定など利用規程を定め、たうえで「共用」化を進める。さらに、資料群の現状（状態）を把握することで、今後の長期的保存・修復計画を策定することも目指す。

毎年度海外の博物館等の研究者を招聘し、国際フォーラムを開催する。この国際フォーラムは「ロシアと北欧における日本関連アジア資料の調査研究」（代表：近藤雅樹、人間文化研究機構「日本関連在外資料の調査研究」の一環）の企画である。その目的は、バルト海沿岸地域の諸都市を中心に博物館などが所蔵する日本および東アジア関連の民族資料（物品、写真、映像、文献など）を6か年計画で幅広く調査し、未紹介資料を含めて概要を明らかにしようとするものである。

成果

- 1) ロシア、サンクトペテルブルクの人類学民族学博物館に所蔵されているシーボルトが収集した絵画資料と長崎商館員オーベルメール・フィッセルが収集した民俗資料の図録を作成するため、論文と解説の執筆と、それらの翻訳編集作業を行った。
- 2) 2011年度開催の国際フォーラムの実施報告書を刊行した。

研究成果公開プログラムによる館のシンポジウム、研究フォーラム、国際研究集会への派遣

●館のシンポジウム

IUAES 2014（国際人類学民族科学連合・国際研究大会）における「アイヌ古式舞踊」研究公演

2014年 5月17日 幕張メッセ

代表者：齋藤玲子

Panel 136

「Songs and Dances of the Ainu: Heritage and Practice in Akan, Hokkaido, Japan（アイヌの歌と踊り 阿寒における伝承と実践をととして）」

日本文化人類学会50周年記念事業として千葉幕張メッセで開催された国際人類学民族科学連合2014年中間会議（IUAES2014）を兼ねた国際研究大会において、アイヌ古式舞踊の研究公演と、晩餐会（バンケット）での公演をおこなった。

本事業は、IUAES 2014大会において、日本文化人類学会・小泉潤二会長の招待パネルとしておこなった。

アイヌ民族の歌と踊りは、明治以降に伝統的な文化が衰退するなかで、変化をしながらも儀式的場面などで伝えられてきた。「アイヌ古式舞踊」は1984年（1994年追加）に国の重要無形民俗文化財に指定され、2009年にはユネスコの世界無形文化遺産にも登録された。本パネルでは、歌や踊りの歴史的背景と特徴についての解説とともに、実演および質疑応答をすることで、アイヌの舞踊についてより深く理解してもらうことができ、情報交換もおこなえた。

海外の文化人類学者が多数参加する国際研究大会において、日本の先住民であるアイヌ民族の文化の現状を示すことは、参加者から期待されるところであり、本館がその役割を担う意義は大きいと考えた。

実施状況

研究公演は15:30～17:00（パネルセッション90分の枠）で、アイヌ民族の歴史と文化の概要、アイヌ音楽の現状と研究状況を解説した後、踊りの実演をおこなった。他のパネルセッションや学会発表とも重なる時間帯であったことから、参加者は70人ほどであったが、みな熱心に視聴し、質問も多かった。

バンケットでは、司会者からの短い解説を添え、晩餐会に合ったエンターテインメント性の高い演目も加えた。舞台周りに人だかりができ、大変盛り上がった。

司 会 齋藤玲子（国立民族学博物館）

解 説 千葉伸彦（音楽家・アイヌ文化研究者）

実 演 阿寒アイヌ工芸協同組合／阿寒アイヌ民族文化保存会 8名

成果

いずれも終了後に多くの賛辞をいただき、目的どおりに、日本の先住民であるアイヌ民族の文化の一端を紹介するとともに、本館がこうした事業を企画・支援していることも知っていただけた。

国際シンポジウム「ロベルト・ガルフィアスのフィリピン音楽映像記録——歴史的意義と将来的活用」

2014年 5月18日 国立民族学博物館

代表者：福岡正太

本シンポジウムは、人間文化研究機構連携研究「人間文化資源」の総合的研究における「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」班（代表者：福岡正太）の研究活動の一環として開催したもので、アメリカの指導的民族音楽学者であるロベルト・カルフィアス氏が小泉文夫音楽賞受賞により来日した機会をとらえ、氏がフィリピンでの調査時に撮影した映像を様々な角度から再検証し、民族音楽学研究における意義と今後の活用の可能性につい

て検討することを目的とした。

実施状況

本館外国人研究員米野みちよ氏が、ルソン島の映像に関連してフィリピンの音楽に関する民族誌の変化について論じ、ガルフィアス教授によりアメリカ合衆国に招かれ教育研究に従事してきたウソパイ・カダー氏が、ミンダナオ島などの映像に関連してクリンタン音楽の変化を論じ、フィリピン大学民族音楽学センター長のラモン・サントス氏が、ガルフィアス教授が撮影した映像記録の重要性に触れた上で、それらの資料を活用するフィリピン大の試みについて論じた。

成果

ガルフィアス教授は、比較的早い時期から、民族音楽学研究における映像の重要性を認識し、研究活動の一環として映像記録作成をおこなってきた。氏の調査をきっかけとして渡米し、フィリピンの音楽を教えるかたわら民族音楽学を学んだウソパイ・カダー氏、氏が調査をおこなった地域で現在研究をおこなっている米野みちよ氏、フィリピン音楽研究の第一人者であるラモン・サントス氏により、ガルフィアス教授による映像記録を検証してもらうことで、音楽文化研究における映像の有用性、民族音楽学に対して映像記録がもつ影響力、フィリピン音楽研究において映像が果たした役割を明らかにし、今後の活用の可能性を示すことができる。また、本シンポジウムにおける議論は、本館における映像製作に対しても多くの示唆を与えることができるだろう。連携研究経費により英文の報告書を刊行する。

国際伝統音楽評議会「音楽とマイノリティ」研究グループの第8回国際シンポジウム

2014年7月19日～7月23日 国立民族学博物館

代表者：寺田吉孝

国際伝統音楽評議会（International Council for Traditional Music）「音楽とマイノリティ」研究グループの第8回国際シンポジウムを民博で開催する。同評議会は1947年にイギリスで設立された、世界最大規模の音楽・芸能学会である。傘下に19の研究グループがあり、各々国際研究大会を開催している。その一つである「音楽とマイノリティ」研究グループは2000年に設立され、同年の第1回大会（於、スロベニア）以来、隔年で国際シンポジウムを開催してきた。

実施状況

国際伝統音楽評議会「音楽とマイノリティ」研究会の第8回国際シンポジウムが、国立民族学博物館第4セミナー室において7月19日～23日に予定通り開催された。開会式、基調講演に続いて、24本の研究発表が、大会の4つのテーマ（文化政策、観光、ジェンダーとセクシュアリティ、その他の新研究）に沿っておこなわれた。

関連イベントとして、大会2日目には、研究公演「アリラン峠を越えていく——在日コリアン音楽の今」が開かれ、同4日目には、エクスカーションとして大阪市浪速区の被差別部落を訪れ、大阪人権博物館の視察、太鼓ワークショップ、太鼓作りの見学のあと、地元浪速神社の夏祭りに参加した。

成果

ハワイ大学名誉教授のリカルド・トゥリミリオス氏による基調講演は、マイノリティ・マジョリティの二分法的概念規定の問題点を指摘するとともに、氏自身の調査地であるフィリピン、ハワイ、沖縄の事例をあげながら比較の重要性と理論化を念頭におくことの必要性を指摘した。同氏の問題提起は、その後の個別発表でもしばしば言及され、シンポジウム全体の通奏低音として効果的に機能した。

3日目におこなわれた研究会の総会では、今回のシンポジウムの発表に基づいた論文集を刊行することが確認され、2016年の刊行を目指して編集作業を進めることとなった。寺田を含む3名が編者に指名された。今回のシンポジウムの参加者は計65名。アジア・ヨーロッパを中心に16か国からの参加があり、文字通り国際的なシンポジウムとなった。若手の発表者・参加者も多く、次世代への継承についても一定の成果をあげることができた。

公開シンポジウム「南アフリカの過去と現在——ネルソン・マンデラから続く道」

2014年10月11日 国立民族学博物館

代表者：池谷和信

南アフリカ共和国は、サハラ以南アフリカのGNPの3分の2を占める大国であるにもかかわらず、これまでアパルトヘイト（人種隔離政策）があまりにも注目されたために、庶民の暮らしの現実が紹介されることはあまりなかった。この会では、アパルトヘイトの崩壊後にどのように社会は変わったのかについて明らかにすることを目的とする。これらを通して、治安の悪さが強調されがちな南アフリカの都市の新たな実像を紹介する。

実施状況

本企画では、モハウ・ペコ南アフリカ共和国大使による基調講演（南アフリカの都市化を展望）を中心として、環境経済学、歴史学（経済史）、民族学（環境人類学）の研究者がそれぞれ南アフリカの都市の過去と現在を、一般の来館者を対象にして、わかりやすく論じることができた。

成果

シンポジウムの結果、貧困や犯罪の温床などの都市イメージとは異なる南アフリカの都市の本当の姿を伝えることができたと思われる。また、必ずしも身近ではないアフリカの文化や社会について、アフリカの人々の声を直に聞くことのできる機会になった。さらに、今回の企画は、南アフリカの事例に焦点を当てたものではあるが、これらを通して、21世紀における大都市での「持続可能な生き方」や「持続可能な資源利用のあり方」を考えるためのヒントが与えられることになった。

国際シンポジウム「世界の食文化研究と博物館」

2014年12月6日～12月7日 国立民族学博物館

代表者：朝倉敏夫

国立民族学博物館と立命館大学国際食文化研究センターは、2014年4月10日に学術交流協定を締結した。この協定締結を記念して、世界の食文化研究と博物館の役割に関する国際シンポジウムを開催する。

「食」は人類の生存にとって原始からもっとも大きな問題でありなおかつ、食と環境、生態、安全、健康との関係は人類にとっての今日的な問題でもある。しかし、「食」を「食は文化である」という視点から食文化研究が始まったのは、日本においては、1980年代になってからである。今回のシンポジウムでは、それからおよそ30年がたった今、日本の食文化研究がどのような展開をみせてきたのか、その足跡と現状を明らかにするとともに、世界においては食文化の研究がどのように進められているのかを俯瞰してみる。そして、食文化を研究するうえで博物館がどのような貢献をしているか、まずは東アジアを中心に、その現状を具体的な事例を通して報告してもらい、今後、博物館が食文化を研究するうえで果たすべき役割は何かを考察してみる。

実施状況

国立民族学博物館と立命館大学（国際食文化研究センター）が2014年4月10日に締結した学術交流協定を記念して、世界の食文化研究と博物館の果たす役割に関する国際シンポジウムを2日間に渡り本館講堂にて開催し、一般参加者を含む385人の参加者を得た。「食」は、人類の生存にとって原始からもっとも大きな問題であり、「食」と環境・生態・安全・健康との関係は、喫緊の今日的な問題でもある。しかし、「食は文化である」という視点から研究が始まったのも、「食文化」という言葉が一般に使われるようになったのも、この30～40年である。本シンポジウムでは「食は文化である」という再認識のもと、食文化研究の意義を明らかにする一方、食文化を研究するうえでの博物館の役割について考察した。

初日は、本館館長及び立命館大学理事長からの挨拶の後、在大阪イタリア総領事及び駐大阪韓国総領事から祝辞をいただいた。その後本館朝倉から趣旨説明を行い、引き続き石毛直道元民博館長をはじめ、日本、中国、イタリア、韓国の食文化研究の進展について講演が行われた。

2日目は、博物館における食文化の表現や展示について、東アジアを中心とした事例報告があり、今後の食文化研究の発展と博物館の役割についての討論が行われた。最後に、立命館大学の井澤裕司教授が、今後も両機関が連携のうえ食文化研究を推進していく決意を述べた。

成果

本シンポジウムを通じ、我が国において食文化研究がどのような展開をみせてきたのか、その足跡と現状を明らかにし、世界においては食文化の研究がどのように進められているのかを俯瞰することができた。そして、食文化を研究するうえで博物館がどのような貢献をしているか、まずは東アジアを中心に、その現状を具体的な事例を通して報告してもらい、今後、博物館が食文化を研究するうえで果たすべき役割について考察できた。

国際シンポジウム「アジアにおける新しい博物館・博物館学の展望」

2015年2月21日～2月22日 国立民族学博物館

代表者：園田直子

*人間文化研究機構機構長裁量経費

国立民族学博物館では1994年度より、JICAと協力のもと、途上国を対象に博物館の実践的技術を学ぶ研修を実施してきた。対象国のなかには、タイ、ミャンマー、モンゴルのように、日本で研修を受けた人びとが自国の博物館活動や人材育成教育において中核的役割を果たすところがでている。そこで本館では2012年度から3年計画で、これら3国とともに新たなプロジェクトを、外部資金（日本学術振興会 研究拠点形成事業B.アジア・アフリカ学術基盤形成型）を得て進めている。シンポジウムには、これら3国からそれぞれ2名（プロジェクトの相手国コーディネータと、若手研究者）を招聘することで、本館を核とした博物館・博物館学に関わる国際ネットワークを組織的・持続的に強固なものとする。本シンポジウムにより、これまでの＜日本＝研修実施側＞、＜タイ、ミャンマー、モンゴル＝研修を受ける側＞という図式を超えた新しい協力体制が構築される。また、諸外国の経験や動向を取り入れながら、それぞれの歴史的・社会的・文化的背景をもとに発展、成熟する現在アジアの博物館事情を明らかにすることで、欧米に偏りがちな今までの博物館研究に新たな切り口をひらくことが期待される。

本シンポジウムは、日本学術振興会研究拠点形成事業B.アジア・アフリカ学術基盤形成型「アジアにおける新しい博物館・博物館学創出のための研究交流」の成果発表というだけでなく、本館の20年あまりにわたる博物館学に関わる国際貢献・人材育成の集大成のひとつと位置づけることができる。

実施状況

シンポジウムでは、セッション1（アジアの博物館事情）、セッション2（デジタル時代の博物館）、セッション3（「活用」と「保存」の両立）、セッション4（ひらかれた博物館）において、アジアの歴史的・社会的・文化的背景に即して発展、成熟してきた各国の博物館研究やその実践事例を共有する。セッション5（新しい博物館・博物館学の展望）では、アジア独自の博物館・博物館学のありかたを議論し、欧米が主軸になりがちな博物館研究に新たな切り口をひらく。博物館学に関するこれまでのネットワークを継承しつつ、今後につながる持続的な国際的協力体制を構築しようとするものである。

成果

シンポジウム参加者は、1日目は55名、2日目は49名であり、ディスカッションでは活発な質疑応答が繰り広げられた。発表により、日本をはじめ、タイ、モンゴル、ミャンマー、それぞれの国の歴史的・社会的・文化的背景をもとに発展する博物館・博物館学の活動事例を共有し、各国の経験と知見を分かちあうことができた。JICA博物館学コースによる研修など、民博の20年間にわたる博物館学に関わる国際貢献・人材育成の成果が結実していることが実感できた。また、これまで築いてきた博物館・博物館学のネットワークを継承しつつ、今後へとつながる持続的な国際協力体制がより強固なものにできた。今後の展開としては、シンポジウムの成果を刊行し、これまで発信の少なかったアジアから世界に向けて、博物館の活発な活動の現状と、博物館学の成果を公表していく予定である。

●研究フォーラム

国際フォーラム「日本文化人類学会50周年記念国際研究大会（IUAES2014）におけるパネル（NME パネル兼博物館・文化遺産委員会パネル）「民族学博物館を再想像する Re-imagining Ethnological Museums」でのパネル発表と国立民族学博物館でのコロキウムおよび研究懇談」

2014年5月14日～5月21日 国立民族学博物館

代表者：吉田憲司

2014年5月15日～18日まで開催される日本文化人類学会50周年記念国際研究大会（IUAES2014）において、カナダ・ブリティッシュコロンビア大学人類学博物館長アンソニー・シェルトン氏の参加をおおぎ、同大会でのパネル（NME パネル兼博物館・文化遺産委員会パネル）「民族学博物館を再想像する——多面的な知と接触の場としての博物館に向けての新たなアプローチ Re-imagining Ethnological Museums: New approaches to developing the museum as a place of multi-lateral contacts and knowledge」を実施するとともに、大会後、シェルトン氏を民博に招聘し、研究コロキウム（非公開）を通じて、民族学博物館の新たなあり方を考究する。また、国際大会パネル参加者には、国立新美術館での企画展「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」の合同視察を実施し、博物館と美術館を超えた文化装置の可能性についても共同で考察する。

実施状況

2014年5月15日～18日まで開催された日本文化人類学会50周年記念国際研究大会（IUAES2014）において、カナダ・ブリティッシュコロンビア大学人類学博物館長アンソニー・シェルトン氏の参加をおおぎ、同大会でのパネル（NME パネル兼博物館・文化遺産委員会パネル）「民族学博物館を再想像する——多面的な知と接触の場としての博物館に向けての新たなアプローチ Re-imagining ethnological Museums: New approaches to developing the museum as a place of multi-lateral contacts and knowledge」を実施し、民族学博物館の新たなあり方を考究した。あわせて、大会後、シェルトン氏を民博に招聘し、研究コロキウムを通じて、近年のアートと人類学の接近について、最新の知見を交換した。また、国際大会パネル参加者を対象に、国立新美術館での企画展「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」の合同視察を実施し、博物館と美術館を超えた文化装置の可能性について共同で考察し、将来への指針を得た。

成果

国際大会の場で、民博の存在とその活動をひろく世界に周知し、民族誌展示や民族誌資料情報管理における新たな指針を提示することで、本事業は、今後民博が世界の民族学博物館の動向を主導していく契機となった。また、国際大会パネルでの議論を国立新美術館で開催中の企画展「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」と接合することで、博物館と美術館、人類学・民族学と芸術学・美術史学の区別を超えた、新たなミュージオロジーの構築を進めることができた。さらに、大会後の民博でのコロキウムを通じて、上記の活動の成果を民博館内、ならびに関西地区の関連分野研究者と共有することが可能となった。現在、吉田が編集集中の英文単行書『芸術と人類学 Art and Anthropology』に、パネルおよびコロキウムでの発表論文を所収の予定である。

国際フォーラム「驚異と怪異：想像界の比較研究に向けて」

2014年10月12日～10月13日 国立民族学博物館

代表者：山中由里子

共同研究「驚異譚にみる文化交流の諸相——中東・ヨーロッパを中心に」において、ラテン語で *mirabilia*、アラビア語・ペルシア語で *'ajā'ib* と呼ばれる、辺境・異界・太古の不思議な事物や生き物についての表象を比較し、モチーフ伝播の過程、世界観の相違、文化交流のダイナミズムなどを検討してきた。これまでは中東とヨーロッパという一神教世界の事例を中心に検討してきたが、東アジアにも視野を拡げ、「驚異」に対して「怪異」という概念を対置させ、人間の想像力と表象物の相関関係や、背景にある宗教観・世界像などを比較するためのより大きなプロジェクトに展開させてゆく。本フォーラムは、今後の比較研究の概念的な枠組みを議論するためのもので、参加者は東アジア・中東・ヨーロッパの研究者であり、専門領域も歴史・文学・美術・民俗学・人類学と学際的である。様々な文化圏や時代の驚異・怪異観念を比較することによって、人間の想像界をより多面的に捉えようとするところに本計画の意義がある。

実施状況

これまで共同研究で明らかにしてきた驚異をめぐる中東とヨーロッパの比較心性史を、国際日本文化研究センターの小松和彦氏が牽引してきた妖怪研究や東アジア怪異学会が中心となってきた怪異の研究と対比させ、新たな比較研究の枠組みを検討する会であった。午前は山中がまず今後のプロジェクトの概要を説明し、これまでの驚異研究の紹介をした。小松が怪異研究の今後の方向性について話した。黒川がヨーロッパにおける驚異と超自然の概念について紹介した。午後は、中国と日本の怪異思想、怪異の視覚表象、驚異・怪異の展示について、参加者から事例提供があり、全体討議を行った。

本フォーラムの参加者は、これまで個別に活動してきた上記プロジェクトのコアメンバーで、専門とする地域、時代、学問分野が異なる。通常は交流する機会が少ないこれらの研究者が専門的知識と、それぞれが関わってきた驚異・怪異関係のプロジェクトの成果を共有するプロジェクトを来年度から本格的に立ち上げる予定であり、今回はその妥当性と方向性を探った。外部の研究者や学生の参加もあり、限られた時間で内容の濃い議論が行われた。

成果

中東とヨーロッパを中心とした一神教世界における驚異の心性史を、東アジアの世界観における怪異と比較する枠組みの構築について議論した。将来的に特別展示に成果を結実させることを念頭に、「驚異・怪異のトポグラフィ」(驚異や怪異はどのような場に現れるか)、「異形の造形」(驚異や怪異の言説が視覚化されるプロセス)、「驚異・怪異と身体」(身体観の比較)、「驚異・怪異と自然」(宇宙観の比較)といった概念的軸の抽出を検討した。また、より具体的には、例えば「人魚」あるいは「彗星」といったような東西の共通項となり得る、かつ視覚的にも目を引くモチーフに関する参加者からの事例提供をつのつた。

本フォーラムの参加者は、これまで個別に活動してきた上記プロジェクトのコアメンバーで、専門とする地域、時代、学問分野が異なる。通常は交流する機会が少ないこれらの研究者が専門的知識と、それぞれが関わってきた驚異・怪異関係のプロジェクトの成果を共有する機会となり、特別展示という実践に向けた効果的な議論がなされた。

2015年10月に名古屋大学出版会から論文集を刊行する。ホームページでプログラムを公開した。

国際ワークショップ「人の移動と民族的／地域的共同性の再構築」

2014年12月5日～12月6日 国立民族学博物館

代表者：山田孝子・藤本透子

本国際ワークショップは、グローバル化が進むなかで、ミクロ／ローカルな共同体の維持・展開を可能とする共同性はいかに再構築されるのかを、とくに伝統的・宗教的实践、超域的ネットワーク、リーダーシップ、歴史性・歴史的記憶等に注目しながら、越境や移動を経験する集団の事例研究をもとに、人類学的・歴史学的視点から解明するものである。本館客員教授の山田孝子が研究代表者、助教の藤本が研究分担者として関わる科学研究費補助金基盤研究(B)「多文化空間に生きる越境者の共同性再構築に関する地域間比較研究」(2012～2014年度)、京都大学CIAS共同利用・共同研究プロジェクト「移動と宗教実践——地域社会の動態に関する比較研究」(2013～2014年度、代表：小島敬裕)、民博共同研究(若手)「内陸アジアの宗教復興——体制移行と越境を経験した多文化社会における宗教実践の展開」(2012年度終了、代表：藤本透子)による研究成果の国際的発信であり、地域社会再編に向けての視座を提起する意義がある。

実施状況

2日間にわたり13名の発表者(うち6名は国外から招聘)によって、歴史性、シンボルとアイデンティティ、日常実践、民俗知識、宗教動態、リーダーシップなどに着目した研究発表が行われ、共同性の再構築に関しては活発な議論が交わされた。例えば、カナダの中国系移民のあいだでは歴史の継承活動が世代を超えて共同性を再構築していく重要な活動となっているのに対し、カナダのチベット難民社会においてはチベット人協会などの活動に加えてダライ・ラマの宗教的リーダーシップが共同性再構築に大きな役割を果たしている。また、ムスリムの移民の場合はイスラームが共通して重要な役割を果たすが、ホスト社会との関係において何が共同性の基盤となるかという点では次のような多様性がみられる。タイ北部のムスリムが故地である中国雲南省とのつながりを再構築する一方でタイ国内の他民族のムスリムと連携するのに対し、モンゴルのカザフ社会では国外とイスラームを通して結びつく一方で国内では特定の祝祭がエスニシティの象徴となっている。

こうした事例研究を広く比較検討し、グローバル化が進展するなかでマイノリティがマジョリティに同化するの

ではなく社会的・文化的主張を活発に行い、ミクロレベルで地域社会における共同性を再構築していつているメカニズムが具体的に論じられた。

成果

本国際ワークショップでは、当該社会出身者を含む国内外の研究者が、実地調査に基づいて多文化空間に生きる越境者集団を地域間比較し、人類学的・歴史学的視点、および調査される側と調査する側の視点から、共同性の維持・展開を実証的に解明した。具体的には、しばしば経済のグローバル化に逆行するかたちで地域の独自性や文化的異質性を主張するミクロな共同体が再構築されており、そこでは、1) 多方面におよぶネットワーク形成により移民社会の凝集性の向上とともに他者との共生がみられ、2) 移住後の教育が共同性の再構築に資する力となる、3) 体制移行や移住後に「伝統」がしばしば共同性再構築の核となる、4) 文化接触の際の「文脈化」が共同性を再構築する上で重要な意味をもつ、5) 宗教的・世俗的リーダーシップが共同性の再構築に果たす役割が大きいことなどが明らかとなった。本国際ワークショップの成果は、山田孝子・藤本透子共編の *Migration and the Remaking of Ethnic/Micro-Regional Connectedness* として、SES での出版を申請しているが、本出版企画は、当該社会出身者による論考も含み、内部と外部の視点から、文化的多様性を内包した地域社会における共生の在り方を提起するものとなっている。

公開フォーラム「古代文明の生成過程——エジプトとアンデス」

2015年1月25日 JPタワー ホール&カンファレンス（東京）

代表者：関 雄二

エジプトを専門とする国内の考古学者2名を招聘し、権力生成に関して南米の古代文明と比較する研究フォーラムを古代アメリカ学会の協力を得て行う。開催地は東京（会場は未定）、一般公開を予定している。招聘旅費、およびシンポジウム発表者の国内旅費は、科研費（「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」代表・関 雄二）より支出する。これは、科研費プロジェクトの成果公開の一環であり、アンデス文明における権力生成とその変容を相対化するために、視点を共有したうえで、文明間の比較を行うことを特色とする。こうした広い視野に立ったテーマ設定を行うことで、学問領域の細分化が進み、個別具体性への関心が高まり、普遍化、一般化への試みが顧みられない現代の学問潮流に一石を投じることができると考えられる。

実施状況

公開フォーラム「古代文明の生成過程——エジプトとアンデス」

日時：2015年1月25日 13:00～16:00 [開場 12:30]

会場：JPタワー ホール&カンファレンス ホール1（東京都千代田区丸の内2丁目7番2号 JPタワー4階）
プログラム

13:00～13:05 あいさつ

13:05～13:35 「古代エジプトにおける国家と経済」

河合 望（早稲田大学）

13:35～14:05 「経済から見た古代エジプト初期国家の形成」

高宮 いづみ（近畿大学）

14:05～14:35 「アンデス文明初期の神殿と経済活動——クントゥル・ワシ遺跡の調査成果から」

井口 欣也（埼玉大学）

14:35～15:05 「古代アンデスにおける神殿の登場と権力の発生」

関 雄二（国立民族学博物館）

15:15～16:00 ディスカッション

成果

フォーラムにおいては、まず高宮いづみ氏が、エジプト先王国期において比較的短期間に社会階層や専門化が始まり、特別な副葬品と構造を持つエリート階層の墓が作られたことを指摘した。続く河合 望氏は、古王国におけるピラミッド建設が王の葬祭と関連して登場した点、やがて葬祭への比重が高まり、それを支える組織が誕生した点、王の死後も葬祭が継承されるが、それが故に葬祭に関わるエリート階層の台頭と王の権威の失墜がもたらされた点などを述べた。これに対して、アンデス文明について、まず関 雄二が文明初期における神殿の登場を、意図せざる

結果とする実践論的仮説を提示し、続く井口欣也氏は、文明初期の神殿において、広域拠点からローカル拠点に変貌する過程で、エリート集団の拡大が生じた点を考古学的データから明らかにした。その後、4名によるパネルディスカッションにおいて、エジプトで社会階層と専門家が急激に発展した理由、西アジアとエジプトにおける都市化の違い、王権の成立基盤のイデオロギーがいつ、どのように誕生したのかについて討論を重ねた。この結果、古代エジプトでは、ゴードン・チャイルドらが提唱した唯物史観に比較的近い形で社会が変化していったこと、そしてアンデスにおける文明の成立過程とは全く異なるものであったことが再認識できた。

研究フォーラム「持続可能な IPM に向けて——博物館環境データの分析手法を考える」

2015年2月20日 国立民族学博物館

代表者：園田直子

博物館では、持続可能な IPM（総合的有害生物管理）を目指し、各種の環境調査を行い、その結果をもとに環境を整備する。環境調査のうち生物生息調査と温度・湿度モニタリングは、データ量が膨大となるため、いかに効率的かつ長期的視点で解析できるかが鍵となる。申請者は、人間文化研究機構・連携研究の枠内で、生物生息調査分析システムと、温度・湿度分析システムを開発し、連携機関での活用に供してきた。当該分析システムを活用して得られた知見は、逐次、国内外の学会やシンポジウムで発表、セミナーやワークショップで普及してきており、今後ともこの研究活動を継続する。分析システムを、無償で、必要とする人びとに提供できるよう、パソコン単体で利用できるスモールパッケージを現在開発中であり、完成版ができた時点で、国内外の学会やシンポジウムで広く公開する。

実施状況

本研究フォーラムは、人間文化研究機構・連携研究の研究成果と、文化財保存修復学会の例会という位置づけをあわせもつ。博物館環境分析システム・スモールパッケージ完成版の開発を念頭に、博物館環境データの分析手法について、保存科学者、学芸員、資料管理の担当者がともに議論し、考える場となった。

成果

研究フォーラムでは、博物館環境データの分析手法について、保存科学者、学芸員、資料管理担当者がともに議論し、スモールパッケージ完成版に結びつく多くの貴重な知見が得られた。次の展開としては、これら分析システムを、パソコン単体で利用できるスモールパッケージとして完成させ、保存科学研究の成果を社会還元したいと計画している。完成版は、必要とする人びとが自由に活用できるよう、たとえば研究代表者のホームページからのダウンロードの可能性もふくめ、公開の手法を検討する。

研究フォーラム「東日本大震災等大規模災害に関わる人間文化研究」

2014年3月14日～3月18日 国立民族学博物館

代表者：久保正敏

2015年3月に仙台市で開催される第3回国連防災世界会議期間中に、「世界災害かたりつぎフォーラム」を実施する。これは、TeLL-Net フォーラム実行委員会、人と防災未来センター、名古屋大学減災連携研究センター、東北大学災害科学国際研究所が共同開催を予定しているものである。目的は、大災害を経験した世界各地で様々な災害語り継ぎを展開する組織や団体と、先端的な減災研究に取り組む機関が一堂に会し、よりハイレベルな減災のための効果的な人材育成や手法を検討するものであり、2010年3月に神戸で開催された世界災害語り継ぎフォーラム（実行委員長：林 勲男）を継承するものである。

本フォーラムの開催に合わせ、「東北太平洋沿岸地域の津波災害の経験と教訓を語り継ぐ」をテーマに展示をおこなう。東日本大震災発生後、進めてきた、東北太平洋沿岸部の過去および現在の災害の記録・記憶に関わるデータの収集調査の中間成果をデータベース化して解説のパネルと共に、この展示にて公開する。本フォーラムにあわせて展示開催により、「研究成果公開プログラム」の一環として議論の発展に貢献するものである。

実施状況

2015年3月14日から18日まで仙台市で第3回国連防災世界会議が開催された。その期間中の17日に、パブリック・フォーラムとして「世界災害かたりつぎフォーラム」を実施した。これは、人と防災未来センター、名古屋大学減

災連携研究センター、東北大学災害科学国際研究所そして民博からのメンバーで構成される TeLL-Net フォーラム実行委員会が開催したものである。目的は、大災害を経験した世界各地で様々な災害語り継ぎを展開する組織や団体と、先端的な減災研究に取り組む機関が一堂に会し、よりハイレベルな減災のための効果的な人材育成や手法を検討するものであり、2010年3月に神戸で開催された世界災害語り継ぎフォーラム（実行委員長：林 勲男）を継承するものであった。

フォーラム開催に合わせ、「東北太平洋沿岸地域の津波災害の経験と教訓を語り継ぐ」をテーマに展示をおこなった。東日本大震災発生後に進めてきた、東北太平洋沿岸部の過去および現在の災害の記録・記憶に関わるデータの収集調査の中間成果をデータベース化して、この展示で公開した。展示ブースには約300名の来場者があり、用意したフォーラムの案内チラシ、民博、人と防災未来センターのパンフレットはほとんどなくなった。また、17日のフォーラムには68名の出席者があった。フォーラムは、東日本大震災（2011）、中越地震災害（2004）、インド洋大津波災害（2004）、阪神・淡路大震災（1995）、ハワイ島津波災害（1946、1960）の被災地で展開している語り継ぎ活動の報告を踏まえて、災害経験やそこからの教訓を共有し、活動に先端的な防災・減災研究の成果を融合させ、人材育成や減災活動の方策について議論された。

成果

本展示は、被災地コミュニティやそこに暮らす人びとによる災害経験の語り継ぎや、得た教訓を地域や時代を超えて防災・減災に生かそうという過去および現在の活動についてのデータを提供することで、市民レベルの活動の意義と災害常襲地域におけるリスクとの共生の在り方について、東日本大震災の被災地からの具体的な事例を紹介した。同時に、そうした市民レベルの活動へ着目した民博の調査研究を世界に向けて発信し、人文社会科学の防災・減災研究への貢献の一例を示すことができた。

「阪神・淡路大震災のデジタルアーカイブ」、「TeLL-Net（災害かたりつぎ）フォーラム」および本展示についてまとめ、『減災』（人と防災未来センター発行）にて成果を発表予定。報告書を作成し、TeLL-Net（災害かたりつぎ）のウェブサイトにも掲載予定。

●国際研究集会への派遣

「国際学術大会での研究発表 The 3rd Children's Museum Conference Program, Educational Activities Utilizing Museum Materials: Case Studies of National Museum of Ethnology」———
2014年6月29日～7月2日 韓国国立民俗博物館・子ども博物館（韓国）
呉屋淳子

韓国国立民俗博物館・子ども博物館で開催される第3回子ども博物館学術大会は、博物館の資料とその活用法（教育）に着目し、多様な博物館教育のあり方について議論した。今回、「知識としての文化と実践としての文化——学校と民族学博物館の文化教育の比較」と題して研究発表を行った。本発表は、これまで民族学・文化人類学の研究者が構築した物質文化の展示、みんぱくなどの文化学習教材が、学校教育において果たした役割や機能について再検討した。特に、これまで積極的に議論されてこなかった民博が担う教育的役割やその機能について、日本の学校教育や社会教育における文化教育の実態を踏まえた検討を試みる。さらに、現在取り組んでいる博学連携教員ワークショップの実践から、民博のファシリテーター的な教育活動の可能性についても検討を行った。

実施状況

第3回子ども博物館学術大会において、「博物館の資料を活用した教育活動——国立民族学博物館の事例から」と題して研究発表を行った。本発表では、これまで民族学・文化人類学の研究者が構築した物質文化の展示、みんぱくなどの文化学習教材が、学校教育において果たす役割や機能について検討した。まず、日本の学校教育や社会教育における文化教育の実態について述べた上で、具体的な事例として現在申請者が取り組んでいる中等教育や高等教育での文化教育を提示し、民博の教育活動がもつ可能性について考察した。今後の課題として、大学共同利用機関としての教育活動、つまり大学生や更に広い年齢層を対象とした教育への応用も検討が必要であることを提示した。その結果、以下の2つの点について高い評価を得た。1) 韓国人にとって「民俗」や「民族」という用語は、明確な区別なく曖昧に捉えられてきた。また、韓国には韓国文化を扱った博物館だけであることから、「民族」という用語は、むしろ自民族を指すものとして理解されてきた。民博の事例発表を通して、世界の各地域を扱う博物館の存在を示しただけでなく、韓国の博物館関係者に「民族学」また「人類学」について、従来とは異なる視点を示す契機になった。2) 人類学の研究手法であるフィールドワークの実践が人類学の研究室で学ぶ学生だけでなく、日本

の学校教育でも広くその必要性が求められているという点が非常に興味深かった。

また、海外からの発表者は、アメリカ・Peabody Essex Museumの学芸員、シンガポール文化財庁教育委員の2名が参加した。互いの博物館の活動や多文化教育に関する意見交換などもでき、貴重な研究交流の機会となった。

成果

今回の学術大会への参加者は、博物館教育に関わる韓国の学芸員だけでなく、ICOM韓国委員長やシンガポールアジア文明博物館の教育部長、ピーボディ・エセックス博物館教育部長など海外からの研究者・学芸員らも参加しており、研究発表を通じた国際的な学術交流の機会になった。また、こうした国際的な学術交流を通して、多くの博物館が抱える諸課題についても検討することが可能になった。博物館教育が担う役割や機能について議論を深めることにより、今後の民博における教育活動の可能性を模索する機会に繋がった。

研究発表の成果報告は、韓国国立民俗博物館・子ども博物館ジャーナル「子どもと博物館教育」特集号に論文として掲載した。

「国際学会 International Society for third Sector Research (ISTR) ので研究発表 ミュンスター(ドイツ)」——
2014年7月21日～7月27日 ミュンスター大学(ドイツ)
出口正之

International Society for third Sector Research (ISTR) は米国を本部に約90か国のメンバーからなる、非営利セクターの国際学会である。2年に1度の世界大会が、ミュンスター(ドイツ)で開催される。出口は“Glocalization” of standards; Study from Participant observation on Japan’s Charity Commissionのアブストラクトを提出していたところ、大会委員会より発表許可の連絡を受けた。ISTRは、1991年に設立され、設立後23年を有する国際学会で、2年に1度の世界大会とその間の諸地域での複数の大会(アジア太平洋大会を含む)を交互に開催して、世界大会は今回で11回目となる。出口は同学会の会長を日本人では唯一務め(2006-2007)、実績もある。

また、発表内容も、110年ぶりの日本の公益法人改革における会計・法律についてのグローバルな影響を世界的な視点で分析するものであり、学術的意義が大きい。

実施状況

ドイツのミュンスター大学で開催された、国際学会 International Society for Third Sector Research (ISTR 国際NPO・NGO学会または国際第三セクター研究学会と訳される)に出席。

分科会セッションの Comparative Perspectives on State Regulation and Self-Regulation Policies in the Nonprofit Sector チェア。

及び分科会セッション “Regulation of charities and philanthropic foundations ; Developments in government policy and the regulatory environment”において “Glocalization” of standards; Study from Participant observation on Japan’s Charity Commission の論文発表を行った。

同学会は、世界から550名が参加。144セッションが開催された。非営利研究に関する最新の研究成果の交換を行った。なお、会議そのものは、全てスマートフォンのアプリ対応で、出席者の顔や所属が出席したセッションごとで確認できるものであった。

成果

今回の発表は、粗削りではあるが野心的冒険的な内容であり、この研究を国際学会の場で発表することで、新たな学術の向上に貢献し、さらに議論を展開し、より高度なものへと仕上げる事ができた。また、ISTRは国際的・学際的学会であり、単一ディシプリンの学会では知りえぬ世界の新しい研究の状況を把握することが期待されており、たとえば、イギリスには “Charities Studies” という研究分野が誕生している。こうしたことについての最新の知見を得ることもでき、今後の民博での研究にも生かせるものと考ええる。

発表論文は “Globalization, Glocalization, and Galápagos Syndrome: Public Interest Corporations in Japan” と改題のうえ、*International Journal Nonprofit Law* にアクセプトされた。

アブストラクトについては <https://istr.site-ym.com/?MuensterAbstracts> において公表済みである。

「アジア・オセアニア地域の先史における移住と拡散——言語人類学的・系統地理学的アプローチ」

2014年7月25日～8月2日 ベルン大学（スイス）

菊澤律子

本学会は、言語学、遺伝学、系統学、その他の関連分野の研究者が、アジア・オセアニアにおける先史人類学的研究に関連する成果をもちより、当該地域における人類の移動史や植物の栽培化に関する最新の研究成果を学際的に議論することを目的とする。菊澤は、言語学に基づく太平洋地域の移動史および研究状況の報告を担当すべく、主催者より出席の依頼を受けた。この内容は、菊澤がメンバーとなった共同研究「人類の移動誌——進化的視点から」（2008-2011、代表 印東道子）および代表者を務めた「言語の系統関係を探る——その方法論と歴史学研究における意味」（2009-2012）における成果に密接に関連する。今回の学会での具体的な報告内容はそのうち、①系統樹モデルに基づく伝統的な歴史言語学の手法を広く太平洋の言語に適用し、人の移動経路を割り出す場合の成功例と問題が出た例を具体的に示し、②方法論の理論的側面からみた性質との関わりを論じると同時に、③マクロ的比較研究とミクロ的比較研究の性質の違いについて指摘する予定である。このうち③は、これまで歴史言語学に基づく移動論に欠けていた視点であり、2つの視点を区別することで、今後の言語学における移動史研究をどのように発展・応用させることができるのか、他分野における研究との関連という文脈の中で考察する。

実施状況

予定通り「Migrations and Transfers in Prehistory: Asian and Oceanic Ethnolinguistic Phylogeography（アジア・オセアニア地域の先史における移住と拡散——言語人類学的・系統地理学的アプローチ）」に出席した。これは、言語学、遺伝学、系統論、植物考古学、その他関連分野の研究者が集まり、当該地域における人類の移動史や植物の栽培化に関する最新の研究成果を学際的に議論することを目的とする研究集会である。

菊澤は、1日目に、植物の栽培起源と人の移動に関するセッションで座長を務めるとともに、2日目には、オーストロネシア諸語において、形態統語論的变化を人の移動に結びつけるとどうなるか、という内容で言語学的観点から報告を行った。具体的には、「Variations in Fijian Languages and Their Historical Implications（フィジー語群における変種の存在およびその歴史的示唆）」というタイトルで、まず、フィジーにおける言語の多様性と史的事実の結びつきについて議論し、次に、語群に関する2つの異なる言語系統図を例にとり、①系統樹モデルに基づく伝統的な歴史言語学の手法を適用して人の移動経路を割り出す場合に結論が異なってくる例を具体的に示し、②方法論の理論的側面からみた性質との関わりを論じると同時に、③マクロ的比較研究とミクロ的比較研究の性質の違いについて指摘した。

このうち③は、これまで歴史言語学に基づく移動論に欠けていた視点であり、2つの視点を区別することで、今後の言語学における移動史研究をどのように発展・応用させることができる可能性について述べたが、この点について、他の研究者から非常に肯定的なフィードバックを受けることができた。このほかにも、他分野における方法論や研究成果を聴く機会を得て、今後の言語学における移動史研究をどのように発展・応用させることができるのか、他分野における研究との関連というより広い文脈を視野にいれつつ考察する題材を多く得ることができ、有意義な経験となった。

成果

本学会には、国際的に活躍する移動仮説関係の諸分野の専門家が多数招待されている。それらの研究者による最新の研究成果を聞き、自身の成果に対するフィードバックを得ること、また、その結果をうけたアジア・太平洋の人の移動に関する議論に参加できる機会は他では得難い。したがって期待される成果としては、そのような環境における学術交流を経験することで、申請者が以前より携わってきた言語の系統関係に基づく移動仮説擁立の方法論や理論的に関して他分野の研究手法やその成果を対照させられるようになり、言語学のアプローチに新たな視点を持ちこみ、発展させられることがあげられる。学会主催者によるプロシーディングスに投稿予定。

「国際会議『先史期の移住と移転——アジア・オセアニアの民族言語学的系統地理学』における研究成果発表」

2014年7月27日～7月31日 ベルン大学（スイス）

ピーター・マシウス

近年の民族植物学的、遺伝子学的研究は、栽培種のサトイモの遺伝子学的、地理学的起源を知るための新しいモデルを提示することを可能にした。そして、これまでに言語的なデータに基づき提案されてきたものと関連づけら

れるようになった。民族植物学的、遺伝子学的研究は、また作物の起源と伝播の歴史を探るのにどのような種類の言語学的データが必要であるのかという疑問を提起した。

今回のベルン大学での国際会議の主催者（Himalayan Languages Project）は、全世界から主要な言語学者、人間集団遺伝学者、また関連する領域である古気象学、民族植物学、民族生物学の研究者を招聘する。言語学者として主催者は、オーストロアジアティック、オーストロネシア、そして他の言語グループへ拡大して、植物・動物・人類の間の関係に興味を抱いている。

今回、同会議から研究発表を別紙招聘状のとおり求められたため、下記の題目にて研究成果の発表を行うものである。

Phylogeography, ethnobotany, and linguistics: issues arising from research on the natural and cultural history of taro (*Colocasia esculenta*)

系統地理学、民族植物学、言語学：サトイモ（*Colocasia esculenta*）の自然史・文化史の研究から生じた論点

実施状況

ベルン大学で開催された国際会議、「先史期の移住と移転——アジア・オセアニアの民族言語学的系統地理学」において、『Phylogeography, ethnobotany, and linguistics: issues arising from research on the natural and cultural history of taro, *Colocasia esculenta* (L.) Schott』というタイトルの研究発表を行った。

人類の移動や言語の発達史を研究において、生物学的アプローチおよび言語学的アプローチを援用すること、近年、関心が集まっている。この国際会議には、アジア・太平洋地域の人類の歴史に関心を持つ生物学者と言語学者が参加した。会期中、日本を含むアジア、アメリカ、ヨーロッパからの研究者たちと討論することができた。サトイモに関しておこなった発表は好評で、学会誌に投稿するよう要請された。

発表の中で、植物の栽培化と農業の出現にかかわる植物の分布と変異を解釈するための系統的なアプローチの必要性を強調した。また、作物の起源についての討論に“range limit model”の概念を取り入れることを提案した。このことが、今後の作物の起源、拡散、人口の拡大などの研究において役立てられることを願う。

成果

この学会により、より広範な研究者のネットワークが構築されることが期待される。また、この学会で得られた成果は、学会誌として出版される。ベルン大学の会議主催者は、この会議の報告書を出版する。その報告書に、論文を投稿する。

「第15回国際イエズス会ミッション会議における研究成果発表」

2014年8月25日～8月29日 教皇庁立チリカトリカ大学・サンチアゴ（チリ）

齋藤 晃

- 1) サンチアゴ（チリ）の教皇庁立チリカトリカ大学で開催される第15回国際イエズス会ミッション会議のパネル「Saberes y etnografía de la conversión」（和訳「知識と改宗の民族誌」）において招待講演をおこなう。講演の題目は「La guerra indígena y la expansión misional en Moxos, siglos XVII-XVIII」（和訳「17・18世紀のモホスにおける先住民の戦争とミッションの拡張」）である。この講演は齋藤が代表を務めた本館機関研究「近代ヒスパニック世界における国家・共同体・アイデンティティ——スペイン領アメリカの集住政策の研究」（2011～2013年度）の成果公開の一部である。
- 2) 同会議のシンポジウム「Jesuitas en fronteras: misiones interiores, circulares y periféricas」（和訳「辺境のイエズス会士——域内、巡回、周辺宣教」）において研究報告をおこなう。報告の題目は「Consolidación y reproducción de las parcialidades en las reducciones jesuíticas de Moxos」（和訳「モホスのイエズス会集住区におけるパルシアリダの確立と再生産」）である。この報告も前述の機関研究の成果公開の一部である。なお、齋藤はRodrigo Moreno Jeria氏とともにこのシンポジウムの実行委員長を務める。

実施状況

国際イエズス会ミッション会議は植民地時代のアメリカにおけるカトリック教会の宣教をテーマとする大規模な国際研究集会であり、この会議において機関研究の成果を発信することで、同研究および本館の国際的知名度を高めることができた。機関研究のテーマである集住政策とは、広い範囲に分散する小規模な先住民の集落をヨーロッパ式の大きな町に集中させる政策であり、16世紀から18世紀にかけてスペイン領アメリカの広い地域で実施された。カトリックの修道会はこの政策の主要な推進者であり、とりわけ17世紀以降、メキシコ北部やアマゾン、ラプラタ、

チャコ、チリ南部などの辺境で精力的な活動を展開した。しかし、その重要性にもかかわらず、集住政策の研究蓄積はとばしい。とりわけ、先住民社会への効果については、詳細がほとんどわかっていない。今回の成果公開では、アマゾンの一地方に焦点を当て、集住政策の効果を具体的かつ詳細に解明した。上記1)の招待講演では、宣教師により町に集住させられた先住民が、在来の戦争の枠組みを利用することで集住化の客体から主体へ転身し、他の先住民を自分たちの町に集住させるようになった過程を明らかにした。上記2)の研究報告では、集住化により町に集められた複数の民族集団がいかなる関係を取り結ぶにいたったかを究明した。講演、報告とも、従来ほとんど利用されなかった未刊史料の綿密な検討に基づいて、集住体制下の先住民社会の動態を明らかにした点が高く評価された。また、講演、報告後の意見交換を通じて、あらたな人脈を築けたことも、大きな成果だった。

成果

上記1)の招待講演については、内容を論文にまとめ、スペインの学術雑誌『Boletín Americanista』に寄稿した。この論文は同雑誌の70号に掲載された。上記2)の研究報告については、内容を論文にまとめ、齋藤の編著の一部としてペルーで刊行する予定である。

「MusiCam 2014: International Conference on Visual Ethnomusicology」

(映像民族音楽学国際会議「MusiCam 2014」)

2014年11月3日～11月10日 ヴァリャドリッド大学（スペイン）

寺田吉孝

MusiCamはスペインのヴァリャドリッド大学が2009年に開始した研究プロジェクトであり、民族音楽学研究における映像メディアの役割を総合的に検討することを目的としている。この一環として2014年11月5日～7日に同大学で国際会議が開かれ、1)映像民族音楽学の理論的・方法論的考察、2)音楽とジェンダー、3)ライフヒストリー、4)儀礼の実践の4テーマに沿って約20本の研究発表がおこなわれる。寺田は、第1のテーマに沿って、民博における映像番組制作の実態とその評価・問題点に関する発表をおこなう。

実施状況

この会議の大きな目的の一つは、世界最大の音楽芸能系学会である国際伝統音楽評議会 ICTM の傘下に「映像音響民族音楽学 (audiovisual ethnomusicology)」の研究グループを設立するための議論と具体的な準備をおこなうことであり、参加者はヨーロッパ、ラテンアメリカを中心にして約30名であった。

会議では、主催大学のエンリケ・カマラ教授による趣旨説明とペルーのラウル・ロメロ教授による基調講演のほか、20本の研究発表がおこなわれた。寺田は、会議初日の11月5日に発表をおこない、民博映像番組の製作過程から抽出した問題点を手掛かりにして、映像番組作成のプロセスの再検討を提案した。

成果

映像人類学は人類学の下位分野として一定の評価をすでに得ているが、音楽芸能に対象を絞った映像民族音楽学は、包括的な議論を継続しておこなうための組織化が未だなされておらず、今回の研究グループの立ち上げが実質的に初めての試みとなった。

会議を通して熱心な討論が行われ、映像番組作成の倫理的な側面に関する議論では辛辣な応酬もあった。

7日の会議終了後には、研究グループ設立の準備会合が開かれ、グループの目的や規約の制定などが議論された。また、会議での発表に基づいた論文集の刊行が決定され、寺田を含む4名が編者に指名された。

今回の会議は、ヨーロッパ、ラテンアメリカの民族音楽学における映像メディアの位置づけや研究動向を学ぶ好機となった。今後、民博との連携を念頭におきながら研究者のネットワーク化を進めたい。

館長リーダーシップ経費による事業・調査

研究公演「アリラン峠を越えていく——在日コリアン音楽の今」の開催

本研究公演は、朝鮮半島の民族音楽を継承している二世、三世のアーティストたちによる演奏を紹介することで、苦難を象徴するアリラン峠の向こう側にある「希望」を目指す在日コリアンの現在を表現しようとした。

在日コリアンの音楽はこれまで主にコミュニティ内のイベントにおいて演奏されてきたため広く一般に紹介されていない。本研究公演は、在日コリアンが演奏する音楽を通して、ステレオタイプ化された在日のイメージについ

て再考し、かれらの生活体験や心情をより深く理解してもらうことを目的としていた。高 正子による音楽の歴史的、社会的背景についての的確な解説もあり、この目的はかなりの程度達成されたことが聴衆の演奏に対する反応やアンケートの結果に表れていた。

本公演の成果の一つは、南北の民族音楽を継承するアーティストを一堂に集めることができたことにある。朝鮮半島の南北の分裂は、在日コリアンの音楽実践にも反映され、両者が舞台を共にする機会はこれまでほとんどなかった。特に、公演最後の出演者全員による「アリランメドレー」の演奏は大きな盛り上がりを見せ、強い一体感が生み出された。アーティストたちの、それぞれの異なる演奏スタイルが、一つの歌のなかで個性を失うことなく融合するさまを体験できた。

IUAES 2014（国際人類学民族科学連合・国際研究大会）における「アイヌ古式舞踊」研究公演の実施

日本文化人類学会50周年記念事業として千葉幕張メッセで開催されたIUAES 2014大会において、アイヌ古式舞踊の研究公演と、晩餐会（バンケット）での公演をおこなった。

研究公演は、アイヌ民族の歴史と文化の概要、アイヌ音楽の現状と研究状況を解説した後、踊りの実演をおこなった。参加者はみな熱心に視聴し、質問も多かった。

バンケットでは、司会者からの短い解説を添え、晩餐会に合ったエンターテインメント性の高い演目も加えた。舞台周りに人だかりができ、大変盛り上がった。

いずれも終了後に多くの賛辞をいただき、目的とおりに日本の先住民であるアイヌ民族の文化の一端を紹介するとともに、本館がこうした事業を企画・支援していることも知っていただけたと思う。

研究公演「じゃんがら念仏踊りみんぱく公演」

本館では、東日本大震災以降、被災地の有形・無形の民俗文化財への支援を継続している。このなかで無形の民俗文化財は、被災地の芸能を本館で演じる「場」を創出し、その再開の契機とする活動をおこなっている。2012年度は笹崎鹿踊り、鵜鳥神楽、南部藩壽松院年行事支配太神楽、2013年度は、雄勝法印神楽を招聘し、公演した。今年度もこの支援活動を継承し、福島県いわき市のじゃんがら念仏踊りの公演をおこなった。

事前申込348名、当日参加27名の計375名の参加が有り、盛会裡に終えることができた。

なお、日高真吾とともに出演者の遠藤 諭氏、企画協力者でもある追手門学院大学の橋本裕之氏と3人でおこなった公開座談会については、特に、遠藤氏の言葉に会場全体が聞き入るという場面がみられ、これまでにない研究公演となった。

さらに、休憩時間及び講演終了後にホワイエでおこなった鉦や太鼓の展示を通した演者と来館者との交流会は、予想以上の盛り上がりを見せ大きな反響があった。このなかで座談会の内容については、テープ起こしをして『季刊民族学』に掲載することとなった。

「アイヌの文化」展示新構築のための資料収集

本事業では、2015年度の新構築のために必要な資料として、アイヌの工芸家による現代の作品、およびアイヌの権利回復運動や文化継承活動に関する資料等を購入した。

現代の作品は、出身地や世代、作風や活動内容が異なる工芸家12名から新規制作をふくむ20点を収集した。その中には、近年、経済産業省から北海道初の伝統的工芸品に指定された平取町二風谷のイタ（木盆）やアットウシ（樹皮製織物）のように伝統的なものから、カナダ国立美術館で開催された世界の先住民の現代アート展に選ばれた作家による新しい作風の木彫や、樺太アイヌの弦楽器を用いてバンド活動を続けるアーティストが自作したエレキ・トンコリ（五弦琴）まで、アイヌ文化の現代の状況とそれを担う人びとのアイデンティティを示すにふさわしい作品などが収集できた。

また、アイヌ民族復興運動の指導的存在で、戦前から阿寒の観光業に携わった山本多助氏（1904-1993）と子息・文利氏が収集した儀礼具や日用品、観光みやげなど370点あまりを購入し（ほか、部品など約250点は寄贈）、アイヌ民族の近現代の歴史を物語る資料として活用する計画である。

国立民族学博物館創設40周年・特別展「イメージの力」の新規広報展開について

特別展「イメージの力」を盛り上げ、来館者数増加を図るため新規に広報展開した。具体的には、1) 地域住民をターゲットにした、大阪モノレールの車内吊り広告の長期掲出、北摂地域対象のリビング新聞への広告掲出、2) 若年層をターゲットにした、大学の書店や大阪の大型書店での葉配付、芸術や音楽等に関心のある層に向けたトークイベントの開催、ウェブ掲載に強みのあるプレスリリース配信サービスの利用である。特にトークイベントは、全

3回で457名の参加者を集め、アンケートからは、20～30代の若い層を誘引するとともに、このイベントをきっかけとして特別展にも興味をもってもらうことに成功したことがうかがえる。

伝統芸能パンソリによる韓国文化の理解

研究公演は、2009年に引き続き、韓国の伝統芸能パンソリの舞台公演およびワークショップを通して韓国文化の理解を図ろうとした。舞台公演では、パンソリの古典演目の中から『水宮歌』を取り上げた。パンソリはひとつの物語を完唱するのに数時間を要し、通しで演奏されることはなかなかなく、一人語りを基本としながらも、現在ではオペラ形式で演奏されるなど多様化している。今回の公演では、様々な演奏形態を取り入れながら、南海星先生とその弟子たちの歌声による『水宮歌』のストーリー全体を楽しむことのできる公演を開催した。字幕を映写することで、ストーリー全体を鑑賞してもらい、ソリ（唄）だけでなく、物語の魅力も伝えることができた。ワークショップでは、南先生とその弟子たちによる実演を通して、「口伝」を伝承形態の基本とするパンソリが実際どのような形で師匠から弟子に伝えられるのかをご覧いただき、たんなる公演では知りえないパンソリの世界を体験してもらい、参加者に「本物を実際に」体験学習していただいた。

なお、701名の事前申込があり、当日は495名の参加者があるなど盛会裡に終えることが出来た。

南アジア展示及び東南アジア展示のパノラマ映像による記録

資料収集・整理等専門部会の機関プロジェクト「展示記録映像のあり方に関する実践的研究」によって示された指針に基づき、南アジア展示及び東南アジア展示をパノラマツアー形式により記録するとともに、既に作成していた中国地域の文化及び、朝鮮半島の文化の展示記録を、この指針に沿うよう改訂した。この事業により、展示場やWebでの公開を視野に入れ、インターフェイスの統一された展示記録のパノラマの映像を作成することができた。さらに、パノラマ映像を展示に関する各種情報にアクセスするためのプラットフォームとして活用するための基礎を築くことが出来た。

モンゴル秋祭り「モンゴル・ナマリン・バヤル」

モンゴル国はこれまで東京でモンゴル春祭りを実施し、2013年より、在大阪総領事が元モンゴル国文部副大臣であったことから、総領事の肝いりで、大阪でもモンゴル秋祭りを開催することとなり、会場として現代モンゴルの研究中心である本館に白羽の矢が立てられた。関西在住のモンゴル国および中国内モンゴルなどの留学生が集合するとともに、民間活動としてモンゴルとの交流を行っている諸NPO団体も積極的に企画参加し、一般来場者に広くよびかけておこなわれた。

当日は、台風接近のため、予定していた一部の行事および全体の一般公開は、当日午前の時点で中止することとなったが、事前の広報および当日の行事の一部は、つつがなく執り行った。中止にしたのは、エントランスにおける本館所蔵のゲルの象徴展示と、講堂地下におけるNPO諸団体の告知活動の2点である。残りの計画であった、講堂における開会式、現代モンゴルを代表する演劇的公演については、一般公開はせず執り行い、写真と映像で記録した。

以上で得た写真と映像は、適切な形式を検討したうえで、一般に閲覧できるものにすることを展望している。

東日本大震災等大規模災害に関わる人間文化研究

本研究では、「被災した有形・無形の文化遺産の保護活動」と「災害の記録・記憶の継承」、「災害時における大学間の連携体制の構築」を研究の柱として展開した。「被災した有形・無形の文化遺産の保護活動」では、実際に被災した文化財が保管されている一時保管場所の環境モニタリングとその結果に基づいた環境整備の提言と実践をおこなうとともに、塩分劣化を起こしている被災文化財の具体的な処理方法についても技術開発をおこなった。次に無形の文化遺産の保護活動では、本館などの施設を利用し、被災地の芸能の公演を企画し、芸能をおこなう場の創出とそれに伴う地域活性の状況について検証をおこない、みんぱく公演「じゃんがら念仏踊り」の実施へとつなげた。「災害の記録・記憶の継承」では、三陸沿岸の津波碑等のデータベースを作成し、今後の備えとしてこれらがどのように役に立つのかについて検証し、次年度以降の本格運用に向けた準備をおこなった。「災害時における大学間の連携体制の構築」では、大学機関を中心に設置が急速に進んでいる資料ネットワークとの連携を目指し、災害時における協力関係の構築を目指した打ち合わせを重ねてきた。以上の結果、人間文化研究機構基幹研究「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」の準備に向けた体制を作ることができた。

南アフリカの過去と現在——ネルソン・マンデラから続く道——

南アフリカ共和国は、サハラ以南アフリカのGNPの3分の2を占める大国であるにもかかわらず、これまでアパルトヘイト（人種隔離政策）があまりにも注目されたために、庶民の暮らしの現実が紹介されることはあまりなかった。また、アパルトヘイトの崩壊後にどのように地域社会が変わったのかについても詳しい研究はみられない。本企画では、モハウ・ペコ南アフリカ共和国大使による基調講演ならびに、ジョゼ・A・プビン・デ・オリベイラ国連大学研究員及び北川勝彦関西大学教授の講演を中心として、環境経済学、歴史学（経済史）、民族学（環境人類学）の研究者がそれぞれ南アフリカの都市の過去と現在を、一般の来館者を対象にして、わかりやすく論じることができた。その結果、貧困や犯罪の温床などの都市イメージとし異なる南アフリカの都市の本当の姿を伝えることができたと思われる。今回の企画は、南アフリカの事例に焦点を当てたものであるが、これらを通じて、21世紀における大都市での「持続可能な生き方」や「持続可能な資源利用のあり方」を考えるためのヒントが与えられることになった。

大元神楽上演——

2014年12月21日に、総合研究大学院大学（以下「総研大」）文化科学研究科の事業の一つである学術交流フォーラムの一環として、鳥根県江津市の市山神友会のメンバーを招聘して、そこに伝わる伝統の大元神楽の上演を本館講堂で行った。観客には学術交流フォーラム参加者（総研大の学生と教職員）だけでなく、一般の来館者も加わり、計287名が入場しており、上演は盛会裡に終わった。その上演には単に注目を集める催し物を実施するというのではなく、研究対象とする文化を持つ人々との関係構築といった研究遂行上必要不可欠な手続きを身につけさせるという教育上の効果と、後継者不足や災害対応など日本の伝統芸能団体が抱える諸問題に対する考察を深めるなどの研究上の効果も期待されていた。学生が主体となってこの事業を盛会裡に実施することによって、それらの点でも十分に成果を上げることができた。

（その他館の運営などに関するもの4件）

民博研究懇談会

第258回 2014年6月18日

丸川雄三 「連想検索技術を用いた身装画像デジタルアーカイブの発信研究」

第259回 2014年7月23日

ピーター J. マシウス 「サトイモの起源をたどる——自然界の文化をもとめて」

第260回 2014年9月24日

伊藤敦規 「所蔵博物館とソースコミュニティにとっての資料熟覧」

第261回 2014年10月29日

吉岡 乾 「何が格を決めるのか——動詞的要素と名詞的要素」

第262回 2014年12月10日

豊山亜希 「植民地インドにおける日本製マジョリカタイルの受容——公衆衛生、消費、アイデンティティ表象」

第263回 2015年1月14日

松尾瑞穂 「インドにおける生殖医療技術の文化論」

第264回 2015年2月25日

ユーセフ・カンジョウ 「シリアの文化遺産と紛争——国の文化遺産保護のため、シリア人にできること」

2-2 外部資金による研究

科学研究費補助金による研究プロジェクト

2014年度科学研究費補助金 採択課題一覧

区分	種目	研究課題	研究代表者	研究年度
	新学術領域研究 (研究領域提案型)	植民地時代から現代の中南米の先住民文化	鈴木 紀	2014 ～2018
	基盤研究 (A) 海外	熱帯の牧畜における生産と流通に関する政治生態学的研究	池谷和信	2014 ～2017
	基盤研究 (B) 一般	ミュージアムと研究機関の協働による制作者情報の統合	丸川雄三	2014 ～2016
	基盤研究 (B) 海外	台湾原住民族の分類とアイデンティティの可変性に関する人類学的研究	野林厚志	2014 ～2017
	基盤研究 (B) 海外	北方寒冷地域における織布技術と布の機能	佐々木史郎	2014 ～2016
	基盤研究 (B) 特設分野研究	多世代共生「エイジ・フレンドリー・コミュニティ」構想と実践の国際共同研究	鈴木七美	2014 ～2016
	基盤研究 (C) 一般	インド災害後のローカル文化再編におけるコミュニティ資源としての「手工芸」の意義	金谷美和	2014 ～2017
	基盤研究 (C) 一般	現代インドにおける染織技術の戦略的継承法に関する民族芸術学的研究	上羽陽子	2014 ～2017
	基盤研究 (C) 一般	現代イタリア社会におけるローカリティに関する文化人類学的研究	宇田川妙子	2014 ～2017
新	若手研究 (A)	日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究	伊藤敦規	2014 ～2017
	若手研究 (B)	現代ブータンの多元的宗教空間における仏教と屠畜に関する政治人類学的研究	宮本万里	2014 ～2017
	若手研究 (B)	『千一夜物語』 仏語訳者マルドリュス再考——<遺贈コレクション>の分析を中心に	岡本尚子	2014 ～2016
規	若手研究 (B)	オーストラリア多文化主義下の先住民とスーダン難民の緊張関係をめぐる人類学的研究	栗田梨津子	2014 ～2016
	若手研究 (B)	境界領域における民俗芸能の教授・創生に関する研究——奄美諸島の高等学校を中心に	呉屋淳子	2014 ～2016
	若手研究 (B)	植民地インドにおける商業カーストの邸宅建築に関する基礎的研究	豊山亜希	2014 ～2016
	挑戦的萌芽研究	人類学におけるフォト・エスノグラフィーの手法の探求	岩谷洋史	2014 ～2015
	研究活動スタート 支援	中国石窟芸術技法・材料の解明による美術史観再考——麦積山石窟を事例として	末森 薫	2014 ～2015
	研究活動スタート 支援	ジャマイカ、スキン・ブリーチングが刷新する黒人性に関する文化人類学的研究	神本秀爾	2014 ～2015
	研究成果公開促進費 (学術図書)	薬剤と健康保険の人類学	浜田明範	2014 ～2014
	研究成果公開促進費 (学術図書)	神霊を生きること、その世界	竹村嘉晃	2014 ～2014
	研究成果公開促進費 (学術図書)	Oral Chronicles of the Boorana in Southern Ethiopia	大場千景	2014 ～2015
	特別研究員奨励費	社会的なるものの生態学——イタリアの社会協同組合を軸とした統治と連帯の人類学的研究	松嶋 健	2014 ～2016
	特別研究員奨励費	宗教と公共性をめぐる人類学的研究——現代中国におけるイスラーム復興運動の事例から	奈良雅史	2014 ～2016
	特別研究員奨励費	現代ロシアにおける新異教主義——歴史認識、マイノリティ性、地位向上運動に注目して	藤原潤子	2014 ～2017

継	特別研究員奨励費	紀元後5世紀イロパング火山噴火前後のメソアメリカ太平洋沿岸部の生業と社会の研究	市川 彰	2013 ～2015
	特別研究員奨励費	社会空間の動態と行為の演劇性をめぐる人類学的研究： ポリネシアにおける贈与の全体性	比嘉夏子	2013 ～2015
統	特別研究員奨励費	近現代インドにおけるヒンドゥー寺院運営の意義 ——商業集団マールワリーを事例として	田中鉄也	2013 ～2014
	特別研究員奨励費	内モンゴルにおけるシャマニズムと民間医療に関する文化人類学的研究	鈴木七美 Caijilahu	2012 ～2014

【新規】

新学術領域研究（研究領域提案型）

植民地時代から現代の中南米の先住民文化

代表者 鈴木 紀

目的・内容

本研究の目的は、アメリカ大陸の先スペイン期に栄えたメソアメリカ文明とアンデス文明が、植民地時代から現代まで、中南米諸国の先住民文化に及ぼした影響を検証することである。資源人類学の「文化の資源化」という概念を援用し、いかに両文明が資源化され、先住民文化が形成されてきたかを、植民地時代と現代との通時的な比較、メソアメリカ地域・アンデス地域・周辺地域との共時的な比較、および資源化の主体が先住民族であるか非先住民族であるかの比較を通じて明らかにしていく。

こうして古代アメリカ文明を、後世の人々がどのように理解し、文化的アイデンティティの構築、政治的統合の象徴、経済的な富の源泉等として活用してきたかを探究する。またこの作業を通じて、これまでの古代アメリカ文明に関する考古学的な研究では十分に検討されてこなかった文明の終焉という概念について、衰退／継続／復興という多様な可能性を考慮しながら理論化を試みる。

活動報告

10月に国立民族学博物館で研究会を開催し、分担者の研究計画と進捗状況を確認した。各分担者の調査概要は次の通り。鈴木は、メキシコ国立人類学博物館、マヤ世界大博物館、グアテマラ国立考古学民族学博物館、イシュチュエル先住民族衣裳博物館等にて展示内容を調査し、先スペイン時代の文明と現在の先住民族文化の関連性がいかに表象されているかを分析した。

井上幸孝、杓谷茂樹、禪野美穂、小林貴徳はメキシコで調査を行った。井上は、クロニカ（年代記）およびクロニカ研究資料を収集し、その読解・分析に着手した。またメキシコ市の先スペイン期関係の史跡を訪問して、その現状把握に努めた。杓谷は、ユカタン州のチチェン・イツァ遺跡公園で地元露店商の不法侵入問題の現状を観察し、行政担当者へのインタビューを実施した。禪野は、メキシコ市および近郊の「旧先住民村落」に関する文献研究と並行して、メキシコ市南西部で、復元されたピラミッドの管理、利用方法を調査した。小林は、観光開発・経済推進事業に関連した文献調査、および現地での予備調査を実施し、「神秘的集落」の認定を受けた3箇所（プエブラ州 Cholula等）を次年度以降の調査地として選定した。

本谷裕子は、米国東海岸の博物館（ペンシルヴァニア大学と国立アメリカ先住民博物館）にて、19世紀末から20世紀初頭にかけてのグアテマラ・マヤ先住民族女性の衣裳の変遷を観察・記録し、既存の研究データと比較した。

工藤由美は、チリの先住民族マプーチェに関する文献資料を基に研究を進めた。国内の図書館収蔵文献と、チリ国立図書館収蔵の文献を中心に整理し、次年度に現地調査を行うためのリスト等を作成した。

藤掛洋子は、パラグアイにて、現地の文化人類学者、言語学者、メディア関係者への聞き取り調査ならびに農村部における調査を実施し、グアラニー文化に対し「憎しみと愛」が混在することが明らかにした。

基盤研究（A）海外

熱帯の牧畜における生産と流通に関する政治生態学的研究

代表者 池谷和信

目的・内容

21世紀に入り、世界の家畜をめぐる環境が大きく変化をしている。鳥や豚のインフルエンザ、牛や豚の口蹄疫など家畜の介在する感染症が、世界中を自由に行き来できるグローバル化の影響を受けて目立つようになってきた。その一方で、地球の人口は70億人を超えて主として途上国では都市化がますます進む現在、人びとの食糧供給源としての肉や乳などの家畜資源の重要性が増加している。そして、これら家畜生産の増大や流通量の拡大が進行中で

あるのが世界の熱帯地域である。ここでは、家畜の餌となる植物資源が豊かであり、未利用の土地や豊富な労働力が存在する。本研究では、三大陸の湿潤熱帯地域における牧畜に焦点を当てて、そこでの牧畜生産からみた土地利用の実態および家畜の流通を政治生態学的に把握することを目的とする。

活動報告

本年度は、世界の熱帯地域のなかでモンスーンアジア地域に焦点を当てて、牧畜の生産および流通の実態を把握する研究が進展した。具体的な調査地域は、ラオス、タイ、ミャンマー、バングラデシュ、インド、ネパール、日本・南西諸島などであり、研究対象とする家畜は、地域によって異なるが、水牛、牛、豚、羊、ガヤル、馬、蜜蜂などの家畜が挙げられる。

メンバー各自の研究を個別にみても、家畜生産の面では、日帰り放牧の状況、それに関わる飼料基盤の季節変動の動向、刈り跡放牧の実態などが個々の家畜に応じて明らかになった。また、家畜の流通面では、家畜仲買人の活動、家畜の売買をめぐる市場の状況など、国内の家畜の移動のみならず国境を越えた家畜の流通の展開過程が新たに把握された。例えば、バングラデシュ国内の豚の流通をみると、国の北部に位置する豚市場の役割が大きいですが、市場とは関係なく豚肉が首都ダッカに運ばれる量も増えてきている。

現時点では、モンスーンアジア内のおおのこの調査地に対応して牧畜の現状や動態が把握されてきたが、各地域の事例を比較することを通して牧畜の一般的性質を把握する試みはあまり進行していない。今回の研究事例が、各地域の地域性を把握するための基礎資料になると同時に、多くの地域共通性を見いだすことができるものと推察している。

基盤研究 (B) 一般

ミュージアムと研究機関の協働による制作者情報の統合

代表者 丸川雄三

目的・内容

本研究は、文化財における制作者情報を対象に、これまでばらばらであった専門機関内の情報源をひとつにまとめて発信する「制作者情報統合データベース」の実現を目的とするものである。情報源として国立西洋美術館と東京国立近代美術館よりデータベースと目録・展示・図録資料を、東京文化財研究所より作家年鑑・論文・文書などの美術研究資料を集める。これらの資料をデジタル化技術とデータベースの連携技術、さらには国立情報学研究所が開発する横断的連想検索技術により集約・共有するとともに、専門的な知見をふまえた情報の分析と統合を実施する。研究成果は統合データベースとして発信し、全体的な有効性の確認として、我が国における代表的な文化財情報発信ウェブサイトである「文化遺産オンライン」との連携実証を行う。

活動報告

2014年度の研究成果は以下の通りである。

- 1) 制作者情報について、国立西洋美術館の収蔵品データベースから446件、東京国立近代美術館の収蔵品データベースから2,200件の作家情報を抽出した。また、東京文化財研究所の美術研究資料として、講談社『近代日本美術事典』に収録されている1,252件の作家解説情報を収集するとともに、同研究所が戦前から行っている制作者へのアンケート調査原簿（作家調査）1,200件のデジタル化およびメタデータ付与を行い、一次情報資源としての活用方法を検討した。
- 2) 情報基盤について、各機関で抽出、作成した作家情報を元にデータベース項目の検討を行い、データベースのプロトタイプを構築した。さらに制作者情報を試験的に登録し、情報検索や分析が可能な統合データベースとしての有効性を確認した。また、美術文献検索「アート・ディスカバリー」や、欧州のアーカイブズポータル「ヨーロッパアナ」の動向を調査し、文化遺産オンラインおよび海外の美術情報サービスとの連携に必要な要件について検討を行った。

基盤研究 (B) 海外

台湾原住民族の分類とアイデンティティの可変性に関する人類学的研究

代表者 野林厚志

目的・内容

本研究の目的は、台湾のオーストロネシア系先住諸民族（「原住民族」）の制度的民族分類下で形成されてきたエスニシティの動態を個人ならびに集団のレベルで観察、分析し、民族への帰属意識と集団のエスニシティとの関係に関する人類学的モデルを構想することである。具体的には、1) 社会関係（親族関係、コミュニティ関係）、2) 言語（ヴァナキュラー、公用語、交渉語）、3) 物質文化、4) 文化実践（儀礼、年中行事、社交活動）、5) 生業（生計、

経済活動）を分析の対象とし、個人の意識と帰属集団のエスニシティとの間に存在する共通性とずれを現地調査ならびに歴史資料の渉猟を通して明らかにする。その上で、公的な民族認定が個人やコミュニティをこえながらエスニシティを規定する作用と、個人やコミュニティが主体となりエスニシティを公的に実体化させていく反作用が交錯する中で民族集団が社会の中で位置づけられていく過程を明らかにする。

活動報告

当該年度は当初の研究計画にしたがい、1) 研究課題全体の枠組を確立するための予備調査を代表者ならびに分担者が実施、2) 研究課題の内容に精通している現地の研究機関の担当者、現地台湾の研究者、日本および台湾以外の研究者と研究情報の交換を行った。

1) については野林（代表者）が民族集団内のサブエスニシティの形成と物質文化との関係についてパイワン族ならびにタイアル族社会を事例とする調査を、宮岡真央子（分担者）が民族集団の分裂とエスニシティの再構成における政治資源と文化資源の位置づけについてツォウ族社会を事例とする調査を、松岡 格（分担者）が個人とエスニシティとの関係を探究するうえで基礎となる家系や家に対する認識の基礎データをパイワン族を対象に、森口恒一が言語現象の変化とエスニシティの動態との相関について、タオ族と隣接する外部集団、ならびにブヌン族を事例とする調査を、笠原政治は社会関係の変化とエスニシティとの関係の基礎資料の状況調査を国内の大学、研究機関等に所蔵されている資料を対象に実施した。

2) については、野林、宮岡、森口、笠原が国立政治大学で開催された国際研究集会に参加し、成果の発表を行うと同時に、現地ならびに海外からの研究者の研究報告について議論を行い最新の研究成果と研究動向の把握を行った。また、行政院原住民族委員会担当者、国立政治大学、国立台湾史前文化博物館の研究者とも懇談し研究計画全体についての説明と現地調査における留意事項等の把握を行った。また、野林、松岡は中央研究院民族学研究所で開催された国際研究集会に参加し、成果の発表を行うと同時に、現地ならびに海外からの研究者の研究報告について議論を行い最新の研究成果と研究動向の把握を行った。同時に同研究院民族学研究所ならびに歴史語言研究所の研究者と研究情報の交換を行った。

基盤研究（B）海外

北方寒冷地域における織布技術と布の機能

代表者 佐々木史郎

目的・内容

当研究の目的は、北方寒冷地域における繊維素材、そこから作られる織物（布）、素材と織物を製作するための道具（製糸用具と織機）と技術を、比較民族学と生態人類学を組み合わせた観点から分析することにある。研究対象とする北方寒冷地域としては、北海道、サハリン、極東ロシア、シベリアを想定している。これらの地域は冬に零下数十度の低温となるため、防寒性能が高い毛皮やなめし皮などの動物素材の衣服が一般的だが、比較的南の地域では繊維素材の布の服も使われ、独自の布も作られる。その典型がアイヌのアットゥシである。本研究では布素材の使用と製作の北限を明らかにするとともに、寒冷地における独自の繊維と布の衣服の性質と性能を動物の皮革や魚皮との比較から明らかにして、人間文化の寒冷地への適応過程の一端を明らかにしたい。

活動報告

- ・ 2014年4月10日 第1回の全体会議を開催し、連携研究者全員に本プロジェクトの目的と意義と本年度の計画を説明した。
- ・ 6月23日～30日 研究代表者（佐々木）、連携研究者（吉本 忍）がロシア、サンクトペテルブルクにあるロシア民族学博物館と人類学民族学博物館において、ブリヤート、ハンティ、タタール、アイヌの織機と自然繊維の織物、木綿製の衣服の調査を行った。
- ・ 7月13日～17日 研究代表者（佐々木）、連携研究者（吉本、日高真吾）が札幌、静内、千歳の博物館でアイヌの古い衣服と出土した擦文文化期の繊維断片に関する調査を行った。
- ・ 7月29日～8月1日 連携研究者（吉本、日高、齋藤玲子）が旭川、釧路、札幌の博物館でアイヌの古い衣装の調査を行った。
- ・ 8月3日～17日 研究代表者（佐々木）がロシア連邦ブリヤート共和国において、ブリヤートと古儀式派の織機と織物の調査を行った。
- ・ 9月17日～23日 連携研究者（齋藤）が阿寒でアットゥシと織機、テトラペの調査を行った。
- ・ 10月14日 第2回目の全体会議を開催し、2014年度前半の活動を報告した。
- ・ 11月15日～18日 研究代表者（佐々木）、連携研究者（吉本、日高）が函館、札幌、釧路の博物館においてアイヌの古い衣装とオホーツク文化期の繊維断片に関する調査を行った。

- ・2015年1月19日～21日 連携研究者（吉本）が札幌、白老でアイヌの古い衣装に関する調査を行った。
- ・2月23日第3回全体会議を行い、今年度の調査報告を行った。

以上の調査と研究会の実施により、まず、アイヌの衣装について、ロシアの博物館が所蔵するものと釧路の博物館が所蔵するものが同じ北海道虻田町近辺で作られたものであることが判明した。擦文文化期の道東の布の断片の調査から、擦文文化期末には現在よりも高度な織布技術があったこと、オホーツク文化期の千島列島出土の布の断片から、アイヌ以外の北方民族でも織布技術を持っていたことが判明した。

基盤研究（B）特設分野研究

多世代共生「エイジ・フレンドリー・コミュニティ」構想と実践の国際共同研究

代表者 鈴木七美

目的・内容

急速な高齢化を遂げつつある現代社会において、高齢者ケアの財源を始めとして多くの問題が提示されてきた。特に高齢期特有の緊急の課題は、1) 高齢化の過程は全ての人々に関わるが、健康・生活における支援の必要性は多様であること、2) 様々なニーズに対応するには、「施設か在宅か」という体制では十分ではなく、様々な選択肢の中から高齢者が生活の拠点を選び、必要に応じて容易に変更可能なこと、3) 高齢期に至って移動や変動という「異文化体験」に晒される高齢者の活動を支えて力を引き出すことや、多様な分野の人々のネットワーク形成と連携を構築すること、である。

幾度となく環境の変化を経験し、多様なニーズをもつ高齢者が安心して充実して暮らすことができる場という観点から、多世代共生「エイジ・フレンドリー・コミュニティ」創出に向けた構想と実践の国際比較を、領域横断型国際共同研究により推進する。

活動報告

1) 「エイジ・フレンドリー・コミュニティ」に関わる現地調査、資料整理

2013年度までに実施してきた、高齢者ケア拠点等での予備調査と現場実践者との共同研究体制の整備をもとにして、高齢者とケア者との生活の課題に関し、情報収集や資料整理を進めた。また、米国において、国際共同研究者3名とと研究の進展について検討し、米国の地方都市を拠点として進められてきたエイジ・フレンドリー・コミュニティ活動について、現地共同調査を行った。

2) 研究課題の共有と発信——研究集会の開催

「エイジ・フレンドリー・コミュニティ」研究の現況と本研究の意義を議論する目的で、国際人類学民族科学連合会議（IUAES2014）にて、国際パネル「『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』構想と実践の比較研究」（エイジング・高齢者委員会／国立民族学博物館指定パネル 於幕張メッセ）を開催、発表した。また、パネルに参加し発表した研究者、コメンテータとともに、さらなる研究協力関係の充実と研究計画に向けて議論を深めた。

3) 研究課題の共有と発信——国際学会

近年「エイジ・フレンドリー・コミュニティ」に関する研究・実践が蓄積されてきた米国において、アメリカ老年学会、アメリカ人類学会で情報収集した。さらにアメリカエイジング学会でシンポジストとして、日本のエイジ・フレンドリー・コミュニティに関する研究成果を発信し議論を深めた。

4) 研究課題の共有と発信——論文集等の企画

本年度の成果を含めた内容を、学会誌および書籍にて発表した。また、2) 3) の成果を共有するために、英文論文発表の企画に着手した。

5) 研究課題の共有と発信——ホームページ・リポジトリ等の活用

国立民族学博物館を拠点として、本研究の経過を広く発信する準備を進めた。

基盤研究（C）一般

インド災害後のローカル文化再編におけるコミュニティ資源としての「手工芸」の意義

代表者 金谷美和

目的・内容

本研究の目的は、インド、グジャラート州カッチ地方において、2001年の地震で甚大な被害を受けた更紗の生産者たちが、危機的状況にあった生業を復興・維持するために新村を建設途上であるという事例を対象にして、「手工芸」をコミュニティ資源として、ローカル文化の再編を行っている過程を明らかにすることである。新村建設を契機として、在来の染色技術やデザインが再編され、カッチ地方全域に散らばっていた染色業の拠点が「産地」として統合されていく経緯を示すとともに、在来技術による染色品生産が「手工芸」という概念と領域に包含されてい

くこと、「手工芸」がグローバルに通用する記号となって、国内外の災害支援を引き寄せ、支援のネットワークをつくりあげることによって新村建設の推進力となったことを示す。

活動報告

本研究の目的は、2001年に発生したインド西部地震で甚大な被害をうけ、生業を復興するために新村を建設途上の更紗（染色品の一種）の生産者たちが、「手工芸」をコミュニティ資源として、ローカル文化の再編を行っている過程を明らかにするというものである。2014年度は、9月に13日間、2月に23日間、インドにおいて現地調査を行った。そして、次のことを明らかにした。

- 1) 移住状況について生産者組合代表者にインタビューした。また、新村においてすでに移住している100世帯全戸の世帯調査を行った。それにより、新村への移住状況と、染色業の復興程度を明らかにするための基礎的データを得ることができた。
- 2) 被災した旧村において、生産者にインタビューを行った。また、プジ市役所において、産業用の井戸水利用に関して担当者から情報収集した。それにより、染色業復興の障害となっている地下水位の低下の進行程度について明らかにすることができた。
- 3) 新村において、地下水位の低下を克服するための染色排水の浄化システムの設置が計画されている。組合と支援NGOの双方から聞き取りを行うことによって、浄化システムについて情報を収集した。
- 4) 現地社会において「手工芸」生産者の支援をおこなっているNGOのシンポジウムに出席し、支援状況について担当者から情報収集を行った。また、「手工芸」生産者の支援をおこなっている別のNGOの代表者にインタビューをおこなった。それにより、1970年代から現在に至る、現地社会の「手工芸」支援について明らかにするためのデータを収集することができた。以上の現地調査で得た研究成果を、9月に民族芸術学会の研究大会、10月に岡山大学で開催された研究会において発表をし、それぞれ参加者との活発な議論をすることができた。

基盤研究（C）一般

現代インドにおける染織技術の戦略的継承法に関する民族芸術学的研究

代表者 上羽陽子

目的・内容

本研究は、現在の手工芸文化において、伝統的技術がどのように継承され、現代的要素がいかに組み込まれているか、現代インドをフィールドとして解明することを目的とする。インドにおいては、経済自由化が進められた1991年以降、手工芸文化の形態が多面的で複雑な様相をおびるに至っている。本研究では、理論的には染織技術の戦略的継承法、宗教儀礼における布の役割、事例としては、女神儀礼用染色布の生産現場、宗教儀礼での使用状況、インド国内外の観光客との関係関係に関する研究を念頭に置きつつ、民族誌的記述分析を通じて、手工芸文化に関する民族芸術学的考察を行う。最終的には、グローバル化された現在の手工芸文化の特質を明らかにし、さらには手工芸文化論や染織研究に対する理論的貢献を試みたい。

活動報告

本研究は現在の手工芸文化において、伝統的技術がどのように継承され、現代的要素がいかに組み込まれているか、現代インドをフィールドとして解明することを目的とする。

本年度は、次年度の本格的な現地調査にむけて、インド西部およびデリーにて現地調査をおこなった。インド西部の女神儀礼用染色布の生産現場と使用現場において、実際に制作に従事しながら、予備調査をおこなった。同時に資料収集に関しては、アーメダバード県を中心に、研究対象に関する古文書渉猟も遂行した。さらに、デリーを中心とした大都市の手工芸関連マーケットにおいて、染織品の流通や消費者動向についても聞き取り調査を実施した。

本研究の成果としてインドの染織技術に関するフィールドワークに焦点をあてた単著（『インド染織の現場——つくり手たちに学ぶ』（フィールドワーク選書12）臨川書店）を発表した。また、これまでの研究・収集の成果を国立民族学博物館本館南アジア展示場で公開した。

基盤研究（C）一般

現代イタリア社会におけるローカルリティに関する文化人類学的研究

代表者 宇田川妙子

目的・内容

グローバル化が進む現在、ローカルなものに再び注目が集まっているが、ローカル・コミュニティについては、その研究の衰退以降、本格的な再考論には至っていない。しかしローカル・コミュニティの復興の動きは世界的に

盛んであり、その意義は消滅したわけではない。この問題を適切に考察するためには、ローカル・コミュニティを（単なる所与ではなく）人々のローカリティという感覚の実体化と捉え、むしろ着目すべきはこのローカリティであると思われ、今やグローバル社会、国家等と密接につながっている生活の中で、それがどう位置づけられ生産されているかを考える「ローカリティ研究」へと転換する必要がある。

本研究は、そうした新たな研究領域の構築を目指すため、そのモデルケースとしてイタリア社会に着目し、イタリアのある町の事例を詳細に調査研究しながら、理論的にもローカリティにかんする研究を進めていく。

活動報告

2014年度は、本研究の1年目として、理論的な研究においても、現地調査においても、それぞれ概要を把握することに努めた。

1) 理論的研究

ローカル・コミュニティおよびローカリティに関して、人類学をはじめとする人文社会諸科学における基本的な文献を収集・分析し、その変遷や現状の問題点をできるだけ把握することに努めた。中でも、昨今の空間論をリードする地理学の業績に焦点を当てた。また、イタリアの事例にかんしては、これまでの民族誌を渉猟し、そこでのローカル・コミュニティおよびローカリティの描き方を、国家、近代化、グローバル化などのかかわりから分類・整理する作業を行った。この作業は、今後イタリアのローカリティを考える際の基本的な資料になるとともに、人類学がこれまでローカリティの問題をどう描いてきたかを探る上でも貴重な資料を得ることができた。

2) イタリアのローカリティにかんする現地調査

イタリアのローカル・コミュニティにおけるローカリティの意味を具体的に探るため、10月に約4週間、イタリアで現地調査を行った。その目的の一つは、これまで調査を続けてきたローマ近郊のR町での調査であり、ここでは、彼らのローカリティ意識の変遷を探るため、まずは約30年前の最初の調査からの変化を総合的に調査・把握した。R町の近隣の町々における資料の収集も開始した。また、この事例を相対し、さらには、イタリアにおけるローカリティ研究にかんする知見を深めるため、ローマ大学の人類学者と意見交換をした。その過程で、彼らとの間で今後の協力関係を視野に入れた関係が構築されたので、2015年度には具体的な計画の策定に入るつもりである。

若手研究 (A)

日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究

代表者 伊藤敦規

目的・内容

本研究は、フォーラム化する民族学博物館と文化人類学の趨勢を加速化させる最先端の学術調査を実施することで、新たな理論的展望を拓くことを目的とする。具体的には、日本国内の複数の民族学博物館が所蔵する米国先住民ホビ製木彫人形資料を対象として、研究代表者、所蔵機関担当者、資料を制作し使用してきた人々（ソースコミュニティ、以下SC）の3者で熟覧を行う。既存の資料情報や資料分類を現代のSCにおける文化的文脈に則した見解と照合することで、2つの異なるコンテキストにおける知（資料情報・伝統的知識）の継承の実態を検討する。加筆・修正した情報と熟覧の様子はデジタル化してまとめて両者へ還元し、さらなる知の継承の展開を図る。

活動報告

国立民族学博物館が所蔵する米国南西部先住民ホビが制作した木彫人形資料約300体のphotoVR制作を行った。PhotoVR制作では、まず立体資料を0度、30度、60度、90度角においてそれぞれ全周を水平に36分割し静止画を撮影する。それに底面写真を加え、145枚一組のファイルとして加工することで、資料をPC等のモニター上でハンドリングしているように操作することを可能とする（バーチャルリアリティ化）。本研究では1) ソースコミュニティ(SC)からの招聘を基にした日本国内の博物館での熟覧と、2) 日本に招聘できなかった人々を対象にした現地での疑似熟覧が必須となる。この2)を円滑に行うためにphotoVRのための撮影と加工を初年度に行った。

10月には計画通りにSCから招聘し、資料熟覧に関する国際ワークショップ(Collection Review: Methodology and Effective Utilization for the Museum and the Source Community)を国立民族学博物館で開催した。別の財源によって招聘した博物館関係の研究者(日本、米国、スコットランド)とともに資料熟覧に関する方法論を議論した後、実際にホビの人々による資料の熟覧を行った。その過程全ては映像記録化した。招聘期間は土日祝日を含む2週間であり、この間に約140点の熟覧が終了した。SCの帰国後は熟覧時の文字起こしと言語のチェック、日本語への翻訳作業を進めた。一部は日本語字幕付きの公開用動画資料としてほぼ完成した。

また、2015年度に実施予定のリトルワールド(愛知県犬山市)へのSCの派遣について2015年1月にリトルワー

ルドにて学芸員と打ち合わせを行った。

若手研究 (B)

現代ブータンの多元的宗教空間における仏教と屠畜に関する政治人類学的研究

代表者 宮本万里

目的・内容

選挙人リストから全ての宗教者を排除し、仏教僧を政治領域から退出させたブータンの新制度の下で、仏教界は年法要での肉食忌避の提案や大規模な放生や灌頂儀礼の開催等をととして社会文化領域での存在感を増している。そのなかで、ときに犠牲獣の供犠を伴う「野蛮」で「無慈悲」な土着の呪術や自然神崇拝は徐々に周縁化され、肉食や屠殺に対する忌避感も拡大しつつある。では、世界宗教としての仏教が地域の固有性を平準化する力をもつ中、人々はいかにして自らの慣習や価値体系を再構築しているのだろうか。本研究では民主化期ブータンにおける仏教界の位置づけを精査するとともに、特に屠畜の習慣と屠畜人をめぐる価値の競合過程を、畜産局、県議会、牧畜民や仏教僧などの多様なアクターによる相互交渉のプロセスをととして描出し、新たな価値体系と社会階層が構築される契機を捉えていく。

活動報告

本研究プロジェクトの1年目である今年度は、当該研究課題に関連する英国およびブータンでの資料文献調査、そしてブータン現地社会での聞き取り調査を中心に研究をすすめ、また研究課題に関するフィードバックを得るため国際学会における研究成果発表を積極的に行った。

資料調査では、2007年以降の民主化プロジェクトがブータン社会においてもつ意味を、政治領域における宗教組織の位置づけの変遷から明らかにしようと試みた。対象とした資料は憲法と選挙法、そして選挙委員会の通知およびレポート、そして現地の新聞等の言論界の出版物である。まずは、宗教者 (Religious Personality) に参政権 (選挙・被選挙権) を与えないとした憲法と選挙法の規定が、ブータン社会における「宗教」および「宗教者」の定義の問題となった過程を描き出した。そして、その過程でゴムチェンと呼ばれる在家僧らが村落社会において政治領域と宗教領域をつなぐ媒介者の役割を果たしてきたことに注目した。これら媒介的あるいは中間的な人材を許容しないというブータンの新たな状況は、政治の世俗化という概念に対する批判的な考察の糸口となった。これらの考察の成果は、宗教と政治的なものに注目する形でまとめ、雑誌『現代インド研究』に投稿し、掲載された。

また、村落社会における仏教の影響力の拡大に関して、屠畜従事者の社会的な立場の変遷から明らかにすべく、タシガン県のメラ・サクテン郡およびプムタン県において聞き取り調査を行った。これらの調査の成果は英国南アジア学会およびヨーロッパ南アジア学会において発表している。さらに、仏教による宗教空間の一元化が進む状況について、ボン教その他の信仰を基盤とする呪術や儀礼に関する知識の継承過程の変化を、そのツール (植物等) の収集プロセスから考察しようと試みた。これらの研究の成果は国際民族生物学会で発表し、好意的な評価を得た。

若手研究 (B)

『千一夜物語』仏語訳者マルドリユス再考——〈遺贈コレクション〉の分析を中心に

代表者 岡本尚子

目的・内容

J.-C. マルドリユス (Josephe-Charles Victor Mardrus, 1868-1949) による『千一夜物語』仏語訳は、マラルメら当時の重要な文化人たちとの関わりや、「オリエンタリズム」流行の一翼を担っていたことなど、多くの文学的・文化的重要事項を含んでいる。しかしマルドリユス版『千一夜物語』は、翻訳元が不明であることなどから評価が低く、彼の全体像や、『千一夜物語』以外の著作物に関する研究は、ほとんど行われていない。よって本研究においては、国立民族学博物館が独占的契約を得て所有している、〈マルドリユス遺贈コレクション〉の使用を中心にして、1) マルドリユスの著作物、及び多岐に渡る活動についての総合データを構築し、2) マルドリユスを通じて、近代フランス文学・フランス文化を再検討することを、目的としている。

活動報告

- 1) マルドリユスの全著作についての概要を調査した。これまでに、国立民族学博物館においてデジタル化した「マルドリユス遺贈コレクション」中の、手書き及びタイプ打ち原稿に関して、その情報や内容を詳細に調査したうえで、情報を整理した。更に、それ以外の作品や、記事などマルドリユスの手によるものについても、遺族が所有している旧マルドリユス邸や、フランス国立図書館などで調査を行った。
- 2) フランスにおける調査において、マルドリユスの姪にあたり、マルドリユスの遺品の所有者である Marion Chesnais 氏と面会し、情報収集を行った。その結果、マルドリユスと、ジッドなど著名な文人たちの書簡の存在が明らか

になり、Chesnais氏よりその調査の許可を得ることができた。これは当初の計画にはなかった事項であるが、未発表の資料であり、この調査によってマルドリユスに関する情報の他、この時代の重要なフランス人作家についての情報を新たに得ることができるため、今後の重要なテーマの1つとして加える予定である。またフランス調査においては、現在入手が困難になっているマルドリユスの歌詞による歌曲の楽譜を入手することができた。この中には、これまで遺族のChesnais氏がその存在を認識していなかったものも含まれており、今後予定している「多分野におけるマルドリユスの活動の分析」に大いに役立つと思われる。

- 3) マルドリユスが活躍した19世紀末から20世紀初めの、フランス文化の分析と検証の一環として、演奏会「フランスの風 vol.4 詩人ポール・ヴェルレーヌ」の監修と、解説及び詩の翻訳をまとめたプログラムノートを発行した。この時代の文化人たちの関わり合いや周辺状況に関する情報は、マルドリユスの周辺の状況を解明する際に、重要な参考事例となった。

若手研究 (B)

オーストラリア多文化主義下の先住民とスーダン難民の緊張関係をめぐる人類学的研究

代表者 栗田梨津子

目的・内容

本研究は、1990年代以降、多文化主義の後退が叫ばれるオーストラリアで社会の最底辺におかれた先住民とスーダン難民の緊張関係について、第1に、多文化主義言説における両集団の位置付け、および主流社会における両集団の受け止められ方、第2に、両集団の政治的・社会経済的状況、第3に、集団間の日常的な相互作用の中で緊張関係が生じる具体的状況、および両集団の「ブラック」としての自己認識と白人に対する態度を明らかにする。その上で、集団間の緊張関係の諸要因を多文化主義に内在する白人性との関連において考察し、反多文化主義の時代におけるマイノリティ集団の支配の構図に関する新たな理論を構築することを最終的な目的とする。

活動報告

今年度は、1990年代以降のオーストラリア多文化主義政策における先住民とスーダン難民の位置付け、および主流社会における両集団の受け止められ方を明らかにすることを目的に、日本とオーストラリアで主に文献研究を行った。まず、オーストラリアのスーダン難民に関する文献を収集し、その歴史的背景、社会経済的状況、教育や差別などの問題に関する情報の整理を行った。同時に、オーストラリアの難民政策や難民に対する社会福祉サービスの実態を調査し、既に研究の蓄積がある先住民の状況と比較した。

また、主流社会が両集団に対して抱くイメージに関しては、南オーストラリア州立図書館にて情報収集を行った。スーダン難民の受け入れが本格化した2000年以降の全国紙および地方紙における両集団に関する記事や読者投稿欄を参照する中で、スーダン難民と先住民の若者が頻繁に組織化した犯罪集団と結び付けられ、社会の逸脱者として描写される傾向があることがわかった。さらに、アデレード郊外での予備的な現地調査では、難民支援組織や先住民組織の職員、および両集団との関わりのある白人住民に対して聞き取り調査を実施し、人々の両集団との経験とマスメディアによる両集団の描写の隔たりが明らかになった。

今年度の研究の意義は、1) 研究の蓄積が少ないオーストラリアのスーダン難民が置かれた社会経済的状況を確認したこと、2) 両集団の社会経済的状況を比較することで多文化主義政策における両集団間の位置付けを明確にしたこと、3) 両集団に対する主流社会の眼差しの比較・分析を通して、多文化主義をめぐる政策や言説と一般市民による多文化主義の受け止め方の違いを浮き彫りにしたこと、である。

若手研究 (B)

境界領域における民俗芸能の教授・創生に関する研究：奄美諸島の高等学校を中心に

代表者 呉屋淳子

目的・内容

本研究の目的は、「鹿児島／沖縄」の境界に位置する奄美諸島の高等学校における民俗芸能の教授と創生に着目し、境界領域であるが故に生じる民俗芸能の新しい継承過程の様相を明らかにすることである。

奄美諸島の各地域は、鹿児島県や沖縄県の影響を認めつつも、どちらか一方に帰属することはないという重層的でマージナルな文化的特徴を有している。そのうち芸能に関しては、徳之島以北が大和系、沖永良部以南が琉球系の芸能の影響を受けて展開してきた。本研究は、奄美諸島内部の文化的特徴に焦点を当て、民俗芸能の教授と創成の様相を学校教育から示し、学校教育の果たす役割と機能の検討から、民俗芸能の持続的な継承の可能性を検討する。

活動報告

2014年度は、奄美諸島の学校教育における民俗芸能の教授が、現代奄美諸島の人々の日常における文化的実践のなかでどう位置づけられているかについて、奄美諸島内の高校を卒業した生徒たち（奄美大島、与論島、徳之島、喜界島）を対象に聞き取り調査を行った。

また奄美－沖縄の比較研究の対象として、沖縄県内の大学で琉球芸能を学んだ経験のある沖縄系日系ペルー人を対象に、参与観察および聞き取り調査を行った。

若手研究（B）

植民地インドにおける商業カーストの邸宅建築に関する基礎的研究

代表者 豊山亜希

目的・内容

本研究は、英領インド期に植民地経済への参与で大きな成功を収めた2つの商業カースト、すなわち北インドのマールワリーと南インドのチュッティヤールが、獲得した富を財源として故郷の集落に造営した邸宅建築群の変容を比較考察するものである。彼らは植民者と被植民者のエージェントとして、経済面のみならず文化的局面においても西洋と東洋の相互交渉的関係を促進し、その交渉は結果的に植民地インドの民族意識を醸成した。

本研究の目的は、①インド在地商人の自己表象＝邸宅建築の構造および装飾形式の変遷を、南北インドそれぞれの伝統や地政学的状況を踏まえて読み解くこと、②インドにおけるカースト・民族・国家という多元的なアイデンティティが、エリートの言論によってのみならず、彼ら新興中産階級により、大衆的訴求力の高い視覚表象を通して一般社会へ還元されていた可能性を、美術史的観点から考察することである。

活動報告

今年度は研究課題実施初年度にあたり、当初計画どおり北インド・ラージャスターン州シェーカーワティー地域におけるフィールドワークに加えて、イギリスにおける関連資料の調査を実施した。

2014年8月20日～9月4日にかけて実施した資料調査は、スコットランド国立図書館（エジンバラ）と大英図書館（ロンドン）において、本研究課題の調査対象である植民地インドの商家建築に関する同時代の言説を把握するため、都市計画や公衆衛生に関する報告書などの一次資料を網羅的に閲覧調査した。

この資料調査によって得られた知見をもとに、フィールドワークの実施地域として当初計画のシェーカーワティー地域に加えて、当該地域の商家建築の施主が経済活動を展開し、同様の建造物を建てていた旧英領インド首都のカルカッタも含めることとし、2015年2月12日～3月4日にかけて現地調査を行った。具体的な調査内容は、シェーカーワティー地域の複数の集落において、植民地期の商家建築（ハヴェーリー）について集落内分布図を作成すること、構造的・様式的特徴に基づく造営年代の比定を行うこと、写真と概略平面図およびスケッチによる基礎資料を作成することであり、順調に調査計画を遂行することができた。またカルカッタにおいても、シェーカーワティー地域出身商人（マールワリー）が造営した商家建築や寺院について、同様の方法論を用いて基礎資料を作成した。

さらに調査成果をエジンバラ大学南アジアセミナー（2014年10月）、日印共同シンポジウム（2014年12月）といった国際学術会議のほか、国内の複数の研究会においても発表した。

挑戦的萌芽研究

人類学におけるフォト・エスノグラフィーの手法の探求

代表者 岩谷洋史

目的・内容

本研究は、デジタル化時代における人類学的なフィールドワークによって収集される調査データである写真（デジタル写真）の活用方法を考察し、写真を主体にしたフォト・エスノグラフィーという新しいエスノグラフィーの手法を探求することを目的としている。

この目的を達成するため、1) デジタル写真というメディアの特性を活かしたコンピュータ上での静止画像管理システムの設計、2) 人類学教育を射程に入れた、大学・大学院における実習授業でフォト・エスノグラフィーを作成する実験的な試みという2つの応用的かつ実践的なアプローチをとりつつ、エスノグラフィーにおける写真の活用に関わる理論的な探求を行い、その可能性について検証する。その上で最終的にフォト・エスノグラフィーの方法論に資する基礎的なヴィジョンを提出する。

活動報告

1) 国内外の関連研究資料の収集と研究者間でのネットワークの拡大

国内外の関連資料収集と同時に、国内の文化人類学者だけでなく、隣接分野（社会学）や関係する分野（情報学）の研究者との連携を作り、各分野の研究者が研究協力者として本研究を支援する基盤を作った。

2) 調査実習授業での展開

研究協力者の協力を得て、学部生・大学院生向けの調査実習で、フォト・エスノグラフィーの手法を採用した実践を展開した。研究代表者は、その実践をモニタリングすることで、モデル化のための知見を得た。

3) 研究会・ミーティングの開催

研究協力者全員を集めた全体研究会は、1回（2014年7月14日）のみの開催に留まったが、研究代表者は、各研究協力者と個別のミーティングで対応しながら、意見交換をしつつ、本研究の進捗情報の共有をはかり、フォト・エスノグラフィーの理論的な探求を行った。

4) 静止画像管理システムの設計

フォト・エスノグラフィーをコンピュータシステム上で実現できる仕組みを設計する活動については、情報学を専門とする研究協力者の協力を得ることができ、本格的なシステム設計に関しては、2014年度の調査実習での研究成果をもとにして進める計画を立てた。

5) 研究成果の公表

本研究結果公表のためにWEBサイト（<http://www.photoethnography.sakura.ne.jp/>）を作成し、このWEBサイトに連携する形で、2)での個別の調査実習用WEBサイトを作成し、調査実習の成果を掲載した。また、研究協力者の1人が担当する授業に関しては、2014年度調査報告書を刊行する準備を行った。さらに、研究代表者は、2015年度の日本文化人類学会第49回研究大会、関西社会学会第66回大会にて、2)での成果をもとに単独で口頭発表する予定で準備を進めた。

研究活動スタート支援

中国石窟芸術技法・材料の解明による美術史観再考——麦積山石窟を事例として

代表者 末森 薫

目的・内容

中国仏教美術史は、長年に亘る研究により体系化された学術領域として存在する一方で、近年では中国仏教美術に対する文化財科学の手法を用いた調査・研究も進められている。しかしながら、両分野の研究目的や手法は必ずしも一致しておらず、学術の発展のために同一の土俵での議論が必要とされる。本研究は、中国の河西回廊沿いにある麦積山石窟および敦煌莫高窟に現存する塑像・壁画を対象として、両分野に跨る複合領域的なアプローチにより、これまで扱われてこなかった視点からの議論を展開し、新たな知見を提出することを目的とする。本研究を通じて、文化財科学においては、現場で応用可能な汎用性のある光学調査法が確立され、古代において使用された技法・材料や劣化要因に関する新しい知見が提示されることが想定される。一方中国仏教美術史においては、新しい視点による編年や石窟芸術制作に携わった工人の特徴や系統、地域性が明らかにされることが見込まれる。

活動報告

2014年度の活動では、下記の成果を得ることができた。

- 1) 本研究で用いる調査法のひとつである光学調査法について、紫外光・可視光狭帯域光源および各種の光学フィルターを用いた検証実験を行い、各条件による分光特性などの基礎データを取得した。そして、国立民族学博物館所蔵の資料および麦積山石窟の壁画片を対象として本手法を応用した調査を行った。その結果、狭帯域光源を用いた観察方法の有効性が確認できたと共に、可視光域における蛍光の可視化を行うことができた。
- 2) 麦積山石窟壁画片を対象とし、デジタル顕微鏡を用いた微細部観察、蛍光X線、X線回折による非破壊材質分析を実施した。その結果、光学調査の結果と比較するための基礎データが取得されたと共に、壁画の技法・材料に関する新たな知見が得られた。
- 3) 麦積山石窟での実地調査にて現場に現存する壁画や塑像について現状調査を行い、その技法や材料について整理を行った。また現地研究者と今後の研究の展開について協議を行い、2015年度に実施する調査の候補を選定した。
- 4) 敦煌莫高窟の実地調査にて、北朝期窟（5、6世紀）を対象に目視による調査を実施し、主に千仏図像の配色による規則性を明らかにし、窟内空間における同図像の機能について考察を進めた。
- 5) 1)～4)で得られた成果について、2015年度の各学会（文化財保存修復学会、日本文化財科学会、東アジア文化遺産保存学会等）での発表の準備を進めた。

研究活動スタート支援

ジャマイカ、スキン・ブリーチングが刷新する黒人性に関する文化人類学的研究

代表者 神本秀爾

目的・内容

本研究課題は、資料・史料分析による実証研究と理論研究を組み合わせでおこなわれる。本研究課題では、黒人として生きられる身体に着目する立場から、健康被害をもたらすとして警鐘が鳴らされているにも関わらず、ジャマイカで多くの人が実践しているスキン・ブリーチング（スキン・ホワイトニング、トーンングとも呼ばれる肌の脱色・漂白）を考察対象とする。

本研究課題では、スキン・ブリーチングを、ローカル・ナショナル・グローバルな諸力との関係のなかで構築されてきた複数の身体イメージと、みずからの身体のあいだでおこなわれる加工を通じた交渉の実践と位置づけ、その実践を通じて共同性の源となる黒人性が刷新されていく動態を描き出すことを目的とする。

活動報告

本研究課題は、黒人として生きられる身体に注目するものであり、全世界的におこなわれている、薬剤を用いて肌を脱色・漂白するスキン・ブリーチングと呼ばれる実践を考察対象とする。ジャマイカでは2000年代半ばより、スキン・ブリーチングは、黒人であることの誇りを損なう行為であると同時に、健康被害の原因となる危険な行為として、社会問題視されている。

2014年度は、以下の研究をおこなった。

1) ジャマイカのスキン・ブリーチングの特異性に関する研究

本研究では、スキン・ブリーチングに関する各種の記事や、ニュースやドキュメンタリー映像、先行研究でも取り上げられていたレゲエ音楽を分析対象として、スキン・ブリーチングをめぐる言説の傾向について検討した。

2) ジャマイカにおけるスキン・ブリーチングの位置づけに関する研究

2015年2月に、首都キングストンで2015年度夏期に予定している調査の予備的な調査をおこなった。薬剤の販売方法や流通経路の聴き取り、住民のスキン・ブリーチングに対する意識に関するアンケート・インタビュー調査をおこなった。

研究成果公開促進費（学術図書）

薬剤と健康保険の人類学

代表者 浜田明範

目的・内容

本書刊行の目的は、アフリカの農村地域の事例を元に、1) めまぐるしく変化する生物医療のグローバルな展開過程と 2) それらの新奇なテクノロジーを人々がいかに自分たちの世界の前提として取り込みながら生きているのか、という現代的なテーマに取り組むことにある。

一般的なイメージとは異なり、今日、ガーナ南部の農村地帯で暮らす人々は、薬剤・ヘルスセンター・看護師・健康保険といったモノや人、制度と日常的に触れ合っている。人々は毎日のように町の薬屋で抗生物質や鎮痛剤を買い求め、町中を歩く看護師と会話する。健康保険の加入を勧める宣伝は、看板や横断幕、ラジオ、テレビといったメディアを通して頻繁に行われている。アフリカの医療を対象とした民族誌には一定の蓄積があるものの、その殆どは薬草の使用や呪医の治療といったいわゆる民俗医療に焦点をあてたものであり、アフリカで暮らす人々の健康を維持するうえで、質的にも量的にも極めて重要な役割を担っている生物医療については、特に国内では、ほとんど分かっていない状況が続いている。それに対し本書は、24か月に及ぶフィールドワークに基づいて、ガーナ南部の農村地帯で暮らす人々の生活世界に入り込むことで、人々が薬剤やヘルスセンター、生命保険といったテクノロジーといかに関わりながら生きており、それらのテクノロジーがどのように人々の生活や社会のあり様をどのように変容させているのかについて具体的な事例に基づいて記述するものである。

成果刊行物

浜田明範

2015 『薬剤と健康保険の人類学——ガーナ南部における生物医療をめぐる』 東京：風響社。

研究成果公開促進費（学術図書）

神霊を生きること、その世界

代表者 竹村嘉晃

目的・内容

本刊行物の目的は、インド・ケーララ州北部に伝わるテイヤム祭儀を伝統的職業として担う不可触民の実践者たちを照射し、現代社会の動態や祭儀を取り巻く巨視的な位相と、彼らの生計活動や社会とのつながりといった微視的な要素がいかに実践レベルと関係し、影響を与えているのかを彼らの生活世界に足場をおく民族誌的記述から解明することにある。本刊行物は、人類学と舞踊・芸能研究を融合させた「ひと」中心的なアプローチに依拠しながら、神霊パフォーマンスとその実践者たちの「現在」の営為を祭儀の場から生活世界にまで拡げて論じる芸能民族誌の新たな試みである。人類学的フィールドワークに基づいて人びとの生活世界を記述する本書は、地球規模で進むグローバル化現象が個別かつ多元的で変化に富むことを明示すると同時に、舞踊・芸能研究が陥りやすい動作の形態だけを記述するのではなく、祭儀をとりまく社会・政治・経済的諸側面をつながりとして捉え、経済自由化以前から進行していた社会変化と今日のそれを連続的な地平で理解し、実践レベルの変容の動態を個人の視点から実証的に論じるものである。そこでは、祭儀の実践が人びとの生活様式や価値観と呼応し、かつ現代ケーララ社会における「不可触民」層の家族や人間関係のあり方とも連動していることが明示され、神霊を受け継ぐ人びとが世代によって価値観や手法は異なるものの、社会的に構築された祭儀の場を通じて自らの位置を確認しているあり様が明らかになる。

成果刊行物

竹村嘉晃

2015 『神霊を生きること、その世界』東京：風響社。

研究成果公開促進費（学術図書）

Oral Chronicles of the Boorana in Southern Ethiopia

代表者 大場千景

目的・内容

【本書を刊行する目的】

- 1) 第1に学術的な新発見を擁する本書を広く世間に問うこと。
- 2) 第2に本研究は文字及び無文字社会の歴史構築に関する比較研究の基礎を提示し、今後の歴史人類学の新たな地平を切り開くこと。

【本書の内容】

第一部の資料編においては、エチオピア南部に居住するボラナと呼ばれる人々の間で語り継がれてきた口承史の現地語のローマ字転写によるテキスト化とその翻訳及び注釈をつけた第一次資料を提示している。のべ32か月におよぶ現地調査を実施して46名のボラナから口承史を収録し、その中で最も詳細な18名の口頭年代史および、予言者や英雄に関する歴史語り、叙事詩などの原文と翻訳およびその注釈を第一部においてまとめている。

第二部の分析編においては、第一部で提示した口頭年代史が成立する文化的、社会的コンテキストを明らかにするとともに、口頭年代史に内在する 1) 文化的な視点に基づく出来事への分析のあり方、2) 歴史を記憶する技法、3) 出来事を法則化する独自の災因論に焦点をあてながら、無文字社会の歴史を生成し継承する仕組みについて明らかにしている。

成果刊行物

Oba-Smidt, Chikage

2016 *The Oral Chronicle of the Boorana in Southern Ethiopia*. Berlin/London/Munster/Wien/Zurich: Lit Verlag.

特別研究員奨励費

社会的なるものの生態学——イタリアの社会協同組合を軸とした統治と連帯の人類学的研究

代表者 松嶋 健

目的・内容

本研究の目的は、イタリアの社会協同組合を中心とする中間集団において、人々がいかにつながりを創出しているかを見ることで「社会的なるもの」の生起の様態を描き出し、地域の「厚み」として感じられるものの実質を明らかにすることにある。現在イタリアでは、高水準の失業率と公共サービスの貧困に人々は直面しており、国家を

あてにしない共同性への希求は大きい。社会協同組合のような場に注目することは、国家による統治と個人の自己統治の両方をぬけ出て人々がどのようにして集合的な生を形づくっているかを明らかにし、「社会的なるもの」の次元についての考察を深めるのに役立つと考えられる。

具体的には、イタリア各地の社会協同組合を取り上げ、基本情報の収集の他、参加者が協働のなかでどのようなインタラクションを行なっているかを参与観察とインタビューによって調査する。また、人々が他の中間集団（教会、カトリック系団体、アソシエーション、家族）との関わりでどのようなつながりを生きているかについても調べ、そこから得られた知見を、ヨーロッパにおける「社会的なるもの」をめぐる思想と運動の系譜と突き合わせつつ、現代における「社会的なるもの」のあり様について検討する。

活動報告

本年度は、イタリアにおける社会協同組合の現状を全般的に把握することに重きをおいた。そのためにまず3か月間の現地調査において、首都ローマ近郊、イタリア北部、中部、南部それぞれの社会協同組合を訪問しインタビュー調査を実施した。さらに3月の短期現地調査、特に社会協同組合と公的な精神保健サービスとの連携についての補足調査を行った。これらの調査から見えてきたのは、欧州におけるサード・セクターの希望の星とみなされてきた社会協同組合の苦境である。1991年の法律381号による社会協同組合の法制化以降、公共セクターとの連携、別の言葉で言えば「相互依存」を深めてきた社会協同組合にとって、近年のイタリアの経済危機は直接的に多大な影響を与えている。

各地の社会協同組合は、現在の苦境を独自の工夫によって乗り越えようとしているが、その方向性の違いは各社会協同組合を取り巻く地域の特性の差異によるところが大きい。解決への道筋は大きく3つの方向性に分類することができるが、その知見の一部については、3月に開催された京都大学地域研究統合情報センターの共同研究プロジェクト「南欧カトリシズムの変容と福祉ビジネスの展開に関する地域間比較」の研究会において、“The Role of Social Cooperatives in Mental Health Service in Italy”というタイトルで報告を行なった。こうした社会協同組合を取り巻く状況の変化とそれに伴う社会協同組合自体のあり方の変化は、イタリアの中間集団の特徴を逆によく照らし出すものであり、現代における「社会的なるもの」の次元の考察にとって有益な、多くの具体的な材料を提供することになった。

特別研究員奨励費

宗教と公共性をめぐる人類学的研究——現代中国におけるイスラーム復興運動の事例から

代表者 奈良雅史

目的・内容

本研究の目的は、「改革・開放」以降の中国において、ムスリム・マイノリティの回族が中心となって担ってきたイスラーム復興運動が、他民族・非ムスリムと共同し、より広い「公益」を志向する社会運動として展開してきたプロセスを描き出すことで、宗教や民族を越えた公共性のあり方を論じ、新たな理論的モデルとして提示することである。

本研究では、以上の目的を達成するために、第1に、イスラーム復興運動に関わる回族、他民族・非ムスリムそれぞれの視点から、イスラーム復興運動の実態の変化、特にその運動で志向される「公益」の変化を民族誌的な事例をもとに明らかにする。また、その際、宗教活動に大きく影響する中国共産党の宗教政策、政府による政策の実施状況についても明らかにする（課題①）。第2に、本研究の中心的な調査地である雲南省におけるイスラーム復興運動は、イスラーム思想的にも経済的にもミャンマーやタイへと拡がった雲南系ムスリムの影響を強く受けていることを踏まえ、現地調査を通じて、国外の雲南系ムスリムの影響との関わりから「公益」の変化を明らかにする（課題②）。第3に、以上の成果に基づき、宗教と公共性に関する理論的研究を行う（課題③）。

活動報告

本年度は、これまでに中国雲南省で中国のムスリム・マイノリティである回族を対象に実施してきた調査データの分析、およびその成果の発表を課題とした。

- 1) 1978年に「改革・開放」政策が導入されて以降、回族社会では急激なイスラーム復興と伝統的な回族コミュニティの解体に伴う漢化が同時に進展してきた。このように回族社会が二極化する状況下、先行研究では一部の回族が敬虔化し、多くの回族が漢化したとみなされる傾向にあった。それに対し、本研究では、回族の日常的実践やライフヒストリーを含めた微視的なデータに基づき、流動性や分裂性をはらむプロセスとしての回族の宗教性を明らかにした。その成果は、査読論文として『宗教人類学』5号（中国社会科学院）に掲載された。
- 2) 回族社会では「改革・開放」以降、急激なイスラーム復興が起こったが、その一方でイスラームは中国政府の強い管理下に置かれている。そのため、政府の管理下にあるモスクでは、回族の一般信徒が望むイスラーム教育を

必ずしも実施できない状況にある。そうした状況下、従来の宗教指導者ではなく、宗教的知識を有する世俗のエリートが宗教的権威を発揮し、宗教活動を主導しつつある。こうした事例から、政府の宗教管理制度には必ずしも包摂されないかたちでインフォーマルに進展するイスラーム復興の様相を明らかにした。その成果として、IUAES 研究大会で口頭発表を行い、*Revisiting Colonial and Post-Colonial: Anthropological Studies of the Cultural Interface* (Los Angeles: Bridge21 Publications) において分担執筆を行った。

- 3) また、これらの成果を基に、活発化するイスラームに関わる活動が、「公益」活動として展開されてきたプロセスを明らかにした。回族社会が二極化的な傾向にある中、回族の多くが必ずしも生活様式を共有せず、その宗教性も多様化している。そうした変化にありながらも、彼らは都市部における宗教的・民族的マイノリティとして、就職、婚姻などで利害を部分的に共有している。このように多様な回族が部分的に利害を共有するなかで、「公益」が形成される過程を明らかにした。それは南京大学での国際会議で口頭発表を行い、現在『国立民族学博物館研究報告』への投稿の準備を進めている。

特別研究員奨励費

現代ロシアにおける新異教主義——歴史認識、マイノリティ性、地位向上運動に注目して

代表者 藤原潤子

目的・内容

新異教主義（ネオペイガニズム）とは、キリスト教などの世界宗教が受容される以前の民族独自の文化を現代に復興しようとする思想運動である。欧米で広く見られるが、旧社会主義圏においてはポスト社会主義時代の民族アイデンティティを支えるものとして生じた。本研究の目的は、ソ連崩壊から20年以上を経た現在のロシア社会における新異教主義運動の位相を民族誌として描き出すことである。

研究内容は以下のとおりである。

1) 思想内容の把握

①異教迫害の歴史を訴え、謝罪と補償を政府と教会に求める新異教主義運動の実態とその歴史認識を明らかにする。②新異教主義には、過激な人種主義に走る集団と、民族間の寛容・共存を訴える集団の両極端が存在する。各集団のロシア人観、人種概念、選民意識などを精査し、寛容性と不寛容性の分岐は何かを考察する。③中世：から続くキリスト教と異教の戦いの現在における展開を明らかにする。④ソ連時代の無神論政策と新異教主義誕生の関係を明らかにする。⑤伝統的な異教の自然観と、都市化した社会でナショナリズムの要請によって生まれた新異教主義の自然観の違い、及び近年の自然環境をめぐる状況と宗教実践とのつながりを記述する。以上①～⑤について、時間的な思想の変化や世代間の差にも注目して論じる。

2) ネットワークの把握

ロシア新異教主義諸団体間の関係、他の宗教的マイノリティや自然保護運動、先住少数民族運動、海外の諸団体との連携を見ていく。これにより、マイノリティである新異教主義者がどこからどのような言説を貸借し、自らの語りに取り入れ、アイデンティティや権利意識を高め、実践につなげているのかを明らかにしたい。

活動報告

本研究の目的は、ソ連崩壊から20年以上を経た現在のロシア社会における新異教主義運動の位相を民族誌として描き出すものである。欧米の新異教主義運動とも比較しつつ、ポスト社会主義時代に生じたロシア新異教主義の特殊性にせまるために、本年度は以下のような作業を行った。

- 1) 新異教主義運動はポスト社会主義時代の急激な現象として注目を集めたため、ロシア語では一定程度の報告があるが、日本ではほとんど知られていない。まずこれまでの研究のレビューを行うために文献収集を行った。
- 2) ロシア各地に存在する新異教主義団体に関する情報を、インターネットサイトで収集した。それにより、マイノリティ宗教、少数民族運動や自然保護運動との連携状況、および彼らの特異な歴史観が明らかになりつつある。
- 3) ロシア正教会と新異教主義が、相手に対して互いにどのような言説を繰り出しているのかに関して情報収集を行った。その結果、中世から続く異教と教会の戦いの現代的様相が明らかになりつつある。「正教」を名乗る新異教主義団体の存在なども明らかになり、ロシアにとって真の「正しい教え」は何かと問題が両者の中心にあることが浮き彫りになった。

今年度は10月からの半年しかなかったため、成果発表は間にあわなかった。成果は今後、2015年8月に行われる International Council for Central and East European Studies (ICCEES) IX World Congress 2015などで報告していく予定である。

【継続】

基盤研究 (S)

権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築

代表者 關 雄二

目的・内容

本研究の目的は、50年以上続く日本のアンデス文明研究の成果を踏襲しながらも権力という新たな分析視点と分野横断的な手法を考古学調査に導入し（マイクロ・レベル）、文明初期における complex society の成立過程を追究する（メソ・レベル）とともに、人類史における文明形成を理論的に解明することにある。本研究では権力生成の特徴を、経済、軍事、イデオロギーという権力資源間の関係性に注目しながら帰納的に抽出する。具体的には、アンデス文明初期にあたる形成期（前3000年～紀元前後）に焦点を合わせ、ペルー北高地のパコパンバ遺跡を調査し遺構や遺物の分析を分野横断的に進める（マイクロ・レベル）。さらに、同時期の遺跡のデータと比較することで文明初期の多様な社会状況を把握する（メソ・レベル）。ここから得られた文明形成論を、中米および旧大陸の文明形成過程と比較し、相対化する作業も併せて行う（マクロ・レベル）。

活動報告

アンデス文明における権力の変容をさぐるため、文明初期にあたる形成期（前3000年～紀元前後）の祭祀遺跡パコパンバ（ペルー北高地）を約3か月にわたって調査し、遺構、出土遺物の分析を行い基礎資料の収集に努めた。とくに半地下式パティオにおいて、大量の土器が何度かにわたって放棄された跡が確認され、デンブン粒分析の結果、トウモロコシ、ジャガイモ、マニオクが検出された。考古学的に検出されることが希な儀礼的饗宴の痕跡と思われる、土器の器形分析と併せて発表を準備している。さらに人骨の分析から、暴力を示す骨折や陥没痕なども発見され、戦争の証拠がないところから、儀礼の痕跡と同定した。昨年度の懸案であったラクダ科動物の利用については、ストロンチウム同位体比、酸素同位体比を測定し、遺跡周辺での飼育と共に、他地域からの移動を示す証拠が発見され、祭祀空間における肉や骨の消費ばかりでなく、駄獣としての役割が示唆された。

一般調査については範囲をさらに広げ、パコパンバ遺跡から山間部（北）、熱帯低地（東）、そして海岸部（西）へと通じる地域間交流ルートを把握し、学会で公表し論文を出版した。また考古学資料をGISデータベースで統合する作業完成させ、新たに土器の3次元画像データベースの作成を開始した。さらに、同じペルー北高地に位置するクントゥル・ワシ遺跡、ヘケテベケ谷中流域、中央海岸北部のネペーニャ谷下流域でも調査と遺物分析を展開し、文明初期の多様な社会状況の把握に努めた。これらの成果は、学術誌で公表するとともに、2014年8月にペルーで、2014年11月と2015年2月に日本で開催した国際シンポジウムで発表し高い評価を得た。また2015年1月に東京でエジプト文明との比較を主題とする公開フォーラムを実施したほか、昨年開催した西アジア文明との比較シンポジウムの成果を出版する作業を行った。2015年刊行の予定である。

基盤研究 (A) 一般

アラブ世界の都市部中流層文化とアラビアンナイト——エジプト系伝承形成の謎を解く

代表者 西尾哲夫

目的・内容

中世の中東で成立し、世界文学となったアラビアンナイト（千一夜物語）は、シリアで私家本として伝承されていたが、近世エジプトにおける都市部中流層の台頭にとまなう中間アラビア語の誕生がきっかけとなって、現在のようになつた。

本研究では、新発見の写本も含めて従来は未研究だったエジプト系全写本の分析によって、その編集過程と言語的特性を明らかにするとともに、相反する価値観が併存してきた理由ならびに異文化交流による成立過程を解明する。また中間アラビア語の発生と伝播を通じて顕著にみられる、アラブ世界に特徴的な言語社会的位相を分析し、フェイスブック革命に代表される社会変動メカニズムを解明する。

活動報告

本研究ではアラビアンナイト形成に関する以下の研究項目を実施した。

- 1) 文学伝統の地域民衆化で形成された写本群の分類と系統の分析として、写本データベース化の一環として、とくにシンドバード写本と百一夜物語写本の分析を継続するとともに、主としてドイツの各図書館所蔵の非標準的なアラビアンナイト写本（断片）を積極的に収集した。
- 2) 地域民衆の口語が文字化された中間アラビア語の歴史の実態と民衆文学変容の分析として、①「カルカット第二版」の計量文献学的分析と民衆文化語彙索引の作成、②国民共通語としての中間アラビア語使用実態の分析とそのための海外調査、③国民共通文化形成における民衆文化の現代の変容の分析とそのための海外調査を実施し

た。とくにオランダ、フランス、モロッコ、イスラエルにて現地調査をおこなった。

- 3) アラビアンナイトをめぐるヨーロッパ的文学伝統の物語伝承への影響の比較分析として、①マルドリユス遺贈コレクションの調査とマルドリユス版形成過程の分析とのための調査、②アラブ世界での再受容と文学伝統の關係の分析とのための海外調査、③日本での受容と文学伝統の關係の分析を実施した。とくにフランスにてマルドリユス遺贈コレクション関連の調査を集中的に実施した。

国際会議等の発表による成果として特筆すべきこととして、ローザンヌ（スイス）で開催されたデジタル人文学世界大会にて永崎研宣が、またワシントン（アメリカ）で開催された第113回アメリカ人類学会年次大会に相島葉月が参加し発表をおこなった。

基盤研究（A）海外

世界の中のアフリカ史の再構築

代表者 竹沢尚一郎

目的・内容

本研究は、北、西、東、中央、および南部アフリカ史の専門家が集まって共同研究をすることによって、アフリカ史の刷新をめざすものである。

とりわけアフリカ大陸の歴史が孤立して形づくられたものではなく、地中海、インド洋、大西洋という3つの海域との関係性において形づくられたことを、さまざまな資料から明らかにしていく。そのため、海域史、交易史、経済史のみならず、宗教史、ジェンダー史など、さまざまな観点から、アフリカの歴史を再構築しようとするものである。

これまで日本のアフリカ史研究は、その専門の講座がないことが示すように、立ち後れた状況にあった。そこで本研究は、アフリカ史を専門とする研究者の集合によってこうした状況を打破しようとするものである。最終的に本研究は、アフリカの歴史に関する4～5巻の本の作成をめざすものである。

活動報告

- 1) 分担研究者および連携研究者等の参加を得て、アフリカ史理解を深めるための研究会を3度実施した。とくに2013年3月には、東洋史研究者が作る共同研究班と合同で研究会を実施することで、アフリカ史と東洋史を接続するための意義深い視点を得ることができた。
- 2) 竹沢は西アフリカ・マリ国南部のマンデ地区で、現地の考古学者とともに発掘調査を実施した。マンデ地区は、過去に栄えたマリ帝国の拠点とされる歴史上重要な土地であるが、これまで発掘調査が実施されたことはなかった。その意味で、重要な成果が上がるのが期待されており、その出土品等を現在、分析中である。
- 3) これまでの成果を論文集『世界の中のアフリカ史』として出版するべく、現在論文を執筆中である。

成果

- 1) 研究内容と成果を海外に発信するために、竹沢はUniversité Libre de Bruxellesや、Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales à Marseille等で開催されたアフリカ史・アフリカ考古学の研究会で発表をおこない、高い評価を得た。
- 2) これまで15年にわたってマリで考古学発掘調査を実施してきたが、その研究成果を総括的にフランス語で出版すべく、Sur les traces des Grands Empiresを準備中である。これは、2014年度中に出版の予定である。
- 3) これまでの発掘の成果を、竹沢尚一郎『西アフリカの王国を掘る』（臨川書店、2014年）として出版した。

基盤研究（A）海外

熱帯高地における環境開発の地域間比較研究——「高地文明」の発見に向けて

代表者 山本紀夫

目的・内容

熱帯高地は、これまで辺境とみなされ、ほとんど注目されなかった地域であるが、そこは古くから多数の人口を擁し、高度な文明も成立、発達した可能性が大きい。また、近年はアンデスやチベットなどの高地において急激に人口が膨張し、環境変化の動きが加速するとともに、環境破壊の問題も深刻になっている。本研究の目的は、このような熱帯高地に焦点をあて、そこでの環境と人間との相互関係を環境開発および地域間比較の視点から究明することである。さらに、研究代表者の山本が40年あまりにおよぶフィールドワークをもとに提唱するに至った「高地文明」の仮説を検証確立することも大きな目的とする。これらの目的を達成することにより、熱帯高地における環境と人間の関係、とくに環境を改変し文明を成立させるに至った人類史の基本的枠組みが明らかとなる。

活動報告

本年度は、5年計画のうちの4年目にあたるため、これまで行く機会のなかった東アフリカ（ケニア）の高地を重点的に調査対象とした。すなわち、アフリカ研究者の池谷和信（研究分担者）を中心として、山本（研究代表者）、大山修一（研究分担者）が約10日間ケニア山（5,199m）山麓の熱帯高地を合同で踏査し、熱帯高地の環境と人々の暮らしとの関係を明らかにした。当初、この調査は熱帯アンデス（エクアドル・コロンビア）との地域間比較を目指していたが、コロンビアの治安情勢が良くないため、熱帯アンデスでの調査は次年度に延期とした。

一方、研究分担者の月原敏博、川本 芳はブータン等で現地調査を実施したほか、連携研究者の杉山三郎はネパールで調査を実施した。

基盤研究（B）一般

中東およびヨーロッパにおける驚異譚の比較文学的研究

代表者 山中由里子

目的・内容

本研究が対象とする驚異譚とは、ラテン語で「ミラビリア」、アラビア語・ペルシア語で「アジャーイブ」と呼ばれる、辺境・異界・太古の怪異な事物や生き物についての言説であり、東西の歴史書、博物誌・地誌、物語、旅行記・見聞記などに登場する。本研究の主要な軸は次の3点である。

- 1) 驚異譚を比較研究することによって、実際にその言説の語り手によってどのように定義され、位置づけられてきたかを明らかにする。複数の文化圏に共通するモチーフや逸話を関連作品から抽出し、分類を試みる。
- 2) 知識の伝播や未踏の地の発見を促した歴史的な文脈を把握した上で、博物学・人文地理学の発展の流れを明らかにする。視覚的表象にも注目し、中東とヨーロッパにおける世界観の変遷と相互の影響関係を辿る。
- 3) 宗教・言語・文化による相違点を浮かびあがらせる一方、異なる文化圏の驚異譚の根底に共通して流れる想像の力と語りの力を明らかにする。

活動報告

本研究では、「驚異」がもっとも生き生きと語られ、描かれた中世という時代を中心に据えて、その対象である物や現象が何であり、そしてどのように表象されてきたかを、言説だけでなく、視覚的な表象との連関も含めて考察してきた。最終年度は、研究期間中に行ってきた計10回の共同研究会を総括する議論を行い、成果を論文集として刊行する計画をたてた。研究協力者までも含めて総勢21名の執筆者の原稿が全て集まり、名古屋大学出版会からの2015年内の刊行が決定している。

この世の摩訶不思議に関する語りは、ヨーロッパと中東の歴史書、博物誌・地誌、物語、旅行記・見聞記などに登場するが、これらの多くは古代世界から中世・近世の一神教世界に継承され、共有されてきたものである。研究成果となる論文集においては、この複雑に絡み合うヨーロッパと中東の精神史の、古代から中世、そして中世から近世にかけての展開を、相対的・大局的に捉え、かつ具体的なテキストや美術品に即して正確に提示することを目指した。各章は、ギリシア語、ラテン語、ヨーロッパ諸言語、アラビア語、ペルシア語、トルコ語などの多岐にわたる一次資料や美術品の緻密な分析に基づいた実証研究であり、それらを比較対照することにより、驚異の在り方について包括的な見通しを得ることができる構成となっている。

また、2014年10月12日～13日には、人間文化研究機構連携研究「驚異と怪異の表象——比較研究の試み」（代表：山中由里子）と本課題を連携させた研究フォーラム「驚異と怪異——想像界の比較研究に向けて」を国立民族学博物館において開催した。「驚異」と「怪異」を対比させるという、新たな比較研究の枠組みを今後の展開として検討した。

基盤研究（B）海外

宗教と移民のアイデンティティ・共生：南アジア系ディアスポラを事例として

代表者 辻 輝之

目的・内容

本研究は、南アジア系移民・ディアスポラを事例として、1) 宗教が受入社会における移民のアイデンティティ、「コミュニティ」の形成に如何なる影響を与えているか、2) 宗教「伝統」の再構築と展開が多文化、多人種、多宗教を特徴とする受入社会において、彼らと他集団との共生、ひいては、その社会の統合と安定に如何なる影響を及ぼしているか、について民族誌的手法を用いてデータを収集して考察し、宗教と社会に関する既存の概念、理論的枠組の再検討に寄与することを目指す。

活動報告

2014年10月3日～2015年3月7日、トリニダッド・トバゴにある西インド諸島大学（The University of the West Indies, UWI）から、本研究課題の成果を共有・還元することを条件として、図書館蔵書や同大学所属の研究者との交流など制度的支援を受けながら、現地追加調査を実施するとともに、書籍ならびに学術雑誌論文の原稿執筆を継続した。

1) 現地調査

トリニダッドの事例については、同大学 West Indiana Collection および大司教区公文書館にて史料収集と分析、参与観察を行っている南部の町シバリアのカトリック教会関係者およびヒンドゥー教徒への聞き取り調査を継続した。また、南フロリダの事例において調査対象としているヒンドゥー寺院の指導者がトリニダッド・トバゴにおいて祭礼を執り行う際に参与観察および信者への聞き取り調査を実施した。

2) 成果発表

研究成果の共有・還元の1つとして、2015年1月28日、UWI ジェンダー・開発研究所（Institute for Gender and Development Studies）が主催する定期セミナーにおいて発表した。発表は広く広報され、内容と結果は、文書と動画の形で同研究所が運営するオンラインポータルにアップされている（<https://www.youtube.com/watch?v=KIYkAS8asBs&feature=share>）。

基盤研究（B）一般

劣化の進んだ図書・文書資料の長期保存に向けた大量強化法の開発

代表者 園田直子

目的・内容

本研究は、日本の酸性紙の保存研究で未解決となっている課題、1) 実践レベルでの紙資料の大量強化処理と、2) 現在稼働している気相型の脱酸性化処理法の弱点克服、これらに新たな展開を提示することを目的にしている。

1) では、既存の紙強化処理法を科学的に再検証し、手法の最適化をはかる。また、新たに紙表面にナノ繊維を紡糸して補強するなど、新しい可能性を検討する。2) では、従来の脱酸性化処理法（ドライ・アンモニア・エチレン法）の改良法として、酸性物質の中和剤を揮発させて酸性紙に直接付着させる手法を検討する。

本研究では、技術改良の成果を自然科学的に検証したうえで、開発した手法の文化財への適用の判断までを総合的に行う。

活動報告

本研究では、日本の酸性紙の保存研究で未解決となっているふたつの課題、1) 実践レベルでの紙資料の大量強化処理と、2) 気相型の脱酸性化処理の欠点克服、これらに新たな展開を提示することを目的とした。

1) 紙強化法の新たな可能性として、フリース法の改良と、エレクトロスピンニング法の応用に取り組んだ。それぞれの手法において、紙の強度向上効果と、処理後の試料に加速劣化処理を施し劣化抑制効果を検証した。フリース法は、紙表面を繊維で覆うことで物理的に強化する手法であるため、処理後、文字の判読が困難になる。そこで高い透明性をもつセルロースナノ繊維を用いたフリース法を検証したところ、自然劣化がかなり進んだ酸性紙での強度向上効果、劣化がある程度進んだ酸性紙での劣化抑制効果が確認できた。エレクトロスピンニング法は、静電気力により高分子溶液をナノ繊維化し、紙表面に積層させる。セルロース誘導体のナノ繊維では強度向上効果よりも劣化抑制効果があること、カルボキシメチルセルロース（CMC）の劣化抑制効果が最も高いことが判明した。また、抑制効果にはCMCの分子量と紙自体の水分量が影響していることが示唆された。フリース法とエレクトロスピンニング法、いずれもセルロースナノ繊維を用いることで、紙資料の強化処理として適用できる可能性が確認でき、今後のさらなる応用開発が期待できる。

2) 現在実用化されているドライ・アンモニア・酸化エチレン（DAE）法では、アンモニアガスと酸化エチレンガスを紙中で反応させるため、アンモニアガスによる紙の黄変、酸化エチレンガスの危険性が問題となっていた。その改良法として、酸性物質の中和剤であるジエタノールアミン（DEA）を揮発させて酸性紙に付着させる方法を検討した。昨年度の課題であった実験条件（とくに加温条件）の緩和に関しては、温度と減圧のバランスにより解決できる目処がたった。

基盤研究 (B) 一般

映像を用いた東南アジアのゴング文化の音楽人類学的研究

代表者 福岡正太

目的・内容

東南アジア諸地域において、ゴングは、霊的な力を備えた音具、楽器、権力を示す財産、交易品などとして重要な位置を占めてきた。この研究は、東南アジア諸地域のゴング文化の特徴と相互の関連を、現地調査と映像記録作成を通じて明らかにし、東南アジアのゴング文化を総合的に理解することを目的としている。特に、①これまで研究の少なかった地域のゴング文化の調査、②各地におけるゴング製作と調律技術の比較、③主にゴング流通からみた地域間の相互関連の解明に重点をおく。また、映像を重要な研究手段として位置づけ、現地における映像上映と意見交換を通じて、研究成果をフィードバックし、ゴング文化を支える人びととともに東南アジアのゴング文化についての新たな知を構築する試みをおこなう。

活動報告

- 1) 東南アジア大陸部では、ベトナム中部高原にて、これまで撮影した映像を関係者と視聴して意見交換をおこない、さらにゴング演奏や関連する民謡等について調査撮影を進めた。また、ラオス東北部において楽器使用等について調査をおこなった。当初調査予定だったカンボジアについては、長期にわたり調査を続けている井上航氏と情報交換を密におこない、国立民族学博物館が所蔵するゴング文化の記録映像と併せて、比較検討の材料とした。この地域の特徴である平ゴングの使用とこぶ付ゴングとの合奏の広がり、儀礼との結びつき、特に精霊との交流におけるゴング演奏の重要性、ゴングの流通を支えるゴング製作工房や調律師の役割について明らかにした。
- 2) 主にインドネシアのジャワ島、バリ島、ロンボク島での調査撮影を進めた。青銅製ゴングおよびその代用品と捉えられることの多い鉄および真鍮製のゴングの製造と流通、使用の歴史的動態が明らかになってきた。特に1980年代以降、学校教育で地域の文化を教えるために大量のゴングの需要が生まれ、大量の注文をさばくゴング商が誕生し、比較的安価で製作も容易な鉄製ゴングの製作と流通のネットワークが生まれた。また、鉄製ゴングの突起部に真鍮製のこぶを取り付けるなど、新しい製作手法が広がっている。
- 3) フィリピンにおいて、11回にわたり映像の上映および意見交換をおこない、映像が音楽文化の継承や活性化に果たしうる役割を検証した。映像は音楽伝統の伝承において大きな役割を果たしうる。その特長を生かすために、学術的映像における文字情報の効果的かつ適切な位置づけなどを再検討する必要が指摘された。さらに、1人の創作者の作品として映像を考察するばかりでなく、伝統継承者、研究者、教育者、一般の聴衆など、多様なアクターを結び付けて音楽文化を活性化のプロセスとして映像を再想像する必要が確認された。

基盤研究 (B) 海外

経済自由化後の南インド社会の構造変動に関する総合的研究

代表者 杉本良男

目的・内容

本研究は、1990年代以降のインド社会の構造変動について、南インド、タミルナードゥ州及び周辺諸地域を対象に、人類学者と経済学者、地理学者などとの協働により、共同調査、資料収集、文献研究を実施して、総合的・全体関連的に研究しようとするものである。とくに、カースト制を基盤とする農村社会の比重が高かった南インドにおいて、メガシティや海外を結ぶグローバル化が進行するとともに、1) 農村と地方都市を包摂する「地域(ナードゥ)・ネットワーク」を基本単位とする伝統的な社会構造の空洞化が進み(社会経済的基盤の崩壊)、2) カースト制がむしろ都市的・国家的な政治的・イデオロギー的基盤へと変化している(社会政治的意義の拡大)、構造的な社会変動の実態について実証的に明らかにすることを目的としている。

活動報告

インド社会の構造変動に関して以下のような調査・研究を実施した。

- 1) 南インド、タミルナードゥ州タンジャーウル県クンバコーナム市および近郊農村において共同調査を実施した。また、2011年度より実施してきた調査資料の整理作業を引き続き実施し、さらに1990、91年の調査資料との比較分析を行った。その結果、昨年度までの教育、生活水準の変化に加えて、21世紀に入って宗教施設の再建が相次いで行われ、それも外部性を負った人びとのアイデンティティ戦略として実施されていることが、実証的に明らかになった。本件については2014年8月の国際地理学会で共同報告を行なった。
- 2) 上記宗教施設への消費の問題に関連して、ヒンドゥー教の聖地の変容を通じた社会変動を比較検討するため、北インドUP州のベナレス(ワラーナシー)と、西インド・マハーラーシュトラ州のトランバケーシュワルにお

いて調査研究を実施した。

- 3) タミルナードゥ州のキリスト教徒社会におけるカースト問題についての調査研究を継続するとともに、東インド、オディシャ州における改宗法の問題についての比較研究も実施した。
- 4) 社会変動に関する比較研究のために、パリ、ブラハ、チェンマイ、ならびにシンガポール、マレーシアなどのインド人社会における調査研究を実施し、インド人の海外ネットワークが、大都市だけでなく、村落部にまでその影響を及ぼしていることが実証的に明らかになった。

基盤研究 (C) 一般

瀬戸内海及び西日本における多島海世界の民俗芸能の研究

代表者 笹原亮二

目的・内容

西日本各地には、瀬戸内海や五島灘・玄海灘等、多くの島々が存在する多島海の世界がある。そこでは古来、漁労・商業・交通等を生業とする海の民と、彼らを保護・支配する海の領主の活動圏として、島・海・沿岸地域から成る「領域」が形成されてきた。また、各海域は国内外を巡る航路上に位置し、人・物・情報が往来する「道」として外部と頻繁な交流・交渉が見られた。一方、個々の島は地理的制約から、天候等の自然状況や政治的・社会的要因により外部と隔絶し易く、個性や自律性を有する「コミュニティ」が形成された。更に、瀬戸内海は平家等の強大な政治勢力の活躍の場となり、五島灘や玄界灘は「異国」との境界となる等、それぞれ独自の地域性が形作られた。こうした海域の「領域」「道」「コミュニティ」という特質と各々の地域性が相俟って、各々の海域独自の歴史や社会が展開していった。

こうした海域の島々や沿岸地域には、海域外と共通しつつも各海域独自の特徴的な民俗芸能が分布する。その一方で、同一海域の同種の芸能にも様々な差異が認められる。こうした民俗芸能の多様性は、「領域」「道」「コミュニティ」という特質と地域性が交錯しつつ展開してきた、各海域の歴史的環境と民俗芸能の密接な関係の存在を示している。研究では、そうした海域の島と海と沿岸地域を一体として「島嶼世界」と捉え、それぞれの島嶼世界における民俗芸能の実態を、「領域」「道」「コミュニティ」の特質と地域性の中で歴史的に形成・伝承されてきた島嶼世界の民俗文化として解明する。

活動報告

今年度は、だんじりと獅子舞（兵庫県南あわじ市・同県淡路市）、獅子舞と走り御輿と傘踊（岡山県笠岡市）、松山踊（岡山県高梁市）、備中神楽（岡山県倉敷市）、大宮踊（岡山県真庭市）、太鼓踊（広島県三原市）、棕浦法楽踊と中庄神楽（広島市尾道市）、神明踊（山口県柳井市）、神代踊（徳島県三好市）、阿波人形芝居（徳島県徳島市）、田野々の雨乞い踊（香川県観音寺市）、綾子踊（香川県まんのう町）、獅子舞（香川県さぬき市）、湯立神楽と獅子舞（香川県丸亀市）、ももて祭り（香川県三豊市）、継獅子舞（愛媛県今治市）、花とり踊（愛媛県愛南町）、お伊勢踊と伊予神楽（愛媛県宇和島市）、鳥坂鎮縄神楽（愛媛県大洲市）、四ツ太鼓と獅子舞（和歌山県御坊市）、御田植神事（大分県国東市）、島前神楽（隠岐郡西ノ島町）等について、現地調査を行った。また、徳島県立図書館、愛媛県立図書館、倉敷市立船穂図書館、新見市立図書館、岡山県立図書館等の各地の図書館において、それぞれの地域の祭と民俗芸能に関する論文や報告書等の文献資料の調査を行ったほか、香川県立ミュージアム、愛媛歴史文化博物館において、それぞれの地域の祭と民俗芸能に関する映像資料の調査を行った。更に、宇和島市立伊達博物館（愛媛県宇和島市）、倉橋歴史民俗資料館・長門の造船歴史館（広島県呉市）、周防大島文化交流センター・賀歴史民俗資料館（山口県周防大島町）等の各地資料館・博物館において、地域の歴史や文化全体に関する関連資料の調査を行った。

こうした調査を通じ、この地域全域における民俗芸能の多様性の一方で、同一系統の民俗芸能の地域的な分布の偏りの存在が明らかとなり、それが、特に、江戸時代以降のそれぞれの地域が経てきた歴史と密接に関わっている可能性が浮かび上がってきた。

基盤研究 (C) 一般

博物館における全天周科学映像の開発および評価に関する人文・社会学的研究

代表者 松岡葉月

目的・内容

代表者は、一般の人々が人文あるいは自然科学の様々な切り口から科学に関心を持てるように、研究者の視点から文理融合の新たな手だてにおいて、天文・宇宙分野の科学映像「誰も知らなかった星座——南米天の川の暗黒星雲」を企画・制作し、普及までの手だてを整えた。

本研究は、この科学映像を全天周映像化し、博物館などのドーム型スクリーンで上映し、全天周科学映像による視聴者への影響・効果を、これまでに成されていなかった人文・社会学的側面から明らかにすることを目的とする。つまり、視聴者の多様な視聴特性を、人間工学的分析ではなく、視聴者の社会文化的背景と心理的、教育的影響との関わりから分析する。さらに、通常の平面版映像の上映効果との比較も踏まえて、全天周映像の特性と視聴者への影響、および研究者の視点からの映像を効果的に伝える方法を明確化する。

活動報告

2014年度は、全天周映像の特質である臨場感や没入感について、博物館学の分野では初の検討を試み、最新の研究成果を得られた。具体的には博物館学的手法、つまり来館者をとりまく物理、社会、個人的コンテクストに照らし合わせつつ、全天周ドームにおいて異なるドーム径やプロジェクター性能を持つ上映館でのアンケート結果の比較を通して解析を進めた。研究成果として、画像精細度の高さは臨場感や没入感に部分的にしか影響しないこと、画像の精細度よりもドーム径が臨場感・没入感に影響する傾向が見られること、臨場感・没入感には視聴者の心理的側面や地域性などの環境要因の影響も見られることなどが確認でき、博物館学の学会で発表した。

さらに、博物館においては実物資料に近づけるべく高精細デジタル化が進んでいることを受け、全天周ドームにおけるデジタル資料の可能性を検討した。調査は国内有数の恵まれた星空環境に属する視聴者を対象とし、展示や教育普及コンテンツで注目が高まっている全天周ドームを用いてデジタルデータの星空について評価を得た。この調査から全天周という条件下でのデジタル資料の持つ可能性や限界を確認でき、研究成果は日本天文学会で発表した。さらに全天周画像の専門家と、デジタル画像における高精細化の動向やコンテンツに関する意見交換を行うことができ、デジタル画像の高精細化は技術面が先行し、高精細に適したコンテンツについては専門家の間でも模索中であること、最新動向として、建築文化財アーカイブの全天周映像化の試みがあり、今後、人文科学系コンテンツにおいても臨場感や没入感に類する研究の可能性も確認できた。

また、宇宙・天文分野で球形立体表示装置を開発している研究者と連携し、球形立体表示装置と全天周の視聴特性との比較をすべく一般視聴者対象に調査を実施し、全天周特有の臨場感・没入感を更に具体化できた。

基盤研究 (C) 一般

水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究

代表者 平井京之介

目的・内容

本計画は、人びとが水俣病被害者を支援する運動を通じて新たにコミュニティを形成し、国家や社会との関係をつくりかえようとする過程を、人類学的アプローチを用いて明らかにする試みである。本計画では、熊本県水俣市の水俣病被害者支援 NGO「水俣病センター相思社」をコミュニティという観点から調査研究することによって、1970年代半ばから現在までのあいだに、この運動の活動や組織、関係性、資源と、そこに参加する人びとの志向する社会のイメージがいかに変化してきたか、またその過程において、国家統治や資本主義との関係をどのように変化させてきたかを解明することを目的とする。

活動報告

2014年度は、水俣病被害者を支援する NPO 相思社および水俣市周辺において、約 2 か月にわたる現地調査を実施し、特に、民間知識や儀礼的知識、社会的記憶など、相思社に蓄積された知や実践の様式等を中心にデータを収集することができた。その結果、2013年度の調査で明らかになった、相思社内部における世代交代と、相思社と行政との関係の変化について、さらに詳細に具体的内容を明らかにすることができた。

相思社内部における世代交代については、60歳代のメンバーと30歳前後のメンバーとのあいだで活動の方向性を運動方法をめぐってさらに対立が深刻なものとなっていることがわかった。60歳代のメンバーは、改革志向的で、相互に主体性を競うような、1960年代後半の学生運動に通じる運動のスタイルを維持しようとしていたのに対し、30歳前後のメンバーは、現状維持的で、より協調性を重視し、いわば NPO 志向と呼べるような活動のスタイルを好む傾向があった。こうした方向性や運動方法をめぐる差異は、財政が厳しさを増している現在の相思社の活動において、さまざまな局面で深刻な意見の対立を引き起こしていた。

相思社と行政との関係の変化については、相互の信頼関係がいつそう醸成され、いくつかのプロジェクトが協働でおこなわれるようになっていた。とりわけ熊本県主催の水俣病啓蒙普及活動や、水俣市による水俣病資料館の展示リニューアル、相思社が運営する JICA 研修「水銀に関する水俣条約批准に向けた能力強化」等において、協働の成果が明確に現れていた。

なお、並行して、2013年度末に組織した国際シンポジウム「東アジアにおける社会運動の人類学的研究」の成果について、英文の論文集として刊行するための編集作業を予定通り進めることができた。

基盤研究 (C) 一般

トランスナショナルな社会運動と政治参加の人類学——オセアニア大国の移民を事例に

代表者 丹羽典生

目的・内容

本研究は、第三世界における社会運動の特質の一端を、オセアニアをフィールドとして解明することを目的としている。オセアニアにおいては、植民地時代の宗教的・反植民地の運動、プロトナショナリズム運動の時代を経て、1980年代後半以降グローバル化の影響のもと、暴動から民族紛争、クーデターが生起する中で様々な政治的な社会運動が再度活性化している。本研究では、理論的には1980年代以降の新たな社会運動、参加型民主主義の研究、事例としては移民コミュニティと宗教復興やナショナリズムとの相関関係に関する研究を念頭に置きつつ、民族誌的記述分析を通じて、社会運動に関する文化人類学的考察を行う。最終的には、グローバル化された現在の社会運動の特質を明らかにし、さらには社会運動論に対する理論的貢献を試みたい。

活動報告

オセアニア大国における移民社会の形成という歴史的軸からと、現在の状況からという二方向から対象に接近を行った。後者については、オーストラリア（メルボルン、キャンベラ、ブリスベン）、ニュージーランド（オークランド）にて、関係者や研究者との情報交換と現地調査を行った。また、フィジーの政治的混乱に際して、トンガとのネットワークが果たした役割が知られているが、その点についても、トンガにおいて若干の調査を行った。前者については、オーストラリアの公文書館、国会図書館、オーストラリア国立大学図書館、オークランド大学図書館及び書店にて、関係資料の収集・閲覧を行った。また、オセアニア大国における移民社会形成の文脈に関する歴史史料の収集のため、海外では収蔵されていないオセアニア大国への移民関係資料の収集閲覧を日本で行った。これまで収集した関連書籍、資料の整理を効率的に行うため、アルバイトを雇用した。

成果公開としては、編著の編集を行い、現在出版助成の内諾を得たので、来年度中に刊行の予定である。それ以外ではエッセイなど短い文章を複数刊行した。口頭発表は、本研究課題の進捗状況も2年目に入ったので、社会運動論、政治参画について人類学的な理論を念頭に置き、危機への対応という文脈にて、また、保守思想と文化的政治的サポートの表明という文脈というそれぞれのパネルにて、研究発表を行うことで、オセアニアからの事例に基づき、それを組み合わせつつ、より一般的な人類学的研究課題へと昇華することを試みた。あわせて成果報告を見据えた研究者との打ち合わせも適宜行っている。

基盤研究 (C) 一般

バイパス型私企業活動の活性化による、マダガスカル山間部の住民行動と地域構造の変容

代表者 飯田 卓

目的・内容

本研究の目的は、2009年初頭以降のマダガスカル暫定政権下において、村落部の生活がこうむった影響を明らかにすることである。この時期、国家の統治力が減退したにもかかわらず、国外との結びつきは遮断されず、むしろますます緊密なものとなった。この結果、国家が明確な方針をもたないまま国外企業の活動を許してしまい、とくに村落部ではさまざまな輸出天然資源の採取が活発化するようになっていく。このように国家の調整を受けずいわばバイパスするかたちでおこなわれる民間活動の実態を、小生産者からの聞きとりによって把握し、村落部住民の行動や地域構造に与えた効果を主として現地調査によって明らかにする。

活動報告

初年度（2013年度）の調査で明らかになったことのひとつに、フランス系のNGOが人道的支援と称して、山間部の木造民家新築を奨励するプロジェクトを進めているという事実がある。第2年度（2014年度）はこの点についてより詳しい調査をおこない、新築された民家の木材にかならずしも適切な樹種が用いられていないこと、適切な樹種の場合でも樹齢の若い材が用いられていることが明らかとなった。このことは、周囲の森林からの建材調達に困難になっていることを示している。そのいっぽうで、建築技能を身につけた特定の村の職能者たちは、建築景気に喜びを隠さない。海外に拠点を置く団体の活動が村の経済構造を大きく変えているという点で、国家の調整を受けない「バイパス型私企業活動」の一例とみなすことができた。

こうした活動が近年活発になっている理由としては、2009年初頭から2013年末まで約5年間続いた暫定政権の統治力が弱かったことよりも、2002年から2008年にかけて進められた地方分権政策の影響が大きかったことが、文献調査により明らかになった。地方分権政策の影響は、鉱物採掘や自然保護の分野でとりわけ大きかったようである。

以上の成果の一端は、2014年12月に開かれたアメリカ人類学会（AAA）でも報告した。また、このことに関する英語論文ならびに日本語論文の発表媒体もほぼ決まっており、2015年度はこのための執筆にあてる予定である。

基盤研究 (C) 一般**スイスにおける高齢者のウェルビーイングと代替医療の適用に関する文化人類学研究**

代表者 鈴木七美

目的・内容

社会の高齢化に伴い、完治困難な心身の不調への対応として、養生法や代替医療への関心が高まっている。本研究の目的は、「補完代替医療 (CAM)」や「ヒーリング・オルタナティヴス」とも呼ばれてきた、近代西洋医学 (コスモポリタン医学) に一体化されない代替医療や養生の実践と、地域における治療・養生に関する考え方や制度との関係を、高齢者ケアの充実という観点から検討することである。

調査対象とする主な地域は、近代西洋医学とホメオパシー (同種療法) の併用を基盤として植物療法など多様な民間医療・代替医療が実践されてきたスイスである。ホメオパシー及び植物療法に関し、スイスと影響関係にあるドイツやアメリカ合衆国と比較しつつ検討することにより、地域資源を生かした治療やヒーリングの実践の可能性について、様々な領域の研究者・実践者が参照可能な形で、フィールドワークに基づく成果を具体的に提示する。

活動報告

現代医療と多様な民間医療・代替医療が実践されてきたスイス、及びホメオパシー (同毒療法) や植物療法に関し、スイスと影響関係にあるドイツなど欧州の他の地域と比較しつつ、情報収集・現地調査を展開した。

地域資源を生かした治療やヒーリングの実践の可能性について、国立民族学博物館で国際研究集会①②を開催し、議論を深め情報収集した。①では、ドイツやルーマニアの研究者を招聘し、民間医療・代替医療の歴史と現在に関する発表と議論を通じて、地域資源を生かした地域医療の形成過程と利用に関し情報を蓄積した。また、②では、中国、モンゴル、そして韓国における民間治療と人々のアイデンティティや食文化など日常生活との関係について議論し、代替医療として提示される実践とライフスタイルやウェルビーイング観の関係について、考察を深めた。

現地調査として、高齢者が暮らしやすい町づくりを推進しているスイス、ドイツの地方都市において、予備調査に基づき、高齢者と若者世代が共に作る環境と養生に配慮した暮らしの場について、企画と建設過程、共有スペースや時間の共有に関する構想と実践に関し、集中的に情報を収集した。高齢者ケアと補完代替医療については、2013年度に収集した基本的資料と調査成果を生かして、スイス中部地域において、フィットセラピーを活用している高齢者生活支援付住居が含まれる複合施設について現地調査を進めた。障害者が学び働く場、子どもたちの教育の場、農産物生産の場、コンサートホールやレストラン・ホテルなど内外の人々の利用に開かれた場を有する総合施設の各部署においてインタビュー調査および参与観察を行った。また、障害者が住み慣れた町で仕事や交流をしながら長期に暮らせる住居・交流施設の創出について、比較的視点から調査を行った。

ホメオパシーなど代替医療や民間医療の歴史と現在に関し、書籍を編集し論文を執筆した。

若手研究 (B)**現代エジプトのオルタナティヴ・モダニティとしての空手実践に関する社会人類学的研究**

代表者 相島葉月

目的・内容

中東におけるモダニティの系譜を探究するに際し、「社会階層」は最も有用な切り口の一つである。近年、新自由主義経済の広がりにより、学歴や所得で中流層と下流層を差異化することがより困難になる中、「教養」の有無を指標とする新たな「階層観」が構築されつつある。この文脈において本研究は、エジプトのスポーツ実践に象徴された「身体化された教養」をめぐるポリティクスを、西洋の近代性に代わる、独自のモダニティを創出する試みとして考察する。エジプトを代表する大衆的スポーツである空手道コミュニティ (競技者、指導者、父兄) の事例より、中流層的な倫理観とモダニティの関係性を再考する。

活動報告

2014年度の目標は昨年度に引き続きエジプトにおける空手道の実践を都市中流層の階級意識に関連付けて考察することであった。春と冬にカイロに2週間ほど度滞し、若者文化やスポーツに関する大衆紙を収集するとともに、空手道の稽古場や競技会を訪問し、指導者、競技者及び父兄への聞き取り調査を行った。社会理論においてスポーツ実践は「余暇」として捉えられるが、エジプトの中流層出身の空手家はスポーツと「楽しみ」を結びつけることを嫌う傾向にある。エアロビクスやウエイトリフティングなどは体を鍛えるために有意義な行為であるが、試合での勝利やメダルの獲得を目指したスポーツとは異なるという点を強調する。通常の稽古と比べ、試合対する真剣さや勝利への執着心の強さに驚かされた。空手家やコーチの家庭を訪問したり、フェイスブックに掲載された写真を閲覧したりする過程で、試合で獲得したメダルやトロフィーはもちろんのこと、講習会の参加証や写真までも中流層的な階級意識を保つために重要な意義をもつことが明らかになった。試合への真剣な取り組みを見ていると、ス

スポーツが実利的な利益をもたらすことは考えにくいとは言え、中流層の「余暇」として分析することに違和感を覚えた。

今年度の調査から空手道を中流層の文化実践と結びつける手がかりが見つかりつつある。1970年代に日刊紙・アル＝アフラームが空手について報道し始めた際に、スポーツ面ではなく、文化面に記事を掲載した。文化面には芸術や文学だけでなく、宗教やスポーツに関するニュースも含まれていた。今年度は「文化」と結びつくあらゆる施設で行われている空手教室を訪問した。中流層が教養を身に着ける機会を提供するために1950年代より建設された青少年センター（マルカズ・シャバープ）だけでなく、図書館の閲覧室や金曜礼拝向けモスクの庭においても空手の稽古が行われ、多くの子供や父兄でにぎわっていた。

若手研究 (B)

言語多様性の記述を通して見る中国雲南省チベット語の方言形成の研究

代表者 鈴木博之

目的・内容

チベット文化圏の南東端に位置し、他の民族文化圏と接する中国雲南省北西部で話されるチベット語諸方言は、その分布地域の範囲に照らして非常に大きな多様性を持っている。本研究では、同地のチベット語諸方言が多様で独特の言語特徴をいかにして持つようになったのかという問題を提起し、同地の多言語状況に配慮しながら、記述言語学の方法論を用いて数十地点にわたる語彙・文法事項に関する方言調査によって得られたデータを、比較言語学および地理言語学の方法論で分析することを通じてこの問題を解明することを目的とする。

活動報告

本研究は 1) 臨地調査と、2) データ整理・解釈に分かれる。

1)については、短期の臨地調査を2度行い、雲南省香格里拉県、徳欽県および維西県において合計6種のカムチベット語方言 (Choswateng, Gagatang, mBalhag, lCagspel, sNyingthong, Chumdolog) の語彙・文法調査を行った。また、次年度の調査に向けて、村落の選定を行うための基礎情報を収集した。また、香格里拉県の村落に伝わる村民の歴史を口頭で語ってもらい、言語資料として供するだけでなく、移民の年代・状況などを把握する史料価値のあるものを収集できた。

2)については、まず収集した言語データは電子的にデータベース化し、検索可能な電子的資料を作成した。次に、言語地図を作製するベースとして、Google Mapsの地点情報に基づいてArcGISおよびGeocodingで処理できる形式として整理した。これらのデータを利用し、複数枚の言語地図を作成すべく試行錯誤を試み、音声・語彙形式・文法特徴に関する20枚の地図を作成した。

以上の成果に基づいて、論文について本研究に直接的にかかわるものを7件、副次的成果として6件発表し、各種学会において口頭発表を12件行った。口頭発表の際には、参加者との交流において、地理言語学・歴史言語学の方法論を検討する機会を持つことができ、本研究を推進するために役立った。また、2度の招待講演において研究成果に関する話題を提供した。また、研究最終年度末に予定している単著の執筆について、中国において具体的な出版のめどが立った。

若手研究 (B)

漢族的特色の空間利用とエスニシティの再編——中・越隣接エリアの調査研究

代表者 河合洋尚

目的・内容

中国／ベトナムの隣接区は、多数の少数民族が居住することで知られているが、最近、漢族を資源として地域的特色を出し、地域経済を推進する動きが強まっている。本研究は、こうした最近の動向に焦点を当て、地方政府、開発業者、旅行会社、地域住民、華僑等が、どのように漢族文化を用いて地域空間の特色を生産してきたのか、国境を超えたポリティクスについて解明することを目的とする。同時に、漢族的な地域空間の生産が、現地の漢族間、漢族／少数民族間関係を再編してきた過程についても明らかにする。本研究では、国境を超えて活動する漢族の下位集団として、とくに客家および客人に焦点を当てる。

活動報告

中国、ベトナムの国境際において漢族の特色を用いて地域開発をする傾向は、現在、中国とベトナムの双方で強まっている。そのうち、有力な資源の一つとなっているのが、「僑郷」という言説を用い、ある空間が華僑の故郷であることを強調することで、地域開発を促進するものである。本研究は、雲南省南部の紅河州において、「僑郷」としての空間がいかに生産されてきたかを、役人、学者、住民などのインタビュー等から明らかにすることができ

た。さらに、四川省成都市や広西チワン族自治区の博白県、陸川県、北海市など、国境より少し離れた地域でも、漢族文化（客家文化）を利用した文化創造と地域開発が促進されていることが分かった。他方で、ベトナム側では、漢族が少なく、中国系住民の行動が規制されている北部で、漢族的特色を目に見える形でアピールすることをしていない。ただし、ホーチミンなど南部のホア人、ンガイ人らは、漢族的特色を利用したエスニック空間を形成している。なかでも、ンガイ人は、ベトナム北部から南部に移住した集団であり、護国観音廟を中心に独自のネットワークとアイデンティティを形成していることが分かった。さらに、それらの形成は、ベトナムだけにとどまることなく、中国、さらにはアメリカ、オーストラリア等とのネットワークが無視できない。本研究では、ベトナムと中国を架橋するンガイ人とホア人客家の越境ネットワークと、それによる空間的特色の創造の過程を明らかにすることができた。

若手研究（B）

アフリカの無形文化保護における民族誌映画の活用

代表者 川瀬 慈

目的・内容

本研究の目的は、エチオピアの無形文化を対象にした民族誌映画を事例に、映像を活用した文化保護モデルの構築を目指すことである。近年、無形文化遺産の保護を推進している UNESCO は、アフリカの無形文化を映像によって記録し活用する方法を推奨している。しかし、国際機関が掲げる記録・保護すべき無形文化遺産の理念と、地域住民の無形文化に対する認識の間に溝があり、対象地域における映像記録の活用に関する議論が十分に行われていない。本研究では、保護すべき「無形文化遺産」について、応用映像人類学的な観点から検討し、今日消滅ないしは著しい変容を強いられているアフリカの無形文化を対象にした望ましい映画制作・活用の指針を示す。

活動報告

2014年度は5月に開催された日本文化人類学会50周年記念国際研究大会（IUAES 2014、於：幕張メッセ）にて『New Horizon of Anthropological Films from Japan』と題した上映企画を行い、各国の映像人類学者と映像民族誌の制作方法論に関する議論を行った。さらに、学術雑誌『年報カルチュラル・スタディーズ』第2号の映像人類学特集企画に、研究課題に関する論稿を発表した。年度後半には、編著者として関わった出版物『フィールド映像術』（古今書院）、そして『アフリカンポップス！文化人類学からみる魅惑の音楽世界』が刊行された。これらの出版物を通して、報告者の制作方法論の変遷や作品に対する様々な社会的文脈における視聴者の反応について考察した論稿を発表した。報告者が制作した映像民族誌の特集上映が以下の場や機会に企画・実行され、フランスを除くすべての会に参加し、上映後の討論に参加した。

第7回中華人民共和国映像人類学会年次総会／貴州師範大学（中国、8月、2作品の上映）、ブレーメン大学人類学・文化調査学部（ドイツ、11月、5作品の上映）、トロムソ大学映像文化研究科＋トロムソ大学博物館（ノルウェー、11月、8作品の上映）、第8回シネマ・ヴェリテ・国際ドキュメンタリー映画祭（イラン、12月、2作品の上映）、La Péniche ANAKO（フランス、2月、3作品の上映）さらに、全州市（大韓民国）において10月に開催された第1回無形遺産国際映画祭においては、企画構想段階から、アドバイザー的にかかわり、映画祭当日も、報告者の作品上映を行った。

若手研究（B）

高齢者介護と相続の相関にみる沖縄の「家族」に関する人類学的研究

代表者 加賀谷真梨

目的・内容

本研究は、介護保険サービスの拡充後もなお「家族」が高齢者の生に対する責任を手放さない要因を「継承」という行為それ自体を重んじる日本人の観念に由来すると仮定し、それを高齢者介護と位牌や土地の相続との相関に関する実態調査を通じて検証する。調査地は、位牌継承における長男の単独相続と親の介護・扶養とが理念的・実体的に結合した沖縄の波照間島と久高島とする。高齢者とその「家族」間にどのようなパワーポリティクスが展開し、数いる成員の中からいかなる論理に基づき特定の介護者が選定され、また、位牌と土地の相続はそれぞれどのような論理で決定されたのか、介護と相続という本来別個な行為が「家族」というチャンネルを通じて同一化／非同化する局面に立ち現れる論理と、そこに読み取れる合理性を明らかにする。その上で、「家族」が何を希求する集団なのかを見定め、高齢者の生に対する責任を手放さない日本の「家族」の深奥に迫る。

活動報告

2014年度は、沖縄県内で2000年に同じプロジェクト傘下で開始された離島の高齢者地域介護事業の現在の状況に

ついて、波照間島と久高島で比較調査を行った。今年度初めて久高島に赴き、同活動の継続が困難であった背景を、島の歴史、生業、社会構造等との連関に留意しながら明らかにした。その結果、近代化（世俗化）のうねりに対して、久高島の人々が霊的世界をそのまま保持し、それに依拠することで対応（対抗）しようとした戦略が、間接的に地域介護をはじめとする祭祀以外の自律的な活動の継続を困難にしていることが明らかになった。

具体的な研究成果として、波照間島における地域介護をめぐるコンフリクトについて、5月16日にIUAESにおいて「Family and “family-like” people: conflicts over community-based elderly care」と題する研究発表を行った。また、地域介護の継続要因を再帰性という観点から読み解いた論文「ジェンダー視角の民俗誌——個と社会の関係を問い直す」を、森話社刊行の『<人>と向き合う民俗学（2014）』に寄稿した。久高島の調査結果に関しては、国立民族学博物館のウィークエンド・サロンで発表した。さらに、ボランティアアソシエーションの維持や存続の仕組みという観点から神奈川県で女性相談活動を行う非営利女性団体を読み解いた英語論文「An Alternative Place for Women: A Case Study of Women's Support Activities in Japan」を国立民族学博物館発行の『Senri Ethnological Studies』に投稿した。

若手研究（B）

博物館展示の再編過程の国際比較による「真正な文化」の生成メカニズムの解明

代表者 太田心平

目的・内容

各国の民族学博物館では、韓国・朝鮮文化の展示が劇的に改装されつつある。本研究では、諸博物館で同時進行するこれらの改装作業を調査し、各準備過程の共通点と相違点を明らかにする。

本研究の目的は2つある。第1は、韓国・朝鮮研究の立場から、民族学、特に知識人類学の分野に理論的に貢献することである。韓国・朝鮮の「真正な文化」が再編される様相を、深層的かつ総合的に分析することで、民族文化の権威的知識が生成されるメカニズムの解明に寄与する。

第2は、博物館展示学に寄与するためのもので、展示の準備過程の国際比較である。同時に進む同類の改装作業を包括的に精査して、展示実践の過程と、近未来の博物館像を演繹的に解明する。本研究は博物館展示を、完成した展示の良悪や善悪や正偽で評価しようとするのではない。その準備過程に潜む文化的な装置に着目し、ブラック・ボックスとされていた展示準備過程を解明するものである。

活動報告

4月から1月にかけて、米国と韓国の博物館に関する聴き取り調査をおこない、その結果を3月の国際会議にて発表した。

今年度は特に、韓国・朝鮮の伝統文化を展示する際に、どういった階層の人びとの文化を展示することが相応しいと考えられるかという問題に着目し、研究を進めた。韓国・朝鮮の「真正な」文化の具現としてもっともよく語られるのは、(旧)在地土族層という人びとである。このため、博物館の文化展示でも、(旧)在地土族層の文化を表象しようというのが、20世紀には多く作られた。ただ、21世紀の韓国・朝鮮研究者たちはこれに異議を呈するようになった。背景には、(旧)在地土族層とはかなり違った特徴をもつ(旧)在京土族層についても研究が進んできたこと、そもそも(旧)土族層が韓国・朝鮮で少数者に過ぎないという認識が広まったことなどがある。

しかし、(旧)在地土族層に関する展示を韓国・朝鮮の文化展示から外すことは、容易なことといえないことが、本研究から確認できた。理由は第1に、博物館を訪ねる観覧者たちが「お決まりの」韓国・朝鮮の文化展示を期待するため、それを逸脱した展示は期待を裏切ることになるからだ。また第2に、21世紀の研究潮流を識らない同僚たちが、韓国・朝鮮研究を専門とするキュレーターたちの計画に待ったをかけることがあるからである。そして第3に、(旧)在地土族層以外の人びとが、展示されることを望まないことが多いからである。

上記の第1の理由は、「文化の監査」という問題系として、社会文化人類学で議論されてきたものに属する。第2の理由は、専門性への介入の問題として、産業社会学で語られてきたものと、節合点を有する問題であるといえた。そして第3の問題は、これまでほとんど注目されることがなかったものの、文化展示がいかに作られるかという議論に欠かすことが出来ないものとして、本研究から発信できた。

挑戦的萌芽研究

動的共創型デジタルアーカイブ構築——梅棹忠夫資料に基づいて

代表者 久保正敏

目的・内容

国立民族学博物館（以下、民博）初代館長・梅棹忠夫が残した膨大な資料は、フィールドワーク途上の諸記録だ

けでなく、生涯にわたる知的生産活動に関わり、幅広い地域と分野をカバーした世界に誇る文化資源である。2011年度来、民博ではこの「梅棹忠夫資料」の整理保存を開始し、目録情報のデータ入力と解析を進めている。

本研究では、入力されたデータに基づき、多分野研究者がそこで見出し記述した資料間の関係性を共有し、動的に共同で知を創出できる共創型デジタルアーカイブズ・システムを構築する。これを多分野研究者が共有することで、民族学史・調査探検史等の解明を共同で進めることが期待できるとともに、他機関でも研究者の残したアーカイブズ資料のデジタル化を進める際のモデルとなることが期待できる。

活動報告

前年度試作したシステムについて、まず、モンゴル関係の研究者や情報学研究者による評価と問題点の洗い出しを行った。次いで、博物館学研究者、学術行政関係研究者等から選抜した評価グループを策定して、そのメンバーに限定した評価システムを開発して公開し、「時間値・空間値・主題値（キーワード）群」三つ組による内容索引のうち、特に付与された主題値の妥当性、タグ付きリンクの有効性についての評価を行った。また、認証付きシステム及び一般公開システムの切り分けと運用方法を確定させた。

研究活動スタート支援

女性移民・人身売買被害者支援運動の変容とその多元的リアリティの解明：タイを事例に

代表者 松井智子

目的・内容

本研究の目的は、女性移民および人身売買被害者に関する言説を、国際レベル／送り出し国内レベル／支援運動の現場レベルに区分して分析し、それらの言説と女性移民および人身売買被害者当事者の多元的なリアリティとの関係性を明らかにすることである。

本研究は、事例として、タイの女性移民・人身売買被害者支援運動を対象とする。まず、1990年代以降の女性移民・人身売買被害者に関する言説を、国際／国内／支援運動現場の各レベルにおいて分析し、女性の移動・親密圏・セクシュアリティ等を問題化する論理を明らかにする。次いで、支援運動の現場レベルにおけるミクロな過程を調査し、各レベルの言説・論理と現場のリアリティとの関係性を分析する。

活動報告

本年度は、女性移民・人身売買被害者支援運動の多元的リアリティについての調査研究を中心に行った。支援運動のモデルとして、「国際ネットワーク連携モデル」、「コミュニティ・ノーマライゼーションモデル」にあたる二つのグループを対象に検討した。

「国際ネットワーク連携モデル」として取り上げたグループは、日本人スタッフとタイ人スタッフのほか、故地コミュニティに帰郷した女性移民・人身売買被害者10数名がプロジェクトメンバーとして活動しており、その支援対象者は70名程度である。啓発活動、調査活動、帰国女性の相談受付、帰国女性へのマイクロクレジット活動、タイ・ジャパニーズ・チルドレン（TJC）の教育支援等を行ってきた。また日本の市民団体や国際NGOと連携し、国境を越えた支援活動を展開してきた。このグループでは、移動する当事者の経験は被害経験として構築され、支援の対象とされていく一方で、当事者間の交流の結果、当事者が支援運動を相対化する視点を得たり、いわゆる被害経験からはズレる思いや語りが現れていた。すなわち、「支援－被支援」という関係が固定化せず、常に揺らぎをみせていた。

他方、「コミュニティ・ノーマライゼーションモデル」として取り上げたグループは、代表者や事務所を持たず、問題が生じたときに対応する形をとっており、地域コミュニティに溶け込む形で活動してきた。メンバーには帰国女性のみならず男性も含まれている。このグループは「支援－被支援」という明示的な関係ではなく、またコミュニティに期待される文脈から外れる当事者の経験は語られにくいという傾向がみられた。

本年度の調査研究の結果についてさらに考察を深め、前年度の成果と総合して考察することが課題である。その成果に基づいて、定住パラダイムに代わる枠組みを検討し、現代移民理論に対して貢献すること、また実践面において、女性移民・人身売買被害者支援運動の新しい支援枠組みを提示することを目指している。

研究活動スタート支援

西アフリカにおける生権力の複数性：ガーナ南部における結核対策を事例に

代表者 浜田明範

目的・内容

今日、西アフリカで暮らす人々の多くは、ヘルスセンターや病院、薬剤の日常的な利用を通して生物医療と関わっている。人間の生病死に関わる生物医療とそれをめぐる状況への注目は、人々の生活における重要度に加え、科

学技術の普及やグローバル化の影響の格好の事例となるという点からも、人類学的研究の有効な出発点を提供してくれる。

本研究の目的は、ガーナ南部における結核対策プロジェクトの展開に注目することにより、生物医療が 1) どのように異なる立場の人々の行為を統制しながら全体的な目標を達成しようとしているのか、2) どのようなモノ・行為・制度の配置によって人々の自己統治を促しているのか、3) どのように「生かすべき者」と「死ぬに任せる者」を結果的に選別しているのか、の3点について明らかにすることである。

活動報告

本研究の最終年度にあたる2014年度は、当初の計画通り、ガーナ南部の農村地帯において現地調査を実施した。具体的な成果として、以下の3点が明らかになった。

まず、結核治療においては、毎日欠かさず、決まった時間に薬剤を服用することが求められるが、ガーナにおいては、必ずしも国際的に標準化されているように看護師の面前で薬剤が服用されているわけではない。これは、看護師の怠慢というよりは人員不足のためである。このような、標準的な治療の失敗の結果、患者はむしろ主体的に薬剤を服用する必要性に駆られており、配布される服薬チェックシートは患者の主体化を支える重要なツールとなっている。

次に、結核患者を取り巻く人間関係の再編成は、部分的には、乳幼児との接触を避けるように促す結核対策の影響と言えなくもないが、それにもまして、患者の経済状況や患者の家族によるより良い生の希求に影響されていることが明らかになった。長期の治療を必要とする結核は、貧困と負のスパイラルを起こすことが多く、治療の成否は経済状況と密接に関連する。そのため、患者がどのような規模の家族の中でどのような役割を担っているのかが治療にとって重要になるのだが、この家族の状況は、患者自身だけでなく、他の家族の希望によっても変更され続けていた。

最後に、ガーナにおける結核対策における「生かすべき者」と「死ぬに任せる者」の選別は、結果的に、担当看護師の本気度や柔軟さ、経験に依存していることが明らかになった。結核対策を担当するコミュニティ・ヘルス・ナースには、患者を早期発見するためにコミュニティを巡回することが推奨されているが、その他の感染症対策や乳幼児健診も担当する看護師達には十分な時間が与えられていない。そのため、結核患者へのケアの質は、個々の看護師の性格や経験に依存することになっている。

研究活動スタート支援

モノからみる芸能文化のグローバル化——バリの仮面と楽器を事例として

代表者 吉田ゆか子

目的・内容

本研究は、世界各地で現地の芸能家によって演奏や上演に用いられるようになった、バリのガムラン楽器および仮面が、その後各地の人々とどのように関わっているのかを明らかにする。バリでは、楽器や仮面は神格（あるいはその力）を宿す存在である。これらのモノが新たな土地でどのように扱われ、またその土地のモノの配置（e.g. 住環境）や物質文化や音楽文化にどのように影響され、また現地の人々にどのような働きかけをしているのかを、日本、北米、香港、ジャワ島の事例から明らかにする。また、米国や日本でみられる、自作のガムラン楽器や仮面の利用実態も明らかにし、これらのモノが、現地のバリ芸能実践にいかなる影響を与えるのかも考察する。民族芸能のグローバル化という現象を、モノの側から考察し、音や舞踊や演劇だけでなく、それを支える物質文化をも含みこんだ「芸能文化」の越境の問題として問い直す。

活動報告

国内では、都内を中心に3つの日本人によるバリ芸能実践グループの活動の調査を続けた。部分的には、自身も公演に携わりながら、参与観察をおこなった。海外では、米国（ボストン、パークレイ、ホノルル）と香港およびジャカルタを訪れ活動実態についての調査を行った。また本年は、ガムランの主要な形式であるゴン・クビヤールの誕生100周年を記念するイベントがバリ島現地で開催され、日本と米国からのグループが出演したため、この現地調査も行った。

米国では、大学内で結成されたり、それを地元で発展させる形でグループが結成されることが多い。ボストンのグループは、実験的な曲作りが特徴的で楽器自体もオリジナルに開発している。パークレイのグループは歴史が長くまたバリとのつながりが深い。ハワイには比較的新しいグループがあり、現在大きなプロジェクトを抱えている。

日本国内では、大学とは別にグループが多数結成されている点が特徴的である。また、神社や寺といった宗教的公共空間を利用した上演活動が頻繁にみられる点も興味深い。

ジャカルタでは、ヒンドゥ教徒コミュニティを母体にしたり、舞踊教室としてグループが結成されているが、ム

スリムの参加者も多い。

調査対象となったグループは多様だが、どこもが多かれ少なかれバリのモノに関わる信仰・文化に学び、供物を楽器や仮面に供える等の実践をしていた。また、楽器の重さ、大きさ、音量が、さまざまな面で実践に影響を与えている。加えて日本の神道や仏教そしてジャカルタのイスラム教といった、現地の宗教的な文脈に部分的に影響も受けている。現在はこれらの事柄の具体的な差異や共通点について分析を進めている。

なお期間中は2つの国際学会にて口頭発表し、意見交換をした。さらに、米国の民族音楽学会を訪れ、モノに着目する民族音楽学の最新の研究動向について情報収集した。

研究活動スタート支援

気候変動の政治経済と中南米低地先住民の所有実践

代表者 近藤 宏

目的・内容

現代の気候変動を前に、今日では熱帯林地帯に居住する先住民も緩和対策の担い手として位置づけられるようになっている。炭素取引と連動させることで、森林減少の抑止に経済的インセンティブを与える制度が国際的に議論され、政策として実現され始めている。それは、炭素という新しい所有物を先住民の生活にもたらす制度である。この新しい所有物の導入が、現地における自然資源利用の諸実践とどのように切り結ばれるのか、そして先住民と視線との諸関係を何をもたらしのか、という問いを立て、エクアドルの先住民アチュアルとパナマの先住民のエンベラのもとで現地調査を行い、この新しい事態について民族誌的な水準から考察することが研究の目的である。

活動報告

今年度は8月から9月にかけてパナマ東部に現地調査を行った。調査前には、パナマの先住民が気候変動に関する経済開発への参加をとりやめたというニュースが流れていたため、この点について、主たる対象であるエンベラによるその考えを確認するなどした。新しい経済開発の不参加の決定は、それ自体で独立した問題というよりも、先住民を取り巻く社会環境の中で、先住民自身が手にした権利（土地に対する権利やそこでの開発を主体的に決定する権利）を十分に行使できないと感じざるを得ない状況があることが明らかになった。

研究成果公開促進費（データベース）

梅棹忠夫資料のデジタルアーカイブズ

代表者 久保正敏

目的・内容

梅棹忠夫は国立民族学博物館（以下、民博）に膨大な資料を残した。フィールドノート、スケッチ、写真などフィールドワーク途上で作成された一次資料に始まり、原稿執筆のアイデアを記したカード類、その整理結果から原稿の各段落に対応する梗概を記した「ござね」、原稿、自著への書評などの知的生産活動に関わるものの他、学術調査探検隊・共同研究会・学会の組織活動、学術機関運営や学術行政、民博創設と準備の博物館調査等に関わる資料も含まれる。梅棹はこれら資料を駆使し、モンゴル・アフリカ・東南アジアなどの地域研究のほか、情報論、比較文明論、女性論、家庭論、博物館展示論、研究経営論など、幅広い学を打ち立てた。従ってこれら資料と資料間の関係性を分析することは、梅棹の知的生産の過程のみならず、日本の民族学史や海外調査・探検史、文化行政史等の研究に寄与することが期待できる。そのため、データベース化と共有が切望されてきた。

そこで今回、資料間の相関関係に基づく梅棹忠夫「知的生産の学」を解明し、関連する分野の今後の研究に生かすために、民博だけでなく、梅棹の研究分野に関わる多分野研究者の参加を求め、それぞれが発見した資料間の相関関係の記述も含めたデジタルアーカイブズの構築を目指すに至った。これは、梅棹自身の望んでいた共同的な知の創造にかなうものである。

成果物

デジタル化したフィールドノートや原稿類は、準備の整ったものから順次、下記の民博ウェブサイトからの公開を継続しており、現在約62,000件が公開済みである。<http://nsearch.minpaku.ac.jp/umesao-archives/index.html>

特別研究員奨励費

紀元後5世紀イロパング火山噴火前後のメソアメリカ太平洋沿岸部の生業と社会の研究

代表者 市川 彰

目的・内容

本研究の目的は、次の3点である。

- 1) 先古典期から古典期にかけてのメソアメリカ太平洋沿岸部の製塩活動と社会の実態を解明すること
- 2) イロパンゴ火山噴火が沿岸部社会に与えた影響を解明すること
- 3) 紀元後5世紀イロパンゴ火山の巨大噴火前後のメソアメリカ太平洋沿岸部の生業と社会の特質について考古学的に明らかにすること

活動報告

本研究の遂行により、「沿岸部社会・塩・火山噴火」というメソアメリカ考古学研究において重要視されながらも研究の実現が困難であった、もしくは調査研究が不十分であった課題を克服することが可能となり、生業研究や災害考古学への貢献が期待できる。研究成果は以下のとおりである。

ヌエバ・エスペランサ遺跡の考古学調査では、発掘調査に加えて大量に出土する粗製土器片に付着する白色物質の化学分析、土壌成分の分析をおこなった。その結果、エルサルバドル太平洋沿岸部では少なくとも紀元後100年頃にはすでに集約的な土器製塩活動が存在し、それらは植物質食料（C4植物）を中心として定住生活を営む社会集団による季節労働であると推察され、製塩活動以外にも黒曜石などを遠隔地から入手し、墓には往時の社会的地位などを反映させていたことが明らかとなった。またイロパンゴ火山灰との層位的関係・出土遺物の分析の結果、噴火年代は紀元後400から450年頃、噴火時に儀礼をおこなう時間が存在したこと、つまり避難する猶予が存在したことが明らかとなった。

また、イロパンゴ火山灰との層位的関係の明瞭な遺跡から出土した土器の型式学的分析や放射性炭素年代測定によって、火口からの距離によって噴火のインパクトが異なることを明らかにし、先スペイン期の人々の多様な火山噴火への対応の一部を考古学的に明らかにした。

特別研究員奨励費

社会空間の動態と行為の演劇性をめぐる人類学的研究：ポリネシアにおける贈与の全体性

代表者 比嘉夏子

目的・内容

本研究の目的は、ポリネシア地域における社会経済実践を 1) 社会空間の動態と 2) 行為の演劇性という新たな視角から分析し、人文・社会科学の中心的命題となってきた「贈与の全体性」を実証的に解明することである。本研究の遂行により、現代的な社会文脈の中で生きる島嶼民がいかにして全体的営為としての贈与経済を存続させてきたのか、その実践が明らかになると同時に、近年の知の潮流における贈与論再評価の動向や反功利主義思想に対して、実践的な参照枠組みを提供することが可能となる。したがって本研究では、贈与論の主要な事例を提供してきたポリネシア地域を研究対象に、これまでの研究とは異なった新たな2つの視点を用いて現地における実践を検証し、贈与経済理論の新機軸を確立することを目指す。

理論と実践の間に存在する上述した矛盾を克服しそれら社会的実践の「全体性」へ接近する具体的方法論として、1) ローカルな社会空間認識と、2) そのような社会空間において顕在化する行為の演劇性に焦点をあてて考察を進める。これらの視点を導入することで、複数の参加者が集う場の相互行為力学と、そのような空間に深く滲透している演劇性を解明することができる。そこから両者の統合的な理解が達成されることで、人びとの経済・宗教・政治などあらゆる諸実践を実践的な地平において有機的に統合する営為があらわとなるだろう。それによってこそ初めて、先行研究において論じられてきた、対象社会を覆う「全体性」の本質を照射することができる。

活動報告

2014年度は、1) 2度にわたるフィールドワークを実施し、2) 本研究課題とも関連する原稿を執筆および編集した。各々の詳細は下記の通りである。

- 1) 1度目の海外渡航では、アメリカ・ハワイ州においてフィールドワークを実施し、①ホノルル市に在住するトンガ人コミュニティについて、キリスト教会における人びとの集会に参加し、宗教的实践における社会空間構成と振る舞いについて観察、記録した。②また人びとへのインタビューも実施し、母国トンガとハワイとを往来する様相と、ハワイにおける生活が経験的にどのような変化をもたらしているのかについて調査した。また、トンガを含むポリネシア地域の日常的な演劇性について、歴史資料を収集し、比較検討を行った。
2度目の海外渡航では、ニュージーランド・オークランド市において、①トンガを含むポリネシア地域の日常的な演劇性とその歴史的変容過程について、オークランド大学図書館およびオークランド博物館資料室において、文献資料の収集と映像資料の検証を行い、比較検討を行った。②またオークランド市郊外のマヌカウ地区に居住する太平洋島嶼民コミュニティについて、日常生活における相互扶助実践を調査した。また若者を中心とした犯罪対策やDVなど暴力抑止についてどのような教育、啓蒙活動が実施されているのか、聞き取りを行った。
- 2) 研究業績「対他的な〈ふるまい〉としての粗放的飼育——トンガのブタをめぐる儀礼的相互行為」では、人間と

動物との関係性を探求する研究の一環として、トンガ王国の家畜飼養に焦点を当てて考察した。本研究課題でも鍵となる〈社会空間と人びとの行為へのミクロな視座〉を用い、家畜飼養の実践を捉えなおすことによって、ブタ飼養を人間とブタとの二者的相互行為のみならず、ブタを介した人間同士の相互行為という重要な側面が明らかにされた。

特別研究員奨励費

近現代インドにおけるヒンドゥー寺院運営の意義——商業集団マールワリーを事例として

代表者 田中鉄也

目的・内容

インド並びにグローバル経済で躍進を続ける商業集団マールワリーは、コミュニティの「発現地」であるラージャスターン州各地にヒンドゥー寺院を建立してきた。私は、同州ジュンジュヌー県に存するラーニー・サティール寺院を調査対象として、同寺院を運営するジャーラン・コミュニティによる1912年の寺院基金設立から複合寺院施設の完成までの歴史的過程を、ジャーランによる「コミュニティ結集」と分析する。彼らの寺院運営は、社会的支配者としての世俗的権威を証明するというよりは、自らがいかなる存在であるのかをコミュニティの内外に公的に発信する営為と解釈できる。注目すべきは80年代以降、同寺院は、ジュンジュヌーだけでなく、インド国内外に積極的に分祀され、各地で同名寺院が建立・運営されてきた。同寺院の拡散は、ラージャスターン州を出自としながら、19世紀から本格的に商業都市へ移り住んだマールワリー（ジャーラン）が希求するアイデンティティ、すなわち「（ラージャスターンを故郷とする）地域性」と「（ディアスポラ商人としての）移住性」とを併存させる意図がみられる。私は、インド国内外の4つの分祀寺院の拡散過程とそれぞれの運営史を探ることによって、地域社会からグローバル経済までを横断しながらも、「故郷」との繋がりを強化してきたマールワリー・アイデンティティがいかに形成されたのか、その歴史的変遷を明らかにする。

活動報告

インド経済のみならずグローバル経済でも躍進を続ける商業集団マールワリーは、コミュニティの「ふるさと」であるラージャスターン州各地にヒンドゥー寺院を建立してきた。彼らの寺院経営において、私は彼らが「王」ではなく「寺院経営者」として自認している点に注目した。寺院経営の担い手が王から商人へと変質したことは、イギリスによるインド植民地経営という支配構造の転換と軌を一にしている。端的に言えば植民地政府がイギリス式信託制度を導入したことで、寺院経営におけるかつての担い手が没落し、他方でマールワリーがそれに適応し寺院経営に乗り出していったのである。寺院を経営するにあたり公益信託の組織化を義務づけた植民地政府の目論みとは、財政的・政治的に寺院を管理することにあった。

公益信託制度は独立後も継承されたのだが、それを統括・管理する行政部門と関連法が制定されたことによって、国家による寺院の管理はむしろ強化されたと言える。しかし公共空間における活動が管理下におかれながらも、寺院経営者のマールワリーは「公益に資する限り」宗教・世俗両分野に渡って積極的に活動することで、自らの地位・名誉を維持してきたのである。このように英領インド期に導入された公益信託制度に着目して、マールワリーによる寺院経営、ひいては近現代インド社会における寺院経営の特質を読み解くことができた。それは、すなわち国家によって管理された状況下においてもなお「公益性」を基礎として生み出される名誉のポリティクスと解釈できる。

特別研究員奨励費

内モンゴルにおけるシャマニズムと民間医療に関する文化人類学的研究

代表者 鈴木七美/Cajilahu

目的・内容

1940年代から1970年代にかけて、近代中国において「社会主義改造」、「文化大革命」などの社会主義的イデオロギーによる洗脳運動が全国的におこなわれた。しかし、1980年代以来の内モンゴル東部地域においてはシャマニズムが復活しつつある。シャマニズムは現在、多民族的中国の宗教政策、医療政策、民族政策に対応した柔軟性を発揮しながら、モンゴル人社会の日常と絡んで生き残っている。シャマニズム的諸活動のなかで、治療行為は重要な部分をなしており、依頼者の心身両方の要求を満たしている。本研究は、そういった民間医療と絡んでいるシャマニズムの各種儀礼を対象に、オルタナティブ医療と制度的医療衛生と関連する諸問題を文化人類学的に捉える。そして、中国において近代と伝統、大宗教と小宗教、漢文化と民族文化が交差するカテゴリーの中で続発する文化対立の諸問題を解決しようと試みる宗教政策、民族政策、医療衛生政策の本質と軌跡を解明することが強く求められるなか、シャマニズムを支える人々と依頼者の視点から、シャマニズムと仏教、オルタナティブ医療と制度的医療

衛生との間に発生する多元的医療の諸問題をエスニシティ論をもって究明する。さらに、そういった諸問題が存在する内モンゴル東部のホルチンとフルンボイル両地域を相対化する目的で、モンゴル国に赴き、ダルハドやプリアートの間で生き残っているシャマニズムに関するフィールドワークをおこない、豊富な事例のデータを活用して、多様な医療の選択肢があるなかシャマニズムの治療が選択される状況をエスニシティの問題として論じる研究へと収斂させていく。

活動報告

中国内モンゴル東部地域においてシャマニズムが復活しつつある。本研究の目的は、多民族的社会主義中国の宗教政策、医療衛生政策、民族政策を視野にいれながら、民間医療と絡んでいるシャマニズム的各種儀礼を対象に、オルタナティブ医療と制度的医療衛生との間に発生する多元的医療の諸問題を文化人類学的に捉えることである。この研究は、中国において近代と伝統、大宗教と小宗教、漢文化と民族文化が交差するカテゴリーの中で続発する文化対立の諸問題を解決しようとする諸政策の本質と軌跡を学問的に解明することが強く求められるなか、その分野に対する新しい知見を提供することである。

本年度は研究計画通りに以下のような作業をおこなった。

まず、中国内モンゴル自治区フルンボイル地域においてシャマニズムの病気治療に関する追加調査をおこない、オルタナティブ医療論、エスニシティ論及びシャマニズム的治疗に関する事例資料を収集した。次に、中国の国家図書館、北京大学図書館、中央民族大学図書館において、中国建国前後に実施された民族政策、医療衛生政策、宗教政策に関する資料調査をおこなった。さらに、日本国内の大阪大学外国語図書館、島根県立大学図書館、東京大学総合図書館・東洋文化研究所図書室・医学図書館において、20世紀前半に発行されたモンゴル語新聞紙や雑誌を閲覧し、当時のモンゴル人に対して実施した医療衛生の社会教育に関する資料を調査した。最後に、国立民族学博物館においておこなわれた医療人類学研究会及び中国で開催された中国医学百年史研究に関する国際会議において講演し、国内外の学者と交流した。

そして、以上の現地調査と学術交流で得られたデータを基に、①オルタナティブ医療とエスニシティ問題と関係した中国内モンゴルの医療衛生体系の中で、シャマニズム的職能の一つである病気治療を位置づけた。②内モンゴルの地域社会及び国家医療衛生政策の実施との相互作用の基でおこなわれたモンゴル伝統医学の近代化過程に注目し、学術論文を発表した。

受託事業

「アジアにおける新しい博物館・博物館学創出のための研究交流」

委 託 者：日本学術振興会（研究拠点形成事業B. アジア・アフリカ学術基盤形成型）

共同研究代表者：園田直子

実施期間：2012年4月1日～2015年3月31日

目的と概要

博物館は、単に資料を収集・保存・展示するだけの場ではなく、特に途上国においては国家・民族としてのアイデンティティを確立する場であり、また観光振興の要として、教育施設として、あるいは戦乱・災害からの復興の拠点としての役割を持つ。そのため、アジア・アフリカにおける自立的・持続的な博物館活動ならびに人材育成は、緊急の課題となっている。

大学共同利用機関法人・人間文化研究機構・国立民族学博物館は、1994年から、途上国を対象に、博物館学ならびに博物館の実践的技術を学ぶ研修を実施してきた。研修に参加したアジアの国ぐにのうち、タイ、ミャンマー、モンゴルでは、日本で研修を受けた人びとの間で国内ネットワークが構築されており、自国の文化的・社会的背景に即した博物館学・博物館研究を模索しているところである。

本事業では、国立民族学博物館が今までに培ったネットワークの新たな展開として、若手の人材育成を視野に入れながら、博物館学を中心とした実践的な学術基盤の形成をはかる。タイ、ミャンマー、モンゴルで博物館学の教育研究を行い、博物館活動や人材育成の中核をになう専門家とともに、日本をふくむ4か国での博物館学の研究成果や博物館活動の事例を共有し、共通の基盤をつくる。そのうえで、従来の受動的立場から主体的立場へと変容する、現代のアジアにおける博物館の潮流を明らかにし、アジア独自の博物館学・博物館研究のモデルをつくりあげる。

本事業の最終目標は、今までの欧米主流の博物館学・博物館研究とは異なる、アジアの文化的・社会的背景に即した独自の博物館学・博物館研究が創出されることであり、そのうえで、タイ、ミャンマー、モンゴルにおいて自立的・持続的な博物館活動ならびに人材育成の研究基盤が形成されることである。

実施状況

2012年度のモンゴル、2013年度のミャンマーに続き、2014年度はタイで共同研究会と公開セミナーを開催した。共同研究会と公開セミナーでは、日本とタイ両国の博物館・博物館学の専門家や教育研究者が発表を行うことで、互いに研究成果や実践事例を共有しあう新たな研究協力体制を構築することができた。共同研究会と公開セミナーを通じて、日本12名、ミャンマー1名、モンゴル1名、そしてタイから述べ120名の参加者があり、活発な質疑応答、情報共有、意見交換をおこなった。タイでの共同研究会と公開セミナーを通じて、タイ国内の博物館・博物館学の専門家や教育研究者とともに、タイにおける博物館ネットワーク強化に貢献できたと考える。

成果

タイでの共同研究会と公開セミナーには、ミャンマーとモンゴルのコーディネーターも参加し、討論に加わることで情報と知見の共有をはかった。これにより、本事業終了後、参画した研究者が共同でアジア独自の博物館学・博物館研究を創出するための共通基盤がさらに強固になった。

モンゴル、ミャンマー、そしてタイでの共同研究会と公開セミナーの成果は、それぞれ刊行物としてとりまとめ、本事業へ参画した研究者にとどまらず、ひろく当該国の博物館関係者、若手研究者や学生が活用できるようにした。モンゴルでの成果は、2014年11月、『アジアにおける博物館・博物館学の「いま」——モンゴル、ミュージアム・クリルタイ』（日本語・モンゴル語）として、モンゴル国立文化遺産センターから刊行した。ミャンマーでの成果は、2015年2月、*Asian Museums and Museology 2013: International Research Meeting on Museology in Myanmar* (Senri Ethnological Reports 125) として、タイでの成果は、2015年3月、*Asian Museums and Museology 2014: International Workshop on Museology in Thailand* (Senri Ethnological Reports 129) として、国立民族学博物館から刊行した。いずれも、最新の博物館事情が分かる書であるとともに、博物館活動・研究の参考書ともなる。それぞれ相手国に100部ずつ配布し、社会還元した。刊行物発行により、アジアにおける新しい博物館・博物館学創出のための基盤をさらにかためることができた。

公開セミナーは、本事業に関わる研究者だけでなく、タイ各地の博物館や大学関連部局の人材を対象に開催した。そのため博物館学の学生も含めた、多くの若手の研究者の参加があった。博物館の社会的意義という根源的な問題について、展示・教育、そして地域との関わりという側面から、本事業に関連する研究者、そして次世代の研究者が学術的観点から議論する場となり、若手研究者育成に寄与した。

今回タイで開催した共同研究会と公開セミナーが契機となり、日本とタイ間のこれまでの研究交流の絆が一層強まった。今後、タイで博物館・博物館学に係わる研究や活動を進めるとともに、若手人材育成をしていくうえで、日本側が協力していくことが再確認された。本プロジェクトの日本側拠点機関である国立民族学博物館は、滋賀県立琵琶湖博物館とともに、2015年度から新たに3年計画で国際協力機構（JICA）・課題別研修「博物館とコミュニティ開発」コースを開催することが決定しており、国際的な人材育成にひきつづき貢献していく。

これらの経験と知見をふまえ、2015年2月21日～22日、日本側拠点機関である国立民族学博物館にて、国際シンポジウム「アジアにおける新しい博物館・博物館学の展望」を開催した。シンポジウムは、3年間の本事業の成果発表であると同時に、国立民族学博物館が20年以上継続している博物館・博物館学に関する国際貢献、人材育成の集大成のひとつと位置づけることができる。アジアから世界へ、博物館学・博物館に関する研究成果・活動事例を発信し、欧米が主軸になりがちな博物館学・博物館研究に新たな切り口をひらく契機となるシンポジウムとなった。その成果は、今後、速やかに刊行する予定である。

被災の共同体から地域の復興へ——被災後の人びとの行動の記録化とそれに基づく新たな社会モデルの構築——

委 託 者：三井物産（三井物産株式会社環境基金）

担当教員：竹沢尚一郎

研究期間：2011年6月1日～2014年9月30日

目的と概要

- 1) 岩手県大槌町、山田町、宮古市などで、被災者の被災後の行動と、かれらが形成した組織のあり方に重点をおいて映像記録と録音記録を作成する。
- 2) 先におこなった映像と録音を文字化し、社会モデルの構築のための材料とする。
- 3) 映像化および録音された資料の文字化を継続し、その分析をおこなう。
- 4) 海外の博物館や研究所と、将来の展示やシンポジウムの実施に向けて協議を始める。

実施状況

- 1) 岩手県大槌町と釜石市を中心に250人ほどの被災者をはじめ、行政関係者、NPO関係者にインタビューを実施し、映像記録と文字記録を作成した。映像記録については、地元社会に博物館や資料館が建設されたときにはそ

こで公開する予定である（そのための許可を全員から得ている）。

- 2) 被災後の地域社会のあり方と、災害に強い社会のモデルを作成し、日本社会学会、日本文化人類学会、世界人類学大会をはじめ、海外のシンポジウム等で発表をおこなった。
- 3) 海外の研究者との協議のためにヨーロッパに出かけ、将来の展示について話し合った。映像を中心とした展示については、すでに数多くなされているので、破壊されたモノや被災前の民俗資料、被災後の生活の実態を示すモノ等を通じて、より包括的な展示を実施するようアドバイスを受け、それに向けて準備を進めている。
- 4) 被災後の被災者の行動と復興まちづくりの課題等について著書『被災後を生きる——吉里吉里・大槌・釜石奮闘記』（中央公論新社、2013年1月）を出版したほか、複数の論文を発表した。
- 5) 住民の声を聴きながら復興プランの作成に協力したほか、地元社会に建設される博物館等施設の建設に協力することで、復興に貢献してきた。

成果

- 1) 250名以上の被災者に対して、避難行動や被災後の相互扶助、復興まちづくりのイメージ等についてインタビューをおこなった。そのうちの50数名についてはビデオ撮影の許可を得て、映像資料を作成した。また、これをもとに、400字詰原稿用紙に換算して約3,000枚に及ぶ文字記録を作成した。映像記録については、地元社会に博物館や資料館が作成されたときには、そこで公開することの了承を得ており、現在30分程度の番組数本を作成するための編集作業を完了した。
- 2) この記録をもとに、被災者の避難行動や被災後の相互扶助活動、および災害に強い社会をモデル化し、日本社会学会（2011年）、日本文化人類学会（2012年）、国際人類学大会（2013年）などで研究発表をおこなった。そのほか、海外で実施されたシンポジウムに出席して、「東日本大震災の展示」、「トラウマを越えて——震災遺構の現在」などのテーマで発表をおこなった。
- 3) 1)の記録をもとに、被災者の避難行動、被災後の避難所等での相互扶助活動、復興のためのまちづくりの試みなどについて詳細な記述をおこない、さまざまな問題点の指摘とともに、著書『被災後を生きる——吉里吉里・大槌・釜石奮闘記』（中央公論新社、2013年1月）を出版した。これは、2013年度の講談社ノンフィクション賞の最終候補5冊のうちに入るという評価を受けたが、受賞はできなかった。
- 4) この本の英訳を英国人に依頼して進め、2014年6月段階で英訳と校正が完了した。2014年9月現在、海外の出版社数社と英文での商業出版に向けて交渉中である。
- 5) 『国立民族学博物館研究報告』に論文「津波の破壊に抗する被災コミュニティ——大槌町の避難所に見る地域原理と他者との関係性」を発表したほか、「語り継ぐこと、記憶を保存すること」『現代宗教』（特集：3.11後を拓く）、「Living in the World after the Tsunami”. *Minpaku Anthropology Newsletter*」などを執筆・発表した。
- 6) 2017年冬春に「東日本大震災の展示（仮）」を国立民族学博物館の特別展示として実施するべく、大槌町の過去の写真の収集、民俗資料の整理、がれきの収集、津波で流された写真やモノの収集と保存、映像資料の編集、全体の構成についての討議、などの作業をおこなってきた。これについては海外の博物館でも関心を寄せているところがあるので、それに向けての協議も並行して進めている。

手話言語学に関する講義の実施及びシンポジウム・セミナーの開催

委 託 者：公益財団法人 日本財団

担当教員：菊澤律子

研究期間：2014年4月1日～2015年3月31日

目的と概要

日本では、手話の言語としての認識や、ろう者の母語であることへの理解は十分であるとは言えない。一方、手話を言語として科学的に記述・分析することへの関心は、ろう者・聴者を問わず少しずつ増えてきて入るが、この「手話言語学」という新しい分野の専門家は、まだ数が少なく、言語学科において講座を開講している大学も殆ど無い。本事業では、本館の共同利用研究機関という性質を生かし、1) 諸大学における手話言語学の講義の開講の援助、2) 手話言語学の研究成果の社会発信、3) ろう者コミュニティへの発信のための基盤づくり、を行うことにより、研究者育成に貢献するのみならず、長期的な意味での社会における言語としての手話に対する認識と手話言語学への興味を喚起することを目的とする。

実施状況

- 1) 手話言語学の専門家の諸大学への派遣
日 程：2014年10月～1月（週1日、全15回）
講 師：菊澤律子（国立民族学博物館）

市田泰弘（国立障害者リハビリテーションセンター学院／国立民族学博物館）
 木村晴美（国立障害者リハビリテーションセンター学院）
 野口岳史（国立障害者リハビリテーションセンター学院）
 磯部大吾、池田ますみ（香港中文大学）
 相良啓子（国立民族学博物館）
 松岡和美（慶應義塾大学）
 スーザン・フィッシャー（ニューヨーク市立大学／国立民族学博物館）
 坊農真弓（国立情報学研究所）
 菊地浩平（日本学術振興会特別研究員(PD)/ 国立情報学研究所）
 野山 広（国立国語研究所）
 澁谷智子（成蹊大学）
 長嶋祐二（工学院大学）
 原 大介（豊田工業大学）

派遣先：東北大学（受入研究者：小泉政利）

内 容：東北大学全学教育授業「手話の世界と世界の手話言語☆入門」

聴 講：20人+TA 1 名（所属：文学部、教育学部、医学部、工学部、農学部、理学部）

言 語：日本語、日本手話（通訳付き）、英語

日 程：2014年通年講義のうち、半年間（15日間）

講 師：市田泰弘

派遣先：東京大学

内 容：手話言語学（大学院および学部）

聴 講：学部 4 名、大学院生 1 名が単位取得

言 語：日本語

日 程：2014年 6 月19日（1 日間、講義）

講 師：市田泰弘

派遣先：関西学院大学

内 容：日本手話のしくみについて

聴 講：15名（学生13名、講師 2 名（うち 1 名はろう者））

言 語：日本語、日本手話通訳付き

日 程：2014年11月 8 日

講 師：スーザン・フィッシャー

派遣先：Minpaku Linguistics Circle（国立民族学博物館）

内 容：Historical Perspectives on Sign Languages

聴 講：5 名

受入研究者：吉岡 乾

言 語：英語

日 程：2014年11月16日～23日

講 師：スーザン・フィッシャー

派遣先：香港中文大学（香港）、復旦大学（上海）

内 容：手話言語学に関する講義および学術交流（学生および教員）

聴 講：20名

受入研究者：Gladys Tang（香港）、Gong Qunhu（上海）

言 語：英語

日 程：2014年11月24日（1 日間、講義）

講 師：スーザン・フィッシャー

派遣先：関西学院大学総合政策学部

内 容：言語政策論と手話

聴 講：20名

受入研究者：今西祐介

言 語：英語

日 程：2014年11月25日（1日間、講義）

講 師：スーザン・フィッシャー

派遣先：東北大学（上記1.の全学教育授業のひとつ）

内 容：ASLとJSL

聴 講：20名

受入研究者：小泉政利

言 語：英語

2) 国際ワークショップ・国際シンポジウムの開催

以下の通り開催した。詳細およびチラシは以下に掲載している（<http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/news/corp/20141004-05>）。

なお、当初の計画ではワークショップとシンポジウムを組み合わせる予定であったが、内容を精査した結果、シンポジウム2日間とした。通訳士交流会については予定通り、ラウンドテーブル形式のワークショップとした。

日 程：①2014年10月3～5日（シンポジウム） ②2014年10月6日（通訳士交流会）

場 所：国立民族学博物館

対象者：①国内外の大学生、大学院生、および研究者（一般の聴講可）

②①で通訳をした通訳者（通訳コーディネーター、日本手話、日英同時通訳、アメリカ手話）および飯泉菜穂子、菊澤律子、相良啓子。

内 容：①言語の記述・記録・保存および言語類型論についての学術シンポジウム

②通訳士間の反省会および今後に向けての検討会

参加者数：①120名（1日目）、91名（2日目）、②約20名

使用言語：①英語、アメリカ手話、日本語、日本手話、②英語、日本語（日英同時通訳付き）

3) 関西通訳研究事業の開催

期 間：2014年6月～2015年1月

場 所：大阪・国立民族学博物館

対象者：関西在住の通訳者の中で一定の通訳技能を持つもの（スクリーニングにより選考）

内 容：関西における学術通訳チーム養成

参加者数：通訳者4名

使用言語：日本語、日本手話、英語（日本手話通訳、必要に応じて日英同時通訳付き）

学術通訳に必要な知識を身につけ、技量を伸ばすことができるよう、月1回、通訳者養成の専門家を招待してのミーティングや評価等を行った。カリキュラム作成は主として飯泉菜穂子（世田谷福祉専門学校）が担当した。

運営メンバー 飯泉菜穂子（世田谷福祉専門学校）、磯田恭子（筑波技術大学）、相良啓子（国立民族学博物館）、菊澤律子（国立民族学博物館）、高道由子（国立民族学博物館）

講 師 木村晴美（国立障害者リハビリテーションセンター学院）、中野聡子（広島大学）、高木真知子（通訳コーディネーター）、森壮也（JETRO-IDE）、市田泰弘（国立障害者リハビリテーションセンター学院／国立民族学博物館）

手話モデル 海野和子、寺澤英弥

オブザーバー 甲斐更紗（九州大学）、前川和美（関西学院大学）、馬場博史（関西学院大学）

4) ろう者や通訳者を対象とした言語学講座の開催

2014年度は、通訳研究事業にある程度、組み込む形での開催となった。担当講師の中から2名に、2015年度にシリーズで担当してもらう方向で調整をすすめた。

5) 1)～3) のインターネット配信について

2)については、総合研究大学院大学の協力により当日インターネット配信を行った。また、映像データについては、現在、ウェブ配信用に編集集中である。

配信サイト：<http://www.minpaku.ac.jp/sokendai/ssl/index.html>

成果

本年度は2年度目として、質の向上や内容の充実をはかると同時に、事業運営体制を整備することができた。また継続していることで、外部からも少しずつ事業が認知されるようになった。

また、プロジェクト広報のためのウェブサイトは随時アップデートし、広報、参加者募集や受付、内容の周知等に幅広く利用している。また、団体ウェブサイトからもリンクを貼っている。

<http://www.r.minpaku.ac.jp/shuwa/> (プロジェクトウェブサイト)

<http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/project/other/sonota> (団体サイトリンク)

2-3 研究成果の公開

刊行物

●国立民族学博物館研究報告

39巻1号 (2014年7月31日刊行)

・論文

都市を生きる出家者たち——ミャンマー・ヤンゴン事例として —— 蔵本龍介

・資料

カムチベット語香格里拉県小中甸郷吹亞頂 [Choswateng] 方言の音声分析と語彙

—— rGyalthang 下位方言群における方言差異に関する考察を添えて —— 鈴木博之

・Revisiones bibliográficas

Nuevos avances en el estudio de las reducciones toledanas —— Akira Saito, Claudia Rosas Lauro, Jeremy Ravi Mumford, Steven A. Wernke, Marina Zuloaga Rada y Karen Spalding

39巻2号 (2014年11月28日刊行)

・論文

ミクロネシアにおける海面保有と資源保護の様式 —— 須藤健一

南ラオスの少数民族の移住村における精霊祭祀と仏教——言語ゲームの視点から —— 中田友子

タンザニア・マテンゴ高地における植林の受容と継承——外来技術の在来化をめぐる一視点 —— 黒崎龍悟

39巻3号 (2015年1月30日刊行)

・論文

北東アジア先住民族の歴史・文化表象——中国黒竜江省敖其村の赫哲族ゲイケル・ハラの人々の事例から

—— 佐々木史郎

On the Demise of the Proto-Tibeto-Burman Mid Vowels —— James A. Matisoff

・資料

国立民族学博物館における研究公演の再定義

——「ホピの踊りと音楽」の記録とフォーラムとしてのミュージアムの視点からの考察 —— 伊藤敦規

39巻4号 (2015年3月3日刊行)

・論文

レバノン南部の聖者アル・ホドル崇敬にみられる「聖者の占有」とその背景

——歴史的パレスチナとの比較から —— 菅瀬晶子

先史アンデスにおけるペルー北部チョターノ川流域社会の形成と変遷 ————— 山本 睦
• 資料

Low-income and Homeless Inuit in Montreal, Canada: Report of a 2012 Research — Nobuhiro Kishigami

● Senri Ethnological Studies

No.89 (2014年 5 月30日刊行)

Yuji Seki (ed.) *El Centro Ceremonial Andino: Nuevas Perspectivas para los Periodos Arcaico y Formativo*

No.90 (2014年11月21日刊行)

韩 敏・末成道男編『中国社会的家族・民族・国家的 话语及其动态——东亚人类学者的理论探索』

● Senri Ethnological Reports (国立民族学博物館調査報告)

No.119 (2014年 6 月10日刊行)

小長谷有紀・サランゲレル・ソヨルマ編『20世紀におけるブリヤート人たち——中国内モンゴル自治区フルンボイルにおける口述史』

No.120 (2014年 9 月 5 日刊行)

Nanami Suzuki (ed.) *Healing Alternatives: Care and Education as a Cultural Lifestyle*

No.121 (2014年 9 月10日刊行)

Interviews Conducted by Yuki Konagaya and I. Lkhagvasuren, Translated by Mary Rossabi, Edited and Introduced by Morris Rossabi, *Mongolia's Transition from Socialism to Capitalism: Four Views*

No.122 (2014年11月 7 日刊行)

小長谷有紀編『梅棹忠夫のモンゴル調査——ローマ字カード集』

No.123 (2014年12月24日刊行)

Юки Конагая (ред.), Ю.И. Елихина (автор) *Некоторые археологические находки Монголо-советской экспедиции под руководством С.В. Киселева: Городище Каракорум, коллекция Государственного Эрмитажа*

No.124 (2014年12月26日刊行)

土方久功著、須藤健一・清水久夫編『土方日記V』

No.125 (2015年 2 月26日刊行)

Naoko Sonoda, Katsumi Tamura and Nu Mra Zan (eds.) *Asian Museums and Museology 2013: International Research Meeting on Museology in Myanmar*

No.126 (2015年 2 月27日刊行)

久保正敏・堀江保範編著『バウイナング・アボリジナル組合の議事録(1978~1994)から見る対アボリジニ政策とインフラ整備の歴史——マニングリダと周辺アウトステーションの活動史』

No.127 (2015年 3 月25日刊行)

韩 敏編『近代社会における指導者崇拜の諸相』

No.128 (2015年 3 月27日刊行)

Шагланова Ольга А. и Сасаки Сиро (ред.) *Культурное наследие бурят, эвенков и семейских Предметы материальной и духовной культуры из коллекций Этнографического музея народов Забайкалья (Республика Бурятия, Россия)*

No.129 (2015年3月30日刊行)

Naoko Sonoda, Kyonosuke Hirai and Jarunee Incherdchai (eds.) *Asian Museums and Museology 2014: International Workshop on Asian Museums and Museology in Thailand*

●民博通信

No.145 (2014年6月30日刊行)

評論・展望 「モノの人類学から芸能を考える——バリ島仮面舞踊劇トペンを手がかりとして」 吉田ゆか子

No.146 (2014年9月30日刊行)

評論・展望 「フォーラム型情報ミュージアムの構築——国立民族学博物館における新たな展開」 岸上伸啓

No.147 (2014年12月26日刊行)

評論・展望 「民博の国際協力——博物館学国際研修の20年」 園田直子

No.148 (2015年3月30日刊行)

評論・展望 「世界の食文化研究と博物館」 朝倉敏夫

●研究年報2013 (2015年2月28日刊行)

●国立民族学博物館論集 (館外出版)

No.3 (2015年3月31日刊行)

韓 敏編『中国社会における文化変容の諸相——グローバル化の視点から』東京：風響社

●外部出版

村尾静二・箭内 匡・久保正敏編『映像人類学 (シネ・アンソロポロジー) ——人類学の新たな実践へ』東京：せりか書房 (2014年5月23日刊行)

東 賢太郎・市野澤潤平・木村周平・飯田 卓編『リスクの人類学——不確実な世界を生きる』京都：世界思想社 (2014年6月10日刊行)

笹原亮二・福原敏男編『造り物の文化史——歴史・民俗・多様性』東京：勉誠出版 (2014年9月16日刊行)

堀内正樹・西尾哲夫共編著『〈断〉と〈続〉の中東——非境界の世界を遊ぶ』東京：悠書館 (2015年3月10日刊行)

南 真木人・石井 博編著『現代ネパールの政治と社会——民主化とマオイストの影響の拡大』(世界人権問題叢書92) 東京：明石書店 (2015年3月31日刊行)

●共同研究の成果

落合雪野・白川千尋編『ものとくらしの植物誌——東南アジア大陸部から』京都：臨川書店 (2014年5月16日刊行)

* 共同研究「プラント・マテリアルをめぐる価値づけと関係性」(2009～2012年度)

村尾静二・箭内 匡・久保正敏編『映像人類学 (シネ・アンソロポロジー) ——人類学の新たな実践へ』東京：せりか書房 (2014年5月23日刊行)

* 共同研究「映像の共有人類学——映像をわかちあうための方法と理論」(2009～2012年度)

東 賢太郎・市野澤潤平・木村周平・飯田 卓編『リスクの人類学——不確実な世界を生きる』京都：世界思想社 (2014年6月10日刊行)

* 共同研究「リスクと不確実性、および未来についての人類学的研究」(2008～2011年度)

笹原亮二・福原敏男編『造り物の文化史——歴史・民俗・多様性』東京：勉誠出版 (2014年9月16日刊行)

* 共同研究「民俗行事における造り物の多様性」(2008～2011年度)

浮ヶ谷幸代編著『苦悩することの希望——専門家のサファリングの人類学』東京：協同医書出版社 (2014年12月16日刊行)

* 共同研究「サファリングとケアの人類学的研究」(2009～2012年度)

日高真吾著 『災害と文化財——ある文化財科学者の視点から』 大阪：一般財団法人 千里文化財団 (2015年 2月 27日刊行)

* 共同研究「民俗資料保存論の構築と素材に応じた保存処理法の開発」(2007～2010年度)

堀内正樹・西尾哲夫共編 『〈断〉と〈続〉の中東——非境界の世界を遊ぶ』 東京：悠書館 (2015年 3月10日刊行)

* 共同研究「非境界型世界の研究——中東的な人間関係のしくみ」(2010～2013年度)

道信良子編 『いのちはどう生まれ、育つのか——医療、福祉、文化と子ども』 東京：岩波書店 (岩波ジュニア新書) (2015年 3月20日刊行)

* 共同研究「現代の保健・医療・福祉の現場における『子どものいのち』」(2011～2014年度)

南 真木人・石井 溥編 『現代ネパールの政治と社会——民主化とマオイストの影響の拡大』 (世界人権問題叢書 92) 東京：明石書店 (2015年 3月31日刊行)

* 共同研究「マオイスト運動の台頭と変動するネパール」(2006～2009年度)

韓 敏編 『中国社会における文化変容の諸相——グローバル化の視点から』 (国立民族学博物館論集③) 東京：風響社 (2015年 3月31日刊行)

* 共同研究「中国における社会と文化の再構築——グローカリゼーションの視点から」(2008～2011年度)

嶺重 慎・広瀬浩二郎編 『知のバリアフリー——「障害」で学びを拡げる』 京都：京都大学学術出版会 (2014年 12月 5日刊行)

* 共同研究「触文化に関する人類学的研究——博物館を活用した“手学問”理論の構築」(2012～2014年度)

広瀬浩二郎著 『世界をさわる——新たな身体知の探究』 京都：文理閣 (2014年 9月20日刊行)

* 共同研究「触文化に関する人類学的研究——博物館を活用した“手学問”理論の構築」(2012～2014年度)

国立民族学博物館学術情報リポジトリ

「みんぱくりポジトリ」は、一般公開後5年が経過した。今年度は、恒常的な館内刊行物の登録を継続するとともに、『研究年報2012』の掲載業績を基に個人業績の抽出・許諾・登録作業を行った。また、『著作物利用許諾書(館内出版物)』の多言語化を進め、英語、スペイン語、中国語(簡体、繁体)、韓国語を登録した。さらに、最新コンテンツの登録情報をTOP画面(お知らせ欄)に随時掲載することとした。

今年度新たに登録したコンテンツは346件で、2015年3月末のコンテンツ登録数は4,504件となった。今後も、年間300件以上の登録を目指したいと考えている。また、コンテンツのダウンロード数は、2014年度月平均約50,000件に達した。前年度と比較して、月平均10,000ダウンロード以上も増加しており、「みんぱくりポジトリ」の認知度が高まって来ていることが伺える。

「みんぱくりポジトリ」に対する国際的な評価も上向きであり、スペイン高等科学研究院 CSIC がおこなうリポジトリの定量的総合評価では、日本296機関中46位(前年135機関中42位)、世界2,154機関中683位(前年1,746機関中677位)にランキングされた。

学術講演会

●みんぱく公開講演会

「無形文化遺産 選ぶ視点 選ばれる現実」

実施日 2014年11月4日

場 所 日経ホール(東京)

共 催 日本経済新聞社

参加者 310人

講演1 「文化遺産を伝える静かなくらし——マダガスカル」

講師 飯田 卓

内容 マダガスカル中央高地の山間部では、日常生活であたりまえのようにおこなっていた工芸の技術や知識が、無形文化遺産と呼ばれるようになった。交通の便がよくなり、工業製品や観光客が増えていくなか、この「遺産」を伝えるにはどうすればよいのか。現地の報告をまじえながら考えた。

講演2 「誰の、誰のための無形文化遺産——日本から考える」

講師 俵木 悟（成城大学准教授）

内容 日本は無形文化の保護を世界に先駆けて法制化した国であり、ユネスコの無形文化遺産条約の制定にも主導的に関わってきた。その一方で、日本が長年をかけて築いてきた堅緻な制度と、融通性の高い新しい国際条約とのあいだの齟齬も目立っている。とくに「誰のための遺産か」という観点から、この問題について考えてみた。

パネルディスカッション

福岡正太×飯田 卓×俵木 悟

司会 丹羽典生

内容 登壇者がアフリカと日本の事例から発表を行ったのに対して、東南アジアのインドネシアにおける伝統芸能の映像記録化に従事してきたという視点からコメントを加えた。無形文化遺産の保存という国や地方公共団体と民俗の領域が重なり合う場で、人類学者が研究者としてどうか関わっていくのかについても議論が交わされた。

「いやし旅のウラ？表？——現代アジアツーリズム考」

実施日 2015年3月20日

場所 オーバルホール（大阪）

共催 毎日新聞社

参加者 312人

講演1 「インドのメディカル・ツーリズム——癒やしから先端医療まで」

講師 松尾瑞穂

内容 健康増進や病気治療を目的とする旅をメディカル・ツーリズムという。近年、インドでは、アーユルヴェーダやヨガのような伝統医療から、代理出産のような先端医療まで、多様なメディカル・ツーリズムが見られるようになっている。人びとはメディカル・ツーリズムに何を求めてインドに向かうのだろうか。そして、メディカル・ツーリズムは、現地社会をどのように変えていくのだろうか。このような観点から、新たな産業として期待されるメディカル・ツーリズムについて考えた。

講演2 「老後の海外長期滞在ツーリズム——マレーシアの日本人高齢者」

講師 小野真由美（岡山大学グローバルパートナーズ講師）

内容 近年、「ロングステイ」という新たな国際観光のトレンドが、日本人の老後のライフスタイルとして注目を集めている。ロングステイは、暮らすように旅する、あるいは旅するように暮らす海外長期滞在型余暇をさす言葉である。なかでも人気滞在国であるマレーシアでは、日本人高齢者が定住する傾向がみられる。なぜマレーシアが日本人高齢者に人気なのだろうか。講師自身のフィールド調査に基づいて、日本人高齢者の長期滞在の実態と受け入れ国マレーシアの変容について検討を加えた。

パネルディスカッション

信田敏宏×松尾瑞穂×小野真由美

司会 三尾 稔

内容 マレーシアの少数民族の間で長年現地調査を行っており、また近年はケアの問題にも関心を持つ研究者の視点から、アジアへのツーリズムの変遷や日本におけるケアのあり方の変化に関するコメントが加えられた。それに基づき講師を交えたディスカッションを行った。生病老死という人の一生とそれにつきまとう苦しみは、かつては家族や小規模な地域社会の中で見守られるべき事柄であったが、グローバル化や少子高齢化が進む現代社会にあっては、このような従来プライベートとされてきた事柄もグローバ

ルな社会や文化の動態のなかで展開するようになった。アジアへのツーリズムの変容もこれを色濃く反映していることがわかる。

2-4 学会開催

学会開催

2014年7月19日～23日 国際伝統音楽評議会『音楽とマイノリティ』研究会第8回国際シンポジウム
2014年9月20日～22日 民族藝術学会第30回（30周年記念大会）
2014年11月24日 日本文化人類学会課題研究懇談会『災害の人類学』
2014年12月6日 国立民族学博物館・立命館大学学術交流国際シンポジウム『世界の食文化研究と博物館』

2-5 研究員制度

外来研究員

ATWOOD, Christopher Pratt（アトウッド クリストファー プラット） 米国 インディアナ大学准教授／内蒙古大学客員教授

研究課題：内陸アジア遊牧民の社会史

BULIAN, Giovanni（ブリアン ジョヴァンニ） イタリア ヴェネツィア大学アジア・北アフリカ研究学部研究員

研究課題：日本の村落地域における在来気象知識の研究

CAIJILAHU 財吉拉胡（サイジラホ） 中国 日本学術振興会外国人特別研究員

研究課題：内モンゴルにおけるシャマニズムと民間医療に関する文化人類学的研究

CHOI, Hye Eun 崔 慧銀（チェ ヘウン） 韓国

研究課題：日帝時代における韓国大衆音楽の形成——レコード産業を中心にした研究

COUCHONNAL CANCIO, Ana Ines（コウチョナル カンシオ アナ イネス） アルゼンチン 国立サンマルティン大学人文科学研究科非常勤講師

研究課題：植民地期パラグアイの宣教政策における先住民言語——17・18世紀のグアラニ語の適応と葛藤

ELIKHINA, Iuliia Igorevna（イリーヒナ ユリア イーゴレヴナ） ロシア 日本学術振興会外国人招へい研究者

研究課題：エルミターージュのカラコルム・コレクション——モンゴル伝統文化の資料として

HUMBLE, Geoffrey Frank（ハンプル ジェフリー フランク） 英国

研究課題：元史における民族アイデンティティの語り——オゴデイ・カアン の 治 世

ICHINKHORLOO, Lkhagvasuren（イチンホルロー ルハグワスレン） モンゴル 日本学術振興会外国人招へい研究者

研究課題：モンゴルにおける博物館学の構築

KIM, KYEYeon 金 桂淵（キム ゲーヨン） 韓国 韓国ソウル大学比較文化研究所研究員

研究課題：韓国における華僑のエスニック・ビジネスと社会的ネットワーク

LEE, Young-Mi 李 英美（イ ヨンミ） 韓国 国立アルティプラノ大学人類学科専任講師

研究課題：在日ペルー人の文化的アイデンティティの変化と社会的ネットワークの関係に関する研究

LIN, Liying 林 麗英 (リン レイエイ) 台湾

研究課題：近現代台湾におけるエスニシティの変化についての考察——地域概念の形成とローカル NGO・NPO との関係性

MARZEC, Agnieszka (マジェツツ アグネシカ) ポーランド TECC 語学学校非常勤講師

研究課題：日本における外国人の文化変容の受け止め方に関する研究

McGUIRE, Jennifer Mary (マグワイア ジェニファー メアリー) 米国 日本学術振興会外国人特別研究員 (欧米短期)

研究課題：違いを受け入れる——日本の一般学校におけるろうおよび難聴の生徒と教育制度

NARAN 娜然 (ナラン) 中国

研究課題：環境政策実施後の内モンゴルにおける牧畜の変化と土地劣化

NIKODINOVSKA, Dijana (ニコディノフスカ ディヤナ) マケドニア

研究課題：極東とバルカンの和解は可能か——日本とマケドニアのことわざにおける価値のカテゴリーに関する研究

SAGAYARAJ, Antonysamy (サガヤラージ アントニサーミ) インド 南山大学人文学部人類文化学科准教授

研究課題：南インド・タミルナードゥ州におけるドラヴィダ運動についての人類学的研究

SAUCEDO SEGAMI Daniel Dante (サウセド セガミ ダニエル ダンテ) ペルー 同志社大学グローバル地域文化学部非常勤講師

研究課題：現代ペルーにおける文化遺産の活用に関する文化人類学研究

STEWART, Pamela J. (スチュワート パメラ ジェイ) 米国 ピッツバーグ大学人類学科上級助手

研究課題：自然災害とその後——被災者はいかに対応し、希望をもつか

YOTOVA, Mariya Ivanova (ヨトヴァ マリア イヴァノヴァ) ブルガリア 中垣技術士事務所

研究課題：バルカン地域における社会経済変動と文化変容

ZHAO, Furong 趙 芙蓉 (ジャオ フーロン) 中国

研究課題：北アジアにおけるシャマニズムの再活性化に関する人類学的比較研究

相島葉月 (あいしま はつき) 日本 英国マンチェスター大学人文学部中東研究学科講師

研究課題：現代エジプトのオルタナティヴ・モダニティとしての空手実践に関する社会人類学的研究

浅見恵理 (あざみ えり) 日本

研究課題：地域社会の発展と独自性の形成過程——チャンカイ文化の世帯考古学的研究

荒田 恵 (あらた めぐみ) 日本

研究課題：アンデス形成期祭祀遺跡における工芸品製作

石森大知 (いしもり だいち) 日本 武蔵大学社会学部准教授

研究課題：宗教の開発実践と公共性に関する人類学的研究

市川 彰 (いちかわ あきら) 日本 日本学術振興会特別研究員

研究課題：紀元後5世紀イロパング火山噴火前後のメソアメリカ太平洋沿岸部の生業と社会の研究

伊藤 悟（いとう さとる） 日本

研究課題：「中国地域の文化」展示場の展示解説および電子ガイドコンテンツ製作、中国徳宏タイ族の音文化の研究

伊藤まり子（いとう まりこ） 日本 京都外国語大学、和歌山市医師会看護専門学校非常勤講師

研究課題：ベトナム北部地域都市における「独身」女性の社会生活に関する人類学的研究

今中崇文（いманаか たかふみ） 日本 摂南大学外国語学部、同看護学部、大阪人間科学大学非常勤講師

研究課題：中国陝西省西安市における回族コミュニティのリーダーの変遷をめぐる人類学的研究

岩谷洋史（いわたに ひろふみ） 日本 神戸大学国際文化学部、立命館大学理工学部、関西大学文学部非常勤講師

研究課題：人類学におけるフォト・エスノグラフィーの手法の探求

上田知亮（うえだ ともあき） 日本 京都産業大学法学部非常勤講師

研究課題：近現代インド政治におけるナショナリズムと地域アイデンティティ

太田好信（おおた よしのぶ） 日本 九州大学大学院比較社会文化研究院教授

研究課題：政治的分類——被支配者の視点からエスニシティ・人種を再考する

大場千景（おおば ちかげ） 日本 メケレ大学外国語学部非常勤講師

研究課題：エチオピア南部、ボラナにおける口頭年代史

緒方しらべ（おがた しらべ） 日本

研究課題：「アート」の生産と受容に関する人類学的研究——ナイジェリア国内都市の事例から

岡本尚子（おかもと なおこ） 日本 国際基督教大学高等学校教務員

研究課題：『千一夜物語』仏語訳者マルドリユス再考——〈遺贈コレクション〉の分析を中心に

小川さやか（おがわ さやか） 日本 立命館大学先端総合学術研究科准教授

研究課題：現代消費文化に関する人類学的研究——モノの価値の変化にみるグローバル化の多元性に着目して

小野林太郎（おの りんたろう） 日本 東海大学海洋学部専任講師

研究課題：アジア・オセアニアにおける海域ネットワーク社会の人類史的研究——資源利用と物質文化の時空間比較

鏡味治也（かがみ はるや） 日本 金沢大学人間社会研究域人間科学系教授

研究課題：生活用品から見たライフスタイルの近代化とその国別差異の研究

梶丸 岳（かじまる がく） 日本 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター、京都学園大学、名城大学非常勤講師

研究課題：掛け合い歌「カップ・サムヌア」の音楽人類学的研究

金山 晶（かなやま あき） 日本

研究課題：東アフリカ地域にみられる乳幼児の抜歯慣習について

金子正徳（かねこ まさのり） 日本 三重大学人文学部、津看護専門学校非常勤講師

研究課題：東南アジア島嶼部における民族・文化動態の研究

金谷美和（かねたに みわ） 日本 京都大学地球環境学学三才学林研究員／大阪芸術大学芸術学部非常勤講師

研究課題：インド災害後のローカル文化再編におけるコミュニティ資源としての「手工芸」の意義

神本秀爾（かみもと しゅうじ） 日本 京都コンピュータ学院非常勤講師

研究課題：ジャマイカ、スキン・ブリーチングが刷新する黒人性に関する文化人類学的研究

河岸麗子（かわぎし れいこ） 日本 アイヌ刺しゅう家

研究課題：アイヌ衣服について——博物館収蔵資料の素材、糸の運び、線の流れについて知見を深める

川田牧人（かわだ まさと） 日本 成城大学文芸学部教授

研究課題：呪術的实践＝知の現代的位相——他の諸実践＝知との関係性に着目して

河西瑛里子（かわにし えりこ） 日本

研究課題：イギリスのグラストンベリーにおけるスピリチュアリティ諸実践の共存と交流

神田每実（かんだ つねみ） 日本 愛知県立芸術大学美術学部教授

研究課題：造形美術様式と風土の関係

岸本誠司（きしもと せいじ） 日本 東北公益文科大学非常勤講師

研究課題：東アジアにおける在来農業とマメ科作物に関する民俗学的研究

窪田幸子（くぼた さちこ） 日本 神戸大学大学院国際文化学研究科教授

研究課題：表象のポリティックス——グローバル世界における先住民／少数者を焦点に

窪田 暁（くぼた さとる） 日本 京都文教大学総合社会学科実習職員

研究課題：ドミニカ共和国からアメリカに渡る「野球移民」の民族誌

熊谷瑞恵（くまがい みずえ） 日本 ウィグル・アカデミー外国人研究員

研究課題：牧畜民と言語情報をめぐる人類学的研究——パキスタンのワヒを対象に

栗田（山内）梨津子（くりた（やまのうち）りつこ） 日本 京都橘大学人間発達学部、大島商船高等専門学校非常勤講師

研究課題：オーストラリア多文化主義下の先住民とスーダン難民の緊張関係をめぐる人類学的研究

高本康子（こうもと やすこ） 日本 北海道大学スラブ研究センター共同研究員

研究課題：国立民族学博物館青木文教アーカイブ資料に見る日本外務省および陸軍省の対チベット施策

小林貴徳（こばやし たかのり） 日本 愛知県立大学国際文化研究科多文化共生研究所客員共同研究員／大阪経済大学人間科学部、摂南大学外国語学部、同志社大学グローバル地域文化学部、神戸市外国語大学外国語学部、関西学院大学国際学部、神戸大学国際文化学部非常勤講師

研究課題：メキシコにおける無形／有形文化財の観光資源化に関する研究

是澤博昭（これさわ ひろあき） 日本 大妻女子大学家政学部准教授

研究課題：モノにみる近代日本の子どもの文化と社会の総合的研究——国立民族学博物館所蔵多田コレクションを中心に

近藤 宏（こんどう ひろし） 日本 立命館大学生存学研究センター専門研究員

研究課題：気候変動の政治経済と中南米低地先住民の所有実践

佐藤吉文（さとう よしふみ） 日本 南山大学人類学研究所、大学コンソーシアム京都非常勤講師

研究課題：先スペイン期ティティカカ湖盆地における形成期社会／初期国家ティワナクの構造的性に関わる転換と連続性の研究

澤野美智子（さわの みちこ） 日本 近大姫路大学看護学部、西宮市医師会看護専門学校非常勤講師

研究課題：フィード（ものを食べさせる行為）に関する人類学的研究

新本万里子（しんもと まりこ） 日本 広島大学大学院国際協力研究科一般契約職員／広島女学院大学国際教養学部非常勤講師

研究課題：避妊具の受容による身体観の変容——パプアニューギニア・アベラム社会の事例から

杉島敬志（すぎしま たかし） 日本 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授

研究課題：エージェンシーの定立と作用-コミュニケーションから構想する次世代人類学の展望

鈴木博之（すずき ひろゆき） 日本 Laboratoire Parole et Langage (CNRS) PD 非常勤研究員

研究課題：言語多様性の記述を通して見る中国雲南省チベット語の方言形成の研究

瀬木志央（せぎ しおう） 日本 メルボルン大学メルボルン土地環境大学院資源管理・地理学部フェロー／オーストラリア・カトリック大学人文・科学学部非常勤講師

研究課題：熱帯地域における海洋保護区の社会的持続性に関する研究

関根康正（せきね やすまさ） 日本 関西学院大学社会学部教授

研究課題：ストリート・ウィズダムとローカリティの創出に関する人類学的研究

宗野ふもと（そうの ふもと） 日本

研究課題：ウズベキスタンにおける社会変容と女性

添野 勉（そえの つとむ） 日本 城西国際大学メディア学部成城大学社会イノベーション学部非常勤講師

研究課題：社会集団の写真資料に対する分類・メタデータ付与手法の研究

蘭田 郁（そのだ いく） 日本

研究課題：近代日本における大衆芸能の地方伝播に関する研究——人形芝居を中心に

高橋晴子（たかはし はるこ） 日本 大阪樟蔭女子大学学芸学部国文学科非常勤講師

研究課題：世界の身装・布文化デジタルアーカイブの構築

高村美也子（たかむら みやこ） 日本

研究課題：スワヒリ地域におけるヤシ科植物の利用についての環境人類学的研究

竹村嘉晃（たけむら よしあき） 日本 立命館大学産業社会学部、関西大学文学部、摂南大学外国語学部非常勤講師

研究課題：インド芸能の環流化とネオオーディアスポラの形成をめぐる人類学的研究——シンガポール社会を中心に

田中鉄也（たなか てつや） 日本 日本学術振興会特別研究員

研究課題：近現代インドにおけるヒンドゥー寺院運営の意義——商業集団マールワリーを事例として

田中正隆（たなか まさたか） 日本 高千穂大学人間科学部准教授

研究課題：アフリカにおけるメディアとデモクラシーの人類学的研究

玉山ともよ（たまやま ともよ） 日本

研究課題：米国南西部先住民族のウラン鉱山による影響と環境正義運動

辻 貴志（つじ たかし） 日本 園田学園女子大学人間健康学部、近畿大学経営学部、岡山理科大学総合情報学部、京都外国語大学外国語学部非常勤講師／神戸女子大学健康福祉学部特別講師

研究課題：フィリピン・パラワン島先住民の狩猟技術と知識に関する生態人類学研究

辻 輝之（つじ てるゆき） 日本

研究課題：宗教と移民のアイデンティティ・共生——南アジア系ディアスポラを事例として

津田浩司（つだ こうじ） 日本 東京大学大学院総合文化研究科准教授

研究課題：「国家英雄」から見るインドネシアの地方と民族の生成と再生

椿原敦子（つばきはら あつこ） 日本

研究課題：ディアスポラ状況下での集団の再編に関する人類学的研究

出水 力（でみず つとむ） 日本 大阪産業大学経営学部教授（非常勤）

研究課題：海外生産の技術移転の実態調査

徳岡（七五三）泰輔（とくおか（しめ）たいすけ） 日本 株式会社タスクアソシエーツコンサルタント部コンサルタント

研究課題：参加を通じた政治実践の民族誌的研究——バングラデシュにおける参加型開発と開発援助を通じた参加型ガバナンスを事例として

土佐桂子（とさ けいこ） 日本 東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授

研究課題：「統制」と公共性の人類学的研究——ミャンマーにおけるモノ・情報・コミュニティ

友永雄吾（ともなが ゆうご） 日本 佛教大学社会学部、大阪産業大学経済学部、大阪学院大学、大阪市立大学非常勤講師／桃山学院大学国際教養学部ゲスト講師

研究課題：オーストラリア南東部における先住民と非先住民との相互変容に関する研究

長坂康代（ながさか やすよ） 日本 愛知大学国際コミュニケーション学部、中部大学健康生命学部非常勤講師

研究課題：ベトナムの首都ハノイにおけるストリート民衆の生活戦略に関する都市人類学的研究

長谷千代子（ながたに ちよこ） 日本 九州大学大学院比較社会文化研究院講師

研究課題：宗教人類学の再創造——滲出する宗教性と現代社会

中野（金澤）聡子（なかの（かなざわ）さとこ） 日本 東京福祉大学通信教育課程、日本社会事業大学社会福祉学部非常勤講師／広島大学アクセシビリティセンター特任講師

研究課題：言語知識の獲得と通訳作業過程に着目した学術手話通訳養成カリキュラムの開発

中村沙絵（なかむら さえ） 日本

研究課題：スリランカにおける社会奉仕活動の系譜とその政治的外延に関する研究

中村真里絵（なかむら まりえ） 日本 岡山理科大学、四條畷学園短期大学非常勤講師

研究課題：タイにおける焼物づくりの職人集団の形成に関する人類学研究

奈良雅史（なら まさし） 日本 日本学術振興会特別研究員

研究課題：宗教と公共性をめぐる人類学的研究——現代中国におけるイスラーム復興運動の事例から

名和克郎（なわ かつお） 日本 東京大学東洋文化研究所准教授

研究課題：ネパールにおける「包摂」をめぐる言説と社会動態に関する比較民族誌的研究

西本 太（にしもと ふとし） 日本

研究課題：近代化とラオス農村社会の再生産戦略——1975～2012

橋本裕之（はしもと ひろゆき） 日本 追手門学院大学地域文化創造機構特別教授

研究課題：災害復興における在来知——無形文化の再生と記憶の継承

長谷川 清（はせがわ きよし） 日本 文教大学文学部教授

研究課題：資源化される「歴史」——中国南部諸民族の分析から

比嘉夏子（ひが なつこ） 日本 日本学術振興会特別研究員

研究課題：社会空間の動態と行為の演劇性をめぐる人類学的研究——ポリネシアにおける贈与の全体性

福岡まどか（ふくおか まどか） 日本 大阪大学大学院人間科学研究科准教授

研究課題：東南アジアのポピュラーカルチャー——アイデンティティ、国家、グローバル化

藤井龍彦（ふじい たつひこ） 日本 国立民族学博物館名誉教授／総合研究大学院大学学融合推進センター特任教授

研究課題：総研大文化科学研究科「学術資料マネジメント教育プログラム開発によるグローバルな人文研究者の養成機能強化」におけるプログラム開発事業

藤原（田中）潤子（ふじわら（たなか）じゅんこ） 日本 日本学術振興会特別研究員-RPD

研究課題：現代ロシアにおける新異教主義——歴史認識、マイノリティ性、地位向上運動に注目して

堀田あゆみ（ほった あゆみ） 日本 滋賀県立大学人間文化学部非常勤講師

研究課題：モンゴル遊牧民のモノをめぐる文化研究

堀 敏一（ほり としかず） 日本 アイヌ工芸家

研究課題：イクパスイの形状について——イクパスイの形について知見を深める

前川真裕子（まえかわ まゆこ） 日本 神戸松蔭女子学院大学非常勤講師

研究課題：自然をめぐる概念と「オーストラリアらしさ」の形成——野生動物と人間の住み分けをめぐる一考察

前島訓子（まえじま のりこ） 日本 名古屋大学大学院環境学研究科助教／岐阜大学地域科学部、相山女学園大学人間関係学部非常勤講師

研究課題：インドにおける聖地の比較研究

松井今日子（まつい きょうこ） 日本 芸北民俗芸能保存伝承館嘱託学芸員

研究課題：民俗芸能の民俗誌的記録の枠組みについての一研究——中国山地の囃し田を事例に

松井智子（まつい ともこ） 日本

研究課題：女性移民・人身売買被害者支援運動の変容とその多元的リアリティの解明——タイを事例に

松井生子（まつい なるこ） 日本 昭和薬科大学薬学部非常勤講師

研究課題：カンボジアの人工統計における民族範疇および民族概念——在カンボジア・ベトナム人との関わりを中心に

松岡葉月（まつおか はつき） 日本

研究課題：博物館における全天周科学映像の開発および評価に関する人文・社会学的研究

松川恭子（まつかわ きょうこ） 日本 甲南大学社会学部准教授

研究課題：グローバリゼーションの中で変容する南アジア芸能の人類学的研究

松川孝祐（まつかわ こうすけ） 日本 青山学院大学経営学部非常勤講師
研究課題：ミシュテク語系トーン言語の比較研究

松嶋 健（まつしま たけし） 日本 日本学術振興会特別研究員
研究課題：社会的なるものの生態学——イタリアの社会協同組合を軸とした統治と連帯の人類学的研究

松田有紀子（まつだ ゆきこ） 日本
研究課題：京都花街の文化遺産登録と〈芸〉の継承をめぐる歴史人類学

道信良子（みちのぶ りょうこ） 日本 札幌医科大学医療人育成センター教養教育研究部門准教授
研究課題：現代の保健・医療・福祉の現場における「子どものいのち」

宮本万里（みやもと まり） 日本 英国アカデミー Newton International Fellow
研究課題：現代ブータンの多元的宗教空間における仏教と屠畜に関する政治人類学的研究

宮脇千絵（みやわき ちえ） 日本 京都薬科大学非常勤講師
研究課題：中国雲南省におけるモンの民族衣装とファッションに関する人類学的研究

村上 恵（むらかみ めぐみ） 日本 アイヌ刺しゅう家
研究課題：アイヌ衣服について——アイヌ文様（チヂリ）について

柳沢英輔（やなぎさわ えいすけ） 日本 京都大学学際融合教育研究推進センターアジア研究教育ユニット研究員
研究課題：現代ベトナムにおけるゴング文化の継承——村落内の伝承と政府の取り組みに着目して

藪中剛司（やぶなか たけし） 日本 新ひだか町教育委員会社会教育課文化財グループ主幹
研究課題：アイヌ民具の中にみられる特徴的な漆器資料の分析

山崎浩平（やまざき こうへい） 日本
研究課題：インド・ヒジュラ社会における共同性と移動の人類学研究

山下のぶ子（やました のぶこ） 日本 アイヌ刺しゅう家
研究課題：アイヌ衣服について——アイヌ刺しゅうの比較（文様、素材）について

山本文子（やまもと あやこ） 日本
研究課題：ミャンマー・ヤンゴンにおける精霊信仰の民族誌的研究

吉江貴文（よしえ たかふみ） 日本 広島市立大学国際学部准教授
研究課題：近代ヒスパニック世界における文書ネットワーク・システムの成立と展開

吉田佳世（よしだ かよ） 日本 千里金蘭大学看護学部非常勤講師
研究課題：〈姉妹〉と〈妻〉のライフデザインの変容にみる現代沖縄の祖先祭祀に関する人類学的研究

吉本康子（よしもと やすこ） 日本 神戸学院大学、園田学園女子大学、放送大学非常勤講師
研究課題：チャム系住民とイスラームとの関係に関する地域間比較研究

劉 麟玉（りゅう りんぎょく） 日本 奈良教育大学教育学部准教授
研究課題：音盤を通してみる声の近代——台湾・上海・日本で発売されたレコードの比較研究を中心に

特別共同利用研究員

本館は、大学共同利用機関として研究活動を展開すると同時に、大学院教育の一環として、全国の国公立大学の博士後期課程に在籍する学生を、当該大学院生の所属する大学院研究科からの委託を受けて特別共同利用研究員として受け入れ、一定の期間、特定の研究課題に関して研究指導をおこなっている。

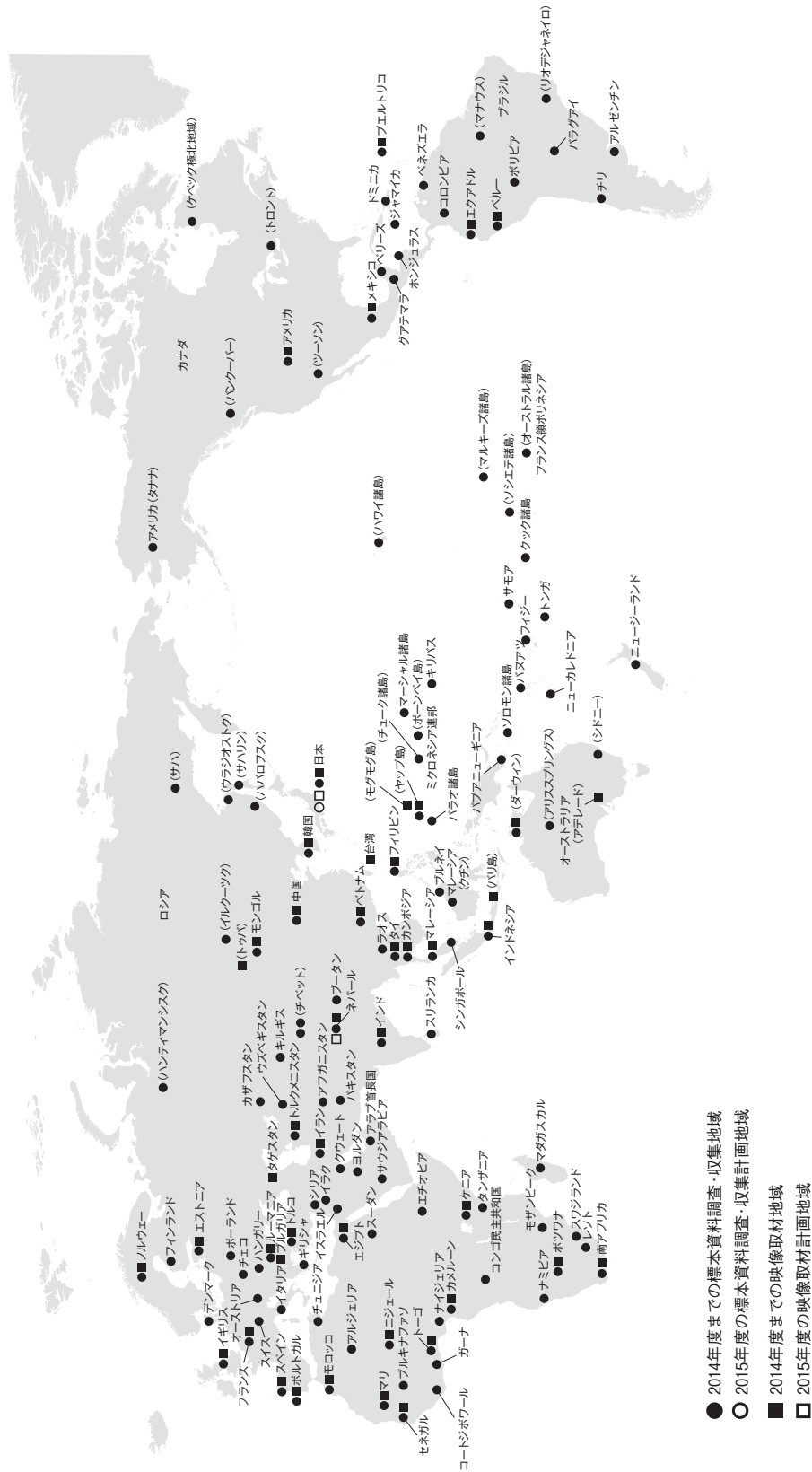
特別共同利用研究員は、各々の特定の研究課題に応じて指導教員から研究指導を受け、本館の諸施設を利用し研究を遂行するだけでなく、本館に設置されている、総合研究大学院大学文化科学研究科の講義を受けることができる。

2014年度は、私立大学1人の大学院生を受け入れた。

2-6 データの利用

標本資料および映像音響資料に関するデータ

● 標本資料収集および映像取材地域



●標本資料の収集・利用状況

・収集

小長谷有紀	モンゴル	41点（衣装他）	2014年8月4日～8月12日
佐々木史郎	ロシア	6点（衣装他）	2014年8月2日～8月17日
藤本透子	カザフスタン・ウズベキスタン	216点（ゆりかご他）	2014年8月8日～10月23日
藤本透子	カザフスタン	64点（円卓他）	2015年3月3日～3月28日

・2015年3月31日現在の収蔵資料数

海外資料／177,689点 国内資料／163,243点（未登録資料含む） 総点数／340,932点（未登録資料含む）

・大学・博物館等への貸し出し

総点数／909点

●映像音響資料の収集・利用状況

・取材

寺田吉孝	大阪府大阪市	和太鼓の製作工程と伝統技術の継承	2014年6月28日、7月12日、8月1日、8月22日、12月17日、12月18日、 2015年3月12日、3月20日、3月27日
日高真吾	京都府京都市	彫金技術	2014年11月6日、11月10日、11月25日、12月8日、12月24日、2015年1月13日

・2015年3月現在の収蔵資料数

映像資料／7,966点 音響資料／62,651点 総点数／70,617点

・映像音響資料の貸し出し

利用件数／191件（内、大学31件） 資料利用総点数／946点（内、大学136点）

館内利用など

利用件数／97件 資料利用点数／393点

特別利用（館外での上映・視聴など）

利用件数／94件 資料利用点数／553点

文献図書資料の収集・整理・利用状況

●2014年度図書室の活動

1. 利用者サービス

書庫1層から4層における書架サインの見直しを実施し、利用者が求める資料へのアクセス改善を行った。

2. 利用者研修会の開催——教育・研究支援

- 1) 総研大新入生ガイダンス
- 2) 博物館学コース（JICA）オリエンテーション
- 3) 国会図書館職員研修
- 4) 若手研究者奨励セミナー
- 5) 阪大集中講義（アート・アーカイブズ概論）等
＊随時受付のツアーも、実施している。

3. 資料整備関係

- 1) 週及入力を引き続き実施し、約23,000冊を登録した。
- 2) 昨年より継続して整理およびリスト化を実施していた地図資料（約5万枚）の整備が完了し、そのリストに沿った配置換えも実施した。
- 3) 研究業績棚の点検および整理業務は、最終年（3年目）として1,909件の整理を行い、3か年で総計11,992件を完了した。
- 4) 昨年度より5年計画で開始した蔵書実査（2年目）として、視聴覚室資料、大型図書（1層）、漢籍（2層）

の実査に加えて、雑誌（2層）約3万3千冊に「カラーバーコード」を貼付し、総計5万冊の蔵書実査を行った。

4. 施設整備

- 1) 書庫のエレベーター内に防犯カメラを設置し、防犯対策とセキュリティ強化を進めた。
- 2) 開架スペースにおいて、割れ・浮きのある床タイルを貼り替え、図書室における安全性を高めた。

5. 広報、社会貢献

- 1) 「みんぱく図書室ニュース」を月に一度発行し、図書室の情報提供を行った。
- 2) 中学生の職場体験学習受入れ。

豊中市立第三中学校 （2014年10月29日 2年生女子2名）
 箕面市立第三中学校 （2014年11月5日 2年生女子2名）
 吹田市立竹見台中学校 （2014年11月12日 2年生男子2名）
 吹田市立佐井寺中学校 （2014年11月19日 2年生男子1名、女子2名）

6. その他

HRAF 本部との協議により館内作業用として作成された「地域・民族分類（OWC）館内版」の代わりとして館内専用ページの「情報サービス課情報」においてPDFを公開した。

●2014年度新規受入数

日本語図書	2,272点	外国語図書	1,891点		
AV 資料他	94点	製本雑誌	724点	合計	4,981点

●2015年3月末現在の収蔵図書数

日本語図書	266,823点	外国語図書	394,214点	合計	661,037点
日本語雑誌	10,104種	外国語雑誌	6,830種	合計	16,934種
HRAF	385ファイル	HRAF 原典（テキスト）	7,141冊		

●利用状況（2014年度）

入室者	全体	11,481人
	館外者	1,704人
時間外入室者		117人
うち日曜、祝日		48人
貸出	図書	11,310冊
	雑誌	285冊
うち館外貸出図書		3,181冊
HRAF 利用受付		48件
	(カウンター受付件数)	

文 献 複 写	受 付	国内（うち謝絶）	1,831 (254)件
		国外（うち謝絶）	67 (28)件
		来室*	4,232 件
	依 頼	国内	659 (21)件
		国外	64 (14)件
現 物 貸 借	受 付	国内	833 (58)件
	依 頼	国内	422 (12)件
		国外	23 (1)件
事 項 調 査		受 付	36 件

*うち大学等の機関1,694件

民族学資料共同利用窓口

本館の所蔵する民族学資料は多岐に渡り、館内外における諸分野の研究や教育、他の博物館への貸し付けなどを通して社会に還元し利用されるためには、各種問い合わせに効率よく対応する必要があった。そうした観点から、2006年度から「民族学資料共同利用窓口」が設置された。

2014年度の問い合わせ利用件数は、402件であった。

問い合わせ者別		(件)	問い合わせ者の所属機関別		(件)
教員（大学）	53		公的機関	大学・大学図書館	100
大学院生	20			博物館・美術館	21
大学生	4			小・中・高	5
教員（小・中・高）	6			その他教育機関	2
学生（小・中・高）	0			研究機関	1
博物館・美術館関係	25			公共図書館	4
図書館	30			地方公共団体	12
教育・研究機関	3			団体	9
マスコミ関係	7		民間	研究機関	1
会社・団体	57			会社	45
一般	70			団体	6
民博教職員	127		個人	館外	69
計	402			館内	127
			計		402

資料の利用目的					(件)
調査・研究	研究* ¹	106	業務用	展示用	44
	論文作成	5		番組制作	14
	学習* ²	2		出版物作製	25
	図書館から	19		参考資料	12
	授業で利用	37		入手方法	8
	その他	42		小計	103
	小計	211		その他	寄贈申出
	館内利用	刊行物作成	0		その他
館の事業		44	小計		13
参考資料		7	合 計		402
資料の複製		24	*1 大学生以上の調査を「研究」とする		
小計		75	*2 高校生以下の調査を「学習」とする		

*1 大学生以上の調査を「研究」とする

*2 高校生以下の調査を「学習」とする

民族学研究アーカイブズの構築

本館には発足以来、民族学者の研究ノートや原稿、フィールドワークで生成、収集された映像・録音記録など、さまざまな資料が蓄積されている。2005年、民博創設30年を迎えるにあたり、民族学研究の拠点である本館が備えるべき機能の一つとして、アーカイブズ管理体制整備の必要性が検討され、かつ、これらの資料・情報を公開し、研究・教育での共同利用や社会還元に供してその価値を再認識しようと、「民族学研究アーカイブズ」の構築事業が開始された。

2007年度に、民族学研究アーカイブズ Home Page を立ち上げ、これまで青木文教、大内青琥、桂 米之助、鹿野忠雄、菊沢季生、篠田 統、杉浦健一、土方久功、馬淵東一、及び「日本文化の地域類型研究会」アーカイブ、松尾三憲旧蔵絵葉書コレクションなどの資料リスト作成等を行い、その成果を順次公開している。

2014年度は、昨年度に引き続き既存アーカイブズの整理事業を行い、泉 靖一アーカイブ、馬淵東一アーカイブ、北村 甫旧蔵資料（仮称）アーカイブの権利処理を完了するとともに、梅棹忠夫アーカイブのリストを Web 公開し

た。また、岩本公夫アーカイブの写真資料2,237点をデジタル化し、全5,323点のデジタル化を完了した。

リストを公開し、利用に供しているアーカイブは13件である。2014年度の利用状況は閲覧7件、特別利用3件であった。

データベースの作成・利用状況

●館外公開しているデータベース

・標本資料目録

本館が所蔵する標本資料（生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など）の情報（画像あり）。ほぼすべての資料について、標本名、地域、民族、寸法・重量、受入年度などの基本情報を収録。

2013年度までの作成件数	277,206
2014年度の作成件数	813
2014年度のアクセス件数	82,021

・標本資料詳細情報

本館が所蔵する標本資料（生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など）の情報（画像あり）。標本名、現地名、訳名、収集地、使用地、使用民族、使用年代、用途・使用法、製作地、製作法・材料など、より詳しい情報を収録。

2013年度までの作成件数	49,808
2014年度の作成件数	7,916
2014年度のアクセス件数	7,092

・標本資料記事索引

本館関連出版物から所蔵標本資料の解説部分を抽出し、その書誌事項を標本資料別に整理した情報。

2013年度までの作成件数	50,661
2014年度の作成件数	5,779
2014年度のアクセス件数	3,567

・韓国生活財

ソウルの李さん一家の生活財を網羅した情報。アパートの中にあったすべての物について、配置と入手方法、物にまつわる家族の思い出を記録（画像あり）。

2013年度までの作成件数	7,827
2014年度の作成件数	0
2014年度のアクセス件数	5,293

・ジョージ・ブラウン・コレクション（日本語版、英語版）

宣教師であり神学博士でもあったジョージ・ブラウン氏が19世紀から20世紀初頭にかけて南太平洋諸島で収集し、現在、本館に収蔵されている民族誌資料の基本情報（画像あり）。

2013年度までの作成件数	2,992
2014年度の作成件数	0
2014年度のアクセス件数	5,636

・映像資料目録

本館が所蔵する映画フィルム、ビデオテープ、DVDなど映像資料の情報。

2013年度までの作成件数	7,881
2014年度の作成件数	85
2014年度のアクセス件数	10,249

・ビデオテープ

本館展示場で提供しているビデオテープ番組の情報。番組をキーワードで検索したり、ビデオテープブースと同じメニューで探すことができる。

2013年度までの作成件数	644
2014年度の作成件数	66
2014年度のアクセス件数	4,235

・音楽・芸能の映像

本館が世界各地で取材したビデオ映像から、音楽演奏や芸能に関係する部分を、1曲または1テーマごとに抽出

した動画データベース。映像は館内限定公開。

2013年度までの作成件数	849
2014年度の作成件数	0
2014年度のアクセス件数	477

・ネパール写真（日本語版、英語版）

「西北ネパール学術探検隊」（1958年）に参加した高山龍三氏（当時大阪市立大学大学院生）らがネパールで撮影した写真、および、同隊が収集し、現在本館に収蔵されている標本資料の情報（画像あり）。

2013年度までの作成件数	3,879
2014年度の作成件数	0
2014年度のアクセス件数	1,889

・松尾三憲旧蔵絵葉書コレクション

松尾三憲（みのり）氏が、1919年から1923年までの海軍在職中に、訓練航海の途上訪れた現地で買い求めた絵葉書の情報（画像あり）。

2013年度までの作成件数	169
2014年度の作成件数	1
2014年度のアクセス件数	1,492

・音響資料目録

本館が所蔵するレコード、CD、テープなど音響資料の情報。

2013年度までの作成件数	62,651
2014年度の作成件数	0
2014年度のアクセス件数	1,700

・音響資料曲目

本館が所蔵する音響資料について、音楽の曲単位、昔話の一話単位で収録した情報。

2013年度までの作成件数	346,772
2014年度の作成件数	0
2014年度のアクセス件数	849

・図書・雑誌目録

本館が所蔵する図書・雑誌の書誌・所蔵情報。

2013年度までの作成件数	673,023
2014年度の作成件数	4,948
2014年度のアクセス件数	645,247

・梅棹忠夫著作目録（1934～）

梅棹忠夫本館初代館長の論文・著書から本の帯の推薦文まで、あらゆる著作を網羅した目録情報。

2013年度までの作成件数	6,473
2014年度の作成件数	31
2014年度のアクセス件数	1,083

・中西コレクション——世界の文字資料

世界のさまざまな文字で書かれた図書・新聞・手稿・標本などの資料に関する分析情報と書誌情報、文字サンプルの画像。これらの資料は、中西印刷株式会社・故中西亮氏が世界各地で収集。

2013年度までの作成件数	2,729
2014年度の作成件数	0
2014年度のアクセス件数	42,201

・吉川「シュメール語辞書」

吉川 守氏（広島大学名誉教授）が40年ほどの年月をかけて完成させた、シュメール語の研究ノート。親字33,450語をキーワードに検索・閲覧できる。

2013年度までの作成件数	
キーワード：33,450語（40,596頁）	
2014年度の作成件数	0
2014年度のアクセス件数	410

・ Talking Dictionary of Khinina-ang Bontok (ボントック語音声画像辞書)

Lawrence A. Reid 氏 (ハワイ大学名誉教授) が編集した、フィリピン・ルソン島北部で話されるボントック語のギナアン方言の辞書。語の派生関係、例文、音声・画像などのデータを結びつけたマルチメディア・データベース辞書。

2013年度までの作成件数	7,637
2014年度の作成件数	0
2014年度のアクセス件数	426

・ 日本昔話資料 (稲田浩二コレクション)

稲田浩二氏 (当時京都女子大学教授) らのグループが、1967年から1978年にかけて日本各地29道府県で現地録音取材した日本昔話資料 (446本のテープ・約190時間) の情報 (音声あり)。音声は館内限定公開。

2013年度までの作成件数	3,696
2014年度の作成件数	0
2014年度のアクセス件数	690

・ rGyalrongic Languages (ギャロン系諸語) [英語、中国語]

長野泰彦本館名誉教授と Marielle Prins 博士が編集した、中国四川省の西北部で話されるギャロン系諸語のデータベース (音声あり)。81の方言ないし言語それぞれについて、426または1,200の語彙項目と200の文例を収録している。

2013年度までの作成件数	
語彙: 39,826語 (文例: 15,706件)	
2014年度の作成件数	0
2014年度のアクセス件数	18,739

・ 衣服・アクセサリー

本館が所蔵する衣服標本資料とアクセサリー標本資料の詳細分析情報、および関連フィールド写真の情報 (画像あり)。

2013年度までの作成件数	21,485
2014年度の作成件数	2,248
2014年度のアクセス件数	119,674

・ 身装文献

身装文化に関する雑誌記事、図書の索引情報。1) 服装関連日本語雑誌記事 (カレント)、2) 服装関連日本語雑誌記事 (戦前編)、3) 服装関連外国語雑誌記事、4) 服装関連日本語図書、5) 服装関連外国語民族誌で構成。

2013年度までの作成件数	159,766
2014年度の作成件数	5,768
2014年度のアクセス件数	17,016

・ 近代日本の身装電子年表

洋装がまだ日本に定着していなかった1868年 (明治元年) から1945年 (昭和20年) の日本を対象とした身装関連の電子年表。「事件」と「現況」、「その年の情景」、「回顧」、テキスト画像で構成される。当時の新聞記事と身装関連雑誌から情報を収録。

2013年度までの作成件数	10,049
2014年度の作成件数	0
2014年度のアクセス件数	2,092

● 館内で利用できるデータベース

・ 標本資料詳細情報 (館内専用)

本館が所蔵する標本資料 (生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など) の情報 (画像あり)。標本名、現地名、訳名、収集地、使用地、使用民族、使用年代、用途・使用法、製作地、製作法・材料など、より詳しい情報を収録。

2013年度までの作成件数	264,406
2014年度の作成件数	0
2014年度のアクセス件数	44,537

・カナダ先住民版画

本館が所蔵する代表的なカナダ先住民版画の基本情報と解説（画像あり）。特別展「自然のこえ 命のかたち——カナダ先住民の生み出す美」（2009年）の展示資料を中心に収録。

2013年度までの作成件数	158
2014年度の作成件数	0
2014年度のアクセス件数	275

・音楽・芸能の映像

本館が世界各地で取材したビデオ映像から、音楽演奏や芸能に関係する部分を、1曲または1テーマごとに抽出した動画データベース。

2013年度までの作成件数	849
2014年度の作成件数	0
2014年度のアクセス件数	138

・朝枝利男コレクション

朝枝利男氏が1930年代にアメリカの学術調査団に数回にわたり同行し撮影した、南太平洋の人々や動植物の写真の情報（画像あり）。

2013年度までの作成件数	3,966
2014年度の作成件数	0
2014年度のアクセス件数	22

・タイ民族誌映像——精霊ダンス

田辺繁治本館名誉教授が調査したタイの精霊ダンスの写真情報（画像あり）。精霊ダンスの系統、開催地域、祭主から写真群を閲覧できる。写真は調査報告（タイ語）とも関連づけられている。

2013年度までの作成件数	10,082
2014年度の作成件数	0
2014年度のアクセス件数	0

・東南アジア稲作民族文化総合調査団写真

日本民族学協会が1957年から1964年にかけて三次にわたり東南アジアに派遣した調査団のうち、第一次調査団（1957年）と第二次調査団（1960年）が記録した写真の情報（画像あり）。

2013年度までの作成件数	4,393
2014年度の作成件数	0
2014年度のアクセス件数	1,659

・オーストラリア・アボリジニ研究フィールド写真

小山修三本館名誉教授が、1980年から2000年にかけて、オーストラリア・アボリジニ文化の調査で記録した、儀礼から風景までの多彩な写真の情報（画像あり）。

2013年度までの作成件数	7,999
2014年度の作成件数	0
2014年度のアクセス件数	347

・西北ネパール及びマナスル写真

「西北ネパール学術探検隊」（1958年～1959年）が撮影した写真の情報（画像あり）。一部に「日本山岳会第一次マナスル登山隊」（1953年）科学班（推定）の写真を含む。本館に移管された旧文部省史料館資料の一部。

2013年度までの作成件数	620
2014年度の作成件数	0
2014年度のアクセス件数	352

・京都大学学術調査隊写真コレクション

「京都大学アフリカ学術調査隊」（1961年～1967年）と「京都大学探検部トンガ王国探検隊」（1960年）が撮影した写真の情報（画像あり）。

2013年度までの作成件数	24,018
2014年度の作成件数	9,672
2014年度のアクセス件数	0

・梅棹忠夫写真コレクション

梅棹忠夫本館初代館長が、世界各地における調査研究活動の過程で撮影した写真の情報（画像あり）。

2013年度までの作成件数	35,420
2014年度の作成件数	0
2014年度のアクセス件数	4,751

・日本昔話資料（稲田コレクション）

稲田浩二氏（当時京都女子大学教授）らのグループが、1967年から1978年にかけて日本各地29道府県で現地録音取材した日本昔話資料（446本のテープ・約190時間）の情報（音声あり）。

2013年度までの作成件数	3,696
2014年度の作成件数	0
2014年度のアクセス件数	14

・国内資料調査報告集

日本国内における、1) 民具などの標本資料類の所在、2) 伝統技術伝承者の所在、3) 民族・民俗映像記録の所在、4) 民族・民俗関係出版物の所在、に関する情報。本館が委嘱した国内資料調査委員による調査報告集（1980年～2003年）をデータベース化。

2013年度までの作成件数	21,373
2014年度の作成件数	0
2014年度のアクセス件数	6

●2014年度に館外公開されたデータベース

ジョージ・ブラウン・コレクション（日本語版）（2014年6月27日公開）

●2014年度に館内公開されたデータベース

なし

2-7 みんなく施設の利用

博物館施設の利用状況

●国立民族学博物館（展示場）を利用した大学・研究機関等（50音順、カッコ内は人数）

愛知大学（16）、NPO 法人ディーブピープル（11）、追手門学院大学（12）、大阪学院大学（78）、大阪教育大学（179）、大阪芸術大学（66）、大阪芸術大学附属大阪美術専門学校（17）、大阪工業大学（17）、大阪国際大学（8）、大阪樟蔭女子大学（83）、大阪成蹊大学（7）、大阪総合デザイン専門学校（17）、大阪体育大学（4）、大阪大学（78）、大阪人間科学大学（11）、大阪文化国際学校（14）、大阪文化服飾学院（5）、岡山大学（9）、岡山理科大学（9）、沖縄県立芸術大学（26）、学校法人上田学園大阪総合デザイン専門学校（162）、関西大学（59）、関西学院大学（28）、関東学院大学（8）、岐阜県立森林文化アカデミー（21）、岐阜聖徳学園（13）、岐阜女子大学（57）、九州大学（4）、京都市立芸術大学（146）、京都外国語専門学校（86）、京都外国語大学（4）、京都芸術デザイン専門学校（50）、京都産業大学（6）、京都精華大学（84）、京都造形芸術大学（86）、京都大学（5）、京都橘大学（202）、京都ノートルダム女子大学（6）、京都文教大学（8）、近畿大学（85）、慶應義塾大学（41）、甲南女子大学（114）、甲南大学（13）、神戸学院大学（45）、神戸学園 神戸スポーツアート Cocoro（16）、神戸芸術工科大学（61）、神戸国際大学（6）、神戸松蔭女子学院大学（6）、神戸女学院大学（52）、神戸女子大学（54）、神戸大学（89）、滋賀県立大学（4）、滋賀大学（4）、四天王寺大学（16）、芝浦工業大学（15）、杉野服飾大学（74）、駿台観光&外語ビジネス専門学校（4）、成安造形大学（46）、摂南大学（48）、専門学校ルネサンス・デザイン・アカデミー（29）、千里金蘭大学（49）、相愛大学（23）、園田学園女子大学（30）、宝塚大学（15）、タキイ研究農場付属園芸専門学校（82）、玉川大学（6）、帝塚山学院大学（39）、東京藝術大学（51）、東京農業大学（72）、同志社女子大学（26）、同志社大学（10）、東北学院大学（58）、東北生活文化大学（37）、徳島文理大学（20）、獨協大学（11）、鳥取大学（13）、ドレスメーカー学院（72）、名古屋総合デザイン専門学校（92）、奈良教育大学（17）、奈良県立大学（8）、奈良大学（47）、阪南大学（11）、兵庫教育大学（22）、ファッション専門学校 ESMOD JAPON 大阪校（26）、フェリス学院大学（5）、佛教大学（20）、文化学園大学（19）、文化服装学院（142）、平安女学院大学（23）、別府大学（3）、法政大学（17）、武庫川女子大学（14）、代々木ゼミナール大阪南校（35）、立教大学（13）、立命館大学（48）、龍谷大学（168）、和楽会（22）

*注 利用申請手続きを行った大学・研究機関等

・来館目的（アンケート回答より、順不同抜粋）

- ・宗教学概論 A、宗教民族学研究の実例として
- ・1年生を対象とした「基礎ゼミ」の授業の一環
- ・大学院の基幹科目「芸術工学論」の学外演習
- ・在学生（2回生）セミナーにおけるフィールドワーク活動
- ・ゼミ（専門演習、卒業研究）の授業時間外学習
- ・2学年次 美術鑑賞 I 研修旅行
- ・1回生の基礎ゼミナール「世界の国々」の校外研修
- ・学部の高校工芸免許に関わる科目「工芸理論」の一貫
- ・本学人文学部文化交流学科のセミナー「文化交流演習工」（3年次必修科目）の一環として、世界の様々な文化について学び理解を深める。
- ・中国語コミュニケーション、中国語卒業ゼミの学外授業。
- ・人間科学専攻の新入生セミナーの一環として
- ・彫刻基礎（演習）C、学外研修
- ・博物館学芸員の資格取得の受講生のための現地講義
- ・歴史文化学会（学生による）の見学企画

●国立民族学博物館キャンパスメンバーズ利用実績（カッコ内は人数）

大阪大学、京都文教大学、同志社大学文化情報学部・文化情報学研究科、千里金蘭大学（1,049）

施設の整備状況

博物館施設の整備状況

1) 障がい有する方等への配慮についての取組状況

- ・来館者等に安心・安全な施設環境を提供するため引き続きバリアフリー化を計画し、くつろぎスペース（講堂地下）の床を車椅子の方でも使いやすいように、じゅうたんから塩ビタイルへと貼り替えを行った。

2) 既存施設・設備の有効活用への取組状況

- ・施設の有効利用及び適切な管理のための施策の検討を行うために、施設マネジメント委員会を毎月開催した。

3) 施設の維持管理の取組状況

- ・常設展示場のうち、南アジアと東南アジアの展示場を新構築展示施工に合わせて老朽化した床材の修繕を実施した。
- ・衛生的環境を確保するため、今年度も館内害虫駆除を行った。
- ・第1収蔵庫の空間を有効活用するために、2015年度に保管棚及びハンドラックの再配架を予定しており、それに向けて空調設備と電気設備と床の整備を行った。
- ・自主点検及び保全業務の報告書に基づいて、予防保全・不良箇所を含めて計画的に改修計画を推進し、修繕経費の抑制を図った。
- ・安全対策として、館内（展示場・収蔵庫除く）の地震対策状況調査を行い、防災監理点検の結果と照合し、転倒防止措置が未実施の什器類について、固定工事を行った。

4) 省エネルギー対策等や地球温暖化対策に対する取組状況

- ・昨年に引き続き、夏季及び冬季における省エネルギーへの取組について館内に周知した。
- ・2013年度に引き続き常時点灯している階段室等（共同研究棟東側非常階段及び館長室横の非常階段）の照明器具を省エネ型またはセンサー付き照明器具に順次取替え、節電に努めた。
- ・レストランの照明器具をLEDに取替え、省エネルギー化に努めた。

2-8 特許

知的財産形成・特許出願など

●特許出願

発明の名称：トラベリングディスプレイシステム

特許出願日：2014年9月2日

出願番号：特願2014-178585

発 明 者：日高真吾、上 まり子（ウエマリコオフィス）、小谷竜介（東北歴史博物館）、和高智美（合同会社文化創造巧芸）

発明の名称：インタラクティブな触地図

特許出願日：2014年12月26日

出 願 番 号：特願2014-265543

発 明 者：平井康之（国立民族学博物館客員准教授、九州大学）、富本浩一郎（九州大学）、吉田憲司、日高真吾、山中由里子

●商標出願

商標の名称：みんぱく（ロゴ）

商標出願日：2015年2月10日

出 願 番 号：商願2015-011927

商標の名称：ロゴマーク

商標出願日：2015年2月10日

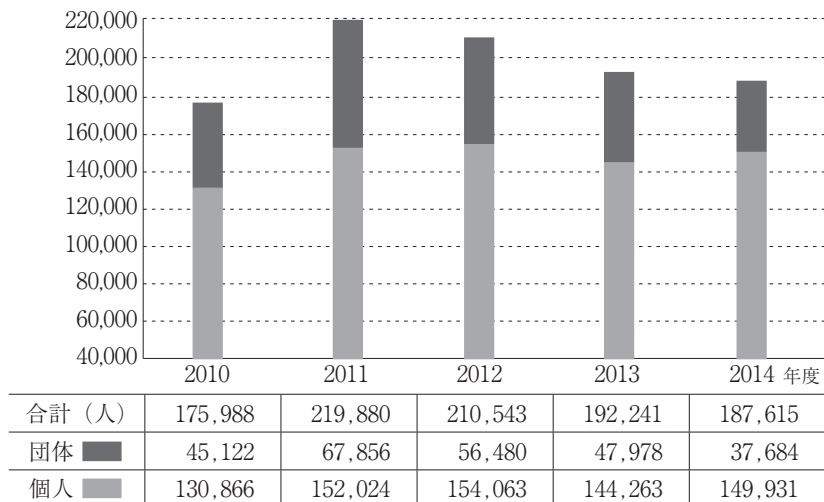
出 願 番 号：商願2015-011928

3 展 示

入館者数

●2014年度総観覧者数（共催展、巡回展含む） 247,365人

●入館者数（5年間）



本館展示

●展示専門部会

本館展示新構築にかかわる支援・連絡調整と本館展示の運営にかかわる連絡調整、ならびに特別展・企画展の企画内容の点検支援・連絡調整を行う組織として、文化資源運営会議のもとに展示専門部会を置く。同部会は本館展示新構築総括チームと特別展・企画展ワーキング・グループより構成する。なお、本館展示の運営・新構築にかかわる案件の全体での検討の場として、随時、本館展示プロジェクトリーダーからなる拡大展示専門部会を開催する。

●本館展示プロジェクトチーム（2014年度現在）

	代表者	構成メンバー（五十音順）				
オセアニア展示	Peter J. Matthews	印東道子 林 勲男	菊澤律子	久保正敏	須藤健一	丹羽典生
アメリカ展示	鈴木七美	伊藤敦規 関 雄二	岸上伸啓 八杉佳穂	齋藤 晃	齋藤玲子	鈴木 紀
ヨーロッパ展示	宇田川妙子	庄司博史	新免光比呂	森 明子		
アフリカ展示	三島禎子	飯田 卓	池谷和信	川瀬 慈	竹沢尚一郎	吉田憲司
西アジア展示	山中由里子	上羽陽子	菅瀬晶子	西尾哲夫		
音楽展示	福岡正太	川瀬 慈	笹原亮二	寺田吉孝		
言語展示	菊澤律子	庄司博史	西尾哲夫	八杉佳穂	吉岡 乾	
南アジア展示	三尾 稔	上羽陽子 松尾瑞穂	杉本良男 南 真木人	竹村嘉晃* 吉岡 乾	寺田吉孝	豊山亜希*
東南アジア展示	信田敏宏	榎永真佐夫	佐藤浩司	平井京之介	福岡正太	吉田ゆか子*
中央・北アジア展示	藤本透子	池谷和信	小長谷有紀*	佐々木史郎		
東アジア展示（朝鮮半島の文化）	太田心平	朝倉敏夫	林 史樹*			
東アジア展示（中国地域の文化）	横山廣子	河合洋尚 野林厚志	韓 敏	小長谷有紀* 陳 天璽*	塚田誠之	
東アジア展示（アイヌの文化）	佐々木史郎	伊藤敦規	岸上伸啓	齋藤玲子	佐々木利和*	吉田憲司
東アジア展示（日本の文化）	日高真吾	池谷和信 出口正之	呉屋淳子* 野林厚志	笹原亮二 廣瀬浩二郎	庄司博史 南 真木人	菅瀬晶子
情報・インフォメーション	丸川雄三	飯田 卓 福岡正太	伊藤敦規	中村嘉志*	野林厚志	廣瀬浩二郎
イントロダクション展示	日高真吾	齋藤玲子	山中由里子	吉田憲司		

*併任教授、客員教員、特別客員教員、機関研究員等を示す

●特別展・企画展・ワーキンググループ、本館展示新構築総括チーム等

飯田 卓 上羽陽子 齋藤玲子 日高真吾 南 真木人 山中由里子 吉田憲司

●本館展示の新構築（展示チームは一般公開日現在）

アフリカ展示

一般公開 2009年 3月26日～

アフリカ展示チームリーダー 竹沢尚一郎

アフリカ展示チームメンバー （館内）飯田 卓 池谷和信 川口幸也 三島禎子 吉田憲司

内容

人類誕生の地とされるアフリカは、常に外部世界と結びつきながら変化を重ねてきた。私たちが、現在目にするアフリカ大陸の中の、文化や言語の多様性は、そうした変化の結果にほかならない。新たに構築したアフリカ展示では、人びとの「歴史を掘り起こす」営みに目を向けるとともに、現在のアフリカに生きる人びとの生活のありさまを4つの「動詞」（憩う・働く・装う・祈る）のコーナーに分けて紹介する。

西アジア展示

一般公開 2009年 3月26日～

西アジア展示チームリーダー 西尾哲夫

西アジア展示チームメンバー （館内）上羽陽子 山中由里子

内容

中東ともよばれる西アジアの人びとは、自分たちが暮らす地域をマシュリク（日出ずる地）とよび、マグリブ（日没する地）と呼ばれる北アフリカと深い関係を保ってきた。乾燥地帯が大部分を占め、遊牧を生業とする人びとが移動する一方、バグダードやカイロなどでは古来より都市文化が栄えてきた。多くの住民はムスリムだが、ユダヤ教やキリスト教発祥の地でもある。新たに構築した西アジア展示では、地域規模の変動の時代に移りゆく人びとの暮らしを紹介する。

音楽展示

一般公開 2010年 3月25日～

音楽展示チームリーダー 寺田吉孝

音楽展示チームメンバー （館内）笹原亮二 福岡正太

内容

私たち人類は、音や音楽によって意志や感情をつたえ、自分の位置を知り、訪れたことのない場所や過ぎ去った時に思いを馳せ、心を奮い立たせたり慰めたりしてきた。また、神仏や精霊など見ることのできない存在と交わってきた。この展示では、音や音楽と私たちの存在とのかかわりを、世界各地の「太鼓」、「ゴング」、「チャルメラ」、「ギター」等の例を通して考える。

言語展示

一般公開 2010年 3月25日～

音楽展示チームリーダー 庄司博史

音楽展示チームメンバー （館内）菊澤律子 長野泰彦 西尾哲夫 八杉佳穂

内容

音声や身ぶりを媒体とすることばは、高度に発達した伝達手段で、感情から科学的な知識まで多くの情報を伝えることができる。文化の多様性を反映すると同時に、人間のもつ認知能力や創造性などを生み出すことばは、人類のもつかけがえのない資産である。言語展示では、「言葉を構成する要素」、「言語の多様性」、「世界の文字」というテーマを中心に構成する。

オセアニア展示

一般公開 2011年 3月17日～

オセアニア展示チームリーダー 印東道子

オセアニア展示チームメンバー （館内）菊澤律子 久保正敏 小林繁樹 白川千尋 丹羽典生 林 勲男

Peter J. Matthews

内容

海がほとんどの面積を占めているオセアニアには、大小数万をこえる島々が点在している。そこには、発達した航海術をもち、根栽農耕を営む人々が暮らしてきた。「移動と拡散」「海での暮らし」「島での暮らし」では、資源の限られた島環境で、さまざまな工夫をして生活してきた様子を展示している。「外部世界との接触」「先住民のアイデンティティ表現」では、外の世界と出会うなかで、人びとが伝統文化をどのように継承、発展させてきたかを紹介する。

アメリカ展示

一般公開 2011年3月17日～

アメリカ展示チームリーダー 八杉佳穂

アメリカ展示チームメンバー (館内) 岸上伸啓 鈴木七美 鈴木 紀 齋藤 晃 関 雄二 中牧弘允

内容

広大なアメリカ大陸には、極地から熱帯雨林まで、さまざまな自然環境が見られる。人びとは、それぞれの環境に応じた生活を営んできた。一方で、ヨーロッパ人による征服と植民の歴史を経験したこの地には、日常生活の隅々まで、外来の文化が浸透していった。ここでは衣、食、宗教に焦点をあて、アメリカ大陸の多様性と歴史の重なりを明らかにするとともに、土着の資源に現代的価値を見出そうとする芸術家や工芸家のすがたを紹介する。

ヨーロッパ展示

一般公開 2012年3月15日～

ヨーロッパ展示チームリーダー 宇田川妙子

ヨーロッパ展示チームメンバー (館内) 庄司博史 新免光比呂 森 明子

内容

ヨーロッパは、16世紀から20世紀にかけて、キリスト教や近代の諸制度をはじめ、さまざまな技術や知識を世界各地に移植した。現代、この流れが逆転するなかで、世界中からの移民とともに、彼らの文化も社会の一部となりつつある。ここでは、時間の流れに注目しながら伝統的な生活様式と宗教、近代の産業化、さらに現代の新しい動きが層をなしてヨーロッパをつくりあげていることを示している。

情報・インフォメーション

一般公開 2012年3月15日～

情報・インフォメーションチームリーダー 野林厚志

情報・インフォメーションチームメンバー (館内) 飯田 卓 田村克己 廣瀬浩二郎 福岡正太

内容

展示資料の情報を検索して調べることのできる「リサーチデスク」、研究者が取り組んでいる調査を紹介する「研究の現場から」、展示資料を見てさわって理解する「世界をさわる」の3つのコーナーを通して、みんなの研究や展示をより詳しく知ることができる。展示場で見た資料についてもっと知りたい、みんなの研究者って何を調査しているの、モノと身近に接してみたいという探究心を満たし、知識をさらに深める場としてご活用いただきたい。

東アジア展示（日本の文化）

一般公開 「祭りと芸能」「日々の暮らし」 2013年3月22日～

「沖縄の暮らし」「多みんぞくニホン」 2014年3月20日～

東アジア展示（日本の文化）チームリーダー 日高真吾

東アジア展示（日本の文化）チームメンバー (館内) 池谷和信 近藤雅樹 笹原亮二 庄司博史 菅瀬晶子
野林厚志 出口正之 廣瀬浩二郎 南 真木人 陳 天璽

内容

北海道から沖縄県まで、南北に細長い日本列島は、多様な自然に恵まれています。こうした環境のなかで、隣接する諸文化と影響しあいながら、さまざまな地域文化を展開してきた。また、近年では多くの外国人が私たちの隣人として生活をともにしている。ここでは、「祭りと芸能」「日々の暮らし」「沖縄の暮らし」「多みんぞくニホン」という4つの角度から、日本文化の様相を展示している。

東アジア展示（朝鮮半島の文化）

一般公開 2014年3月20日～
 東アジア展示（朝鮮半島の文化）チームリーダー 朝倉敏夫
 東アジア展示（朝鮮半島の文化）チームメンバー （館内）太田心平

内容

朝鮮半島の人びとは、外部の民族から影響を受けつつも、独自の文化を育んできた。有史以前は東シベリアの諸民族から、その後は中国から取り入れた文化要素を、独自のものに再編し、世界に例を見ないほど高度に統合された文化を獲得してきた。近代には日本に植民地支配され、独立後にはふたつの分断国家として急速な近代化を進めた。そして現代には、積極的に世界に進出する韓国人や、コリア系の海外生活者の姿も見られる。こうした文化の歴史的な重なりや躍動性を、精神世界、衣食住、あそびと知をテーマに紹介する。

東アジア展示（中国地域の文化）

一般公開 2014年3月20日～
 東アジア展示（中国地域の文化）チームリーダー 塚田誠之
 東アジア展示（中国地域の文化）チームメンバー （館内）韓 敏 小長谷有紀* 田村克己 野林厚志
 横山廣子

内容

中国地域では、広大な面積と高低差のある地形がうみだす多様な自然環境のもと、さまざまな民族文化が育まれてきた。漢族が人口の90%以上を占め、平野部を中心に全国に居住している。大陸の55の少数民族は、おもに西南、西北、東北地方の高地や草原に居住しており、台湾には漢族のほか先住のオーストロネシア系民族が居住している。また、世界各地に、中国を故郷とする華僑・華人がくらしている。多様な生活環境から生みだされたさまざまな民族の文化を、歴史や地域性をふまえ、生業、装い、楽器、住居、工芸、宗教と文字、漢族の婚礼や祖先祭祀、台湾の原住民族、華僑・華人をテーマに紹介する。

南アジア展示

一般公開 2015年3月19日～
 南アジア展示チームリーダー 三尾 稔
 南アジア展示チームメンバー （館内）上羽陽子 杉本良男 寺田吉孝 松尾瑞穂 南 真木人 吉岡 乾
 竹村嘉晃* 豊山亜希*

内容

南アジア地域は、北部の山岳地帯から西はアラビア海沿岸、東はベンガル湾沿岸にいたるさまざまな自然環境のもと、多様な宗教や文化、生活様式をもつ人びとが共存しあう知恵を育んできた。経済発展が著しい現代においても、その知恵は保たれている。この展示では、宗教文化や生業・工芸の多様性、都市を中心とした活気あふれる大衆文化、またグローバル化のなかで花ひらく染織文化のすがたを紹介する。

東南アジア展示

一般公開 2015年3月19日～
 東南アジア展示チームリーダー 信田敏宏
 東南アジア展示チームメンバー （館内）樫永真佐夫 佐藤浩司 平井京之介 福岡正太 吉田ゆか子*

内容

森と海に囲まれた東南アジア。熱帯・亜熱帯の気候にくらす人びとは、早朝の涼しい時間から働きはじめ、40度近くに達する日中は屋内でなどをして暑さをしのぐ。夕方、スクールが通り過ぎた後は、少し暑さが和らぎ、人びとは買い物や農作業に出かける。日が落ちて涼くなると、友人や家族と屋台に出かけたり、演劇を見たりして余暇を楽しむ。本展示場では、「東南アジアの1日」をテーマに、その多彩な民族文化を紹介する。

*併任教授、客員教員、特別客員教員、機関研究員等を示す。

特別展示・企画展示など

●特別展

第35回 「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」

- 会 期 新美展：2014年2月19日～6月9日
民博展：2014年9月11日～12月9日
- 会 場 新美展：国立新美術館 企画展示室
民博展：国立民族学博物館 特別展示館
- 主 催 国立民族学博物館、国立新美術館
- 共 催 日本文化人類学会
- 特別協力 民族藝術学会
- 協 力 国立情報学研究所、千里文化財団
- 入場者 35,704名
- 実行委員長 吉田憲司
- 実行委員 (館内) 須藤健一、上羽陽子、丸川雄三、山中由里子、齋藤玲子
(館外) 青木 保(国立新美術館)、南 雄介(国立新美術館)、長屋光枝(国立新美術館)、
山田由佳子(国立新美術館)、小泉潤二(大阪大学大学院)、足羽與志子(一橋大学大学院)、
春日直樹(一橋大学大学院)、窪田幸子(神戸大学大学院)

内 容

国立民族学博物館開館40周年・日本文化人類学会創立50周年記念事業として、2014年2月から6月まで、東京・国立新美術館において本館の所蔵品を展覧する「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」を開催し、さらに同展を同年9月より12月まで、本館特別展示館で開催した。

美術館の空間で成立した展示を博物館で再展示するという今回の試みは、美術（アート）と器物（アーティファクト）、芸術と文化、美術館と博物館、美術史学と文化人類学、西洋と非西洋といったさまざまな既成の区分を改めて問い直すものとなった。同時にそれはまた、美術館と博物館との協働が生み出す、新しい文化創造の場の可能性をさぐるものでもあった。

また、本館展示（常設展示）では、世界各地から集められた標本資料コレクションを地域別に常設展示しているが、今回の特別展ではそのコレクションをイメージの働きという視点から通文化的に展覧するものであり、本館にとっては「民博コレクション再発見」の機会となった。

●企画展

「未知なる大地 グリーンランドの自然と文化」(国際連携展示)

- 会 期 2014年9月4日～11月18日
- 会 場 企画展示場
- プロジェクトリーダー 岸上伸啓

内 容

本館には植村直己や岡 正雄が収集した学術的に重要なグリーンランド・イヌイットの資料がある。これらの本館所蔵品を中心に北海道立北方民族博物館、高円宮家、デンマーク王室（ヘンリック・コレクション）などの所蔵品や映像・音響資料を用いて、グリーンランドの自然、グリーンランド人（イヌイット）の歴史と文化、グリーンランドの現状、グリーンランドと日本の人的／学術的／経済的交流について紹介する企画展を開催した。

本企画展は、グリーンランド国立博物館・文書館及びデンマーク国立博物館との国際連携展示として行われ、展示場第一部のデザイン及び演説を、グリーンランド国立博物館・文書館員が担当した。

また、2015年3月28日から4月19日まで、東京の代官山ヒルサイドフォーラムにて、「スピリチュアル グリーンランド」と題し巡回展が開催された。

「みんなくおもちゃ博覧会——大阪府指定有形民俗文化財『時代玩具コレクション』」(人間文化研究機構連携展示)

- 会 期 2014年5月15日～8月5日
- 会 場 企画展示場
- プロジェクトリーダー 日高真吾

内 容

本企画展は、2013年に大阪府より当館に寄贈された大阪府指定有形民俗文化財「時代玩具コレクション」を用い、本館の新着資料を紹介する機会として、また、大阪府指定文化財の展示活用成果として開催された。

本コレクションは、江戸時代から平成にかけての日本の玩具史を網羅しているものであり、国内の玩具コレクションのなかでも大規模なものとなっており、展示は、ブリキ製玩具、ボード玩具（盤上玩具）、マスコミ玩具、カード玩具（絵札玩具）の4つのコーナーから構成され、近現代日本の世相を概観する機会となった。

本展では、本館の所蔵資料を国内外でより効率的・効果的に展開することを目的として、組立て式展示什器（トラベリング／ディスプレイ・システム）を開発し、人間文化研究機構連携展示として、宮城県内の4会場において巡回展を行った。

2014年9月11日～10月5日	岩沼市民図書館 ふるさと展示室
2014年9月12日～9月21日	石巻市「まんがる堂」2階オープンギャラリー
2014年9月13日～9月23日	気仙沼「海の市」2階オープンスペース
2014年10月11日～11月30日	東北歴史博物館 特別展示室

展示関連出版物およびプログラム

●特別展

『イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる』

発行日 2014年2月18日
編 集 「イメージの力」実行委員会
発 行 国立民族学博物館

●ビデオテーク

『現代韓国の結婚準備過程——スドメを知っていますか？』（番組番号2810）製作：国立民族学博物館、韓国国立民俗博物館

現代の韓国で結婚儀礼の手順のように行われている「ス・ド・メ」。スドメとは何かを紹介する。

『旧正月の風景——ユン・スジュンさん宅のソル茶礼』（番組番号2811）製作：国立民族学博物館、韓国国立民俗博物館

旧正月に先祖に捧げる祭祀、ソル茶礼。ユン・スジュンさん宅での茶礼の方法を紹介する。

『韓国の大学入試文化——大学入試を準備する特別な方法』（番組番号2812）製作：国立民族学博物館、韓国国立民俗博物館

大学入試までの学生や両親たちの準備や行事、入試当日の様子などを見る。

『강원도의 메밀음식』（番組番号8031）製作：国立民族学博物館、韓国国立民俗博物館

메밀과 관련한 강원도 사람들의 생애 이야기가 펼쳐진다. 공동제작: 한국 국립민속박물관.

『자동차고사: 안전을 기원하는 한국인의 염원』（番組番号8032）製作：国立民族学博物館、韓国国立民俗博物館

안전을 기원하는 마음으로 자동차 고사를 준비하는 과정과 사람들의 생각을 담고 있다.

『2014 한국의 돌잔치』（番組番号8033）製作：国立民族学博物館、韓国国立民俗博物館

최신의 한국 돌잔치 문화, 상업화 된 돌잔치의 외연을 가지고 있지만 아이와 부모의 건강과 행복을 기원하는 마음은 세대를 관통하며 이어진다.

『ミャオ族の聖歌隊——中国雲南省富民県西山教会献堂式』（番組番号1724）制作監修：横山廣子

雲南省東北部のミャオ族にはキリスト教徒が多い。教会の献堂式で、聖歌隊が西洋声楽にも似た発声法で、見事なコーラスを披露した。

『リス語の讃美歌——中国雲南省怒江リス族自治州の教会』（番組番号1725）制作監修：横山廣子

怒江自治州のリス族、ヌー族の多くはキリスト教徒。彼らはいずれもリス語で、独特の発声の男女混成四部合唱の讃美歌を歌う。

『回族の婚礼——中国雲南省大理』（番組番号1726）制作監修：横山廣子

大理の回族はペー語を話す、このようにペー族の花嫁が嫁いでくるのは珍しい。イスラム教徒と中国との両方の特徴がみられる結婚式。

『祝いの音 戦いの記憶——フィリピン・ルソン島 山地民の結婚式』（番組番号1723）制作監修：米野みちよ、寺田吉孝

フィリピン、ルソン島に住むカリंगाの結婚式は、キリスト教会で式をあげたあと、花嫁の家で伝統的なゴング音楽を演じる。

Sounds of Bliss, Echoes of Victory : A Kalinga Wedding in the Northern Philippines (番組番号3723) 制作監修：Michiyo YONENO REYES, TERADA Yoshitaka

A wedding among Kalinga people of the Philippines includes a Christian ceremony at church followed by the traditional music and dance at the house of the bride's family.

Kasar idiaq Tabuk (番組番号8030) 制作監修：Michiyo YONENO REYES, TERADA Yoshitaka

A wedding among Kalinga people of the Philippines includes a Christian ceremony at church followed by the traditional music and dance at the house of the bride's family.

Guitars of Puerto Rico (番組番号7227) 制作監修：Robert GARFIAS, TERADA Yoshitaka and SASAHARA Ryoji

Puerto Rico is strongly influenced by Spanish culture. The film features the making of the guitar-like instruments which are originally from Spain, and the music played on them.

Guitars of Portugal (番組番号7228) 制作監修：Robert GARFIAS, TERADA Yoshitaka and SASAHARA Ryoji

The film features many local guitar traditions of Portugal, from Lisbon, Coimbra, Braga and Alentejo.

『ネパール——都市の結婚式』（番組番号1727）制作監修：南 真木人、寺田吉孝

富裕なヒンドゥー司祭カースト（バフン）家族の結婚式。日数をかけ、儀礼を省略しない点で王族の結婚式に近いといわれる。

『ネパール——山村の結婚式』（番組番号1728）制作監修：南 真木人、寺田吉孝

ヒマラヤを遠くに仰ぎ見ながら繰り広げられる結婚式。パンチャイ・バージャの伝統的な音楽が2人の門出を祝福する。

『ネパールの金細工』（番組番号1729）制作監修：南 真木人、寺田吉孝

金細工カーストの職人が、女性を着飾る金の装飾品を制作する。それは色とりどりのビーズに通され、首飾りなどに仕上げられる。

『カトマンドゥ盆地の30年』（番組番号1730）制作監修：南 真木人、寺田吉孝、藤井知昭

1982年に民博が取材した4家族を2013年に再訪した。30年の間にネパールはどう変わったのか、家族のその後から振り返る。

『金属加工技術 彫金と鍛金 1 ——金槌の種類』（番組番号1731）制作監修：日高真吾

彫金と鍛金では、作りたい形状に合わせてさまざまな金槌が使われる。ここでは多様な金槌の種類について紹介する。

『金属加工技術 彫金と鍛金 2——器をつくる』（番組番号1732）制作監修：日高真吾

金属の板を叩き、形状を整える金属加工の技術を鍛金という。ここでは、鍛金による器作りを紹介する。

『金属加工技術 彫金と鍛金 3——指輪をつくる』（番組番号1733）制作監修：日高真吾

指輪は形状を鍛金で作り、模様を彫金する。ここでは、鍛金と彫金の技術を組み合わせた指輪作りを紹介する。

『金属加工技術 彫金と鍛金 4——タガネをつくる』（番組番号1734）制作監修：日高真吾

タガネは彫金の作業で最も重要な道具。彫金の形状に合わせて職人自ら制作する。ここではそうしたタガネ作りを紹介する。

『金属加工技術 彫金と鍛金 5——ペンダント』（番組番号1735）制作監修：日高真吾

首もとを飾るペンダント。ここでは、美しい模様を彫金で削りだしていく様子を紹介する。

『金属加工技術 彫金と鍛金 6——タガネの種類』（番組番号1736）制作監修：日高真吾

彫金で最も重要な道具のタガネは、職人によってさまざまな種類のものが制作される。ここでは多様なタガネの種類を紹介する。

『金属加工技術 彫金と鍛金 7——糸鋸』（番組番号1737）制作監修：日高真吾

金属工芸では、複雑な形状を糸鋸で切り出していく。ここでは固い金属を慎重に切り出していく職人の技を紹介する。

『金属加工技術 彫金と鍛金 8——キサゲ』（番組番号1738）制作監修：日高真吾

金属工芸は、作品の艶がその美しさを演出させる。ここでは、キサゲという道具で艶を出す作業を紹介する。

『金属加工技術 彫金と鍛金 9——地金を丸くする』（番組番号1739）制作監修：日高真吾

鍛金の基礎技術に、地金の板を丸く加工していく技術がある。ここでは、そのような基礎的な技術を紹介する。

●研究用映像資料

『トッパ人たちの住むところ』（番組番号7226）制作監修：小長谷有紀

トッパ人は、ロシア、中国、モンゴルの3か国にまたがって住んでいる。ホームイと呼ばれるのど歌で知られている人びとである。

●マルチメディア番組

『映像で見るマンダラ』（番組番号6055）制作監修：立川武藏

マンダラには、宮殿の中に並ぶほとけたちが描かれている。ほとけの姿や、マンダラを用いた瞑想について解説する。

『神への祈りと喜びの舞曲——バッハからバルトークへ』（番組番号6053）制作監修：新免光比呂

バッハやバルトークというと高尚（こうしょう）なクラシック音楽という印象だが、教会での祈りや生活の中の楽しみから育まれたものである。

●「みんなく電子ガイド」プログラム数（2015年3月31日現在）

展示プロジェクト地域	プログラム数			
	日本語版	中国語版	英語版	韓国語版
オセアニア	23	23	23	23
アメリカ	27	27	27	27
ヨーロッパ	12	12	12	12
アフリカ	17	17	17	17
西アジア	16	16	16	16
南アジア	12	12	12	12
東南アジア	22	22	22	22
中央・北アジア	23	23	23	23
東アジア				
朝鮮半島の文化	47	47	47	47
中国地域の文化	39	39	39	39
アイヌの文化	8	8	8	8
日本の文化	35	35	35	35
音楽	0	0	0	0
言語	0	0	0	0
総 計	各 281			

4 国際連携と国際協力

海外研究機関との研究協力協定

国(地域)名	ペルー
相手機関名	国立サン・マルコス大学
協定書等名	国立民族学博物館とペルー・国立サン・マルコス大学との間における考古学調査と学術交流に関する協定
締結日	2005年6月14日
協定終了予定日	2020年5月17日
目的	考古学分野における共同調査の遂行、ならびにそれに基づく学術交流を促進する。
協定内容	パコパンパ考古学プログラム
国(地域)名	台湾
相手機関名	順益台湾原住民博物館
協定書等名	国立民族学博物館と順益台湾原住民博物館との学術協力協定書
締結日	2006年7月1日
協定終了予定日	2016年3月31日
目的	台湾原住民に関する学術調査、研究を推進する。
協定内容	・台湾原住民族の現代的動態に関わる人類学的、言語学的、歴史学的調査 ・国立民族学博物館ならびに他の博物館に収蔵されている台湾原住民族関連の資料に係る調査 ・上記に係る報告書ならびに研究誌の発行
国(地域)名	韓国
相手機関名	国立民俗博物館
協定書等名	国立民族学博物館と大韓民国国立民俗博物館との文化交流協定
締結日	2007年7月11日
協定終了予定日	2017年6月14日
目的	学術、文化交流を通して友好関係を強化し、この関係を発展させる。
協定内容	国際共同展示に係る協定 ・教職員及び研究者の交流 ・共同研究及び研究集会の実施 ・博物館の展示及び教育活動に関する協力 ・学術的情報及び出版物の交換 ・両機関で合意されたその他の事業
国(地域)名	中国
相手機関名	内蒙古大学
協定書等名	国立民族学博物館と中華人民共和国内蒙古大学との学術協力の協定
締結日	2008年9月22日
協定終了予定日	2018年7月24日
目的	相互に理解を深め、両機関の学術協力を通して友好関係を強化する。
協定内容	・双方の教職員・研究者の交流 ・研究プロジェクトの展開 ・博物館展示品の展覧及び教育分野における協力活動 ・学術研究資料、学術情報及び公開出版物についての交換と相互利用の展開 ・その他両機関で合意された分野における協力
国(地域)名	台湾
相手機関名	国立台北芸術大学
協定書等名	国立民族学博物館と台湾国立台北芸術大学との学術協力の協定
締結日	2009年5月15日

協定終了予定日	2019年 5月14日
目的	相互の学術交流と両者の発展を目的とした学術協力関係を築く。
協定内容	・双方の教職員・研究者の交流 ・研究プロジェクトの展開 ・博物館展示品及び教育分野における協力活動 ・学術研究資料、学術情報及び公開出版物についての交換と相互利用の促進 ・その他両機関で合意された分野における協力
国(地域)名	中国
相手機関名	故宮博物院
協定書等名	国立民族学博物館と中華人民共和国・故宮博物院との研究交流協定
締結日	2009年10月16日
協定終了予定日	2015年 8月27日
目的	相互理解と互酬性の原則に則り、両機関の学術研究交流を強化し、発展させる。
協定内容	・学術研究に関し、両機関が合意する事業の交流・協力
国(地域)名	英国
相手機関名	エジンバラ大学
協定書等名	国立民族学博物館と英国・エジンバラ大学との研究交流協定
締結日	2010年 5月17日
協定終了予定日	2020年 5月16日
目的	相互理解と互酬性の原則に則り、両機関の学術研究交流を強化し、発展させる。
協定内容	・学術研究に関し、両機関が合意する事業の交流・協力
国(地域)名	マダガスカル
相手機関名	アンタナナリヴ大学
協定書等名	国立民族学博物館およびマダガスカル国アンタナナリヴ大学の学術協力に関する協定
締結日	2010年11月22日
協定終了予定日	2016年11月21日
目的	互惠性と平等の理念のもとに、学術分野で相互に利益ある協力活動を進める。
協定内容	・研究者の交換 ・共同研究プロジェクトの実施運営 ・シンポジウムや講演の開催・学術情報や資料の交換 ・互いに同意したその他の学術協力の推進
国(地域)名	ペルー
相手機関名	教皇庁立ペルーカトリカ大学
協定書等名	国立民族学博物館と教皇庁立ペルーカトリカ大学との間の学術協力の一般協定
締結日	2010年12月 1日
協定終了予定日	2016年11月28日
目的	双方の利益になる協力活動を実現するためのガイドラインを定める。
協定内容	・共同の研究活動とアウトリーチ活動 ・講演会とシンポジウムの共同策定 ・教員の交流 ・学術的または科学的資料、および双方の利益となる刊行物の交換 ・その他、両者が互いに合意し、双方にとって有益な活動
国(地域)名	ロシア
相手機関名	ロシア民族学博物館
協定書等名	国立民族学博物館とロシア民族学博物館との間の博物館学及び文化研究の分野における学術協力

	に関する協定
締結日	2010年12月3日
協定終了予定日	2015年12月2日
目的	博物館学、調査研究、文化財保護の各分野における協力・相互支援関係を樹立する。
協定内容	・両博物館が保有する歴史的、文化的財産の保存状態改善を目的としたプロジェクトの支援 ・両博物館の研究者交流 ・ロシア民族学博物館が実施するシベリア、中央アジア、極東、北コーカサスでの民族学的フィールドワークへの民博の研究者の参加 ・両博物館が指名する経理、データベース構築、収集品の考証、資料の分類、保存科学などの諸分野の専門家の交流
国(地域)名	ロシア
相手機関名	ロシア科学アカデミー極東支部極東諸民族歴史学考古学民族学研究所
協定書等名	国立民族学博物館とロシア科学アカデミー極東支部極東諸民族歴史学考古学民族学研究所との間の協定
締結日	2011年6月1日
協定終了予定日	2016年5月31日
目的	考古学、人類学、及び民族学の共同研究を目的とする。
協定内容	2011年から2016年にわたって行われる考古学、人類学、及び民族学の共同研究を本協定の対象とし、下記の事項を実現させる。 ・考古学、民族学の分野における共同調査 ・ロシアと日本における共同の研究集会 ・研究成果の共同出版
国(地域)名	ロシア
相手機関名	ロシア科学アカデミー・ピョートル大帝記念人類学民族学博物館（クンストカメラ）
協定書等名	国立民族学博物館とロシア科学アカデミー・ピョートル大帝記念人類学民族学博物館（クンストカメラ）との間の協力および文化交流に関する協定
締結日	2011年10月21日
協定終了予定日	2016年10月20日
目的	学術、文化の両分野において相互交流および協力関係を発展させる。
協定内容	野外調査および学術・理論的研究、博物館関連活動の分野における交流を以下の項目について実施する。 ・教職員の交流 ・野外調査、学術・理論的研究、学術集会の共同実施 ・展示および教育プロジェクトの共同実施 ・学術情報および刊行物の交換 ・両博物館の合意による、その他のあらゆる学術分野の活動
国(地域)名	ベトナム
相手機関名	生態学生物資源研究所
協定書等名	国立民族学博物館とベトナム生態学生物資源研究所の学術協力に関する協定
締結日	2012年3月22日
協定終了予定日	2017年3月21日
目的	相互の理解、利益および協力の原則に基づいて学術研究および交流の強化、発展のために本契約を締結する。
協定内容	共同研究、研修、出版、展示等に関するプロジェクトにおける学術的な研究および交流の促進
国(地域)名	米国
相手機関名	アシウィ・アワン博物館・遺産センター

協定書等名	国立民族学博物館とアシウィ・アワン博物館・遺産センターの学術協力に関する協定
締結日	2012年 6 月 3 日
協定終了予定日	2017年 6 月 2 日
目的	相互に理解を深め、両機関の学術協力を通して友好関係を強化する。
協定内容	・双方の教職員・研究者の交流 ・共同研究プロジェクトの展開 ・博物館資料の展覧および教育分野における協力活動 ・学術研究資料、学術情報および公開出版物についての交換と相互利用の展開 ・その他両機関で合意された分野における協力
国(地域)名	フィリピン
相手機関名	フィリピン国立博物館
協定書等名	国立民族学博物館とフィリピン国立博物館の学術協力に関する協定
締結日	2012年 7 月18日
協定終了予定日	2017年 7 月17日
目的	相互の理解、利益および協力の原則に基づいて学術協力および交流の強化および発展のために本契約を締結する。
協定内容	・共同研究、研修、出版、展示等に関するプロジェクトにおける学術的な研究および交流の促進
国(地域)名	中国
相手機関名	中国社会科学院民族学・人類学研究所
協定書等名	国立民族学博物館と中国社会科学院民族学・人類学研究所との学術交流協定
締結日	2012年 8 月28日
協定終了予定日	2015年 8 月27日
目的	両機関の学術交流を通して国際的な連携を進めるため、平等互恵と相互尊重の理念のもとに、この協定を締結する。
協定内容	・研究プロジェクトの展開 ・双方の教員・研究者交流 ・研究資料、学術情報及び公開出版物についての交換と相互利用の展開 ・その他両機関で合意された分野における協力
国(地域)名	フランス
相手機関名	国立パリ・デカルト大学人口開発研究所
協定書等名	国立民族学博物館と国立パリ・デカルト大学・人口開発研究所との学術協力に関する協定
締結日	2012年11月30日
協定終了予定日	2015年11月29日
目的	これまでの建設的な共同研究を評価し、これをさらに強化すべく相互の理解と関心という行動指針に基づき、今後の学術的共同研究を発展させるため、本協定を締結する。
協定内容	両機関は共同研究事業において、学術的交流および協力を推進する。
国(地域)名	マリ
相手機関名	マリ文化省文化財保護局
協定書等名	国立民族学博物館とマリ文化省文化財保護局との学術協定書
締結日	2014年 5 月 7 日
協定終了予定日	2018年 5 月 6 日
目的	マリにおける文化財の研究、保護及び普及のためのプロジェクトに関する協力活動を推進する。
協定内容	・マリにおける考古遺跡の保存、保護、研究に関して指導的役割を共同して担う。 ・両機関が実施してきたこれらの考古遺跡に関する研究を継続して行う。

国(地域)名	米国
相手機関名	北アリゾナ博物館
協定書等名	国立民族学博物館（日本国 大阪）および北アリゾナ博物館（米国 アリゾナ州 フラッグスタッフ）との学術協力・協働協定書
締結日	2014年7月4日
協定終了予定日	2019年7月3日
目的	学術交流・研究を強化・発展させる。
協定内容	より一層の交流、情報共有、協力関係、良質な民族誌的記録向上を目的として、博物館やソースコミュニティと共に諸活動を研究・促進するプロジェクトの発展のために協働する。

MINPAKU Anthropology Newsletter

Newsletter 38 (June 2014)

An Anthropological Study of 'Control' and 'Public' in Myanmar

Control and Division in Village Life: Field Experiences in Burma	Katsumi Tamura
A Decision in Distress: Aung San Suu Kyi	Kenji Ino
Media Control and Relaxation in Myanmar	U Thaw Kaung, Sitsu
National Control and the Public Space for Spirit Worship in Burmese World	Yukako Iikuni
Buddhist Public or Counterpublics in Myanmar	Keiko Tosa

Newsletter 39 (December 2014)

Languages and Linguistics at an Ethnological Museum

Yak and Pig, Glacier and Sea	Noboru Yoshioka
"What is Your Name?" Variations in Fijian Languages and Their Pre-historic Implications	Ritsuko Kikusawa
Numeral Systems in Sign Languages Across the World	Keiko Sagara
Head-marked Languages in Middle America	Yoshiho Yasugi
Examining the Linguistic Mind of Japanese	Hiroshi Shōji

みんぱくフェローズ

客員研究員等で国立民族学博物館に在籍した研究者で、帰国後も継続的な関係を維持するために MINPAKU *Anthropology Newsletter* を送付している研究者、および国立民族学博物館と関連の深い国内外の研究機関で、MINPAKU *Anthropology Newsletter* を送付している研究機関。

アジア・中東・オセアニア		ヨーロッパ		北米・中南米		アフリカ	
アラブ首長国連邦	2	アイスランド	2	アルゼンチン	1	エジプト	10
アルメニア	4	イタリア	2	米国	163	エチオピア	4
イスラエル	11	英国	52	エクアドル	3	エリトリア	5
インド	12	オーストリア	3	カナダ	18	ガーナ	3
インドネシア	17	オランダ	14	ガイアナ	2	カメルーン	1
オーストラリア	26	キプロス	1	グアテマラ	5	ケニア	3
韓国	42	ギリシャ	1	コロンビア	2	コートジボワール	2
カンボジア	1	スイス	5	ジャマイカ	3	ザンビア	11
サウジアラビア	4	スウェーデン	12	チリ	1	スーダン	1
サモア	2	スペイン	2	パラグアイ	1	スワジランド	2
シンガポール	5	スロベニア	1	ブラジル	5	タンザニア	2
スリランカ	3	チェコ	3	ペルー	14	ナイジェリア	3
ソロモン諸島	2	デンマーク	4	ボリビア	3	ナミビア	1
タイ	28	ドイツ	34	ホンジュラス	1	ボツワナ	2
台湾	31	ノルウェー	3	メキシコ	3	南アフリカ	6
中国	199	フィンランド	2			マダガスカル	2
トルコ	4	フランス	21			モーリタニア	1
ニュージーランド	7	ブルガリア	3				
日本	214	ベルギー	3				
ネパール	8	ポーランド	6				
パキスタン	2	ポルトガル	2				
パプアニューギニア	1	マケドニア	1				
パレスチナ	4	ルーマニア	2				
フィジー	6	ロシア	14				
フィリピン	8						
ブータン	3						
ブルネイ	1						
ベトナム	8						
香港	3						
マレーシア	10						
ミャンマー	10						
モンゴル	10						
ヨルダン	6						
ラオス	3						
小計	697	小計	193	小計	225	小計	59
総計							1,174

博物館学コース

国際協力事業団（JICA）が主宰し、本館が中心となって1994年から10年間実施してきた「博物館技術（収集、保存、展示）コース」は、開発途上国における諸博物館の技術向上と、博物館間の国際的ネットワーク構築に大いに貢献してきた。また、その過程を通じて、本館ははじめわが国の博物館関係者も、研修参加者から多くのことを学ぶことができた。

研修コースの設置から10年の節目を迎えた2003年、国際協力事業団は独立行政法人国際協力機構に衣替えし、本館もまた、2004年4月より法人化し、大学共同利用機関法人・人間文化研究機構の1機関となった。この機に当たり、改めて過去10年の成果を点検し、いくつかの点でコースの改変を行い、2004年度からは「博物館学集中コース」として再出発した。

この新たな「博物館学集中コース」は、本館がJICAから全面的な事業委託を受け、滋賀県立琵琶湖博物館と協同で運営することとなった。もとより、研修の実施に際しては、国内の多くの博物館・美術館とその関係者から協力をあおぐことはいうまでもない。本館のもつ国際的ネットワークは、対象国の博物館事情を踏まえた研修実施に不可欠な要因であり、またその先進的な情報・資料管理や博物館運営は、研修に大きな効果をあげている。その一方で、研修員の多くにとって切実な問題である、自らの属するコミュニティの資料を収集・整理し、展示するという課題については、主として海外資料の収集・展示に関わる人文社会系の博物館である本館での研修に限界があることも事実である。そこで、2004年度からの新しいコースでは、自然科学系の博物館としてこの分野の活動で先進的な業績をあげている、琵琶湖博物館と密接に連携することで、より充実した研修を進めている。また、研修プログラムの設定にあたっては、各講義を講師による一方向の教育ではなく、講師と研修員とが自らの経験や知識を共有する議論の場として位置付け、相互に学び合うコースとなるように留意している。

その後、2009年度からは、JICA 集団研修全体の枠組みが大きく変更され、3年間を一区切りとして、その間は研修員受入れ割り当て国を変更しない、という基本原則が定められた。日本の国際協力事業全体を見直す動きの中で、同一国に継続的な協力を行ってその結果が現地に確実に還元される仕組みを作り、それを3年ごとに確認して当該コースを継続すべきかを外部評価の判断にゆだねる、というJICAの方針から、このような枠組みの変更が行われたものである。しかし、本館としては、この枠組みの変更に際し、博物館関係者を3年間にわたり継続して派遣することが困難な国も多いことを勘案して、「大きな需要を持ちながらも博物館人材の少ない国を切り捨てる結果に陥らないこと」を要望してきた。その結果、2012年度以降は、JICAが各国に向けて要望調査を行う際の、割り当て国の固定をやめ、全世界に要望調査を行うことになった。

2014年度は、エジプト、パレスチナ自治政府、ジャマイカおよびミャンマーの4か国・地域から10名の研修員を受け入れ、4月18日から7月25日まで研修を行った。本館と琵琶湖博物館での実施だけではなく、新潟県中越地震の被災地に設けられた中越メモリアル回廊、東京国立博物館や国立科学博物館、広島平和記念資料館などへの研修旅行も行った。また研修員全員が、自国の博物館の活動や課題を報告し、検討する「公開フォーラム世界の博物館2014」を2014年5月31日に国立民族学博物館で行った。86名の参加者があり、報告者と活発な意見交換を展開した。また、全期間にわたって日本のさまざまな博物館関係者と直接ふれあい、その一部の現場を訪ねることで、研修員が日本側の経験に学ぶと同時に、日本側も研修員の目を通して、日本の博物館の持っている可能性と課題に気づかされるなど、たがいに経験と知見を分かちあうことができたと考ええる。

●博物館学コース研修員

Ahmed Shehata Orabi (アハメドシェハタ オラビ) エジプト

——— 首相府考古庁大エジプト博物館保存修復センター文化財準備課長

Rezq Diab Ghodery (レズイク ディアブ ゴデリ) エジプト

——— 首相府考古庁大エジプト博物館収集課

Eman Mohamed Amin (イマン モハメド アミン) エジプト

——— 首相府考古庁大エジプト博物館展示・考古学調査部

Tendi Farai Henry (テンディ フェレイ ヘンリ) ジャマイカ

——— 青少年文化省ジャマイカ協会IT部マネジャー

Elizabeth Monique Morrison (エリザベス モニークモリソン) ジャマイカ

——— 青少年文化省ジャマイカ協会ジャマイカ自然史博物館動物学者

Nicole Latoya Patrick-Shaw (ニコル ラトヤ パトリック ショウ) ジャマイカ

——— 青少年文化省ジャマイカ協会プログラム部プログラムマネージャー

Khin Saw Win (キン ソー ウィン) ミャンマー

————— 文化省バガン考古学博物館学芸助手

Khin Maung Soe (キン マオ ソー) ミャンマー

————— 文化省ネピドー国立博物館スタッフオフィサー

Saleh Awad (サレ アワド) パレスチナ

————— 観光遺跡庁遺跡調査官

Sufyan Deis (スフィアン デイス) パレスチナ

————— 観光遺跡庁古物文化財局考古学部

概観

学校教育・社会教育活動

本館創設40周年を迎え、本館が長年培った研究成果を幅広い層に社会還元するため、積極的に博物館の外へ打って出る活動を行った。主に社会人を対象とした生涯教育として、大阪梅田のグランフロント大阪において、特別展「イメージの力」関連イベントである連続講座「みんぱく×ナレッジキャピタル——イメージの力をさぐる」を6回シリーズで開催した。大阪阿倍野のあべのハルカス近鉄本店においては、連続講座「カレッジシアター地球探究紀行」（産経新聞主催。36回開催）に特別協力した。また、園田学園女子大学総合生涯学習センターとの連携講座（6回開催中の5回）及びNPO法人大阪府高齢者大学校の講座・世界の文化に親しむ科（30回開催）において、引き続き本館教員が講座を担当した。

その他に、大学教育の発展に向けて、千里文化財団の協力のもと、「国立民族学博物館キャンパスメンバーズ」を継続し、高等教育への活用を推進した。26年度は、新たに学校法人立命館（立命館大学・立命館高等学校・立命館宇治高等学校・立命館守山高等学校・立命館慶祥高等学校）を加え、継続申し込み4件（大阪大学、京都文教学園、同志社大学文化情報学部文化情報学研究科、千里金蘭大学）と合わせて、1,049人の学生、教職員が来館した。また、本館を大学教育に広く活用するためのマニュアル「大学のためのみんぱく活用マニュアル」の配布を継続し、81件、2,573名の大学関係者が展示場を利用した。

初等・中等教育への貢献としては、近隣の教育委員会と連携して、大阪北摂地域の中学校6校14名を職場体験として受け入れた。さらに、小・中学校の教諭を対象に、博物館を活用した遠足や校外学習のためのガイダンスを2回実施し、48団体137名の参加があった。

インターネットによる広報活動

情報通信技術（ICT）の進化及び国際化の進展を受けて、インターネットによるアクセシビリティを一段と向上させた。

ホームページに関しては、スマートフォンやタブレット端末からのアクセスが増加しており、その利便性を高めるため、ホームページのユーザインタフェースをスマートフォン用に最適化した。また、昨年度試験的に実施し、好評だったペーパーレスのスマートフォン用観覧券を本格導入し、通年で購入できるようにした。さらに、言語による障壁を越えて、国際的な情報発信力を高めるため、英語に加えて、アラビア語、中国語（簡体字・繁体字）、フランス語、ロシア語、スペイン語、韓国語の多言語による本館紹介文を新たに掲載するなど改良を施し、ホームページの利用者は着実に増加した。（訪問者数 809,641、ページビュー数 2,613,790）。

メールマガジン（みんぱく e-news）に関しては、利用者アンケートの結果等を参考に内容の見直しを図りながら、毎月1回継続して発信している（配信数は56,951件）。

ソーシャルメディアに関しては、若者層を中心として、ホームページを補完する気軽で双方向的なメディアとして、昨年度の開始以来順調に浸透している（Facebook いいね!数 4,708、Twitter フォロワー数 8,098、YouTube 総再生回数 8,093回）。特に、特別展「イメージの力」に合わせて実施したTwitter キャンペーンでは、期間中に展覧会に関するツイートを集め、展覧会の話題を拡散し、交流してもらうとともに、観覧者の生の声を聞く貴重な機会ともなった。

マスメディアによる広報活動

特別展「イメージの力」の関連イベントとして、MBS（毎日放送）元アナウンサーでパーソナリティの角 淳一氏と吉田憲司・本館教授（特別展実行委員長）によるトークイベント「みんぱく×MBS ラジオ presents 角 淳一が迫る！すみからすみまでイメージの力」を開催した（参加者数 450名）。本イベントは、ラジオ番組及びテレビ番組で紹介された他、関連してラジオ番組の生放送に教員が出演したり、特別展や連続講座のラジオ CM を流したりして、マスメディアの発信力を利用し、本館に興味を持つ層の裾野を広げた。

毎日新聞の「旅・いろいろ地球人」や毎日小学生新聞の「みんぱく世界の旅」の連載を継続し、教員がそれぞれの研究内容を読者向けにわかりやすく解説した。千里ニュータウン FM 放送番組「ごきげん千里837（やあ、みんな）」も継続している。

プレスリリースを強化し、新たに公開講演会や研究公演、夏休み向け等のリリースを発信した（年間27本）。報道関係者との懇談会も年12回（うち内覧会5回。参加者数 116名）開催し、共同研究をはじめとする最新の研究成果を積極的に紹介した。

研究成果の社会還元及び教育普及活動

継続して、「みんぱくゼミナール」を12回（参加者数 2,631名）、「みんぱく映画会」（みんぱくワールドシネマ含む）を10回（参加者数 3,241名）、「研究公演」を4回（参加者数 1,776名）、「みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう」を39回実施した（参加者数 1,485名）。

特に、展示関連では、新構築した朝鮮半島の文化、中国地域の文化、日本の文化「沖縄のくらし」「多みんぞくニホン」展示を広く社会へ紹介するため「みんぱくフォーラム2014 東アジア展示があたりになりました!!」と題して、研究公演や展示場クイズ「みんぱQ」等を実施した。また、特別展「イメージの力」の関心を高めるため、トークイベント「イメージの力」を3回開催し、クリエイティブな分野で活躍する歌手のUA氏、デザイナーの三木 健氏、小説家のいしいしんじ氏の3名のゲストを招いた（総参加者数 457名）。

機関研究関連では、「包摂と自律の人間学」のテーマに沿って、上映会「みんぱくワールドシネマ」を開催した。これらの活動は、広報誌『月刊みんぱく』を国立民族学博物館友の会会員に配付したり、全国の研究機関、大学等に寄贈したりすることを通じて、広く情報発信した。視覚障がい者向けの音声版も並行して製作・配付した。

地域に根ざした広報活動

北大阪7市3町の美術館・博物館計50館による文化祭「北大阪ミュージアムメッセ」に参加及び会場提供した。また、吹田市主催の「ぐるっとすいた」事業に協力し、吹田市の小中学生を対象としたスタンプラリーのポイントとなった。他にもミュージアムぐるっとパス・関西2014に継続参加するなど、地域における美術館・博物館の活動における中心的役割を担い、地元に向けた広報活動を展開した。

その他の新しい広報活動

広報予算をかけず、新規ファン層を開拓するために次に挙げる新しい取り組みを進めた。1) 自動販売機飲料販売大手のジャパン・ビバレッジとコラボレーションし、飲料カップ約100万個に本館展示にまつわるクイズを提供した。2) 企画展「みんぱくおもちゃ博覧会」の開催に合わせて、玩具に関連の深い大阪府立大型児童館ビッグバン（大阪府堺市）と日本玩具博物館（兵庫県姫路市）とそれぞれ観覧料の相互割引を実施した。3) JAF（日本自動車連盟）とe-kenetカード（京阪カード）会員向けに観覧料の優待制度を導入した。4) 前述の連続講座「みんぱく×ナレッジキャピタル——イメージの力をさぐる」の参加者に特別展割引券を配付した。

最後に、昨年度の広報の課題として挙げた広報戦略の策定については、広報企画会議において国際、国内、地域毎に適した広報手段を用いるという方針が共通認識された。従来、一般の方に伝えやすく、関心の高い展示や催しの広報に重点をおいてきたが、研究広報の比重を上げていくことによって、研究機関としての姿をより効果的に発信していくことが今後の課題として挙げられる。

国立民族学博物館要覧2014

- ・和文要覧 2014年6月発行
- ・英文要覧 2014年12月発行

ホームページ <http://www.minpaku.ac.jp/> （2015年3月31日現在）

本館の研究活動、博物館展示・事業活動、大学院教育の他、刊行物、文献図書資料、標本資料等あらゆる情報を、インターネットを介して世界に発信するためにホームページを作成している。

提供している主な情報は以下の通り。2014年度の訪問件数は809,641件。

・研究活動

研究部スタッフの研究活動や業績、本館が推進する研究プロジェクトや共同研究およびシンポジウム、研究出版物などの情報。

・博物館展示・事業活動

本館展示・企画展示・特別展示などの展示紹介、学術講演会・ゼミナール・研究公演・映画会などのイベント案内、博物館の利用案内、国立民族学博物館友の会などの情報。

・大学院教育

総合研究大学院大学の専攻概要、授業と研究指導、在学生の研究内容等および特別共同利用研究員制度などの

情報。

・データベース

本館が所蔵する文献図書資料、標本資料、マルチメディア情報などのデータベース。

また、「みんぱく e-news」を発行し、毎月開催している「みんぱくゼミナール」、随時行われる「シンポジウム／フォーラム」「研究公演」「みんぱく映画会」「特別展」などのお知らせを、月1回電子メールで配信している。2014年度の配信数は56,951部。

報道

●報道関係者との懇談会

2014年4月17日	8名（7社）	企画展「みんぱくおもちゃ博覧会——大阪府指定有形民俗文化財『時代玩具コレクション』」、台湾映画鑑賞会「台湾映画鑑賞会 映画から台湾を知る」、みんぱく映画会「マイネームイズハーン」、国際フォーラム「世界の博物館2014」ほか
5月15日	14名（11社）	企画展「みんぱくおもちゃ博覧会——大阪府指定有形民俗文化財『時代玩具コレクション』」展示ツアー、音楽の祭日2014 in みんぱく、公開フォーラム ユネスコ無形文化遺産登録記念「和食は誰のものか？」ほか
6月19日	7名（6社）	創設40周年「世界民族百科事典」、研究公演「アリラン峠を越えていく——在日コリアン音楽の今」、みんぱく映画会「かぞくのくに」、博学連携教員研修ワークショップ2014 in みんぱく「学校と博物館でつくる 国際理解教育——センセイもつくる・あそぶ・たのしむ」ほか
7月17日	7名（6社）	企画展「未知なる大地 グリーンランドの自然と文化」、特別展「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」、ワールドシネマ「ヒア・アンド・ゼア」、連続講座「台湾文化を知る」、お知らせ「ジョージ・ブラウン・コレクション・データベース公開」ほか
9月4日	12名（8社）	企画展「未知なる大地 グリーンランドの自然と文化」式典・展示ツアー、みんぱく×MBS イベント「すみからすみまでイメージの力」、連続講座「みんぱく×ナレッジキャピタル——イメージの力をさぐる」、研究公演「りんけんバンドみんぱく公演」、シンポジウム「南アフリカの過去と現在——ネルソン・マンデラから続く道」ほか
9月10日	15名（11社）	特別展「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」報道・出版関係者向け内覧会
10月16日	10名（8社）	年末年始展示イベント「ひつじ」、公開フォーラム「文化遺産の人類学」、北大阪ミュージアムメッセ、カムイノミ、公開フォーラム「学校芸能の現在（いま）、公開講演会「フィリップ・デスコラ博士研究講演会 イメージの人類学」ほか
11月20日	10名（6社）	国際シンポジウム「世界の食文化研究と博物館」、国際ワークショップ「人の移動と民族的地域の共同性の再構築」、公開シンポジウム「マヤ語からみた言語と思考と脳」、公開シンポジウム「文化財を伝える」、ほか
12月18日	8名（6社）	研究公演「じゃんがら念仏踊りみんぱく公演」、公開フォーラム「古代文明の生成過程——エジプトとアンデス」、国際フォーラム「中国地域の文化遺産——人類学の視点から」、年末年始展示イベント「ひつじ」展示ツアーほか
2015年1月15日	7名（6社）	新展示「南アジア・東南アジア展示」、国際フォーラム「紛争地の文化遺産と博物館」、研究フォーラム「持続可能なIPMに向けて——博物館環境データの分析手法を考える」、国際シンポジウム「アジアにおける新しい博物館・博物館学の展望」ほか
2月19日	9名（7社）	公開講演会「いやしの旅のウラ？表？——現代アジアツーリズム考」、国際ワークショップ「民族学資料の展示への利用とソースコミュニティとの協力関係」、研究フォーラム「世界文化遺産「ナスカの地上絵」の研究と保護

をめぐり国際協力」ほか
 3月19日 9名（7社） 研究公演「ネパールのネワール仏教舞踊チャルヤー研究公演・ワークショップ」、新展示「南アジア・東南アジア」式典・展示ツアー

●新聞等報道件数

2014年度は、テレビ15件、ミニコミ184件、ラジオ74件、雑誌58件、新聞662件、他98件、計1,091件の報道があった。

月刊みんぱく

4月号	（第439号）	2014年4月1日発行	特集「穴だけじゃない考古学」
5月号	（第440号）	2014年5月1日発行	特集「中国地域の文化——その多様性と伝統の展開」
6月号	（第441号）	2014年6月1日発行	特集「朝鮮半島の文化」
7月号	（第442号）	2014年7月1日発行	特集「沖縄のくらし」
8月号	（第443号）	2014年8月1日発行	特集「多みんぞくニホン」
9月号	（第444号）	2014年9月1日発行	特集「コラボの力」
10月号	（第445号）	2014年10月1日発行	特集「未知なる大地 グリーンランド」
11月号	（第446号）	2014年11月1日発行	特集「疫病」
12月号	（第447号）	2014年12月1日発行	特集「おもちゃいまむかし」
1月号	（第448号）	2015年1月1日発行	特集「ひつじ」
2月号	（第449号）	2015年2月1日発行	特集「地球人が宇宙人になるとき」
3月号	（第450号）	2015年3月1日発行	特集「益虫 害虫」

みんぱくゼミナール

第431回 世界の華僑・華人と“故郷”【新展示（中国地域の文化）関連】

2014年4月19日

講師 陳 天璽（早稲田大学准教授／国立民族学博物館特別客員教員）

受講者 246名

内容 中国国外に居住する中国系は華僑・華人と呼ばれており、4000万人以上いるとみられている。世界に根を下ろしながらも中国の伝統文化を守り続けている人びともいれば、異民族との通婚や世代交代により独特な複合文化を形成している人びともいる。そんな彼らの多彩な日常生活から、“故郷”とのかかわりについてみていった。

第432回 多みんぞくニホンのいま——特別展から10年【新展示（日本の文化「多みんぞくニホン」）関連】

2014年5月17日

講師 庄司博史

受講者 228名

内容 2004年3月特別展「多みんぞくニホン」がみんぱくで開催された。外国人の急増により単一民族社会といわれた日本の大きな変化を予兆する展示であった。10年後の今年3月、本館展示に「多みんぞくニホン」のコーナーが設けられた。この間、経済不況、東日本大震災など多くの試練をへて日本は外国人にとってどのように変化したのか考えた。

第433回 現在進行形の海外移民——韓国を去りゆく人びとの胸のうち【新展示（朝鮮半島の文化）関連】

2014年6月21日

講師 太田心平

受講者 247名

内容 朝鮮半島の外に暮らすコリアンは、いまや750万人以上。しかし、韓国において移民という行為は、決して昔の話などではない。今日でも、毎年、人口の0.3%以上もの人びとが、外国へと移民していく。人びとはどうして韓国を去ろうとするのか、近年の調査研究をもとにお話した。

第434回 泡盛今昔物語【新展示（日本の文化「沖縄の暮らし」）関連】

2014年7月19日

講 師 日高真吾、萩尾俊章（沖縄県教育庁文化財課副参事兼班長）

受講者 221名

内 容 泡盛は琉球王府の管理の下、首里の指定酒屋で生産されていた蒸留酒。かつて首里城には数百年ものの古酒が伝わり、外交や接待の際に振る舞われた。18世紀前半には一般にも広まりをみせ、今も人気を博している。ここでは、泡盛の今昔を紹介しながら、沖縄の歴史に触れた。

第435回 世界遺産に住む——中国・客家の伝統家屋【新展示（中国地域の文化）関連】

2014年8月16日

講 師 河合洋尚

受講者 207名

内 容 客家の人々は巨大な集合住宅に住んでいることで知られている。なかでもドーナツ型の円形土楼と馬蹄型の囲籠屋は珍しいため、文化遺産保護の対象にもなっている。本ゼミナールでは、円形土楼と囲籠屋をめぐる最新の情報を紹介した。

第436回 イメージの力——みんなのコレクションが語るもの【特別展「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」関連】

2014年9月20日

講 師 吉田憲司

受講者 290名

内 容 人類はその歴史のなかできわめて多様なイメージを生み出してきた。果たしてそうしたイメージの創りあげ方や受けとり方に人類に共通の普遍性があるのだろうか。国立新美術館での展示を経て、みんなくで改めて開催される特別展「イメージの力」のなかに、その答えをさぐった。

第437回 はるかなる北の大地、グリーンランドの自然と人びとの暮らし【企画展「未知なる大地——グリーンランドの自然と文化」関連】

2014年10月18日

講 師 岸上伸啓

受講者 240名

内 容 大西洋の北西部にあるグリーンランドは、世界最大の島である。総面積は日本の約6倍ですが、その80%は厚い氷床に覆われている。そこには約57,000人のイヌイット人やデンマーク人がくらしている。グリーンランドの大自然の姿、そこに住む人びとの歴史と現状について紹介した。

第438回 美術館からみたみんなのコレクション【特別展「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」関連】

2014年11月15日

講 師 長屋光枝（国立新美術館主任研究員）、山田由佳子（国立新美術館研究員）、齋藤玲子、司会：上羽陽子

受講者 223名

内 容 2014年2月から6月まで国立新美術館で企画展「イメージの力」が開催された。新美術館とみんなのコレクションによる資料選定から公開までの共同作業を振り返り、異なったふたつの領域である美術館と博物館での展示を、新美術館の研究員とともに話した。

第439回 グローバル化の中の財団

2014年12月20日

講 師 出口正之

受講者 126名

内 容 “財団”というものは、聞いたことがあるようで、なかなかイメージがつかみにくいものだ。海外でいうと、ハーバード大学もニューヨーク自然史博物館も財団である。スポーツ団体からロックフェラー財団まで、現在の財団にまつわる話を紹介した。

第440回 デジタルアーカイブズの楽しみ——文化遺産オンラインから実業史錦絵絵引まで

2015年1月17日

講師 丸川雄三

受講者 170名

内容 情報技術の進展にともない、文化財を取り巻く高精細画像や電子書籍などのデジタルアーカイブを活用した情報発信が広がりを見せている。2004年に一般公開され、その先駆けとなった「文化遺産オンライン」をはじめ、民俗研究資料を高精細画像や解説とともに閲覧できる「実業史錦絵絵引」などのウェブサービスを紹介した。

第441回 遊牧の起源——バングラデシュの豚と人のかかわり

2015年2月21日

講師 池谷和信

受講者 241名

内容 遊牧は、モンゴルや西アジアや東アフリカなどの乾燥帯を中心にみられる人類の生活様式の一つであり、その起源が議論されてきた。しかし、ここでは、ガンジス川下流部のベンガルデルタにおける湿潤帯の豚遊牧の実態を紹介することから、その起源に関する新たな説を提示した。

第442回 ミシンと家庭——100年前のグローバル商品

2015年3月21日

講師 森 明子

受講者 192名

内容 ミシンは、1900年ころ一般への販売がはじまり、まもなくシンガー社の製品が世界の市場を席巻するグローバル商品になった。世界中が産業化に邁進していった時代、家庭にはいったミシンとともに、各国で「消費者」の姿があらわれてくる。ここでは、ヨーロッパと日本について、お話しした。

みんなくウィークエンド・サロン——研究者と話そう

第339回 2015年4月6日 徳宏タイ族の音文化——音で対話する楽器と織機

講師 伊藤 悟（外来研究員）

参加人数 43人

内容 かつて中国雲南省徳宏州のタイ族村落では、夜になると男性が女性の家の前で楽器を奏で、その音色にこたえて女性が織機りの音を響かせたという。この不思議な音によるコミュニケーションのしくみと楽器や織機の現状について、楽器の実演もまじえて紹介した。

第340回 2015年4月13日 外国人集住地域って？

講師 庄司博史

参加人数 51人

内容 日本各地には世界各国からの外国人が集住する町がある。幕末の外国人居留地に由来する横浜中華街もあれば、北関東や東海地方には近年南米出身者が集住し始めた町もあり、誕生した時代や背景は多様である。なぜ彼らは集まり、どのように暮らしているのか考えてみた。

第341回 2015年4月20日 台湾原住民族の工芸文化——むかし、今、そして未来

講師 野林厚志

参加人数 41人

内容 みんなくには、日本統治時代に収集された台湾原住民族に関する道具や衣服が収蔵されている。これらは学術資料として研究に活用されるだけでなく、祖先の営みを伝え、今を生きる原住民族自身の工芸文化を創りだすうえで重要な役割を果たす文化資源として注目されている。

第342回 2015年4月27日 マヤ文字で名前を書いてみよう

講師 八杉佳穂

参加人数 48人

内容 マヤ文字は解読途中の文字である。マヤ文明の概説のあと、解読の方法をしめして、文字について説明した。マヤ文字は漢字仮名交じり表記法とよく似ているので、五十音図にならって作った百音図の音節文字を利用して名前を書いてみた。

第343回 2015年5月4日 ベトナム、黒タイのディエンビエンフー——60年

講師 樫永真佐夫

参加人数 46人

内容 ディエンビエンフーの戦いの終結が1954年5月7日。ベトナムはまもなく独立60周年を迎える。黒タイがひじょうに古くに入植し開拓した当地は、神話の宝庫でもある。黒タイの人々にとってのディエンビエンフーを、この60年の社会経済状況も含め、お話しした。

第344回 2015年5月11日 雲南省におけるキリスト教の展開

講師 横山廣子

参加人数 43人

内容 近代の西欧による宣教活動で、中国雲南省の少数民族の一部は集団的にキリスト教に改宗した。民族元来の歌や踊りの伝統とも融合し、宗教と結びついた音楽芸能が盛んで、最近、海外公演を果たした人びともいる。その信仰の歴史と、教会堂の落成式典での歌や踊りを動画を交えてご紹介した。

第345回 2015年5月18日 在留ネパール人の現在

講師 南 真木人

参加人数 38人

内容 日本に暮らすネパール人は約2万7千人で、在留インド人の数を上まわっている。新来のインド人がIT技術者であることは知られているが、ネパール人はどのように生活しているのだろうか。「多みんぞくニホン」の一翼を担うネパール人の現在を紹介した。

第346回 2015年5月25日 インド映画の新時代

講師 杉本良男

参加人数 28人

内容 21世紀に入って、グローバル化とデジタル化がますます加速する中で、インド映画は大きな変貌をとげている。ボリウッド映画が世界市場に進出するとともに、地方映画も独自の市場を開拓している。ここでは新時代に入ったインド映画の現状についてお話しした。

第347回 2015年6月1日 華僑の移住と暮らし——ベトナム

講師 河合洋尚

参加人数 25人

内容 ベトナムの華僑は、第二世界大戦、ベトナム戦争、華人排斥運動を受け、苦難の歴史を経験してきた。彼らの多くは移民・難民としてベトナムを離れ、一部の者は国民としてベトナムで暮らしている。ベトナム華僑の現在を紹介した。

第348回 2015年6月15日 韓国文化の変わった点と変わらない点

講師 太田心平

参加人数 42人

内容 時代劇にみるような朝鮮半島の文化と、現代のヒップでポップな韓国文化。このあいだには、変わった点だけではなく、実は変わらない点もある。新しくなったみんなの展示をヒントに、何がどう変わったか、何がなぜ変わらなかったのかを、一緒に考えた。

第349回 2015年6月29日 時代玩具コレクションから見る日本の世相史

講師 日高真吾

参加人数 29人

内容 5月15日より開催した企画展「みんなくおもちゃ博覧会」では、ブリキ玩具、マスコミ玩具、ボード玩具、カード玩具の4つのコーナーから大阪府指定有形文化財「時代玩具コレクション」の一部を紹介した。今回は、本展示の内容について紹介しながら、近現代の日本の世相について概観した。

第350回 2015年7月6日 多みんぞくの街・新宿新大久保物語——生まれ育った者の視点から

講師 菅瀬晶子

参加人数 45人

内容 日本有数の多みんぞくの街として知られる、東京・新宿の新大久保。コリアンタウンとして知られているが、最近はムスリムを対象としたハラール・フード専門店が増え、多様化している。この街がいかにして多みんぞくの街となったのか、その歴史的背景から今日の様子までを、出身者の視点からお話した。

第351回 2015年7月13日 アフリカの布から見る世界の経済

講師 三島禎子

参加人数 57人

内容 斬新な色彩と柄が印象的なアフリカのプリント布はどこで作られ、どのように市場に運ばれてくるのであろうか。布の文化的価値と経済的価値の変遷をたどりながら、古来、交易に従事してきた商人の今日におけるビジネスを紹介した。

第352回 2015年7月27日 うどん・オムライス・味の素——朝鮮半島における「食」の近代化

講師 朝倉敏夫

参加人数 45人

内容 韓国では今でも、うどん、オムライス、アジノモトなど、植民地期に渡った日本の「食」の言葉が使われている。そうした「食」の現在と、1925年から1939年にかけて味の素が『東亜日報』に掲載した広告から、当時の朝鮮半島における「食」の事情を探った。

第353回 2015年8月3日 心的イメージとは何か——イメージ・メディア論

講師 久保正敏

参加人数 35人

内容 特別展「イメージの力」に関連して、イメージの働きを考えた。認知心理学では、外界から入る「知覚イメージ」と、脳内で作られる「記憶イメージ」や「想像イメージ」が、脳内の共用キャンバスに描かれると説明される。人間の豊かなイメージ活動の源は、この仕組みにあるのかも知れない。

第354回 2015年8月24日 みんなくシンボルマークをえがく

講師 山本泰則

参加人数 13人

内容 みんなく創設40周年にあたり、「みんなくシンボルマーク」を話題にした。このマークは一見単純そうな形に見えるが、実際にえがいてみると思わぬ発見がある。今回はそんなエピソードや、創設当時のマークの原版、リニューアルしたマークの図面、色見本を紹介しながら、さまざまな角度からみんなくシンボルマークを掘りさげてみた。

第355回 2015年8月31日 完成した『日本の文化』展示

講師 日高真吾

参加人数 18人

内容 日本の文化展示場は2年間をかけて、新しく生まれ変わった。今回は、これまでの展示を活かしつつ、祭りと芸能、日々の暮らし、沖縄の暮らし、多みんぞくニホンという構成になっている。ここでは、新しい日本の文化展示場について解説した。

第356回 2015年9月7日 グリーンランドの自然と文化

講師 岸上伸啓

参加人数 50人

内容 グリーンランドは北アメリカ大陸の北東沖にある世界最大の島である。その大半は氷河に覆われている氷の島だが、名称は「緑の大地」である。なぜ、そのような名前がついたのか、同島における気候変動と文化の変化について紹介した。

第357回 2015年9月28日 絵解きの時

講師 山中由里子

参加人数 48人

内容 人類は移りゆく「時間」をどのようにとらえ、表してきたのか？過去から未来へと直線的に時間が流れているという感覚は、人類共通のものなのか？特別展「イメージの力」に展示されている神話や物語をかたどったモノには、さまざまな時のかたちがみてとれる。

第358回 2015年10月5日 ヒンドゥー教世界の神々のイメージ

講師 三尾 稔

参加人数 50人

内容 ヒンドゥー教の世界では、神々はさまざまなかたちを通じて人間の世界に姿を現し、人間と交渉をする。人間が神の姿を描いたり、かたどったりするのではなく、神が自ずから姿を現す。特別展の展示品を中心に、さまざまな事例を通じて、ヒンドゥー教世界の神と人の関係を考えた。

第359回 2015年10月19日 死者を送る——ニューギニアの彫刻と儀礼

講師 林 勲男

参加人数 36人

内容 南太平洋のニューアイルランド島とニューギニア島には、西洋の収集家やミュージアムによって早くから注目されてきた彫刻がある。前者はマランガン、後者はビスと呼ばれる。これら2つの彫刻が製作される背景と歴史的な変遷について述べてみた。

第360回 2015年10月26日 消費されるイメージ——観光みやげか博物館資料か

講師 齋藤玲子

参加人数 41人

内容 観光客向けにつくられた物は、「伝統的」でなく「真正」ではないとされ、かつては博物館の収集対象とはみなされなかった。しかし、今では商品化された物も時代を映すものととらえられるようになっている。特別展の展示品を例に、みやげについて考えた。

第361回 2015年11月2日 沖縄音楽を育む人びと

講師 呉屋淳子

参加人数 49人

内容 沖縄音楽は、日本国内外で知られるようになった。特に、念仏踊りを起源とするエイサーは、現代の若者を魅了しながら独特な世界を創り上げている。沖縄音楽が広がった背景について、沖縄音楽を育む人びとに注目しながら紹介した。

第362回 2015年11月23日 民族資料と芸術作品のあいだ

講師 須藤健一

参加人数 71人

内容 みんなくは、34万点の世界各地の民族資料を収集・所蔵している。ピカソやモデリアーニが作品のヒントを得たのと同種の仮面が「イメージの力」展に出ている。なぜ、アフリカの仮面は「民族資料」、それを真似た絵画は「芸術作品」と呼ばれるのかを考えた。

第363回 2015年11月30日 デジタルビューアで楽しむ「イメージの力」

講師 丸川雄三

参加人数 25人

内容 特別展「イメージの力」に展示されている資料や作品を、画像とともに閲覧できるデジタルビューアを紹介した。展示にはない研究者による資料の解説を読むこともでき、国立民族学博物館のコレクションの幅広さと奥深さを、展示とあわせてご堪能いただいた。

第364回 2015年12月7日 邪視をはねかえす力

講師 上羽陽子

参加人数 70人

内容 邪視とはまなざしや視線に宿る力が災いをもたらすという信仰である。このような力は嫉妬や妬みが起因とされている。インド西部の刺繍布や紐、傷痕などの事例を紹介しながら、邪視信仰にたいして、人びとがどのように関わってきたのか考えてみた。

第365回 2015年12月14日 男の世界と女の世界——沖縄離島社会の現在

講師 加賀谷真梨（機関研究員）

参加人数 18人

内容 沖縄には、男女が異なる役割を担い、男の世界と女の世界が明確に区分されてきた地域がある。しかし、少子高齢化や移住者の増加によって、そうした社会にゆらぎが生じている。サロンでは2つの離島を事例にその実態と今後の展望についてお話しした。

第366回 2015年12月21日 エボラ出血熱と「文化」

講師 浜田明範（機関研究員）

参加人数 23人

内容 西アフリカにおけるエボラ出血熱の流行。その原因は当該地域の文化にあるという論調が目立っているが、それは本当に正しいのか？今回は、別の説明を試みることで、私たち自身に突き付けられている課題を明らかにした。

第367回 2015年1月11日 ドイツのクリスマス・ピラミッド

講師 森 明子

参加人数 40人

内容 ドイツの北東部では、針葉樹のツリーではなく、クリスマス・ピラミッドと呼ばれる木彫作品を飾る。古い地方文化を伝えるもので、すばらしい木彫の技術が生かされている。ベルリンのコレクターから寄贈されたばかりの、新着資料について説明した。

第368回 2015年1月18日 北方の織布と織機

講師 佐々木史郎

参加人数 31人

内容 シベリア、極東ロシアのような寒冷地でも布を織る文化を持つ人々がいた。彼らはどのような織機で、どのような布を作っていたのか、それはどのように使用され、どのように機能したのかについてお話しした。

第369回 2015年1月25日 中央アジアの嫁入り道具

講師 藤本透子

参加人数 47人

内容 親が決めた相手と結婚する場合も、「駆け落ち」してから結婚を認めてもらう場合も、嫁入り道具は結婚後の暮らしを支える大切な財産となる。中央アジアの草原に暮らすカザフ人の嫁入り道具を紹介しながら、変わりゆく結婚のかたちについて考えた。

第370回 2015年2月1日 「エイジング・イン・プレイス」をめぐる議論と実践

講 師 鈴木七美

参加人数 16人

内 容 高齢期の住環境に注目して使われてきた「エイジング・イン・プレイス」という語は、「現在の環境に暮らし続ける」あるいは「お気に入りの場所を選択して暮らす」などを意味する。「エイジング・イン・プレイス」による生活環境のノーマライゼーションの展開を考えた。

第371回 2015年2月8日 モノから組織を考える——展示を見る一つの視点

講 師 出口正之

参加人数 21人

内 容 民博の研究者は、モノを集め展示し、モノから研究の対象である民族を考えている。しかし、モノと民族との間には非常に多くのものが介在している。例えば「組織」というのもその一つである。今回は「組織」を通じて民博の展示を見る視点を提供した。

第372回 2015年2月15日 インドネシア・バリ島の聖獣バロンと魔女ランダのいる暮らし——宗教儀礼から観光ショーまで

講 師 吉田ゆか子

参加人数 70人

内 容 インドネシア・バリ島のシンボルともいえる聖獣バロンと魔女ランダ。その仮面は、村でご神体として祀られるものもあれば、土産物となるもの、観光芸能ショーで用いられるものもある。バロンとランダを慕ったり、恐れたり、頼ったりするバリの人々の暮らしを紹介した。

第373回 2015年2月22日 音楽展示の楽しみ方

講 師 寺田吉孝

参加人数 17人

内 容 音楽展示は、モノとしての楽器の展示になる傾向がある。2010年3月に新しく生まれ変わった音楽展示では、楽器を軸としながらも、人間と音楽の関係を考えていただけるような展示を目指した。その取り組みと展示のハイライトを紹介した。

第374回 2015年3月1日 言語の調査とはどういうものか

講 師 吉岡 乾

参加人数 27人

内 容 フィールド言語学という分野では、人類学と同じように、現地へと赴いて調査をする。とはいえ、言語の調査ではいったい何をどう調べるのか。言語学の研究とは、具体的にどういふことをするのか。毎日触れている「言語」を、改めて考えてみた。

第375回 2015年3月8日 鶏からみた世界史——アジアの森から世界の台所へ

講 師 池谷和信

参加人数 39人

内 容 人類は、どのようにして野生の鶏を家禽の鶏に変えてきたのか。現在、鶏の肉や卵は世界中で食用にされ、一部の地域では闘鶏や儀礼の際に鶏が使われている。鶏がアジアの森で家禽化されたのちに、世界の台所に置かれるようになった過程を紹介した。

第376回 2015年3月22日 災害の記憶とコミュニティ

講 師 竹沢尚一郎

参加人数 12人

内 容 東日本大震災は多くの地域社会に深い爪痕を残した。過去に津波を経験した地域なのに、なぜこれほど被害が大きかったのか。記憶の継承が重要なことは承知しているが、どう継承していくかで議論が生じていた。民博で東日本大震災の展示を計画していることも踏まえてこの問題を考えた。

第377回 2015年3月29日 バプア・ニューギニアのタイムカプセル——ジョージ・ブラウン・コレクション

講師 Peter J. Matthews

参加人数 37人

内容 1970年代から80年代、民博は民族学的資料を世界の各地から直接収集し、また、すでに存在しているコレクションを購入し、収蔵品の拡充にとりくんだ。ジョージ・ブラウンは19世紀後半に太平洋の島々で宣教師としてはたらき、その間コレクションを大成した。その一部をオセアニア展示でご覧いただいた。

研究公演

「アリラン峠を越えていく——在日コリアン音楽の今」

2014年7月20日

解説 高 正子（神戸大学）、福岡正太

出演 安 聖民、李 政美、金剛山歌劇団ほか

参加者 474名

内容 アリラン峠は、在日コリアンにとって、峠の向こう側にあるかもしれない「希望」に向かい、越えなければならないさまざまな困難を象徴するものである。戦後、朝鮮半島は南北に分断され、在日コリアンコミュニティも分断された。くわえて、日本社会への同化の圧力により2世・3世たちは、アイデンティティの混乱にさらされることになった。1世の身体に深く染みついた民族文化は、朝鮮半島での生活体験のない2世・3世たちにとっては、それを学び身体化することで獲得するものである。こうして獲得された民族文化を通してコリアンとしてのアイデンティティを確認し、日本での生活体験を音楽に託して表現している。本公演では、このような在日コリアンたちが紡ぎ出す「音楽の今」を五感で感じていただいた。

「伝統芸能パンソリによる韓国文化の理解」

2014年9月15日

解説 朝倉敏夫

出演 南 海星、安 聖民 ほか11名

参加者 495名

内容 本研究公演は、2009年に引き続き、韓国の伝統芸能パンソリの舞台公演およびワークショップを通して韓国文化の理解を図ろうとしたものである。舞台公演では、パンソリの古典演目の中から『水宮歌』を取り上げた。パンソリはひとつの物語を完唱するのに数時間を要し、通して演奏されることはなかなかない。またパンソリは一人語りを基本としながらも、現在ではオペラ形式で演奏されるなど多様化している。今回の公演では、様々な演奏形態を取り入れながら、南 海星先生とその弟子たちの歌声による『水宮歌』のストーリー全体を楽しむことのできる公演を開催した。ストーリー全体を鑑賞することにより、ソリ（唄）だけでなく、物語の魅力もお伝えした。ワークショップでは、南先生とその弟子たちによる実演を通して、“口伝”を伝承形態の基本とするパンソリが実際どのような形で師匠から弟子に伝えられるのかをご覧いただいた。たんなる公演では知りえないパンソリの世界を体験してもらい、参加者に「本物を実際に」学習していただく機会となった。

「りんけんバンドみんぱく公演」

2014年11月1日

解説 日高真吾、呉屋淳子

出演 りんけんバンド、豊中市立庄内小学校児童

参加者 432名

内容 沖縄の伝統芸能・エイサーは、現在、その躍動感ゆえに国内外の若者を魅了している。エイサーが全国に広がった背景には、沖縄の言葉とリズムにこだわった「りんけんバンド」の影響があるといわれている。みんぱくの本館展示「沖縄のくらし」では、このような現代へ受け継がれる沖縄音楽の姿も紹介している。本公演では、豊中市立庄内小学校の児童によるエイサー演舞とコラボしたステージをお見せした。

じゃんがら念仏踊りみんぱく公演

2015年1月24日

解 説 橋本裕之（追手門学院大学地域文化創造機構特別教授）、遠藤 諭（久之浜大久自安我楽念仏踊継承会）、日高真吾

出 演 久之浜大久自安我楽（じゃんがら）念仏踊継承会

参加者 375名

内 容 国立民族学博物館では、東日本大震災で被災した芸能支援の一環として、毎年、館内で芸能を演じる「場」を設ける支援活動をすすめている。今年度公演した「じゃんがら」は、福島県に伝わる独特の念仏踊りである。本公演では、じゃんがらの披露のほか、復興に向けた人びとの思いについて語る座談会もおこなった。

みんぱく映画会

2014年4月29日

台湾映画鑑賞会——映画から台湾を知る①

「村と爆弾（原題：稻草人）」

担当講師 野林厚志

参加者 348名

内 容 第二次世界大戦のさなか、台湾南部のあまり豊かとはいえない村で、アメリカ軍が落とした不発弾を村人が見つけた。村人は駐在の巡査とともに不発弾を街にはこび報償を得ようともくろむが、海上への投棄を命じられる。そして、意外な結末がおとずれる。日本の植民地であった台湾もまた第二次世界大戦を経験した。内地とよばれた日本に住む人たちと同様に、台湾の人たちもまた空襲や敵軍の上陸に脅威と不安を感じる日々を過ごしたのである。戦争を経験した世代の割合が少なくなる今、台湾の人たちの戦争経験を考える。

2014年5月6日

台湾映画鑑賞会——映画から台湾を知る②

「超級大国民（原題：超級大國民）」

担当講師 野林厚志

参加者 394名

内 容 50年代の台湾。主人公はある読書会に参加したことを理由に逮捕され16年の刑を受ける。そして拷問によってリーダーの名前を漏らしてしまい、リーダーもまた逮捕され死刑となった。あがなうことのできない罪に苦しむ主人公ができるのは、亡きリーダーに謝罪の言葉を捧げることだけであった。1947年に発生した二二八事件とその後政府が行った思想弾圧は台湾社会に暗い影を落とした。それは外省人と本省人との対立にとどまらず、隣人や友人、時には家族の絆までも奪い去ってしまった。台湾史の影を理解する。

2014年5月31日

みんぱくワールドシネマ 映像に描かれる＜包摂と自律＞

「マイネーム・イズ・ハーン」

担当講師 三尾 稔、鈴木 紀

参加者 423名

内 容 国立民族学博物館では、2009年秋から開始した機関研究＜包摂と自律の人間学＞のテーマにあわせて、研究者による解説付きの上映会「みんぱくワールドシネマ」を実施している。第6期は＜多文化を生きる＞をキーワードに映画上映を展開した。今回はインド映画「マイネーム・イズ・ハーン」を上映した。インドからアメリカに移住したアスペルガー症候群を患うイスラム教徒のインド人のリズワン・ハーンが、9.11テロ以降に顕著になった差別と偏見を乗り越えるまでの愛と勇気の旅物語を通して、異文化に生きる人びとについて皆さんとともに考えた。

2014年 6 月 8 日

台湾映画鑑賞会——映画から台湾を知る③

「童年往事 時の流れ（原題：童年往事）」

担当講師 野林厚志

参 加 者 285名

内 容 外省人の家庭に生まれた主人公はものごころついたときは台湾にいた。大陸への帰還を切望する家族のなかで育ちながら、自分が台湾という異なるエスニシティをもつ社会の中にいる現実を感じとっていく。出身地がばらばらだった大陸からの移住者は、本省人というマジョリティに対して外省人というエスニシティを作っていた。そして、大陸で生まれ、台湾の権力主体となった第一世代とは歴史経験も価値観も異なる台湾生まれの世代が多数をしめるようになる。民主化が進むなかで変わっていく民族間関係を考える。

2014年 6 月 14 日

台湾映画鑑賞会——映画から台湾を知る④

「海角七号 君想う、国境の南（原題：海角七號）」

担当講師 野林厚志

参 加 者 321名

内 容 抱いていた夢がかなわず、仕事にもあふれ、都会での生活に終止符をうち故郷に帰り、祖父の郵便配達の仕事を手伝うことになった主人公。地元の寄せ集めのメンバーで作ったバンドの活動を通して、自分の大切にしてきた音楽をとりもどし、そして自分をとりもどしていく。経済成長が鈍化し現実化する台湾社会の格差問題。若者が味わっている閉塞感、世代間の価値観の違い、民族間関係、そして日本統治時代の記憶、台湾人の本音を通して今の台湾社会を感じる。

2014年 7 月 12 日

みんなく映画会

「かぞくのくに」

担当講師 ヤン・ヨンヒ（監督）、菅瀬晶子

参 加 者 289名

内 容 国境に隔てられた在日コリアン一家がともに過ごした、数日間の物語。在日コリアン 2 世の日本語教師リエには、幼いころに生き別れになった兄がいる。父の理想のため、わずか16歳で単身「あの国」に渡った兄ソンホ。そのソンホが病気治療のため、3か月の期限つきで、25年ぶりに日本に戻ってきた。息子の好物をそろえ、精一杯のもてなしをする母。多くを語らぬ父。ソンホもまた決して口数は多くなく、リエと旧友たちは気をもむ。監視役の男ヤンが常につきまとうことにも、リエは不快感をおぼえていた。病院で受けた検査の結果は思わしくなく、病は3か月では治療しきれない、深刻なものであることが判明する。そしてある日唐突に、ソンホは明日帰国するようにと命じられてしまう。リエは思いあまって、ヤンにやり場のない怒りをぶつけるが……。国境に隔てられた在日コリアン一家の数日間を描いた、『かぞくのくに』を上映し、国境や国籍のありかたや家族のかたち、日本の多文化性のゆくえ、越境が人の心にもたらす影響について、考えた。

2014年 8 月 30 日

みんなくワールドシネマ 映像に描かれる＜包摂と自律＞

「ヒア・アンド・ゼア」

担当講師 鈴木 紀、菅瀬晶子

参 加 者 330名

内 容 国立民族学博物館では、2009年秋から開始した機関研究＜包摂と自律の人間学＞のテーマにあわせて、研究者による解説付きの上映会「みんなくワールドシネマ」を実施している。第6期は＜多文化を生きる＞をキーワードに映画上映を展開した。今回はメキシコの家族を描いた「ヒア・アンド・ゼア」を上映した。アメリカでの数年間の出稼ぎ労働から故郷に帰った父親の、家族との再会と新たに築き上げていく生活模様を通して、異文化に働きに出る人々と、その人を送り出し故郷で待つ家族の心情と現況を見つめた。

2014年10月11日

みんなく映画会 【「南アフリカの過去と現在——ネルソン・マンデラから続く道」関連】

「遠い夜明け」

担当講師 池谷和信

参加者 201名

内容 南アフリカの黒人で最初の大統領として知られるネルソン・マンデラ氏は、1993年にアパルトヘイト（人種隔離）政策を廃止した。その後、人びとのくらしはどのように変わったのか？ 近年、ますます進行する国内の都市化に注目して、都市での持続可能な資源利用や生き方について考えた。

2014年11月9日

みんなくワールドシネマ 映像に描かれる＜包摂と自律＞

「海と大陸」

担当講師 宇田川妙子、鈴木 紀

参加者 223名

内容 国立民族学博物館では、2009年秋から開始した機関研究＜包摂と自律の人間学＞のテーマにあわせて、研究者による解説付きの上映会「みんなくワールドシネマ」を実施しています。第6期は＜多文化を生きる＞をキーワードに映画上映を展開した。今回は、イタリア南部の小さな島の、環境が変わりゆく貧しい漁村で、法律に反すると知りながら密入国者の親子を助けた一家の苦闘を通して、現代における移民・難民の問題を考えた。

2015年2月28日

みんなくワールドシネマ 映像に描かれる＜包摂と自律＞

「もうひとりの息子」

担当講師 菅瀬晶子、鈴木 紀

参加者 427名

内容 国立民族学博物館では、2009年秋から開始した機関研究＜包摂と自律の人間学＞のテーマにあわせて、研究者による解説付きの上映会「みんなくワールドシネマ」を実施しています。第6期は＜多文化を生きる＞をキーワードに映画上映を展開した。今回は、湾岸戦争の混乱の中で、赤ん坊を取り違えられたことが判った、フランス系イスラエル人一家とパレスチナ人一家の動揺と葛藤のドラマを描く「もうひとりの息子」を上映した。敵対し憎悪する民族がいかに歩み寄り、理解していくことができるのかを見つめた。

博学連携

●学習キット「みんなく」

学校機関や各種社会教育施設を対象に、本館の研究成果をわかりやすく伝えることを目的として学習キット「みんなく」の貸し出しを実施している。「みんなく」は世界の国や地域の衣装や楽器、日常生活で使う道具や子どもたちの学用品などをスーツケースにパックしたもので、2015年3月現在で13種類22パックを用意している。

名称	個数	2014年度貸し出し回数
極北を生きる	2	13
アンデスの玉手箱	2	22
ジャワ文化をまとう	1	11
イスラム教とアラブ世界のくらし	1	17
ブータンの学校生活	1	11
ソウルスタイル	2	24
ソウルのこども時間	2	23
インドのサリーとクルター	2	21
ブリコラージュ	3	8
アラビアンナイトの世界	2	21

アイヌ文化にであう	1	15
アイヌ文化にであう 2	1	13
モンゴル	2	32

●みんぱく春と秋の遠足・校外学習 事前見学&ガイダンス春のガイダンス

春のガイダンス 2014年4月3日、4日

秋のガイダンス 2014年8月22日、25日

本館を利用する学校団体の引率教師を対象としたガイダンスを春と秋に実施し、春には26団体75名、秋には22団体62名、計48団体137名の学校関係者が参加した。

当ガイダンスでは、遠足や校外学習など、博物館見学の準備や事前・事後の学習に役立つツールを紹介したほか、見学に関するさまざまな相談も受けた。

●職場体験

2014年10月28日～11月19日

学校教育及び社会教育における体験活動の促進を図り、中学校等の生徒の社会性を育む観点から、中学生に「職場体験学習」の機会を提供しており、2014年度は6校14名の参加があった。

その他の事業

●「ミュージアムぐるっとパス・関西2014」

関西地区の美術館・博物館の宣伝・広報と新規需要の掘り起こし、関西文化の振興等を目的として、実行委員会世話人会の一員として参画した。

●展示場クイズ「みんぱQ」

クイズ「みんぱQ」は、展示を観覧しながら知識や興味を広げてもらおうと、クイズ形式で本館展示を楽しんでもらう企画である。本館展示の新構築に合わせ、2014年4月24日～5月27日「中国地域の文化編」、6月12日～7月15日「朝鮮半島の文化編」、7月24日～8月26日「日本の文化『沖縄の暮らし』『多みんぞくニホン』」を実施した。

●「音楽の祭日2014 in みんぱく」

実施日：2014年6月22日

フランスで始まった夏至の日を音楽で祝う「音楽の祭典」が、2002年から日本でも「音楽の祭日」として開催されるようになり、当館もその趣旨に賛同し音楽を愛する一般市民に広く当館を解放して開催することとなった。当日は22のグループや個人の演奏があった。

●「みんぱく×みんぱラジオ presents 角 淳一が迫る！すみからすみまで『イメージの力』」

パーソナリティーとして活躍する角 淳一さんと、アフリカの仮面、儀礼などの研究で知られる文化人類学者の吉田憲司による「イメージの力」展のトークイベントを2014年9月14日に実施した。

●北大阪ミュージアムメッセ

2014年11月15日、11月16日に、北大阪の7市3町の美術館・博物館の文化祭「北大阪ミュージアムメッセ」を本館にて開催し、展示やワークショップ、楽器の演奏等がおこなわれた。

●連続講座「みんぱく×ナレッジキャピタル——イメージの力をさぐる」

特別展「イメージの力」関連イベントとして、グランフロント大阪において連続講座「みんぱく×ナレッジキャピタル——イメージの力をさぐる」を7回（うち1回は特別展ツアー）開講した。

●北海道アイヌ協会技術者研修

1990年より本館の所蔵する資料の研究・活用による学術研究の進展とアイヌ民族の文化の振興を目的として、公益社団法人北海道アイヌ協会が派遣した伝統工芸技術者を外来研究員として受け入れている。2014年度の受入実

績は以下のとおりである。

受入期間：2015年2月12日～2月25日

受入人数：4名

●カムイノミ

実施日：2014年11月27日(木)

カムイノミというアイヌ語は「神への祈り」という意味であり、その実施は本館が所蔵するアイヌ標本資料の安全な保管と後世への確実な伝承を目的としている。従来は萱野 茂氏（故人、二風谷アイヌ資料館前館長）によって非公開でおこなわれていた。2007年度からは、ウタリ協会（現 公益社団法人北海道アイヌ協会）の会員がカムイノミと併せてアイヌ古式舞踊の演舞を公開により実施することとなり、2014年度は苫小牧アイヌ協会の協力を受けた。

ボランティア活動

「みんなくミュージアムパートナーズ（MMP）」は、本館の博物館活動の企画や運営をサポートする自律的な組織として2004年9月に発足した団体である。館内で視覚障がい者への展示場案内、休日、祝日等のイベント企画、運営といった多岐に広がる活動を本館との協働で進めている。

「地球おはなし村」は、2003年に本館で開催した特別展「西アフリカおはなし村」を契機とし、2005年10月に発足した団体である。館内でアフリカの音楽活動や昔話の語り活動等に加え、近隣の児童センター、小学校及び児童福祉施設などでも広く活動をおこなっていたが、閉村が決定し、2014年11月をもって活動を終了した。

千里文化財団の事業

●国立民族学博物館友の会講演会（協力：国立民族学博物館）

◎大阪：国立民族学博物館第5セミナー室

第430回 「中国最大の少数民族、チワン（壮）族の現在」【新中国地域の文化展示関連】

2014年4月5日 講師 塚田誠之 参加人数 35名

少数民族チワン（壮）族の伝統的な住居や行事についてその変容を紹介した。また、ベトナム側の同系民族との交流やネットワークの在り方について紹介した。

第431回 「漢族はなぜ家族を大切にするのか？」【新中国地域の文化展示関連】

2014年5月3日 講師 韓 敏 参加人数 37名

家系図や位牌・婚礼に用いる物品のほか、近年の社会情勢の変化にも着目しながら、漢族の家族関係を考察した。

第432回 「多民族の街・新大久保とハラールフード産業」【新日本の文化展示「多民族のニホン」関連】

2014年6月7日 講師 菅瀬晶子 参加人数 37名

日本有数の多民族の街、新大久保。その歴史的経緯をたどるとともに、ハラールフードとその産業の変容を紹介し、日本における多民族社会の在り方について考察した。

第433回 「ウチナンチューと教育」【新日本の文化展示「沖縄の暮らし」関連】

2014年7月5日 講師 日高真吾、呉屋淳子（機関研究員） 参加人数 36名

沖縄における戦後の教育事情について紹介したのち、さまざまな歴史的転換期を経験してきた同地で、教育が担ってきた役割を考察した。

第434回 「植民地期に海を渡った日本の食」【新朝鮮半島の文化展示関連】

2014年8月2日 講師 朝倉敏夫 参加人数 33名

うどん、オムライス等、植民地期に日本から韓国に渡った食べ物の受容と変容をとおして、日本と韓国間の近現代史を考察した。

第435回 「極北の孤島グリーンランドにおける気候変動と文化の変遷」【企画展「未知なる大地——グリーンランドの自然と文化」関連】

2014年9月6日 講師 岸上伸啓 参加人数 45名

グリーンランドにおける人類の移動の歴史をたどるとともに、同島と地球規模の気候変動との影響関係について考察した。

第436回 「アート（美術）と人類学のあいだ——特別展『イメージの力』によせて」【特別展「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」関連】

2014年10月4日 講師 吉田憲司 参加人数 43名

近年急速に距離をせばめつつあるアートと人類学。特別展「イメージの力」開催を契機に、美術館と博物館、美術史学と人類学等、アートと人類学の関係について考察した。

第437回 「ナラ林文化を再考する」

2014年12月6日 講師 佐々木史郎 参加人数 38名

日本文化の起源を大陸アジアに求めた「照葉樹林文化論」。これに対応するものとして、北方からの文化の流れを仮説だてた「ナラ林文化論」の課題と実証の可能性を探った。

第438回 「グローバル時代の『知的生産の技術』——フォーラム型博情報館の可能性」

2015年1月10日 講師 久保正敏 参加人数 35名

グローバルな情報収集と利用が日常となった現代において、博物館における資料や情報の集積・利用や公開の方法について、民博の構想・展望をもとに考察した。

第439回 「都市の婚礼、山村の婚礼——ネパール社会の現在（いま）を結婚式に探る」

2015年2月7日 講師 南 真木人 参加人数 27名

社会の様相を如実にあらわす「結婚式」とおとして、親族やカースト・民族間の関係性、衣食住や文化継承の在り方など、地域間の違いや時代的な変容を探った。

第440回 「いま、焼畑を考える——自然破壊か、それとも共生か」

2015年3月7日 講師 池谷和信 参加人数 36名

世界の広範な地域で営まれてきた焼畑の事例を紹介し、焼畑をとおして人と自然との向き合い方を考えた。

◎東京：モンベル渋谷店 5F サロン

第109回 「梅棹忠夫のモンゴル調査をたどる」

2014年6月28日 講師 小長谷有紀 参加人数 52名

「梅棹忠夫アーカイブズ」としていち早く公開された初代館長の梅棹忠夫モンゴル調査資料について解説するとともに、前年、講師がたどった調査ルートの現状について紹介した。

第110回 「多みんぞくの街・新大久保とハラールフード産業」【新日本の文化展示「多みんぞくニホン」関連】

2015年10月19日 講師 菅瀬晶子 参加人数 28名

日本有数の多民族の街、新大久保。その歴史的経緯をたどるとともに、ハラールフードとその産業の変容を紹介し、日本における多民族社会の在り方について考察した。

●みんぱく見学会（協力：国立民族学博物館）

第52回 中国地域の文化展示

2014年4月5日 講師 塚田誠之 参加人数 33名

第53回 日本の文化展示「沖縄のくらし」

2014年7月5日 講師 日高真吾、呉屋淳子（機関研究員） 参加人数 33名

第54回 朝鮮半島の文化展示

2014年 8月2日 講師 朝倉敏夫 参加人数 33名

第55回 企画展「未知なる大地——グリーンランドの自然と文化」

2014年 9月6日 講師 岸上伸啓 参加人数 41名

第56回 特別展「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」

2014年10月4日 講師 吉田憲司 参加人数 41名

第57回 日本の文化展示「日々の暮らし」

2015年 3月7日 講師 池谷和信 参加人数 36名

●体験セミナー

第68回 「くすりの民族学（見学編）」

2014年 4月17日～18日（奈良県）

講師 小山修三（名誉教授／千里文化財団理事長）、浅見 潤（三光クスリ資料館館長） 参加者数 22名
製薬や和漢薬の歴史と製造、くすりにまつわる神事への参加をとおして、ヒトの自然利用の在り方を考察した。

第69回 「『織り』からたどる手仕事の現場（国内編）」

2014年11月20日～21日（群馬県）

講師 吉本 忍（名誉教授）、行松啓子（染色作家、群馬県立日本絹の里織物専任講師） 参加者数 14名
今なお暮らしのなかで営まれている機織りの現場を訪問し、手仕事の重要性、人と自然の向き合い方を考察した。

●民族学研修の旅

第84回 「梅棹忠夫のモンゴル調査をたどる旅——中国内モンゴルの草原と史跡をゆく」

2014年 9月8日～14日（中国内モンゴル自治区） 講師 小長谷有紀 参加者数 22名

初代館長梅棹忠夫のモンゴル調査の足跡をたどるとともに、遊牧を営む人びとの生活文化について理解を深めた。

第85回 「手仕事への回帰——カンボジア、東北タイの機織りの現場をめぐる」

2015年 2月1日～9日（カンボジア、タイ東北部） 講師 吉本 忍（名誉教授） 参加者数 18名

今なお暮らしのなかで営まれている機織りの現場を訪問し、手仕事の重要性、人と自然の向き合い方を考察した。

●『季刊民族学』（国立民族学博物館友の会 機関誌）

協力：国立民族学博物館

編集・発行：千里文化財団

148号：特集「復興への道3」（2014年 4月25日発行）

149号：特集「女神」（2014年 7月25日発行）

150号：特集「民博の礎」（2014年10月25日発行）

151号：主な記事「グリーンランド」（2015年 1月25日発行）

●万博公園賑わい創出支援事業の実施

1) 体験型ワークショップ「おどる！たたく！きく！——みんなであそぶアフリカの『音』」

西アフリカの伝統的な踊りと楽器演奏の鑑賞、体験ワークショップをおこなうとともに、「音」の背景にある西アフリカの生活文化について紹介した。併せて吉田憲司教授の案内のもと、特別展「イメージの力」見学会を関連企画として実施した。

会期：2014年11月8日

会場：万博記念公園、国立民族学博物館

主催：千里文化財団

助成：関西・大阪21世紀協会

協力：国立民族学博物館

参加人数：880人

2) 国立民族学博物館友の会 機関誌『季刊民族学』全点展示：『季刊民族学』の軌跡

創刊150号を記念し、国立民族学博物館の研究者の協力のもと発行し続けてきた友の会機関誌『季刊民族学』を全点手にとって閲覧できるよう展示した。

会期：2014年10月2日～12月9日

会場：国立民族学博物館エントランスホール（無料ゾーン）

主催：千里文化財団

助成：関西・大阪21世紀協会

協力：国立民族学博物館

参加人数：36,500人

●みんなくに集積された資料と情報を活用した出前授業プログラム

実施日	実施場所	プログラム内容	参加人数
2014年8月30日	久御山町立御牧小学校	ブーメラン	40名
2014年10月18日	相楽台はっふ広場（放課後教室）、木津川市立小学校	ブーメラン	40名
2014年10月25日	伊丹市鴻池センター婦人部	風呂敷	25名

●巡回展「マンダラ——チベット・ネパールの仏たち」の開催

会期：2014年6月28日～7月31日（34日間）

会場：高知県立歴史民俗資料館企画展示室

主催：高知県立歴史民俗資料館〈高知県文化財団〉、国立民族学博物館、千里文化財団

後援：高知県教育委員会、NHK 高知放送局、高知新聞社、RKC 高知放送、KUTV テレビ高知、KSS さんさんテレビ、KCB 高知ケーブルテレビ、エフエム高知

入場者数：総計3,146名

<関連企画>

1) 講演会「マンダラとは何か」

日時：2014年7月5日

講師：立川武蔵（名誉教授）

会場：高知県立歴史民俗資料館

参加人数：160名

2) 展示室トーク

日時：2014年7月19日

講師：曾我満子（高知県立歴史民俗資料館学芸員）

参加人数：62名

●カレッジシアター「地球探究紀行」の開催協力

会場：あべのハルカス近鉄本店ウイング館9階「SPACE 9」

主催：産経新聞社、特別協力：国立民族学博物館、千里文化財団

2014年4月9日 「演じる音——チャルメラの響きに人が集う」

講師：寺田吉孝

参加人数：33名

2014年4月16日 「インドの大地に春を呼ぶ——ホーリーの火祭り」

講師：三尾 稔

参加人数：24名

2014年4月23日 「唄をなりわいに生きる人びと——エチオピアの楽師アズマリ」

講師：川瀬 慈

参加人数：25名

2014年5月14日 「壺と交流する楽器、ゴングの今」

講師：福岡正太

参加人数：12名

2014年5月21日 「美しさをもとめて——ビーズをめぐる人類の旅」

講師：池谷和信

参加人数：14名

2014年 5 月28日	「美麗島の手しごと——台湾の伝統刺繍」	講師：野林厚志	参加人数：12名
2014年 6 月11日	「人生は音楽の調べとともに——移り変わるインドの結婚式」	講師：寺田吉孝	参加人数：14名
2014年 6 月18日	「南詔大理国の末裔、ペー族の結婚式」	講師：横山廣子	参加人数：10名
2014年 6 月25日	「家族をつなぐ 社会をつなぐ——インドの婚礼」	講師：三尾 稔	参加人数：12名
2014年 7 月 2 日	「伝説に彩られた吟遊詩人ラリベロッチ（エチオピア）」	講師：川瀬 慈	参加人数：12名
2014年 7 月 9 日	「霧の森の木彫り——マダガスカルの無形文化遺産」	講師：飯田 卓	参加人数：11名
2014年 7 月16日	「影が紡ぎ出す物語——カンボジア無形文化遺産の伝承」	講師：福岡正太	参加人数：13名
2014年 8 月 6 日	「島のまつりに人がつどう——鹿児島県硫黄島」	講師：福岡正太	参加人数：13名
2014年 8 月20日	「トンパ村——雲南シャングリラに芽生えた文化復興」	講師：横山廣子	参加人数：10名
2014年 8 月27日	「五年に一度、祖先に会う——台湾パイワン族の五年祭」	講師：野林厚志	参加人数：9 名
2014年 9 月10日	「インドの女神にささげる歌と踊り」	講師：三尾 稔	参加人数：15名
2014年 9 月17日	「島々に響く青銅と竹の音——フィリピンの伝統音楽」	講師：寺田吉孝	参加人数：18名
2014年 9 月24日	「精霊と人のコミュニケーション、ザール憑依儀礼（エチオピア）」	講師：川瀬 慈	参加人数：12名
2014年10月 8 日	「気候変動は何をもたらしたか——世界最大の島グリーンランド」	講師：岸上伸啓	参加人数：28名
2014年10月15日	「古代マヤのことばを探る」	講師：八杉佳穂	参加人数：32名
2014年10月22日	「人間は何を食べてきたか——アフリカの食から学ぶ」	講師：池谷和信	参加人数：20名
2014年11月12日	「イスラームの世界観——アラビアンナイトから考える」	講師：西尾哲夫	参加人数：45名
2014年11月19日	「地域社会にねづくイタリアの食」	講師：宇田川妙子	参加人数：22名
2014年11月26日	「インド・サリーの世界」	講師：杉本良男	参加人数：24名
2014年12月 3 日	「巨大な屋根の謎——インドネシアの家屋と集落」	講師：佐藤浩司	参加人数：22名
2014年12月10日	「江戸の探検家、間宮林蔵と北方民族」	講師：佐々木史郎	参加人数：30名
2014年12月17日	「現代中国の農村のくらし——ある家族の幸せのかたち」	講師：韓 敏	参加人数：19名
2015年 1 月14日	「オーストラリアを旅する——カンガルーからブーメランへ」	講師：久保正敏	参加人数：29名
2015年 1 月21日	「南米アンデス文明の遺跡を巡る考古学者と盗掘者との闘い」	講師：関 雄二	参加人数：37名
2015年 1 月28日	「多民族共生を考える——ベトナム西北部の人々のくらしから」	講師：桒永真佐夫	参加人数：38名

- 2015年2月4日 「マレーシアの自然と生きる人びと」
 講師：信田敏宏 参加人数：24名
- 2015年2月18日 「聖地に生きる——パレスチナとイスラエル」
 講師：菅瀬晶子 参加人数：48名
- 2015年2月25日 「ネパールの今と昔——1982年の映像から」
 講師：南 真木人 参加人数：34名
- 2015年3月4日 「西アフリカを掘る——発掘から見てくる『中世』アフリカの歴史」
 講師：竹沢尚一郎 参加人数：27名
- 2015年3月11日 「韓国の食の世界」
 講師：朝倉敏夫 参加人数：40名
- 2015年3月18日 「日本とアイヌ民族——隣人としてくらす」
 講師：齋藤玲子 参加人数：52名

番外編みんなく見学ツアー、会場：国立民族学博物館

- 2014年5月9日 新中国地域の文化展示「中国ムスリム『回族』の信仰と暮らし——雲南省大理から」
 講師：横山廣子 参加人数：22名
- 2014年7月24日 企画展「みんなくおもちゃ博覧会」
 講師：日高真吾 参加人数：9名

●その他、普及活動

- ① 国立民族学博物館「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」オリジナルグッズの製作・頒布
- ② 国立民族学博物館オリジナルカレンダーの編集・発行および頒布
- ③ 『災害と文化財——ある文化財科学者の視点から』（日高真吾著）の発行
- ④ リニューアルした南アジア「染織と伝統と現代」コーナーのオリジナルポストカードセットの製作・頒布

研究戦略センターの設立の趣旨と経緯

研究戦略センター（英語名 Center for Research Development）は、2004年4月に行われた国立大学と大学共同利用機関の法人化に伴う、国立民族学博物館の改組の一環として生まれた組織である。本館が所属する大学共同利用機関法人人間文化研究機構の組織規程には、本センターの設立目的について、「文化人類学及び関連諸学に関する研究動向並びに社会的要請を把握し、研究戦略の策定を行うため、研究戦略センターを置く。」（『人間文化研究機構組織規程』第25条4項）と記されている。また、同機構の中期計画にも、「国内外の研究動向及び社会的要請を把握し研究戦略を策定するための「研究戦略センター」——後略——」とある（人間文化研究機構第1期中期計画Ⅰ-1-(2)-(カ)（2009年12月24日変更））。すなわち、本センターの主要な任務は、国立民族学博物館の中心的な研究分野である文化人類学、民族学とその関連諸分野の研究動向と社会的な要請を、国内だけでなく国際的にも調査、把握し、その上で、館の研究戦略を策定することにある。2014年度の主な活動は以下のとおりである。各事項の詳細は『研究戦略センター活動報告』に譲る。

2014年度の活動概要

1. 研究戦略の策定

- 1) 2014年度に実施されたりサーチ・アシスタント3名による「包摂と自律の人間学」「マテリアリティの人間学」に関する研究動向調査について成果公開として、2015年2月9日、3月11日に報告会を実施した。
- 2) 海外の特色のある研究所、あるいは先端的な研究を展開している拠点や機関について、その研究動向を調査した。アメリカに派遣された吉田ゆか子（機関研究員）は、アメリカにおけるマテリアリティに関する人類学研究の動向を調査した。アメリカに派遣された浜田明範（機関研究員）は、北米における医療人類学の研究動向を調査した。オーストラリアに派遣された加賀谷真梨（機関研究員）は、オーストラリアにおける沖縄（日本）研究に関する動向を調査した。なお、吉田・浜田は現地でそれぞれの分野で国際学会年次大会に出席した。
- 3) 2009年度より開始した「みんぱく若手研究者奨励セミナー」について2014年度は本館の機関研究領域「包摂と自律の人間学」に関連した「包摂と自律の人間学——宗教と社会的つながりをめぐって」をテーマとして設定し、参加者を公募した。全国から9名の若手研究者が参加し、施設見学と研究発表を合わせて、3日間のセミナーを行った。優秀発表者に対して「みんぱく若手セミナー賞」を授与し、セミナー後はアンケート調査を行った。
- 4) 2007年度より開始した「学術潮流サロン」について、2014年度は「コミュニケーションの由来と未来」と題して、外部から研究者を講師として招聘し、4回の集中的なセミナーを開催した。

2. 研究プロジェクトの企画・立案・運営

- 1) 2009年度に、人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点（MINDAS）事務局が設置されるにあたって、研究戦略センターはその設立準備を支援してきた。2010年度より同拠点のプロジェクトが本格始動し、研究戦略センターは、2014年度もひきつづきその運営や研究活動を支援した。
- 2) 前年度にひきつづき、外部資金による研究助成に関する情報をメールにて随時、教員に通知するとともに、ウェブにて情報提供した。
- 3) 科学研究費補助金説明会として、外部から講師を招き、科研応募に関する説明会を行うとともに、研究協力課が科研費応募の手続きと使用のための説明会を催した。

3. 研究プロジェクト・研究体制の評価について

- 1) 機関研究・共同研究の外部評価を実施した。
- 2) 2014年度人間文化研究機構業務実績報告書の本館分担部分の作成を支援し、あわせて資料編を作成した。
- 3) 2006年度から行っているウェブサイトでのプロジェクトごとの研究活動の実績紹介を、引き続き行った。研究成果公開プログラムによる館の国際的なシンポジウムや研究フォーラム、ワークショップなどの活動実績についても明示し、『研究戦略センター活動報告2014』にも報告した。

4. 他の研究機関との連携、協力

- 1) 2011年度に締結された学術協定に基づき、日本文化人類学会と本館との連携として、民博が開催した特別展や講演会への日本文化人類学会の共催、日本文化人類学会が主催した国際会議への民博の協力、民博における映像記録の公開を行った。
- 2) 2006年よりメンバーとなっていた地域研究コンソーシアムに関して、2008年度からは幹事組織として研究戦略センター長を理事として、センター教員2名を運営委員として派遣している。この体制を本年度も継続した。

- 3) 本館の機関研究と JICA 大阪・阪大 GLOCOL とが行ってきた「研究者と実務者による国際協力勉強会」が2010年7月に終了したことにもなっており、3 機関の担当者が検討して、「研究者と実務者による国際協力セミナー実施のための覚書」をかわした。2014年度は JICA 関西の都合によりセミナーを開催しなかった。
- 4) 2014年11月22日に東京国際フォーラムにおいて開催された大学共同利用機関シンポジウム2014に、本館から教員2名を派遣し、展示ブースを開設し、機関研究を中心に本館の研究と活動を紹介した。
- 5) 立命館大学、大阪工業大学と学術交流協定を締結した。

5. 研究活動の情報収集と公開

- 1) 教員の個人業績の集積を引き続き行った。
- 2) 共同研究や機関研究の研究成果の集積を行い、評価のための基礎資料とした。
- 3) 『研究年報2013』を発行した。
- 4) 『研究戦略センター活動報告2013』を発行した。
- 5) 公開講演会を東京（2014年11月4日）と大阪（2015年3月20日）で開催した。
- 6) 2008年度に学術情報リポジトリ委員会が発足し、2009年度から公開しているリポジトリの、コンテンツの登録と許諾取得の作業を順次進め、2015年3月末で4,504件について終了した。

7 文化資源研究センター

文化資源研究センターの設置目的

文化資源研究センター（英語名 Research Center for Cultural Resources）は、文化資源の体系的な管理と情報化、およびその共同利用や社会還元に向けて調査や研究開発を行うとともに、実際に事業を推進する際の企画・調整を行うことを目的として、2004年4月に設置された。

文化資源には、人間の文化にかかわるさまざまな有形のモノやそれについての情報のほか、身体化された知識・技法・ノウハウ、制度化された人的・組織的ネットワークや知的財産など、社会での活用が可能な資源とみなされるものが広く含まれる。こうした文化資源を人類共有の財産とすることで、グローバル化する世界で人びとが異なる文化への理解を深め、互いに共生していくための基盤を作り出そうというのが、文化資源研究センターのめざすところである。文化資源研究センターは、独自に研究事業を企画・運営するほか、文化資源関連事業として、館内、館外の研究者が参画して実施する多様な文化資源プロジェクト等の企画・調整を通して、文化資源の運用全般に寄与することを役割としている。

文化資源研究センターの研究事業

2014年度に文化資源研究センターが独自に実施した研究事業の概要は以下のとおりである。

- 1) 所蔵資料を研究・展示・情報提供等に有効に活用するための資料管理に関する調査・分析作業（博物館環境の調査・分析作業、民族学資料の保存手法に関わる調査・分析作業）を行い、文化資源プロジェクト（資料管理分野）との関係により、「有形文化資源の保存・管理システム構築」を継続的に進めた。
- 2) 教職員の文化財の保存・管理に関する専門的知識の習得に関する支援を行った。
- 3) 「探究ひろば」に設置・運用している展示物提示システム「イメージファインダー」の効果を被験者実験により測定し、学術的な分析を行った。
- 4) 文化資源の活用に関する調査を機関研究員を中心に行った。
 - ・兵庫県立西宮今津高校の教員及び学生を対象とした、新構築後の「沖縄のくらし」の展示資料の教育的活用に関する調査研究
 - ・鹿児島大学法文学部の教員及び学生を対象とした、民博の資源（みんぱく）の教育的活用に関する調査研究
 - ・日韓の高等学校における「学校芸能」の創造に関する比較研究
 - ・映像・音響プログラムの公開・発信の手法に関する調査研究
- 5) 文部科学省をはじめとする中央官庁の実施する社会連携活動の実態調査として、文部科学省及び経済産業省が実施した「子ども霞が関見学デー」の現場を視察し、本館の今後の取り組みについて検討した。
- 6) 『文化資源研究センター活動報告2013』を発行した。
- 7) イコム日本委員会 平成26年度委員会・総会に出席した。
- 8) タブレットPCを導入し、文化資源関連の会議（文化資源運営会議、文化資源研究センター会議）のペーパーレス化を図るとともに、文化資源研究センター教員をはじめ関係者による情報の共有化の手法の検討とその効果についての評価を図った。

文化資源関連事業

文化資源に関する主な開発研究や事業は、文化資源関連事業として運営される。そのねらいは、目的、計画、経費、責任を明確にし、それぞれの成果を的確に評価して、さらなるプロジェクトの発展を図ることにある。文化資源関連事業は、「文化資源プロジェクト」「文化資源計画事業」「情報管理施設のプロジェクト的な業務」からなり、文化資源運営会議が毎年募集し、選定する。また、「文化資源プロジェクト」「文化資源計画事業」は館内外の研究者の運営のもとで遂行され、文化資源研究センターや情報管理施設の専門スタッフの支援・協力を受けて、効率的かつ機動的に推進されている。

2014年度の文化資源関連事業の概要は以下のとおりである。

1. 運営体制

1) 文化資源関連事業の構成と運営体制

2009年度から再編を実施した文化資源関連事業について、「文化資源プロジェクト」「文化資源計画事業」「情報管理施設のプロジェクト的な業務」の3種類のカテゴリーによって運用した。また、文化資源共同研究員の制

度を運用し、共同利用を推進した。さらに外部有識者による意見をプロジェクトの審査に反映させた。

2) 本館展示新構築の体制整備

本館展示総括チーム及び各展示プロジェクトチームのリーダー等からなる拡大展示専門部会を開催し、新構築を円滑に進めた。

2014年度新構築分（南アジア展示、東南アジア展示）について、実施設計に続いて展示施工を行い、完成させた。また、2015年度新構築分（中央・北アジア展示、アイヌの文化展示）の基本設計を完成させた。

2. 文化資源プロジェクト

文化資源プロジェクトは、大学共同利用機関法人人間文化研究機構の第2期中期目標・中期計画に沿って、本館の大学共同利用機関法人としての共同利用基盤を整備するとともに、本館が所蔵もしくは管理している学術資源の体系化を進め、共同利用を促進し、学術的価値を高めるための研究プロジェクトである。

プロジェクトは、5つの分野（調査・収集、資料管理、情報化、展示、社会連携）に関わる研究開発、または研究成果の前記5分野への展開を目的とするもので、その成果は共同利用に供するとともに、社会への還元ができるものであることを前提とする。

1) 調査・収集分野

中央・北アジア展示新構築のための標本・映像音響資料収集

提 案 者：藤本透子

2015年度の中央・北アジア展示新構築のため、中央アジア（カザフスタン、ウズベキスタン）、ロシア（シベリア）、モンゴルで、生業、生活文化、儀礼、宗教実践、社会主義などに関わる標本資料（481点）、写真資料及びデジタルデータを収集した。

和太鼓の製作工程と伝統技術の継承に関する映像取材

提 案 者：寺田吉孝

大阪市に伝承されている和太鼓の製作方法を、各工程で用いられる技術と職人の身体の動き・流れに焦点を当てながら詳細に映像記録した。取材は、部落解放同盟浪速支部、太鼓製造業の株式会社太鼓正（大阪市浪速区）、および太鼓皮製造業の株式会社ナカモト（同西成区）の全面的協力を得て、計9日間行った。

中国雲南省の少数民族の儀礼とキリスト教文化に関する映像番組の編集

提 案 者：横山廣子

過去に実施した文化資源プロジェクトの撮影映像及び申請者が調査で撮影した映像を編集し、中国雲南省の少数民族に関するビデオテークを製作する2か年計画の1年目。今年度は回族の婚礼とリス族およびミャオ族のキリスト教文化に関する3本の番組を製作した。

「ラージャスターン州の生活・信仰・儀礼」に関する映像資料の編集と現地語版の作成

提 案 者：三尾 稔

2011年度に実施した映像音響資料取材プロジェクト（「インド・ラージャスターン州における社会変容と婚礼」）の成果に基づき、取材資料をビデオテーク・マルチメディア・コンテンツ番組として編集製作した。

カリंगा音楽に関するビデオテーク番組の編集

提 案 者：寺田吉孝

2008年度に収集した映像音響資料をもとに、フィリピン・ルソン島山間地域に居住するカリंगाの音楽を紹介するビデオテーク番組『祝いの音、勝利の記憶——フィリピン・ルソン島山地民の結婚式』および、その英語版、現地語（イロカノ語）版を製作した。

ビデオテーク番組 *Guitars of Portugal* の編集

提 案 者：寺田吉孝

2006年に収集した映像音響資料をもとに、ポルトガルのギター音楽文化を紹介するビデオテーク番組 *Guitars of Portugal* を製作した。

ビデオテーク番組 *Guitars of Puerto Rico* の編集

提 案 者：寺田吉孝

2008年に収集した映像音響資料をもとに、プエルトリコのギター音楽文化を紹介するビデオテーク番組 *Guitars of Puerto Rico* を製作した。

トゥバ映像記録の資料編の編集

提 案 者：佐々木史郎

2012年度に取材した映像資料をもちいて、2013年度にビデオテーク番組を日本語、モンゴル語、中国語、ロシ

ア語で（中国編、モンゴル編、ロシア連邦トゥバ編、総集編）計16本ならびに総集編について英語で製作した。
2014年度は、資料編として長時間番組を製作した。

研究公演「神への祈りと喜びの舞曲——バッハからバルトークへ」にもとづくビデオテーク番組の制作

提 案 者：新免光比呂

本館で開催した研究公演を文化資源として活用するために、ビデオテーク番組（マルチメディアコンテンツ）
1本を製作した。

ネパール関連のビデオテーク番組の編集

提 案 者：南 真木人

2013年度に現地撮影した映像を用い、「ネパール 都市の結婚式」、「ネパール 山村の結婚式」、「ネパールの金細工」、「カトマンドウ盆地の30年」の4本のビデオテーク番組を製作した。

彫金技術の映像取材と番組制作

提 案 者：日高真吾

2015年度に寄贈が予定されている園幸雄氏の彫金製作用具の受け入れに伴い、各道具の使用方法和彫金技術に関する記録映像を撮影し、ビデオテーク番組として9本の番組製作を行った。

展示記録映像のあり方に関する実践的研究

提 案 者：日高真吾

企画展「みんぱくおもちゃ博覧会——大阪府指定有形民俗文化財『時代玩具コレクション』」及び「未知なる大地 グリーンランドの自然と文化」において、展示記録をデジタルアーカイブスにするための手法を実践的に検討し、展示記録パノラマムービー2本を作製した。

「アイヌの文化」展示新構築のための資料収集

提 案 者：齋藤玲子

2015年度に実施する「アイヌの文化」展示の新構築のために、アイヌの工芸家らによる現代作品、およびアイヌ民族復権運動の先駆者であった山本多助氏（1904－1993）の子息・文利氏が所蔵する民具や観光に関する資料等を収集した。

2) 資料管理分野

有形文化資源の保存・管理システム構築

提 案 者：園田直子

①有形文化資源の保存対策立案：総合的有害生物管理の考えに基づいた生物被害対策、②資料管理のための方法論策定：博物館環境調査と収蔵庫狭隘化対策、これら資料管理に関わる基礎研究・開発研究と事業を企画、実施、統括した。

東日本大震災で被災した文化財の保管環境に関する調査研究 3

提 案 者：日高真吾

2012年に行った「東日本大震災で被災した文化財の保管環境に関する調査研究」、2013年に行った「東日本大震災で被災した文化財の保管環境に関する調査研究 2」を継続発展させ、廃校を利用した、一時保管場所の効果的な運用対策について検証した。

3) 情報化分野

京都大学学術調査隊関連資料の整理とデータベース作成

提 案 者：吉田憲司

2011年度にみんぱくのデータベース検索システムより公開した「京都大学学術調査隊写真コレクション」に、2013年度と2014年度にデジタル化した写真資料をテキスト情報と共に追加した。また、共同研究者により、「京都大学アフリカ学術調査隊」の資料全件に対して、テキスト情報の修正・付加作業を行い、その結果をデータベースに反映した。さらに、「京都大学カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊」と「第二次京都大学ヨーロッパ学術調査隊」コンテンツを新たに作成・構成し、館内公開した。

「大島襄二コレクション」の整理とデータベース作成

提 案 者：久保正敏

大島襄二氏が、1967年～1991年にかけてアジアや大洋州などを、調査した時の記録写真9150コマの整理（点検、概要把握、デジタル化のための資料選別）を行った。また、デジタル化対象資料の1782コマについてはデジタル化を完了している。著作権処理については、著作権譲渡の事務処理完了済である。

東大資料の目録（『土俗品目録』）のデータ化

提 案 者：佐々木史郎

本館収蔵の東京大学理学部人類学教室旧蔵資料（受入番号50-501～524／K0000001～0004872番の資料）の原簿（『土俗品目録』）のデジタル画像データを作成するとともに、その内容を本館の標本資料学術データベースと照合できるよう整理した。

「沖 守弘インド民族文化写真資料アーカイブ」のデータベース作成

提 案 者：三尾 稔

上記のアーカイブ資料に含まれるスライド写真のデジタル化を実施した。別経費（地域研究推進経費）で、デジタル化の一部とスライド写真に関するテキスト情報を作成した。

佐々木高明（名誉教授）による写真資料の学術情報化プロジェクト

提 案 者：池谷和信

データベースの作成に向け、整理作業を行い、ネガフィルム（26,842点）のデジタル化を行った。また、日本の焼畑の専門家を招聘し、2014年度デジタル化資料のうちから8,968点分の写真を見てください、その一部のテキスト情報を作成した。

世界の身装文化デジタルアーカイブの構築

提 案 者：久保正敏

2011年度～2013年度の複数計画で進められた＜世界の布文化データベースの構築＞を受け、2014年度は布地標本に限ることなく、本館に収蔵されている衣服・アクセサリー標本を中心に研究を進めた。標本について11検索項目について分析を行い、1点につき平均5枚の写真を撮影し、標本資料データベースとのリンクも実現している。＜衣服・アクセサリー標本＞3,463件、＜身装文献＞6,145件、＜近代日本の身装電子年表＞11,005件のデータを更新した。

三次元CGを利用した民族建築デジタルアーカイブの構築

提 案 者：佐藤浩司

これまで文化資源プロジェクトで作製されたインドネシア諸民族の木造民家の三次元CGはおおよそ50点にのぼる。これら資料のデータベースを公開するにあたって、実際の図面と齟齬があるCGの修正を行った。

4) 展示分野

平成26年度本館展示新構築（南アジア展示・東南アジア展示）

提 案 者：吉田憲司

本館では、2008年度より本館展示の全面的な新構築に着手している。2014年度は、南アジア展示および東南アジア展示の新構築を実施し、2015年3月19日に両展示を一般公開した。

平成25年度展示新構築にかかるみんぱく電子ガイドコンテンツの製作

提 案 者：福岡正太

「朝鮮半島の文化」「中国地域の文化」「沖縄のくらし」「多みんぞくニホン」の新構築に伴い、新たに必要となった電子ガイド用コンテンツ（日本語、英語、韓国語、中国語）を製作した。また、番号プレートを展示場に設置し来館者へのサービスを開始した。

特別展「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」

主 催 国立民族学博物館、国立新美術館

共 催 日本文化人類学会

特別協力 民族藝術学会

協 力 国立情報学研究所、千里文化財団

実行委員 館内：吉田憲司（実行委員長）、須藤健一、上羽陽子、丸川雄三、山中由里子、齋藤玲子
館外：青木 保（国立新美術館）、南 雄介（国立新美術館）、長屋光枝（国立新美術館）、山田由佳子（国立新美術館）、小泉潤二（大阪大学）、足羽與志子（一橋大学大学院）、春日直樹（一橋大学大学院）、窪田幸子（神戸大学大学院）

開催期間 2014年9月11日～12月9日

入 場 者 35,704人

国立民族学博物館開館40周年・日本文化人類学会創立50周年記念事業として、2014年2月19日から6月9日まで、東京・国立新美術館において本館の所蔵品を展覧する「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」を開催し、さらに同展を同年9月11日より12月9日まで、本館特別展示館で開催した。

企画展「未知なる大地——グリーンランドの自然と文化」

プロジェクトメンバー

館内：岸上伸啓（リーダー）、齋藤玲子

館外：Naja Rosing-Asvid（ナヤ・ローシング・アスヴィド）（グリーンランド国立博物館）、
Kasper Hansen（キャスパール・ハンセン）（在日デンマーク大使館）

開催期間 2014年9月4日～11月18日

本館には植村直己や岡正雄が収集した学術的に重要なグリーンランド・イヌイットの資料が所蔵されている。本館の所蔵品を中心に北海道立北方民族学博物館、高円宮家、デンマーク王室ヘンリック・コレクションなどの所蔵品や映像・音響資料を用いて、世界最大の島グリーンランドの自然と文化についての展示会を2014年9月4日から11月18日まで本館・企画展示場Aにおいて開催した。また、その一部を2015年3月28日から4月19日まで東京の代官山ヒルサイドフォーラム・ギャラリーにおいて展示した。

企画展「みんぱくおもちゃ博覧会——大阪府指定有形民俗文化財『時代玩具コレクション』」

プロジェクトメンバー

館内：日高真吾（リーダー）、久保正敏、丸川雄三、吉田憲司

館外：小池淳一（国立歴史民俗博物館）、武知邦明（枚方市立旧田中家鋳物館）

開催期間 2014年5月15日～8月5日

2012年度に大阪府より、本館に移管された大阪府指定有形民俗文化財「時代玩具コレクション」について、これまでの研究成果を反映した展示を行った。本展示では、本コレクションに分類されるもののうち、1. ブリキ製玩具、2. ボード玩具（盤上玩具）、3. マスコミ玩具、4. カード玩具（絵札玩具）の4つのコーナーからなり、これらの玩具の歴史変遷と日本の近現代史と照らし合わせながら、その遊び方について紹介した。

企画展「岩に刻まれた古代美術——アムール河の少数民族の聖地シカチ・アリャン」の準備

提 案 者：佐々木史郎

4回の準備委員会を開催し、展示名、開催期間、主催・共催・協力、巡回館、展示資料、展示内容、図録内容の各項目について検討し、最終決定を行った。

アイヌ展示新構築事前調査

提 案 者：齋藤玲子

2013年度に引き続き、2014年度は7月と1月および2月に館外研究員を招聘して研究会を開催し、アイヌ文化展示の基本設計に向けて、そのコンセプトやおもな展示資料について検討を行った。

・特別展「韓日食博——わかちあい・おもてなしのかたち」の開催準備活動

実行委員 館内：朝倉敏夫（実行委員長）、丸川雄三、金 昌鎬（外国人研究員）

館外：林 史樹（神田外語大学）、守屋亜記子（女子栄養大学）、李 エリア（早稲田大学）、
奇 亮（韓国国立民俗博物館）、金 永才（韓国国立民俗博物館）、安 廷允（韓国国立民俗博物館）

開催期間 2015年8月27日～11月10日

2015年度の特別展の開催にむけて事前調査を行うとともに、韓国国立民俗博物館はじめ関係各機関との連絡・協議を行った。また、特別展の開催のための外部資金の獲得に向けて申請した。

次期ビデオテークのユーザーインターフェースデザイン研究

提 案 者：福岡正太

次期ビデオテークの更改を視野に入れ、博物館における21世紀型ビデオライブラリーの提供方式を、ハードウェア・装置と操作画面のユーザーインターフェース（UI）に重点を置いて調査・検討した。ユーザーが本館のビデオテークや他施設のビデオライブラリーをどのように利用しているのかについて調査し、装置とUIデザインを実証的に検討した。

多機能端末における公開データベースの一般ユーザー向け応用の研究

提 案 者：福岡正太

標本資料目録、言語資料、服飾・身装文化資料などのデータベースは、現在InfoLib（パッケージウェア）を使用して運用されている。しかし、そのUIは研究者・プロフェッショナル向けであり、一般のユーザー向けになっていない。そこでユーザーがどのように博物館のデータベースを利用するのかを調査するとともに、専門的知識がなくても利用できるようなUIを設計した。

次世代ユニバーサルミュージアム／展示空間における知覚鑑賞の評価手法の開発

提 案 者：吉田憲司

本館が目指すユニバーサルミュージアムの次のステップとしての次世代ユニバーサルミュージアム構築にむけて、多様な来館者が問題なくアクセスでき快適に観覧できるだけでなく、展示空間における知覚鑑賞が可能となる展示デザインの評価手法の開発を行った。また、その評価手法に基づいて、視覚障害者を対象とした触知案内盤を開発し、その特許申請を行った。

国立民族学博物館における展示情報の館外活用に関する技術的研究——ビデオテークを中心とするみんぱくコンテンツ発信環境の構築

提 案 者：福岡正太

展示関係資料の館外活用例として、持ち出しが可能でタッチパネルによる直感的な操作が特徴のビデオテークのデジタルビューアを構築した。また既存の番組100本からなるテスト用のテーマコンテンツを製作し、館内でのデモを実施した。

次世代みんぱく電子ガイドによる来館者向け Web サービスの研究と開発——観覧支援サービスと展示情報提示の繋合

提 案 者：福岡正太

携帯端末で提供する次世代みんぱく電子ガイドを本格的な来館者向けサービスとして充実させ、提供すべきコンテンツと仕様を検討し試験環境の構築を行うものである。来館者が展示を観覧するうえでリアルタイムに提示できる支援サービスの内容を検討し、あわせてインターフェースと提示方式を設計したうえで試験環境による検証を行った。

特別展「夷酋列像——蝦夷地イメージをめぐる 人・物・世界」の開催準備

実行委員 館内：日高真吾（実行委員長）、佐々木史郎、齋藤玲子、野林厚志、吉田憲司

館外：吉本 忍（国立民族学博物館名誉教授）、内田順子（国立歴史民俗博物館）、横山百合子（国立歴史民俗博物館）、右代啓祝（北海道博物館）、山際晶子（北海道博物館）

開催期間 2016年2月25日～5月10日

本展示は、蠣崎波響筆「夷酋列像」の実像を明らかにするとともに、この絵画が描かれた18世紀の蝦夷地とその国際性を広く紹介するものである。今年度は来年度の開催に向けての準備期間として、北海道博物館、国立歴史民俗博物館と展示の開催概要に関する打ち合わせを行った。

企画展示場有効利用システムの開発

提 案 者：日高真吾

企画展示場有効利用システムの開発

現行の企画展示場は、企画展が開催されていない際、休憩用のいすが設置されているのみで、本館展示場の美観を著しく損ねている。そこで、本プロジェクトでは企画展示が開催されていないときの空間利用として、過去の特別展のポスターを利用したシステムを開発し、来館者が安心できる空間を創出した。

5) 社会連携分野

カムイノミ及び重要無形民俗文化財「アイヌ古式舞踊」演舞の実施

提 案 者：齋藤玲子

本館が所蔵するアイヌの標本資料に対して、安全な保管と後世への確実な伝承を目的に、祈りの儀式（カムイノミ）を行った。併せて国の重要無形民俗文化財であるアイヌ古式舞踊の演舞を、一般公開で実施した。

博学連携教員研修ワークショップ2014 in みんぱく

提 案 者：上羽陽子

2014年8月5日に、「学校と博物館でつくる国際理解教育——センセイもつくる・あそぶ・たのしむ」をテーマとして、日本国際理解教育学会との共催で開催した。参加者は主に小・中・高等学校、支援学校等の教育機関教諭、大学生、大学院生、博物館職員など計111名であった。

「展示版みんぱく」の制作『あるく、ウメサオタダオ展』

提 案 者：上羽陽子

2011年の特別展「ウメサオタダオ展」をもちいて、当該展示の資料を工夫して「みんぱく」にすることにより、利用者がみずから展示場をつくりながら、資料を利用できるようにした。現行の「みんぱく」と同様のサイズを展示版にするものであり、みずから移動する展示である。

みんぱっく「ジャワ文化をまとう」改訂版の制作

提 案 者：福岡正太

本館の教育機関向け貸出キットである「みんぱっく」の「ジャワ文化をまとう」は、製作より10年以上が経過して老朽化し、一部内容物が欠損したまま運用してきた。そこで、2014年度に実施された東南アジア展示の新構築に合わせ、2013、2014年度の2か年で、「ジャワ文化をまとう」パックの全面的な内容見直しを行い、改訂版1パックを製作した。

みんぱっく「アンデスの玉手箱」改訂版の制作

提 案 者：關 雄二

本館の教育機関向け貸出キットである「みんぱっく」の「アンデスの玉手箱」は、制作より12年が経過して老朽化し、一部内容物が欠損したまま運用している。そのため2015年度の改訂（2パック）に向けて基本コンセプトと内容を検討した。

3. 文化資源計画事業

「文化資源計画事業」は、研究成果を普及することを目的とした事業で、2つの分野（資料関連、展示・社会連携）に分けられる。

1) 資料関連分野

「朝鮮半島の文化」に関する映像資料の開発と制作：韓国国立民俗博物館との交流事業

2014年度は、3年計画の2年次として、本館「朝鮮半島の文化」に関する映像資料収集の新たなシステムを構築するため、韓国国立民俗博物館との交流協定に基づき協議を行い、梨花女子大学、江原大学、安東大学で映像人類学を専攻する学生たち3チームに研修を受けさせ、2015年3月までに作品を製作、提出させた。今後、本館においてビデオテークとして編集する予定である。

標本資料の寄贈受入

- ・2014年度の南アジア展示新構築において展示する資料として、ネパール・クリケット・ナショナルチーム・公式ユニフォーム一式の寄贈を受け入れた。
- ・2014年度の南アジア展示新構築において展示する資料として、「南アジア地域儀礼・祭礼等関係資料」の寄贈を受け入れた。
- ・本館の中央・北アジア展示の新構築に利用するため、モンゴルにおける現代的なシャーマンの衣装および道具一式の寄贈を受け入れた。
- ・2014年度の南アジア展示新構築において展示する「南アジア地域生活道具資料」として、インドとネパールの生活道具の寄贈を受け入れた。
- ・2014年度の南アジア展示新構築において展示する資料として、「南アジア地域ポスター資料」の寄贈を受け入れた。
- ・2014年度の南アジア展示新構築において展示する資料として、「インド子ども用人形ほか」の寄贈を受け入れた。
- ・「日本幻灯機資料」として1950年代の幻灯機およびサンプル・フィルムの寄贈を受け入れた。
- ・「インド染織資料」としてインドの女性用ショール2点の寄贈を受け入れた。
- ・2014年度の東南アジア展示新構築において展示する資料として、「北タイ日系工場制服資料」の寄贈を受け入れた。
- ・2014年度の南アジア展示新構築において展示する資料として、「南アジア地域映画・音楽・衣装等関連資料」の寄贈を受け入れた。
- ・「インド装身具資料」としてインドの女性用の装身具82点の寄贈を受け入れた。
- ・2014年度の南アジア展示新構築において展示する資料として、「ネパールのククリ・ナイフ」の寄贈を受け入れた。
- ・国立民族学博物館所蔵資料として「パキスタンクリケットユニフォーム」の寄贈を受け入れた。
- ・中国地域に関する標本資料、天津楊柳青木版年画・麒麟送子（2セット）を「中国地域絵画（年画）資料」として寄贈を受け入れた。寄贈された資料は、天津市西青区無形文化遺産である楊柳青木版年画の代表的伝承人である、鄭克祥氏が描いたものである。
- ・ドイツのクリスマスツリーの非常に古い、ローカルな形を示す「クリスマス・ピラミッド」と呼ばれる木彫りの飾り物について、ベルリンヨーロッパ諸文化博物館（MEK）の仲介によって、ベルリン在住コレクターから本館への寄贈を受け入れた。

- ・世界文化遺産に関連した絵画を、国立民族学博物館所蔵資料として寄贈を受け入れた。寄贈受入した絵画のうち、「朝陽アンコール」については、東南アジア展示場横休憩所に展示した。
- ・本館の中央・北アジア展示の新構築に利用する可能性も念頭におきつつ、モンゴルにおける伝統的な民族楽器2点の寄贈を受け入れた。
- ・インド映画の研究者・解説者である松岡 環氏が収集保存してきたインド映画のポスターの寄贈を受け入れた。
- ・中国青海省のチベット族の持込入れと経文の寄贈を中国地域資料として受け入れた。経文はチベット族男性が首から提げる持込入れの中に入れるためのものである。持込入れは、工場生産品で、展示中の同種の資料と対比される現代の汎用品としての意味を持つ。
- ・『聖なる鉄琴「スロンディン」の音世界』（DVD 1 枚）の寄贈を受け入れ、利用許諾を交わすと共に、映像資料として登録した。
- ・2014年度の南アジア展示新構築において展示する資料として、「インドサリー資料」の寄贈を受け入れた。
- ・2014年度の南アジア展示新構築において展示する資料として、ネパールの花嫁衣裳の寄贈を受け入れた。
- ・フィリピンのギター類弦楽器バンドゥリア1点の寄贈を受け入れ、「フィリピン楽器資料」として保存した。
- ・2015年5月21日から7月21日に実施する企画展『岩に刻まれた古代美術——アムール河の少数民族の聖地シカチ・アリヤン』において展示するため北方ユーラシア学会とアンコールワット拓本保存会が、ロシア連邦ハバロフスク地方シカチ・アリヤン村に残されている岩面画から写し取ったロシア拓本（シカチ・アリヤン岩面画）の寄贈を受け入れた。
- ・「インド映画のポスター資料」を、国立民族学博物館所蔵資料として寄贈を受け入れた。
- ・吉本 忍名誉教授が所有しているインドネシアのプリント布を、国立民族学博物館所蔵資料として寄贈受入を行った。寄贈受入したプリント布は、東南アジア展示場にて展示した。
- ・大阪府高槻市内で使用されてきた足踏み脱穀機について、所有者に本館までの輸送を依頼、標本資料として寄贈を受け入れた。

2) 展示・社会連携分野

日本の文化展示「祭りと芸能」、「日々の暮らし」の部分改修

2012年度に新構築した日本の文化展示の「祭りと芸能」、「日々の暮らし」に関して、来場者アンケートの調査やプロジェクトチームによる再確認を行った結果をもとに、部分改修を行った。

ワークショップの実施ならびにワークシートの運用

夏期休暇期間のこどもワークショップ、企画展関連ワークショップ、秋の特別展関連ワークショップ、年末年始展示イベント関連ワークショップの実施と、ワークシートの運用等を実施した。ワークショップ回数は合計7回、総参加者数は110名であった。

ボランティア活動支援

国立民族学博物館におけるボランティア活動者の受入要項に基づき、登録したボランティア団体である MMP（みんぱくミュージアムパートナーズ）および地球おはなし村の活動支援を行った。

巡回展「マンダラ——チベット・ネパールの仏たち」（高知県立歴史民俗資料館）

事業メンバー 館内：南 真木人 館外：立川武蔵（国立民族学博物館名誉教授）

開催期間 2014年6月28日～7月31日

高知県立歴史民俗資料館にて高知県立歴史民俗資料館〈公益財団法人高知県文化財団〉・国立民族学博物館・一般財団法人千里文化財団主催の巡回展「マンダラ——チベット・ネパールの仏たち」を開催した。

巡回展（機構連携展示）東日本大震災復興特別企画「みんぱくおもちゃ博覧会（大阪府指定有形民俗文化財『時代玩具コレクション』）」

事業メンバー 館内：日高真吾（リーダー）、丸川雄三、吉田憲司

館外：小池純一（国立歴史民俗博物館）、青木 睦（国文学研究資料館）、小谷竜介（東北歴史博物館）

開催期間 2014年9月11日～10月5日（岩沼市民図書館）

2014年9月12日～9月21日（石巻市まがる堂）

2014年9月12日～9月21日（石ノ森萬画館）

2014年9月13日～9月23日（気仙沼「海の市」）

2014年10月11日～11月30日（東北歴史博物館）

2012年度に大阪府より本館に移管された大阪府指定有形民俗文化財「時代玩具コレクション」について、こ

れまでの研究成果を反映し、その成果を宮城県において、巡回展示を行った。

3) その他

年末年始展示イベント「ひつじ」

年末年始期において干支を題材にした展示ならびに関連催事を行い、来館者に季節感を伝えるとともに、世界各地の「ひつじ」と人びととの関わりを示し、本館の教職員を対象にした、展示目的・構成の設定から展示資料の選定、および展示に至る活動の研修を行った。

4. 情報管理施設のプロジェクト的な業務

「情報管理施設のプロジェクト的な業務」は、情報管理施設が実施する、文化資源に関する研究支援業務である。

みんなく映像民族誌の作成及び配付

本館製作のビデオテープ番組や研究用映像から10本を選び、みんなく映像民族誌第14集～第17集として4枚のDVDにまとめた。これを800セット分プレスし、591か所の図書館や研究機関等に配付した他、テーマに応じ、個別のDVDを学会等に配付した。

標本資料の撮影等業務

標本資料を研究、展示、情報提供等に有効利用するために、5,068点の標本資料の撮影、計測、画像の利用及びそれらに付随する業務を行った。

ビデオテープの媒体変換

本館所蔵映像資料であるD3テープは、再生機器の老朽化により早急な媒体変換が必要となっている。本年度は、105本のD3テープをXDCAM(PD128:42枚、PD100:2枚、PD50:6枚)へ複製を行った。

フィルム等の酸性度調査とベース調査

本館が所有する映画フィルム:3,028本、16mmシネテープ:42本、オープンリールテープ:405本を対象に、A-Dストリップスを封入した後、一定の時間を置いて酸性度を調査した。また映画フィルム:3,028本についてベース調査を行った。その結果、特に劣化の進んでいる資料は無かった。また、映画フィルムのベース調査の結果、TACベース:2,990本、PETベース:38本であることを確認した。

常設展示場新構築撤去資料の点検・クリーニング・再配架及びデータ整理作業

2013年度の新構築(中国地域の文化展示・朝鮮半島の文化展示・日本の文化展示)にともない撤去された1,062点の資料の状態のチェック(点検)、長期間展示されていた資料に関する情報のデータ作成および適切なクリーニングを行い、収蔵庫に再配架した。

第3収蔵庫収蔵資料の配架見直し及び再配架作業

第3収蔵庫内の資料5,281点の配架見直しおよび再配架作業を行い、標本資料の収蔵状況を改善し、新たな配架空間を確保した。

標本資料の補修・保存処理

展示場での資料点検、貸し出しなどの活用前後での資料点検の際に発見される資料の破損、汚損などの異常に対して、適切な処理を随時行った。新構築、あるいは特別展示に選定された資料、緊急に補修する必要がある資料などの補修を行い、資料を展示可能な状態にした。

みんなく運用・保守

157の学校や社会教育施設に、延べ231回の貸出を行った。また、貸出先での紛失や破損に伴う補修、老朽化した資料の交換等を行った。

設置目的

国際学術交流室（英語名 Center for International Academic Exchange）は、組織的な国際交流を円滑に進めることを目的として、2010年4月に設立された。

本館は、創設以来グローバルな視野をもち、積極的に海外の研究機関や研究者と連携、協力しながら研究活動と博物館活動を行ってきた。国際学術交流という点では大学共同利用機関の中でも先駆的な役割を果たしてきたといえるであろう。

20世紀末に始まった情報通信技術革命は、国際的な情報交換のスピードと量を飛躍的に増大させた。その結果、本館の国際的な活動はもはや個人の努力や関係では処理しきれない状態となり、組織的、戦略的な国際交流が求められている。国際学術交流室は、これまで蓄積されてきた海外の研究機関、研究者との関係を活かしつつ、本館がより戦略的、より組織的に国際的な研究連携や共同研究を推進するために、以下のような活動を行っている。

機能

国際的な学術交流の戦略策定

- ・学術交流のガイドライン策定
- ・海外の研究機関との研究連携、研究協力の推進についての検討

学術協定の締結および協定に基づく研究交流事業の推進

- ・学術協定の締結の準備支援、協定書の翻訳・校閲
- ・学術協定内容についての審議
- ・協定に基づく研究交流事業の支援
- ・協定に基づく事業の年度計画書、年度報告書の受付と検討
- ・国際シンポジウム・国際共同研究・国際連携展示などの支援
- ・海外からの協定締結の申し出、問い合わせに対する対応

外国人研究者に対する支援

- ・外国人客員教員、機関研究の外国人共同研究員、海外からの外来研究員などの受け入れの支援
- ・外国人研究者向けみんぱく利用マニュアル *Guide for Visitors* の作成・改訂

その他国際学術交流に関すること

- ・広報・展示関連の翻訳・校閲
- ・英文要覧、英語版 HP、*MINPAKU Anthropology Newsletter* の発行
- ・みんぱくフェローズの名簿のデータ管理、*MINPAKU Anthropology Newsletter* のフェローズへの発送
- ・みんぱくが発行する刊行物等において使用する英語表記の検討

国際学術交流事業の評価資料のとりまとめ

- ・国際学術交流事業の業務実績報告書、自己点検報告書等の資料とりまとめ

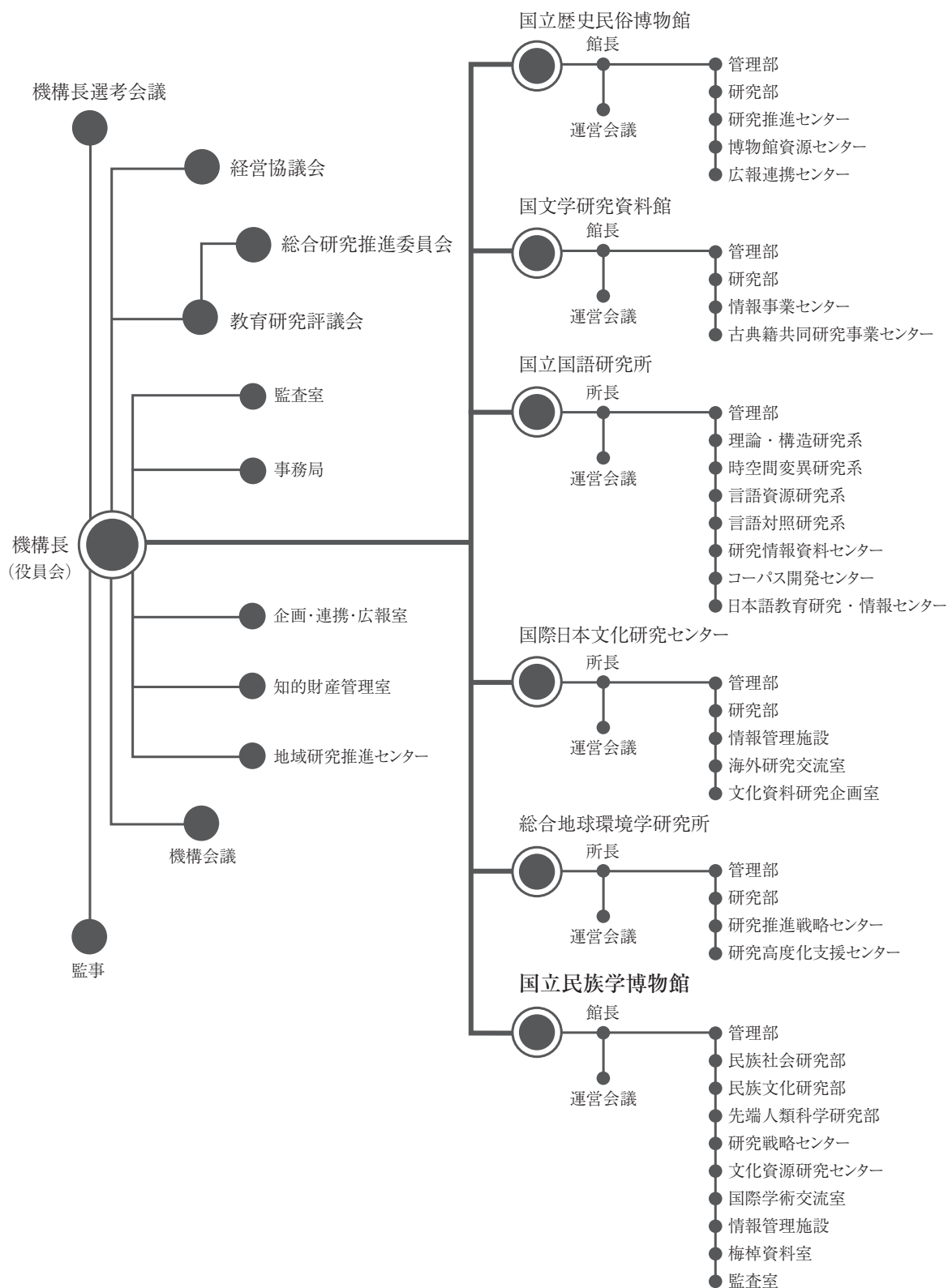
2014年度活動内容

- 1) 学術協定に基づく活動2013年度報告書ならびに2014年度計画書の確認。
- 2) 研究連携や研究協力のために、海外の研究機関との協定について、調査・準備を進めた。2014年度は、5月にマリ・文化省文化財保護局、7月に米国・北アリゾナ博物館との協定を新規に締結した。
- 3) 2014年度に国際学術交流室を通して行った翻訳校閲件数は以下の通り。
翻訳 10件 校閲 70件
- 4) 外国人研究員8名の受け入れ手続きを行った。
- 5) 英語版ホームページを改訂した
- 6) 本館組織の英語名称の作成・変更の検討を行った。
- 7) *MINPAKU Anthropology Newsletter* を2回発行し、みんぱくフェローズへ発送した。

9 人間文化研究機構

人間文化研究機構は、本館を含む 6つの大学共同利用機関を設置し、各機関において人間の文化活動並びに人間と社会および自然との関係に関する基盤的研究を進めるとともに、各機関の連携協力を通して、人間文化に関する総合的で多様な研究を展開させ、学術文化の進展に寄与することを目指す。

組織構成図 (2015年3月31日現在)



運営組織 (2015年3月31日現在)

●役員

機構長	立本成文
理事	平川 南
理事	小長谷有紀
理事	今西祐一郎
理事	榎原雅治
監事	広渡清吾
監事	駒形圭信

●経営協議会

立本成文	人間文化研究機構長
平川 南	人間文化研究機構理事
小長谷有紀	人間文化研究機構理事
今西祐一郎	人間文化研究機構理事（併）国文学研究資料館長
榎原雅治	人間文化研究機構理事
久留島 浩	国立歴史民俗博物館長
影山太郎	国立国語研究所長
小松和彦	国際日本文化研究センター所長
安成哲三	総合地球環境学研究所長
須藤健一	国立民族学博物館長
稲盛豊実	稲盛財団専務理事
岩男壽美子	慶應義塾大学名誉教授
大原謙一郎	大原美術館理事長
佐村知子	内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局地方創生総括官補
高村直助	東京大学名誉教授
武田佐知子	追手門学院大学教授
永井多恵子	ジャーナリスト
藤井宏昭	国際交流基金顧問
藤岡一郎	京都産業大学名誉教授
宮崎恒二	東京外国語大学理事
望月規夫	讀賣テレビ放送株式会社代表取締役社長
小池良高	事務局長

●教育研究評議会

立本成文	人間文化研究機構長
平川 南	人間文化研究機構理事
小長谷有紀	人間文化研究機構理事
今西祐一郎	人間文化研究機構理事（併）国文学研究資料館長
久留島 浩	国立歴史民俗博物館長
影山太郎	国立国語研究所長
小松和彦	国際日本文化研究センター所長
安成哲三	総合地球環境学研究所長
須藤健一	国立民族学博物館長
藤尾慎一郎	国立歴史民俗博物館副館長
寺島恒世	国文学研究資料館副館長
木部暢子	国立国語研究所副所長
井上章一	国際日本文化研究センター副所長
佐藤 哲	総合地球環境学研究所副所長
岸上伸啓	国立民族学博物館副館長
大塚柳太郎	自然環境研究センター理事長
窪田幸子	神戸大学大学院国際文化学研究科教授
酒井啓子	千葉大学法政経学部教授
佐藤宗諄	奈良女子大学名誉教授
佐藤友美子	追手門学院大学特別任用教授
野家啓一	東北大学教養教育院総長特命教授
森 正人	熊本大学名誉教授
吉田和彦	京都大学大学院文学研究科教授

国立民族学博物館（民博）には、総合研究大学院大学（総研大）の文化科学研究科（地域文化学専攻・比較文化学専攻）が設置されている。総研大は、学部を持たない大学院博士課程だけの国立大学法人で、大学共同利用機関の人材と研究環境を基礎とし、各機関の行っている高度の研究活動に密着した教育・研究を行っている。民博に基盤をおく2専攻は、長期のフィールドワークで得られた資料に基づき博士論文を作成することを目的とし、個別の教員による授業や研究指導と、複数の教員の指導のもとに行われる共通のゼミナールを通して、広い視野を持った人間性豊かな研究者の養成をめざしている。

本年度の文化科学研究科長は、国際日本研究専攻（大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国際日本文化研究センターに設置）の稲賀繁美がその任にあたり、地域文化学専攻長は佐々木史郎、比較文化学専攻長は笹原亮二が務めた。

●葉山キャンパス・文化科学研究科の動き

2014年度は、総研大も国立大学法人化11年目を迎えた。

文化科学研究科においてはかねてより連携強化が図られてきたが、2005年度から2006年度にかけて文部科学省の「魅力ある大学院教育イニシアティブ」事業として専攻を横断して実施された「総合日本文化研究実践教育プログラム」を引き継いで、以降は「文化科学研究科連携事業」が実施され、民博に基盤をおく2専攻もこれに参加した。今年度のこの教育プログラムにおいては、リサーチ・トレーニング事業に4名の学生が参加して、それぞれ学会発表や現地調査等を行った。

第58回教授会（2014年9月19日）において地域文化学専攻から1名の課程博士、1名の論文博士、比較文化学専攻から1名の課程博士、第59回教授会（2015年2月27日）において地域文化学専攻から1名の課程博士、比較文化学専攻から1名の課程博士の学位授与が承認された。

●教員の異動

久保正敏教授、庄司博史教授、八杉佳穂教授は民博の定年退職に伴って2015年3月31日付で総研大の併任解除となった。

●学位の授与

【課程博士】

伊藤 悟（地域）『中国雲南省における徳宏タイ族の即興うたと感性の民族誌的研究』〔文学〕

〔審査委員〕横山廣子、馬場雄司（京都文教大学教授）、米野みちよ（フィリピン大学准教授）、寺田吉孝、竹沢尚一郎

〔予備審査委員〕竹沢尚一郎、寺田吉孝、笹原亮二

サウセド・セガミ・ダニエル・ダンテ（比較）『My *Huaca*: The Use of Archaeological Heritage in Modern Peru from a Public-Archaeology Perspective』〔文学〕

〔審査委員〕野林厚志、關 雄二、鈴木 紀、井口欣也（埼玉大学教授）、松田 陽（英国イーストアングリア大学講師）

〔予備審査委員〕野林厚志、飯田 卓、鈴木 紀

堀田あゆみ（地域）『モンゴル遊牧民のモノの情報をめぐる交渉に関する民族誌』〔学術〕

〔審査委員〕佐々木史郎、朝倉敏夫、池谷和信、小長谷有紀（人間文化研究機構理事）、尾崎孝宏（鹿児島大学准教授）

〔予備審査委員〕佐々木史郎、岸上伸啓、池谷和信

窪田 暁（比較）『「野球移民」を生みだす人びと——ドミニカ共和国におけるトランスナショナル移民研究』〔文学〕

〔審査委員〕鈴木 紀、岸上伸啓、南 真木人、杉本尚次（民博名誉教授）、高畑 幸（静岡県立大学准教授）

〔予備審査委員〕樫永真佐夫、宇田川妙子、庄司博史

【論文博士】

津田命子（地域）『アイヌ衣文化の研究』〔学術〕

〔審査委員〕岸上伸啓、吉田憲司、佐々木史郎、吉本 忍（民博名誉教授）、佐々木利和（北海道大学客員教授）、

本田優子（札幌大学教授）

〔予備審査委員〕岸上伸啓、上羽陽子、佐々木史郎

なお、これまでに学位論文を単行本として、『研究年報2013』掲載以降に刊行したものは、以下のとおりである。
鈴木晋介（2011年〔平成23年〕3月論文博士）

2013『つながりのジャーティヤ——スリランカの民族とカースト』法蔵館

●学生の就職状況

学生の受入を開始した1989年以来、2015年3月末日までに地域文化学専攻・比較文化学専攻を巣立った118名の修了生および退学生のうち、合計53名が常勤の教育研究職に就いた。内訳は、国立大学13名、公立大学5名、私立大学28名、海外等その他の機関6名、民博1名である。

●入学者選抜試験

2015年度入学者の選抜試験には、地域文化学専攻3名、比較文化学専攻5名、計8名の志願者があり、地域文化学専攻2名、比較文化学専攻4名、計6名の合格者を第59回教授会において決定し、6名が入学手続きをとった。入学定員（各専攻3名）に対する出願者の倍率は累計平均より低めの1.33倍であった。合格者、「志望研究題目」、（主任指導教員、副指導教員）は以下の通りである。

【地域文化学専攻】

今村宏之

「ジャワにおける宗教的犯罪と宇宙観——マレー世界の慣習法文化との比較と法人類学研究」（信田敏宏、福岡正太）

查斯查干

「新疆モンゴル社会における歴史語りに関する人類学的研究」（佐々木史郎、韓 敏）

【比較文化学専攻】

笠井みぎわ

「アッシジ刺繍にみる『聖なるもの』への関心」（上羽陽子、宇田川妙子）

星野麗子

「中国内陸部における客家文化の観光開発と日常実践をめぐる人類学的研究——四川省洛帶鎮を中心に」（韓 敏、横山廣子）

松岡とも子

「独立解放から1950年代に描かれた伝統表象——韓国における西洋画を中心に」（太田心平、岸上伸啓）

辺清音

「チャイナタウンの多声的状況と中華表象の主体的構築——神戸南京町と長崎新地中華街の文化創造を事例として」（韓 敏、南 真木人）

2015年度入学者も、ここ数年と同様、研究対象である現地での経験を持つ者が多い。出身大学院の内訳は、国公立3名、私立3名、海外2名で出身大学院の地方別では、関東、中部、近畿、九州地方となっている。

2015年3月現在、地域文化学専攻と比較文化学専攻それぞれに12名と16名、あわせて28名が在籍しているが、このうち3年次以上には両専攻あわせて14名がいる。これは、教育研究の柱としてある長期のフィールドワークにそれぞれの学生が出かけているためである。

2014年度は、7月13日に民博館外（キャンパスプラザ京都：京都市下京区）において、サマーオープンキャンパス（大学説明会）を開催し、関東、近畿から2名の参加者があった。また、館内でのオープンキャンパス（大学説明会／2000年度から開催）は、10月12日にセミナー室や大学院院生室等で開催し、総研大および民博の概要説明、施設見学、在学生・修了生・教員との懇談等が行われた。2014年度の参加者は7名で、近畿、その他の地域からの参加と多岐にわたった。

●日本学術振興会特別研究員（DC2）への採用

2014年度は地域文化学専攻の喬旦加布、比較文化学専攻の古沢ゆりあが日本学術振興会の特別研究員（DC2）

に採用された。また、2014年に申請した2015年度特別研究員採用者として地域文化学専攻の今井彬暁、白 福英の計2名が内定を獲得した。

●地域文化学専攻・比較文化学専攻教員数（2015年3月現在）

専 攻	専攻長	担当教員数
地域文化学専攻	1	23（基盤機関の長である民博館長を含む）
比較文化学専攻	1	22

●地域文化学専攻・比較文化学専攻の学生（2015年3月現在）

専 攻	入学定員	現 員			計
		1年次	2年次	3年次	
地域文化学専攻	3	2	3	7	12
比較文化学専攻	3	4	5	7	16
計	6	6	8	14	28

●年度別学位記授与者数

	地域文化学専攻		比較文化学専攻		計
	課程博士	論文博士	課程博士	論文博士	
1991（平成3）年度			1		1
1992（平成4）年度					0
1993（平成5）年度			1	1	2
1994（平成6）年度	2		1		3
1995（平成7）年度	2		1		3
1996（平成8）年度		3			3
1997（平成9）年度	3		4		7
1998（平成10）年度	4	2			6
1999（平成11）年度					0
2000（平成12）年度	2		2	1	5
2001（平成13）年度	1	1	2	1	5
2002（平成14）年度	1	1		2	4
2003（平成15）年度					0
2004（平成16）年度	2	3			5
2005（平成17）年度	4	2		2	8
2006（平成18）年度	2		3		5
2007（平成19）年度	2	1	3		6
2008（平成20）年度	1		1		2
2009（平成21）年度		1	1	1	3
2010（平成22）年度	2		2	3	7
2011（平成23）年度	3		1	1	5
2012（平成24）年度	1	1	1	1	4
2013（平成25）年度			1	1	2
2014（平成26）年度	2	1	2		5
計	34	16	27	14	91

●研究部の人事異動

・2014年4月1日

民族社会研究部教授	田村克己	2014年3月31日	定年退職
民族文化研究部教授	吉本 忍	2014年3月31日	定年退職
文化資源研究センター教授	小林繁樹	2014年3月31日	定年退職
民族社会研究部教授	小長谷有紀	2014年3月31日	辞職
民族文化研究部教授	八杉佳穂	2014年3月31日	民族文化研究部長併任解除
民族社会研究部教授	朝倉敏夫	2014年3月31日	文化資源研究センター長併任解除
先端人類科学研究部准教授	松尾瑞穂	2014年4月1日	新規採用
民族社会研究部助教	吉岡 乾	2014年4月1日	新規採用
文化資源研究センター教授	信田敏宏	2014年4月1日	文化資源研究センター准教授から昇任
先端人類科学研究部教授	齋藤 晃	2014年4月1日	先端人類科学研究部准教授から昇任
民族社会研究部教授	朝倉敏夫	2014年4月1日	文化資源研究センターより配置換
民族文化研究部教授	池谷和信	2014年4月1日	民族社会研究部より配置換
研究戦略センター教授	鈴木七美	2014年4月1日	先端人類科学研究部より配置換
文化資源研究センター教授	野林厚志	2014年4月1日	研究戦略センターより配置換
人間文化研究機構理事	小長谷有紀	2014年4月1日	民族社会研究部教授併任
民族文化研究部教授	池谷和信	2014年4月1日	民族文化研究部長併任
文化資源研究センター教授	野林厚志	2014年4月1日	文化資源研究センター長併任

・2015年1月1日

民族社会研究部教授	横山廣子	2015年1月1日	民族社会研究部准教授より昇任
民族社会研究部教授	Peter J. MATTHEWS	2015年1月1日	民族社会研究部准教授より昇任

●来館者抄（役職名・肩書きについては来館当時のもの）

2014年

- 4月3日 井内千紗（文化遺産国際協力コンソーシアム調査員）、原田 怜（同）
- 4月17日 三浦定俊（公益財団法人文化財虫菌害研究所理事長）、渡邊 彩（公益財団法人文化財虫菌害研究所）、川越和四（一般財団法人環境文化創造研究所主席研究員）
- 5月19日 Anthony Alan Shelton（カナダ、プリティッシュ・コロンビア大学人類学博物館長）
- 5月20日 Esther Katz（フランス、PALOC、Senior researcher）
- 5月23日 N. Erdenebat（モンゴル、道路・運輸・観光大臣）、Altangerel Purev（モンゴル、文化スポーツ観光省副大臣）、Tsendsuren Tsevegdoj（モンゴル、文化スポーツ観光省文化遺産局長）、Munkhtogoo Dulamjav（モンゴル、モンゴル国立博物館）、Sampildondov Chuluun（東北大学東北アジア研究センター外国人研究員）
- 6月5日 Mohamed Mostafa Ald El-Maguid（エジプト、大エジプト博物館館長）
- 7月8日 津田命子（社団法人北海道アイヌ協会北海道立アイヌ総合センター学芸員）、瀧口夕美（編集グループSURE編集長）
- 7月25日 多根弘師（株式会社三城ホールディングス代表取締役社長）ほか
- 8月22日 高橋恵里子（日本財団国際協力グループBHNチームリーダー）
- 9月3日 Daniel Thorleifsen（グリーンランド、グリーンランド国立博物館・文書館長）
- 9月4日 Nic Nielsen（グリーンランド、グリーンランド教育・教会・男女平等・文化省大臣）、A. Carsten Damsgaard（駐日デンマーク大使館大使）、高円宮妃殿下、鳥井信吾（サントリーホールディングス代表取締役副会長、在大阪デンマーク王国名誉領事）、弘中喜通（読売新聞社大阪本社代表取締役社長）
- 10月1日 大西康之（公益財団法人関西・大阪21世紀協会常務理事）、北村俊幸（同 万博記念基金事業部エグゼクティブプロデューサー）、木村明則（同 万博記念基金事業部部長）
大槻憲章（公益財団法人国際花と緑の博覧会記念協会企画事業部長）、金森幹仁（同 企画事業部第二課長（事業担当））
- 10月2日 Fiorenzo Galli（イタリア、レオナルド・ダ・ヴィンチ国立科学技術博物館長）、武藤成生（NPO 法人ダ・ヴィンチミュージアムネットワーク副理事長）、館 正一（同 企画・広報）、松本佐紀子（通訳・

翻訳)

- 10月3日 Hon. Magele Mauiliu Magele (サモア、サモア教育省大臣)、石村 智 (奈良文化財研究所企画調整部主任研究員)
- 10月5日 Gerald Scott Lomaventema (アメリカ)、Darance Stephen Chimerica (同)、Ramson Lomatewama (同)、Merle Namoki (同)、Robert Glass Breunig (アメリカ、北アリゾナ博物館長)、Kelley Ann Hays-Gilpin (アメリカ、北アリゾナ大学人類学部教授)、John Stephen Colwell-Chanthaphonh (アメリカ、デンバー自然科学博物館人類学芸員)、Henrietta Josephine Lidchi (イギリス、スコットランド国立博物館人類学芸員)、James Emery Enoté (アメリカ、ズニ博物館長)、Cynthia Lynn Chavez-Lamar (アメリカ、国立アメリカ・インディアン博物館資料管理副部長)
- 11月3日 Philippe Descola (フランス、社会科学高等研究院教授)
- 11月5日 辛 瑋根 (韓国、温陽民俗博物館顧問)
- 11月22日 王 延中 (中国、中国社会科学院民族学・人類学研究所)、色 音 (同)、張 繼焦 (同)、劉 世哲 (同『民族研究』編集部)、彭 雪芳 (同)、黄 樹民 (台湾、台湾中央研究院 Institute of Ethnology、Distinguished Research Fellow and Director)、莊 英章 (台湾、台湾中央研究院)、Myron L. Cohen (アメリカ、Columbia University、Weatherhead East Asian Institute、Director/Professor of Anthropology)、Kim, Kwang Ok (韓国、ソウル大学人類学部教授)、梁 閑淳 (韓国、亜細亞大学社会学系副教授)、王 向華 (香港、香港大学 School of Modern Languages and Cultures Global Creative Industries、Programme Director)、科 大衛 (香港、香港中文大学歴史系教授)、He Xi (香港、香港中文大学)
- 11月25日 John W. Rick (アメリカ、スタンフォード大学人類学部准教授)、Rosa Grimalda Mendoza Fernandez de Rick (アメリカ、スタンフォード大学)
- 12月2日 虫明洋一 (株式会社毎日放送ラジオ局局長)
- 12月6日 長田豊臣 (学校法人立命館理事長)、小木裕文 (学校法人立命館副総長)、朴 英恵 (大韓民国総領事館総領事)、李 賢主 (大韓民国総領事館韓国文化院院長)、Marco Lombardi (イタリア総領事館総領事)
- 12月8日 村上新吾 (大阪大学大学院生命機能研究科事務長)
- 12月9日 Susan McIntyre-Tamwoy (オーストラリア、Archaeological and Heritage Management Solutions (AHMS)、Associate Director and Research Coordinator)
- 12月10日 洪 麗完 (台湾、中央研究院 (Academia Sinica) 臺灣史研究所副研究員)、陳 宗仁 (同)、劉 正元 (台湾、国立高雄師範大学臺灣歴史文化及語言研究所副教授)、李 孟勳 (台湾、国立政治大学民族学系)、王 政文 (台湾、東海大学歴史学系助理教授)
- 12月17日 Robin Hide (オーストラリア、オーストラリア国立大学)
仁井裕幸 (公益財団法人りそなアジア・オセアニア財団専務理事)
- 12月25日 狭間恵三子 (堺市副市長)、溝口勝美 (堺市博物館副館長)、廣瀬香代子 (同 学芸課主幹)
- 2015年**
- 1月19日 良本淑子 (国際ソロプチミストアメリカ日本中央リジョンガバナー)、大島好恵 (同 ガバナーエレクト)、井植豊子 (同 広域理事)
金 仁圭 (韓国、韓国国立民俗博物館 Collection Management Division、Division Director)、李 埰赫 (同 Assistant Director)、金 鍾泰 (同 Senior Curator)、金 炯周 (同 Curator)
- 1月23日 遠藤 諭 (久之浜大久自安我楽念仏踊継承会)
庄 孔韶 (中国、浙江大学人類学研究所所長・教授)、阮 雲星 (同 常務副所長・教授)、劉 正愛 (中国、中国社会科学院人類学民族学研究所准教授)、姜 娜 (中国、中山大学歴史人類学中心講師)
- 2月13日 Alexei Vranich (アメリカ、カリフォルニア大学ロサンゼルス校)、Andrew Roddick (カナダ、マックスマター大学)、John Janusek (アメリカ、ヴァンダービルト大学)
河合利光 (園田学園女子大学名誉教授)、榊井かず美 (同 総合生涯学習センター課長)
崔 鐘晩 (韓国、アジア文化開発院院長)、金 宣廷 (同 文化情報院芸術監督)、鄭 珠暎 (同 チーム長)、李 智媛 (同 チーム員)
- 2月16日 河岸麗子 (アイヌ協会、アイヌ刺繍家〔工芸全般〕)、堀 敏一 (同 彫刻家)、山下のぶ子 (同 アイヌ刺繍家)、村上 恵 (同 アイヌ刺繍家〔踊り・歌〕)
- 2月19日 Rhys Richards (ニュージーランド、Pacific Maritime Historian)

- 2月20日 荒田明夫（独立行政法人国立文化財機構アジア太平洋無形文化遺産研究センター所長）
- 2月23日 柳生小夜（大阪府府民文化部都市魅力創造局文化課文化振興グループ課長補佐）、太田明美（同 文化振興グループ総括主査）
- 2月24日 Nitaya Kanokmongkol（タイ、チェンマイ博物館長）
- 3月3日 山本文利（アイヌ文化伝承者）、山本栄子（同）、村木美幸（一般財団法人アイヌ民族博物館専務理事）、山道ヒビキ（同 学芸課）、中井貴規（伝統的生活空間再生事業「伝承者育成事業」研修生）、山本りえ（同）、木幡弘文（同）、新谷裕也（同）山丸賢雄（同）
- 3月10日 小林智之（あずさ監査法人第1事業部マネージャー／公認会計士）
- 3月11日 Laurel Kendall（アメリカ、アメリカ自然史博物館）、奇 亮（韓国、韓国国立民俗博物館）、Elena Gerasimenko（ロシア、ロシア民族学博物館）、Viktoriia Pervak（同）、Irina Karapetova（同）、Andrijana Cvetkovikj（マケドニア共和国大使館大使）、坂元一仁（同 行政・後方支援担当官）
- 3月17日 木村直樹（文部科学省研究振興局学術機関課課長）
- 3月19日 Aseem R. Mahajan（在大阪・神戸インド領事館総領事）、V. Malini（エアインディア西日本地区支配人）、旦 匡子（チャンネルアジア代表）、Sandip K. Tagore（追手門学院大学元教授）、タゴール暎子（文筆家）、溝上富夫（関西日印文化協会会長）、高山龍三（チベット文化研究会会長）、Wisnu Edi Pratigny（在大阪インドネシア共和国領事館総領事）、Susan Maria Ayuningtyas（同 副領事）、ミゲル・パソス（ペルー、ペルー国立ビジャレアル大学）、坂井正人（山形大学人文学部人間文化学科教授）
- 3月23日 井上正崇（大阪工業大学学長）、大島一能（同 情報科学部長・教授）、佐野睦夫（同 情報メディア学科長・ヒューマンロボティックス研究開発センター長・教授）

索引

あ

相島葉月 309
朝倉敏夫 18、219、271
飯高伸五 189
飯田 卓 82、214、308
池谷和信 44、232、271、287
石森大知 249
市川彰 315
市田泰弘 182
伊藤敦規 110、216、243、292
岩谷洋史 295
印東道子 21、147
ウィルデ ギジェルモ 206
上羽陽子 129、251、291
宇田川妙子 35、291
大杉 豊 191
太田心平 37、312
太田好信 253
大場千景 271、298
岡本尚子 293
小川さやか 239
オスタピラト ウィーラ 203
小野林太郎 237

か

鏡味治也 254
加賀谷真梨 148、311
樫永真佐夫 103
金谷美和 290
金田純平 150
神本秀爾 297
河合洋尚 113、240、310
川瀬 慈 144、242、311
川田牧人 255
カンジョウ ユーセフ 198
菊澤律子 85、148、213、261、279、320
岸上伸啓 10、95、147、233
金 昌鎬 (キム チャンホ) 200
窪田幸子 244
久保正敏 13、121、148、276、312、315
栗田梨津子 294
小長谷有紀 24
呉屋淳子 152、277、294
是澤博昭 256
近藤 宏 315

さ

サイジラホ 317
齋藤 晃 78、148、252、280
齋藤玲子 69、236、269

相良啓子 162
佐々木史郎 79、212、268、289
佐々木利和 178
笹原亮二 49、306
佐藤浩司 40
清水郁郎 183
庄司博史 26
新免光比呂 60
末成道男 175
末森 薫 154、296
菅瀬晶子 115、223
杉島敬志 246
杉本良男 51、242、305
鈴木七美 95、290、309、317
鈴木博之 310
鈴木 紀 61、287
スターク イアン クリストファー 168
須藤健一 8
ストラサーン アンドリュウ 204
関根康正 227
関本照夫 185
關 雄二 98、275、301
曾我 亨 186
園田直子 121、258、272、276、304、318

た

高城 玲 193
竹沢尚一郎 53、302、319
竹村嘉晃 164、298
田中鉄也 317
陳 天璽 (チェン テイエンシ) 180、224
チュ スワン ザオ 196
塚田誠之 94、210
辻 輝之 303
津田浩司 241
出口正之 55、278
寺田吉孝 74、210、270、281
土佐桂子 238
豊山亜希 166、295

な

長谷千代子 247
中村嘉志 171
中山京子 169
奈良雅史 299
娜仁格日勒 (ナランゲレル) 202
名和克郎 228
西尾哲夫 29、301
丹羽典生 105、308
野林厚志 118、234、288

信田敏宏	125、225	吉田憲司	127、273
		吉田ゆか子	159、257、314
は		米野みちよ	205
橋本裕之	231	ら	
長谷川 清	256	劉 麟玉 (リュウ リンギョク)	230
浜田明範	155、250、297、313		
林 勲男	133、221		
林 史樹	188		
韓 敏 (ハン ミン)	16、210		
比嘉夏子	274、316		
日高真吾	135、263		
平井京之介	101、307		
平井康之	173		
廣瀬浩二郎	63、235		
フィッシャー スーザン ドンナ	197		
福岡正太	138、220、259、305		
福岡まどか	247		
藤本透子	72、274		
藤原潤子	300		
古谷嘉章	176、226		
ホスローネジャード ペドラム	200		
ま			
前川啓治	194		
マシウス ピーター ジョセフ	31、148、279		
松井智子	313		
松岡葉月	306		
松尾瑞穂	88		
松川恭子	228		
松嶋 健	298		
丸川雄三	91、288		
三尾 稔	107		
三島禎子	40		
道信良子	229		
南 真木人	141		
宮本万里	293		
森 明子	56、253		
森山 工	177		
や			
八杉佳穂	58		
山内直樹	171		
山田孝子	179、274		
山中由里子	67、148、262、273、303		
山本 睦	158		
山本紀夫	302		
山本泰則	143		
横山廣子	33、148		
吉江貴文	248		
吉岡 乾	42		

利用案内

・開館時間——10：00～17：00 [入館は16：30まで]

・休館日——水曜日 [水曜日が祝日の場合は、翌日が休館]
年末年始 [12月28日～1月4日]

区分	個人	団体（20名以上）および割引
一般	420円	350円
高校・大学生	250円	200円
小・中学生	110円	90円

特別展は、その都度別に定めます。

毎週土曜日は、小・中・高校生は無料で観覧できます。

(ただし、自然文化園（有料区域）を通行する場合は、同園の入園料が必要です。)

障がい者手帳をお持ちの方は、付添者1名とともに無料で観覧できます。

日本文化人類学会会員の方は、無料で観覧できます。(要会員証)

以下の方々は、割引料金で観覧できます。

20名以上の団体、大学等*の授業でご利用の方、授業レポート等の作成を目的とする高校生、3か月以内のリピーター、満65歳以上の方（要証明書等）

*大学等は、短大、大学、大学院、専修学校の専門課程

*なお、短大生・大学生・大学院生の方は、教員が同行し、当館の展示場で授業を行う場合は、事前にお申し込みいただくと、観覧料が無料になります。詳しくはお問い合わせください。自然文化園各ゲートで当館の観覧券をお買い求めの場合は、当館窓口で差額を返却いたします。

・お問い合わせ先——電話 (06) 6876-2151 (代表)

国立民族学博物館

みんぱくホームページ——<http://www.minpaku.ac.jp/>

みんぱく facebook——<http://www.facebook.com/MINPAKU.official>

・交通案内

■大阪モノレールで「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車徒歩約15分。

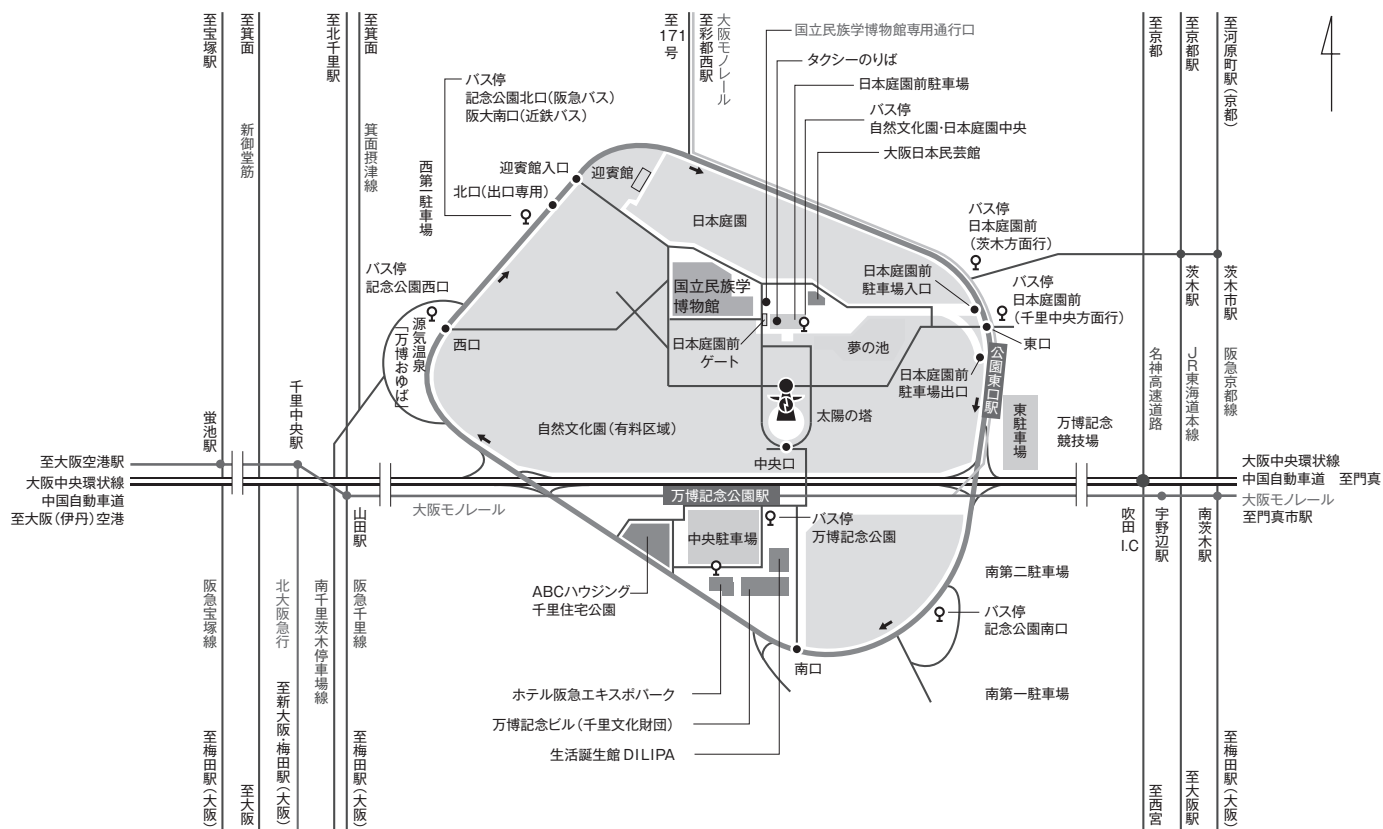
自然文化園窓口で当館の観覧券をお買い求めください。同園内を無料で通行できます。また、公園東口駅からは、自然文化園（有料区域）を通行せずに来館できます。

■バスで阪急茨木市駅・JR 茨木駅から「日本庭園前」下車徒歩約13分。

■乗用車の場合は、万博記念公園「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。

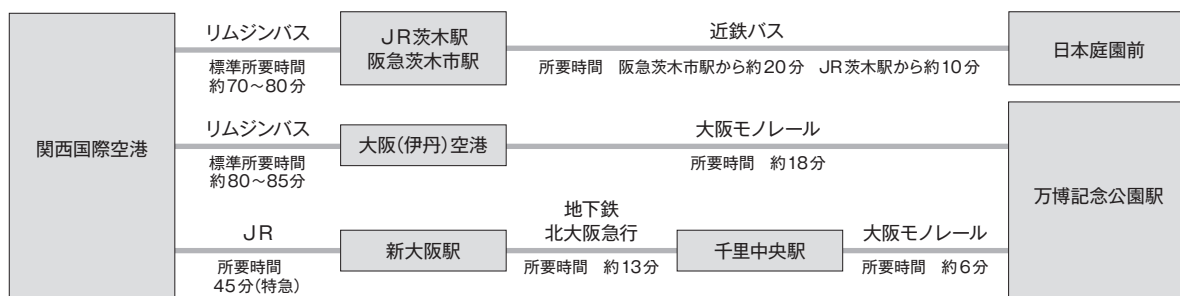
■タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。「日本庭園前ゲート」横にある当館専用通行口をお通りください。

・周辺図



・主要ターミナルからのアクセス

本館までの交通手段はいくつか方法がありますが、主要ターミナルからのアクセスには、次の方法が便利です。



[研究年報 2014]

編集———国立民族学博物館 研究戦略センター

発行———大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立民族学博物館

印刷———株式会社 遊文舎

発行日———2015年12月28日
〈非売品〉